



邵律論  
卷四第

BL                    Tripitaka. Japanese. 1929  
1411                 Showa shinshu kokuyaku  
T8J3                 Daizokyo  
1929  
v.16

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

---





昭和  
新纂

國  
譯大藏經



BL  
1411  
T8J3  
1929  
v. 16

昭和  
新纂 國譯大藏經 論律部 第四卷

大智度論第二 目次

卷 第 十 八

初品中般若波羅蜜……………一  
般 若 相 義……………五

卷 第 十 九

初品中三十七品義……………三

卷 第 二 十

初品中三三昧義……………六

初品中四無量義……………八

卷 第 二 十 一

初品中八背捨義……………一〇一

初品中九相義……………一〇九

初品中八念義……………二一七

卷第二十二

初品中八念義……………二一八

卷第二十三

初品中十想……………一六〇

初品中十一智……………一七七

卷第二十四

初品十力……………一八七

卷第二十五

初品中四無畏義……………二三四

卷第二十六

初品中十八不共法……………二三八

卷第二十七

初品大慈大悲義……………二七七

卷第二十八

初品中欲住六神通 ..... 三〇八

布施隨喜心過上 ..... 三〇〇

卷第二十九

初品中布施隨喜心過上 ..... 三〇四

初品中廻向 ..... 三〇六

卷第三十

初品中善根供養義 ..... 三〇〇

初品中諸佛稱讚其命 ..... 三〇五

卷第三十一

初品中十八空義 ..... 三〇六

卷第三十二

初品中四緣義 ..... 四〇二

卷第三十三

初品中到彼岸義 ..... 四〇九

初品中見一切佛世界義……………四八四

卷第三十四

初品中見一切佛世界義……………四九三

初品中信持無三毒義……………五二〇

大智度論

第二

論律部  
第四卷



大智度論釋初品中般若波羅蜜第二十九 卷第十八

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什詔を奉じて譯す

經 一切法に於て著せざるが故に、應に般若波羅蜜を具足すべし。

【一】に於て著せざる等波羅蜜の意義。佛の智慧をいふ。即ち一切の智もて諸佛一切の道法に達し、一切衆生の因種を知り、種種の法門を觀じて諸の無明を破する智慧なり。

論 問うて曰はく、「云何が般若波羅蜜と名くる。」答へて曰はく、「諸の菩薩は初發心より一切種智を求め、其中間に於て、諸法の實相を知る、慧は是れ般若波羅蜜なり。」問うて曰はく、「若し爾らば名けて波羅蜜と爲すべからず。何を以ての故に。未だ智慧の邊に到らざるが故に。」答へて曰はく、「佛の得たまふ所の智慧は、是れ實に波羅蜜なり。是波羅蜜に因るが故に、菩薩の所行、亦波羅蜜と名く。因中に果を説くが故なり。是般若波羅蜜は、佛の心中に在りては、名を變じて一切種智と爲す。菩薩は智慧を行じ、彼岸に度るを求むるが故に、波羅蜜と名け、佛は已に彼岸に度りたまふが故に、一切種智と名く。」問うて曰はく、「佛は一切の諸の煩惱及び習已に斷じて、智慧の眼淨く、應に實の如く諸法實相を得たまふべし。諸法實相は即ち是れ般若波羅蜜なり。菩薩は未だ諸の漏を盡さず。慧眼未だ淨からず、云何が能く諸法實相を得る。」答へて曰はく、「此義は後の品中に當に廣く説くべし、今は但略説す。人の海に入るが如し。始めて入る者有り、其源底を盡す者有り、深

【二】諸法實相に就いて。

淺は異りと雖も、俱に名けて入ると爲す。佛菩薩も亦是の如く、佛は則ち其底を窮盡し、菩薩は未だ諸の煩惱の習を斷ぜず、勢力少きが故に、深く入る能はず。後の品中に譬喩を説くが如し。人の闇室に於て燈を然して、諸の器物を照せば、皆悉く分了し、更に大燈有れば、益復明審なるが如し。則ち後燈の破る所の暗は前燈と合住し、前燈は闇と共に住すと雖も、而も亦能く物を照す。若し前燈に暗無くんば、則ち後燈の増益する所無きを知る。諸佛菩薩の智慧も亦是の如し、菩薩の智慧は煩惱の習と合すと雖も、而も能く諸法實相を得ること、亦前燈も亦能く物を照すが如し。佛の智慧は、諸の煩惱の習を盡して、亦諸法の實相を得ること、後燈の倍復明了なるが如し。

問うて曰はく、「如何が是れ諸法實相なる。」答へて曰はく、「衆人は各各諸法實相を説きて、自ら以て實と爲す。此中の實相は破壊すべからず、常住にして異ならず、能く作る者無し。後の品中に佛須菩提に語りたまへるが如し、「若し菩薩、一切法を觀せば、常に非ず、無常に非ず、苦に非ず、樂に非ず、我に非ず、無我に非ず、有に非ず、無に非ざる等、亦是觀を作さざれ」と。是を「菩薩の般若波羅蜜を行す」と名く。是義は一切の觀を捨て、一切の語言を滅し、諸の心行を離れ、本より已來不生不滅なること涅槃の相の如く、一切諸法の相も亦是の如し。是を諸法實相と名く。般若波羅蜜を讀する偈に説くが如し。

般若波羅蜜は、實法にして顛倒せず  
念、想、觀、已に除き、言語の法も亦滅す

無量の衆罪除こり、清淨にして心常に一なり  
是の如き尊妙の人は、則ち能く般若を見ん  
虚空の染無きが如く、戲無く文字無し  
若し能く是の如く觀すれば、是れ即ち佛を見たと爲す  
若し如法に觀すれば、佛、般若、及び涅槃  
是三は則ち一相なり、其れ實に異有る無し  
諸佛及び菩薩は、能く一切を利益し  
般若は之が母と爲り、能く出生し養育す  
佛は衆生の父爲り、般若は能く佛を生ず  
是れ則ち、一切衆生の祖母爲るなり  
般若は是れ一法なり、佛は種種の名を説き  
諸の衆生の力に隨うて、之が爲に異字を立てたまふ  
若し人般若を得れば、議論の心皆滅す  
譬へば日の出づる時、朝露の一時に失するが如し  
般若の威徳は、能く二種の人を動かす  
無智の者は恐怖し、有智の者は歡喜す  
若し人般若を得て、則ち般若の主と爲らば

般若の中にすら著せず、何に況んや餘法に於てをや

般若は來る所無く、亦復去る所無し

智者は一切の處に、之を求むれども得る能はず

若し般若を見ざれば、是れ則ち爲に縛せらる

若し人般若を見ば、是れ亦縛せらると名く

若し人般若を見れば、是れ則ち解脱を得

若し般若を見ざる、是も亦解脱を得

是事は希有なりと爲す、甚深にして大名有り

譬へば幻化の物は、見れども而も見るべからざるが如し

諸佛及び菩薩、聲聞、辟支佛の

解脱涅槃の道は、皆般若に従うて得らる

言説は世俗の爲なり、一切を憍慢するが故に

假に名けて諸法と説く、説くと雖も而も説かざるなり

般若波羅蜜は、譬へば大火焰の

四邊取るべからざるが如く、取も亦不取も無し

一切取り已りて捨つ、是を取るべからずと名く

取るべからずして而も取る、是れ即ち名けて取ると爲す

般若(はんにや)は壞相(わいさう)無く、一切(いっさい)の言語(ごんご)を過ぎて  
適(ゆ)くとして依止(えし)する所無(ところな)し、誰(たれ)か能(よ)く其德(そのとく)を讚(さん)  
般若(はんにや)は讚(さん)じ匡(くわ)しと雖(いへど)、我(われ)は今(いま)能(よ)く讚(さん)するを得(え)  
未(いま)だ死地(しち)を脱(だつ)せずと雖(いへど)、則(すなは)ち已(すで)に出(い)づるを得(う)と爲(な)す

### 大智度論釋般若相義第三十

【三】般若(はんにや)の相(さう)を明(あ)す中(ちゆう)、初(しゆ)に般若(はんにや)と獨(ひとり)り稱(せう)して大(だい)と名(な)くる所以(ゆゑ)を述(のたま)ふ

【四】次(つぎ)に智慧(ぢゑ)の義(ぎ)解(げ)す。三(さん)種の(しゆ)の智(ぢ)を説(せ)き、智(ぢ)慧(ゑ)よりす別(べつ)を明(あ)す。二(に)乘(じやう)との種(しゆ)辟(ひやく)支(ぢ)佛(ぶつ)に就(じゆ)いて述(のたま)ふ。

問(もん)うて曰(いは)く、『何(なに)を以(もつ)てか獨(ひとり)り般若(はんにや)波羅蜜(はらみつ)を稱(せう)して摩訶(まか)と爲(な)し、五波羅蜜(ごはらみつ)を稱(せう)せざる。』  
答(こた)へて曰(いは)く、『摩訶(まか)を秦(しん)には大(だい)と言(い)ひ、般若(はんにや)を慧(ゑ)と言(い)ひ、波羅蜜(はらみつ)を到彼岸(たうひがん)と言(い)ふ。其能(そのよ)く  
智慧(ぢゑ)の大海(だいかい)の彼岸(ひがん)に到(いた)り、諸(しよ)の一切(いっさい)智慧(ぢゑ)の邊(へん)に到(いた)り、其極(そのごく)を窮盡(きゆうじん)するを以(もつ)ての故(ゆゑ)に到彼岸(たうひ)  
岸(がん)と名(な)く、一切(いっさい)世間(せけん)の中(ちゆう)、十方三世(じふぱうさんぜ)の諸佛(しよぶつ)は第一(だいいち)に大(だい)なり。次(つぎ)に、菩薩(びさつ)、辟支佛(ひやくしふ)、聲聞(しやうもん)有(あ)り。  
是(こ)の四大人(しだいじん)は皆(みな)般若(はんにや)波羅蜜(はらみつ)より生(な)ず。是(こ)のゆゑに名(な)けて大(だい)と爲(な)す。復次(またつぎ)に、能(よ)く衆生(じゆうじやう)に大果(だいぐわ)  
報(ほう)を與(あた)ふること、無量無盡(むりやうむじゆう)にして常(つね)に變異(へんい)せず、謂(いは)ゆる涅槃(ねはん)なり。餘(よ)の五波羅蜜(ごはらみつ)は爾(しか)か能(よ)く衆生(じゆうじやう)に大果(だいぐわ)  
報(ほう)を與(あた)ふこと、般若(はんにや)波羅蜜(はらみつ)を離(はな)るれば但(ただ)能(よ)く世間(せけん)の果報(ぐわほう)を與(あた)ふ。是(こ)のゆゑに大(だい)と名(な)くるを得(え)ず。  
問(もん)うて曰(いは)く、『何者(なにもの)か是(こ)れ智慧(ぢゑ)なる。』答(こた)へて曰(いは)く、『般若(はんにや)波羅蜜(はらみつ)は一切(いっさい)の智慧(ぢゑ)を攝(せつ)す。  
所以(ゆゑ)は何ん。菩薩(びさつ)は佛道(ぶつだう)を求(もと)むるに、應當(おつたう)に一切法(いっさいほふ)を學(まな)し、一切(いっさい)の智慧(ぢゑ)、謂(いは)ゆる聲聞(しやうもん)辟(ひやく)支(ぢ)佛(ぶつ)に就(じゆ)いて述(のたま)ふ。』

【乾慧地】 十地の  
一、四念處の觀を  
修して智慧深けれ  
ども、未だ法性の  
理を證得せざる位  
をいふ。

支佛、佛の智慧を得なければなり。是智慧に三種有り。學と無學と非學非無學となり。非  
學非無學智とは、乾慧地、不淨、安那、敬那、欲界繫、四念處、煖法、頂法、忍法、世間  
第一法等の如し。學智とは、苦法智忍の慧乃至向阿羅漢の第九無漏道の中の念處三昧の慧  
なり。無學智とは、阿羅漢の第九の解脫智なり。是より已後、一切の無學智は、盡智と無  
生智等との如し。是を無學智と爲す。辟支佛道を求むるの智慧も亦是の如し。問うて曰は  
く、「若し辟支佛道も亦是の如くならば、云何が聲聞と辟支佛とを分別する。」答へて曰は  
く、「道は一種なりと雖も、而も智を用ふるに異有り。若し諸佛出でたまはざれば、佛法は  
已に滅す。是人は先世の因縁の故に獨り智慧を出し、他より聞かずして自ら智慧を以て道  
を得。一國王の出でて國中に在りて遊戯せしが如し。清朝に林樹花菓の蔚茂して甚だ愛樂  
すべきを見、王は食し已りて臥す。王の諸の夫人嬪女は皆共に華を取り、林樹を毀折す。  
王は覺め已りて、林の毀壞せるを見て、自ら覺悟すらく、「一切世間の無常變壞も皆亦是の  
如し」と。思惟是に已りて無漏道の心生じ、諸の結使を斷じて辟支佛道を得、六神通  
を具し、即ち飛んで閑靜の林間に到る。是の如き等の因縁は、先世の福德、順行の果報に  
して、今世に少因縁を見て辟支佛の道を成す。是の如きを異と爲す。復次に辟支佛に二種  
有り、一を獨覺と名け、二を因縁覺と名く。因縁覺は上に説くが如し。獨覺とは、是人は  
今世に道を成じ、自ら覺して他より聞かず、是を獨覺の辟支迦佛と名く。獨覺の辟支迦佛  
に二種有り。一には本是學人にして、人中に在りて生ず。是時に佛無く、佛法滅せり。是

【九種の羅漢】一少縁に遇うて所得を退失する退法の羅漢。二、所得の法を思惟して退失せざらんことを恐るる思想の羅漢。三、能く進んで不動の位地に至る進法の羅漢。四、所得を退せざる不退法の羅漢。五、煩惱のために退動せられざる不動法の羅漢。六、所得の果に住して進まず退かざる住法の羅漢。七、自ら證する所に於て愛樂を生じ能く守護する護法の羅漢。八、但懃力に依る煩悩障を離れたる慧法の羅漢。九、煩惱障も定障も俱に離れて滅盡定をえたる俱法の羅漢。これなり。

須陀洹は已に七生を満し、第八生に自ら道を成ずるを得べからず。是人を佛と名けず、阿羅漢と名けず、名けて小辟支迦佛と爲す。阿羅漢と異なる無く、或は舍利弗等の大阿羅漢に如かざる者有り。大辟支佛も亦一百劫の中に於て功德を作し、智慧を増長し、三十二相の分を得、或は三十一相有り、或は三十、或は二十九相、乃至一相有り。九種の阿羅漢の中に於て智慧利勝にして、諸の深法の中の總相、別相に於て能く入り、久しく定を修習し、常に獨處を樂む。是の如きの相を名けて大辟支迦佛と爲す、是を以て異と爲す。佛道を求むる者は、初發心より願を作さく、「願くは我、佛と作りて衆生を度脱し、一切の佛法を得、六波羅蜜を行じ、魔軍衆、及び諸の煩惱を破りて一切智を得、佛道を成じ、乃至無餘涅槃に入らん」と。本願に隨うて行ず。是中間より有ゆる智慧は、總相、別相、一切を盡く知る。是を佛道の智慧と名く。是三種の智慧を盡く能く知り盡して其邊に到る、是を以ての故に智慧の邊に到ると言ふ。

(五)と  
問うて曰はく、「若し所説の如くんば、一切の智慧は盡く應に、若は世間、若は出世間に入るべし。何を以てか但三乘の智慧は盡く其邊に到ると言うて、餘の智を説かざる。」答へて曰はく、「三乘は是れ實智慧にして、餘は皆是れ虚妄なればなり。菩薩は知ると雖も、而も専ら行せず。摩梨山を除きては、一切梅檀木を出す無きが如し。若は餘處、或は好語有り、皆佛法の中より得れども、自ら佛法に非ず。初て聞けば好きに似たれども、久しければ則ち妙ならず。譬へば牛乳と驢乳とは、其色は同じと雖も、牛乳を攪むれば則ち

【五】三乘の智慧のみに就いて。

酥と成り、驢乳を搗むれば則ち尿と成るが如し。佛法の語及び外道の語も殺さず、盜まず、衆生を慈愍し、心を攝し、欲を離れ、空を觀ずといふは同じと雖も、然も外道の語は、初は妙なるに似たりと雖も、窮め盡せば、歸する所は即ち虚誑と爲る。一切の外道は皆我見に著す。若し實に我有らば、應に二種に墮すべし。若し壞相と、若し不壞相となり。若し壞相ならば、應に牛皮の如くなるべく、若し不壞相ならば、應に虚空の如くなるべし。此二處には、殺罪無く、不殺の福無し。若し虚空の如くならば、雨露も潤す能はず、風熱も乾す能はず、是れ則ち常相に墮す。若し常ならば、苦も惱す能はず、樂も悦ばす能はざらん。若し苦樂を受けずんば、禍を避け福に就くべからず。若し牛皮の如くなれば、則ち風雨の爲に壞られ、若し壞るれば則ち無常に墮す。若し無常なれば則ち罪福無し。外道の語、若し實に是の如くならば、何んが不殺は福と爲り、殺生は罪と爲ること有らん。問うて曰はく、外道の戒福の失する所は是の如しとせば、其禪定智慧は復云何。答へて曰はく、外道は我心を以て禪を逐ふが故に、愛、見、慢多きが故に、一切の法を捨てざるが故に、實智慧有ること無し。問うて曰はく、汝は外道は空を觀ずと言ふ。空を觀すれば則ち一切の法を捨つ。云何が一切の法を捨てざるが故に、實智慧有ること無しと言ふ。答へて曰はく、外道は空を觀ずと雖も、而も空相を取り、諸法の空なるを知ると雖も、而も自ら我の空なるを知らず、觀空の智慧に愛著するが故なり。問うて曰はく、外道には無想定有れば、心、心數法は都て滅せん。都て滅するが故に、相を取り、智慧に愛著するの咎有ること

と無し。』答へて曰はく、『無想定<sup>むさうぢやう</sup>の力は、強<sup>つよ</sup>ひて心<sup>こころ</sup>をして滅<sup>めつ</sup>せしむれども實<sup>じつ</sup>智慧<sup>ちゐ</sup>の力<sup>ちから</sup>に非<sup>あら</sup>ず。亦<sup>また</sup>此<sup>この</sup>中に於<sup>お</sup>いて涅槃<sup>ねはん</sup>の想<sup>さう</sup>を生<sup>しやう</sup>じ、是<sup>こ</sup>れ和<sup>わ</sup>合<sup>がふ</sup>の、法<sup>ほふ</sup>と作<sup>な</sup>るを知らざるなり、是<sup>こ</sup>を以<sup>もつ</sup>ての故<sup>ゆゑ</sup>に顛<sup>てん</sup>倒<sup>たう</sup>の中に墮<sup>だ</sup>す。是<sup>この</sup>中に心<sup>こころ</sup>暫<sup>しばら</sup>く滅<sup>めつ</sup>すと雖<sup>いへど</sup>も、因<sup>いん</sup>縁<sup>えん</sup>を得<sup>え</sup>て還<sup>かへ</sup>つて生<sup>しやう</sup>ず。譬<sup>たと</sup>へば人の夢<sup>ゆめ</sup>無<sup>な</sup>くして睡<sup>すい</sup>る時<sup>とき</sup>は、心<sup>しん</sup>想<sup>さう</sup>行<sup>ぎやう</sup>ぜざれども、悟<sup>き</sup>むれば則<sup>すなは</sup>ち還<sup>かへ</sup>りて有<sup>あ</sup>るが如<sup>ごと</sup>し。』問<sup>た</sup>うて曰<sup>い</sup>はく、『無<sup>む</sup>想定<sup>さうぢやう</sup>は其<sup>その</sup>失<sup>しつ</sup>是<sup>じ</sup>の如<sup>ごと</sup>し。更<sup>さら</sup>に非<sup>ひ</sup>有<sup>ゆう</sup>想<sup>さう</sup>非<sup>ひ</sup>無<sup>む</sup>想定<sup>さうぢやう</sup>有<sup>あ</sup>り、是<sup>この</sup>中には一<sup>いつ</sup>切<sup>せつ</sup>の妄<sup>まう</sup>想<sup>さう</sup>無<sup>な</sup>く、亦<sup>また</sup>強<sup>つよ</sup>ひて無<sup>む</sup>想定<sup>さうぢやう</sup>を作<sup>な</sup>して、想<sup>さう</sup>を滅<sup>めつ</sup>するが如<sup>ごと</sup>くならず。是<sup>この</sup>中には智<sup>ち</sup>慧<sup>ゐ</sup>の力<sup>ちから</sup>を以<sup>もつ</sup>ての故<sup>ゆゑ</sup>に無<sup>む</sup>想<sup>さう</sup>なり。』答<sup>こた</sup>へて曰<sup>い</sup>はく、『是<sup>この</sup>中には想<sup>さう</sup>有<sup>あ</sup>り。細<sup>こま</sup>微<sup>み</sup>なるが故<sup>ゆゑ</sup>に覺<sup>さつ</sup>らざるなり。若<sup>も</sup>し無<sup>む</sup>想<sup>さう</sup>ならば、佛<sup>ぶつ</sup>弟<sup>てい</sup>子<sup>し</sup>は復<sup>また</sup>何<sup>なに</sup>に緣<sup>えん</sup>りてか更<sup>さら</sup>に實<sup>じつ</sup>智<sup>ち</sup>慧<sup>ゐ</sup>を求<sup>もと</sup>めん。佛<sup>ぶつ</sup>法<sup>ぽふ</sup>の中<sup>なか</sup>にては、是<sup>この</sup>非<sup>ひ</sup>有<sup>ゆう</sup>想<sup>さう</sup>非<sup>ひ</sup>無<sup>む</sup>想<sup>さう</sup>の中<sup>なか</sup>の識<sup>し</sup>は四<sup>し</sup>衆<sup>しゆ</sup>に依<sup>よ</sup>りて住<sup>ぢゆう</sup>す。是<sup>この</sup>四<sup>し</sup>衆<sup>しゆ</sup>は因<sup>いん</sup>縁<sup>えん</sup>に屬<sup>ぞく</sup>するが故<sup>ゆゑ</sup>に無<sup>む</sup>常<sup>じやう</sup>なり、無<sup>む</sup>常<sup>じやう</sup>なるが故<sup>ゆゑ</sup>に苦<sup>く</sup>なり、苦<sup>く</sup>なるが故<sup>ゆゑ</sup>に空<sup>くう</sup>なり、空<sup>くう</sup>なるが故<sup>ゆゑ</sup>に無<sup>む</sup>我<sup>が</sup>なり、空<sup>くう</sup>にして無<sup>む</sup>我<sup>が</sup>なるが故<sup>ゆゑ</sup>に捨<sup>す</sup>つべし。汝<sup>なんぢ</sup>等は智<sup>ち</sup>慧<sup>ゐ</sup>に愛<sup>あい</sup>著<sup>ちやく</sup>するが故<sup>ゆゑ</sup>に、涅<sup>ね</sup>槃<sup>はん</sup>を得<sup>え</sup>ざるなり。譬<sup>たと</sup>へば尺<sup>しゃく</sup>蠅<sup>じやう</sup>の屈<sup>くつ</sup>して後<sup>のち</sup>足<sup>あし</sup>を安<sup>やすん</sup>じ、然<sup>しか</sup>る後<sup>のち</sup>前<sup>まへ</sup>足<sup>あし</sup>を進<sup>ま</sup>むるが如<sup>ごと</sup>し。所<sup>ところ</sup>縁<sup>えん</sup>盡<sup>じん</sup>きて無<sup>な</sup>なれば、復<sup>また</sup>進<sup>しん</sup>處<sup>じよ</sup>より還<sup>かへ</sup>る。外<sup>げ</sup>道<sup>だう</sup>は初<sup>しよ</sup>禪<sup>ぜん</sup>に依<sup>よ</sup>止<sup>ぢ</sup>して下<sup>げ</sup>地<sup>ぢ</sup>の欲<sup>よく</sup>を捨<sup>す</sup>て、乃<sup>すなは</sup>ち至<sup>いた</sup>、非<sup>ひ</sup>有<sup>ゆう</sup>想<sup>さう</sup>非<sup>ひ</sup>無<sup>む</sup>想<sup>さう</sup>處<sup>じよ</sup>に依<sup>よ</sup>りて無<sup>む</sup>所<sup>ところ</sup>有<sup>あ</sup>る處<sup>じよ</sup>を捨<sup>す</sup>て、上<sup>かみ</sup>に復<sup>また</sup>依<sup>よ</sup>る所<sup>ところ</sup>無<sup>な</sup>ければ、故<sup>ゆゑ</sup>に非<sup>ひ</sup>有<sup>ゆう</sup>想<sup>さう</sup>非<sup>ひ</sup>無<sup>む</sup>想<sup>さう</sup>を捨<sup>す</sup>つる能<sup>あた</sup>はず、更<sup>さら</sup>に依<sup>よ</sup>處<sup>じよ</sup>無<sup>な</sup>きを以<sup>もつ</sup>て我<sup>われ</sup>を失<sup>う</sup>はんと恐<sup>おそ</sup>懼<sup>おそ</sup>し、無<sup>む</sup>所<sup>ところ</sup>得<sup>え</sup>の中<sup>なか</sup>に墮<sup>だ</sup>するを畏<sup>おそ</sup>るるが故<sup>ゆゑ</sup>なり。』復<sup>また</sup>次<sup>つぎ</sup>に、外<sup>げ</sup>道<sup>だう</sup>の經<sup>きやう</sup>の中<sup>なか</sup>に、殺<sup>ころ</sup>、盜<sup>たう</sup>、婬<sup>こん</sup>、妄<sup>まう</sup>語<sup>ご</sup>、飲<sup>ちん</sup>酒<sup>しゆ</sup>を聽<sup>き</sup>す有<sup>あ</sup>り。言<sup>こと</sup>はく、『天<sup>てん</sup>祠<sup>し</sup>の爲<sup>ため</sup>に呪<sup>じゆ</sup>して殺<sup>ころ</sup>せば罪<sup>つみ</sup>無<sup>な</sup>し。行<sup>ぎやう</sup>道<sup>だう</sup>の爲<sup>ため</sup>の故<sup>ゆゑ</sup>に若<sup>も</sup>し急<sup>きふ</sup>難<sup>なん</sup>に遭<sup>あ</sup>うて、自<sup>みづか</sup>ら身<sup>み</sup>を全<sup>ま</sup>うせんと欲<sup>ほつ</sup>して小<sup>せう</sup>人<sup>にん</sup>を殺<sup>ころ</sup>すは罪<sup>つみ</sup>無<sup>な</sup>し。又<sup>また</sup>急<sup>きふ</sup>難<sup>なん</sup>有<sup>あ</sup>らば行<sup>ぎやう</sup>道<sup>だう</sup>の爲<sup>ため</sup>の故<sup>ゆゑ</sup>に、金<sup>きん</sup>を除<sup>のぞ</sup>きて餘<sup>よ</sup>は盜<sup>ぬす</sup>み取<sup>と</sup>るを得<sup>え</sup>、以<sup>もつ</sup>て

自ら全く濟ひ、後當に此殃罪を除くべし。師の婦と國王の夫人と善知識の妻と童女とを除き、餘は意難に逼迫すれば邪淫するを得。師及び父母の爲、身の爲、牛の爲、身の爲、媒の爲の故には妄語を聽す。』寒郷にては石蜜酒を飲むを聽し、天祠の中にては、或は一滴二滴の酒を嘗むるを聽す。佛法の中には則ち然らず。一切衆生に於て、慈心もて等視し、乃至蟻子をも亦命を奪はず、何に況んや人を殺すをや。一針一縷をも取らず、何に況んや多物の主無きをや。姪女には指を以ても觸れず、何に況んや人の婦女をや。戲笑にも妄語するを得ず、何に況んや故に妄語を作さんや。一切の酒は一切の時に常に飲むを得ず、何に況んや寒郷天祠をや。汝等外道は佛法と懸に殊なること、天地の若くなる有り。汝等外道の法は是れ諸の煩惱を生ずる處、佛法は則ち是れ諸の煩惱を滅する處なり、是を大いに異りと爲す。

【一〇】 諸佛の無量の法門の中、智者は能く三種の法門に至つて佛語の義を解するを明す。

諸佛の法は無量にして大海の若くなる有り、衆生の意に隨ふが故に種種に法を説き、或は有と説き、或は無と説き、或は常と説き、或は無常と説き、或は苦と説き、或は樂と説き、或は我と説き、或は無我と説き、或は勤めて三業を行すれば諸の善法を攝すと説き、或は一切の諸法は無作の相なりと説く。是の如き等の種種の異説を無智は之を聞いて、謂ひて乖錯せりと爲し、智者は三種の法門に入り、一切の佛語を觀じ、皆是れ實法にして相違背せずと爲す。何等か是れ三門なる、一には蜾勒門、二には阿毘曇門、三には空門なり。

【七】初に毘勒門を明す、中に隨相門と對治門とを説く。

問うて曰はく、『云何が毘勒と名け、云何が阿毘曇と名け、云何が空門と名くる。』答へて曰はく、『毘勒に三百二十萬言有り、佛の在世の時、大迦梅延の造る所なり。佛の滅度の後、人壽轉滅じ、憶識の力少くして廣く誦する能はず。諸の得道の人、撰んで三十萬四千言と爲す。若し人毘勒門に入りて論議すれば、則ち無窮なり。其中に隨相門、對治門等の種種の諸門有り。隨相門とは、佛の偈に説きたまへるが如し。』

諸の惡を作す莫く、諸の善を奉行して自ら其意を淨うする、是れ諸佛の教なり

是中に心數法は盡く應に説くべし。今は但自ら其意を淨うするを説けば、則ち諸の心數法を已に説くを知る。何を以ての故に。同相同緣なるが故に。佛の四念處を説きたまふが如きは、是中に四正勤、四如意足、五根、五力を離れず。何を以ての故に。四念處の中の四種の精進は、則ち是れ四正勤にして、四種の定は是を四如意足と爲し、五種の善法は是を五根、五力と爲せばなり。佛は餘門を説かず、但、四念處を説きたまふと雖も、當に已に餘門を説きたまふを知るべし。佛、四諦の中に於て、或は一諦、或は二、或は三を説きたまふが如し。馬星比丘が舍利弗の爲に偈を説くが如し。

諸法は緣より生ず、是法の緣及び盡

我師、大聖主は、是義是の如く説きたまへり

此偈は但三諦を説く。當に知るべし。道諦は已に中に在り。相離れざるが故に。譬へば

【八】次に阿毘曇門を釋す。

一人事を犯せば、家を擧げて、罪を受くるが如し。是の如き等を名けて麤相門と爲す。對治門とは、佛の但四顛倒を説きたまへるが如し、常顛倒と樂顛倒と我顛倒と淨顛倒となり、是中に四念處を説かずと雖も、當に知るべし已に四念處の義有り。譬へば業を説けば、已に其病を知り、病を説けば則ち其藥を知るが如し。若し四念處を説けば、則ち已に四倒を説くを知る。四倒は則ち是れ邪相なり。若し四倒を説けば、則ち已に諸結を説く。所以は何ん。其根本を説けば、則ち枝條皆得るを知らばなり。佛の「一切世間に三毒有り」と説きたまふが如し。三毒を説けば、當に知るべし、已に三分、八正道を説く。若し三毒を説けば、當に知るべし、已に一切の諸の煩惱の毒を説く。十五種の愛は是れ貪欲の毒、十五種の瞋は是れ瞋恚の毒、十五種の無明は是れ愚癡の毒なり。諸の邪見、憍慢、疑は無明に屬す。是の如き一切の結使は皆三毒に入る。何を以てか之を滅せん。三分、八正道なり。若し三分は八正道を説けば、當に知るべし已に一切三十七品を説く。是の如き等の種種の相を名けて對治門と爲し、是の如き等の諸法を名けて螺勒門と爲す。

云何が阿毘曇門と名くる。或は佛、自ら諸法の義を説きたまひ、或は佛、自ら諸法の名を説きたまひ、諸の弟子、種種に集述して其義を解す。佛の説きたまへるが如くんば、若し比丘有り、諸の有爲法に於て正しく憶念する能はずして、世間第一法を得んと欲せば、是處有ること無し。若し世間第一法を得ずして、正位の中に入らんと欲せば、是處有ること無し。若し正位に入らずして、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢を得んと欲せば、

【九】次に空門を明す。中に廣く大小二空の相貌を説く。

是處有ること無し。比丘有り、諸の有爲法に於て正しく憶念して世間第一法を得ば、斯れ是處有り。若し世間第一法を得て正位に入り、正位に入りて、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢を得ば、必ず是處有り。佛の直説の如くんば、世間第一の法は相の義を説かず。何界の繋なるか、何の因なるか、何の縁なるか、何の果報なるか、世間第一法より、種種聲聞の所行の法、乃至無餘涅槃、一一に相の義を分別する。是の如き等を阿毘曇門と名く。

空門とは、生空と法空となり。頻婆娑羅王迎經の中に、佛、大王に告げたまへるが如し。色生ずる時は但空のみ生じ、色滅する時は但空のみ滅す。諸行生ずる時は但空のみ生じ、滅する時は但空のみ滅す。是中に吾我無く、人無く、神無く、人の今世より後世に至る無し、因縁の和合せる名字等の衆生を除く。凡夫、愚人は名を逐うて實を求む一と。是の如き等の經の中に、佛は生空を説きたまへり。法空とは、佛一大空經の中に説きたまふが如し。十二因縁は無明乃至老死なり。若し人有り、是は老死なりと言ひ、若し誰か老死すと言はば、皆是れ邪見なり。生、有、取、愛、受、觸、六入、名色、識、行、無明も亦是の如し。若し人有り、身は即ち是れ神と言ひ、若し身は神と異ると言はば、是二は異ると雖も、同じく邪見と爲す」と。佛言はく、「身は即ち是れ神なりとは、是の如きは邪見にして我弟子に非ず。身は神と異りとも、亦是れ邪見にして我弟子に非ず」と。是經の中に、佛、法空を説きたまふが如し。若し誰か老死すと説かば、當に知るべし、是は虚

【二〇】神、世間の常無常に就いて説く。

妄なり。是を生空と名く。若し是れ老死すと説かば、當に知るべし、是は虚妄なり、是を法空と名く。乃至無明も亦是の如し。

復次に、佛は梵網經の中に、六十二見を説きたまふ。若し人有り、神は常なり、世間も亦常なりと言はば、此を邪見と爲す。若し神は無常なり、世間は無常なりと言はば、是も亦邪見なり、神及び世間は、常にして亦無常なり、神及び世間は常にも非ず、亦非常にも非ずといふも、皆是れ邪見なり。是を以ての故に諸法は皆空なり、是を實と爲すを知る。

問うて曰はく、「若し神は常なりと言はば、應に是れ邪見なるべし。何を以ての故に。神性は無なるが故に。若し世間は常なりと言はば、亦應に是れ邪見なるべし。何を以ての故に。世間は實に皆無常なり。顛倒の故に有常と言ふ。若し神は無常なりと言はば、亦應に是れ邪見なるべし。何を以ての故に。神性は無なるが故に。無常と言ふべからず。若し世間は實に皆無常なればなり。答へて曰はく、「若し一切の法は實に皆無常ならば、佛云何が、世間の無常を説く、是を邪見と名けたまはん。是故に實に是れ無常に非ざるを知るべし。問うて曰はく、「佛は處處に有爲法の無常、苦、空、無我を觀するは、人をして道を得しむと説きたまふ。云何が無常は邪見に墮すと云ふ。答へて曰はく、「佛は處處に無常と説き、處處に不滅と説きたまふ。摩訶男釋王の如きは、佛の所に來至し、佛に白して言さく、「是迦毘羅の人衆は殷多なり。我は或は奔車、逸馬、狂象、鬪人に値ふ時、便ち念佛の心を失ふ。

是時自ら念すらく、「我今若し死せば、當に何の處にか生ずべき」と。佛、摩訶男に告げた  
 まはく、「汝、怖るる勿れ、怖るる勿れ、汝は是時、惡趣に生ぜず、必ず善趣に至らん。譬  
 へば樹の常に東に向うて曲るを、若し斫る者有れば、必ず當に東に倒るべきが如し。善人  
 も亦是の如し、若し身壞れ死する時は、善心の意識は長夜に戒を信じ、施を聞くの慧を心  
 に熏ずるを以ての故に、必ず利益を得て、上りて天上に生ず」と。若し一切の法、念念に  
 生滅して無常ならば、佛は云何が諸の功德、心に熏ずるが故に、必ず上生するを得と  
 言はん。是を以ての故に、無常の性に非ざるを知る。問うて曰はく、「若し無常は不實なら  
 ば、佛は何を以てか無常と説きたまふ。」答へて曰はく、「佛は衆生の應ずる所に隨うて説法  
 したまふ。常顛倒を破せんが故に、無常なりと説きたまひ、人の後世を知らず、信ぜざる  
 を以ての故に、心去りて後世に、上りて天上に生ず。罪福業の因縁は、百千萬劫に失せず  
 と説きたまふ。是れ對治悉檀にして第一義悉檀に非ず。諸法の實相は常に非ず、無常に非  
 ず。佛も亦處處に諸法は空なりと説きたまふ。諸法の空の中には亦無常無し。是を以ての  
 故に世間は無常なりといふは、是れ邪見なりと説く。是故に名けて法空と爲す。復次に、  
 毘耶離の梵志は論力と名く。諸の梨呂等、大いに共に寶物を雇うて佛と與に論ぜしむ。其  
 雇を取り已りて、即ち其夜を以て、五百の難を思撰し、明日諸の梨呂と佛の所に至り、  
 佛に問うて言さく、「一の究竟道と爲んや、衆多の究竟道と爲んや」と。佛言はく、「一の  
 究竟道にして衆多無し」と。梵志言さく、「佛は一道と説くも、諸の外道の師は各々に究

竟の道有り、是れ衆多にして一に非ずと爲す」と。佛言はく、「是れ各衆多有りと雖も、皆實道に非ず、何を以ての故に、一切皆邪見を以て著するが故に、究竟道と名けず」と。佛、梵志に問ひたまはく、「鹿頭梵志は、道を得るや不や」と。答へて言さく、「一切の得道の中に、是を第一と爲す」と。是時、長老、鹿頭梵志比丘は、佛の後に在りて佛を屈げり。佛、梵志に問ひたまはく、「汝、是比丘を識るや不や」と。梵志は之を識りて、當愧し低頭す。是時、佛、義品の偈を説きたまはく、

各各究竟と謂ひて、而も各自に愛著し

各自、自らはとし彼を非とす、是れ皆究竟に非ず

是人論衆に入りて、義理を辯明する時

各各相是非し、勝負して憂喜を懐く

勝者は僑坑に墮し、負者は憂獄に墮す

是故に智有るものは、此二法に隨はず

論力、汝當に知るべし、我諸の弟子の法は

虚無く亦實無し、汝は何の求むる所をか欲する

汝、我論を壊せんと欲するも、終に已に此處無し

一切智には勝ち難し、適自ら毀壞するに足る

是の如き等の處處の聲聞經の中に、諸法の空を説きたまふ。摩訶衍の空門は、一切の

【二】佛法の正空と邪見の空との差異を明す。

諸法の性は、常に自ら空にして、智慧方便を以て故に空を觀ぜず。佛、須菩提の爲に説きたまふが如し。「色は色、自ら空なり、愛想行識は識、自ら空なり、十二入、十八界、十二因縁、三十七品、十力、四無所畏、十八不共法、大慈大悲、薩婆若、乃至阿耨多羅三藐三菩提は、皆自ら空なり」と。

問うて曰はく、「若し一切諸法の性は、常に自ら空にして、眞空にして所有無くんば、云何が邪見に墮せざらん。邪見は無罪無福にして、今世後世無しと名く。此と異なる無し。」答へて曰はく、「無罪無福の人は今世無しとは言はず、但後世のみ無し、草木の類の自ら生じ、自ら滅するが如く、或は人の生れ、或は人の殺すは、現在に止り、更に後世の生無しと言ふ。而も身の内外に有する所の自相は、皆空なりと觀するを知らざるなり。是を以て異りと爲す。復次に、邪見の人は、多く衆惡を行じ、諸の善事を斷ず。空を觀するの人は、善法すら尙作すを欲せず、何に況んや惡を作すをや。問うて曰はく、「邪見に二種有り。有は因を破り果を破り、有は果を破り因を破らず。汝が説く所の如きは、果を破りて因を破らず。果を破り因を破るとは、因無く縁無く、罪無く福無しと言ふ。則ち是れ因を破するなり、今世後世罪福の報無しといふ、是れ則ち果を破するなり。空を觀するの人は皆空なりと言ふ、則ち罪福も因果も皆無なり。此と何等の異り有りや。」答へて曰はく、「邪見の人は諸法に於て斷滅して空ならしめ、摩訶衍の人は諸法は眞空にして破れず壞せざるを知る。問うて曰はく、「是邪見に三種有り。一には罪福の報を破して罪福を破せず、因縁

の果報を破して因縁を破せず、後世を破して今世を破せず。二には罪福の報を破し亦罪福を破し、因縁の果報を破して亦因縁を破し、後世を破して、亦今世を破し、一切の法を破せず。三には一切の法を破して皆所有無からしむ。空を觀する人も、亦真空にして所有無しと言ふ。第三の邪見と何等の異り有りや。一答へて曰はく、一邪見は諸法を破して空ならしむ。空を觀するの人は、諸法の真空にして、破れず壞せざるを知る。復次に、邪見の人は、諸法皆空にして所有無しと言ひて、諸法の空相を取りて戲論すれども、空を觀するの人は諸法の空を知りて、相を取らず、戲論せざるなり。復次に、邪見の人は、口に一切は空なりと説くと雖も、然も愛處に於て愛を生じ、瞋處に瞋を生じ、慢處に慢を生じ、癡處に癡を生じ、自ら其身を誑す。佛弟子の如きは、實に空を知りて心動せず、一切の結使の生ずる處に復生せざるなり。譬へば虚空は煙火も染むる能はず、大雨も濕す能はざるが如し。是の如く空を觀すれば、種種の煩惱も復其心に著せず。復次に、邪見の人は所有無しと言ふも、愛の因縁より出でず。眞空の名は愛の因縁より生ず。是を異と爲す。四無量心、諸の清淨の法は所緣實ならざるを以ての故に、猶尙眞空の智慧と等しからず、何に況んや此邪見をや。復次に、是見を名けて邪見と爲し、眞空の見を名けて正見と爲す。邪見を行する人は、今世には弊惡の人と爲し、後世には當に地獄に入るべし。眞空の智慧を行する人は、今世には譽を致し、後世には佛と作るを得。譬へば水火の異なるが如く、亦甘露、毒藥、天食須陀を以て臭糞に比するが如し。復次に、眞空の中には空空三昧有り。

【須陀】スーダー  
(Sudra) 花蜜の類  
なり。

【空空三昧】阿羅漢の先づ無漏智を以て諸法の空無我を觀するを空三昧更に有漏を以て先相となし、之を厭捨するを空三昧といふ。

【二】諸法の一相即一切法を知る是れ般若波羅蜜。

邪見の空は、空有りとし、雖も而も空空三昧無し。復次に、眞空を觀する人は、先づ無量の布施、持戒、禪定有り。其心柔軟にして、諸の結使薄く、然して後眞空を得。邪見の中は此事無く、唯憶想分別の邪心を以て空を取らんと欲す。譬へば田舎人の如きは初め鹽を識らず、貴人の鹽を以て種種の肉菜の中に著けて食するを見て、問うて言はく、「何を以て故に爾る」と。語りて言はく、「此鹽は能く諸物の味をして美ならしむるが故に」と。此人便ち念ずらく、「此鹽は能く諸物をして美ならしめば、自味必ず多からん」と。便ち空しく鹽を抄りて、口に満てて之を食するに、鹹苦にして口を傷む。問うて言はく、「汝何を以てか鹽は能く美を作すと云ふ」と。貴人言はく、「癡人なり。此は當に多少を籌量して、之に和すれば美ならしむべし、云何が純ら鹽を食する」と。無智の人は、空解脱門を聞きて、諸の功德を行ぜず。但空を得んと欲す。是れ邪見にして、諸の善根を斷ずと爲す。是の如き等の義を名けて空門と爲す。若し人此三門に入れば、則ち佛法の義を知りて相違背せず。能く是事を知るは、即ち是れ般若波羅蜜の力なり。一切の法に於て罣礙する所無し。若し般若波羅蜜の法を得ずして、阿毘曇門に入れば則ち有の中に入らず、若し空門に入れば則ち有無の中に墮す。

(二) 復次に、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じて、諸法の一相を知ると雖も、亦能く一切の法の種種の相を知る。諸法の種種の相を知ると雖も、亦能く一切の法の一相を知る。菩薩の是の如きの智慧を名けて、般若波羅蜜と爲す。問うて曰はく、「菩薩摩訶薩は、云何が一

切法の種種の相を知り、云何が一切法の一相を知る。答へて曰はく、「菩薩は諸法の相を觀ず、謂ゆる有相なり、是有に因りて諸法の中に有心生ず。是の如き等は一切有なり。二問うて曰はく、「無法の中に、云何が有心生ずる。答へて曰はく、「若し是事無しと言はば、即ち是れ有法なり。復次に、菩薩は一切法の一相を觀ず、謂ゆる無相なり。牛の中に羊相無く、羊の中に牛相無きが如し。是の如き等の諸法の中には、各各他相無し。先に有に因るが故に、有心生ずと言ふが如きは、是法は有に異なる、異なるが故に應に無なるべし。若し有法は是れ牛ならば、羊も亦應に是れ牛なるべし。何を以ての故に。有法は異らざるが故に。若し異れば則ち無なり、是の如き等の一切は皆無なり。復次に、菩薩は一切の法は一なりと觀ず。是一法に因りて、諸法の中に一心生ず。諸法は各各一相有り、一を合衆するが故に名けて二と爲し、三と爲す。一を實と爲し、二三を虚と爲す。復次に、菩薩は、諸法は因る所有るが故に有なりと觀ず。人身の無常なるが如し。何を以ての故に。生滅の相の故に。一切の法は皆是の如く、因る所有るが故に有なり。復次に、一切の諸法は因る所無きが故に有なり。人身の無常なるが如し、生滅するが故なり。生滅に因るが故に無常を知る。此因には復應に因有るべし。是の如くんば則ち無窮なり。若し無窮なれば則ち因無し。若し是因に更に因無くして、是れ無常なれば、因も亦因に非ず。是の如き等は一切無因なり。復次に、菩薩は一切の法を有相なりと觀ず。法として無相なる者有ること無し。地は堅重の相、水は冷濕の相、火は熱照の相、風は輕動の相、虚空は容受の相、分別覺知は是れ

識相爲り。此に有り、彼に有る、是を方相と爲し、久しき有り、近き有る、是を時相と爲す。濁悪の心は衆生を惱す。是を罪相と爲し、淨善の心は衆生を慈む、是を福相と爲す。諸法に著するは是を縛相と爲し、諸法に著せざるは是を解脫相と爲す。現前に一切法の無礙なるを知るは是を佛相と爲す。是の如き等の一切に各各相有り。復次に、菩薩は一切の法は皆無相と觀す。是諸相は、因縁の和合より生じ、自性無きが故に無なり。地の色香味觸の如きは、四法和合するが故に地と名け、但色の故に地と名けず。亦但香、但味、但觸の故に名けて地と爲さず。何を以ての故に。若し但色是れ地ならば、餘の三は則ち是れ地なるべからず。地は即ち香味觸無し。香味觸も亦是の如し。復次に、是四法を云何が一法と爲ん。一法を云何が四法と爲ん。是を以ての故に、四を以て地と爲すを得ず、亦四を離れて地と爲すを得ず。問うて曰はく、『我は四を以て地と爲さず、但四法に因るが故に地法生ず、此地は四法の中に在りて住するや。』答へて曰はく、『若し四法より地を生ぜば、地と四法と異り。父母の子を生じて、子は則ち父母と異なるが如し。若し爾れば、今眼に色を見、鼻に香を知り、舌に味を知り、身に觸を知る。地若し此四法に異ならば、應に更に異根異識有りて知るべし。若し更に異根異識の知る無くんば、則ち地有る無けん。問うて曰はく、『若し上説の地相に失有らば、應に阿毘曇の如く、地相を説くべし。地を四大造の色と名け、但地の種は此れ堅相にして、地は是れ可見の色なりと。』答へて曰はく、『若し地は但是れ色ならば、先に已に失を説けり。又地を堅相と爲さば、但眼に色を見るに、水中の月、

鏡中の像、草木の影の如きは則ち堅相無し。堅は則ち身根に觸れて知るが故なり。復次に、若し眼に見るの色ならば、是地の堅相、是地の種も、眼に見るの色なるべし。亦是水火濕熱の相は、是れ水火の種なるべし。若し爾らば風と風の種とを、亦應に分別すべし、而も分別せず。説くが如きは、何等か是れ風と風の種、何等か風の種と風なる、若し是れ一物ならば、二種と作すべからず。答ふ、若し是れ異なるらば、地及び地の種は異なるべからず。問うて曰はく、『是四大は各各相離れず。地中に四種有り、水火風の各にも四種有り、但地中には地多きが故に、地を以て名と爲す。水火風も亦爾なり。』答へて曰はく、『然らず。何を以ての故に、若し火中に四大有らば、應に都て是れ熱すべし、熱せざるの火無きが故なり。若し三大、火中に在りて熱せざれば、則ち名けて火と爲さず。若し熱すれば則ち自性を捨て、皆名けて火と爲す。若し細の故に知るべからずと謂はば、則ち無と異なる無し。若し鹿の得べき有らば、則ち細有るを知る。若し鹿無ければ亦細無し。是の如き種種の因縁によりて、地相は不可得なり。若し地相不可得ならば、一切の法相も亦不可得なり。是故に一切の法は皆一相なり。問うて曰はく、『無相と言ふべからず、何を以ての故に。』諸法に於て無相ならば則ち是れ相なり。若し無相無ければ、則ち一切の法相を破すべからず。何を以ての故に、無相無きが故に。若し是れ無相ならば、則ち一切法は無相なりと言ふべからず。』答へて曰はく、『無相を以て諸法の相を破す。若し無相の相有らば、則ち諸法の相中に墮す。若し諸法の相中に入らずんば、則ち無相を難すべからず、皆諸法の相を破

【無相三昧】四諦中減諦の一、減淨妙離の行相と相應する三昧にして、涅槃は色聲味觸法の五法、男女の二相、及び三有爲相の相と名け、無相の相を離るれば縁ずるが故に、無相三昧と名く。【三】諸法一相にして自性空、要は諸法の實相是れ般若波羅蜜なるを明數を明す。

するも亦自ら相を滅す。譬へば火木を前むるに、諸の薪を然し已りて、亦復自ら然ゆるが如し。是故に聖人は無相を行す。無相三昧は無相を破するが故なり。

復次に、菩薩は、一切の法は不合、不散、無色、無形、無對、無示、無說、一相なりと觀す。謂ゆる無相なり。是の如く諸法は等しく一相ならば、云何が種種の相を觀じて、一切法を二法の中に攝入せん。謂ゆる名と色、色と無色、可見と不可見、有對と無對、有漏と無漏、有爲と無爲等、二百二の法門は、千難品の中に説くが如し。復次に、二法有り、

忍辱と柔和となり。又二法有り、親敬と供養となり。二施有り、財施と法施となり。二力有り、慧分別力と修道力となり。二具足有り、戒具足と正見具足となり。二相有り、質直

相と柔軟相となり。二法有り、定と智となり。二法有り、明と解説となり。二法有り、世間法と第一義法となり。二法有り、念と巧慧となり。二諦有り、世諦と第一義諦となり。

二解脫有り、待時解脫と不壞心解脫となり。二種の涅槃有り、有餘涅槃と無餘涅槃となり。二究竟有り、事究竟と願究竟となり。二見有り、知見と斷見となり。二具足有り、義具足

と語具足となり。二法有り、少欲と知足となり。二法有り、易養と易滿となり。二法有り、法隨と法行となり。二智有り、盡智と無生智となり。是の如き等分別せば無量の二法門有

り。復次に、三道を知る、見道と修道と無學道となり。三性有り、斷性と離性と滅性となり。三修有り、戒修と定修と慧修となり。三菩提有り、佛菩提と辟支迦佛菩提と聲聞菩提

となり。更に復學智の滿、三乘有り、佛乘と辟支迦佛乘と聲聞乘となり。三歸依有り、佛

と法ほふと僧そうとなり。三住さんぢゆうあり有り、梵住ぼんぢゆうと天住てんぢゆうと聖住せいぢゆうとなり。三增上さんぢゆうじやうじやう有り、自增上じぢゆうじやうじやうと他增上たぢゆうじやうじやうと法ほふ僧上そうじやうとなり。諸佛しよぶつありの三不護さんふご有り、身業しんごふ不護ふごと口業くごふ不護ふごと意業いごふ不護ふごとなり。三福處さんふくぢよ有り、布施せと持戒ぢけいと善心ぜんしんとなり。三器械さんけきあり有り、聞器械もんけきありと離欲器械りよくけきありと慧器械ずいけきありとなり。三輪さんりん有り、變化へんじや輪りんと示他心輪しただしんりんと教化輪けわはりりんとなり。三解脫門さんげだつもんあり有り、空解脫門くうげだつもんありと無相解脫門むさうげだつもんありと無作解脫門むさくげだつもんありとなり、是の如かくき等の無量むりやうの三法門さんぽうもんあり有り。復また四法しほふを知る、四念處しにんぢよ、四正勤しぢゆうきん、四如意足しにぢゆうじやく、四聽諦しだうぢい、四聖種しやうじゆうあり、四沙門果しふもんぐわあり、四知しぢ、四信しぢん、四道しだう、四攝法しじやくぽうあり、四依しゑ、四通達善根しつうたうぜんこんあり、四道しだう、四天人輪しだうてんにんりんあり、四堅法しけんぽうあり、四無所畏しむすゐあり、四無量心しむりやうしんあり。是の如かくき等の無量むりやうの四法門しほふもんあり有り。復また五無學衆むがくしゆあり、五出性しゆくせうあり、五解脫處げだつぢよあり、五根ごこんあり、五力ごりきあり、五大施ごだいせあり、五智ごぢあり、五阿那含ごあなごんあり、五淨居天處ごじやうぢよてんぢよあり、五治道ごぢぢ道あり、五智三昧ごぢさんまいあり、五聖分ごせいぶんあり支三昧しさんまいあり、五如法語道ごにほふぽうごだうあり、是の如かくき等の無量むりやうの五法門ごほふもんあり有り。復また六捨法りやくせぽうあり、六愛敬法りやくあいけいぽうあり、六神通りやくしんぢゆうあり、六種阿羅漢りやくしゆあらかんあり、六地見諦道りやくぢみだうあり、六隨順念りやくずいじゆんねんあり、六三昧りやくさんまいあり、六定りやくぢやうあり、六波羅蜜りやくはらみつあり、是の如かくき等の無量むりやうの六法門ろくほふもんあり有り。復また七覺意しちげういあり、七財しちさいあり、七依止しちゑしあり、七想定しちじやうぢやうあり、七妙法しちめうぽうあり、七知しちぢあり、七善人去處しちぜんにんぢよあり、七淨捨、八勝處はつしやうぢよあり、八大人念はつだいじんねんあり、八種精進はつしゆじやうぢんあり、八丈夫はつぢやうぢやうあり、八阿羅漢力はつあらかんりきあり、是の如かくき等の無量むりやうの八法門はつほふもんあり有り。復また九次第定くじうぢぢぢやうぢやうあり、九名色等滅くじうなみしよくとうめつあり、至いたるを九くと爲なす。九無漏智くむるろぢぢあり、盡智じんぢぢを得えるが故ゆゑに、九無漏地くむるろぢぢあり、色しよくなり。九地思惟道くぢしゆいだうあり、是の如かくき等の無量むりやうの九法門くほふもんあり有り。復また十無學法しゆむがくぽうあり、十想しゆじやうあり、十智しゆぢぢあり、十一切入じゆじちぢいんあり、十善大地佛しゆぜんだいちぶつあり、十力しゆりきあり、是の如かくき等の無量むりやうの十法門しゆほふもんあり有り。復また十二因緣じふにゐんゑんありの法ほふを知る。復また十三出法しゆしゆつぽうあり、十四變化心しゆじちへんじやしんあり、十五心見諦道しゆじちしんみだうあり、十六安那般那しゆあんぱななあり

【四】本經にいふ諸法實相のみに般若波羅蜜と名くるに就いて。

行、十七聖行、十八不共法、十九離地を知る。思惟道の中に、一百六十二道有り、能く煩惱の賊を破る。一百七十八の沙門果有り。八十九は有爲果にして、八十九は無爲果なり。是の如き等の種種無量の異相の法の、生滅、増減、得失、垢淨、悉く能く之を知る。菩薩摩訶薩は、是諸法を知り已りて、能く諸法をして自性空に入らしむ、而も諸法に於て著する所無く、聲聞、辟支佛地を過ぎて菩薩位の中に入り、菩薩位の中に入り已りて、大悲憐愍を以ての故に、方便力を以て諸法の種種の名字を分別し、衆生を度して三乗を得しむ。譬へば工巧の人の藥力を以ての故に、能く銀を變じて金と爲し、金を變じて銀と爲らしむるが如し。問うて曰はく、『若し諸法の性眞空ならば、云何が諸法の種種の名字を分別する。何を以てか但眞空の性のみを説かざる。』答へて曰はく、『菩薩摩訶薩は、空は是れ可得、可著と説かず。若し可得、可著ならば、諸法の種種の異相を説くべからず。不可得の空なれば、障礙する所無し。若し障礙有らば、是を可得と爲す、不可得の空に非ず。若し菩薩摩訶薩は、不可得の空を知りて、還りて能く諸法を分別し、憐愍して衆生を度脱す、是れを般若波羅蜜の力と爲す。要を取りて之を言へば、諸法の實相は、是れ般若波羅蜜なり。』

(二四)と問うて曰はく、『一切の世俗の經書、及び九十六種の出家の經の中に、皆諸法實相有り」と説く。又、聲聞法の三藏の中にも亦諸法實相有り。何を以てか名けて般若波羅蜜と爲さず、而も此經の中の諸法實相のみを獨り般若波羅蜜と名くる。答へて曰はく、『世俗の經書の中

には、國を安んじ、家を全うし、身命の壽樂の爲の故なれば實に非ず。外道の出家は邪見の法の中に墮し、心愛著するが故に、是も亦實に非ず、聲聞法の中に四諦有りとは雖も、無常、苦、空、無我を以て、諸法の實相を觀じ、智慧具足せず、利ならず、一切衆生の爲にする能はず、佛法を得んが爲にせざるを以ての故に、實智慧有りとは雖も、般若波羅蜜と名けず。説くが如くんば、佛は諸の三昧に入出したまへども、舍利弗等は乃至其名だも聞かず、何に況んや能く知るをや。何を以ての故に、諸の阿羅漢辟支佛は、初發心の時、大願無く、大慈大悲無く、一切の諸の功徳を求めず、一切三世十方の佛を供養せず、審諦に諸法の實相を求め知らず、但老病の苦を脱するを求めんと欲する故なり。諸の菩薩は初發心より弘く大いに誓願し、大慈悲有りて一切の諸の功徳を求め、一切の三世十方の諸佛を供養し、大智慧有りて諸法の實相を求め、種種の諸觀を除く。謂ゆる淨觀と不淨觀と、常觀と無常觀と、樂觀と苦觀と、空觀と實觀と、我觀と無我觀となり。是の如き等の妄見、心力の諸觀を捨てて、但外縁の中の實相を觀す。淨に非ず不淨に非ず、常に非ず非常に非ず、樂に非ず苦に非ず、空に非ず實に非ず、我に非ず無我に非ず、是の如き等の諸觀は不著不得なり。世俗の法の故に、第一實義、周遍、清淨、不破、不壞に非ず。

諸の聖人の行處、是を般若波羅蜜と名く。

問うて曰はく、「已に般若の體相は是れ無相無得の法なるを知る。行者は云何が能く是法を得る。答へて曰はく、「佛、方便を以て法を説きたまふに、行者、所説の如く行すれば則

【互】無相無得の般若の體相を捕捉するに就いて。

【二六】菩薩の具に六度を行じて衆生を度するを明す。

ち得るなり。譬へば絶崖峻道は、假に梯して能く上るが如く、又深水は船に因りて渡るを得るが如く、初發心の菩薩は、若は佛に従うて聞き、若は弟子に従うて聞き、若は經の中に於て聞けり。一切の法は、畢竟空にして、決定せる性の、取るべく、著すべき有ること無し。第一の實法は、諸の戲論を滅し、涅槃の相は是れ最も安隱なり、我は一切衆生を度脱せんと欲す。云何が獨り涅槃を取らん。我は今福德、智慧、神通力を未だ具足せざるが故に、衆生を引導する能はず、當に是諸の因縁を具足すべし」と。布施等の五波羅蜜を行じ、財施の因縁の故に大富を得、法施の因縁の故に大智慧を得。能く此二施を以て、貧窮の衆生を引導して三乘道に入らしむ。持戒の因縁を以ての故に、人天の尊貴に生れ、自ら三惡道を脱し、亦衆生をして三惡道を免れしむ。忍辱の因縁を以ての故に、瞋恚の毒を障へ、身色端正威徳第一なるを得、見る者歡喜し敬信し心伏す。況んや復說法するをや。精進の因縁を以ての故に、能く今世後世の福德、道法の懈怠を破して、金剛身不動心を得。是身心を以て凡夫の橋慢を破り、涅槃を得しむ。禪定の因縁を以ての故に散亂の心を破し、五欲の罪を離れ、樂んで能く衆生の爲に離欲の法を説く。禪は是れ般若波羅蜜の依止處なり。是禪は、般若波羅蜜に依りて自然に生ず。經の中に「比丘は、一心に定を専らにして、能く諸法の實相を觀ず」と説くが如し。

〔二六〕次に、欲界の中には、多く悭貪の罪業を以て、諸の善門を閉づるを知りて、檀波羅蜜を行ずる時、是二事を破して、諸の善門を開き、常に聞かしめんと欲するが故に十善

道を行す。尸羅波羅蜜は、未だ一定の智慧を得ず、未だ欲を離れざるが故に、尸羅波羅蜜を修る。是を以ての故に忍辱を行じ、上の三事の能く福門を聞くを知り、又是福徳の果報は無常にして、天人の中に業を受け、還復苦に墮するを知り、は無常の福徳を厭ふが故に、實相の般若波羅蜜を求む。是れ云何が當に得べき。必ず一心を以て乃ち當に得べし。龍王の寶珠を貫くに、一心に觀察して盡く龍に觸れざれば、則ち價直闊浮提なるを得るが如し。一心に禪定すれば、五欲五蓋を除却す。心の業を得んと欲せば、大いに精進を用ふ。是故に忍辱に次いで、精進波羅蜜を説く。經の中に説くが如きは、行者は端身直坐して、念を繫けて前に在り、專精にして定を求め、正しく乳骨をして枯朽せしめて、終に懈退せず、是故に精進して禪を修す。若し財有りて施すは、難しと爲すに足らず。惡道に墮するを畏れ、好名を失するを恐れ、持戒忍辱も亦難しと爲さず。是を以ての故に上の三度の中に精進を説かず。今は般若波羅蜜の實相の爲に、心より定を求む。是事は難きが故に、應に須らく精進すべし。是の如く行すれば能く般若波羅蜜を得るなり。

問うて曰はく、要す五波羅蜜を行じて、然る後に般若波羅蜜を得るや、亦は一二の波羅蜜を行する有りて般若波羅蜜を得るや。答へて曰はく、二種の波羅蜜に二種有り。一には一波羅蜜の中に、相應し隨行して諸の波羅蜜を具し、二には時に隨うて別に波羅蜜を行じ、多き者名を受く。譬へば四大共に合して相離れずと雖も、多き者を以て名と爲すが如し。相應し隨行する者は、一波羅蜜の中に五波羅蜜を具す。是は五波羅蜜を離れずして、

【七】 般若波羅蜜を得るに就いて。世俗に隨つて行を説くも、諸法本來無所得なれば、著する餘きの心もてする諸法の實相、是れ般若波羅蜜なりを明す。

般若波羅蜜を得。時に隨うて名を得る者は、或は一に因り、一に因りて、般若波羅蜜を得。若し人阿耨多羅三藐三菩提の心を發して布施せんに、是時布施の相を求めば、一ならず異ならず、常に非ず無常に非ず、有に非ず無に非ざる等なり、布施を破するの中に、布施に因りて實相の解を説くが如く、一切の法も亦是の如し。是を布施に因りて、般若波羅蜜を得と名く。或は戒を持ち、衆生を惱さず、心に悔有ること無き有り。若し相を取り著を生せば、則ち諍競を起す。是人は先に衆生を瞋らずと雖も、法に於て憎愛の心有るが故に而も衆生を瞋る。是故に若し衆生を惱さざらんと欲せば、當に諸法の平等を行すべし。若し是は罪有り、是は罪無しと分別するは、則ち戸羅波羅蜜を行するに非ず。何を以ての故に。罪を憎み、不罪を愛すれば、心則ち自ら高うして、還つて衆生を惱す道中に墮すればなり。是故に菩薩は罪者と不罪者とを觀じて心に憎愛無し。是の如く觀する者は、是を但戸羅波羅蜜を行じて、般若波羅蜜を得と爲す。菩薩は是念を作さく、「若し法忍を得ざれば、則ち常に忍ぶ能はず」と。一切衆生は、未だ逼迫して能く忍ぶこと有るにあらず。苦來りて己に切なれば、則ち忍ぶ能はず。譬へば囚はれて杖楚を畏れ、而して死苦に就くが如し。是因縁を以ての故に、當に法忍を生ずべし。打つ者、罵る者有ること無く、亦受くる者無し。但先世の顛倒せる果報、因縁に従るが故に、名けて受くと爲す。是時は忍と事忍とを分別せず。法とは、深く畢竟空に入るが故に是を法忍と名く。是法忍を得れば、常に復衆生を瞋惱せず。法忍に相應するの慧は、是れ般若波羅蜜なり。精進して常に一切の

善法の中に在りて、能く一切の善法を成就す。若し智慧もて諸法を籌量し分別し法性に通達すれば、是時精進は智慧を助成す。又精進の實相は、身心を離れ、如實に不動なりと知る。是の如きの精進は能く般若波羅蜜を生ず。餘の精進は幻の如く夢の如く、虚誑にして實に非ず、是故に説かず。若し深く心に念を攝すれば、能く如實に諸法の實相を見る。諸法の實相とは、見聞念知を以て能く得べからず。何を以ての故に、六情六塵は、皆是れ虚誑の因縁果報にして、是中に知る所見る所は、皆亦虚誑なればなり。是虚誑の知は都て信すべからず、信すべき所の者は、唯智佛の阿耨祇劫に於て得る所の實相の智慧のみ有り。是智慧を以て、禪定に依りて一心に諸法の實相を觀す。是を禪定の中より般若波羅蜜を生ずと名く。或は五波羅蜜を離れ、但聞きて讀誦し、思惟し籌量して諸法の實相に通達する有り。是方便智の中より般若波羅蜜を生ず。或は二より、或は三四波羅蜜より般若波羅蜜を生ず。一諦を説くを聞きて道果を成ず、或は二三四諦を聞きて而して道果を得るが如く、人有り、苦諦に於て多く惑ふが故に、爲に苦諦を説くの道を得。餘の三諦も亦是の如し。或は都て四諦に惑ふこと有るが故に、爲に四諦を説くに道を得。佛の比丘に語りたまふが如し。汝若し能く貪欲を斷ぜば、我汝を保ちて阿那含道を得しめん。若し貪欲を斷ぜば、當に悲癡も亦斷ずるを知るべし」と。六波羅蜜の中も亦是の如く、多く慳貪を破するが爲の故に、布施の法を説くも、當に餘惡も亦破するを知るべし。雜惡を破するが爲の故に、具に爲に六を説く。是故に或は一行じ、或は合して行じ、普く一切の人の爲の故に、

【二〇】梵行等の三行も無著の心もて行すべきを明す。

六波羅蜜を説く。一人の爲に非ず。復次に、若し菩薩、一切法を行ぜざれば、一切法を得ざるが故に、般若波羅蜜を得。所以は何ん。諸行は皆虚妄にして實ならざればなり。

或は近く過有り、或は遠く過有り、不善法の如きは近く過罪有り。善法は久しうして後變異有る時、著者は能く憂苦を生ず、是れ遠く過罪有るなり。譬へば美食惡食の俱に雜毒有るが如し。惡食を食すれば即時に悦ばず、美食を食すれば即時に甘悅なれども、久しうして後俱に命を奪ふ。故に二つながら食すべからず。善惡の諸行も亦復是の如し。

(二八) 問うて曰はく、「若し爾れば佛は何を以てか三行、梵行、天行、聖行を説きたまふ。」答へて曰はく、「無行を行するが故に名けて聖行と爲す。何を以ての故に。一切聖行の中に、三解脱門を離れざるが故なり。梵行天行は中に衆生の相を取るに因るが故に生ず。行する時は過無しと雖も、後皆失有り。又、即今實を求むれども、皆是れ虚妄なり。若し賢聖は、無著の心もて、此二行を行すれば則ち咎無し。若し能く是の如く、無行の法を行すれば、皆所得無し。顛倒虚妄の煩惱の、畢竟して生ぜざること、虚空の清淨なるが如し。故に諸法の實相を得、無所得を以て得と爲す。無所得とは、般若の中に説くが如し。色等の法は空なるを以ての故に空なるに非ず、本より已來、常に自ら空なり。色等の法は、智慧を以て及ばざるが故に無所得なるにあらず。本より已來常に自ら所得無し。是故に幾の波羅蜜を行じて、般若波羅蜜を得るかと思ふべからず。諸佛は衆生を憐愍して、俗に隨ひたまふが故に、行を説きたまふも、第一義には非ず。問うて曰はく、「若し所得無く、所

行ぎやう無むくんば、行者ぎやうは何なにを以もつてか之これを求もとむる。答こたへて曰いはく、無所得むしよとくに二種にしゆあ有り。一いちには世間せけんの欲よくを求もとむる所有しようれども意いの如ごとくならず、是れ無所得むしよとくなり。二にには諸法實相しよほじつさうの中には、受決定じゆていの相さうは得うべからざるが故ゆゑに無所得むしよとくと名なく。福德智慧ふくとくちゐ有りて、善根ぜんこんを増益ぞうやくすること無なきに非あらず。凡夫ぼんぷの人ひとの如ごときは、世間せけんの法ほふを分別ぶんべつするが故ゆゑに所得しよとく有り。諸もろの善功徳ぜんくどくも亦是またの如ごとし。世間せけんの心こころに隨したがふが故ゆゑに所得しよとく有りと説とけども、諸佛しよぶつの心中しんちゆうには所得しよとく無し。是れ略りやくして、般若波羅蜜ぼんねはらみつの義ぎを説とけり。後あとに當まさに廣ひろく説とくべし。

大智度論釋初品三十七品義第三十一

卷第十九

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什詔を奉じて譯す

【一】 菩薩摩訶薩は、不住の法を以て、般若波羅蜜の中に住し、不生の故に應に四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺分、八聖道分を具足すべし。

【二】 以下不生の故に應に四念處等の文中初二乘の道なる三十七品を菩薩が具足すと云ふに就いて明す。

問うて曰はく、『三十七品は是れ聲聞辟支佛の道なり。六波羅蜜は是れ菩薩摩訶薩の道なり。何を以ての故に菩薩道の中に於て、聲聞法を説く。』答へて曰はく、『菩薩摩訶薩は、應に一切の善法と、一切の道とを學すべし。佛、須菩提に、『菩薩摩訶薩は般若波羅蜜を行するに、悉く一切の善法と一切の道とを學す。謂ゆる乾慧地乃至佛地なり』と、告げたまへるが如し。是九地は應に學にして證を取らざるべし。佛地は亦學し、亦證す。復次に何の處にか三十七品は、但是れ聲聞、辟支佛の法にして、菩薩の道に非ずと説くや。是般若波羅蜜摩訶衍品の中に、佛は四念處乃至八聖道分を説きたまひ、是薩訶衍三藏の中にも亦三十七品は獨り是れ小乗の法なりと説きたまはず。佛は大慈を以ての故に三十七品を涅槃の道と説きたまふ。衆生の願に隨ひ、衆生の因縁に隨うて、各其道を得。聲聞を求めんと欲する人は聲聞の道を得、辟支佛の善根を種うる人は辟支佛道を得、佛道を求むる者

は佛道を得。其本願は、諸根の利鈍に隨うて大悲有り、大悲無し。譬へば龍王の降雨は普  
 く天下に雨らし、雨に差別無きも、大樹大草は根大なるが故に多く受け、小樹小草は根小  
 なるが故に少しく受くるが如し。問うて曰はく、「三十七品は處として、獨り是れ聲聞辟  
 支佛道にして、菩薩の道に非ずと説くこと無しと雖も、義を以て之を推すに、菩薩は生死  
 に久しく住して、五道に往來し、疾く涅槃を取らず。是三十七品は、但涅槃の法のみを説  
 き、波羅蜜を説かず、亦大悲を説かざるを知るべし。是を以ての故に、菩薩の道に非ざる  
 を知る。」答へて曰はく、「菩薩は、久しく生死の中に住すと雖も、亦應に實道と非實道、是  
 は世間には涅槃なりと知るべし。是を知り已りて大願を立て、「衆生は愍むべし、我當に無  
 爲處に著するを抜き出すべし」と。是實法を以て、諸の波羅蜜を行じ、能く佛道に到る。  
 菩薩は學すと雖も、是法を知ると雖も、未だ六波羅蜜を具足せざるが故に、證を取らず。  
 佛の言きたまふが如し、譬へば仰いで空中を射るに、箭箭相柱へて地に落ちしめざるが如  
 し」と。菩薩摩訶薩も亦是の如し。般若波羅蜜の箭を以て、三解脱門の空中を射る。復方  
 便の箭を以て方便の箭を射て、涅槃の地に墮ちざらしむ。復次に、若し汝が説く所の如く、  
 菩薩は久しく生死の中に住し應に種種の身心の苦惱を受け、若し實智を得ずんば、云何が  
 能く是事を忍ばん。是を以ての故に菩薩摩訶薩は是道品の實智を求むる時、般若波羅蜜の  
 力を以ての故に、能く世間を轉じて道果の涅槃と爲す。何を以ての故に。三界の世間は皆  
 和合より生ず。和合より生ずる者は自性有ること無し。自性無きが故に是れ則ち空と爲す。

【二】三十七品を説くは衆生の諸病に應ずるを明す。

空の故に取るべからず、取るべからざるの相は是れ涅槃なればなり。是を以ての故に、菩薩摩訶薩は不住の法もて般若波羅蜜の中に住し、不生の故に應に四念處を具足すべしと説く。復次に、聲聞辟支佛の法の中には、世間は即ち是れ涅槃なりと説かず。何を以ての故に。智慧深く諸法に入らざるが故に。菩薩の法の中には、世間は即ち是れ涅槃なりと説く。智慧深く諸法に入るが故なり。佛、須菩提に、「色は即ち是れ空なり、空は即ち是れ色なり、受、想、行、識は即ち是れ空なり、空は即ち是れ受、想、行、識なり、空は即ち是れ涅槃なり。涅槃は即ち是れ空なり」と告げたまへるが如し。「中論」の中に亦説く、

涅槃は世間と異ならず、世間は涅槃と異ならず

涅槃の際と世間の際とは、一際にして異なること有る無きが故なり

菩薩摩訶薩は是實相を得るが故に、世間を厭はず、涅槃を樂はず。三十七品は是れ實智

の地なり

問うて曰はく、「四念處は則ち能く具足して道を得ば、何を以てか三十七を説くや。若し汝一略説するを以ての故に四念處にして、廣説するが故に三十七なり」と云はば、此は則ち然らず。何を以ての故に。若し廣くせば應に無量なるべければなり。答へて曰はく、「四念處は具足して能く道を得と雖も、亦應に四正勤等の諸法を説くべし。何を以ての故に、衆生の心は種種同じからず、結使も亦種種にして、樂ふ所も解する所の法も、亦種種なればなり。佛法は一實一相なりと雖も、衆生の爲の故に十二部經に於て、八萬四千の法聚あ

り、是を分別して説くを作す。若し爾らずんば初轉法輪に四諦を説けば則ち足る、餘法を  
 須ひず。有は衆生の苦を厭ひ樂に著するを以て、是衆生の爲の故に四諦を説く。身心等の  
 諸法は、皆是れ苦にして、樂有ること無し。是苦の因縁は愛等の諸の煩惱に由る。是苦  
 の盡されたる處を涅槃と名け、方便して涅槃に至る、是を道と爲す。衆生有り、多念、亂  
 心、顛倒の故に、此身と愛と、心と法との中に著して邪行を作す。是人の爲の故に四念處  
 を説く。是の如き等の諸の道法は、各各衆生の爲に説く。譬へば藥師は一藥を以て衆病  
 を治するを得ず。衆病同じからざれば、藥も亦一ならざるが如し。佛も亦是の如し、衆生  
 の心病の種種なるに隨うて、衆樂を以て之を治し、或は一法を説きて衆生を度したまふ。  
 佛、一比丘に告げたまふが如きは、「汝が物に非ざれば取る莫れ」と。比丘言さく、「知り已  
 れり、世尊」と。佛言はく、「云何が知る」と。比丘言さく、「諸法は我物に非ず、取るべ  
 からず」と。或は二法を以て衆生を度す、定と及び慧となり。或は三法を以てす、戒と定  
 と慧となり。或は四法を以てす、四念處なり。是故に四念處もて道を得べしと雖も、餘の  
 法行異なり、分別多少異れば、觀も亦異なる。是を以ての故に應に四正勤等の諸の餘法を  
 説くべし。復次に、諸の菩薩摩訶薩は、信力大なるが故に、一切衆生を度せんが爲の故  
 に、是中に佛は一時に三十七品を説くを爲したまふ。若し異法、道門、十想等を説くも、  
 皆三十七品の中に攝在す。是三十七品の衆樂は和合して、一切衆生の病を療するに足れり。  
 是故に多く説くを用ひず。佛の如きは無量の力有りと雖も、但十力のみを説きて、衆生を

【三】三十七品生起の次第を釋す。

度するに於て事足れり。是三十七品は十法を根本と爲す。何等か十なる。信、戒、思惟、精進、念、定、慧、除、喜、捨なり。信とは信根と信力となり。戒とは正語と正業と正命となり。精進とは四正勤と精進根と精進力と精進覺と正精進となり。念とは念根と念力と念覺と正念となり。定とは四如意足と定根と定力と定覺と正定となり。慧とは、念慮と慧根と慧力と擇法覺と正見となり。是諸の法念智慧の縁の中に隨順して止住する、是時を念慮と名け、邪法を破り正道の中に行ずるが故に正勤と名け、心を攝し安隱にして縁中に於てするが故に如意足と名け、軟智を心に得るが故に根利と名け、智を心に得るが故に力と名け、修道の用の故に覺と名け、見道の用の故に道と名く。

問うて曰はく、「應に先づ道を説くべし。何を以ての故に。道を行じて、然る後に諸の善法を得ればなり。譬へば人の道を行くを先として、然る後に所至の處を得るが如し。今、何を以てか顛倒して先づ四念處を説き、後に八正道を説く。」答へて曰はく、「顛倒せざるなり。三十七品は是れ初めて道に入らんと欲する時の名字なり。行者、師の所に到り、道法を聽く時の如し。先づ念を用ひて是法を持す、是時を念處と名く。持し已りて法中より果を求むるが故に、精進を行ず、是時を正勤と名く。多く精進するが故に、心散亂せず、心を攝して調柔ならしむるが故に、如意足と名く。心調柔し已りて五根を生ず。諸法の實相は甚深にして難解なり、信根の故に能く信する、是を信根と名く。身命を惜まず、一心に道を求むる、是を精進根と名く。常に佛道を念じて餘事を念ぜざる、是を念根と名く。常

## 【四】以下四念處を明す。

に心を攝して道に在る、是を定根と名く。四諦の實相を觀する、是を慧根と名く。是五根增長して、能く煩惱を遮ること、大樹の力能く水を遮るが如し。是五根增長する時は、能く轉深法に入る、是を名けて力と爲す。力を得已りて道法を分別するに三分あり、擇法覺し精進覺と喜覺となり。此三法は道を行する時、若し心没すれば、能く除覺、定覺、捨覺を起らしめ、此三法は、若し道を行する時心動散すれば、能く攝して定念覺をして二處に在らしめ、能く善法を集め、能く惡法を遮る。門を守るの人の、有利の者を入らしめ、無益の者を除却するが如し。若し心没する時は、念の三法起り、若し心散する時は、念の三法は無覺、實覺に攝す。此七事能く到るが故に、名けて分と爲し、是法を得、安隱に具足し已りて、涅槃無爲の域に入らんと欲するが故に、是諸法を行す、是時を名けて道と爲す。

問うて曰はく、何等か是れ四念處なる。答へて曰はく、身念處と、受と心と法の念處と、是を四念處と爲し、四法四種を觀す。身は不淨なりと觀じ、受は是れ苦なりと觀じ、心は無常なりと觀じ、法は無我なりと觀す。是四法に各四種有りて雖も、身には多く不淨を觀じ、受には多く苦を觀じ、心には多く無常を觀じ、法には多く無我を觀すべし。何を以ての故に。凡夫人は、未だ道に入らざる時、是四法の中に邪行して、四顛倒を起す。諸の不淨法の中には淨顛倒を、苦の中には樂顛倒を、無常の中には常顛倒を、無我の中には我顛倒なり。是四顛倒を破するが故に、是四念處を説く。淨倒を破するが故に身念處を説き、樂倒を破するが故に受念處を説き、常倒を破するが故に心念處を説き、我倒を破する

【五】初に身念處を明す。

が故に法念處を説く。是を以ての故に四を説くは、少からず、多からざるなり。

(五) 問うて曰はく、「云何が是四念處を得る。」答へて曰はく、「行者は淨戒に依りて住し、一心

に精進を行じて身の五種の不淨相を觀す。何等か五なる、一には生處不淨、二には種子不

淨、三には自性不淨、四には自相不淨、五には究竟不淨なり。云何が生處不淨と名くる。

頭足、腹脊、脇肋の諸の不淨物の和合せるを名けて女身と爲し、内に生藏、熟藏、屎尿

の不淨有り、外に煩惱業の因縁の風有りて、識種を吹きて、二藏の中間に入らしめ、若は

八月、若は九月、屎尿坑の中に在るが如し。説くが如くんば、

是身を臭穢と爲す、花間より生ぜず

亦瞻蔔よりせず、又寶山より出でず

是を生處不淨と名く。種子不淨とは、父母は妄想、邪憶の念風を以て姪欲の火を吹くが

故に、血髓より膏流れ、熱變じて精と爲り、業行の因縁を宿し、識の種子は、赤白の精

の中に在りて住す、是を身種子と名く。偈に説くが如し。

是身種は不淨にして、餘の妙寶物に非ず

淨白より生ぜず、但尿道より出づ

是を種子不淨と名く。自性不淨とは、足より頂に至るまで、四邊の薄皮、其中に有す

る所の不淨充滿す。飾るに衣服を以てし、澡浴するに花香を以てし、食するに上饗の衆味、

餽饗を以てするも、經宿の間、皆不淨爲り。假令衣るに天衣を以てし、食するに天食を

以てすとも、身性を以ての故に、亦不淨爲り。何に況んや人の衣食をや、説くが如くんば、

地水火風の質は、能く不淨を變除すとして

海を傾けて此身を洗ふとも、香潔ならしむる能はず

是を自性不淨と名く。自相不淨とは、是身は、九孔より常に不淨を流す。眼より眵涙を

流し、耳より結聾を出し、鼻の中より涕流れ、口より涎吐を出し、尿道水道より常に尿

尿を出し、及び諸の毛孔より汗流れて不淨なり。偈に説くが如し。

種種の不淨の物、身内に充滿し

常に流出して止まず、漏囊に物を盛るが如し

是を自相不淨と名く。究竟不淨とは、是身は若し火に投すれば則ち灰と爲り、若し虫食

すれば則ち屎と爲り、地に在れば則ち腐れ壞れて土と爲り、水に在れば則ち降脹し、爛壞

し、或は水虫の爲に食はる。一切の死屍の中にて人身は最も不淨なり。不淨の法は九相の

中に當に廣く説くべし。説くが如くんば、

審諦に此身を觀するに、終は必ず死處に歸し

御し難くして反復無きは、恩に背ける小人の如し

是を究竟不淨と名く。復次に、是身の生ずる時、死する時、身に近づけらるる物、身を

安かゝる處は皆不淨爲り。香美の淨水も、百川の流に隨うて、既に大海に入れば、變じて

鹹苦と成るが如し。身の食噉する所の、種種の美味、好色、好香、細滑の上饌も、腹海の

中に入れば、變じて不淨と成る。是身は是の如く、生より終に至るまで、常に不淨有り、  
 甚だ患厭すべし。行者は是身を思惟するに、復不淨なり。若し少く常なる者有りとも雖も、  
 猶差ひて復無常なり。復不淨無常にして、少く樂き者有りとも雖も、猶差ひて復大いに苦なり。  
 是身は是れ樂苦の生ずる處なり。水の地より生じ、風の空より出で、火の木に因りて有る  
 が如く、是身も是の如く、内外の諸苦は皆身より出づ。内苦を老病死等と名け、外苦を刀  
 杖、寒熱、飢渴等と名く。此身有るが故に、是苦有り。問うて曰はく、「身は但是れ苦性な  
 るのみに非ず、亦身に從うて樂有り。若し身無くして意に隨はしめば、五欲は誰か當に受  
 くべき者ぞ。」答へて曰はく、「四聖諦の苦は、聖人は實に是れ苦なりと知る。愚夫は之を謂  
 ひて樂と爲す。聖は實に依るべく、愚惑は宜しく棄つべし。是身は實に苦なり、大苦を止  
 むるを以ての故に、小苦を以て樂と爲す。譬へば死すべき人の、刑罰を得て命に代ふれば、  
 甚だ大いに歡喜するが如し。罰は實に苦と爲すも、死に代るを以ての故に、之を謂ひて樂と  
 爲す。復次に、新苦を樂と爲すが故に、苦を苦と爲す。初め坐する時は樂なれども、久し  
 ければ則ち苦を生じ。初め行、立、臥するも亦樂にして、久しければ亦苦と爲るが如し。  
 屈申、俯仰、視向、喘息の苦は、常に身に隨ふ。初め受胎、出生より、死に至るまで、  
 樂時有ること無し。若し汝姪欲を受くるを以て樂と爲さば、姪病重きが故に外の女色を求  
 め、之を得ること愈多ければ、患の至ること愈重し。疾病を患うて火に向ふが如し。  
 措で灸する當時は小しく樂なれども、大いに痛むこと轉深し。是の如く小樂も、亦是れ病の

因縁なり。故に有は是れ實樂無病に非ず、之を觀じて爲に慈愍を生ず。離欲の人の婬欲の者を釋するも、亦復是の如し、此狂惑の欲火の爲に燒かれ、多く受け多く苦むことを戀む。是の如き等の種種の因縁により、身苦の相と苦の因とを知る。行者は、身は、但是れ不淨、無常、苦の物なりと知るも、已むを得ずして之を養育す。譬へば父母の子を生むに、子は復樂暴なれども、已より生ずるを以ての故に、要す當に養育し成就すべきが如し。身には實に我無し。何を以ての故に。自在ならざるが故に。譬へば病風の人は、俯仰行來する能はず。咽を病んで寒る者は、語言する能はざるが如し。是を以ての故に身は自在ならざるを知る。人の物を有して意に隨つて取り用ふるも、身は爾るを得ざれば、自在ならざるが如し。故に審かに無我を知る。行者は是身を思惟すること、是の如し。不淨、無常、苦、空、無我なり」と。是の如き等の無量の過惡有り。是の如き等、種種に身を觀するは、是を身念處と名く。

【三八】次に受念處を解釋す。

是身念處の觀を得已りて、復思惟すらく「衆生は何の因縁を以ての故に、此身に貪著する。樂受の故なり、所以は何ん、内の六情と外の六塵との和合によるが故に、六種の識を生じ、六種の識の中より三種の受を生ず。苦受と樂受と不苦不樂受となり。是樂受は、一切衆生の欲する所、苦受は一切衆生の欲せざる所、不苦不樂受は、取らず棄てず」と。説くが如くんば、

若し惡を作す人及び出家、諸天、世人及び蟬動

一切十方五道の中は、樂を好んで苦を惡まざる無し

狂惑、顛倒、無智なるが故に、涅槃常樂の處を知らず

行者は是樂受を觀じ、實を以て之を知るに、樂あること無きなり、但樂の苦のみあり。

何を以ての故に。樂は實樂に名けば、顛倒有ること無ければなり。一切世間の樂受は皆顛

倒に従ひ、此は實なる者有ること無し。復次に、是樂受は、樂を求めんと欲すと雖も、能

く大苦を得。説くが如くんば

若し人海に入りて惡風に遭へば、海浪颯々起つて黒山の如く

若し大陣鬪戰の中に入り、大嶮道、惡山の間を経れば

豪貴の長者も身を降り屈す、小人に親近するは色欲の爲なり

是の如き種種の大苦の事は、皆樂に著する貪心の爲の故なり

是を以ての故に、樂受は能く種種の苦を生ずるを知る。復次に、佛は三種の受に樂受有

りと説きたまふと雖も、樂は小なるが故に名けて苦と爲す。一斗の蜜は、之を大河に投ず

れば、則ち氣味を失ふが如し。問うて曰はく、「若し世間の樂は、顛倒の内縁の故に苦なら

ば、諸の聖人の禪定より生ずる無漏の樂は、應に是れ實樂なるべし。何を以ての故に。

此樂は、愚癡顛倒に従うて有らざるが故に。此は云何が是れ苦ならん。答へて曰はく、「是

は苦に非ざるなり。佛は、無常は即ち、是は苦なりと説きたまふと雖も、有漏法の爲の故に

苦と説きたまふ。何を以ての故に。凡夫の人は有漏法の中に於て心著すればなり。有漏

法は無常失壞なるを以ての故に苦を生ず。無漏法は心著せざるが故に、無常なりと雖も、憂悲苦惱等を生ずる能はず、故に名けて苦と爲さず。亦諸使に使はれざるが故なり。復次に、若し無漏の樂是れ苦ならば、佛は別に道諦を説きたまはざらん、苦諦に攝すればなり。問うて曰はく、二種の樂有り、有漏の樂と無漏の樂なり。有漏の樂は下賤弊惡にして、無漏の樂は上妙なり。何を以ての故に、下賤の樂の中に於て著を生じ、上妙の樂の中にて、而も著を生ぜざるや。上妙の樂の中には、著を生ずること多かるべし。金銀寶物の如きは、貪著すること重かるべし、豈草木と同じからんや。答へて曰はく、無漏の樂は上妙にして智慧多し。智慧多きが故に能く此著を離る。有漏の樂の中には、愛等の結使多し、愛を著の本と爲す。實智慧は能く離る。是を以ての故に著せざるなり。復次に、無漏の智慧は、常に一切の無常を觀す。無常を觀するが故に、愛等の諸の結使を生ぜず。譬へば羊の虎に近けば、好草美水を得と雖も、肥ゆること能はざるが如し。是の如く諸の聖人は、無漏の樂を受くと雖も、無常空を觀するが故に、染著の脂を生ぜず。復次に、無漏の樂は三昧十六、聖行を離れず、常に衆生相無し。若し衆生相有れば、則ち著心を生ず。是を以ての故に、無漏の樂は復上妙なりと雖も、而も著を生ぜず。是の如き種種の因縁により、世間の樂受は是れ苦なりと觀す。苦受を觀すること箭の如く、不苦不樂受も、無常壞敗の相なりと觀す。是の如くなれば則ち樂受の中に欲著を生ぜず、不苦不樂受の中に愚癡を生ぜず、是を愛念處と名く。

【七】次に心念處を釋す。

（七）行者は思惟すらく、樂を以ての故に身を食ふ、誰か是樂を受く」と。思惟し已りて、心に從うて受くるを知る。衆生の心は、狂顛倒の故に、而も此樂を受く。當に是心は無常、生滅の相にして、一念も住せず、樂を受くべき無しと觀すべし。人は顛倒を以ての故に、樂を受くるを得と謂へり。何を以ての故に。初に樂を受けんと欲する時、心に異を生ずると、樂生ずる時の心は異りて、各各相及ばず、云何が心、樂を受くと言はん。過去の心は已に滅するが故に樂を受けず。未來の心は生ぜざるが故に樂を受けず。現在の心は一念にして住すること疾きが故に樂を受くるを覺せず。問うて曰はく、「過去未來は樂を受くべからず。現在の心一念住する時、應に樂を受くべし。云何が受けずと云ふ。答へて曰はく、「我已に去ること疾きが故に、樂を受くるを覺せずと説けり。」復次に諸法は無常の相なるが故に住する時無し。若し心一念も住せば、第二念の時も亦住すべし。是は爲れ常住にして、滅相有ること無し。佛の説きたまふが如くんば、一切の有爲法には三相あり、住の中に亦滅相有り。若し滅無ければ、是れ有爲相なるべからず。復次に、若し法、後に滅有らば當に初已に滅有るを知るべし。譬へば人の新衣を著るに、初めて著る日に若し故からざれば、第二日も亦故かるべからず。是の如く乃至十歳なるも、應に常に新なるべく、故かるべからず。而も實には已に故し。當に新と俱に有れども、微に故ければ覺せず、故き事に已に成れば、方に乃ち覺知するを知るべきが如し。是を以ての故に、諸法は住時有ること無きを知る。云何が心住する時、樂を受くるを得んや。若し住する無くして、樂を受くと

【八】次に法念處を明す。

世尊、是事は然らず。是を以ての故に、實に樂を受くる者有ること無きを知る。但世俗の法は、諸心の相續するを以ての故に、謂ひて一相にして樂を受くと爲すのみ。問うて曰はく、「云何が一切の有爲法は無常なりと知るべき。答へて曰はく、「我先に已に説けり。今當に更に答ふべし。是有爲法は一切因縁に屬するが故に無常なり。先に無にして、今有なるが故に、今有にして、後無なるが故に無常なり。復次に、無常の相は常に有爲法に隨逐するが故に、有爲法は増損有ること無きが故に、一切の有爲法は相侵犯するが故に無常なり。復次に、有爲法には二種の老ありて、常に隨逐するが故に。一に將老、二に壞老なり。二種の死ありて、常に隨逐するが故に。一には自ら死し、二には他に殺さる。是を以ての故に一切の有爲法は皆無常なるを知る。有爲法の中に於て心の無常は最も得易し。佛の説きたまふが如くんば、凡夫人は或時は身の無常を知りて、心の無常を知る能はず。若し凡夫は身は有常なりと言ひ、猶差へば心を以て常となす、是れ大なる惑なり。何を以ての故に。身の住するは十歳二十歳にして、是心は日月時頃、須臾にして過ぎ去り、生滅して各異なり、念念停らず、生ぜんと欲して異に生じ、滅せんと欲して異に滅す。幻事の如く、實相は得べからず。是の如き無量の因縁の故に、心の無常なるを知る。是を心念處と名く。行者思惟すらく、「是心は誰にか屬し、誰か是心を使ふ」と、觀じ已るに主有るを見ず。一切の法は因縁和合の故に自在ならず、自在ならざるが故に自性無く、自性無きが故に我無し。若し我無くんば誰か當に是心を使ふべけん。問うて曰はく、「應に我有るべし。何を

以ての故に。心は能く身を使ひ、亦、應に我は能く心を使ふこと有るべし。譬へば國王は將を使ひ、將は兵を使ふが如し。是の如く應に我有りて心を使ひ、心有りて身を使ふべし。五欲の樂を受けんが爲の故なり。復次に、各各我心有るが故に、實に我有るを知る。若し但身心顛倒有るが故に我を計せば、何を以ての故に、他の身中に我を起さざん。是相を以ての故に各各我有るを知る。答へて曰はく、「若し心は身を使ひ、我は心を使ふ有らば、應に更に我を使ふ者有るべし。若し更に我を使ふ者有らば、是れ則ち無窮なり。又更に我を使ふ者有らば、則ち兩神有り。若し更に我無くんば、但我は能く心を使ひ、亦應に但心は能く身を使ふべし。若し汝心を以て神に屬せば、心を除けば則ち神は知る所無けん。若し知る所無くんば、云何が能く心を使はん。若し神に知るの相有らば、復心を用ひて何か爲ん。是を以ての故に、但心は是れ識相の故に、自ら能く身を使ひ、神を待たざるを知る。火性の能く物を焼くに、人を假らざるが如し。問うて曰はく、「火は焼く力を有すと雖も、人に非ずんば用ひず。心は識相有り」と雖も、神に非ずんば使はず。答へて曰はく、「諸法は相有るが故に有なり。是神は相無きが故に無なり。汝は氣息の出入、苦樂等を以て神の相と爲さんと欲すと雖も、是事は然らず。何を以ての故に。出入の息等は是れ身相にして、苦樂を受くる等は是れ心相なり、云何が身心を以て神相と爲ん。復次に、或時は火は自ら能く燒きて人を待たず。但名を以ての故に名けて人焼くと爲す。汝が論は負處に墮す。何を以ての故に。神は則ち是れ人、人を以て人に喩ふべからざればなり。又復汝は「各各

【九】四念處に就  
て性念處、共念處  
縁念處の三種を明  
す。

我心有るが故に、實に我有るを知る。若し但身心顛倒有るが故に我を計せば、何を以てか他の身中に我を起さざる」と言ふ。汝は有我無我に於て未だ了ぜず。而も問ふ、「何を以て若は色相、若は無色相、若は常、無常、有邊、無邊、去者、不去者有り、知者、不知者有り、作者、無作者有り、自在者、不自在者有り、是の如き等の我相は、皆不可得なり。上の我聞品の中に説くが如し。是の如き等の種種の因縁により、諸法は和合因縁の生にして、實法有り我有ること無しと觀す。是を法念處と名く。

是四念處に三種有り。性念處と共念處と縁念處となり。云何が性念處と爲す。身を觀するの智慧は是を身念處、諸受を觀するの智慧は是を受念處と名け、諸心を觀する智慧は是を心念處と名け、諸法を觀するの智慧は、是を法念處と名け、是を性念處と爲す。云何が共念處と名くる。身を觀するを首と爲し、因縁生の道の、若は有漏、若は無漏なる、是は身念處なり。受を觀じ、心を觀じ、法を觀するを首と爲し、因縁生の道の、若は有漏、若は無漏なる、是を受心法念處と名け、是を共念處と爲す。云何が縁念處と爲す。一切の色法、觸ゆる十入及び法入の少分は是を身念處と名け、六種の受なる、眼觸の受を生じ、耳、鼻、舌、身、意、觸の受を生ずる、是を受念處と名け、六種の識なる、眼、耳、鼻、舌、身、意識、是を心念處と名け、想業行業及び三無爲、是を法念處と名く。是を縁念處と名く。是性念處は、智慧性の故に無色にして不可見、無對、或は有漏、或は無漏なり。有漏

【四念處は六種善  
の中等】以下四念  
處の四句分別。

は有報、無漏は無報にして、皆有爲の因縁生なり、三世の攝、名の攝、外入の攝なり。慧を以て、有漏は是れ斷なるを知り、無漏は斷に非ざるを知り、有漏は是れ斷すべく、無漏は斷すべきに非ざるを知る。是修法はは無垢なり、是れ果にして亦有果なり。一切は受法に非ず、四大造に非ず。有上の法は有漏念處、是は無漏念處有り。是は有に非ず、皆是れ相應因なり。四念處は、六種善の中の一なる行樂善の分に攝し、行樂善の分は四念處を攝す。不善、無記漏の中に相攝せず。或は四念處有り有漏に非ず。或は有漏にして四念處に非ず。或は四念處有り亦有漏なり。或は四念處に非ず亦有漏に非ず。四念處有り、有漏に非ずとは、是れ無漏性の四念處なり。有漏にして四念處に非ずとは、有漏性の四念處を除き、餘殘の有漏分なり。四念處にして亦有漏法とは、有漏性の四念處なり。四念處に非ず、有漏法に非ずとは、無漏性の四念處を除き、餘殘の無漏法なり。無漏の四句も亦是の如し。其念處は、是共念處の中の身業口業は是を色と爲す、餘殘は色に非ず。一切不可見にして皆無對なり。或は有漏、或は無漏は皆有爲なり。有漏の念處は有報、無漏の念處は無報なり。因縁生は三世の攝にして、身口の業は色に攝せられ、餘殘は名に攝せられ、心意識は内入に攝せられ、餘殘は外入に攝せらる。慧を以て有漏は是れ斷なるを知り、無漏は斷に非ざるを知り、有漏は斷すべく無漏は斷すべきに非ざるを知る。皆の修法は皆無垢なり。是れ果にして亦有果なり。一切は受法に非ず、身口業は是れ四大造にして、餘殘は四大造に非ず、皆有上法有漏の念處なり。是に無漏の念處有り、是れ身口業及び心不相應の諸行

有るに非ず、是れ相應因に非ず、餘殘は是れ相應因なり。五善分は四念處を攝し、四念處は亦五善分を攝し、餘殘は相攝せず。不善無記は漏法に攝せず。或は四念處有り有漏に非ず。或は有漏にして四念處に非ず、或は四念處有り亦有漏なり。或は四念處に非ず亦有漏に非ず。四念處有り、有漏に非ずとは、無漏の四念處なり。有漏にして四念處に非ずとは、有漏の四念處を除きて、餘殘の有漏法なり。四念處有り亦有漏なりとは、有漏の四念處なり。四念處に非ず有漏に非ずとは、虚空の數緣盡き、非數緣盡くるなり。或は四念處有り無漏に非ず。或は無漏有り四念處に非ず。或は四念處有り亦無漏なり。或は四念處に非ず、無漏に非ず。四念處有り無漏に非ずとは、有漏の四念處なり。無漏有り四念處に非ずとは、三無爲法なり。四念處有り亦無漏なりとは、無漏の四念處なり。四念處に非ず無漏に非ずとは、有漏の四念處を除き、餘殘の有漏法なり。是れ緣念處なり。緣念處の中の一念處は是れ色にして、三念處は色に非ず。三は不可見なり、一は當に分別すべし。身念處に可見有り、不可見有り。可見とは一入、不可見とは九入及び一入の少分なり。三は無對なり、一は當に分別すべし。身念處の有對は十入、無對は一入の少分なり。身念處の有漏は十入及び一入の少分にして、無漏は一入の少分なり。受念處は有漏、意相應にして是れ有漏、無漏の意相應は是れ無漏なり。心念處も亦是の如し。法念處は有漏、相衆、行業は是れ有漏にして、無漏の相衆、行業及び無爲法は是れ無漏なり。三は是れ有爲なり、一は當に分別すべし。法念處の想衆と行業は是れ有爲にして、三無爲法は是れ無爲なり。不善の身念

處、及び善有漏の身念處は是れ有報にして、無記の身念處と及び無漏は是れ無報なり。受  
 念處、心念處、法念處も亦是の如し。三は因縁より生ず、一は當に分別すべし。法念處の  
 有爲は因縁より生じ、無爲は因縁より生ぜず。三は三世に攝せられ、一は當に分別すべし。  
 法念處の有爲は是れ三世に攝せられ、無爲は三世の攝に非ず。一念處は色に攝し、三は名  
 に攝す。一念處は内入に攝せられ、受念處、法念處は外入に攝せらる、一は當に分別すべ  
 し。身念處は、或は内入に攝せられ、或は外入に攝せらる。五の内入は是れ内入の攝なり。  
 五の外入、及び一入の少分は是れ外入の攝なり。慧を以て、有漏は是れ斷見にして、無漏  
 は斷見に非ず、有漏は斷すべく、無漏は斷すべきに非ざるを知る。修は當に分別すべし。  
 身念處は、善は應に修すべく、不善及び無記は修すべからず。受心念處も亦是の如し。法  
 念處は有爲の善法は修すべく、不善及び無記、及び數緣盡は修すべからず。垢は當に分別  
 すべし。身念處の隱沒は是れ垢にして、不隱沒は垢に非ず。受心法念處も亦是の如し。三  
 念處は是れ果にして亦有果なり。一は當に分別すべし。法念處は或は果にして、有果に非  
 ず、或は果にして亦有果なり。或は果に非ず、有果に非ず。數緣盡は是れ果にして、有果  
 に非ず。有爲の法念處は是れ果にして、亦有果なり。虚空の非數緣盡は是れ果に非ず、有  
 果に非ず。三は不受なり、一は當に分別すべし。身念處の身數に墮するは是れ受にして、  
 身數に墮せざるは受に非ず。三は四大造に非ず、一は當に分別すべし。身念處の九入、及  
 び二入の少分は四大造にして、一入の少分は四大造に非ず。三念處の有上の一は當に分別

【一〇】四念處について内外を分別す

すべし。法念處の有爲及び虚空非數緣蓋は是れ有上にして、涅槃は是れ無上なり。四念處は若は有漏にして是れ有、若は無漏にして是れ有に非ず。二念處は相應因にして、一念處は不相應因、一は當に分別すべし。受念處と心念處とは相應因にして、身念處は不相應因なり。法念處の想衆及び相應行業は是れ相應因にして、餘邊は是れ不相應因なり。四念處分を六善法に攝し、六善法を亦四念處分に攝す。不善分、無記分も亦是の如し、重に隨て相攝す。三漏を一念處分に攝し、一念處分を亦三漏に攝す。有漏を四念處分に攝し、四念處分を亦有漏に攝す。無漏を四念處分に攝し、四念處分も亦無漏に攝す。是の如き等の義は、千變の中に廣く説けり。

問うて曰はく、何等をか内身と爲し、何等をか外身と爲す。内外身の如きは皆已に攝し盡せり、何を以てか復内外身觀を説く。答へて曰はく、内を自身と名け、外を他身と名く。自身に二種有り。一には身内の不淨、二には身外の皮毛爪髮等なり。復次に、行者は死屍の變脹穢壞を觀じ、是相を取りて自ら身を觀す。亦此の如きの相、是の如きの事は、我未だ此法を離れず。死屍は是れ外身、行者は是れ内身なり。行者或時は端政の女人を見て、心審し、即時に其身の不淨を觀するが如し、是を外と爲す。自ら我身を知るも亦爾なり。是を内と爲す。復次に、眼等の五情を内身と爲し、色等の五塵を外身と爲す。四大を内身と爲し、四大造色を外身と爲す。苦樂の處を覺るを内身と爲し、苦樂の處を覺らざるを外身と爲す。自身及び眼等の諸根は、是を内身と爲し、妻子、財寶、田宅、所有の物は是を

外身と爲す。所以は何ん。一切の色法は、盡く是れ身念處なるが故に。行者は是内身の  
 淨にして常樂なる我有らんと求め、審かに悉く之を求むるも都て得べからず。先に觀  
 法を説くが如く、内を觀するに得べからず。外は或は當に有なるべきや。何を以ての故に。  
 外物は是れ一切衆生の著する處にして、外身觀の時亦不可得なればなり。復是念を作さく、  
 「我は内觀して得ず、外に或は有らんか」と、外觀も亦復得ず。自ら念すらく、「我は或は  
 誤錯ならん。今當に總じて内外を觀すべし」と。内を觀じ、外を觀ず、是を別相と爲し、  
 一時に俱に觀する、是を總相と爲す。總觀し、別觀するに、了に得べからず、所觀已に竟  
 る。問うて曰はく、「身念處は内外を得べく、諸受は是れ外入の攝なり。云何が内受外受有  
 るを分別する。」答へて曰はく、「佛説きたまはく、「二種の受有り、身受と心受となり」と。  
 身受は是れ外、心受は是れ内なり。復有五識相應の受は是れ外にして、意識相應の受は是  
 れ内なり。十二入の因縁の故に諸受生ず。内の六入分に生ずる受は、是を内と爲し、外の  
 六入分に生ずる受は、是を外と爲す。麁受は是を外と爲し、細受は是を内と爲す。二種の苦  
 有り、内苦と外苦なり。内苦に二種有り、身苦と心苦となり。身苦とは身痛頭痛等の四百  
 四種の病、是を身苦と爲す。心苦とは憂愁、瞋怖、嫉妬、疑、是の如き等、是を心苦と爲  
 す。二苦の和合せるは是を内苦と爲す。外苦に二種有り、一には王者、己に勝れるもの、  
 惡賊、師子、虎狼、毒蛇等の逼害なり。二には風雨、寒熱、雷電、礮礮等なり。此二種の  
 苦を名けて外受と爲す。樂受、不苦不樂受も亦是の如し。

【二】次に四生勤に就いて明す。

復次に内法を緣するは、是を内受と爲し、外法を緣するは是を外受と爲す。復次に、一百八受は是を内受と爲し、餘殘は是れ外受なり。問うて曰はく、「心は内入に攝すと雖も、外法を緣するが故に、名何が外心を觀すと云ふ。」答へて曰はく、「心は内入に攝すと雖も、外法を緣するが故に、名けて外心と爲し、内心を緣するが故に、是を内心と爲す。意識は是れ内心にして、五識は是れ外心なり。心を攝して禪に入るは、是れ内心にして、散亂の心は、是れ外心なり。内の五蓋、内の七覺に相應する心は、是を内心と爲し、外の五蓋、外の七覺に相應する心は、是を外心と爲す。是の如き等の種種に内外を分別するは、是を内外心と爲す。問うて曰はく、「法念處は是れ外入に攝す、云何が内法を觀すと云ふ。」答へて曰はく、「受を除ける餘の心數法の、能く内法を緣する心數法は、是れ内法にして、外法を緣するの心數法、及び無爲と心不相應行は是を外法と爲す。復次に、意識所緣の法は是を名けて法と爲す。佛の説きたまふが如くんば、「緣に依りて生ずる意識、是中受を除きて、餘の心數法は是を内法と爲し、餘の心、不相應行、及び無爲法は、是を外法と爲す」と。

四正勤に二種有り。一には性正慧、二には共正慧なり。性正慧とは、道の爲の故に四種の精進有り。二種の不善法を遮し、二種の善法を集む。四念處觀の時、若し懈怠の心有れば、五蓋等の煩惱心を覆ひ、五種の信等の善根を離るる時、不善法若し已に生ぜば、斷ぜんが爲の故に、未だ生ぜざれば、生ぜしめざらんが故に、精進を勤む。信等の善根、未だ生ぜざれば、生ぜんが爲の故に、已に生ぜば、増長せしめんが爲の故に、精進を勤む。

【二三】次に四如意足に就いて明す。

精進の法は四念處に於て多きが故に、正勤と名くるを得。問うて曰はく、「何を以ての故に七種の法の中に於て、此四を正勤と名け、後の八を正道と名け、餘は正と名けざる。」答へて曰はく、「四種の精進は、心、勇んで發動し、錯誤を畏るるが故に正勤と言ひ、道に趣く（二二）の法を行するが故に、邪法に墮するを畏るるが故に、正道と言ふ。性とは四種の精進の性なり。共とは四種の精進の性を首と爲す。因縁の生ずる道は、若是有漏、若は無漏、若は有色、若は無色なり。上に説くが如し。

四正勤を行する時、心小しく散ずるが故に、定を以て心を攝するが故に、如意足と名く。譬へば美食の少鹽なれば、則ち味無く、鹽を得れば則ち味足ること、意の如くなるが如し。又人の二足有りて、復好馬好車を得れば、意の如く至る所あるが如し。行者も是の如し、四念處の實智慧、四正勤の中の正精進を得れば、精進の故に智慧増多けれども定力小弱なり。四種の定を得て心を攝するが故に、智と定の力等しく願ふ所皆得るが故に、如意足と名く。問うて曰はく、「四念處、四正勤の中に已に定有り。何を以ての故に如意足と名けざる。」答へて曰はく、「彼に定有りと雖も、智慧精進力多くして、定力弱きが故に、行者は意の如く願を得ず。四種の定は欲を主と爲して定を得、精進を主と爲して定を得。定の因縁は道を生ず、若是有漏、若は無漏の心を主と爲して定を得、思惟を主と爲して定を得。定の因縁は道を生じ、若是有漏、若は無漏の、善の五衆を共にするを、名けて共如意と爲し、欲主等の四種の定を、名けて性如意と爲す。四正勤四如意足は、性念處、共念處の中

【二】次に五根、五力量に七覺分に就いて明す。

に、廣く分別して説くが如し。

五根とは信道及び助道の善法は、是を信根と名け、行者は是道を行じ、道法を助くる時、懇求して息まざるは、是を精進根と名け、道及び助道の法を念じて、更に他念無きは、是を念根と名け、一心に念じて散ぜざるは、是を定根と名け、道及び助道法の爲に、無常等の十六行を觀するは、是を慧根と名け、是五根增長して煩惱の爲に壞られざる、是を名けて力と爲す。五根の中に説くが如し。是五根五力は、行業の中の攝にして、常に共に相應し、心行心數法に隨ひ、心と共に生じ、心と共に住し、心と共に渡す。若し是法有れば心必ず正定に墮し、若し是法無ければ、心邪定に墮す。七覺は先に義を説くが如し。問うて曰はく、「先に義を説くと雖も、阿毘曇の法を以て説けるに非ず。」答へて曰はく、「今當に更に説くべし。四念處の如きは、義は是れ七覺分なり。無色、不可見、無對、無漏、有爲、因緣生、三世の攝、名の攝、外人の攝なり。慧もて見を闡するに非ず、闡すべからずと知る。修法は無垢の法なり。是れ果にして、亦有果なり。受法に非ず、四念處に非ず、有上法、非有、相應因なり。二善分は七覺分に攝し、七覺分は二善分に攝す。不善、無記法、有漏法は相攝せず。無漏の二分は七覺分を攝し、七覺分は無漏の二分を攝す。是の如き等の種種は、千難の中に廣く説くが如し。

【四】次に八正道を釋す。

八聖道分は先に説くが如し。正見は是れ智慧なり。四念處、慧根、慧力、擇法覺の中ニに説くが如し。正思惟は、四諦を觀する時、無漏心と相應し、思惟を動發して覺知し壽量

す。正方便は、四正慧、精進根、精進力、精進覺の中に説くが如し。正念は、念根、念力、念覺の中に説くが如し。正定は、如意足、定根、定力、定覺の中に説くが如し。正語、正業、正命は、今當に説くべし。四種の邪命を除きて、口業に攝す。無漏の智慧を以て除捨し、餘の口の邪業を離るるは、是を正語と名く。正業も亦是の如し、五種の邪命を無漏の智慧を以て除捨し、是を離るるを正命と爲す。問うて曰はく、「何等か是れ五種の邪命なる。」答へて曰はく、「一には若し行者利養の爲の故に詐りて異相奇特を現す。二には利養の爲の故に自ら功德を説く。三には利養の爲の故に、吉凶を占相し、人の爲に説く。四には利養の爲の故に高聲に威を現じ、人をして畏敬せしむ。五には利養の爲の故に稱説し、得る所の供養を以て人心を動かし、邪因縁にして活命するが故に、是を邪命と爲す。是れ八正道に三分有り。三種を戒分と爲し、三種を定分と爲し、二種を慧分と爲す。慧分と定分の分別は、先に説くが如し。戒分は今當に説くべし、戒分は是れ、色性、不可見、無對、無漏、有爲、無報、因縁生、三世の攝、色の攝なり。名の攝、外入の攝に非ず、慧もて見を斷するに非ず、斷すべからざるを知る。修法は無垢法なり。是れ果にして、亦有果なり。受法、四大造、有上法、有法に非ず。相應因なり。一善分を三正に攝し、三正を一善分に攝し、不善、無記漏、有漏は相攝せず。無漏の一法は三正に攝し、三正も亦無漏の一法に攝す。是の如き等の種種の分別は、阿毘曇に廣く説くが如し。是三十七品は初禪地には具に有り、未到地の中には三十六有り、喜覺を除く。第二禪の中にも亦三十六有り、正行

【二五】大乘に於ける三十七品の義は初に四念處を明す

を除く。禪の中間、第三第四禪には三十五有り、喜覺を除き、正行を除く。三無色定の中には三十二有り、喜覺、正行、正語、正業、正命を除く。有頂の中には二十二有り、七覺分、八聖道分を除く。欲界の中の二十二も亦是の如し。是を聲聞法の中に分別の義と爲す。

問うて曰はく、「摩訶衍に説く所の三十七品の義は云何。」答へて曰はく、「菩薩摩訶薩は、四念處を行じて是内身を觀するに、無常苦にして、病の如く癘の如く、焰聚は敗壞し、不淨は充滿して、九孔より流出し、是を行則と爲す。是の如き身の惡露を觀するに、一として淨處無し。骨節、肉漬、筋縛、皮裏は先世の有漏業の因縁より受け、今世には沐浴、華香、衣服、飲食、臥具、醫藥等の成ずる所なり。車の兩輪有りて、牛力の牽くが故に、能く至る所有るが如く、二世の因縁を以て身車を成じ、識牛に牽かれて周旋往反す。是身は四大和合して造り、水沫聚の虚しくして堅固なること無きが如く、是身は無常にして、久しくして必ず破壞し、是身相は身中に得べからず、亦外に在らず、亦中間に在らず。身は自ら覺せず、無知、無作なること、牆壁瓦石の如く、是身中に定んで身相無く、是身を作る者有ること無く、亦作らしむる者無し。是身は先際、後際、中際、皆得べからず。八萬の尸虫無量の諸病、及び諸の飢渴、寒熱有り、刑殘等は常に此身を惱す。菩薩摩訶薩は身を觀することは是の如く、我身に非ず、亦他の有に非ず、自在を得ず、作及び所有りて是身を作るに有らず。身相は空にして、虚妄の因縁より生じ、是身は假に有りて、本業の

因縁に屬すと知る。菩薩は自ら念すらく、「我は身命を惜むべからず、何を以ての故に。是身相は、合せず散ぜず、來らず去らず、生ぜず滅せず、依倚せざればなり。身を循りて觀するに、是身は我無く、我所無きが故に空なり。空の故に男女等の諸相無し。相無きが故に願を作さず」と。是の如く觀すれば、無作智門に入るを得て、身の無作なるを知る。無作とは、但諸法の因縁和合より生ずるなり。是諸の因縁の是身を作す者も、亦虚妄顛倒によるが故に有なり。是因縁の中にも亦因縁の相無く、是因縁生にも亦生相無し。是の如く思惟すれば、是身は本より以來、生相有ること無きを知り、是身は無相の故に取るべき無く、無生の故に相無く、無相の故に生無くして、但誑へる凡夫の故に、名けて身と爲すを知る。菩薩は是の如く、身の實相を觀する時、諸の染欲著心を離れ、常に念を撃けて身に在き、身を循りて觀す。是の如きを名けて、菩薩の身念處と爲す。外身を觀じ、内外身を觀するも亦是の如し。菩薩は云何が諸受を觀する。内受を觀するに、是受到三種有り、若は苦、若は樂、若は不苦不樂なり。是諸受は從來する所無く、滅して至る所無く、但虚誑顛倒の妄想より生じ。是報果は先世の業因縁に屬す。是菩薩は、是の如く諸受を求むるに、過去に在らず、未來に在らず、現在に在らず。是諸の受は、空にして我無く、我所無く、無常破壞の法なりと知る。是三世の諸受は、空、無相、無作なりと觀じて、解脱門に入り、亦諸の受の生滅を觀じ、亦諸受の不合、不散、不生、不滅を知り、是の如くにして不生門に入る。諸受の不生を知るが故に無相なり、無相の故に不生なり。是の如く知

り已りて、心を縁中に繫ぐれば、若し苦樂、不苦不樂來ること有るも、心は受けず著せず、  
 依止を作さず、是の如き等の因縁によりて諸受を觀する、是を受念處と名く。外受を觀じ、  
 内外受を觀するも亦是の如し。菩薩は云何が心念處を觀する。菩薩は内心を觀するに、是  
 内心に三相有り。生、住、滅なり。是念を作さく、「是心は從來する所無く、滅して亦至る  
 所無く、但内外の因縁の和合より生ず。是心は、定んで實相有ること無く、亦實の生住滅  
 有ること無く、亦過去未來現在世の中に在らず。是心は内に在らず、外に在らず、中間に  
 在らず。是心は、亦生無く相無く、亦生ずる者無く、生ぜしむる者無し。外に種種の雜な  
 る六塵の因縁有り、内に顛倒の心相有りて、生滅相續するが故に、強ひて名けて心と爲す」  
 と、是の如く心中には、實に心相は不可得なり。是心性は不生不滅にして、常に是れ淨相  
 なり。客塵煩惱の相著しきが故に、名けて不淨心と爲す。心は自ら知らず、何を以ての  
 故に。是心は、心相空なるが故なり。是心は本來實法有ること無し。是心は諸法と合する  
 無く、散ずる無く、亦前際、後際、中際無く、無色、無形、無對なり。但顛倒虛誑にして  
 生ず。是心は空にして、我無く、我所無く、無常無實なり。是を隨順心觀と名く。心相  
 の無生を知れば無生法の中に入る。何を以ての故に。是心は無生、無性、無相なればなり。  
 智者は能く知り、智者は是心生滅の相を觀すと雖も、亦實の生滅の法を得ず、垢淨を分別  
 せず、而も心の清淨を得。是心、清淨なるを以ての故に、客塵煩惱の爲に染せられず。  
 是の如き等にして内心を觀じ、外心を觀す。内外心を觀するも亦是の如し。菩薩は云何が

法念處を觀する。一切法を觀するに、内に在らず、外に在らず、中間に在らず、過去未來にあらず、現在世の中に但因縁和合より妄に生ずと見ゆ。實に定まれること有る無く、是法は是れ誰が法といふこと有る無く、諸法の中に法相は不可得なり。亦法は若は合し、若は散ずる無く、一切の法は所有無きこと虚空の如く、一切の法は虚誑なること幻の如く、諸法の性は淨にして相汚染せず、諸法は受くる所無し、諸受は所有無ければなり。諸法は所知無し、心心數の法は虚誑なるが故に。是の如く觀する時、法の若は一相、若は異相有るを見ず、一切の法は、空無我なりと觀ず。是時に念を作さく、「一切の諸法は、因縁生の故に自性有る無し、是を實空と爲す。實空の故に相有る無し。相有る無きが故に無作なり。無作の故に、法の若は生じ、若は滅し、住するを見ず。是智慧の中より、無生法忍の門に入る。爾時、諸法の生滅を觀すと雖も、亦無相門に入る。何を以ての故に。一切の法の諸相を離るるは、智者の解する所なればなり。是の如く觀する時、心を縁中に繫け、諸法の相に隨順す。身受心法を念ぜざれども、是四法の處る所無きことを知る、是を内の法念處と爲す。外の法念處、内外の法念處も亦是の如し。四正勤、四如意足も亦是の如く分別し、空にして處る所無きを觀すべし。

【六】次に五根並に五力を明す。

云何が菩薩所行の五根と爲す。菩薩摩訶薩は、五根を觀じ、五根を修す。信根とは一切の法は因縁より生じ、顛倒妄見の心の生ずること旋火輪の如く、夢の如く、幻の如しと信じ、諸法は不淨、無常、苦、空、無我にして、病の如く、癩の如く、刺の如く、災變敗

壞すと信じ、諸法は所有無く、空奪もて小兒を誑すが如しと信じ、諸法は過去に在らず、未來に在らず、現在に在らず、從來する所無く、滅して至る所無しと信じ、諸法は空、無相、無作、不生、不滅なりと信じ、無信相、無相にして、持戒、禪定、智慧、解脫、解脫知見を信じ、是信根を得るが故に復退轉せず、信根を以て首と爲して、善く持戒に住し、持戒に住し已りて、信心、不動不轉にして、一心に業果報に依るを信じ、諸の邪見を離れて、更に餘語を信せず、但佛法のみを受け、衆僧を信じて實道の中に住し、直心柔軟にして能く忍び、通達、無礙、不動、不壞にして、力自在なるを得、是を信根と名く。精進根とは、晝夜常に精進を行じて五蓋を除却し、五根を攝護し、諸の深き經法を得んと欲し、知らんと欲し、行ぜんと欲し、誦せんと欲し、讀まんと欲し、乃至聞かんと欲す。若し諸の不善惡法起れば、疾く滅せしめ、未だ生ぜざる者は生ぜざらしめ、未だ生ぜざる諸の善法を生せしめ、已に生ぜるは増廣ならしめ、亦不善法を惡まず、亦善法を愛せず、等しく精進を得、直に進み轉ぜずして正精進を得、定心の故に名けて精進俱と爲す。念根とは、菩薩は常に一心に念じて、布施、持戒、禪定、智慧、解脫を具足せんと欲し、身口意の業を淨めんと欲し、諸法の生滅、住異を、智中に常に一心に念じ、一心に苦集滅道を念じて、根、力、覺道、禪定、解脫、生滅、入出を分別し、一心に諸法の不生、不滅、無作、無説を念じて、無生の智慧を得て、諸の佛法を具足するを爲すが故に、一心に念じて、聲聞、辟支佛の心に入るを得しめず、常に念じて忘れず。是の如く諸法の甚深清淨

の觀行を得るが故に、是の如き自在の念を得。是を念根と名く。定根とは、菩薩は善く  
 定相を取り、能く種種の禪定を生じ、了了に定門を知り、善く入定を知り、善く住定を知  
 り、善く出定を知り、定に於て不著、不味にして、依しを作さず、善く縁する所を知り、  
 善く壞縁を知り、自在に諸の禪定に遊戯し、亦無緣定を知り、他語に隨はず、専ら禪定  
 に隨はず、行自在にして、出入無礙なる、是を名けて定根と爲す。慧根とは、菩薩は苦を  
 盡す爲に、聖智慧を成就す、是智慧を諸法を離ると爲し、涅槃と爲す。智慧を以て、一切  
 の三界は無常にして、三衰三毒の火の爲に焼ると觀じ、觀じ已りて、三界の中に於て智慧  
 にも亦著せず、一切の三界を轉じて、空、無相、無作、解脫門と爲し、一心に佛法を求む  
 るを爲すこと、頭然を救ふが如し。是菩薩の智慧は、能く壞る者無く、三界に於て依る所  
 無く、隨意の五欲の中に於て心常に之を離れ、慧根力の故に無量の功德を積聚し、諸法の  
 實相に於て、利く入りて無疑無難に、世間に於て憂ふる無く、涅槃に於て喜ぶ無く、自在  
 の智慧を得るが故に名けて慧根と爲す。菩薩は是五根を得て、善く衆生の諸根の相を知り、  
 染欲の衆生根を知り、離欲の衆生根を知り、瞋恚の衆生根を知り、亦瞋恚を離るるの衆生  
 根を知り、愚癡の衆生根を知り、亦愚癡を離るるの衆生根を知り、惡道に墮せんと欲する  
 の衆生根を知り、人中に生ぜんと欲するの衆生根を知り、天上に生ぜんと欲するの衆生根  
 を知り、鈍なる衆生根を知り、利なる衆生根を知り、上中下の衆生根を知り、罪の衆生根  
 を知り、罪無きの衆生根を知り、逆順の衆生根を知り、常に、欲界、色界、無色界に生

する衆生根を知り、厚き善根、薄き善根の衆生根を知り、正定、邪定、不定の衆生根を知り、輕躁なる衆生根を知り、持重の衆生根を知り、慳貪なる衆生根を知り、能く捨する衆生根を知り、恭敬の衆生根を知り、恭敬ならざる衆生根を知り、淨戒、不淨戒の衆生根を知り、瞋恚と忍辱との衆生根を知り、精進と懈怠との衆生根を知り、亂心、攝心、愚癡、智慧の衆生根を知り、無畏と有畏との衆生根を知り、増上慢と不増上慢との衆生根を知り、正道と邪道との衆生根を知り、根を守ると、根を守らざるとの衆生根を知り、聲聞を求むる衆生根を知り、辟支佛を求むる衆生根を知り、佛道を求むる衆生根を知り、衆生根を知る中に於て、自在方便力を得るが故に、名けて根を知ると爲す。菩薩は是五根を行じ、增長して能く煩惱を破し、衆生を度し、無生法忍を得、是を五力と名く。復次に、天魔外道も沮壞する能はず。是を名けて力と爲す。

【七】次に七覺分に就いて釋す。

七覺分とは、菩薩の一切法に於て憶はず念ぜざる、是を念覺分と名け、一切法の中に善法、不善法、無記法を求索するに不可得なり、是を擇法覺分と名け、三界に入らずして、諸界の相を破壞する、是を精進覺分と名け、一切の作法に於て、著業を生ぜず、憂喜の相を壞するが故に、是を喜覺分と名け、一切法の中に於て、心縁を除きて得べからざるが故に、是を除覺分と名け、一切法は常定の相にして、亂れず定ならずと知る、是を定覺分と名け、一切法に於て、著せず、依止せず、亦是捨心を見ざる、是を捨覺分と名く。菩薩は七覺分の空を觀することは是の如し。問うて曰はく、「此七覺分は何を以てか略說する。」答

へて曰はく、七覺分の中の、念と慧と精進と定とは上に已に廣く説けり。三覺は今當に説くべし。菩薩は喜覺分を行じ、是喜の實に非ざるを觀す。何を以ての故に。是喜は因縁より生じ、作法、有法、無常法にして、著すべきの法なり。若し著を生ぜば、是れ無常相なり。變壞すれば則ち憂を生ず。凡夫人は顛倒を以ての故に心著す。若し諸法の實に空なるを知れば、是時、心悔い、「我は則ち虚誑を受く。人の暗中に飢渴に逼られて、不淨物を食し、晝日、觀知して、乃ち其非を覺るが如し」と。若し是の如く觀じて、實智慧の中に於て喜を生ずる、是を眞の喜と爲す。是眞の喜を得て、先づ身の塵を除き、次に心の塵を除き、然る後に一切の法相を除き、快樂を遍身心中に得る、是を除覺分と爲す。既に喜を得て、諸の觀行を除捨す。謂ゆる無常觀、苦觀、空無我觀、生滅觀、不生不滅觀、有觀、無觀、非有非無觀、是の如きの戲論を盡く捨す。何を以ての故に。無相、無緣、無作、無戲論にして常寂滅なるは、是れ實の法相なればなり。若し捨を行ぜざれば便ち諸諍有り。若し有を以て實と爲さば、則ち無を以て虚と爲し、若し無を以て虚と爲さば、則ち有を以て虚と爲し、若し非有非無を以て實と爲さば、則ち有無を以て虚と爲し、實に於ては愛著し、虚に於ては悲憎して、憂喜の處を生ず。云何が捨せざらん。是の如きの喜を得て除捨し、七覺分は則ち具足し滿つるなり。

【二八】次に八正道に就いて明す。

八正道分とは、正見、正方便、正念、正定は、上に已に説けり。正思惟は今當に説くべし。菩薩は諸法の空にして、所得無きに於て住し、是の如きの正見の中に、正思惟の

相を觀じ、一切の思惟は、皆是れ邪思惟なりと知る。乃至涅槃を思惟し、佛を思惟するも皆亦是の如し。何を以ての故に。一切の思惟分別を斷ずる、是を正思惟と名くればなり。諸の思惟分別は、皆從うて不實なり。虛誑顛倒の故に分別有り。思惟の相は皆無なり。菩薩は是の如きの正思惟の中に住し、是れ正是れ邪と見ず、諸の思惟分別を過ぐ、是を正思惟と爲す。一切の思惟分別は、皆悉く平等なり。悉く平等なるが故に心著せず、是の如き等を名けて、菩薩の正思惟の相と爲す。正語とは、菩薩は一切の語の皆從うて虚妄不實にして、顛倒して相を取り、分別を生ずるを知る。是時、菩薩は是念を作さく、「語の中に語相無く、一切の口業、滅して諸の語の實相を知る、是を正語と爲す。是諸の語は皆從來する所無く、滅して亦去る所無し」と。是菩薩は正語を行ずるの法あり、諸の所語は皆實相の中に住して説く。是を以ての故に諸經に、「菩薩は正語の中に住し、能く清淨の口業を作し、一切の語言の真相を知り、所説有り」と雖も邪語に墮せず」と説けり。正業とは、菩薩は一切の業は、邪相虚妄無實にして、皆作相無しと知る。何を以ての故に。一業として、定相を得べきこと有る無ければなり。問うて曰はく、「若し一切の業皆空ならば、云何が佛は、一布施等は是れ善業、殺害等は是れ不善業、餘事の動作は是れ無記の業なり」と説きたまふ。」

答へて曰はく、「諸業の中に尙一有る無し。何に況んや三有らんや。何を以ての故に。如し行ふ時已に過ぐれば、則ち去業無く、未だ至らざるも亦去業無く、現在去る時も亦去業

無ければなり。是を以ての故に去業無し。問うて曰はく、「已に過ぐる處は則ち應に無かるべく、未だ到らざる處も亦應に無かるべきも、今去る處は應に是れ去る有るべし。」答へて曰はく、「今去る處も亦去る無し。何を以ての故に。去業を除きて、今去る處は得べからず、若し去業を除きて、今去る處を得べくんば、是中に應に去ること有るべし。而も然らず、今去る處を除きては則ち去業無く、去業を除きては則ち今去る處無し。是を相與共に縁するが故に、但今去る處に去る有りと言ふを得ず。復次に、若し今去る處に去業有らば、去業を離れて、應當に今去る處有るべく、今去る處を離れて、應當に去業有るべし。問うて曰はく、「若し爾れば何の答か有る。」答へて曰はく、「一時に二の去業有るが故なり。若し二の去者有れば、則ち二の去る者有り。何を以ての故に。去る者を除けば則ち去る無く、若し去る者を除けば今去る處は得べからず。今去る處無きが故に亦去る者無し。復次に、去らざる者も亦去らざるが故に去業無し。若し去者不去者を除きては、更に第二の去者無し。問うて曰はく、「不去者の去らざるは、應に爾るべし。去る者を、何を以てか去らずと言ふ。」答へて曰はく、「去業を除きて去る者は得べからず。去る者を除きて去業は得べからず。是の如き等の一切の業の空なる、是を正業と名く。諸の菩薩は一切諸業の平等に入り、邪業を以て惡を爲さず。正業を以て善を爲さず、所作無く正業を作さず、邪業を作さざる、是を實智慧と名く、即ち是れ正業なり。復次に、諸法の等しき中には、正無く邪無し。如實に諸業を知り、如實に己を知り、造らず休まず、是の如きの智人は、常に正業有りて邪

業無し、是を名けて菩薩の正業と爲す。正命とは、一切の資生活命の具は、悉く正にして邪ならず。不戲論の智の中に住して、正命をも取らず、邪命をも捨てず、亦正法の中にも住せず、亦邪法の中にも住せず、常に清淨智の中に住し、平等の正命に入り、命を見ず、非命を見ず、是の如きの實智慧を行す、是を以ての故に正命と名く。若し菩薩摩訶薩は、能く是三十七品を觀じ、聲聞辟支佛地を過ぐるを得、菩薩位の中に入り、漸に一切種智を成ずるを得。

大智度論釋初品中三三昧義第三十二

卷第二十

龍樹菩薩造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什詔を奉じて譯す

【圖】空三昧、無相三昧、無作三昧、四禪、四無量心、四無色定、八背捨、八勝處、九次第定、十一切處。

【一】三十七品の次に三三昧等の八種の法を説くに就いて。

問うて曰はく、「何を以ての故に三十七品に次いで、後に八種の法を説く。」答へて曰はく、「三十七品は是れ涅槃に趣くの道なり。是道を行じ已れば、涅槃の城に到るを得。涅槃の城に三門有り。謂ゆる空と無相と無作となり。已に道を説く、次に應に到る處の門を説くべし。四禪等は是れ開門を助くるの法なり。」復次に、三十七品は、是れ上妙の法にして、欲界の心は散亂なり。行者は何の地、何の方便に依りてか得ん。當に色界、無色界の諸の禪定に依り、四無量心、八背捨、八勝處、九次第定、十一切處の中に於て、心を試み、柔軟自在に意に隨ふや不やを知得すべし。譬へば、御者の馬を試み、曲折意に隨ひ、然る後に陣に入るが如し。十一切處も亦是の如し、少許の青色を觀取して、一切の物を視、皆能く青ならしむ。一切の黄、一切の赤、一切の白も皆是の如し。復次に八勝處の縁の中に於て自在なり。初二の背捨は身の不淨を觀じ、第三の背捨は身を觀じて還つて淨な

らしめ、四無量心は、慈は衆生の皆樂むを觀じ、悲は衆生の皆苦むを觀じ、喜は衆生の皆喜べるを觀じ、捨は是れ三心、但衆生を觀じて憎愛有る無し。復次に二種の觀有り、一に得解觀、二には實觀なり。實觀とは、是三十七品なり。實觀を以て得難きが故に、次第に得解觀を説く。得解觀の中には心柔軟にして、實觀を得易し。實觀を用ひて、三涅槃門に入るを得。

【二】以下三三昧を明す。初に空三昧に就いて。

【諸法は因縁より生じ等】以下は無相三昧を明す。

問うて曰はく、「何等か空涅槃門なる」答へて曰はく、「諸法は我我所無く空無し、諸法は因縁の和合より生じ、作者有る無く、受者有る無しと觀ず、是を空門と名く。復次に、空門は忍智品の中に説くが如し。是れ我我所無きを知り已らば、衆生云何が諸法の中に於て心著する。行者は思惟して是念を作さく、「諸法は因縁より生じて實法有る無く、但相のみ有り。而も諸の衆生は、是相を取りて我我所に著す。我今當に是相實に得べき有りや不やを觀ずべし」と。審かに之を諦觀するに都て不可得なり。若し男相女相、一異相等、是相實に皆不可得なり。何を以ての故に。諸法は我我所無きが故に空なり。空の故に男無く女無く、一異等の法は、我我所の中の名字にして、是れ一、是れ異なり。是を以ての故に男女一異の法は實に不可得なり。復次に、四大及び造色の虚空を圍むが故に、名けて身と爲す。是中、内外入の因縁和合して、識種の身を生じ、是種和合するを得て、種種の事、言語、坐起、去來を作す。空の六種の和合の中に於て、強ひて名けて男と爲し、強ひて名けて女と爲す。若し六種是れ男ならば、應に六男有るべし、一を以て六と作し六を一

と作すべからず。亦地種の中に於て、男女の相無し。乃至識種にも亦男女の相無し。若し各各の中に無なれば、和合の中にも亦無なり。六狗の各各師子を生ずる能はず、和合するも亦生ずる能はざるが如し。無性なるが故なり。』問うて曰はく、『何を以ての故に男女無き。神は別有る無しと雖も、即ち身は分別して、男女の異有り。是身は身分を離るるを得ず、身分も亦身を離るるを得ず。身分の足を見て、有分法有るを知り、名けて身と爲すが如し。是等は身分にして、身に異なる、身は即ち是れ男女の相なり。』答へて曰はく、『神已に先づ破すれば身相も亦壞す。今當に重ねて説くべし。若し是有分有るを身と名けば、各各の分の中に、具足して有りと爲し、身は分分に諸分の中に有りと爲す。若し諸分の中に具足して身有らば、頭の中に應に脚有るべし。何を以ての故に。頭中に具足して身有ればなり。若し身は分分に諸分の中に在らば、是身は分と異なること有る無し。分有る者は諸分に隨ふが故なり。問うて曰はく、『若し是等の身分は、有分と異らば是れ答有り。今是等の身分は、有分の身法と異らざるが故に答無し。』答へて曰はく、『若し是等の身分と有分と異ならずんば、頭は即ち是れ足なり。何を以ての故に。二事は是れ身と異らざるが故に。又身分は多く、有分は一なり。多を一と作し、一を多と作すべからず。復次に、因無きが故に果は無なり。果無きが故に因無きに非ず。身分と有分と異らずんば、果無きが故に因も無なるべし。何を以ての故に。因果一なるが故に。若し一、若し異の中に身を求むるに得べからず、身は無なるが故なり。何の處にか男女有らん。若し男女有らば、即ち是れ身と

爲んや、異身と爲んや。身は則ち不可得なり。若し餘法に在らば、餘法は色に非ざるが故に、男女の別無し。但二世の因縁和合して、顛倒の心を以ての故に、謂ひて男女と爲す。説くが如くんば、

俯仰、屈伸、立、去來、視瞻、語言の中に實無し

風は識に依るが故に所作有り、是識滅すれば相は念念に無なり

彼此男女は我心有り、智慧無きが故に妄に有りと見る

骨鎖相連り皮肉覆ひ、機關の動作すること木人の如し

内に實無しと雖も外人に似たり、譬へば洋金を水中に投ずるが如く

亦野火の竹林を焚くが如く、因縁合するが故に聲有りて出づ

是の如き等の諸相は先に説くが如し。此中に應に廣く説くべし。是を無相門と名く。無

作とは、既に無相を知れば都て無所作なり。是を無作門と名く。

問うて曰はく、是三種は、智慧を以て、空を觀じ、無相を觀じ、無作を觀ず。是智慧は

何を以ての故に三昧と名くる。』答へて曰はく、『是三種の智慧は、若し定中に住せざれば、

則ち是れ狂慧にして多く邪疑に墮し、能く作す所無けん。若し定中に住せば、則ち能く諸

の煩惱を破し、諸法の實相を得。復次に、是道は一切世間と異り、世間と相違す。諸の

聖人は、「定中に在りて、實相を得」と説けり、是れ狂心の語に非ず。復次に、諸の禪定

の中には、此三法無し、名けて三昧と爲さず。何を以ての故に。還つて退失し、生死に墮

【無作とは等】 無  
作三昧の釋。  
【三】 空等の三を  
三昧といひ、三解  
脱門といふに就い  
て。

するが故に。佛の説きたまふが如し。

能く淨戒を持つを比丘と名け、能く空を觀するを定を行するの人と名け

一心に常に勤めて精進する者、是を眞實行道の人と名く

諸樂の中に於て第一なる者、諸の渴愛を斷じ狂法を滅し

五衆の身及び道法を捨す、是を常樂の涅槃を得と爲す

是を以ての故に三解脱門を、佛は説いて名けて三昧と爲したまへり。問うて曰はく、「今

何を以ての故に解脱門と名くる。」答へて曰はく、「是法を行する時に解脱を得、無餘涅槃に

到る。是を以ての故に解脱門と名く。無餘涅槃は是れ眞の解脱なり。身心の苦に於て脱す

るを得るは、有餘涅槃にして爲作門なり。此三法は涅槃に非すと雖も、涅槃の因なるが故

に名けて涅槃と爲す。世間に因中に果を説き、果中に因を説く有り。是空と無相と無作と

は是れ定性なり。是定相は心心數法に應じて、隨うて身業口業を行す。此中に起る心不

相應の諸行、和合するを皆名けて三昧と爲す。譬へば玉來れば必ず大臣營從有るが如く、

三昧は王の如く、智慧は大臣の如く、餘法は營從の如し。餘法の名は説かずと雖も、必ず

應に有るべし。何を以ての故に。定力は獨り生ぜず、獨り所作有る能はざるが故に。是諸

法は共に生じ、共に住し、共に滅し、共に事を成じ、互相に利益す。是空三昧に二行有り。

一には五受衆は、一相も異相も無きが故に、空なりと觀ず、二には我と我所の法は得べか

らざるが故に、無我なりと觀ず。無相三昧に四行有り。涅槃を觀じて、種種の苦盡くるが

故に、名けて盡と爲し、三毒等の諸の煩惱の火滅するが故に、名けて滅と爲し、一切の法の中に第一なるが故に、名けて妙と爲し、世間を離るるが故に、名けて出と爲す。無作三昧に二行有り。五受業は因縁生と觀するが故に無常なり。身心は悩むが故に苦なり。五受業の因を觀するに、四行有り、煩惱、有漏業和合して能く苦果を生ずるが故に名けて集と爲す。六因を以て苦果を生ずるが故に名けて因と爲す。四縁は苦果を生ずるが故に名けて縁と爲す。多からず少からざる等の因縁は、果を生ずるが故に名けて生と爲す。五不受業の四行を觀するに、是八聖道分は能く涅槃に到るが故に道なり。顛倒せざるが故に正なり。一切聖人の去處なるが故に迹なり。愛見の煩惱も遮らざるが故に必到なり。是三解脱門は、九地の中の四禪、未到地、禪中間、三無色に在り、無漏の性なるが故に。或は説く者有り。三解脱門は一向に無漏なり。三三昧は或は有漏、或は無漏なり。是を以ての故に三昧と解脱との二名有り一と。是説の如きは十一地に在り、六地と三無色と欲界と及び有頂地となり。若し有漏は繋つて十一地に在り、無漏とは不繋なり。喜根、樂根、捨根、相應、初學は欲界の中に在り。成就は色無色界の中に在り。是の如き等の成就と不成就と修と不修とは、阿毘曇の中に廣く説くが如し。

【四】三解脱門を説く所以。

復次に、二種の空義有りて、一切の法は空なりと觀ず、謂ゆる衆生空と法空となり。衆生空は上に説くが如し。法空とは諸法の自相は空なり。佛、須菩提に告げたまふが如きは「色と色相とは空なり、受、想、行、識、識相は空なり」と。

問うて曰はく、「衆生は空にして、法は空ならざるは是れ信すべし。法の自相の空なるは是れ信すべからず。何を以ての故に。若し法の自相空なれば、則ち生無く滅無し、生無く滅無きが故に罪無く福無し。罪無く福無きが故に何んが學道を用ひん。」答へて曰はく、「法空有るが故に罪福有り、若し法空無くんば罪福有るべからず。何を以ての故に。若し諸法實に自性有らば、則ち壞すべき無く、性相は因縁より生ぜず。若し因縁より生ずれば、便ち是れ作法なり。若し法性は是れ作法ならば則ち破すべし。若し法性は作るべく、破すべしと言はば、是事は然らず。性は不作法に名け、因縁を待ちて有らず。諸法に自性有り、自性有れば則ち生ずる者無し、性は先より有なるが故なり。若し生無ければ則ち滅無く、生滅無きが故に罪福無し。罪福無きが故に、何んが學道を用ひん。若し衆生に眞性有らば、則ち能く害する無く、能く利する無し、自性定まるが故なり。是の如き等の人は、則ち恩義を知らず、業の果報を破る。法空の中にも、亦法空の相無し、汝は法空を得て心著するが故に、是難を生ず。是法空は、諸佛憐愍の心を以て、愛結を斷じ、邪見を除かん爲の故に説きたまへり。復次に、諸法の實相は能く諸苦を滅す、是れ諸の聖人の眞實の行處なり。若し是法空に性有らば、一切の法空を説く時、云何が亦自ら空ぜん。若し法空の性無くんば、汝何の難する所か有らん。是二空を以て、能く諸法の空を觀じ、心諸法を離るるを得、世間は虚誑にして幻の如しと知る。是の如く空を觀じ、若し是諸法の空相を取らば、是因縁より憍慢等の諸の結使を生じて言はく、「我能く諸法の實相を知る」と。

是時應に無相門を學すべし、空相を取るを減するが故に、若し無相の中に於て戲論を生ぜば、分別して所作有らんと欲し、は無相に著す。是時復自ら思惟すらく、「我は謬錯を爲す。諸法の空無相の中に、云何が相を得、相を取りて戲論を作さん。是時應に空無相に隨ふべし、身口意を行じて所作あるべからず。應に無作相を觀じ、三毒を滅すべし。身口意の業を起すべからず。三界の中に生身を求むべからず」と、是の如く思惟する時、還りて無作の解脫門に入る。是三解脱門は、摩訶衍の中には是れ一法なり。行の因縁を以ての故に三種有りと説く。諸法は空なりと觀する、是を空と名け、空の中に於て相を取るべからず、是時空轉するを無相と名け、無相の中に所作有りて、三界に生ずるを爲すこと有るべからず、是時無相轉するを無作と名く。譬へば城に三門有り、一人の身は、一時に三門より入るを得ず、若し入るには、則ち一門よりするが如し。諸法の實相は是れ涅槃城なり。城に三門有り、空と無相と無作となり。若し入空門に入りて是空を得ず、亦相を取らずんば、是人は直に入りて、事を辨するが故に二門を須ひず。若し是空門に入り、相を取りて是空を得ば、是人に於ては名けて門と爲さず、通塗更に塞れり。若し空相を除かば、是時は無相門より入る。若し無相の相に於て、心著して戲論を生ぜば、是時無相の相を取るを除きて、無作門に入る。阿毘曇の義の中には、是空解脱門は苦諦を緣じ、五衆を攝す。無相解脱門は一法を緣じ、謂ゆる數縁盡く、無作解脱門は三諦を緣じ、五衆を攝す。摩訶衍の義の中には、是三解脱門は諸法の實相を緣じ、是三解脱門を以て、世間は即ち是れ涅

【五】次に四禪を釋す。

槃と觀ず。何を以ての故に。涅槃は空無相無作にして、世間も亦是の如くなればなり。問  
 ろて曰はく、『經に説くが如くんば、涅槃は一門なり、今何を以てか三と説く。』答へて曰は  
 く、『先に已に説けり、法は一なりと雖も而も義に三有り。』復次に、應に度すべき者に三  
 種有り。愛多き者、見多き者、愛と見と等しき者なり。見多き者には爲に空解脫門を説く。  
 一切の諸法を見るに、因縁より生じて自性有る無し。自性有る無きが故に空なり、空の故  
 に諸見滅す。愛多き者には爲に無作解脫門を説く。一切法を見るに無常苦にして、因縁よ  
 り生ずと見已りて、心に愛を厭離して、即ち道に入るを得。愛と見と等しき者には爲に無  
 相解脫門を説く。是男女等の相は無なりと聞くが故に愛を斷じ、一異等の相は無なるが故  
 に見を斷ず、佛は或は一時に二門を説き、或は一時に三門を説きたまふ。菩薩は應に遍く  
 學して、一切の道を知るべきが故に三門を説き、更に説きて餘事を行はんと欲するが故に、  
 三解脫門の義を略説す。  
 (五) 四禪に二種有り、一には淨禪、二には無漏禪なり。云何が淨禪と名くる。有漏禪の五衆  
 是れなり。云何が無漏と名くる。無漏の五衆なり。是れ四禪の中に攝する所の身口業なり。  
 是れ色法の餘殘の非色法にして、一切不可見無對なり。或は有漏或は無漏なり。有漏とは  
 善有漏の五衆にして、無漏とは無漏の五衆なり。皆是の有漏有漏なる者は色界繫にして、  
 無漏は不繫なり。禪は身業、口業、及び心不相應に攝す。諸行は是れ心に非ず。心數法に  
 非ず、心相應に非ず。禪は受業、想業、及び相應行業に攝す。是心數法も亦心相應なり。

禪は心意識に攝す。但心なり。四禪は或は隨心行に有りて受相應に非ず。或は受相應にして隨心行に非ず。或は隨心行にして亦受相應なり、或は隨心行にも非ず、受相應にも非ず。隨心行にして受相應に非ずとは、四禪を、身業、口業、隨心行と心不相應の諸行、及び受に攝す。受相應にして隨心行に非ずとは、四禪を心意識に攝す。隨心行にして亦受相應とは、四禪を想衆及び相應行業に攝す。隨心行に非ず、亦受相應に非ずとは、四禪の中に攝する、隨心行と心不相應諸行とを除き、餘殘の心不相應なり。諸の行と想と行相應も亦是の如し。是四禪中の三禪は、隨覺行に非ず、亦觀相應に非ず、初禪は或は隨覺行有りて觀相應に非ず、或は觀相應にして隨覺行に非ず、或は隨覺行有り亦觀相應なり、或は隨覺行に非ず、觀相應に非ざる有り。隨覺行にして觀相應に非ずとは、初禪を身業、口業、及び隨覺行、心不相應の諸行、及び觀に攝す。觀相應にして隨覺行に非ずとは、謂はく、覺なり。隨覺行にして亦觀相應とは、覺觀に相應する諸の心心數の法なり。隨覺行に非ず、亦觀相應に非ずとは隨覺行心不相應諸行を除きて、餘殘の心不相應諸行なり。四禪は皆因縁有り、亦因縁に與す、四禪の中の初禪は或は次第にして、次第縁に與るに非ず、或は次第にして、亦次第縁に與り、或は次第に非ず、亦次第縁に與るに非ず。次第にして亦次第縁に與るとは、過去現在の心、心數の法なり。次第に非ず亦次第縁に與らずとは、未來世に生ぜんと欲する心、心數法を除きて、餘殘の未來世の中の心、心數の法、身業、口

【二〇】 菩薩が空法の  
の中に  
禪を行ずる  
所以。

業及び心不相應諸行なり。第二第三禪も亦是の如し。第四禪は次第にして次第縁に與らずとは、未來世の中に生ぜんと欲する、心心數の法、及び無想定にして、若は生じ、若は生ぜんと欲す。次第にして、亦次第縁に與るとは、過去現在の心、心數法なり、次第に非ず、亦次第縁に與るに非ずとは、未來世の中に生ぜんと欲する心、心數法を除きて、餘殘の未來世の心、心數法なり。心の次第、心不相應諸行を除きて、餘殘の心不相應の諸行、及び身業、口業なり。四禪の中に身業、口業、心不相應の諸行の縁に與ると、縁に非ざると、餘殘の亦是縁じ、亦是縁に與るを攝す。是四禪は亦是増上縁、亦是増上縁に與す。是の如き等は阿毘曇分の中に廣く分別す。菩薩は禪方便及び禪相、禪支を得るは、禪波羅蜜の中に、已に廣く説けり。

問うて曰はく、「是般若波羅蜜の論議の中には、但諸法の相は空なりと説く、菩薩は云何が空法の中に於て、能く禪定を起すや。」答へて曰はく、「菩薩は諸の五欲及び五蓋は、因縁より生じて自性無く空にして所有無きを知り、之を捨つること甚だ易し。衆生は顛倒の因縁の故に、此少弊の樂に著して、而も禪中の深妙の樂を離る。菩薩は衆生の爲の故に大悲心を起し、禪定を修行して心を縁中に繫け、五欲を離れ、五蓋を除き、大喜の初禪に入り、覺觀を滅し、心を攝して深く内清淨に入り、微妙の喜を得て第二禪に入る。深喜の散定なるを以ての故に一切の喜を離れ、遍滿の樂を得て第三禪に入る。一切の苦樂を離れ、一切の憂喜及び出入の息を除き、清淨微妙の捨を以て、而も自ら莊嚴して、第四禪に

入る。是菩薩は、諸法は空無相なりと知ると雖も、衆生の知らざるを以ての故に禪相を以て衆生を教化す。若し實に諸法の空有らば、是を名けて空と爲さず、亦五欲を捨つべからず、而も禪を得れば捨も無く得も無きが故に、今諸法の空相も亦得べからず。是難を作して、「若し諸法空ならば、云何が能く禪を得ん」と言ふべからず。復次に、是菩薩は、以て相を取り愛著せざるが故に、禪を行す。人の業を服して、以て病を除かんと欲するに、以て美とせざるが如し。戒を清淨にし、智慧を成就せんが爲の故に禪を行す。菩薩は一向の禪の中に於て大慈を行じ、空を觀じ、禪に於て依止する所無く、五欲の麁誑顛倒を以ての故に細微妙の虚妄の法を以て治す。譬へば毒は能く諸毒を治する有るが如し。

大智度論釋初品中四無量義第三十三

【七】次に四無量心を明す。

(七) 四無量心とは慈、悲、喜、捨なり。慈は衆生を愛念するに名け、常に安隱の樂事を求め、以て之を饒益す。悲は衆生を愍念するに名け、五道の中に種種の身苦と心苦とを受く。喜は衆生をして樂に従ひ、歡喜を得しめんと欲するに名く。捨は三種の心を捨つるに名く。但衆生を念するに、憎まず愛せず、慈心を修するは、衆生の中の瞋覺を除かん爲の故なり。悲心を修するは、衆生の中の憍覺を除かんが爲の故なり。喜心を修するは、悦樂ならざるを除かんが爲の故なり。捨心を修するは、衆生の中の愛憎を除かんが爲の故なり。

【八】今四無量心を別に立つるに就いて明す。

(八) 問うて曰はく、「四禪の中に已に四無量心、乃至十一切處有り。今何を以ての故に別に説く。」答へて曰はく、「四禪の中に皆有りと雖も、是法は若し別に名字を説かずんば、則ち其功德を知らず。譬へば囊中の寶物は、開きて出さずんば、則ち人の知らざるが如し。若し大福德を得んと欲する者には爲に四無量心を説き、色を患厭すること牢獄に在るが如くんば、爲に四無色定を説き、緣中に於て自在を得る能はず、意に隨うて所縁を觀するものには、爲に八勝處を説き、若し道を遮る有りて通達するを得ざれば、爲に八背捨を説き、心調柔ならず、禪より起ち、次第に禪に入る能はざれば、爲に九次第定を説き、一切の緣、遍く照すを得るも、意に隨うて解を得る能はざれば、爲に十一切處を説く、若し十方の衆生を念じて、樂を得しむる時、心數法の中に生ずる法を名けて慈と爲す、是れ慈に相應する受と想と行と識との衆にして、是法は身業、口業、及び心不相應諸行を起し、是法の和合するを、皆名けて慈と爲す。名けて慈と爲すが故に、是法生ずれば、慈を以て主と爲す。是故に慈のみ名を得。譬へば一切の心心數法の如きは、皆是れ後世の業因緣なりと雖も、而も但思のみ名を得。作業の中に於て、思は最も力有るが故なり。悲、喜、捨も亦是の如し。是慈は色界に在りては、或は有漏、或は無漏、或は斷すべく、或は斷すべからず。亦根本禪の中、亦是禪中間に在りては、三根相應して、苦根憂根を除く。是の如き等は阿毘曇に分別して説けり。衆生の相を取るが故に有漏なり。相を取り已りて諸法の實相に入るが故に無漏なり。是を以ての故に、無盡意菩薩の問の中に説くらく、「慈に三種有り、一に

【九】四無量心を修するに就いて。衆生縁を解す。

は衆生縁、二には法縁、三には無縁なり」と。

(九)と問うて曰はく、「是四無量心は云何が行ぜん。答へて曰はく、「佛處處の經の中に説きたま

ふが如し。「比丘有り、慈相應の心を以て、慈悲無恨無く、怨無く憍無く、廣大無量にし

て、善く慈心を修し、解を得て遍満す。東方世界の衆生も慈心にして、解を得て遍満し、

南西北方、四維上下、十方世界の衆生の悲、喜、捨相應の心を以てするも亦是の如し」と。

慈相應の心とは慈は心數法に名け、能く心中の憤濁、謂ゆる瞋恨慳貪等の煩惱を除く。譬

へば淨水の珠を濁水の中に著けば、水、即ち清きが如し。悲恨無しとは、衆生の中に於て、

若は因縁有り、若は因縁無くして瞋り、若は惡口、罵言、殺害、劫奪せんと欲する、是を

瞋と名け、時節を待ち、處を得て、有する所の勢力もて、當に害を加ふべき、是を恨と名

く。慈を以て此二事を除くが故に瞋恨無しと名く。怨無く憍無しとは、恨は即ち是れ怨の

初の嫌を恨と爲し、恨久しうして怨と成り、身口業に害を加ふる、是を憍と名く。復次に、

初めて瞋結を生ずるを名けて瞋と爲し、瞋増長し、籌量し、著持して、心中未だ決了せ

ざる、是を恨と名け、亦是れ怨と名く。若し心已に定りて畏忌する所無き、是を憍と名く、

慈心の力を以て除捨て、此三事を離るる、是を瞋無く恨無く怨無く、憍無しと名く。此

れ無瞋無恨無怨無憍なり。佛は是を以て慈心を讚歎したまふ。一切衆生は皆苦を畏れて樂

に貪著す。瞋は苦の爲の因縁にして、慈は是れ樂の因縁なり。衆生は是れ慈三味を聞き、能

く苦を除き、能く樂を與ふるが故に一心に勤めて精進して、是三味を行す。是を以ての故

に、無瞋無恨無怨無惱なり。廣大無量とは、一大心を分別するに三名有り、廣は一方に名  
 け、大は高遠に名け、無量は下方及び九方に名く。復次に、下は廣と名け、中は大と名け、  
 上は無量と名く。復次に、四方の衆生の心を縁するは是を廣と名け、四維の衆生の心を縁  
 する、是を大と名け、上下方の衆生の心を縁するは是を無量と名く。復次に、瞋恨の心を  
 破る。是を廣と名け、怨心を破る、是を大と名け、惱心を破る、是を無量と名く。復次に、  
 一切の煩惱心、小人の所行は小事を生ずるが故に、名けて小と爲し、復次より小なるが故  
 に、瞋恨怨惱と名け、是中小の小を破るは、是を廣大無量と名く。所以は何ん。大の因縁  
 は、常に能く小事を破するが故に。廣心とは罪を畏れ、地獄に墮するを畏るるが故に、心  
 中の惡法を除く。大心とは福德の果報を信樂するが故に、惡心を除く。無量心とは涅槃を  
 得んと欲するが爲の故に惡心を除く。復次に、行者は持戒清淨の故に是心廣く、禪定を  
 具足するが故に是心大いに、智慧を成就するが故に是心無量なり。是慈心を以て得道の聖  
 人を念ずるは、是を無量心と名け、無量の法を用ひて聖人を分別するが故に、諸天及び人  
 の尊貴の處を念ずるが故に、名けて大心と爲し、諸餘の下賤の衆生及び三惡道を念ずる、  
 是を廣心と名け、愛する所の衆生の中に於て、慈念廣くして、念に於て己るを以ての故  
 に、名けて廣心と爲し、慈念の中の人を以て、是を大心と名け、怨憎を慈念して、其功德  
 多きを以ての故に無量心と名く。復次に狹縁心の爲の故に名けて廣と爲し、小縁心の爲の  
 故に名けて大と爲し、有量心の爲の故に名けて無量と爲す。是の如き等は義を分別す。善

【二〇】次に法縁と無縁との解。

修とは是慈心牢固にして、初めて慈心を得るも、名けて修と爲さず。但、愛念するの衆生の中に非ず、但好き衆生の中に非ず、但己を益する衆生の中に非ず、但一方の衆生の中に非ざるを名けて善修と爲す。久しく行ずれば得ること深く、愛樂愛憎及び中の三種の衆生は、正等にして異なる無し、十方五道の衆生の中にて、一慈心を以て之を視ること、父の如く母の如く、兄弟姉妹子姪知識の如くし、常に好事を求め、利益安隱なるを得しめんと欲し、是の如きの心、遍く十方の衆生の中に滿つ。是の如きの慈心を衆生縁と名け、多くは凡夫人の行處、或は有學の人の未だ漏を盡さざる者に在り。

法縁を行すとは、諸の漏盡の阿羅漢、辟支佛、諸佛、是諸の聖人は、吾我の相を破し、一異の相を滅するが故に、但因縁の相續に從うて、諸欲を生ずるを觀じ、以て衆生を慈念する時、和合の因縁の相續より但空のみを生ずとす。五業は即ち是れ衆生なり。是五衆を念するに、慈念を以てす。衆生は是法の空なるを知らず、而も常に一心に樂を得んと欲す。聖人は之を愍み、意に隨うて樂を得しむ、世俗の法の爲の故に名けて法縁と爲す。無縁とは、是慈は但諸佛のみ有り。何を以ての故に。諸佛の心は、有爲無爲の性中に住せず、過去世未來現在世に依止せず、諸縁は實ならず、顛倒虛誑なりと知りたまふが故に、心に所縁無きなり。佛は、衆生の是諸法實相を知らざるを以て五道に往來し、心諸法に著して、分別し取捨し、是諸法實相の智慧を以て、衆生をして之を得しめたまふ。是を無縁と名く。譬へば貧人に給賜するに、或は財物を與へ、或は金銀寶物を與へ、或は如意眞珠

を與ふるが如し。衆生縁、法縁、無縁も亦復是の如し。是を略して慈心の義を説くと爲す。悲心の義も亦是の如し、憐愍の心を以て遍く十方の衆生の苦を觀じて、是念を作さく「衆生は愁むべし、是をして種種の苦を受けしむる莫れ」と。無瞋、無恨、無怨、無惱の心、乃至十方も亦是の如し。問うて曰はく、「三種の衆生有り。樂を受くる有り、諸天及び人の少分の如し。苦を受くる有り、三惡道及び人中の少分の如し。不苦不樂を受くる有り、五道の中の少分なり。云何が慈を行する者は一切衆生皆樂を受くと觀じ、悲を行する者は、一切衆生は皆苦を受くと觀する。」答へて曰はく、「行者は是慈無量心を學せんと欲する時、先づ願を作さく、「願くは諸の衆生をして種種の樂を受けしめん」と。樂を受くる人の相を取り、心を攝して禪に入り、是相漸漸に増廣して、即ち衆生は皆樂を受くと見る。譬へば火を鑽るに先づ軟草、乾牛屎を以てすれば、火勢轉大にして、能く大なる濕木を燒くが如し。慈三昧も亦是の如く、初めて慈願を生ずる時は、唯諸の親族知識に及ぼし、慈心轉廣くして、怨親同等に皆樂を得るを見る。是れ慈禪定の増長し成就せるが故なり。悲、喜、捨の心も亦是の如し。問うて曰はく、「悲心の中には、苦を受くる人の相を取り、喜心の中には喜を受くる人の相を取る。捨心の中には何等の相を取る。」答へて曰はく、「不苦不樂を受くる人の相を取るなり。行者は是心漸漸に増廣するを以て、盡く一切の不苦不樂を受くるを見る。」問うて曰はく、「是三種の心の中には應に福德有るべし。是捨心は、衆生の不苦不樂に於て、何等の饑益か有る。」答へて曰はく、「行者は是念を作さく、「一

【二】喜と樂との別に就いて。

切の衆生は、樂を離るる時は苦を得、苦の時は即ち是れ苦なり。不苦不樂を得れば、則ち安隱なり」と、是を以て饒益す。行者は慈喜心を行じて、或時は貪著の心生じ、悲心を行じて、或時は憂愁の心生ず。是食と憂とを以ての故に心亂る。是捨心に入りて、此貪憂を除く。貪憂除くが故に名けて捨心と爲す。

問うて曰はく、「悲心と捨心とは別有るを知るべし。慈心は衆生をして樂ならしめ、喜心は衆生をして喜ばしむ。樂と喜と何等の異がある。」答へて曰はく、「身の樂を樂と名け、心の樂を喜と名く、五識相應の樂を樂と名け、意識相應の樂を喜と名く。五塵の中に生ずる樂を樂と名け、法塵の中に生ずる樂を喜と名く。先づ樂の順を求めて、衆生をして樂に従ふを得しめ、因りて衆生をして喜を得しむ。人の貧人を憐愍して、先づ寶物を施す、是を樂と名け、後實買せしめて、五欲の樂を受くるを得しむ、是を喜と名く。復次に、欲界の樂を願うて、衆生をして得しむ、是を樂と名け、色界の樂を願うて、衆生をして得しむ、是を喜と名く。復次に、欲界の中の五識相應の樂、初禪の中の三識相應の樂、三禪の中の一切の樂は、是を樂と名け、欲界及び初禪の意識相應の樂、二禪の中の一切の樂は、是を喜と名く。鹿なる樂を樂と名け、細なる樂を喜と名く、因の時を樂と名け、果の時を喜と名く。初めて樂を得る時は、是を樂と名け、心を觀じて内に樂相を發し、外に歌舞踊躍を現す、是を喜と名く。譬へば初めて藥を服する時は、是を樂と名け、藥の發して身に遍する時は、是を喜と名くるが如し。問うて曰はく、「若し爾れば何を以てか、二心を和合して

【三】捨心を行ずる所以。

一無量と作さずして、分別して二法と爲す。答へて曰はく、「行者は初め心未だ攝せず、未だ深く衆生を愛する能はざるが故に、但樂を興へ、心を攝して、深く衆生を愛するが故に喜を興ふ。是を以ての故に、樂を先にして喜を後にす。問うて曰はく、「若し爾らば何を以てか慈喜と次第せざる。答へて曰はく、「慈心を行する時、衆生を愛すること兒子の如く、樂を興へんと願うて、慈三昧を出すが故に、衆生の種種の苦を受くるを見て深く愛心を發し、衆生を憐愍して深く樂を得しむ。譬へば父母は常に子を愛すと雖も、若し病を得ると急なれば、是時愛心轉重きが如し。菩薩も亦是の如く、悲心に入りて衆生の苦を觀じ、憐愍の心生じて便ち深き樂を興ふ。是を以ての故に悲心は中に在り。」

問うて曰はく、「若し是の如く深く衆生を愛せば、復何を以てか捨心を行する。答へて曰はく、「行者は是の如く觀じて、常に衆生を捨てず、但念じて是三種の心を捨つ。何を以ての故に。餘法を妨げ廢するが故に。亦是慈心を以て、衆生をして樂ならしめんと欲して、而も樂を得しむる能はず。悲心は衆生をして苦を離れしめんと欲するも、亦苦を離るるを得しむる能はず。喜心を行する時も、亦衆生をして大喜を得しむる能はず。此は但憶想のみにして、未だ實事有らず。衆生をして實事を得しめんと欲せば、當に發心して佛と作るべし。六波羅蜜を行じ、佛法を具足すれば、衆生をして是實樂を得しむ。是を以ての故に。是三心を捨てて、是捨心に入る。復次に、慈、悲、喜の心の如きは愛深きが故に、衆生を捨すること難く、是捨心に入るが故に易く出離するを得。問うて曰はく、「菩薩は六波羅蜜を行

じ、乃至成佛するも、亦一切衆生をして、苦を離れて樂を得しむる能はず、何を以ての故に、但是三心、憶想の心生じて實事有ること無しと言ふ。答へて曰はく、是菩薩は佛と作る時、一切衆生をして樂を得しむる能はずと雖も、但菩薩は大誓願を發し、は大願に従うて、大福徳の果報を得、大報を得るが故に、能く大いに凡夫を饒益す。聲聞は此四無量を行じ、自ら調へ、自ら利する爲にするが故に、亦但空しく衆生を念ず。諸の菩薩は是慈心を行じ、衆生をして苦を離れ樂を得しめんと欲し、此慈心の因縁に従うて、亦自ら福徳を作し、亦他をして福徳を作さしめ、果報を受くる時、或は轉輪聖王と作りて、饒益する所多し。菩薩は或時は出家して禪を行じ、衆生を引導し、教へて禪を行せしめ、清淨界に生じて、無量の心樂を受くるを得しめ、若し佛と作る時は、無量阿僧祇の衆生と共に、無餘涅槃に入る。空心の願に比するに、は餘是を大利と爲す。乃至舍利餘法もて饒益する所多し。復次に、若し一佛盡く一切衆生を度せば、餘佛は則ち復度する所無けん。是れ則ち未來の佛無く、佛種を斷ずと爲す。是の如き等の過有り、是を以ての故に一佛は一切衆生を度せず。復次に、是衆生の性は癡に従うて有り、實に定れる法に非ず。三世十方の諸佛も衆生を求むるに實に不可得なり、云何が盡く一切を度せん。問うて曰はく、若し空にして盡く度するを得べからずんば、少も亦俱に空なり、何を以てか少を度する。答へて曰はく、我は三世十方の佛は、一切衆生を求むるに、不可得なるが故に、度する所無しと言ふ。汝は難じて、何を以て盡く度せずと言ふ。是を負處に墮すと爲す。汝は負處

に於て自ら抜く能はず、而も難じて、衆生の中に多少の一種無し、何を以てか少を度すると言ふ。是を重ねて負處に墮すと爲す。復次に、諸法實相の第一義の中には、則ち衆生も無く、亦度も無し。但世俗の法を以ての故に、説いて度する有りと言ふ。汝は世俗の中に於て第一義を求む、是事は不可得なり。譬へば瓦石の中に珍寶を求むるも得べからざるが如し。復次に、諸佛の初發心より、乃至法盡くるまで、其中間に於て有する所の功德は、皆是れ作法にして限有り量有り、初有り後有るが故に、度する所の衆生も亦應に量有るべし、以て因縁果報有量の法に隨うて、盡く無量の衆生を度すべからず。大力士の弓の勢は大箭と雖も、遠くして必ず墮つるが如く、亦劫盡の大火は、三千世界を燒きて、明に照すこと無量にして久しと雖も必ず滅するが如し。菩薩の成佛も亦是の如し、初發意より精進の弓を執り、智慧の箭を用ひて深く佛法に入り、大いに佛事を作すも亦必ず當に滅すべし。菩薩は一切種智を得る時、身より光明を出して無量の世界を照し、一一の光明は變じて無量の身を化作して、十方無量の衆生を度し、涅槃の後、八萬四千の法聚舍利もて、衆生を化度するも、劫盡の火の照ること久しければ、亦復滅するが如し。問うて曰はく、汝は自ら光明變じて無量の身を化作し、十方無量の衆生を度すと言ふ。今何を以てか有量の因縁の故に、度する所も亦有量なるべしと言ふ。「答へて曰はく、「無量に二種有り。一には實の無量にして、諸の聖人も量る能はざる所なり。譬へば虚空涅槃衆生性の如し、是は量るべからず。二には法の量るべき有れども、但力の劣れる者は量る能はず。譬

へば須彌山大海水の斤兩滴數の多少の如く、諸佛菩薩は能く知れども、諸天世人は知る能はざる所なり。佛の衆生を度したまふも亦是の如く、諸佛は能く知りたまふも、但汝等が及ぶ所に非ざるが故に無量と言ふ。復次に、諸法は因縁の和合より生ずるが故に自性有ること無し。自性無きが故に常に空なり。常に空なる中には衆生は不可得なり。佛の説きたまふが如し。

我道場に坐する時、智慧は不可得なり

空拳にして小兒を誑し、以て一切を度す

諸法の實相は、則ち是れ衆生の相なり

若し衆生の相を取れば、則ち實道を遠離す

常に常空の相を念ずる、是人は道を行するに非ず

不生滅の法の中に、而も分別の相を作す

若し分別憶想は、則ち是れ魔の羅網なり

動ぜず依止せざる、是を則ち法印と爲す

問うて曰はく、若し樂に二分有り、慈心と善心となり。悲心もて苦を觀せば何を以てか

二分と作さざる。答へて曰はく、樂は是れ一切衆生の愛重する所なるが故に二分と作す。

是苦は愛せず念ぜざるが故に二分と作さず。又樂を受くる時は心軟なるも、苦を受くる時は

心堅なり。阿育王の弟、邊陀輪の如きは、七日、閻浮提の王と作り、上妙を得て自ら

【三】樂を分つも苦を分たざるに就いて。

四無量心を行ずるの果報を明す。

五欲を恣にす。七日を過ぎ已りて阿育王、問うて曰はく、「閻浮提の王として樂を受け歡暢せるや不や」答へて言はく、「我、見ず、聞かず、覺せず。何を以ての故に。旃陀羅、日に鈴を振り高聲に唱ふらく、七日の中已に爾許の日過ぎぬ、七日を過ぎ已りて汝當に死すべしと。我、是聲を聞いてより、閻浮提の王として上妙の五欲を作すと雖も、憂苦深きが故に聞かず見ず」と。是を以ての故に知りぬ、苦の力は多く樂の力は弱し。若し人遍身に樂を愛くるも一處に針を刺すを得ば、衆樂皆失して但刺の苦のみを覺えん。樂の力は弱きが故に二分すれば乃ち強く、苦の力は多きが故に一處にして足ること明なり。」  
(二四二)  
問うて曰はく、「是四無量心を行ずれば何等の果報をか得る。」答へて曰はく、「佛説きたまはく、「是慈三昧に入れば、現在に五の功德を得。火に入れども焼けず、毒に中れども死せず、兵刃も傷けず、終に横死せず、善神擁護す、無量の衆生を利益するを以ての故に是無量の福德を得、是有漏の無量心を以て衆生を縁するが故に清淨處に生ず、謂ゆる色界なり」と。問うて曰はく、「何を以ての故に佛は慈の報は梵天に上生すと説きたまふ。」答へて曰はく、「梵天は衆生の尊貴する所、皆聞き、皆識るが故に。佛は天竺國に在したまふ。天竺國には常に婆羅門多し。婆羅門の法の有ゆる福德は、盡く梵天に生ぜんと願ふ。若し衆生慈を行ずれば、梵天に生ずと聞けば、皆、多く信向して慈法を行ぜん。是を以ての故に慈を行ずれば、梵天に生ずと説く。復次に、淫欲を斷する天を皆名けて梵と爲し、梵と説けば皆色界を攝す。是を以ての故に淫欲を斷する法を名けて梵行と爲す。欲を離るる

を亦梵と名く。若し梵と説けば、則ち四禪四無色定を攝す。復次に、覺觀は滅し難きが故に土地の名を説かず、譬へば五戒の中の口律儀の如きは、但一種の不安語のみを説けば則ち三事を攝す。問うて曰はく、慈に五功德有り、悲、喜、捨は何を以てか功德有りと説かざるや。答へて曰はく、上の譬喩の如く、一を説けば則ち三事を攝す。此も亦是の如し、若し慈を説けば、則ち已に悲、喜、捨を説くなり。復次に、慈は是れ眞の無量なり。慈は王の如く、餘の三は隨從せる人民の如しと爲す。所以は何ん。先づ慈心を以て、衆生をして樂を得しめんと欲し、樂を得ざる者有るを見るが故に悲心を生じ、衆生をして苦心を離れて、法樂を得しめんと欲するが故に喜心を生じ、三事の中に於て憎無く愛無く、貪無く憂無きが故に捨心を生ずればなり。復次に、慈は樂を以て衆生に與ふるが故なり。『増一阿含』の中に、五の功德は悲心に有りと説き、『摩訶衍經』に於ても、處處に其功德を説けり。『明網菩薩經』の中に説くが如し。『菩薩は衆生の中に處して三十二種の悲を行じ、漸漸増廣して轉大悲を成ず。大悲は是れ一切の諸佛菩薩の功德の根本なり、是れ般若波羅蜜の母なり、諸佛の祖母なり。菩薩は大悲心を以ての故に般若波羅蜜を得、般若波羅蜜を得るが故に佛と作るを得』と。是の如き等の種種に大悲を讚す、喜捨の心は餘處にも亦讚する有り。慈悲の二事は徧く大なるが故に、佛は其功德を讀じたまふ。慈は以て功德の難きもの有るが故に、悲は以て能く大業を成ずるが故なり。問うて曰はく、佛は四無量の功德を説きたまひ、慈心は好く善を修し福を修するも過淨天に極り、悲心は好く善を修し福を修

するも虚空處に極り、喜心は好く善を修し、福を修するも識處に極り、捨心は好く善を修し福を修するも無所有處に極れり。云何が慈の果報は梵天上に生ずべしと言ふや。答へて曰はく、「諸佛の法は不可思議なり、衆生の度すべき者に隨うて是の如く説きたまふ。復次に、慈定より起ちて、第三禪に廻向するは易く、悲定より起ちて虚空處に向ひ、喜定より起ちて識處に入り、捨定より起ちて、無所有處に入るは易きが故なり。復次に、慈心もて衆生をして樂を得しめんと願ひ、此果報は自ら樂を受くべし。三界の中には遍淨を最も樂と爲すが故に、福は遍淨に極ると言ふ。悲心もて衆生の老病殘害苦行の者を觀て憐愍の心生ず、「云何が苦を離るるを得しめん」と、若は内苦を除かんとして外苦復來り、若は外苦を除かんとして内苦復來る。行者思惟すらく、「身有れば必ず苦有り、唯身無き有れば、乃ち苦無きを得、虚空は能く色を破す」と。是故に福は虚空處に極る。喜心もて衆生に心識の樂を與へんと欲す。心識の樂とは、心身を離るるを得て鳥の籠を出づるが如きなり。虚空處の心は身を出づるを得と雖も、猶心を虚空識處の無量に繋け、一切法の中に於て、皆心識有りて、識自在無邊なるを得、是を以ての故に、喜福の極は識處に在り。捨心とは衆生の中の苦樂を捨つ、苦樂を捨つるが故に眞の捨法を得、謂ゆる無所有處なり。是を以ての故に捨心の福は無所有處に極れり。是の如く四無量は但聖人の所得にして凡夫に非ず。復次に、佛は未來世の諸の弟子の鈍根なるが故に、分別して諸法に著し、錯ちて四無量の相を説くを知りたまふ。「是四無量心は衆生緣なるが故に、但是れ有漏なり。但欲界を緣

【一五】次に四無色定を釋す。

ずるが故に、無色界の中には無し、何を以ての故に。無色界は欲界を緣ぜざるが故に」と。  
 是の如き人の妄見を斷せんが爲の故に、四無量心を無色界の中に説く。佛は四無量心を以て普く十方の衆生を緣じたまふが故に、亦應に無色界の中を緣じたまふべし。無盡意菩薩の問の中に説くが如くんば、慈に三種有り、衆生緣、法緣、無緣なり。論者言はく、衆生緣は是れ有漏、無緣は是れ無漏、法緣は或は有漏、或は無漏なり」と、是の如く種種に略して四無量心を説く。

四無色定とは虚空處、識處は無所有處、非有想非無想處なり。是四無色に三種有り、一には有垢、二には生得、三には行得なり。有垢とは、無色の中に三十一結を攝し、及び此結使の中に心相應行を起す。生得とは、是四無色定を行じ、業報の因縁の故に無色界に生じ、不隱没なる無記の四業を得るなり。行得とは、是色の麤惡、重苦、老病、殺害等の種種の苦惱の因縁は、重病の如く、癰瘡の如く、毒刺の如く、皆是れ虚誑妄語なり、應當に除却すべしと觀す。是の如く思惟し已りて、一切の色相を過ぎ、一切の有對相を滅し、一切の異相を念ぜず、無邊虚空處定に入るなり。問うて曰はく、云何が能く是三種の相を滅する。答へて曰はく、是三種の相は皆因縁和合より生ずるが故に自性無し、自性無きが故に是三種は虚誑無實にして滅するを得べきこと易し。復次に、是色は分別するに、分分に破散し、後皆無なり。是を以ての故に若し後無なれば今も亦無なり。衆生は顛倒の故に、和合の色中に於て一相異相を取り、心色相に著す。我は今愚人に隨つて學ぶべからず、當

【佛は三種の色等】  
有色可見有對等の  
三種を明す。

【六】四無色定の  
相並に四句分別を  
明す。中に見諦斷  
と思惟とを解釋す

に實事を求むべし、實事の中には是一相異相無し。復次に、行者は是念を作さく、「我若し諸法を除却して離るれば利を得るを深しと爲す。我先づ財物妻子を棄て、出家して清淨の持戒を得、心安隱にして怖ぢず畏れず、諸欲諸惡不善法を離れ、離生喜樂の初禪を得、覺觀を離れて内清淨なるが故に、第二禪の中の大喜樂を得、喜を離れて第三禪地に在り、諸樂の中に於て最も第一なり。是樂を捨てて念捨清淨の第四禪を得、今は四禪を捨てて應に更に妙定を得べし。是を以ての故に、是色相を過ぎて有對の相を滅し、異相を念ぜず」と。佛は三種の色を説きたまふ。有色可見有對と、有色不可見有對と、有色不可見無對となり。色相を過ぐとは、是れ可見有對色なり。有對相を滅すとは、是れ不可見無對色なり。異相を念ぜずとは、是れ不可見無對色なり。復次に、眼に色の壞するを見るが故に、色を過ぐと名く。耳聲、鼻香、舌味、身觸は壞するが故に過ぐるなり。有對相とは二種に於て餘色無し。色をして種種に分別せしむるが故に異相と名く。是の如く觀じて、色界の中の染を離れ、無邊虛空處を得。三無色を得る因緣方便は禪波羅蜜品の中に説くが如し。

二六〇にむしき  
是四無色は一は常有漏、三は當に分別すべし。虛空處は或は有漏、或は無漏なり。有漏とは虛空處に攝する有漏の四衆なり、無漏とは虛空處に攝する無漏の四衆なり、識處、無所有處も亦是の如し。一切は皆有爲の善なり、有漏の虛空處は是れ有報、無記なり、及び無漏の虛空處は是れ無報なり。識處、無所有處も亦是の如し、善の、非有想非無想處は、是れ有報無記なり、非有想非無想處は、是れ無報なり。善の四無色定は、是れ可修無記、

四無色定は、非可修なり。隱没は、是れ有垢なり、不隱没は是れ無垢なり。一は三の中に  
 有り。有漏は是れ有、無漏とは是れ非有にして、四無色定の攝なり。心心數法は是れ相應  
 因、心不相應の諸行は是れ非相應因なり。善法にして四無色の中に非ざる有り、四無色の  
 中にして善法に非ざる有り、亦善法にして亦四無色の中なる有り、善法に非ず亦四無色の  
 中に非ざる有り。善法にして四無色に非ざる有りと、一切善の色衆、及び四無色に攝せ  
 ざる四衆及び智緣盡なり。四無色の中にして善法に非ざる有りと、無記の四無色なり。  
 亦善法にして亦四無色有りと、善の四無色なり。善法に非ず亦四無色に非ざる有りと、一  
 切不善の五衆、及び無記の色衆及び四無色に攝せざる無記の四衆、虚空及び非智緣盡なり。  
 不善法の中に相攝せず。無記法にして四無色に非ざる有り、四無色にして無記法に非ざる  
 有り、亦無記法にして亦四無色なる有り、無記に非ず亦四無色に非ざる有り。無記法にし  
 て四無色に非ざる有りと、無記の色衆及び四無色に攝せざる無記の四衆、虚空及び非智  
 緣盡なり。四無色の中にして無記法に非ざる有りと、善の四無色なり。亦無記法にして  
 亦四無色とは無記の四無色なり。亦無記法に非ず亦四無色に非ずとは、不善の五衆、善の  
 色衆、無色に攝せざる善の四衆及び智緣盡なり。或は漏にして四無色に非ず、或は四無色  
 にして漏に非ず、或は漏にして亦四無色なり、或は漏に非ず亦四無色に非ず、漏にして四  
 無色に非ずとは、一漏及び二漏の少分なり。四無色にして漏に非ずとは、漏に攝せざる四  
 無色なり。亦漏にして亦四無色とは、二漏の少分なり。漏に非ず亦四無色に非ずとは、色衆

及び漏、無色に攝せざる四衆、及び無爲法なり。或は有漏にして四無色に非ず、或は四無色にして有漏に非ず、或は有漏にして亦四無色なり、或は有漏に非ず四無色に非ず。有漏にして四無色に非ずとは、有漏の色衆、及び無色に攝せざる有漏の四衆なり。四無色にして有漏に非ずとは、三無色の少分なり。亦有漏にして亦四無色とは、一無色、及び三無色の少分なり。亦有漏に非ず四無色に非ずとは、無漏の色衆、無漏に攝せざる無漏の四衆、及び三無爲なり。或は無漏にして四無色に非ず、或は四無色にして無漏に非ず、或は無漏にして亦四無色、或は無漏に非ず亦四無色に非ず。無漏にして四無色に非ずとは、無漏の色衆、及び無色に攝せざる無漏の四衆、及び三無爲なり。四無色にして無漏に非ずとは、一無色と及び三無色の少分なり。亦是無漏亦是四無色とは、三無色の少分なり。無漏に非ず、四無色に非ずとは、有漏の色衆、及び無色に攝せざる有漏の四衆なり。虚空處は、或は見諦斷、或は思惟斷、或は不斷なり。見諦斷とは、信行、法行の人、見諦を用ひて忍斷するなり。何となれば是れ二十八使、及び二十八使相應の虚空處、及び此に起る心不相應の諸行なればなり。思惟斷とは見道を學し、思惟を用ひて斷ず、何となれば是れ思惟の所斷の三使、及び此相應の虚空處、及び此に起る心不相應の諸行、及び無垢有漏の虚空處なればなり。不斷とは、無漏の虚空處なり。識處、無所有處も亦是の如し。非有想非無想處は或は見諦斷、或は思惟斷なり。見諦斷とは信行、法行の人、見諦を用ひて忍斷す。何となれば是れ二十八使、及び此に相應する非有想非無想處、及び此に起る心不相應の諸行なればなり。

ばなり。思惟斷とは、見道を學し、思惟を用ひて斷ず。何んが是れ思惟所斷なる。三使、及び此に相應する非有想非無想處、及び此に起る心不相應の諸行、及び無垢の非有想非無想處、四無色の中に攝する心不相應の諸行なり。是は心に非ず、心數法に非ず、心相應に非ず、受業、想業、及び此相應行業、是心數法、亦心相應の心意識、獨心、四無色は、或は隨心行にして、受相應に非ざる有り、或は受相應にして隨心行に非ず、或は隨心行にして亦受相應なり、或は隨心行に非ず受相應に非ざるあり。隨心行にして受相應に非ずとは、隨心行、心不相應の諸行、及び受なり。受相應にして隨心行にあらずとは、心是なり。隨心行にして亦受相應とは、想業、及び此に相應する行業なり。隨心行に非ず受相應に非ずとは、隨心行と心不相應の諸行とを除きて、餘殘の心不相應の諸行、想相應、行相應なり。亦應に是の如く説くべし。虚空處は、或は身見の因に從うて還りて身見と與に因と作らず、或は身見の因に從ひ、亦還りて身見と與に因を作す、或は身見の因に從はず、亦還りて身見と與に因と作らず。身見の因に從ひ、亦還りて身見と與に因を作す、或は身見の因に從はず、亦還りて身見と與に因と作らず。去現在の見苦斷の諸使、及び此と相應する虚空處を除き、亦過去現在の見集斷の諸の邊結、及び此に相應する虚空處を除き、亦未來世の中の、身見及び相應する虚空處を除き、亦身見、生、老、住、滅を除きて、餘殘の有垢の虚空處なり。身見の因に從ひ亦還りて身見と與に因と作るとは、上に除く所の者是なり。亦身見の因に從はず亦還りて身見と與に因と作らずとは、無垢の虚空處なり。識處、無所有處、非有想非無想處も亦是の如し。四

無色定は一切因縁を有し亦因縁に與す。虚空處は或は次第にして次第縁に與せず、或は次第にして亦次第縁に與し、或は次第に非ず亦次第縁に與するに非ず。次第にして次第縁に與せずとは、未來世の中に生きんと欲する心心數法の虚空處、及び阿羅漢、過去現在の最後滅の時の心心數の虚空處なり。次第にして、亦次第縁に與すとは、過去現在の阿羅漢、最後滅の時の心心數の虚空處を除きて、餘殘の過去現在の心心數法の虚空處なり。次第に非ず亦次第縁に與せずとは、未來世の中に生きんと欲する心心數の虚空處を除きて、餘殘の過去現在の心心數の非有想非無想處、及び滅受想の若は生じ、若は生ぜんと欲するなり。次第にして亦次第縁に與すとは、過去現在の阿羅漢、最後滅の時の心心數の非有想非無想處を除きて、餘殘の過去現在の心心數の非有想非無想處なり。次第に非ず亦次第縁に與するに非ずとは、未來世の中に生ぜんと欲する心心數の非有想非無想處を除きて、餘殘の未來世の中の心心數の非有想非無想處と、心次第、心不相應の諸行を除きて、餘殘の心不相應の諸行と、四無色の中に攝する諸の心心數の法と有縁と亦縁縁となり。四無色には心不相應の諸行と、非縁と縁縁とを攝す。四無色は皆是れ増上にして亦増上縁と與す。是の如き等種種に、四

【二七】大乘の四無色定に就いて。

無色を分別するは、阿毘曇分の中に説くが如し。此中に應に廣く説くべし。  
 問うて曰はく、『摩訶衍の中の四無色とは云何。』答へて曰はく、『諸法實相と與に智慧行を共にする、是れ摩訶衍の中の四無色なり。』問うて曰はく、『何等か是れ諸法實相なる。』答へて曰はく、『諸法は諸法自ら性空なるなり。』問うて曰はく、『色法は和合、分別、因縁の故に空なり。此無色の中に云何が空なる。』答へて曰はく、『色は是れ眼見、耳聞、塵事すら能く空ならしむ、何に況んや不可見にして對有る無く、苦樂を覺せずして而も空ならざらんや。復次に、色法は分別するに、乃至微塵も、皆散滅して空に歸す。是は心心數の法は、日月、時節、須臾の頃、乃至一念の中に在るも不可得なり。是を四無色定の義と名く。是の如き等、種種に略して四無色を説く。』

大智度論釋初品中八背捨義第三十四

卷第二十一

聖者龍樹造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

【二】初に八背捨を釋す。

(一) 八背捨とは内に色有り、外に赤色を觀する是れ初背捨なり。内に色無く外に色を觀する是れ第二の背捨なり。淨き背捨と身もて證を作すは第三の背捨なり、四、及び滅受想定、是五を合して八背捨と爲す。背とは是れ五欲を淨潔にするなり。是著心を離るるが故に背捨と名く。内外の色を壞らず、内外の色相を滅せず、是不淨心を以て色を觀する是を初背捨と名く。内色を壞し内色の相を滅し、外色を壞らず外色の相を滅せず、是不淨心を以て外色を觀する、是れ第二の背捨なり。是二は皆不淨を觀す。一には内を觀じ、外を觀じ、二には内を見ず、但外を見る、何を以ての故に。衆生に二分の行有り、愛行と見行となり。愛多き者は樂に著して、多く外、諸の結使の行に縛在し、見多き者は多く身見等の行に著し、内、結使の爲に縛せらる。是を以ての故に愛多き者は外色の不淨を觀じ、見多き者は自身の不淨を觀じて壞敗する故なり。復次に行者初心なれば未だ細ならず、心を一處に攝繫すること難し。故に内外の觀漸く習ひ、調柔にして能く内の色相を壞し、但外を觀す。問うて曰はく、若し内に色相無くんば、誰か當に外を觀すべき。答へて曰は

く、「是を得解の道と爲す、實道に非ず。行者は、未來死し及び火に燒かれ、虫に啖はれ、土中に埋著さるれば、皆腐滅するを念じ、若し現在も亦、是身を分別して、乃ち微塵に至り、皆無なりと觀す。是を内に色相無く外に色を觀すと名く。問うて曰はく、「二勝處は内外の色を見、六勝處は但外色を見、一背捨は内外の色を見、二背捨は但外色を見る。何を以ての故に、但内に色相を壞する有りて、外色を壞する能はざる。」答へて曰はく、「行者は眼に是身の死相あるを見、是未來の死相を取りて、以て今の身を觀ず、外の四大は滅相を見ざるが故に、無と觀すべきこと難きが故に、外色の壞を説かざるなり。復次に、色界を離るる時、是時も亦外色を見ず。淨き背捨と身にて證を作すとは不淨の中の淨觀なり。八勝處に説くが如し。前八の一切處に清淨の地水火風、及び青黃赤白を觀し、青色を觀すること青蓮華の如く、金精山の如く、優摩伽華の如く眞青の婆羅捺衣の如く、黃赤白を觀て、各色に隨ふも亦復是の如し。總て淨背捨と名く。問うて曰はく、「若し總て是れ淨背捨ならば應に一切處と説くべからず。」答へて曰はく、「背捨は是れ初行の者、勝處は是れ中行、一切處は是れ久行なり。不淨觀に二種有り、一には不淨、二には淨なり。不淨觀の中に二背捨、四勝處有り。淨觀の中に一背捨、四勝處、八一切處有り。」問うて曰はく、「行者は不淨を以て淨と爲さば名けて顛倒と爲す、淨背捨觀は云何が顛倒ならざる。答へて曰はく、「女色の不淨なるを妄に見て淨と爲すは是を顛倒と名く。淨背捨は一切實に青色なりと觀じ、廣大なるが故に顛倒ならず。復次に、心を調ふるが爲の故に、淨觀

【瞻蔔花】 チヤム  
バカ(Campaka)象  
牙色の花。香微妙  
なり。

は以て久しく習ひ、不淨觀は心に厭ふ、是を以ての故に淨觀を習ふは顛倒に非ず。亦是中に著せざるが故なり。復次に、行者は先づ身の不淨を觀じ、身法の有ゆる内外の不淨に隨うて心を觀中に繫く、是時に厭を生じ、悲、癡薄し。即ち自ら驚悟すらく、「我は無」と爲す、此身是の如し、云何が著を生ぜん」と。心を攝して實に觀じて復錯らしむる無し。心既に調柔し、身の皮肉血髓の不淨を除却せんを想ひ、唯、白骨のみ有りて心を骨人に繫く。若し外に馳散すれば之を攝して還らしむ。深く心を攝するが故に白骨の流光を見ること、珂の如く、貝の如く、能く内外の諸物を照す、是を淨背捨の初門と爲す。然して後に骨人の散滅を觀じ、但骨光を見、外の淨潔の色相を取る。復次に、若し金剛、眞珠、金銀、寶物、若し清淨の地、若し淨水、烟無く薪無き淨潔の火の如く、若し清風の塵無き、諸の青色の金精山の如き、諸の黄色の瞻蔔花の如き、諸の赤色の赤蓮華の如き、諸の白色の白雲等の如き、是相を取りて心を淨觀に繫く、是諸色に隨うて、各清淨の光耀有り。是時に行者は、喜樂を受くるを得て、身中に遍滿す、是を淨背捨と名く。淨を緣するが故に、名けて淨背捨と爲し、遍身に樂を受くるが故に、名けて身證と爲し、是心樂を得、五欲を背捨し、復喜樂せざる是を背捨と名く。未だ漏盡きざるが故に、中間に或は結使の心生じて、隨うて淨色に著し、復勤めて精進して、此著を斷するが故なり。是の如きの淨觀は心想より生ず。譬へば幻主の所幻の物を觀じて、已より出づるを知り、心に著を生ぜず、能く所緣に隨はざるが如し。是時に背捨は變じて勝處と名け、淨觀に於て勝

ると雖も、未だ廣大なる能はず、是時行者は、還りて淨相を取り背捨の力、及び勝處の力を用ふるが故に、是淨地の相を取り、漸漸に十方虚空に遍滿す。水火風も亦爾なり。青相を取ることに漸く廣大にして、亦十方虚空に遍からしむ。黄赤白も亦是の如し。是時勝處は、復變じて一切處と爲る、是三事は一義、轉變して三名有るなり。問うて曰はく、「是三背捨、八勝處、十一切處は是れ實觀なりや、是れ得解の觀なりや。若し實觀ならば身に皮肉有り、何を以てか但白骨の人を見る。又三十六物合して身法と爲る、何を以てか分別して散觀する。四人各自ら相有り、何を以てか三大を滅して、但一の地大を觀する。四色は盡く是れ青に非ず、何を以てか都て青觀を作す。答へて曰はく、「實觀有り、亦得解觀有り。身相は實に是れ不淨なり、是を實觀と爲す。外法の中に淨法の種種の色相有り、是を實の淨觀と爲し、淨不淨は是を實觀と爲す。此少許の淨を以て、廣く一切皆是れ淨なりと觀じ、是一水を取りて、遍く一切皆是れ水なりと觀じ、是少許の青相を取りて、遍く一切皆是れ青なりとす。是の如き等は是れ得解觀にして、實に非ずと爲す。四無色の背捨は、四無色定の中の觀の如く、背捨を得んと欲して先づ無色定に入る。無色定は是れ背捨の初門なり、色縁を背捨すれば無量虚空處なり。問うて曰はく、「無色定も亦爾なり、何等の異か有る。」答へて曰はく、「凡夫の人、は無色定を得ば是を無色と爲す、聖人は深く心に無色定を得て、一向に廻せざる是を背捨と名く。餘殘の識處、無所有處、非有想非無想處も亦是の如く、受想の諸の心心數法を背滅する、是を滅受想背捨と名く。」問うて曰は

【二】次に八勝處を釋す。

く、「無想定は何を以てか背捨と名けざる。」答へて曰はく、「邪見の者は諸法の過失を審かにせず、直に定中に入りて是を涅槃と謂ひ、定より起つ時、還りて悔心を生じ、邪見到墮在す。是故に背捨に非ず。滅受想は散亂の心を患厭するが故に、定に入りて休息すること涅槃の法に似たり、身中に著して得るが故に身證と名く。」

八勝處とは、内に色相有り、外に色の少きを觀す、若は好、若は醜、是色を勝れて知り勝れて觀する、是を初勝處と名く。内に色相有り、外に色の多きを觀す、若は好、若は醜、是色を勝れて知り、勝れて觀する、是を第二勝處と名く。第三第四も亦是の如し。但内に色相無く外に色を觀するを以て異と爲し、内に亦色相無く、外に諸色の青黄赤白を觀す、是を八勝處と爲す。内に色相有り、外に色を觀すとは、内身の外縁の少なる者を見るを壞せざるなり。緣少きが故に少と名け、觀道未だ增長せざるが故に少因縁を觀す。多を觀すれば攝すること難きを畏るるが故なり。譬へば鹿の遊べるを未だ調へざれば、遠く放つに中らざるが如し。若は好、若は醜とは、初學は心を緣中に繫け、若は眉間、若は額上、若は鼻端、内身の不淨相、内身の中の不淨相、外の諸色の善業報を觀するが故に好と名け、不善業報の故に醜と名く。

復次に、行者は師より受くる所の如く、外縁の種種の不淨を觀する、是を醜色と名け、行者、或時は憶念を忘るるが故に、淨相を生じ淨色を觀する、是を好色と名く。復次に、行者は自ら身中に心を一處に繫け、欲界の中の色を觀するに二種有り、一には能く姪欲を

生じ、二には能く瞋恚を生ず。能く淫欲を生ずるは、是の淨色なり、名けて好と爲す。能く瞋恚を生ずるは、是れ不淨色なり、名けて醜と爲す。緣中に於て自在に勝れて知り、勝れて見る。行者は能生の婬欲、端正の色の中に於て婬欲を生ぜず、能生の瞋恚、惡色の中に於て瞋恚を生ぜず、但色を觀じ、四大の因緣和合して生じ、水沫の如く堅固ならずと觀ず。是を若は好、若は醜と名く。勝處とは行者、是不淨門の中に住し、婬欲瞋恚等の諸の結使、來りて能く隨はざる、是を勝處と名く。是れ不淨の中の淨顛倒等の諸の煩惱の賊に勝つが故なり。

問うて曰はく、「行者は云何が内、色想、外、色を觀する。」答へて曰はく、「是八勝處は深く定に入り、心調柔なる者にして得べし。行者は或時は内身の不淨を見、亦外色の不淨を見る。不淨觀に二種有り。一には三十六物等の種種の不淨、二には内外の皮肉五藏を除きて、但白骨を觀ること珂の如く雪の如し。三十六物等を觀する、是を醜と名け、珂の如く雪の如しと觀する、是を好と名く。行者は内外を觀する時、心散亂して禪に入り難く、自身の相を除きて但外色を觀ず。阿毘曇の中に説くが如し。行者は解脱觀を得るを以て、是身の死を見る、死し已れば擧げて塚間に出で、若は火にて燒き、若は虫噉つて皆已に滅盡す。是時但虫火を見て身を見ず、是を内に色相無く、外に色を觀すと名く。行者は教を受くるが如く、身は是れ骨人なりと觀ず。若し心外に散ずれば、還りて骨人緣の中に攝せらる。何を以ての故に。是人は初めて行を習ひ、未だ細縁を觀する能はざるが故に。是を少

【三】次に十一一切處を釋す、青、黃、赤、白、地、水、火、風、空、識、遍處是れなり。

色と名く。行者は觀道轉深く增長し、此一骨人を以て、遍く闍浮提は皆是れ骨人なりと觀す。是を名けて多と爲し、還りて復念を攝して一骨人を觀す。是を以ての故に勝知勝見と名く。復次に、意に隨うて五欲の中の男女の相、淨潔の相は、能く勝るが故に名けて勝處と爲す。譬へば健なる人の、馬に乗りて賊を撃つに、能く破るを是を名けて勝と爲すが如し。又能く其馬を制御するは、是を亦勝と名く。行者も亦是の如し、能く自ら不淨觀の中に於て、少を能く多とし、多を能く少とす、是を勝處と爲す。亦能く五欲の賊を破るを亦勝處と名く。内、未だ壞る能はず、外、色を觀するに、若は多、若は少、若は好、若は醜なる、是れ初と第二の勝處なり。内身を壞して色相無く、外色を觀するに、若は多、若は少、若は好、若は醜なるは、是れ第三と第四の勝處なり。心を攝して深く定中に入り、内身を壞して、外淨緣の青は青色、黄、赤、白は、白色なりと觀する、是を後の四勝處と爲す。問うて曰はく、「是後の四勝處は、十一一切處の中の青等の四處と、何等の異か有る。」答へて曰はく、「青の一切處は、能く普く一切を緣じて青ならしむ。」是勝處は若は多、若は少、意に隨うて觀じて、異心をして奪はしめず、勝れて是緣を觀するを名けて勝處と爲す。譬へば轉輪聖王は遍く四天下に勝れ、闍浮提の王は一天下のみに勝るが如く、一切處は普遍く一切の緣に勝れ、勝處は但少色を觀じ、能く勝れ、一切緣に遍きこと能はず。是の如き等は略して八勝處を説けり。

十一一切處とは、背捨勝處は已に説けり。此は緣に遍滿するを以ての故に一切處と名く。

【四】九次第定と稱する理由。

問うて曰はく、「何を以てか無所有處、非有想非無想處を一切處と名けざる。」答へて曰はく、「是得解の心は、安隱快樂、廣大にして無量無邊なる虚空處なり。是れ佛の説きたまふ所、一切處の中には皆識有り、能く疾かに一切法を緣するが故に、一切法の中に皆識有りと見るなり。是を以ての故に二處に一切處を立つ。無所有の中には、物の廣むべき無く亦快樂を得ず、佛も亦是無所有は、無邊無量なりと説きたまはず。非有想非無想處は心鈍にして、相を取りて廣大ならしむるを得難し。復次に、虚空處は色界に近く亦能く色を緣じ、識處は能緣にして色を緣す。又識處は起ちて能く第四禪に超入し、第四禪は起ちて識處に超入す。無所有處、非有想非無想處は無色の因縁に遠きが故に一切處に非ず。是三種の法は皆行して勝處を得。一切處は是れ有漏、初の三背捨、第七第八の背捨は是れ有漏、餘殘は或は有漏、或は無漏なり。初の三背捨、初の四勝處は初禪、二禪の中に攝し、淨背捨、後の四勝處、八の一切處は第四禪の中に攝す。二の一切處を即ち名けて空處と説く。空處は識處を攝し、識處は前の三背捨、八勝處、八の一切處を攝し、皆欲界を緣す。後の四背捨は無色界、及び無漏法の諸の妙功德を緣じ、根本の中に在り。若は無色の根本は下地を緣せざるが故に。滅受想定は心心數法に非ざるが故に緣無く、非有想非無想處の背捨は但無色の四陰、及び無漏法を緣じ、九次第定とは初禪の心より起ちて次第に第二禪に入り、餘心をして入るを得しめず、若は善、若は垢なり。是の如くして乃ち滅受想定に至る。

問うて曰はく、「餘にも亦次第有り、何を以てか但九次第定と稱する。」答へて曰はく、「餘

の功徳は皆異心の間に生ずる有るが故に次第に非ず、此中には深心にして智慧利き行首、自ら其心を試み、一禪心より起ちて次に二禪に入り、異念をして入るを得しめず。此功徳に於て心柔軟にして、善く法愛を斷するが故に能く心心相次ぐ。是次第は、一は是れ有漏、七は或は有漏、或は無漏禪なり、中間、未到地は牢固ならず、又是れ聖人の得る所なり。又此大功徳は邊地に在らず、是故に次第無し。八背捨、八勝處、十一切處、九次第定は聲聞法の中に略説せり。

大智度論釋初品中九相義第三十九

【五】 初に九相を釋す。

【六】 九相觀を修する方法、初に厭想。

九相とは脹相、壞相、血塗相、膿爛相、青相、皰相、散相、骨相、燒相なり。

問うて曰はく、「應當に先づ九相を習うて欲を離れ、然る後に諸禪を得べし、何を以ての故に諸の禪定の後方に九相を説く。」答へて曰はく、「先づ果報を説きて、行者の心をしめて樂ましむ、九相は是れ不淨なりと雖も、人共果報を貪るが故に必ず習行す。」

問うて曰はく、「行者は云何が是脹相等の九事を觀する。」答へて曰はく、「行者は先づ持戒清淨にして、心をして悔いざらしむるが故に、觀法を受け易く、能く淫欲諸の煩惱の賊を破る。人の初めて死するの目を觀るに、辭訣語言の息出でて反らず、奄忽として已に死し、室家驚慟號哭して天を呼んで言説すらく、「方に爾く、奄便那ぞ去るや。氣滅し、身

冷かにして覺識する所無し」と。此を大畏と爲し、免るべき處無きを觀ず。譬へば劫盡き火燒くに遺脱有ること無きが如し。説くが如くんば、

死に至るに貧富無く、勤修善惡無く

貴無く亦賤無く、老少の免るる者無し

祈請の救ふべき無く、亦欺誑して離るる無く

捍捨すとも脱するを得る無く、一切免るる處無し

死法は名けて永く恩愛を離るる處と爲す。一切有生の惡む所の者、甚だ之を惡むと雖も

脱するを得る者無し。我身は久しからずして必ず當に是の如し、木石に同じく、別知する

所無かるべし。我今五欲に貪著し、死の至るを覺らず、牛羊に同すべからず、牛羊禽獸は

死者を見ると蹕も、跳騰哮吼し、自ら覺悟せず、我は既に人身を得て好醜を識別す、當に

甘露不死の法を求むべし。説くが如くんば、

六情の身完く具し、智嚙も亦明利なり

而も道法を求めずんば、唐らに身と智慧とを受く

禽獸も亦皆欲樂を以て、自ら恣にするを知る

而も方便もて、道の爲に善事を修するを知らず

既已に人身を得て、而も但自ら放恣にして

善行を修するを知らずんば、彼と亦何んが異ならん

三惡道の衆生は、修道の業を得ず

已に此人身を得たり、當に勉めて自ら益利すべし

行者は死屍の邊に到りて、死屍體脹して、韋囊に風を盛るが如く、本の相に異るを見て、心に厭畏を生ず。「我身も亦當に是の如くなるべし、未だ此法を脱せず、身中、識を主として、此身を役御し、視聽、語言、罪を作し福を作す、此を以て自ら貴ぶも何の趣く所と爲ん、而今は但空舎の此に在るを見るのみ。是身の好相、細腰、姝媚、長眼、直鼻、平額、高眉、是の如きの好は人心をして惑はしむ。今但體脹を見るのみ、好、何の處にか在る、男女の相も亦識るべからず」と。此觀を作し已りて、欲に著するの心を呵す。此臭屎の囊、體脹すれば惡むべし、何んが貪著するに足らん。死屍は風熱轉大なれば裂壞して地に在り、五藏より屎尿膿血流出し惡露已に現す。行者は是壞相を取り、以て己の身を觀ず。「我も亦是の如し、皆是物有り、此と何んが異ならん。我甚だ惑を爲し、此屎囊薄皮の爲に誑さるること、燈蛾の火に投じて、但明色を食りて、身を燒くを知らざるが如し。已に裂壞して男女の相の滅せるを見、我著する所の者も亦皆是の如し」と。死屍已に壞すれば、肉血塗漫す。或は杖楚して死する者の青瘡黃赤なるを見、或は日に曝されて瘡黒す。具に是相を取り、著する所の者、若は赤白の色の淨潔端正なるも、此と何んが異ならんと觀ず。既に青瘡黃赤を見るに鳥獸も食せず。埋めず藏さざれば、久しからずして膿爛し種種の虫生ず。行者は見已りて、此死屍の本有の好色を念するに、好香を身に塗り、衣るに上服を

【死屍は風熱等】  
以下壞想を明す。

【死屍已に壞すれば等】  
以下血塗想を明す。

【或は杖楚して等】  
以下青瘡想を明す  
【埋めず等】 以下  
膿爛想。

【若し燒かず等】  
以下嘍想。

【本身法の和合等】  
以下散想。

【身既に處處に等】  
以下骨想。

【行者は屍体の中  
等】以下燒想。

以てし、飾るに華綵を以てす。今但莫壞膿爛塗藥す。此は是れ其實の分にして、先に飾綵する所は皆是れ假借なり。若し燒かず埋めずして之を曠野に棄つれば、鳥獸の爲に食せられ、鳥其眼を挑り、狗は手脚を分ち、虎狼は腹を割きて分梨麩裂し、殘畜地に在り、盡きて盡きざる有り。行者は見已りて心に嘍想を生じ、思惟すらく、「此屍の未だ壞せざる時は、人の所著の處たり、而も今壞敗して復本の相無く、但殘緒のみを見る」と。鳥獸の食する處、甚だ惡み畏るべし。鳥獸已に去り、風日に曝曝せられ、筋斷じ、骨離れ各各處を異にす。行者は思惟すらく、「本身法の和合を見るに而も身相有りて男女皆分別すべし。今已に離散して、各異處に在り、和合の法滅すれば、身相も亦無にして皆本に異なり、愛著すべき所、今何の處にか在る」と。身既に處處に離散して白骨有り、鳥獸食し已りて唯骨のみ在る有り、是骨人を觀する是を骨想と爲す。骨想に二種有り、一には骨人の筋骨相連る、二には骨節分離して筋骨相連る。男女長短、好色細滑の相を破り、骨節分離して、衆生の根本實相を破る。復二種有り、一には淨、二には不淨なり。淨とは久しき骨は白淨なり、血無く膩無く、色白雪の如し。不淨とは餘血塗染し、膩膏未だ盡きず。行者は屍体の中に入り、或は多くの草木を積んで死屍を焚燒し、腹破れ眼出で、皮色は焦黒にして甚だ惡み畏るべく、須臾の間にして變じて灰燼と爲るを見る。行者は是燒想を取りて思惟すらく、「此身未だ死せざる前は香華に沐浴し、五欲自ら恣なり、今火に燒かれて兵刃よりも甚し。此屍初めて死せる形は猶人に似たり、火に燒け須臾にして本相都て失せ、一切の有

【七】十想と九相との相異。

身皆無常に歸す、我も亦是の如し」と。是九相は、諸の煩惱を斷じ、姪欲を滅すに於て最も勝る。姪欲を滅さんが爲の故に是九相を説く。

問うて曰はく、「無常等の十想は、何事を滅せんが爲の故に説く。」答へて曰はく、「亦姪欲等の三毒を滅せんが爲なり。問うて曰はく、「若し爾らば二相は、何等の異か有る。」答へて曰はく、「九相は未だ禪定を得ず、姪欲の爲に覆はるるを、遮らんが爲の故にして、十想は能く姪欲等の三毒を除滅す。九相は賊を縛するが如く、十想は斬殺するが如し。九相は初學の爲にして、十想は成就の爲なり。復次に、是十想の中の不淨想に九相を攝す。有人言はく、「十想の中の不淨想と食不淨想と世間不可樂想とに、九相を攝す」と。復有人言はく、「十想九相は同じく欲を離れんが爲なり、俱に涅槃の爲なり。所以は何の死相は、動轉言語須臾の間に忽然として已み、死すれば身體膿膜爛壞分散し各各變異す、是れ則ち無常なり。若し此法に著すれば、無常の壞する時、是れ即ち苦と爲す。若し無常苦なれば自在を得る者無し、是れ則ち無我なり。不淨にして無常、苦にして無我なれば則ち樂なるべからず、身を觀ずることは是の如し。食口に在りと雖も、膈涎流れ下り、唾と和合して味を成し、而も咽むと吐くと異なる無し。下りて腹の中に入るは即ち是れ食不淨想なり。此九相を以て身を觀ずるに、無常變異にして念念に皆滅す、即ち是れ死想なり。是九相を以て世間の樂を厭ひ、煩惱斷ずれば、則ち安隱寂滅なりと知る、即ち是れ斷想なり。是九相を以て諸の煩惱を遮するは、即ち是れ離想、是九相を以て世間を厭ふが故に、此五衆滅して更

【八】九相の効能  
及び其性縁を明す

に復生ぜず、是處は安隱なりと知る、即ち是れ盡想なり。復次に、九相を因と爲し十想を果と爲す。是故に九相を先にし、十想を後にす。復次に、九相を外門と爲し十想を内門と爲す、是故に經に言はく、「二を甘露門と爲す、一には不淨門、二には安那般那門なり」と。是九相は人の七種の染著を除く。或は人有り色に染著す。若は赤、若は白、若は赤白、若は黄、若は黒なり。或は人有り、色に著せず、但形容に染著す。細膚、纖指、脩目、高眉なり。或は人有り、容色に著せず、但威儀に染著す。進止、坐起、行住、禮拜、俯仰、揚眉、顧眄、親近、按摩なり。或は人有り、容色威儀に著せず、但言語に染著す、軟聲、美辭、時に隨うて説き、意に應じ旨を承けて能く人心を動す。或は人有り、容色、威儀、輒聲に著せず、但細滑、柔膚、軟肌に染著す。熱時には身涼、寒時には體温なり。或は人有り、皆五事に著し、或は人有り、都て五事に著せず、但人相に染著す。若は男、若は女なり。上の六種の欲を得と雖も、所著の人を得ず、猶解する所無く、世の重んずる所の五種の欲樂を捨てて其死に隨ふ。死相は多く威儀語言の愛を除き、腫脹相、壞相、厭相、散相は多く形容の愛を除き、血塗相、青瘡相、膿爛相は多く色愛を除き、骨相、燒相は多く細滑の愛を除き、九相は雜愛、及び著せらるる人の愛を除き、厭相、散相、骨相は遍く人愛を除き、羸殘離散せる白骨の中に人の著すべき有るを見ず。是九相觀を以て愛心を離れ、瞋癡も亦微薄なり、不淨の中の淨顛倒、癡の故に是身に著す。今是九相を以て身内を披析し、是身相を見れば癡心薄し。癡心薄ければ則ち貪欲薄く、貪欲薄ければ則ち瞋も亦薄し。

【九】 菩薩の九相

所以は何ん。人は身を食るを以ての故に瞋を生ず、今身の不淨を觀じ心に厭ふが故に復身を食らず、身を食らざるが故に復瞋を生ぜず、三毒薄きが故に一切の九十八使の山皆動き、漸漸に其道を増進し、金剛三昧を以て結山を摧碎す。九相は是れ不淨觀なりと雖も、是に依りて能く大事を成す。譬へば大海中には臭屍溺人も、依りて以て渡るを得るが如し。問うて曰はく、「是九相は何の性、何の所縁有りて、何の處にか攝する。」答へて曰はく、「取相の性縁は、欲界の身色にして想陰に攝す。亦身念處の少分にして、或は欲界に攝し、或は初禪、二禪、四禪に攝し、未だ欲を離れざる散心の人は欲界繫を得、欲を離れたる人心は色界繫を得。臆脹等の八相は欲界、初禪、二禪の中に攝し、淨骨相は欲界、初禪、二禪、四禪の中に攝す。三禪の中には樂多きが故に是相無し。是九相は是れ身念處門を開き、身念處は三念處門を開き、是四念處は三十七品門を開き、三十七品は涅槃の城門を開く。涅槃に入りて、一切の憂惱諸苦を離れ、五陰の因縁生を滅するが故に涅槃の常樂を受く。」問うて曰はく、「聲聞の人は是の如く、心の厭離を觀じて、疾に涅槃に入らんと欲す。菩薩は一切衆生を憐愍し、一切の佛法を集め、一切衆生を度し、疾かに涅槃に入るを求めざるが故に、是九相を觀す。云何が二乗の證に墮せざる。」答へて曰はく、「菩薩は衆生に於て心に憐愍を生じ、衆生は三毒の因縁を以ての故に、今世後世身生の苦痛を受くと知る。是三毒は終に自ら滅せず、亦餘の理を以て滅を得べからず、但著する所の内外の身相を觀じて然して後除くべし。是を以ての故に、菩薩は是姪欲の毒を滅せんと欲するが故に是九

相を觀ず。人の病者を憐愍し、諸藥を合和して以て之を療するが如し。菩薩も亦是の如し、色に著する衆生の爲に是青瘀相等を説き、其著する所に隨うて、諸相を分別すること先に説くが如し。是を菩薩は九相觀を行すと爲すなり。復次に、菩薩は大慈悲心を以て、是九相を行じ、是の如きの念を作さく、「我未だ一切の佛法を具足せず、涅槃に入らず、是を一法門と爲す。我は應に此一門に住すべからず、我當に一切の法門を學すべし」と。是を以ての故に、菩薩は九相を行するに妨ぐる所無し。菩薩は是九相を行するに、或時は厭患の心起る。是の如きの不淨の身、惡むべく思ふべし、疾かに涅槃を取らんと欲す。爾時、菩薩、是念を作さく、「十方の諸佛は、一切の法相は空なり、空の中に無常無しと説きたまふ、何に況んや不淨有らんや。但淨顛倒を破るが爲の故に此不淨を得ず。是不淨は皆因縁の和合より生じて、自性有ること無く、皆空相に歸す。我今應に是因縁和合の生を取るべからず、自性無く不淨の法なり、疾かに涅槃に入らんと欲す」と。經の中に亦是説有り、「若し色の中に味相無くんば、衆生は應に色に著すべからず。色の中に味有るを以ての故に、衆生は著を起す。若し色に過罪無くんば衆生も亦色を厭ふ者無し。色には實に過惡有るを以ての故に、色を觀すれば則ち厭ふ。若し色の中に出相無ければ、衆生も亦色に於て脱することを得る能はず、色に出相有るを以ての故に、衆生は色に於て解脱を得。味は是れ淨相の因縁の故なり、是を以ての故に、菩薩は不淨の中に於て没せず、早く涅槃を取る」と。九相の義、分別し竟ぬ。

大智度論釋初品中八念義第三十六之一

【經】佛を念じ、法を念じ、僧を念じ、戒を念じ、捨を念じ、天を念じ、入出の息を念じ、死を念す。

【○】以下佛を念じ等の文中、初に九相に就いて。

問うて曰はく、「何を以ての故に、九相の次第に八念有る。」答へて曰はく、「佛弟子は、阿蘭若處、空舍、塚間、山林、曠野に於て、善く九相内外の不淨觀を修し、其身を厭患して而も是念を作さく、「我は云何が是底下不淨なる屎尿の囊を擔うて、自ら隨うて慳然として驚怖し、及び惡魔と爲り、種種の惡事を作し、來りて之を恐怖し、其をして退かしめんと欲する」と。是を以ての故に佛は次第に爲に八念を説きたまふ。經の中に説くが如し。佛、諸の比丘に告げたまはく、「若は阿蘭若處、空舍、塚間、山林、曠野に於て、中に在りて思惟せよ。若し怖畏して衣毛爲に豎たば、爾時當に佛を念すべし。佛は是れ多陀阿伽度なり、阿羅漢なり、三藐三佛陀なり、乃至婆伽婆なりとせば、恐怖則ち滅せん。若し佛を念ぜずんば、當に疾に法を念すべし、佛法は清淨にして巧に善説を出し、今世の報を得、有智の人の、心力の能く解するを指示し開發す。是の如く法を念すれば怖畏則ち除く。若し法を念ぜずんば則ち當に僧を念すべし、佛弟子衆は正道を修し法に隨うて行す。僧の中に阿羅漢向、阿羅漢、乃至須陀洹向、須陀洹、四雙、八輩有り。是佛弟子衆は、應

に供養し、合手し、恭敬し、禮拜し、迎送すべき世間無上の福田なり」と。是の如く僧を念するを作さば恐怖即ち滅せん。

【伊舍那】 イーシヤナ (Sana) 帝釋の左に面する天王。  
【婆樓那】 ゴルナ (anna) 帝釋の右に面する天王。

佛、諸の比丘に告げたまはく、「釋提桓因は阿修羅と闘うて大陣中に在る時、諸天衆に告ぐ、汝阿修羅と闘ふ時、設し恐怖有らば、當に我七寶の幢を念すべし、恐怖即ち滅せん。若し我幢を念ぜずんば、當に伊舍那天子（帝釋の左に面する天王なり）の寶幢を念すべし、恐怖即ち除かん。若し伊舍那の寶幢を念ぜずんば、當に婆樓那天子（右に面する天王なり）の寶幢を念すべし、恐怖即ち除かん」と。是を以ての故に恐怖を除く因縁の爲の故に、次第に八念を説くを知る。問うて曰はく、「經の中に三念の因縁の恐怖を除くを説く、五念は復云何が能く恐怖を除く。」答へて曰はく、「是比丘は自ら布施持戒の功德を念じて怖畏も亦除く。所以は何ん。若し破戒せば、心に地獄に墮せんと畏れ、若し慳貪の心は餓鬼及び貧窮の中に墮せんと畏る。自ら念すらく、「我は是淨戒布施有り」と。若し淨戒を念じ、若し布施を念ぜば、心則ち歡喜して是言を作さく、「若し我命未だ盡きずんば、當に更に功德を増進すべし、若し當に命終すとも、惡道に墮するを畏れず」と。是を以ての故に戒施を念すれば、亦能く怖畏生ぜざらしむ。上の諸天を念するは、皆是れ布施持戒の果報、此諸天は福德の因縁を以ての故に彼に生ず。我も亦是福德有り、是を以ての故に天を念するも、亦能く怖畏を生ぜざらしむ。十六行は安那般那を念する時、細覺尙滅す、何に況んや恐怖覺の念をや。死者の五衆身の、念念に生滅するを念すれば、生より已來常に死と俱なり、今何を以てか死

を畏れんや。是五念は、佛、説きたまはずと雖も、亦當に恐怖を除くべし。所以は何ん。他の功德を念じて、以て恐怖を除くは則ち難く、自ら己が事を念じて以て恐怖を除くは、則ち易ければなり。是を以ての故に佛は説きたまはず。

問うて曰はく、「云何が是れ佛を念ずる。」答へて曰はく、「行者は一心に佛を念ずれば、如實の智慧を得、大慈大悲成就す。是故に言に錯謬無く、龜細、多少、深淺皆實ならざる無し、皆是れ實なるが故に名けて多陀阿伽度と爲す。亦過去未來現在の十方の諸佛の如きは、

衆生の中に於て大悲心を起し、六波羅蜜を行じ、諸の法相を得、來りて阿耨多羅三藐三菩提の中に至る。此佛も亦是の如し。是を多陀阿伽度と名く。三世十方の諸佛の身の如きは、大光明を放ちて遍く十方を照し、諸の黑暗を破り、心より智慧の光明を出して、

衆生の無明の闇冥を破り、功德名聞亦遍く十方に滿ち、去りて涅槃の中に至る、此佛も亦是の如く去りたまふ。是を以ての故に亦多陀阿伽度と名く。是の如き功德有るが故に應に一切諸天世人の最上の供養を受くべし。是故に阿羅呵と名く。若し有人言はく、「何を以て

の故に但佛のみ實の如しと説くや。如來如去の故に、應に最上の供養を受くべし。佛は正遍智慧を得たまふを以ての故なり」と、正は諸法の不動不壞の相に名け、遍は一法二法の爲にせざるに名く。故に悉く一切法を知るを以て、餘として盡さざる無ければ、是を三藐三佛陀と名く。是正遍の智慧は、無因より得ず、亦無縁より得ず、是中、智慧持戒を具

足するに依るが故に正遍の智慧を得。智慧とは菩薩の初發意より乃ち金剛三昧に至る相應

【二】初に念佛を釋する中、初に佛の名號を念ずるを明す、中に佛の十號を説く。  
【多陀阿伽度】 タターガタ (Tathagata) 如來と釋す。

【阿羅呵】 アルハツト (Arhat) 應供と譯す。

【三藐三佛陀】 サムヤクサムブツダ (Samyak sambuddha) 正遍知と譯す。

【轉聞遮羅那三般若】キドヤーチヤラナサムバンナ(Vidyaurasam panna) 明行足と譯す。

【修伽陀】スガタ(Sugata) 善逝と譯す。

【路迦憊】ローカ(Loke) 世間(ト Lokavi) 世間者ト譯す。

【阿耨多羅三藐三菩提】アヌツタラプルシヤダムヤサーラテイ(Amūta-rahita-samya-sambodhi) 無上師調御丈夫と譯す。

【貫多提婆魔盧舍】シヤースターデーアマヌシヤ(Śāstāra-dharmasūtra) 天人師といふ。

【婆伽婆】バガワツト(Bhagava) 世尊と譯す。

【三】次に佛の功德を念す。

【摩訶三摩陀】マハーサムマタ(Mahāsammata) 大平

の智慧に名く。持文とは菩薩の初發意より乃ち金剛三昧に至り、身業口業清淨にして、意に隨うて行じ已るに名く。是故に轉聞遮羅那三般若と名く。是一行を行ずれば善去を得、車の兩輪有りて善く去る者の如し。先佛の所去の處の如く、佛も亦是の如く去りたまふが故に修伽陀と名く。若し有が言はく、「佛は自ら其法を修して、我等が事を知りたまはず、是を以ての故に世間を知り、世間の因を知り、世間の盡くるを知り、世間の盡道を知りたまふ」と。故に名けて路迦憊と爲す。世間を知り已りて衆生を調御し、種種の師の中に於て最も無上爲り。是を以ての故に阿耨多羅三藐三菩提と名く。能く三種の道を以て三毒を滅し、衆生をして三乘の道を行かしむ、是を以ての故に、貫多提婆魔盧舍と名く。若し有が言はく、「何事を以ての故に能く自ら利益すること無量なる。佛は一切の智慧を成就したまふが故に、過去、未來、現在の盡、不盡、動、不動の一切の世間を、了了に悉く知りたまふが故に名けて佛陀と爲す」と。是九種の名號を得、大名稱有りて十方に遍滿す、是を以ての故に名けて婆伽婆と爲す。經の中に佛自ら説きたまはく、「是の如き名號もて應當に是念佛を作すべし」と。

復次に、一切種種の功德は盡く佛に在り、佛は是れ劫初の轉輪聖王、摩訶三摩陀等の種にして閻浮提の中に智慧威德有る諸釋子の中に生れ、貴姓憍曇氏に生れたまふ。時に光明は三千大千世界を遍照し、梵天王は寶蓋を持し、釋提桓因は天の寶衣を以て承接し、阿那婆踰多龍王、婆伽多龍王は妙香湯を以て澡浴す。生れたまふ時、地は六種に動じ、行

等王又は大同意といふ。

くこと七歩に至りて、安詳として象王の如く四方を觀視して師子吼を作さく、「我は是れ末後の身、當に一切衆生を度すべし」と。阿私陀仙人之を相して淨飯王に告ぐ。是人の足下の千輻輪相、指合纏網は當に自ら法の中に於て安平にして立つべし、能く動ずる無く、能く壞する者無し。手中の徳字、纏網莊嚴は當に此手を以て、衆生を安慰して畏るる所無からしむべし。是の如く乃至肉骨髻相は青珠山の頂の如く、青色の光明は四邊より出で、頭中の頂相は能く上を見る無く、若は天、若は人の勝る者有ること無し。白毫は眉間に峙ち、白光は頗梨を踏え、淨眼は長廣にして其色紺青なり。鼻は高く直好にして甚だ愛樂すべく、口には四十の齒有り、白淨にして利好に、四牙の上は白く其光は最勝なり。脰は上下等しくして大ならず小ならず、長からず短からず。舌は薄くして大いに軟に、赤紅色にして天の蓮華の如く、梵聲は深遠にして聞く者悅樂し、聽くに厭足無し。身色の好妙なるは閻浮檀金に勝り、大光は身を周り、種種の雜色の妙好なること比無し。是の如き等の三十二相を具足すれば、是人は久しからずして出家せば一切智を得て佛と成らん」と。佛身の功德は是の如し、應當に佛を念すべきなり。復次に、佛身の功德は、身力十萬の白香象寶に勝る、是を父母遺體の力と爲す。若し神通功德力は無量無限なり。佛身は三十二相八十隨形好を以て莊嚴し、内に無量の佛法の功德有るが故に、之を視るに厭ふ無し。佛身を見る者は世の五欲を忘れ、萬事を憶はず。若し佛身を見るに一處も愛樂して厭ふ無く、移り觀る能はず、佛身の功德是の如し、應當に佛を念すべきなり。

【三】次に佛の戒と定とを念ず。

復次に、佛は持戒具足して清淨なり。初發心より戒を修して増積すると、無量なると、驚惑の心と、俱に果報を求めたまはず、聲聞・辟支佛道に向はず、諸の結使に雜らず。但自心清淨にして衆生を憐さざらんが爲の故に世世に戒を持ちたまふ。此を以ての故に佛道を成ずる時、戒を具足するを得。應に是の如く佛の戒衆を念ずべし。復次に佛の定衆具足す。問うて曰はく、「持戒は身口の業清淨なるを以ての故に知るべし、智慧は分別して法を説き、能く衆生の疑を除くを以ての故に知るべし。定は餘人の定を修するすら尙知るべからず、何に況んや佛に於て云何が知るを得ん。」答へて曰はく、「大智慧を具足するが故に、當に禪定は必ず具足するを知るべし。譬へば蓮華の大なるを見ては、必ず池も亦深大なるを知るが如く、又燈明大なれば、必ず蘇油も亦多きを知るが如し。亦佛の神通變化力の無量無比なるを以ての故に、禪定力も亦具足するを知り、亦果の大なるを見るが故に、因も亦必ず大なりと知るが如し。復次に、有時、佛自ら人の爲に説きたまはく、「我禪定の相は甚深なり」と。經の中に説くが如くんば、佛、阿頭摩國の林樹の下に在りて坐して禪定に入りたまふ。是時大いに雨り、雷電霹靂す。四の特牛の耕者二人有り、聲を聞いて怖れ死す。須臾にして便ち晴れ、佛起ちて經行したまふ。一の居士有り、佛の足を禮し已りて、佛の後に隨從し、佛に白して言さく、「世尊、向に雷電霹靂せり。四の特牛の耕者二人有り、聲を聞いて怖死す。世尊聞きたまひしや不や」佛言はく、「聞かず」居士言はく、「佛時に睡りたまひしや」佛言はく、「睡らず」曰はく、「無心想定に入りたまふ

や」佛言はく、「不、我は心想事成有りて但定に入るのみ」居士言はく、「未曾有なり、諸佛の  
 禪定は大いに甚深爲り、心想事成有りて禪定に在り、是の如きの大聲を、覺めて而も聞かず」と。  
 餘經の中の如くんば、佛諸の比丘に告げたまふに、佛は諸の定に出入したまふも、舍  
 利弗目捷連すら尚其名をだも聞かず、何に況んや能く何者か是を知らん。三昧、王三昧、  
 師子遊戲三昧等の如きは、佛は其中に入りて、能く十方世界をして六種に震動せしめ、大  
 光明を放ち、化して無量の諸佛と爲り十方に遍滿したまふ。阿難の如きは一時心に念を  
 生ずらく、「過去の燃燈佛の時は時世好く人壽長く、化度し易し、今釋迦牟尼佛の時は、世  
 悪く人壽短く、教化し難し、佛事未だ訖らずして涅槃に入るや」清旦に是事を以て佛に白  
 す。已に日出でて、佛は時に日出三昧に入りたまふに、日出の光明は閻浮提を照すが如  
 く、佛身も是の如く、毛孔より普く光明を出して、遍く十方恆河沙等の世界を照し、一  
 一の光の中より、七寶の千葉の蓮華を出し、一一の華の上に皆坐佛有り、一一の諸佛皆無  
 量の光明を放ち、一一の光の中より皆七寶の千葉の蓮華を出し、一一の華上に皆坐佛有  
 り、是諸佛等は十方恆河沙等の世界に遍滿して衆生を教化し、或は說法したまふ有り、或  
 は默然たる有り、或は經行を以てし、或は神通變化して身より水火を出したまふ。是の  
 如き等の種種の方便を以て十方五道の衆生を度脱したまふ。阿難、佛の威神を承けて悉  
 く是事を見る。佛神足を攝して三昧より起ち阿難に告げたまはく、「是事を見るや不や、是  
 事を聞くや否や」阿難言さく、「佛の威神を蒙りて、已に見、已に聞けり」佛言はく、「佛

は是の如きの力有り、能く佛事を究竟するや不や」と。阿難言さく、「世尊、若し衆生十方恆河沙等の世界に中に滿つとも、佛壽一日の用此の如し、力必ず能く究竟して佛事を施作せん」阿難敬じて言さく、「未曾有なり、世尊、諸佛の法は無量不可思議なり」是を以ての故に、佛は禪定を具足したまふを知る。

【四】次に佛の慧衆を念ず。

復次に、佛の慧衆を具足したまふは、初發心より阿僧祇劫の中に於て法として行ぜざる無く、世世諸の功德を集め、一心專精にして身命を惜まず、以て智慧を求めたまふ。薩陀波崙菩薩の如し。復次に、善く大悲の智慧を修するを以ての故に慧衆を具足す。餘人は是大悲無く、智慧有りと雖も具足するを得ず、大悲は衆生を愛せんと欲して、種種の智慧を求むるが故に、及び法愛を斷じ、六十二の邪見を滅し、二邊に墮せず。若し五欲の樂を受け、若し身に苦道を修し、若し斷滅、若し計常、若し有、若し無等、是の如きは諸法の邊なり。復次に、佛慧の無上徹鑿なること無比なり。甚深の禪定の中より生ずるが故に、諸の龜細の煩惱も動かす能はざる所なるが故に、善く三十七品、四禪、四無量心、四無色定、八背捨、九次第定等の諸の功德を修するが故に、十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法有りて無礙不可思議解脫を得るが故に、佛は慧衆を具足したまふ。復次に、能く外道の論議師を降伏したまふ。謂ゆる婁樓迦逸葉、摩訶迦葉、舍利弗、目犍連、薩遮尼隄子、婆蹉首羅、長爪等の大論議師の輩皆降伏せり、是故に佛は慧衆を具足したまふを知る。復次に、佛は三藏、十二部經、八萬四千の法聚の是語言多きを見たまふが故に、智慧も亦大

【五】次に佛の解  
脱衆を念ず。

なるを知る。譬へば一居士の清朝に大いに雨る處を見て衆人に語りて言へるが如し、「昨夜の雨龍は、其力甚だ大なり」と。衆人言はく、「汝は何を以てか之を知る」と。答へて言はく、「我は地濕泥し、多くの山崩れ、樹折れ、諸の鳥獸を殺すを見る。此を以ての故に龍の力の大なるを知る」と。佛も亦是の如し、甚深の智慧は、眼の見るところに非ずと雖も、大法雨を雨らせば、諸大論議師及び釋梵天王皆以て降伏せり。是を以て佛の智慧の多きを知るべし。復次に、諸佛は無礙解脱を得たまふが故に、一切の法の中に於て、智慧無礙なり。復次に、佛の此智慧は皆清淨にして諸觀の上に出で、諸法の常相、無常相、有邊相、無邊相、有去相、無去相、有相、無相、有漏相、無漏相、有爲相、無爲相、生滅相、不生滅相、空相、不空相を觀ぜず。常に清淨にして無量なること虚空の如し、是を以ての故に無礙なり。若し生滅を觀すれば不生滅を觀するを得ず、不生滅を觀すれば生滅を觀するを得ず。若し不生滅實ならば生滅は不實、若し生滅實ならば不生滅は不實なり、是の如き等の諸觀に皆爾も無礙智を得るが故に、佛は慧衆を具足したまふを知る。

(二五三) 復次に、佛の解脱衆を具足したまふを念ず。佛は諸の煩惱及び習を解脱し、根本を抜きたまふが故に、解脱は眞にして壞すべからず、一切の智慧を成就するが故に、名けて無礙解脱と爲し、八解脱を成就し、甚深にして遍く得るが故に、名けて具足解脱と爲す。復次に、時解脱及び慧解脱を離るるが故に、便ち具足して其解脱を成就す。是の如き等の解脱を成就するが故に、解脱衆を具足すと名く。復次に、魔軍を破るが故に解脱を得、煩惱

を離るるが故に解脫を得、諸の禪法を離遮するが故に解脫を得。諸の禪定に於て入出自在無礙なるが故なり。復次に、菩薩は見諦道の中に於て、深く十六解脫を得たまふ。一には苦法智相應の有爲解脫、二には苦諦もて十結を斷じ盡して無爲解脫を得、是の如くして乃ち道比智に至る。思惟道の中に十八解脫を得たまふ。一には或は比智、或は法智に相應する有爲解脫、二には無色界の三思惟結を斷するが故に無爲解脫を得、是の如くして乃ち第十八に至り、盡智相應の有爲解脫、及び一切の結使を盡して無爲解脫を得。是の如く諸の解脫和合するを名けて解脫衆を具足すと爲す。

【二六】次に佛の解脫見衆乃至無量の功徳を念す。

(二六)次に、佛の解脫知見衆を具足したまふを念す。解脫知見衆に二種有り、一には佛は諸の煩惱を解脫する中に於て盡智を用て自ら證知したまふ。苦を知り已り、集を斷じ已り、盡を證し已り、道を修し已る、是を盡智と爲す。解脫知見衆は苦を知り已りて復更に知らず、乃至道を修し已りて復更に修せず、是を無生智解脫知見衆と爲す。二には佛は、是人は空門に入りて解脫を得、此人は無相門にして解脫を得、是人は無作門にして解脫を得、是人は方便無くして解脫せしむべく、是人は久久にして解脫を得、是人は久しからずして解脫を得、是人は即時に解脫を得、是人は軟語もて解脫を得、是人は苦教もて解脫を得、是人は雜語もて解脫を得、是人は神通力を見て解脫を得、是人は說法もて解脫を得、是人は姪欲多し、爲に姪欲を増して解脫を得、是人は瞋患多し、爲に瞋患を増して解脫を得べきを知りたまふ。難陀、漚樓頻螺龍の如き是なり。是の如き等の種種の因縁によりて解脫

を得。法眼の中に説くが如し。是諸の解脱の中に於て、了了に知見するは、是を解脱知見衆を具足すと名く。復次に、佛の一切智、一切知見、大慈大悲、十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法等を念じ、佛の知りたまふ所の如く、無量不可思議の諸の功徳を念す、是を念佛と名く。是念は七地の中に在り、或は有漏、或は無漏なり。有漏は有報にして、無漏は無報なり。三根相應の樂、喜、捨根は、行得と亦果報得となり。行得とは、此間の國中にて、念佛三昧を學ぶが如く、果報得とは、無量壽佛國の人の、生るれば便ち自然に能く佛を念するが如し。是の如き等は阿毘曇の中に廣く分別するが如し。

大智度論卷第二十一

大智度論釋初品中八念義第三十六之餘

卷第二十二

聖者龍樹造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

【二】念法の意義を明す。初に法を念ずる者は今世の果を得て熱惱なきを解釋す。

念法とは佛の演説したまへるが如し。行者應に念すべし、是法は巧出なり、今世の果を得て熱惱無く、時を待たずして能く善處に到り、通達無礙なりと。巧出とは二諦に相違せざるが故なり、謂ゆる世諦と第一義諦となり。是れ智者も壞する能はず、愚者も誑を起さず、故に是法も亦二邊を離る。謂ゆる若は五欲の樂を受け、若は苦行を受くるも、復二邊を離る。若は常、若は斷、若は我、若は無我、若は有、若は無、是の如き等の二邊に著せざる、是を巧出と名く。諸の外道の輩は自ら其法を貴んで、他の法を毀賤するが故に巧出なる能はず。今世の果を得とは、愛の因縁、世間の種種の苦を離れ、邪見の因縁、種種の論議鬪諍を離れて、身心安樂なるを得るなり。佛の説きたまへるが如し。

持戒の者は安樂にして、身心熱惱せず

臥するも安く覺むるも亦安く、名覺も亦遠く聞ゆ

復次に、此佛法の中には、因縁展轉して果を生ず、謂ゆる持戒清淨なるが故に心に悔いず、心に悔いざるが故に、法歡喜を生じ、法歡喜の故に身心快樂なり。身心快樂なる

が故に、能く心を攝し、心を攝するが故に如實に知り、如實に知るが故に厭ふを得。厭ふを得るが故に欲を離れ、欲を離るるが故に解脱を得、解脱の果を得れば涅槃を得。是を今世の果を得と名く。外道の法は空しく苦を行じて所得無し。閻浮阿羅漢の道を得る時、自ら説けるが如し。

我昔外道と作り、五十有五年

但乾牛屎を食し、裸形にして棘上に臥せり

「我は是の如きの辛苦を受けたるも竟に所得無し、今佛を見、法を聞くを得て、出家して三日にして所作の事を辦じ、阿羅漢を得るに如かず」と。是を以ての故に佛法は今世の果を得るを知る。問うて曰はく、「若し佛法は今世の果を得ば、何を以ての故に佛の諸の弟子に所得無き者有るや。」答へて曰はく、「行者能く佛の所説の如く、次第に修行せば報を得ざる無し。病人の良醫の教に隨うて、和治の法を將ふれば病の差えざる無きが如し。若し佛の教に隨はず次第に行ぜず、破戒亂心の故に所得無きは、法の不良なるに非ざるなり。復次に、諸の未だ道を得ざる者は、今世に涅槃を得ずと雖も、後世に福樂を受くるを得、漸次に當に涅槃を得べく、終に虚しからざるなり。佛の所説の如し。其れ出家有りて涅槃の爲にする者は、若は遅く若は疾く、皆當に涅槃を得べし」と。是の如き等は能く今世の果を得るなり。熱惱無しとは、熱惱に二種有り、身惱と心惱となり。身惱とは繫縛、牢獄、拷掠、刑戮等にして、心惱とは姪欲、瞋恚、慳貪、嫉妬の因縁の故に憂愁、怖畏等を生ず

るなり。此佛法の中には持戒清淨なるが故に、身に是繫縛、牢獄、拷掠、刑戮等の惱無  
 く、心は五欲を離れ、五蓋を除き、實道を得るが故に、是婬欲、瞋恚、慳貪、嫉妬、邪疑  
 等の惱無し、惱無きが故に熱無し。復次に無漏の禪定は喜樂を生じ、遍身に受くるが故に  
 諸熱則ち除く。譬へば人の大いに熱闘するも、清涼池の中に入るを得れば、冷然清了と  
 して復熱惱無きが如し。復次に、諸の煩惱の、若は見に觸し、若は愛に屬する、是を熱  
 と名く。佛法の中には此無きが故に熱惱無しと名く。時を待たずとは、佛法は時を待たず  
 して行じ、亦時を待たずして果を興ふ。外道の法は日未だ出でざる時は法を受け、日出づ  
 る時は法を受けず、或は日出づる時は受け、日未だ出でざれば受けざる有り。晝受けて夜  
 受けざる有り、夜受けて晝受けざる有り。佛法の中には受くるに時を待つ無し、八聖道を  
 修するに隨うて時に便ち涅槃を得。譬へば火の薪を得れば便ち然ゆるが如く、無漏の智慧  
 の生ずる時は、便ち能く諸の煩惱を燒きて時を待たざるなり。問うて曰はく、佛の説き  
 たまふが如くんば、時業、時衣、時食有り。若し人善根未熟なれば、時を待ちて當に得べ  
 し、何を以て時無しと言ふ。答へて曰はく、此時とは世俗の法に隨ふ、佛法の久しく住す  
 るが爲の故に時戒を結す。若し道を修するを爲し、涅槃及び諸の禪定、智慧微妙の法を  
 得れば時を待たざるなり、諸の外道の法は皆時節を待ち、佛法は但因縁の具足を待つ。  
 若し持戒禪定すと雖も、而も智慧未だ成就せざれば道を成ずる能はず。若し持戒、禪定、  
 智慧、皆成就すれば便ち果を得、復時を待たず。復次に、久久くして果を得るを名けて時

【二】以下三法印を明す。

と爲し、卽して得るは時と名けず。譬へば好染には一び入るれば便ち成ずるが如く、心淨き人も亦是の如し。法を聞きて卽ち染れば法眼淨を得、是を時を待たずと名く。能く善處に到るとは、是三十七の無漏の道法は能く人を將ゐて涅槃に到る。譬へば恆河に入れば必ず大海に至るを得るが如し。諸餘の外道の法は一切智人の所説に非ず、邪見を難ふるが故に將ゐて惡處に至り、或時とは將ゐて天上に至り、還墮ちて苦を受く。皆無常なるが故に善處と名けず。問うて曰はく、「將ゐ去る者有ること無し、云何が將ゐて善處に至るを得る。」答へて曰はく、「將ゐ去る者無しと雖も、但諸法は能く諸法を將ゐ去る。無漏善は五衆を斷ず。五衆の中に強ひて衆生と名け、將ゐ去りて涅槃に入る。風の塵を吹くが如く、水の草を漂はすが如し。將ゐ去る者無しと雖も而も去ること有るべし。復次に、因縁の和合にして、作有る無く、亦將ゐ去る者有る無し。而も果報は因縁に屬して自在を得ず、是を卽ち名けて去ると爲す。通達無礙とは、佛の法印を得るが故に、通達無礙なり、王の印を得れば、則ち留難する所無きが如し。

問うて曰はく、「何等か是れ佛法の印なる。」答へて曰はく、「佛法の印に三種有り、一には一切有爲の法は念念に生滅して皆無常なり。二には一切法は無我なり、三には寂滅涅槃なり、行者は三界は皆是れ有爲にして生滅するを知る。作法は先に有にして、今は無、今は有にして後は無、念念生滅相續して相似に生ずるが故に、見知するを得べし。流水、燈焰、長風の如く、相似て相續するが故に人なり。一衆生は無常法の中に於て常顛倒を爲すを以

ての故に、去る者を是れ常住なりと謂ふ。是を一切作法の無常印と名く。一切法無我とは、諸法は内に主無く作者無く、知無く見無く、生者無く、造業の者無し。一切の法は皆因縁に屬す。因縁に屬するが故に自在ならず、自在ならざるが故に無我なり、我相を得べからざるが故なり、破我品の中に説くが如し。是を無我印と名く。問うて曰はく、「何を以ての故に但作法は無常にして、一切法は無我なりと云ふや。答へて曰はく、「不作法は因無く縁無きが故に不生不滅なり、不生不滅なるが故に名けて無常と爲さず。復次に、不作法の中には、心著顛倒を生ぜず、是を以ての故に是を無常と説かず、説いて無我と言ふべし。有人の説に、「神は是れ常にして遍知の相なり、是を以ての故に一切法の中無我なりと説く」と。寂滅とは是れ涅槃なり。三毒、三衰の火滅するが故に、寂滅の印と名く。問うて曰はく、「寂滅印の中には何を以てか但一法のみにして多く説かざる。答へて曰はく、「初印の中に五衆を説き、二印の中に一切法の皆無我なるを説き、第三印の中に二印の果を説く、是を寂滅印と名く。一切の作法無常なれば則ち我所の外の五欲等を破し、若し無我を説けば内の我法を破す。我と我所とを破するが故に、是を寂滅涅槃と名く。行者は作法の無常なるを觀じて便ち厭を生じ、世苦を厭ふ。既に苦を厭ふを知りて、著を存し、主と觀じて、「能く是觀を作す」と謂ふ。是を以ての故に第二の法印有りて一切は無我なりと知り、五衆、十二入、十八界、十二因縁の中に於て、内外を分別し推求して、主の不可得なるを觀す。不可得なるが故に、是一切法は我作無し。是の如く知り已りて戲論を作さず、依止する所

無く、但滅に歸す、是を以ての故に寂滅涅槃を説く。問うて曰はく、「摩訶衍の中には、  
 諸法は不生不滅にして、一相謂ゆる無相なりと説く、此中には云何が一切有爲の作法は無  
 常にして、名けて法印と爲すと説く。二法は云何が相違せざる。」答へて曰はく、「無常を觀  
 ずるは即ち是れ空を觀するの因縁なり。色は念念に無常なりと觀するが如きは即ち空と爲  
 すを知る。過去の色は壞滅して見るべからざるが故に色相無く、未來の色は生ぜず作無  
 用無く、見るべからざるが故に色相無く、現在の色も亦住する無く、見るべからず、分別  
 して知るべからざるが故に色相無し。色相無ければ即ち是れ空なり。空なれば即ち是れ無  
 生無滅なり。無生無滅及び生滅は、其實是れ一にして説くに廣略有るのみ。問うて曰は  
 く、「過去未來の色は見るべからざるが故に色相無きも、現在の色は住する時は見るべし、  
 云何が色相無しと言ふ。」答へて曰はく、「現在の色も亦住する時無し。四念處の中に説くが  
 如し。若し法の後に壞相を見れば、當に初め生ずる時より壞相有るを知るべし、隨逐の微細  
 なるを以ての故に識らざるのみ。人の辰を著くるが如きは、若し初日に新にして、故きこ  
 と有る無ければ、後應に常に新なるべく、故きこと有るべからず。若し故きこと無くんば  
 是れ常なるべく、常なるが故に罪無く福無く、罪無く福無ければ、則ち道俗の法亂る。復  
 次に、生滅の相は常に作法に隨うて住する時有る無し、若し住する時有れば則ち生滅無し。  
 是を以ての故に現在の色は住する有る無く、住の中にも亦生滅有ること無し。是一念の中  
 の住も亦是れ有爲法なるが故なり。是を通達無礙と名く。是の如く應に法を念すべし。

【三】次に佛の演説したまふ法聚を念すべきことを明す。

復次に、法に二種有り。一には佛の演説したまふ所の三藏十二部、八萬四千の法聚なり。二には佛の説きたまふ所の法義、謂ゆる持戒、禪定、智慧、八聖道及び解脫果、涅槃等なり。行者は先づ當に佛の演説したまふ所を念すべく、次に當に法義を念すべし。佛の演説したまふ所を念すとは、佛語は美妙にして皆眞實なり、大饒益有り、佛の演説したまふ所は亦深く亦是淺し。實相を觀するが故に深く、巧に説くが故に淺し。重語して失無く、各各義有るが故に佛の演説したまふ所は四處に住し、四種の功德莊嚴有り。一には慧處、二には諦處、三には捨處、四には滅處なり。四種の答有るが故に壞すべからず。一には定答、二には解答、三には反問答、四には置答なり。佛の演説したまふ所は、或時は聽いて遮し、或時は遮して聽き、或は聽いて遮せず、或は遮して聽かず、此四は皆順從して違ふ無し。佛説は諸の法相を得んが故に戲論無く、義理有りて説くが故に有無の論を破る。佛の演説は第一義に隨順して世間の法を説くと雖も、亦咎無し。二諦と相違せざるが故に利益に隨順して説き、清淨の人のの中に於ては美妙と爲し、不淨人のの中に於ては苦惡と爲すと。美語苦語の中に於ても亦過罪無し。佛法は皆善法に隨ふも、亦善法に著せず、是垢法は怨家なりと雖も、亦以て高ぶるを爲さず、種種に訶する所有りと雖も、亦訶の罪有る無く、種種に法を讚すと雖も亦依止する所無し。佛の言説の中には亦増無く減無く、或は略、或は廣なり。佛語は初善にして久久に研求するも亦善なり。佛語は多しと雖も義味薄からず、種種に雜語すと雖も義も亦亂れず。能く人心を引くと雖も亦人をして愛著を生ぜ

【四】次に法の義を念ずべきを明す

しめず、殊畏高顯なりと雖も亦人をして畏難せしめず。遍く到る所有りと雖も、凡小の人は亦解する能はず。佛語は是の如く種種希有の事有りて、能く人の衣毛をして繋つことを爲し、流汗し、氣は身體に満ちて戰懼せしめ、亦能く諸天をして心厭ひ、聲は十方に滿ち、六種に地を動し、亦能く人をして、無始より世界に堅著する所の者をしては能く捨てしめ、堅著ならざる所の者には能く樂しましむ。佛語は罪惡の人、之を聞けば自ら罪有るが故に憂怖慙慙し、善く一心に精進して道に入る。人聞けば甘露味を服するが如く、初も亦好く中も亦好く、後も亦好し。復次に、多くの會衆の中、各各聞く所有らんと欲するに、佛は一言を以て答へたまふに、各各解を得、各各自ら佛は獨り我爲に説きたまふと見る。大衆の中に於て遠近有りと雖も、聞く者には聲に増減無く、三千大千世界乃至十方無量の世界に滿ち、度すべき者は聞き、度すべからざる者は聞かず。譬へば雷霆地に震へども聾者は聽かず、聽者は悟り得るが如し。是の如く種種に佛の言語を念ず。

何等か是れ法義なる。信、戒、捨、聞、定、慧等を道と爲す。諸の善法及び三法印は通達の中に説くが如し。一切有爲法は無常なり、一切法は無我なり、寂滅涅槃なり、是を佛法の義と名く。是三印は一切の論議師も壞する能はざる所なり。種種に多く所説有りと雖も、亦能く諸法の性を轉ずる者無し。冷相は能く轉じて熱からしむる無きが如し。諸法の性は壞すべからず。假使人をして能く虚空を傷けしむるも、是諸法印は如法にして壞すべからず。聖人は是三種の法相を知り、一切の邪見に依止して各鬪諍する處に於て離る

るを得たまふ。譬へば有目の人、群盲の種種に色相を諍ふを見て、怒んで之を笑ひ、與共に諍はざるが如し。問うて曰はく、「佛は聲聞法には四種の實有り、摩訶衍の中には一實有りと説きたまふ。今何を以ての故に三實を説く。」答へて曰はく、「佛は三種の實法印を説きたまふ。廣く説けば則ち四種、略して説けば則ち一種なり。無常は即ち是れ苦諦、集諦、道諦の説、無我は則ち一切法の説、寂滅涅槃は即ち是れ盡諦なり。復次に、有爲の法は無常にして、念念に生滅するが故に皆因縁に屬して、自在有る無し、自在有る無きが故に無我なり、無常、無我、無相なるが故に心著せず、無相にして著せざるが故に、即ち是れ寂滅涅槃なり。是を以ての故に摩訶衍の法の中に、一切の法は不生不滅にして、一相は謂ゆる無相なりと説くと雖も、無相は即ち寂滅涅槃なり。是念法三昧、緣智緣盡は、諸菩薩及び辟支佛の功德なり。

【五】以下念佛の義釋。初に佛子の戒衆等の具足せるを念すべきを明す

問うて曰はく、「何を以ての故に念佛には、但佛身中の無學の諸の功德を緣じ、念佛三昧には佛弟子の身中の諸の學無學の法を緣じ、餘殘の善無漏の法を皆念法三昧の所緣とするや。」答へて曰はく、「迦旃延尼子は是の如く説けり。「摩訶衍の人は説く、三世十方の諸佛及び諸佛の初發意より、乃至法盡まで、其中間の所作の功德神力に於て、皆是れ念佛三昧の所緣なり」と。佛の所説及び所説の『法義經』の如くんば、「一句一偈より乃至八萬四千の法聚、信、戒、捨、聞、定、智慧等の諸の善法乃至無餘涅槃は、皆是れ念法三昧の所緣なり。諸の菩薩辟支佛及び聲聞衆、佛を除きて餘殘の一切の聖衆及び諸の功德は、

是れ念佛三昧の所縁なり」と。念佛とは是れ佛弟子衆の戒衆具足、禪定衆、智慧衆、解脫衆、解脫知見衆の具足なり。四雙八輩は應に供養、恭敬、禮事を受くべし、是れ世間無上の福田なり。行者は應に念すべし、佛の讚じたまふ所の僧の如くんば、若は聲聞僧、若は辟支佛僧、若は菩薩僧の功德、是れ聖僧なり。五衆の具足は上説の如し。問うて曰はく、  
 『先に已に五衆を以て佛を讚ぜり、云何が復五衆を以て僧を讚ずる。』答へて曰はく、  
 『弟子の得る所の五衆に隨うて具足を讚ず。具足に二種有り、一には實の具足、二には名の具足なり。佛弟子の應に得べき所の者を盡く得て讚ずるが如きは是れ名の具足と名く、佛の得たまふ所を讚ずるが如きは、是れ實の具足と名く。復次に、外道の出家衆、在家衆に異なるを爲さんと欲するが故に是の如きの讚を作す。外道の在家の衆は其富貴、豪尊、勢力を讚じ、出家衆は其邪見、苦行、染著、智慧、執論、評競を讚す。念佛の衆中に或は持戒、禪定、智慧等少くして稱するに足らざる有り。此を以ての故に佛は自ら弟子衆の一切功德の根本の住處たる戒衆の具足、乃至解脫知見衆の具足を讚じたまふ。是戒衆の中に住して傾動せず、禪定の弓を引きて智慧の箭を放ち、諸の煩惱の賊を破りて解脫を得、是解脫の中に於て知見を生ず。譬へば健人の先づ足を安じて弓を挽き、箭を放ちて能く怨敵を破し、二怖を出すを得、罪を玉に免れ、難を陣に抜き、決了して知見し、賊は已に破滅して心に歡喜を生ずるが如し。是故に五衆を以て讚す。供養すべしとは、五衆の功德を具足せるが故なり。富貴豪勢の人は人の宗敬する所なるが如く、佛弟子衆も亦是の如く、淨戒、

【薄拘羅】 ヲツク  
 (Vakkula) 善容  
 と譯す。  
 【鹽婆尸】 ギバシ  
 (Vivasi) 淨觀  
 と譯す。過去七佛  
 の第一。  
 【阿梨勒果】 ハリ  
 タキ (Haritaki) 藥  
 果なり。  
 【二十億】 梵にシ  
 ヌローナコーテイ  
 ナムシヤ (Srotriko  
 tivinsā) と云ふ。

禪定、智慧の財富み、解脫解脫知見の勢力を有するが故に供養、恭敬、入堂、禮事に應ず。世間無上の福田とは、施主に二種有り、貧者と富者となり。貧者は禮事、恭敬、迎送して而も果報を得、富者も亦よく恭敬、禮事、迎送し、又財物を以て供養して而も果報を得、是故に名けて世間無上の福田と爲す。譬へば良田は耕治し調柔し、時を以て種を下し、灌漑豐渥すれば獲る所必す多きが如し。衆僧の福田も亦復是の如し、智慧の物を以て結使の根を耕出し、四無量心を以て磨治調柔し、諸の精越、信施の穀子を下し、灌漑に念施、恭敬の清淨の心水を以てすれば、若は今世、若は後世に無量の世間の樂を得、及び三乘の果を得。薄拘羅比丘の如きは、鹽婆尸佛の時、一の阿梨勒果を以て衆僧に供養し、九十一劫に天上、人中に福樂の果を得、常に疾病無く、今釋迦牟尼佛に値ひ、出家し、漏を盡して阿羅漢を得、沙門の二十億の如きは、鹽婆尸佛の時、一の房舎を作り、物を以て地を覆へて衆僧を供養し、九十一劫に、天上人中に福樂の果を受け、足は地を踏まず、生ずる時足の下の毛の長さ二寸、柔軟淨好なり。父、見て歡喜し二十億兩の金を與ふ。佛を見、法を聞いて阿羅漢を得、諸の弟子の中に於て精進第一なりき。是の如き等の少施は大果報を得。是故に世間無上の福田と名く。僧中に四變八輩有りとは、佛の世間無上の福田を説きたまふ所以は、此八輩の聖人有るを以ての故に無上の福田と名くるなり。問うて曰はく、『佛の給孤獨居士に告げたまふ如くんば、世間の福田にして供養に應ずる者に二種有り。若は學人、若は無學人なり。學人に十八、無學人に九有り』と。今此中に何を以ての故に但

【家】一來向中  
 にて縁果を證する  
 聖者。此に二種ある  
 欲惑三品を斷じて  
 既の四品即ち三生  
 餘すもの。即ち三  
 家を斷じて、餘の五  
 家を斷じて、餘の五  
 品を滅し、餘の五品  
 即ち二生を餘すも  
 の。此聖者は、三  
 又は二生の間、家  
 より家に轉生して  
 縁果を證し、涅槃  
 に入るが故に、涅槃  
 といふ。僧は涅槃に  
 趣くの眞伴の故に  
 念ずべし。

八を説く。答へて曰はく、「彼は廣く説くが故に十八及び九なり、今此は略して説くが故に八なり。彼に七聖人は皆此八に攝す。信行法行は或は向須陀洹に攝し、或は向斯陀舍に攝し、或は向阿那含に攝す。家家は向斯陀舍に攝し、一種は向阿那含に攝し、五種阿那含は向阿羅漢に攝し、信行法行の思惟道に入るを信解脫見得と名く。是信解脫見得に十五の學人を攝し、九種の福田に阿羅漢を攝す。

復次に、行者は應に僧を念すべし、僧は是れ我涅槃に趣く眞の伴なり。一戒一見も是の如し、應に歡喜して一心に恭敬順從して違ふ無かるべし。我は先に種種の衆惡、妻子、奴婢、人民等を作とす。是れ三惡道に入るの伴なり。今聖人の伴を得、安隱にして涅槃に至る。佛は醫王の如く、法は良藥の如く、僧は病を醫する人の如し。我は當に清淨の持戒を正憶念すべし。佛の所説の法藥の如きは、我當に順從すべし。僧は是れ我諸の結病を斷ずる中の一因縁なり。謂ゆる病を醫するの人なり、是故に當に僧を念すべし。復次に、僧には無量の戒、禪定、智慧等有りて具足し、其徳は測量すべからず。一の富貴の長者の如きは僧を信樂し、僧の執事の人に白さく、「我は次第に僧を請じ、舍に於て食せしめん」と。日日に次請して、乃ち沙彌に至るに、執事は沙彌の請を受くるを聽さず。諸の沙彌言はく、「何の意を以ての故に沙彌を聽さざる」と。答へて言はく、「積越は年少を請するを喜ばざるを以ての故なり」と。便ち偈を説いて言はく、  
 鬚髮白きこと雪の如く、齒は落ち皮肉は鐵み

儂歩して形體羸せたる、是の如きの輩を請するを樂む  
 諸の沙彌等は皆是れ大阿羅漢なり。師子の頭を打つが如く、歎然として坐より起ち、  
 偈を説きて言はく、

檀越の無智の人は、形を見て徳を取らず

是少年の相を捨てて、但老い瘦せ黒みたるを取る

上尊の耆年の相とは、佛の偈に説きたまへるが如し。

謂ゆる長老の相は、必ずしも年耆に

形瘦せ鬚髮白く空しく老いて、内に徳無きを以てせず

能く罪福の果を捨て、精進に梵行を行じ

已に一切の法を離れたる、是を名けて長老と爲す

是時、諸の沙彌は復是念を作さく、「我等は此檀越の、僧の好惡を品量するを坐觀すべ

からず」と。即ち復偈を説く、

讚歎呵罵の中に、我等の心は一なりと雖も

是人は佛法を毀る、應に教誨せざるべからず

當に疾く其舎に到り、法を以て之に教へ語るべし

我等度せずんば、是れ則ち物を棄つると爲す

即時に諸の沙彌は、自ら其身を變じて、皆老年と成り、鬚髮白きこと雪の如く、秀眉

は垂れて眼を覆ひ、皮の皺は波浪の如く、其脊は曲ること弓の如く、兩手杖に負はれて行  
き、次第に請を受け、身を擧げて皆振掉し、行止自ら安からざること、譬へば白楊樹の風  
に隨うて動搖するが如し。檀越は此輩を見て歡喜し、迎へ入れて坐せしむ。坐し已りて須  
臾の頃に、還年少の形に復す。檀越は驚怖して言はく、

是の如きの耆老の相、還變じて少身と成る

還年の藥を服するが如し、是事は何に由りてか然る

諸の沙彌言はく、汝疑畏を生ずる莫れ、我等は非人に非ず。汝は偈を平量せんと欲  
す、是事は甚だ傷むべし。我等相憐愍するが故に是の如きの化を現す。汝は當に深く之を  
識るべし、聖衆を量るべからず。説くが如くんば、

譬へば蚊の喙を以て、猶海底を測るべきが如く

一切の天と人と、能く偈を量る者無し

偈の功德の貴きを以てすら、猶尙分別せず

而るに汝は年歳を以て、諸大徳を稱量す

大小は智に生じ、老少に在らず

智有りて勤めて精進すれば、少なりと雖も而も是れ老なり

懈怠し智慧無くんば、老なりと雖も而も是れ少なり

汝今偈を平量す、是れ則ち大なる失爲り。一指を以て大海の底を測り知らんと欲する

が如く、智者の爲に笑はる。汝は佛の四事を説きたまふを聞かずや。小なりと雖も輕んずべからず。太子は小なりと雖も當に國王と爲るべし、是れ輕んずべからず。蛇の子は小なりと雖も亦能く人を殺す、亦輕んずべからず。小火は微なりと雖も能く山野を燒く、又輕んずべからざるなり。沙彌は小なりと雖も聖神通を得、最も輕んずべからず。又四種の人有り、菴羅菓の、生にして熟に似、熟にして生に似、生にして生に似、熟にして熟に似たるが如し。佛弟子も亦是の如し、聖の功德成就する有りて、而も威儀語言善人に似ず、威儀語言の善人に似たる有りて、而も聖の功德成就せず。威儀語言善人に似ず、聖の功德未だ成就せざる有り。威儀語言善人に似、而も聖の功德成就せる有り。汝云何が是言を念ぜずして僧を稱量せんと欲するや。汝若し僧を毀らんと欲せば、則ち是れ自ら毀ると爲す、汝は大なる失を爲せり。過ぎたる事は追ふべからず、方に善心を來して、諸の疑悔を除き去し、我説く所を聽くべし。

聖業は量るべからず、威儀を以て知ること難し

族姓を以てすべからず、亦多聞を以てせず

亦威徳を以てせず、又善年を以てせず

亦嚴密を以てせず、復辯説を以てせず

聖業の大海水は、功德の故に甚だ深し

佛は百事を以て是僧を讃じたまふ、之に施せば少なりと雖も果を得ること多く

是第三の寶聲は遠く聞ゆ、是を以ての故に應に僧を供養すべし

是老少、多知、少聞及び明闇を分別すべからず

人の林を觀るに伊蘭、瞻蔔、及び薩羅を分別せざるが如し

汝僧を念せんと欲せば當に是の如くすべし。愚を以て聖を分別すべからず

摩訶迦葉の出家せし時、納衣の價直十萬金なりき

乞人下賤の服を作らんと欲して、更に麁弊なるを求むるに得る能はず

聖衆の僧の中も亦是の如し、最下小の福田を求索するに

能く施す者をして十萬倍ならしむ、更に如かざらんと求むるも得べからず

衆僧の大海水には、結戒を畔際と爲す

若し戒を破る者有れば、終に僧數に在らず

譬へば大海水の死屍と共に、宿らざるが如し

檀越は是事を聞き、是神通力を見て、身驚き毛は豎ち、合掌して諸の沙彌に白して言

さく、「諸の聖人、我今懺悔す、我は是れ凡夫の人なり、心に常に罪を懷く、我に少疑有

り、今請問せんと欲す」と。偈を説いて言はく、

大徳、已に疑を過ぐ、我、今遭遇するを得たり

若し復諮問せずんば、則ち是れ愚中の愚ならん

諸の沙彌言はく、「汝問はんと欲せば便ち問へ、我當に聞く所を以て答ふべし」と。檀

越問うて曰はく、「佛寶の中に於て信心清淨なると、僧寶の中に於て信心清淨なると、何者か福勝る」と。答へて曰はく、「我等は初より僧寶、佛寶に増減有るを見ず、何を以ての故に。佛、一時、舍婆提に乞食したまふ。一の婆羅門有り、姓は婆羅埵逝なり。佛數數其家に到りて食を乞ひたまふに、心に是念を作さく、「是沙門は何を以てか來ること數數にして、其債を負ふが如くなる」と。佛、時に偈を説きたまはく、

時雨數數墮つれば、五穀數數成り

數數福業を修すれば、數數果報を受く

數數生法を受くるが故に、數數死を受く

數數聖法成せば、誰か數數生死せん

婆羅門は是偈を聞き已りて是念を作さく、「佛大聖人は具に我心を知りたまふ」と。慍愧して鉢を取り、舍に入りて美食を成滿し、以て佛に奉上するに、佛は受けずして、是言を作したまはく、「我、偈を説くが爲の故に得たる此食は、我、食せず」と。婆羅門言さく、「是食は當に誰にか與ふべき」と。佛言はく、「我天及び人の能く是食を消せん者を見ず、汝持し去りて、少草の地に置き、虫無き水中に著け」と。即ち佛の教の如く食を持して、虫無き水中に著くるに、水即ち大いに沸き、烟火俱に出でて、大熱鐵を投ずるが如し。婆羅門見已りて驚怖して言さく、「未曾有なり、乃至食中の神力是の如し」と。還佛の所に到り、頭面に佛の足を禮し、懺悔して出家し、戒を受けんと乞へり。佛「善來」と言へば、即時

に鬚髮自ら墮ちて便ち沙門と成り、漸漸に結を斷じて阿羅漢道を得たり。復摩訶橋曇彌有り、金色の上下の寶衣を以て佛に奉れり。佛は樂僧の受用の堪能なるを知めし、橋曇彌に告げたまはく、「此上下の衣を以て衆僧に與へよ」と。是を以ての故に佛寶と僧寶とは、福に多少無きを知る。檀越言はく、「若し佛の爲に布施するを僧能く消し、能く受けば、何を以ての故に、婆羅埤迦婆羅門の食を、佛は僧をして食せしめたまはざる」と。諸の沙彌答へて言はく、「僧の大力を顯さん爲の故なり。若し食の水中に在りて大神力有るを見ずんば、以て僧力の大爲るを知る無けん。若し佛の爲に物を施すすら僧受くるを得、便ち僧力の大爲るを知る。譬へば藥師の毒藥を試みんと欲し、先づ以て鷄に與ふるに、鷄即時に死す、然る後に自ら服して、乃ち藥師の威力の大なるを知るが如し。是故に檀越、當に知るべし、

若し人佛を愛敬せば、亦當に僧を愛敬すべし

當に分別有るべからず、同じく皆寶なるが故なり

爾時、檀越は是事を説くを聞いて、歡喜して言はく、「我某甲、今日より若し僧數の中に入る有らば、若し小なるも、若し大なるも、一心に信敬して敢て分別せざらん」と。諸の沙彌言はく、「汝心に無上の福田を信敬す、久しからずして當に道を得べし。何を以ての故に、

多聞及び持戒、智慧、禪定は

皆僧數の中に入ること、萬川の海に歸するが如し

譬へば衆の藥草は、雪山に依止し

百穀、諸の草木は、皆地に依止するが如く

一切の諸の善人は、皆僧數の中に在り

復次に、汝等曾て佛の長鬼神將軍の爲に、三善男子の阿泥盧陀、難提、迦翅彌羅を讀じ

たまへるを聞くや不や。佛言はく、「若し一切世間の天及び人、一心に三善男子を念せば、

長夜に無量の利益を得ん」と。是事を以ての故に倍當に僧を信敬すべし。是三人は僧と

名けす。佛説きたまはく、「三人を念するすら、是の如きの果報有り、何に況んや一心清淨

に僧を念するをや」と。是故に檀越當に力に任せて僧の名を念すべし、偈に説くが如し。

是諸の聖人衆は、則ち雄猛の軍を爲して

魔王の賊を摧滅す、是を伴とすれば涅槃に至る

諸の沙彌は檀越の爲に種種に僧聖の功德を説き、檀越は聞き已り、家を擧げて大小、

皆四諦を見、須陀洹道を得たり。是因縁を以ての故に、應當に一心に僧を念すべし。

念戒とは、戒に二種有り、有漏戒と無漏戒となり。有漏に復二種有り、一には律儀戒、

二には定共戒なり。行者の初學は、是三種の戒を念じて、三種を擧し已れば、但無漏戒を

念す、是律儀戒は能く諸惡をして自在なるを得ざらしめ、枯朽し折滅す。禪定戒は能く諸

の煩惱を遮す、何を以ての故に。内樂を得るが故に、世間の樂を求めざればなり。無漏戒

【七】 以下念戒を明す。

は能く諸の悪煩惱の根本を抜く故なり。問うて曰はく、「云何が戒を念ずる。答へて曰はく、先に念佛の中に説くが如く、佛は醫王の如く、法は良薬の如く、僧は病を醫する人の如く、戒は服薬の禁忌の如し。行者自ら念ずらく、「我若し禁忌に隨はずんば、三寶は我に於て所益無しと爲す。又導師の好道を指示するが如し、行者の用ひざるも導師に咎無し、是を以ての故に我應に戒を念すべし」と。復次に、是戒は一切善法の所住の處なり。譬へば百穀薬木の地に依りて生ずるが如し。持戒清淨なれば能く諸の深禪定、實相の智慧を生じ長ず。亦是れ出家人の初門、一切の出家人の依仗する所、涅槃に到るの初因縁なり。説くが如くんば戒を持つが故に心悔いず、乃至解脱涅槃を得。行者は清淨戒を念す、不戒、不破戒、不穿戒、不雜戒、自在戒、不著戒なり。智者の讚する所の戒は諸の瑕隙無きを名けて清淨戒と爲す。云何が不戒と名くる。五衆戒の中、四重戒を除きて諸餘の重を犯す者は是を缺犯と名け、餘の罪は是を破と爲す。復次に、身罪を缺と名け、口罪を破と名く。復次に、大罪を缺と名け、小罪を破と名く。善心にして涅槃に廻向し、結使種種の悪覺の觀をして、入るを得しめざる、是を不穿と名く。涅槃の爲、世間の爲に二處に向ふ、是を名けて雜隨戒と爲す。外縁に隨はず、自在にして人に繫屬せらるる無きが如く、是淨戒を持して愛結の爲に拘はれざる、是を自在戒と爲す。戒に於て愛慢等の諸の結使を生ぜず、戒の實相を知り、亦是戒を取らず。若し是戒を取らば譬へば人の罔罔に在りて桎梏に拘はれ、赦を蒙るを得と雖も、復金鎖の爲に繋がるが如く、人、恩愛の煩惱

【復次に智所讚とは等】下知所讚戒を釋する中、重ねて八正道を解説す

の爲に繋（つな）がれて牢獄（らうごく）に在（あ）るが如（ごと）く、家（いへ）を出（い）づるを得（え）ずと雖（いへど）、禁戒（きんがい）に愛著（あいぢやく）すること金鎖（こんさ）を著（つ）くるが如（ごと）し。行者（ぎやうじや）若（も）し戒（かい）は是（こ）れ無漏（むろう）の因縁（いんえん）なりと知（し）りて而（し）も著（やく）を生（し）ぜず、是（こ）れ則（すなは）ち解脱（げつたつ）して繫縛（けいばく）せらるること無（な）し、是（こ）れ不著（ふぢやく）戒（かい）と名（な）く。諸佛（しよぶつ）、菩薩（ぼさつ）、辟支佛（びやくしぶつ）及び聲聞（しやうもん）の讚（さん）する所の戒（かい）、若（も）し是（こ）れ戒（かい）を行（い）じ、是（こ）れ戒（かい）を用（もち）ふるは、是（こ）れ智所讚（ちしよさん）戒（かい）と名（な）く。外道（げだう）の戒（かい）とは、牛戒（ぎうかい）、鹿戒（ろくかい）、狗戒（かうかい）、羅刹鬼戒（らさつきかい）、啞戒（やかい）、鬻戒（ゆかい）、是（こ）の如（ごと）き等の戒（かい）は智（ち）の讚（さん）せざる所（ところ）なり、唐（たう）しく苦（くる）んで善報（ぜんぱう）無（な）し。復次（まづ）に、智所讚（ちしよさん）とは三（さん）種の戒（かい）の中に於（お）て無漏（むろう）戒（かい）なり。破（やぶ）れず、壞（な）せず、此（こ）れ戒（かい）に依（よ）りて實智慧（じつぢい）を得（え）ず、是（こ）れ聖所讚（じやうしよさん）戒（かい）なり。無漏（むろう）戒（かい）に三（さん）種（しゆ）有り、佛（ぶつ）の説（と）きたまふが如（ごと）くんば、正語（じやうご）、正業（じやうご）、正命（じやうめい）は是（こ）れ三（さん）業（ごう）なり。義（ぎ）は八（はつ）正道（じやうだう）の中に説（と）くが如（ごと）し。是（こ）れ中に應（まさ）に廣（ひろ）く説（と）くべし。問（と）うて曰（い）はく、『若（も）し持戒（ぢがい）は是（こ）れ禪定（ぜんぢやう）の因縁（いんえん）、禪定（ぜんぢやう）は是（こ）れ智慧（ぢい）の因縁（いんえん）ならば、八（はつ）正道（じやうだう）の中に何（なに）を以（もつ）てか慧（け）は前（まへ）に在（あ）り、戒（かい）は中（なか）に在（あ）り、定（ぢやう）は後（あ）りに在（あ）るや。』答（こた）へて曰（い）はく、『行路（ぎやうろ）の法（ほふ）は應（まさ）に先（ま）づ眼（まなこ）を以（もつ）て道（みち）を見て、而（し）して後（あ）て行（い）くべし、行（い）く時（とき）は當（まさ）に精勤（しやうきん）すべし、精勤（しやうきん）して行（い）く時（とき）は、常（つね）に念（ねん）じて導師（だうし）の教（を）ふる所（ところ）の如（ごと）くし、念（ねん）じ已（お）りて一（いつ）心に路（みち）を進（すす）めば非道（ひだう）に順（したが）ふざるなり。正見（じやうけん）も亦（また）是（こ）の如（ごと）し、先（ま）づ正智慧（じやうぢい）を以（もつ）て、五（ご）受衆（じゆじゆ）は皆（みな）苦（くる）なりと觀（くわん）ず、是（こ）れ苦（くる）と名（な）く。苦（くる）は愛等（あいとう）の諸（しよ）の結使（けつし）の和合（わがふ）より生（な）ず、是（こ）れを集（しふ）と名（な）く。愛等（あいとう）の結使（けつし）減（げん）するは是（こ）れ淫弊（ねんべい）と名（な）く。是（こ）の如（ごと）き等の八（はつ）分（ぶん）を觀（くわん）するを名（な）けて道（だう）と爲（な）し、是（こ）れ正見（じやうけん）と名（な）く。行者（ぎやうじや）は是（こ）れ時（とき）、心（こころ）定（ぢやう）りて世間（せけん）の虚妄（こゝろ）の棄（す）つべく、淫弊（ねんべい）の實法（じつぽふ）の取（と）るべきを知（し）りて、是（こ）れ是（こ）れ事（こと）を決定（けつぢやう）す、是（こ）れ正見（じやうけん）と名（な）く。是（こ）れ是（こ）れ事（こと）を知（し）るの心力（しんりき）、未（いま）だ大（だい）ならず、未（いま）だ發行（はつぎやう）する能（あた）はず、思惟（しゆい）籌量（ちゆうりやう）して、正見（じやうけん）を發動（はつどう）

して力を得しむ、是を正思惟と名く。智慧既に發し、言を以て宣べんと欲するが故に正語を次にし、正業、正命は戒を行ふ時、精進して懈らず、色、無色定の中に住せしめず、是を正方便と名く。是正見を用ひて四諦を觀じ、常に念じて忘念せず。一切の煩惱は是れ賊なり、應當に捨つべし。正見等は是れ我眞の伴なり、應當に隨ふべしと。是を正念と名く。四諦の中に於て心を攝して散ぜず、色無色定の中に向はしめず、一心に涅槃に向ふ、是を正定と名く。是に初めて善の有漏を得るを名けて煖法、頂法、忍法の中の義と爲す。次第に増進して初中後心、無漏心の中に入り、疾く一心の中に具し、前後分別次第有ること無く、正見は正思惟、正方便、正念、正定と相應し、三種の戒は是分分行に隨ふ。正見は好醜を分別して利益を事と爲し、正思惟は正見を發動するを事と爲し、正語等は是智慧、諸の功德を持して散失せしめず、正方便は驅策して速に進んで息まざらしめ、正念は七事所應の行者憶して忘れず、正定は心を清淨にして濁らず亂れざらしめ、正見をして七分を成するを得しめざること、風無き房中に燈すれば則ち照明了了なるが如し。是の如き無漏戒は八聖道の中に在り、亦智者の爲に讚せらる。問うて曰はく、無漏戒は應に智者の爲に讚せらるべし、有漏戒は何を以て讚するや。答へて曰はく、有漏戒は無漏に似、無漏に隨うて同じく因縁を行す、是故に智者は合せ讚す。賊中に入有りて叛き來りて我に歸するが如し。彼も是れ賊なりと雖も、今來りて我向へり、我當に之に由りて以て賊を破すべし、何んが念ぜざるべけん。諸の煩惱の賊は、三界の城中に在りて住す、有

【八】以下念道を明す。初に財施を

漏洩の善根なる若は煖法、頂法、忍法、世間第一法は、餘の有漏法と異なるが故に、行者は受用す。是因縁を以ての故に、諸の結使の賊を破して、善法忍なる無漏の法財を得。是を以ての故に智者の讀する所なり、是を念戒と名く。

念捨とは、二種の捨有り、一には施、二には諸の煩惱を捨するなり。施捨に二種有り、一には財施、二には法施なり。三種の捨の和合するを名けて捨と爲す。財施は是れ一切善法の根本なるが故に、行者は是念を作さく、「上の四念の因縁の故に煩惱の病を差すを得、今何の四縁を以ての故に是因念を得る」と。則ち是れ先世今世に三寶の中に於て、少しく布施の因縁有るが故なり。所以は何ん。衆生は無始の世界の中に於て三寶の中の布施を知らざるが故に、福皆盡滅す、是三寶に無量の法有り、是故に施も亦盡きず、必ず涅槃を得。復次に、過去の諸佛は初發心の時、皆少多の布施を以て因縁と爲したまふ。佛の説きたまふが如くんば、「是布施は是れ初助道の因縁なり」と。復次に、人命は無常なり、財物は電の如し、若し人乞はざるも猶尙與ふべし。何に況んや乞はんに而も施さざらんや。是を以て應に施作は助道の因縁なるべし。復次に、財物は是れ種種の煩惱、罪業の因縁なり。若し持戒、禪定、智慧は種種の善法にして是れ涅槃の因縁なり、是を以ての故に財物は尙應に自ら棄つべし。何に況んや好福田の中に而も布施せざらんや。譬へば兄弟二人有りて、各十斤の金を擔うて道中を行くに、更に餘伴無きが如し。兄は是念を作さく、「我は何を以てか弟を殺して金を取らざる、此曠路の中には人の知る者無し」と。弟も復念

を生じて、兄を殺して金を取らんと欲す、兄弟各悪心有りて語言し視瞻するに皆異り。兄弟即ち自ら悟り、還りて悔心を生ずらく、「我等は人に非ず、禽獸と何んが異ならん。同じく兄弟と生れて、少金の爲の故に而も悪心を生ず」と。兄弟共に深水の邊に至るに、兄は金を以て水中に投著す。弟言はく、「善哉、善哉」と。弟も次いで復金を水中に乗つ。兄復言はく、「善哉、善哉」と。兄弟更互に相問はく、「何を以ての故に善哉と言ふ」と。各相答へて言はく、「我此金を以ての故に、不善心を生じ、相危害せんと欲す、今之を棄つるを得るが故に、善哉と言ふ」と。一辭各爾なり。是を以ての故に財は悪心の因縁なりと知り、常に應に自ら捨つべし、何に況んや施は大福を得るに、而も施さざらんや。説くが如くんば、

施を行寶藏と名け、亦善親の友と爲す

始終相利益し、能く壞する者有ること無し

施を好密蓋と爲す、能く飢渴の雨を遮す

施を堅牢の船と爲す、能く貧窮の海を渡る

慳を凶衰の相と爲す、之が爲に憂畏を生ず

之を洗ふに施水を以てすれば、則ち爲に福利を生ぜん

慳惜して衣食せずんば、身を終るまで歡樂無く

財物有りと言ふと雖も、貧困と異なる無し

慳人の室宅は、譬へば丘塚墓の如く

求者に遠く之を遠け、終に向ふ者有る無し

是の如き饑餓の人は、智者に損棄せられ

命氣未だ盡きずと雖も、死と等しくして異なる無し

憚人は慈悲無く、施に於て堅要無く

當に死坑に墮すべきに隨んで、懸惜して懊恨を生ず

涕泣して當に獨り去るべく、憂悔の火身を免ぐ

好施の者は安樂にして、終に此苦有ること無く

人の布施を修する者は、名聞十方に滿つ

智者に愛敬せられ、衆に入りて畏るる所無く

命終して天上に生じ、久しくして後必ず涅槃を得

是の如き等、種種に饑餓を訶し、布施を讚す。是を財施を念すと名く。云何が法施を念

する。行者是念を作さく、一法施は利益甚大なり、法施の因縁の故に、一切の佛弟子等は道

を得たり」と。復次に、佛は二種の施を説きたまふ中に法施を第一と爲したまふ。何を以

ての故に。財施は果報有量にして、法施は果報無量なり、財施は欲界の報にして、法施は

三界の報、亦出三界の報なり。若し名聞、財利、力勢を求めず、但佛道を學ぶを爲し、弘

大の慈悲、衆生の生老病死の苦を度するは是を清淨の法施と名く。若し爾らずんば市

易の法の如しと爲す。復次に、財施は施多ければ財物減少し、法施は施多ければ法更に増

【云何が法施を等次に法施を念するを明す。】

益す。財施は是れ無量施中の舊法なり、法施は聖法にして初めて來りて未だ得ず、名けて  
 新法と爲す。財施は但能く諸の飢渴寒熱等の病を救ふ、法施は能く九十八の諸の煩惱  
 等の病を除く。是の如き等の種種の因縁によりて財施と法施とを分別す、行者は應に法施  
 を念すべし。問うて曰はく、「何等か是れ法施なる。」答へて曰はく、「佛の説きたまふ所の十  
 二部經を、清淨の心を以て、福德の爲に他と與に説く、是を法施と名く。復神通力を以  
 て、人をして道を得しむる有るも亦法施と名く。」網明菩薩經の中に説くが如し。人有り、  
 佛の光明を見て得道する者、生天する者有り。是の如き等は口に説かずと雖も、他をし  
 て法を得しむるが故に亦法施と名く。是法施は應に衆生の心性、煩惱の多少、智慧の利鈍  
 を觀すべく、應に利益する所に隨うて爲に説法すべし。譬へば病に隨うて藥を服すれば則  
 ち益有るが如し。姪重き者有り、瞋重き者有り、愚癡重き者有り、兩兩雜り、三三雜る有  
 り。姪重き者には爲に不淨觀を説き、瞋重き者には爲に慈心を説き、癡重き者には爲に深  
 因縁を説き、兩ながら雜る者には兩觀を説き、三つ雜る者には三觀を説く。若し人病相  
 を知らず、錯りて藥を投せば、病は則ち爲に増す、若し衆生の相に著する者には、爲に但  
 五衆有りて此中には我無しと説く。若し衆生相無しと言はば、即ち爲に五衆相續して有な  
 るを説く、斷滅に墮せしめざるが故なり。富樂を求むる者には爲に布施を説き、生天を欲  
 する者には爲に持戒を説き、人中の多くの貧乏する所の者には爲に天上の事を説き、惱患  
 の居家の者には爲に出家の法を説き、錢財に著する居家の者には爲に在家の五戒の法を説

【捨煩惱とは等】  
次に捨煩惱を念ずるを明す。

【九】 以下念天を釋す。

き、若し世間を樂まざるには爲に三法印を説く。無常、無我、涅槃にして經法に依隨して自ら義理を演作す、莊嚴法施に譬喩して衆生の爲に説く、是の如き等の種種の利益有るが故に當に法施を念すべし。捨煩惱とは、三結乃至九十八使等を皆斷じて除却す、是を名けて捨と爲す。是法を捨てんと念するは、毒蛇を捨つるが如く、桎梏を捨つるが如く、安隱歡喜を得。得次に、煩惱を捨つるを念するも亦念法の中に入る。問うて曰はく、「若し念法の中に入らば、今何を以てか更に説く。」答へて曰はく、「諸の煩惱を捨する、是法は微妙にして得難く無上無量なり、是故に更に別に説く。復次に、念法と念捨とは異なり。念法は佛法を念すること微妙にして諸法の中の第一なり、念捨は諸の煩惱の罪惡は之を捨てて快と爲すを念じ、行相別なり、是を異なりと爲す。是の如き等の種種の因縁により、行者は當に捨を念すべし。念捨とは是れ初めて禪智を學ぶ中に、増上慢を生ずるを畏る。

念天とは、四天王天、乃至他化自在天有り。問うて曰はく、「佛弟子は應に一心に、佛及び佛法を念すべし、何を以てか天を念する。」答へて曰はく、「布施の業因縁、果報の故に天上の富樂を受くるを知る、是因縁を以ての故に天を念す。復次に、是八念は佛自ら因縁を説きたまふ。「念天とは應に是念を作すべし、四天王天有り、是天は五の善法の因縁の故に彼中に生ず、罪福を信じ、戒を受持し、善法を聞き、布施を修し、智慧を學するなり。我も亦是五法有り」と。是を以ての故に歡喜して言はく、「天は是五法を以ての故に、富樂の處に生ず、我も亦是有り、我、彼に生ぜん」と欲せば、亦生ずるを得べし。我は天の福の

【一〇】  
般那。

次に念安那

無常なるを以ての故に受けず、乃至他化自在天も亦是の如し」と。問うて曰はく、「三界の中に清淨なる天多し、何を以ての故に、但欲天のみを念ずる。」答へて曰はく、「聲聞法の中には欲界天を念ずと説き、摩訶衍の中には一切三界の天を念ずと説く。行者未だ道を得ざる時は、或は心人間の五欲に著す。是を以ての故に佛は念天を説きたまへり。若し能く淫欲を斷ずれば、則ち上二界の天の中に生ず。若し淫欲を斷ずる能はざれば、六欲天の中に生ず、是中には妙細清淨の五欲有り。佛は人をして更に生じて、五欲を受けしむるを欲したまはずと雖も、衆生の涅槃に入るに任へざる有り、是衆生の爲の故に天を念ずと説きたまふ。國王の子、高危の處に有りて立ち、救護すべからず、自ら地に投せんと欲するに、王は人をして厚き綿褥を敷かしむれば、墮つるも則ち死せず、差して地に墮つるが如きが故なり。復次に、四種の天有り、名天、生天、淨天、生淨天なり。名天とは今の國王を天子と名くるが如し。生天とは四天王より乃ち非有想非無想天に至る。淨天とは人中に生れし諸の聖人なり。生淨天とは三界の天中に生ずる諸の聖人なり。謂ゆる須陀洹家持、斯陀含一種、或は天上に於て阿那含、阿羅漢道を得。生淨天は、色界の中には五種の阿那含有り、是間に還らずして即ち彼に於て阿羅漢を得。無色界の中には一種の阿那含有り、色界を離れて無色界に生じ、是中に無漏道を修し、阿羅漢を得て涅槃に入る。是二種の天の生天、生淨天を念ず、是の如き等の天は是を念天と名く。

念安那般那とは禪經の中に説くが如し。

【二】以下念死を  
釋す。

念死とは二種の死有り、一には自死、二には他因縁死なり。是二種の死を行者は常に念すらく、是身は若し他の殺さざるも、必ず當に自ら死すべし、是の如き有爲法の中は、彈指の頃の生なれば、不死の心を信すべからず、是身は一切時の中に、皆死有りて老を待たず、是種種の憂惱凶衰の身を持つべからず。生心は安隱不死を望む、是心は癡人の生する所なり、身中の四大は各各相害すること、人の毒蛇の篋を持するが如し、云何が智人は以て安隱なりと爲ん。若し出家は當に還り入るべきを保ち、入息は出づるを保ち、睡眠に保たば復還つて覺するを得るは、是れ皆必し難し、何を以ての故に。是身の内外には、多くの怨有るが故なり。説くが如くんば、

或は胎中の死有り、或は生ずる時死する有り

或は年壯の時死し、或は老の至る時死す

亦果の熟する時、種種の因縁にして墮つるが如し

當に此死怨の惡賊を、免離するを求むべし

是賊は信すべきこと難し、時に捨つれば則ち安隱なり

假使大智人にして威徳力無上なりとも

前無く亦後無し、今に於て脱する者無し

亦巧辭もて謝する無く、請求するも脱を得る無く

亦捍捨する處にして以て、免るるを得べき者無し

亦淨戒を持ち、精進して以て脱すべきに非ず

死賊は憐愍無く、來る時は避くる處無し

是故に行者は無常危脆の命の中に於て、而も信じて活を望むべからず。佛の比丘の爲に

死相の義を説きたまひしが如し。一比丘有り偏袒して佛に白さく、「我能く是死相を修せん」

と。佛言はく、「汝云何が修せん」と。比丘言はく、「我七歳を過ぎて活くるを望まず」と。

佛言はく、「汝は放逸に死相を修するを爲す」と。比丘有り言はく、「我は七月を過ぎて活

するを望まず」と。比丘有り、言はく、「七日」と。有が言はく、「六五四三二一日活す」と。

佛言はく、「汝等は皆是れ放逸に死相を修す」と。有が言はく、「且より食事に至る」と。

有が言はく、「一食の頃」と。佛言はく、「汝等も亦是れ放逸に死相を修す」と。一比丘偏

袒して佛に白さく、「我は出家に於て入を望まず、入氣に於て出を望まず」と。佛言はく、

「眞に是れ死相を修して不放逸たり。比丘、一切有爲の法は、念念生滅して住する時は甚だ

少く、其れ猶幻の如し、無智の行者を欺誑す」と。是の如き等の種種の因縁は念死相なり。

問うて曰はく、「法は是れ三世諸佛の師なり、何を以ての故に念佛は前に在り、是八念は

云何が次第有る。」答へて曰はく、「是法は是れ十方三世諸佛の師なりと雖も、佛は能く是法

を演出し、其功大なるが故なり。譬へば雪山の中に寶山有り、寶山の頂に如意寶珠有り、

種種の寶物多し。人有り、上らんと欲し、或は半道より還る者有り、近づきて而も還る者

有り、一の大徳の國王有りて衆生を憐愍して爲に大梯を作らんに、人民は大小乃至七歳の

【三】以下八念の  
次第を明す。

小兒まで皆山に登るを得、意に隨うて如意珠等の種種の寶物を取るが如く、佛も亦是の如し。世間の諸法實相の寶山を、九十六種の異道は皆得る能はず、乃至梵天王も諸法實相を求むるも亦得る能はず、何に況んや餘人をや。佛は大慈悲を以て衆生を憐愍したまふが故に、六波羅蜜を具足し、一切智慧方便を得、十二部經、八萬四千法聚の梯を説きたまふに、阿若憍陳如、舍利弗、目犍連、摩訶迦葉、乃至七歳の沙彌蘇摩等皆諸の無漏法、根力覺道を得き。實相は微妙なりと雖も、一切衆生は皆佛恩を蒙るが故に得。是を以ての故に念佛は前に在り。次第に法を念じ、次第に僧を念ず。僧は佛語に隨うて能く法を解するが故に第三なり。餘人は解する能はず、僧は能く解するを得、是を以ての故に稱して寶と爲す。人中の寶は是れ佛なり、九十六種の道法の中の寶は是れ佛法なり、一切衆の中の寶は是れ僧なり。復次に、佛の因縁を以ての故に法は世間に出で、法の因縁を以ての故に僧有り。行者は念ずらく、「我は云何が當に法寶を得べき」と。得るには僧數の中に在りて當に一切の龜細の身口の惡業を除却すべし、是故に次第に持戒を説く。復次に、云何が分別して七衆有る。戒を行つを以ての故に、心惡を除かんと欲し、慳貪を破するが故に捨を念じ、受者をして樂を得しめんと欲するが故に瞋恚を破し、福の果報を得るを信するが故に邪見を破し、持戒、布施の法の中に住すれば、則ち爲に十善道の中に住して、十不善道を離る。十善道に二種の果有り、若し上行は淨天の中に生ずるを得、中行は天に生ずるを得。是を以ての故に戒施より次第に天を念ず。禪定を行するが故に、二種の天を得て諸の惡

【二三】聲聞の八念と菩薩の八念と。

覺を滅し、但善法を集め、心を一處に攝す。是故に天を念じ、次第に安那般那を念す。安那般那を念じて能く諸の惡覺を滅するは、雨の塵を澆すが如し。息の出入を見て身の危脆を知り、息の出入によりて身存立するを得。是故に出入の息を念じ、次第に死を念す。復次に、行者或時は七念を有するを恃み、此功德に著し、懈怠の心生ず。是時、當に死を念すべし。死事は常に前に在り、云何が當に懈怠して此法愛に著すべけんや。阿那律、佛の滅度したまふ時、説けるが如し。

有爲の法は雲の如し、智者は信すべからず

無常の金剛は來りて、聖主山王を破す

是を八念の次第と名く。

問うて曰はく、「是は聲聞の八念を説く、菩薩の八念と何の差別有りや。」答へて曰はく、「聲聞は身の爲の故にし、菩薩は一切衆生の爲の故なり。聲聞は但老病死を脱せんが爲の故にして、菩薩は遍く一切智の功德を具足せんが爲の故なり。是を差別と爲す。復次に、佛は是中に亦説いて舍利弗に告げたまはく、「菩薩摩訶薩は不住法を以て般若波羅蜜の中に住し、應に檀波羅蜜を具足すべく、乃至八念を具足すべし」と。不可得の故に初に不住有りて後に不可得有り。此二印有るを以て、是を以ての故に異なり。不住、不可得の義は先に説くが如し。丹注に云はく念竟る。

大智度論卷第二十二

# 大智度論初品中十想釋論第三十七

卷第二十三

聖者龍樹造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

【釋】十想とは無常想、苦想、無我想、食不淨想、一切世間不可樂想、死想、不淨想、斷想、離欲想、盡想なり。

【一】以下十想を明す中、初に無常

【論】問うて曰はく、「是一切の行法は何を以ての故に、或時は名けて智と爲し、或時は名けて念と爲し、或時は名けて想と爲すや。」答へて曰はく、「初めて善法を習うて、失せざるが爲の故に、但念と名け、能く相を轉じ、心を轉ずるが故に、名けて想と爲し、決定して知り、疑ふ所無きが故に、名けて智と爲す。一切有爲の法の無常を觀する智慧に相應するの相、是を無常想と名く。一切有爲の法は無常なりとは、新新に生滅するが故に、因縁に屬するが故に、増積せざるが故なり。復次に、生ずる時來處無く、滅するも亦去處無し。是故に無常と名く。復次に、二種の世間は、常無きが故に、無常と説く。一には衆生無常、二には世界無常なり。説くが如くんば、

大地草木は皆腐滅し、須彌巨海も亦崩れ竭き

諸天の住處も皆焼け盡く、爾時世界に何物か常なる

十力の世尊は身光を具したまひ、智慧の明照も亦無量に一切諸の衆生を度脱し、名聞普徧にして十方に満ち

今日廓然として悉く安在す。何んが智者は感傷せざる有らん

是の如く、舍利弗、目犍連、須菩提等の諸の聖人、轉輪聖王、諸の國王、常樂天王、

及び諸天の聖徳尊貴も皆亦盡き、大火焰明も忽然として滅し、世間は轉壞して、風中の燈

の如く、險岸の樹の如く、漏器に水を盛れば、久しからずして空竭するが如し。是の如く

一切衆生、及び衆生の住處は、皆常無きが故に、名けて無常と爲す。問うて曰はく、「菩薩

は何を以ての故に、は無常想を行する。答へて曰はく、「衆生は常顛倒に著して、衆苦を受

くるを以て、生死を免るるを得ず。行者はは無常想を得て、衆生を教化して言はく、「諸法

は皆無常なり、汝常顛倒に著して、行道の時を失する莫れ」と。諸佛の上妙の法は謂ゆ

る四眞諦なり。四諦の中には苦諦を初と爲し、苦の四行の中には無常行を初と爲す、是を

以ての故に菩薩は無常想を行す。問うて曰はく、「有人は無常の事の至れるを見て、轉更に

堅著す。國王の夫人寶女が、地中より生ぜる十頭の羅刹の爲に將ゐられて大海を度らんと

するに、王大いに憂愁し、智臣諫めて言へるが如し。「王は智力具足せり、夫人は還在ること

久しからず、何を以てか憂を懷く」と。答へて言はく、「我憂ふる所以の者は、我婦を得回

きを慮るにあらず、但壯時の過ぎ易きを恐るるのみ」と。亦人の好華好果を見る時、過

ぎんと欲して、便ち大いに著を生ずるが如し。是の如く無常を知れば、乃ち更に諸の結使

【二】無常想を具足すること、及び無常想を説く因縁を明す。

を生ず。云何が無常は能く心に厭ひ、諸の結使を破らしむと言ふや。答へて曰はく、「是の如く無常を見るは、是れ無常の少分を知りて、具足せざるが爲にして、禽獸の無常を見ると異なる無し。是を以ての故に佛、舍利弗に告げたまはく、「當に具足して、無常想を修すべし」と。

問うて曰はく、「何等か是れ無常想を具足する。答へて曰はく、「有爲の法の、念念に生滅するを觀すること、風の塵を吹くが如く、山上より水の流るるが如く、火焰の隨うて滅するが如し。一切有爲の法は、牽無く、強無く、取すべからず、著すべからず、幻化の如くにして、凡夫を誑惑するを爲す。は無常に因りて、空門に入るを得。是空の中には、一切の法は不可得なるが故に、無常も亦不可得なり。所以は何ん。一念の中には、生住滅の相は不可得なればなり。生の時は住滅有るを得ず、住の時は生滅有るを得ず、滅の時は生滅有るを得ず、生住滅は相性相違せるが故に無なり。は無の故に無常も亦無なり。問うて曰はく、「若し無常無くんば、佛は何を以てか苦諦の中に無常を説きたまひしや。答へて曰はく、「凡夫人は邪見を生ずるが故に、世間は是れ常なりと謂へり。是常見を滅除せんが爲の故に無常と説く。無常は是れ實なるが爲の故に説くにあらず。復次に、佛未だ出世したまはず、凡夫の人は俱世俗の道を用ひて諸の煩惱を遮す。今は諸の煩惱の根本を抜かんと欲するが故に、は無常を説く。復次に、諸の外道の法は、但形に五欲を離るるを以て、是を解脱と謂ふ。佛説きたまはく、「邪相の因縁の故に縛せられ、無常の正相を觀するが故

に解脱す」と。復二種の無常を觀するの相有り。一には有餘、二には無餘なり。佛の説きたまふが如くんば、一切の人と物と滅盡して唯名のみ在る有り、是を有餘と名け、若し人と物と滅盡し、名も亦滅する、是を無餘と名く。復二種の無常を觀するの相有り。一には身死して盡滅すると、二には新新に生滅するとなり。復次に、有が言はく、「持戒を重しと爲す。所以は何ん。戒の因縁に依るが故に、次第に滿盡くるを得ればなり」と。有が言はく、「多聞を重しと爲す。所以は何ん。智慧に依るが故に、能く所得有ればなり」と。有が言はく、「禪定を重しと爲す。佛の所説の如くんば、定は能く道を得ればなり」と。有が言はく、「十二頭陀を以て重しと爲す、所以は何ん。能く戒行を淨むるが故に」と。是の如く各各所行を以て貴しと爲し、更に復涅槃を勤求せず。佛、言はく、「是諸の功德は皆是涅槃の分に越く。若し諸法の無常を觀すれば、是を眞の涅槃道と爲す」と。是の如き等の種種の因縁の故に、諸法は空なりと雖も、而もは無常想を説くなり。復次に、無常想は即ち是れ聖道の別名なり。佛は種種の異名もて道を説き、或は四念處と言ひ、或は四諦と言ひ、或は無常想と言へり。經の中に説くが如し、「善く無常想を修して、能く一切の欲愛と、色愛と、無色愛と、掉慢とを斷じて、無明盡き、能く三界の結使を除く、是を以ての故に即ち名けて道と爲す」と。是无常想は或は有漏、或は無漏なり。正しく無常を得るは是れ無漏、初めて無常を學するは是れ有漏なり。摩訶衍の中の諸の菩薩は、心廣大にして、種種に一切衆生を教化するが故に、是无常想も、亦有漏にして亦無漏なり。若は無

【五受】憂受、喜受、苦受、樂受、捨受。其受とは認識作用が其對象を領納するをいふ。  
 【三】次に苦想を明し、中に身心の二苦を解説す。

漏にして九地に在り、若し有漏にして十一地に在り、三界の五受業を緣じ、四根相應して苦根を除く。凡夫と聖人とは、是の如き等の種種の因縁を得て、無常想の功德を説く。

苦想とは行者、是念を作さく、「一切有爲の法は無常なるが故に苦なり」と。問うて曰は

く、「若し有爲法は無常なるが故に苦ならば、諸の賢聖の人の有爲無漏法も亦應當に苦なるべし。」答へて曰はく、「諸法は無常なりと雖も、憂著すれば苦を生じ、著する所無き者は苦無し。問うて曰はく、「諸の聖人有り、著する所無しと雖も亦皆苦有り。舍利弗に風熱

の病苦有り。畢陵伽婆蹉は眼痛の苦有り、羅婆那跋提一なり。痔病の苦有るが如し。云何が苦無しと言ふ。」答へて曰はく、「二種の苦有り。一には身苦、二には心苦なり。是諸の

聖人は、智慧力を以ての故に、復憂愁、嫉妬、瞋恚等の心苦無きも、已に先世の業因縁により、四大造の身を受け、老病、飢渴、寒熱等の身苦有り、身苦の中に於ても亦復薄少なり。人の了了に他に債を負ふを知らば、之を償ひ以て苦と爲さず、若し人債を負ふを償は

ざれば、債主に強奪せられ、臨り惱んで、苦を生ずるが如し。問うて曰はく、「苦受は是れ心心數の法なり。身は草木の如く、心を離るれば則ち覺する所無し、云何が聖人は但身苦のみを受くと言ふ。」答へて曰はく、「凡夫の人は苦を受くる時、心に愁惱を生じ、瞋使の爲

に使はれ、心但五欲に向ふ。佛の所説の如くんば、凡夫の人は五欲を除き、更に苦を出づるの法有るを知らず、樂受の中に於ては食欲使に使はれ、不苦不樂受の中には無明使に使

はる。凡夫の人は苦を受くる時、内に三毒の苦を受け、外に寒熱鞭杖等を受く。人の内熱

盛なれば外熱も亦盛なるが如し。經に説くが如くんば、凡夫の人は、愛する所の物を失へば、身心俱に苦を受くること、二箭を雙べ射るが如し。諸の賢聖の人は、憂愁の苦無く、但身苦のみ有りて、更に餘の苦無きなり。復次に、五識相應の苦、及び外の因縁なる杖楚寒熱等の苦、是を身苦と名け、餘殘を心苦と名く。復次に、我は有爲無漏の法は、著せざるが故に、苦に非ずと言ふ。聖人の身は是れ有漏なり、有漏の法は則ち苦なること、何の答か有らん。是末後の身は、受くる所の苦も亦微少なり。問うて曰はく、「若し無常即ち是れ苦ならば、道も亦是れ苦なり、云何が苦を以て苦を離れん。」答へて曰はく、「無常は即ち是れ苦なりとは、五受衆の爲の故に説く。道は作法の故に無常なりと雖も、名けて苦と爲さず。所以は何ん。是は能く苦を滅して、諸の著を生ぜず、空無我等の諸智と和合するが故なり。但是れ無常にして苦に非ず、諸の阿羅漢の得道の時、偈を説いて言へるが如し。

我等は生を食らず、亦復死を樂はず

一心及び智慧もて、時の至るを待ちて去るのみ

佛の涅槃を取りたまひし時、阿難等の諸の未離欲の人は、未だ善く八聖道を修せざるが故に皆涕泣憂愁し、諸の欲を離れたる阿那含は皆驚愕し、諸の漏盡の阿羅漢は其心を變ぜず、但世間の眼の滅すること疾しと言へるのみ。得道の力を以ての故に、佛に従うて大利益を得、佛の無量の功德を重んずるを知ると雖も、而も苦を生ぜず。是を以ての故

に知んぬ、道は無常なりと雖も、苦の因縁に非ず。故に名けて苦と爲さず。但五受衆は是れ苦なり。何を以ての故に。愛著するが故に。無常敗壞するが故に。愛念處の中の如く、苦の義は此中に應に廣説すべし。復次に、苦とは、身には常に是苦有るも、癡に覆はるるが故に覺せざるのみ。説くが如くんば、

騎乗して疲極るが故に、住立の處を求索し

住立して疲極るが故に、坐息する處を求索し

坐久しければ疲極るが故に、安臥の處を求索す

衆極は作に由りて生ず、初樂なれば後則ち苦なり

視眴、息の出入、屈伸、坐臥、起

行、立、及び去來、此事は苦ならざる無し

問うて曰はく、「是五受衆は一切皆苦と爲す、苦想觀の爲の故に苦なり。若し一切皆苦ならば、佛は云何が三種の愛、苦愛、樂愛、不苦不樂受有り」と説きたまへる。若し苦想

を以ての故に苦ならば、云何が苦諦を實苦と爲すと説きたまへる。答へて曰はく、「五受衆は一切皆苦なり。凡夫の人は、四顛倒の因縁もて欲の爲に通られ、五欲を以て樂と爲す。

人の瘡に塗れば、大痛息むが故に、以て樂と爲すも、瘡は樂に非ざるが如し。佛三種の受

を説きたまひしは、世間の爲の故にして、實法の中に於ては是れ樂に非ざるなり。若し五

受衆の中に實に樂有らば、佛何を以ての故に、「五受衆を滅するを名けて、樂と爲す」と説

く

く

く

【四】次に無我想を明す。

きたまはん。復次に、其嗜好所に隨うて、樂心則ち生ずるも、樂には定無きなり。樂若し實に定らば心の著を待たず、火は實に熱するに、著を待たずして熱するが如し。樂は定無きを以ての故に名けて苦と爲す。復次に、世間顛倒の樂は、能く今世後世の無量の苦の果報を得。故に名けて苦と爲す。譬へば大河の水の中に少毒を著くるも、水をして異らしむる能はざるが如く、世間顛倒の毒樂は、一切大苦の中に於て則ち現れず。説くが如くんば、

天より下りて地獄に生ずる時は、本の天上の歡樂の事を憶ひ

宮觀姪女目前に滿ち、園苑浴池以て志を娛ましむ

又獄火來りて身を焼くこと、大火の竹林を焚くが如きに似たるを見る

是時天上の樂を見ると雖も、徒に自ら感結して益する所無し

是苦想到に攝する縁は、無常想の如し。是の如き等の種種に、苦を分別するを名けて苦想と爲す。

(四) 爲す。

無我想とは、苦なれば則ち是れ無我なり。所以は何ん。五受衆の中は、盡く皆是れ苦

想なり、苦想は自在有る無く、若し自在無ければ、是れ則ち無我なればなり。若し我に自

在有らば、身をして苦有らしむべからず。説くが如くんば、

諸の無智の人有り、身心は是れ我なりと計し

漸く堅著に近づくが故に、無常の法なるを知らず

是身は作者無く、亦受者有ること無し

是身は無生爲り、而も種種の事を作すは

六情と障の因縁もて、六種の識生するを得ればなり

三事相合の因縁に従うて、觸法生じし

觸法の因縁に従うて、受念の業法生ず

珠と日と草着と、相合するが故に火生ずるが如く

情と識と相合して、所作の事業成る

相續の相似の有は、種に芽草有るが如し

復次に、我相は不可得なるが故に無我なり。一切法は相有るが故に、則ち有なるを知る。

蟬を見て熱を覺るが故に、火有りと知るが如し。五塵の中に於ては、各各別異なり。故に

知んぬ、有情は種種に諸法を思惟し、籌量するが故に、有なりと知り、心心數法には、此

我は無相なり、故に無我なりと知る。

問うて曰はく、出入の氣有るは則ち是れ我相なり。視眺と、壽命と、心の苦樂愛憎と、

觸覺等とは是れ我相なり。若し無我ならば、誰か出入の息と、視眺と壽命と、心の苦樂

愛憎と、觸覺等有らんや。當に我内に在りて、動發すること有るが故に、壽命も心も亦是

れ我法なり。若し無我ならば牛の御無きが如し。我有るが故に能く心を制して法に入り、

放逸を爲さず、若し無我ならば、誰か心を制御せん。苦樂を受くる者は是れ我なり。若し

無我ならば、松木の如くにして、則ち苦樂を別つべからずと爲す。愛憎精慤も亦是の如し。

【五】我ありと説するも畢竟無我なることを明す。

我は微細にして、五情を以て知るべからずと雖も、是相に因るが故に、有と爲すを知るべし。『答へて曰はく、』是諸相は皆是れ識相なり。識有れば則ち出入の息、視胸、壽命等有り。若し識、身を離るれば則ち無し。汝等の我は常遍なるが故に、死人も亦應に視胸、入出の息、壽命等有るべし。復次に、出入の息等は、是れ色法にして、心の風力に隨ふが故に動發す。此は是れ識相にして、我相に非ず、壽命は是れ心不相應行にして、亦是れ識相なり。問うて曰はく、『若は無心定の中に入り、或は眠りて夢無き時も、息亦出入して壽命有り、何を以ての故に、皆是を識相と言ふや。』答へて曰はく、『無心定等には、識暫く無しと雖も、久しからずして必ず還識を生ず。身を捨てざるが故に、識有る時は多く、識無き時は少し。是故に識相と名く。人の出で行くに、其家に主無しと言ふことを得ざるが如し。苦樂憎愛、精勤等は、是れ心相應の共縁にして、心行に隨ふ。心有なるが故に便ち有なり、心無なるが故に便ち無なり。是を以ての故に是は識相にして我相に非ず。復次に、若し我有らば、我に二種有り。若は常、若は無常なり。説くが如くんば、

若し我は是れ常ならば、則ち後身無く  
 常ならば不生なるが故に、亦解脫無し  
 亦妄無く作無し、是を以ての故に當に知るべし  
 罪福を作る者無く、亦受くる者も有ること無し  
 我及び我所を捨てて、然る後に涅槃を得

若し實に我行らば、應に我心を捨つべからず

若し我は無常ならば、則ち應に身に隨うて滅すべし

大岸の水に墮つるが如く、亦罪福有ること無けん

是の如く、我及び知者、不知者、作者、不作者は、檀波羅蜜の中に説くが如し。是我相

を得ざるが故に、一切法中、我無きを知る。若し一切法中に我無きを知れば、則ち我心を

生ずべからず。若し我無くんば亦我所の心無く、我と我所とを離るるが故に、則ち縛有る

こと無し。若し縛無ければ、則ち是れ涅槃なり。是故に行者は應に無我想を行すべし。

【六〇】無常苦無我の相互關係に就いて。

問うて曰はく、「は無常、苦、無我は、一事とせんや、三事とせんや。若し是れ一事ならば、三と説くべからず。若し是れ三事ならば、佛は何を以ての故に、無常なれば即ち是れ

苦、苦なれば即ち是れ無我なりと説きたまへる。答へて曰はく、「是は一事なり。謂ゆる有

漏の法を受く。轉門の分別の故に三種の異有り。無常の行相は應に是れ無常相なるべく、

苦の行相は應に是れ苦相なるべく、無我の行相は應に是れ無我相なるべし。無常は三界に

入らしめず、苦は三界の罪過を知らしめ、無我は則ち世間を捨てしむ。復次に、無常は眼

心を生じ、苦は畏怖を生じ、無我は出抜して解脱せしむ。無常とは、佛は「五受衆は是れ

無常なり」と説き、苦とは、佛は「無常は則ち是れ苦なり」と説き、無我とは、佛は「苦

は即ち是れ無我なり」と説きたまへり。無常とは、佛は「五受衆の盡滅する相なり」と示

したまひ、苦とは、佛は「一箭の心に入るが如し」と示したまひ、無我とは、佛は「捨離の

したまひ、苦とは、佛は「一箭の心に入るが如し」と示したまひ、無我とは、佛は「捨離の

【七】次に食厭想を明す。

相なり」と示したまへり。無常は愛を斷ずるを示し、苦とは我習慢を斷ずるを示し、無我は邪見を斷ずるを示す。無常とは常見を遮し、苦は今世の涅槃の樂處を遮し、無我は著處を遮す。無常とは世間の著すべき所の常法是なり。苦とは世間の樂處と計する是なり。無我とは世間の我と計すべき所の牢固なる者是なり。是を三相分別の想と爲す。無我の縁は種種に攝す、苦想の中に説くが如し。

食厭想とは、是食は不淨の因縁より生ずと觀するなり。肉の如きは精血水道より生ず、是を膿虫の住處と爲す。酥乳酪の如きは血の變じて成る所、爛膿と異る無し。厨人の汚垢、種種の不淨有り。若し口中に著くれば、腦に爛涎有り。二道より流れ下りて唾と和合し、然る後味を成す。其狀吐くが如し。腹門より入りて、地持ち、水爛れ、風動き、火煮ること、釜の糜を熟するに、滓濁は下に沈み、清き者は上に在るが如し。譬へば酒を釀すに滓濁は尿と爲り、清き者は尿と爲るが如し。腰に三孔有り、風吹き、臍汁百脈に散入して、先づ血と和合し、凝り變じて肉と爲り、新肉より脂骨髓を生じ、是中より身根を生ず。新舊の肉の合するより五情根を生じ、五根より五識を生じ、五識は次第に意識を生じ、分別して相を取り、好醜を籌量し、然る後に我我所の心を生じ、等しく諸の煩惱及び諸の罪業を生ず。食を觀することは是の如し。本末の因縁、種種に不淨なり。内の四大と、外の四大と異なる無し。但我見を以ての故に、強ひて我有りと爲すを知る。復次に、思惟すらく、「此食は懇植し、耘除し、收穫し、蹂治し、舂磨し、洩汰し、炊煮して即ち成す、功を用

ふるること甚だ重し。一鉢の飯を計るに、夫流汗の集合を作す、之を量るに食は少く汗は多し。此食は之を作るに功重く、辛苦是の如し。口に入れて之を食すれば、即ち不淨と成り、所として一も直きこと無く、宿昔の間に變じて屎尿と爲る。本是れ美味、人の嗜む所なるも、變じて不淨と成れば、悪んで見るを欲せず」と。行者自ら思へらく、「此の如きの弊食に、我若し貪著せば、當に地獄に墮して、焼けたる鐵丸を噉ふべく、地獄より出でては、當に畜生の牛羊駱駝と作りて、其宿債を償ふべく、或は猪狗と作りて常に糞除を噉はん」と。是の如く食を觀すれば、則ち厭想を生ず。食を厭ふに因るが故に、五欲の中に於て皆厭ふ。譬へば一婆羅門の、淨潔の法を修し、事の教有るが故に不淨國に到り、自ら思へらく、「我當に云何が此不淨を免るを得べき。唯當に乾食すべくんば、清淨を得べし」と。一老婆の白髓餅を賣るを見て、之に語りて言はく、「我は因緣有りて此に住すること百日なり、常に此餅を作りて送り來れ、當に多く價を與ふべし」と。老母は口口に餅を作りて之に送る。婆羅門は貪著して飽食し歡喜す。老母は餅を作るに、初の時は白淨なり、後轉色無く味無し、即ち老母に問はく、「何に緣りてか爾る」と。母言はく、「麤糲差ゆるが故に」と。婆羅門問ふ、「此言は何の謂ぞ」と。母言はく、「我大家の夫人、隱處に癩を生ず、麤糲甘草を以て之に拊くれば、癩熱し膿出づ、餅餅を和合すること、日是の如し。此を以て餅を作り汝に與ふ、是を以て餅好し。今や夫人の癩は差えたり、我當に何處にか更に得べき」と。婆羅門は之を聞きて、兩者もて頭を打ち胸を捶きて吁嘔し、「我當に云何

【八】以下十想の次第に就いて明す

【見道】初めて無漏の智慧を生じて

四諦の理を觀じ、見惑八十八使を斷ずる位。

【修道】先の見道に於て一旦眞諦を照見し、更に眞觀を修するに名く三界の修惑を斷ずる位。

【見諦道】眞理を證悟する道。

【無學道】三界の煩惱を斷じ已り、眞理を證り盡して更に學習を要せざる智慧をいふ。

【九】次に一切世間不可樂想を明す

がすべき、此淨法を破せり、我、了らんとす」と。緣事を棄捨して本國に馳せ還る。行者も亦是の如し、是飲食に著して歡喜樂嗽し、其好色細滑、香美の口に可なるを見て不淨を觀ぜず、後に苦報を受けて悔ゆとも將何ぞ及ばん。若し能く食の本末を觀する、是の如くにして、惡厭の心を生ずれば、食欲を離るるに因りて、四欲皆捨て、欲界の中の樂に於て悉く皆捨離し、此五欲を斷じ、五下分結に於て亦斷ず。是の如き等の種種の因緣惡罪に復樂著せざる、是を食厭想と名く。

問うて曰はく、「無常、苦、無我想は、無漏の智慧と相應し、食厭等の四想は有漏の智慧と相應す、次第の法として應に前に在るべし、今何を以てか後に説く。」答へて曰はく、「佛法に二種の道有り。見道と修道なり。見道の中に是三想を用ひて諸の邪見等を破して聖果を得れども、猶未だ欲を離れず、欲を離れんが爲の故に三想の次第に是食厭等の四想を説き、姪欲等の諸の煩惱を離るるを得。初の三想は見諦道の中に示し、中の四想は修道を學するを示さんが爲にし、後の三想は無學道に示す。初め身念處を習ふ中に、食厭想有りと雖も、功用少きが故に佛は説きたまはず。今、須陀洹、斯陀含の欲を度するが爲の故に、無我相の次第に、食厭等の四想を説けり。

一切世間不可樂想とは、若し世間の色欲、滋味、車乘、服飾、廬觀、園宅の種種の樂事を念ずれば、則ち樂想を生じ、若し世間の衆の惡罪の事を念ずれば、則ち心に厭想を生ず。何等か惡事なる。惡事に二種有り、一には衆生、二には土地なり。衆生に八苦の患有

り、生と老と病と死と、恩愛別離と、怨憎同處と、所求不得となり。略して之を言へば、五受衆の苦なり。衆生の罪は、姦欲多きが故に、好醜を別たす、父母師長の教誨に隨はず、慚愧有ること無く、禽獸と異る無し。瞋恚多きが故に、輕重を別たす、瞋毒狂發し、乃至佛語を受けず、法を聞くを欲せず、惡道を畏れず、杖楚を横に加へて、他の苦を知らず、大闇中に入りて都て見る所無し。愚癡多きが故に、求むる所に道を以てせず、事縁を識らず、角を搆りて乳を求むるが如く、無明覆ふが故に、日照を蒙ると雖も、永く見る所無し。慳貪多きが故に其舍は冢の如く、人々に向はず。橋慢多きが故に賢聖を敬はず、父母に孝ならず、橋逸にして自ら壞し、永く直き所無し。邪見多きが故に今世後世を信ぜず、罪福を信ぜず、共に處すべからず。是の如き等の諸の煩惱多きが故に、弊敗して爲に直き所無し。惡業多きが故に、無間の罪を造り、或は父母を殺し、或は賢聖を傷害し、或は時の榮貴を要し、忠貞を讒賊し、親戚を殘害するなり。復次に、世間の衆生は、善好の者は少く、弊惡の者は多し。或時は善行有りと雖も、貧賤鄙陋なり。或は富貴端政なりと雖も、而も所行は不善なり。或は布施を好むと雖も、而も貧乏にして財無く、或は富んで財寶有りと雖も、而も慳惜貪著して布施を肯せず、或は人の思ふ所有り、默して所説無きを見ては、便ち橋高自ら畜へ、下りて物に接せずと謂ひ、或は好く下りて物に接し、恩惠普く潤ふを見ては、便ち欺誑詭飾すと謂ひ、或は能く語り、善く論ずるを見ては、便ち是れ小智を恃んで、以て橋慢を爲すと謂ひ、或は質直なる好人を見ては、便ち共に欺誑し調捉し、

引抱し陵易す。或は善心柔濡なるを見ては、便ち共に輕陵し踏躓し、理を以て遇せず。若は持戒清淨なる者を見ては、便ち所行矯異なりと謂うて、輕賤すること數ならず。是の如き等の衆生は弊惡にして、一も樂しむべき無し。土地の惡とは、一切の土地は多衰にして吉無く、寒熱飢渴、疾病惡疫、毒氣侵害、老病死の畏、處として有らざる無く、身の所去の處には衆苦之に隨ひ、處として免るを得る無し。好國有り、豐樂安隱なりと雖も、多く諸の煩惱の爲に惱まざる、則ち樂土と名けず。一切は皆二種の苦有り、身苦と心苦とにして、國として有らざる無し。説くが如くんば、

有國土は多寒なり。或は有國は多熱なり

有國は救護無く、或は有國は多惡なり

有國は常に飢餓し、或は有國は多病なり

有國は福を修せず、是の如く樂處無し

衆生の土地には是の如きの惡有り、世間を思惟するに、一として樂しむべき無く、欲界の惡き事是の如し。上二界は、死する時と退する時とに、大いに懊惱を生ずること下界よりも甚だし。譬へば極めて高き處より墮つれば、摧碎し爛壞するが如し。問うて曰はく、無常想、苦想、無我想、一切世間不可樂想は、何等の異有れば別に説くや。答へて曰はく、無二種の觀有り、總觀と別觀となり。前は總觀にして、此中は別觀なり。復二種の觀有り、法觀と衆生觀となり。前は一切法を呵するの觀と爲し、此中は衆生の罪惡の不同を

【一】死想と不淨  
 想とに就いて。  
 【二】次に斷想と  
 離想と、諸想の三を  
 釋す。

觀するなり。復次に、前者は無漏道にして、此中には有漏道なり。前は見諦道にして、今は思惟道なり。是の如き等の種種の差別は、一切地中の攝にして、三界の法を緣ず。是を一切世間不可變想と名く。

死想とは、死念の中に説くが如し。不淨想とは、身念處の中に説くが如し。

斷想と離想と、諸の結使を盡すが故に斷想と名け、結使を離るるが故に離想と名け、諸の結使を盡すが故に盡想と名く。問うて曰はく、「若し爾らば一想起して便ち是れり、何を以てか三を説く」と答へて曰はく、「前の一法を三種に説く。無常は即ち是れ苦、苦は即ち是れ無我なるが如し。此も亦是の如し、一切世間の罪惡は、深重なるが故に、三種の呵有り。大樹を伐るに、一下を以て斷すべからざるが如く、涅槃微妙の法は、昔未だ得ざる所、是故に種種に讚じ、名けて斷想、離想、盡想と爲す。復次に、三毒を斷するが故に、名けて斷と爲し、愛を離るるが故に、名けて離と爲し、一切の苦を滅して、更に生ぜざるが故に、名けて盡と爲す。復次に、行者の煖法と頂法と忍法と世間第一法との、正智慧の觀に於て、諸の煩惱を遠ざくる、是を離想と名け、無漏道を得て、諸の結使を斷する、是を斷想と名け、涅槃に入る時、五受樂を滅して、復相續せざる、是を盡想と名く。斷想は有餘涅槃、盡想は無餘涅槃、離想は二涅槃の方便門なり。是三想は、有漏と無漏との故に、一切地の中に攝す。十想覺る。丹に云はく、三三昧の義と三根の義と合せるなり。

大智度初品中十一智釋論第三十八

十一智とは、法智、比智、他心智、世智、苦智、集智、滅智、道智、盡智、無生智、如實智なり。

【二】以下十一智を釋す中、初に法智を明す。

法智とは、欲界繫の法の中の無漏智なり。欲界繫の因の中の無漏智は、欲界繫の法の滅の中の無漏智にして、欲界繫の法を斷ずと爲し、道の中の無漏智、及び法智品の中の無漏智なり。比智とは、色無色界の中に於ける無漏智なること亦是の如し。他心智とは、欲界世界の繫の現在の、他の心心數の法、及び無漏の心心數の法の少分を知るなり。世智とは、諸の有漏の智慧なり。苦智とは、五受衆の無常、苦、空、無我を觀する時に得る無漏智なり。集智とは、有漏法の因因集りて、縁を生ずるを觀する時の無漏智なり。滅智とは、滅止妙出を觀する時の無漏智なり。道智とは、道正行遠を觀する時の無漏智なり。盡智とは、我苦を見已り、集を斷じ已り、證を盡し已り、道を修し已れりと。是の如く念する時、無漏の智慧の見明に覺するなり。無生智とは、我は苦を見已りて復更に見ず、集を斷じ已りて復更に斷ぜず。證を盡し已りて復更に證せず。道を修し已りて復更に修せずと。是の如く念する時、無漏の智慧の見明かに覺するなり。如實智とは、一切法の總相と別相とを如實に正しく知りて、畢竟有ること無きなり。是法智は、欲界繫の法、及び欲

【二】次に十智の性相の分別を明す

界繫の法の因、欲界繫の法の滅を縁じて、欲界繫の法を斷ずと爲す。道比智も亦是の如し。世智は一切法を縁じ、他心智は他心の有漏無漏の心、心數の法を縁じ、苦智と集智とは、五受衆を縁じ、滅智は盡を縁じ、道智は無漏の五衆を縁じ、盡智と無生智とは俱に四諦を縁す。

十智のうち、一は有漏、八は無漏、一は當に分別すべし。他心智は有漏の心を縁じ、是有漏は無漏の心を縁す。は無漏の法智に、法智及び他心智と、苦智と集智と、滅智と道智と、盡智と無生智の少分とを攝す。比智も亦是の如し。世智には、世智と及び他心智の少分を攝し、他心智には、他心智と及び法智と、比智を世智と道智と、盡智と無生智の少分とを攝し、苦智には、苦智と及び法智と、比智と盡智と、無生智の少分とを攝す。集智と滅智とも亦是の如し。道智には、道智と及び法智と、比智と他心智と、盡智と無生智の少分とを攝し、盡智には、盡智と及び法智と、比智と他心智と、苦智と集智と、滅智と道智の少分とを攝す。無生智も亦是の如し。九智は八根と相應して、慧根、憂根、苦根を除き、世智と十根と相應して慧根を除く。法智、比智、苦智は、空三昧と相應し、法智、比智、滅智、盡智、無生智は、無相三昧と相應し、法智、比智、他心智、苦智、集智、道智、盡智、無生智は、無作三昧と相應し、法智、比智、世智、苦智、盡智、無生智は、無常想、苦想、無我想と相應し、世智は、中の四想と相應し、法智、比智、滅智、盡智、無生智は、後の三想と相應す。有人言はく、「世智は或は離想と相應し、法智は九智を縁じて比智を除

く、比智も亦是の如し」と。世智、他心智、盡智、無生智は十智を縁じ、苦智、集智は世智及び有漏の他心智を縁じ、滅智は智道智を縁ぜず、九智を縁じて世智を除く。法智、比智は十六相、他心智は四相、苦集滅道は各各四相、盡智、無生智は俱に十四相にして、空相、無我相を除き、煖法、頂法、忍法の中の世智は十六相、世間第一法の中の世智は、四相にして無相を除く。轉相觀相なり舊に初に無漏心に入りて一の世智を成就し、第二心に苦智、法智を増し、第四心に比智を増し、第六心に集智を増し、第十心に滅智を増し、第十四心に道智を増す。若し欲を離るる者は他心智を増し、無學道に盡智を増して不壞解脫を得、無生智を増す。初め無漏心の中に智を修せざれば、第二心の中に現在未來の二智を修し、第四心の中に現在の二智を修し、未來の三智を修し、第六心の中に現在未來の二智を修し、第八心の中に現在の二智を修し、未來の三智を修し、第十心の中に現在未來の二智を修し、第十二心の中に現在の二智を修し、未來の三智を修し、第十四心の中に現在未來の二智を修し、第十六心の中に現在の二智を修し、未來の六智を修し、若し欲を離るれば七智を修す。須陀洹に欲界の結使を離れんと欲し、十七心の中に七智を修す、他心智、盡智、無生智を除く。第九の解脫心の中に八智を修す、盡智、無生智を除く。信解脫の人は轉じて見得と作し、雙道の中に六智を修して、他心智、世智、盡智、無生智を除く。七地の欲を離るる時、無礙道の中に七智を修して、他心智、盡智、無生智を除く。解脫道の中に八智を修して盡智、無生智を除く。有頂の欲を離るる時、無礙道の中に六智を修して

【不時解脫の人】

時を俟つての要なくして自在に定に入り、煩惱の繫縛を斷ずるの羅漢をいふ。

【二四】 十智の義解

他心智、世智、盡智、無生智を除く。八解脫道の中に七智を修して世智、盡智、無生智を除く。無學の初心、第九の解脫、不時解脫の人は、十智及び一切の有漏、無漏の善根を修す。若し時解脫の人は、九智及び一切の有漏、無漏の善根を修す。阿毘曇門を以て廣く分別せり。如實智の分別の相は、此を般若波羅蜜の後品に廣く説けり。

(二四)次に、有人言はく、「法智とは欲界の五衆の、無常、苦、空、無我を知り、諸法は因縁の和合より生ずるを知る。謂ゆる無明は諸行に因縁たり、乃至生は老死に因縁たるなり。佛、須尸摩梵志の爲に説きたまへるが如し。『先づ法智を用ひて諸法を分別し、後に涅槃智を用ふ』と。比智とは現在の五受衆の無常苦空無我を知るなり。過去未來、及び色無色界の中の、五受衆の無常苦空無我も亦是の如し。譬へば現在の火の熱して能く焼くを見、此を以て過去未來、及び餘國の火も亦是の如きを比知するが如し。他心智とは他の衆生の心心數法を知るなり。問うて曰はく、『若し他の心心數法を知らば、何を以ての故に但他心を知ると名くる。』答へて曰はく、『心は是れ主なるが故に、但他心を知ると名く。若し心を説けば、當に已に心數法を説けるを知るべし。世智とは、名けて假智と爲す。聖人は實法の中に於て知り、凡夫の人は但假名の中にのみ知る。是を以ての故に假智と名く。棟梁椽壁を名けて、屋と爲すが如く、但是事のみを知りて、實義を知らざるなり。是を世智と名く。苦智とは、苦慧を用ひて五受衆を呵するなり。問うて曰はく、『五受衆は亦無常、亦苦、亦空、亦無我なり、何を以ての故に但苦智を説きて、無常空無我智を説かざる。』答へて曰は

く、苦諦の爲の故に苦智と説き、集諦の故に集智と説き、滅諦の故に滅智と説き、道諦の故に道智と説くなり。問うて曰はく、「五受衆には種種の惡有り、何を以ての故に、但苦諦のみを説いて、無常諦と空と無我諦とを説かざる。」答へて曰はく、「若し無常と空と無我諦と説くも、亦法相を壊せず、衆生は多く樂に著して、苦を畏るるを以ての故に、佛は「世間は一切皆是れ苦なり」と呵し、捨離せしめんと欲したまふが故なり。無常、空、無我の間には、衆生は大いに畏れざるが故に説かず。復次に、佛の説法の中に五受衆の異名有り、名けて苦と爲す。是を以ての故に但苦智を説く。是苦智は或は有漏、或は無漏なり。若し煖法と頂法と忍法と、世間第一法とに在りては、是れ有漏なるも、若し見諦道に入れば、是れ無漏なり。何を以ての故に。煖法より世間第一法の中に至るまで、四種に苦を觀するが故なり。集智、滅智、道智も亦是の如し。復次に、苦智は、苦相の實に生ぜざるを知るに名け、集智は、一切法の離れて和合すること有る無きを知るに名け、滅智は、諸法の常に寂滅にして、涅槃の如きを知るに名け、道智は、一切法の常に清淨にして、正も無く邪も無きを知るに名け、盡智は、一切法の所有無きを知るに名け、無生智は、一切の生法は、不實不定の故に、不生なるを知るに名く。如實智は、十種の智の知る能はざる所を、如實智を以ての故に、能く十智の各々の相、各々の別異、各々の有する觀法を知る。是如實智の中には、相無く、緣無く、別無く、諸の觀法を滅し、亦觀する有らず。十智の中には法眼と慧眼と有り。如實智の中に、唯佛眼のみ有り。十智は阿羅漢、辟

【二五】 以下有覺有觀等の三三昧を明す。

支佛、菩薩も共に有すれども、如實智は唯獨り佛のみ有す。所以は何ん。獨り佛のみ不誑法を有したまへばなり。是を以ての故に、如實智は獨り佛のみに有るを知る。復次に、是十智は、如實智の中に入れば、本の名字を失して、唯一實智のみ有り。譬へば十方の諸流水は、皆大海に入れば、本の名字を捨てて俱大海と名くるが如し。是の如き等の種種に、十一智の義を分別するは、此中に略説せり。丹に云はく

【三三昧とは、有覺有觀三昧と、無覺有觀三昧と、無覺無觀三昧となり。

一切の禪定の攝心は、皆名けて三摩提と爲す。秦に正心行處と言ふ。是心は無始世界より來、常に曲りて端ならず、是正心行處を得れば、心則ち端直なり。譬へば蛇行の常に曲なるを、竹筒の中に入れば則ち直なるが如し。是三昧の三種のうち、欲界と未到地と、初禪とは覺と觀とに相應するが故に、有覺有觀と名け、二禪の中間は但觀と相應するが故に、無覺有觀と名け、第三禪より乃至有頂地は、覺と觀とに相應するに非ざるが故に、無覺無觀と名く。問うて曰はく、「三昧と相應する心數法は乃ち二十に至る、何を以ての故に但覺と觀とを説く。」答へて曰はく、「是覺觀は三昧を挑亂す、是を以ての故に此二事を説くなり。善なりと雖も、而も是れ三昧の賊にして、捨離すべきこと難し。有人言はく、「心に覺觀有れば三昧無し。是を以ての故に佛、有覺有觀三昧と説きたまふは、但牢固ならず。覺觀の力小微なれば、是時三昧有るを得べし」と。是覺觀は能く三昧を生じ、亦能く三昧を壞す。譬へば風の能く雨を生じ、亦能く雨を壞するが如し。三種の善の覺觀は能く初禪を

生じ、初禪を得る時、大歡喜の覺觀を發するが故に、心散じて還りて失す、是を以ての故に、但覺觀を説く。問うて曰はく、「覺と觀とは何の差別か有る。」答へて曰はく、「龜なる心相を覺と名け、細なる心相を觀と名く。初め緣中に心發するの相を覺と名け、後好醜を分別し、壽量するを觀と名く。三種の龜覺有り、欲覺と瞋覺と憍覺となり。三種の善覺有り、出要覺と無瞋覺と無惱覺となり。三種の細覺有り、親里覺と國土覺と不死覺となり。六種の覺は三昧を妨げ、三種の善覺は能く三昧の門を開く。若し覺觀過多なれば、還りて三昧を失す。風は能く船を使ふも、風過なれば則ち船を壊るが如し。是の如く種種に覺觀を分別す。問うて曰はく、「經に三種の法を説けり、有覺有觀法、無覺有觀法、無覺無觀法と、有覺有觀地、無覺有觀地、無覺無觀地となり。今何を以てか但三種の三昧を説く。」答へて曰はく、「妙にして用ふべき者を取るなり。有覺有觀法とは、欲界、未倒地、初禪の中の覺觀と相應する法にして、若は善、若は不善、若は無記なり。無覺有觀法とは、禪の中間の觀と相應する法にして、若は善、若は無記なり。無覺無觀法とは、覺觀の法を離れたる一切の色、心不相應行及び無爲法なり。有覺有觀地とは、欲界、未倒地、梵世なり。無覺有觀地とは、禪の中間にして、善く是地を修すれば大梵王と作る。無覺無觀地とは、一切の光音と、一切の遍淨と、一切の廣果と、一切の無色地となり。中に於て上妙なる者は是れ三昧なり。何等か是れ三昧なる。空等の三三昧、乃至金剛及び阿羅漢、辟支佛の諸の三昧、觀十方佛三昧、乃至首楞嚴三昧、斷一切疑三昧、乃至三昧王等の諸佛の三昧、是の如

【二六】以下未知欲知根等の三根を明す。

【二七】二十二根中但是三根のみを説くに就いて。

く種種に分別して、略して三三昧の義を説き竟んぬ。

【二六】三根とは未知欲知根と、知根と、知己根となり。

【二七】未知欲知根とは、無漏の九根の和合せる信行、法行の人の、見諦道の中に於けるを未知欲知根と名く。謂ゆる信等の五根と喜樂捨根と意根となり。信解見得の人の思惟道の中に於て、是九根轉ずるを知根と名け、無學道の中の是九根を知己根と名く。

問うて曰はく、「何を以ての故に二十二根の中に於て但是三根を取る。」答へて曰はく、「了解了了自在なるの相、是を名けて根と爲す、餘の十九根は根相を具足せざるが故に取らず。是三根は利く、能く直入して涅槃に至り、諸の有爲法の中の主なるが故に自在を得、能く諸根に勝れたり。復次に、十根は但有漏自得にして利益する所無きが故に、九根は不定にして、或は有漏、或は無漏なるが故に、菩薩は應に具足すべしと説かず。問うて曰はく、

「十想は亦有漏亦無漏なり、何を以ての故に應に具足すべしと説く。」答へて曰はく、「十想は皆是れ助道にして、涅槃を求むる法なり。信等の五根は是れ善法なりと雖も、盡く涅槃を求めず、阿毘曇の中に説くが如し、「誰か信等の五根を成就して善根を斷ぜざる者有り」と。復次に、若し五根清淨なれば、變じて無漏と爲し、三根の中に、已に攝す。是三根

の中には必ず意根有り、三受の中には必ず一受有り、是を以ての故に但三根を説く。復次に、二十二根には、善有り、不善有り、無記有りて雜なり、是故に應に具足すべしと説かず。是三根は受衆、行業、識業に攝す。未知欲知根は六地に在り。知根と知己根とは九地

に、二十根には、善有り、不善有り、無記有りて雜なり、是故に應に具足すべしと説かず。是三根は受衆、行業、識業に攝す。未知欲知根は六地に在り。知根と知己根とは九地

【二八】未知欲知根  
諸法實相と名く。

に在り。三根は四諦を縁じ六想と相應す。未知欲知根は三根の因、知根は二根の因、知已根は但知已根の因なり。未知欲知根は次第に二根を生じ、知根は次第に或は有漏根を生じ、或は知根を生じ、或は知已根を生ず。知已根は或は有漏根を生じ、或は知已根を生ず。是の如き等は阿毘曇門を以て廣く分別して説けり。

(二八)次に、未知欲知根を諸法實相と名く。未知欲知の故に信等の五根を生じ、是五根の力の故に能く諸法實相を得。人の初めて胎中に入りて二根身根と命根とを得るが如し。爾時に段肉未だ具せず、諸根未だ別知する所有る能はず。五根を成就すれば能く五塵を知るが如し。菩薩も亦是の如く、初發心より作佛を欲すれども、未だ是五根を具せず、願有りて諸法實相を知らんと欲すと雖も、知るを得る能はず。菩薩は是信等の五根を生ずれば、則ち能く諸法實相を知る、眼の如きは四大及び四大造色の和合するを名けて眼と爲す。先づ四大と四大造色有りと雖も、未だ清淨ならざるが故に眼根と名けず、善根を斷ぜざるの人は信有りと雖も、未だ清淨ならざるが故に名けて根と爲さず。若し菩薩、是信等の五根を得れば、是時能く諸法の實相は不生不滅、不垢不淨、非有非無、非取非捨、常寂滅、眞淨なること虚空の如く、示すべからず、説くべからず、一切語言の道過ぎ、一切の心心數法の所行を出づること涅槃の如し。是れ則ち佛法なりと信ず。菩薩は能く信根の力を以ての故に、能く精進根の力を受くるが故に、勤行して不退不轉なり。念根の力の故に、不善法をして入らしめず、諸の善法を攝す。定根の力の故に、心の五欲の中に散ずるを

能く實相の中に攝し、慧根の力の故に、佛智慧の中に於て、少多の義味を得て壞すべからず。五根所依の意根は必ず受と俱にして、若は喜、若は樂、若は捨なり。是根に依りて菩薩の位に入り、乃至未だ無生法忍の果を得ず、是を未知欲知根と名く。此中に諸法實相を知ること、了了なるが故に知根と名く。是より無生法忍の果を得、阿鞞跋致地に住し、受記を得、乃至十地を滿ちて、道場だうぢやうに坐して金剛三昧を得、其中間に於て名けて知根と爲す。一切の煩惱の習を斷じ、阿耨多羅三藐三菩提を得、一切の法を知るべく、智慧遍滿するが故に、名けて知已根と爲す。丹にに云はく、三根竟る。

大智度論初品十力釋論第三十九

卷第二十四

聖者龍樹造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

〔釋〕舍利弗、菩薩摩訶薩、遍觀、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、大慈大悲を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし。

〔圖〕問うて曰はく、「是十力と四無所畏等は是れ佛の無上法なり、應當に前に説くべし、何を以ての故に先づ九相八念等を説く。」答へて曰はく、「六波羅蜜は是れ菩薩の用ふべき所なれば先に已に説けり。三十七品乃至三無漏根は、是れ聲聞法なり。菩薩は是六波羅蜜を行じて力を得るが故に、聲聞辟支佛地を過ぎんと欲し、亦聲聞辟支佛に向へる人を教化して、佛道に入らしめんと欲す、是故に是小乗の法の、一切衆生を捨てて利益する所無きを呵す。若し諸の聲聞人言はく、「汝は是れ凡夫の人なり、未だ結使を斷ぜず、是法を行ずる能はず」と。是故に空しく呵す。是を以ての故に佛言はく、「菩薩は應に三十七品等を具足すべし」と。諸の聲聞法は不可得なるが故に、是諸法を行ずと雖も不可得なるを以ての故に、衆生の邪行を行ずるが爲の故に、是正行を行じて、常に是諸法の不可得空を捨てず、亦疾に涅槃の證を取らず。若し菩薩、是小乗を解せず行ぜずして、而も但呵せ

【一】以下、遍く佛の十力等の文中、佛の無上法たる十力等を措いて、九相等を説ける理由

卷第二十四

七五七

ば、誰か當に背て信すべき。譬へば釋迦牟尼佛の如きは、若し先づ六年の苦行を行せずして、呵して非道と言はば、人の信受する無けん。是を以ての故に自ら苦行を行すること餘人に過ぎたり。佛道を成ずる時、是苦行道を呵するに、人皆信受す。是故に六波羅蜜の後に次第に聲聞法を行す。

復次に、此れ但是聲聞法の中に非ず、是法の中には和合して、衆生の意を捨てず、一切の佛法を具足し、不可得空智を以ての故に、菩薩法と名く。問うて曰はく、「若し菩薩は三十七品の諸法を具足せば、云何が聲聞法の位に入らざる。」答へて曰はく、「具足とは具足して觀知し、而も證を取らず、了了に觀知するが故に、具足と名く。佛の説きたまふが如し。

一切のものは杖痛を畏れ、壽命を惜まざるは莫し  
己を恕して喻と爲すべく、杖を群生に加へざれ

一切は杖痛を畏ると言ふと雖も、無色界の衆生は身無く、色界には身有りりと雖も、而も鞭杖無し。欲界の中の諸佛、轉輪聖王、夜摩天已上は皆杖楚を畏れず、杖處を得るを畏る者の爲の故に、一切と言ふ。具足も亦是の如く、證を求め、法に著するを爲さざるが故に、具足と言ふ。復次に、我先に衆生を捨てず、不可得空智を以て和合するが故に、聲聞地に墮せずと説けり。

【二】 習行するの義釋。

問うて曰はく、「六波羅蜜より三無漏根に至るまで、但具足すべしと言へり。此より以後、

何を以ての故に皆是事を得んと欲し、知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を修行すべしと言ふや。答へて曰はく、聲聞法は量有り限有るが故に、應に具足すべしと言ふ。此より已下は、是れ諸佛の法にして、甚深無量なり。菩薩は未だ得ざるが故に、是事を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと言ふなり。復次に、聲聞の法は解し易く知り易きが故に具足と言ひ、菩薩の法と佛の法とは、解し難く知り難きが故に、當に學すべしと言ふ。復次に、聲聞の法は總相にして、但苦を知り、苦の因を知り、苦の盡くるを知り、苦を盡すの道を知るなり。譬へば二種の醫の如し。一は但病を知り、病の因を知り、病を差すを知り、病を差す藥を知る。而も、一切の病を知らず、一切の病の因を知らず、一切の病を差すを知らず、一切の病を差す藥を知らず。若は復但人の病を治するを知りて、畜生の病を治するを知らず。或は能く一國土を治するも、餘の國土を治する能はず。能く數十種の病を治する有るも、悉く四百四種の病と病の因と、病を差すこと、病を差す藥を知らざるも、亦是の如し。二には四種の中に於て、悉く皆遍く知り、遍く藥を知り、遍く病を知る。聲聞の人は、小醫の遍く知る能はざるが如く、菩薩摩訶薩は、大醫の病として知らざる無く、藥として識らざる無きが如し。是を以ての故に、聲聞法は應に具足すべく、菩薩法は應當に學すべし。

【三】以下佛の十力を釋す。

佛に十力有りとは、是處と不是處の如實の知は一の力なり。衆生の過去未來現在の諸業諸受を知り、造業の處を知り、因縁を知り、報を知るは二の力なり。諸禪と解脱と三昧と

【四】十力を説く  
因縁を述ぶ。

定との、垢淨の分別の相を知る如實の知は三の力なり。他の衆生の諸根の上下の相を知る如實の知は四の力なり。他の衆生の種種の欲を知るは五の力なり。世間の種種の無數の性を知るは六の力なり。一切の道の至る處の相を知るは七の力なり。種種の宿命、共相共因縁、一世二世乃至百千世、劫初、劫盡に、我彼衆生の中に在りては、是の如きの姓名、飲食、苦樂、壽命の長短なりき、彼中に死して是間に生じ、此間に死して還是間に生じ、此間の生の名姓、飲食、苦樂、壽命の長短も、亦是の如しと知るは、八の力なり。佛の天眼の淨きことは、諸の天人の眼に過ぎたり。衆生の死時生時、端正醜陋、若は大、若は小、若は惡道に墮ち、若は善道に墮つるを見たまひ、是の如きの業因縁にして報を受く。是諸の衆生は、惡の身業を成就し、惡の口業を成就し、惡の意業を成就し、聖人を謗毀する邪見もて、邪見の業を成就し、是因縁の故に身壞死する時、惡道に入り地獄の中に生ず。是諸の衆生は善の身業を成就し、善の口業を成就し、善の意業を成就し、聖人を謗らざる正見もて、正見の業を成就し、是因縁の故に身壞死する時、善道に入り、天上に生ずるを知りたまふは、九の力なり。佛は諸の漏盡くるが故に、無漏心解脫と、無漏智慧解脫とをもて、現在の法の中に自ら、「我生は已に盡き、持戒已に作し、後有盡きたり」と識知する如實の知は、十の力なり。

(四)と問うて曰はく、『是十力は菩薩も未だ得ず、聲聞辟支佛も得る能はざる所なり。今何を以てか説くや。』答へて曰はく、『聲聞の人は得る能はずと雖も、若し是十力の功德を聞か

ば、是念を作さん、「佛は是の如きの如きの大功德有り」と。自ら慶して言はく、「我等は善利にし  
 て、益を蒙ること少からず」と。信心清淨なるを得て、盡苦の道に入らん。諸の菩薩  
 之を聞かば、菩薩の道を勤修し、當に是の如き十力等の大功德の果を得べし。復次に、聲  
 聞の人及び菩薩有りて、念佛三昧を修す。但佛身を念ずるのみに非ず、當に佛の種種の功  
 徳、法身を念すべく、應に是念佛を作すべし。一切の種と、一切の法とを能く解するが故  
 に、一切智人と名け、一切法を如實に善く分別して説くが故に、一切見人と名け、一切法  
 を現前に知るが故に、一切知見無礙人と名け、心一切衆生に等しきが故に、大慈悲人と  
 名け、大慈悲有るが故に、名けて世救と爲し、如實の道より來たまふが故に、名けて如來  
 と爲し、一切世間の供養に應受したまふべきが故に、名けて應供人と爲し、不顛倒の智慧  
 を成就したまふが故に正遍知と名け、戒定慧の智を成就したまふが故に、明行と名け、  
 成じて復還りたまはざるが故に、善逝と名け、世間の總相別相を知りたまふが故に、世間  
 解と名け、善く出世間安隱の道を説きたまふが故に、無上調御師と名け、三種の教法を以  
 て衆生を度したまふが故に、天人師と名け、一切世間の煩惱の睡を能く自ら覺し、亦能く  
 人を覺したまふが故に、名けて覺人と爲し、一切の所願を具足したまふが故に、有徳と名  
 け、十力を成就したまふが故に、堅誓と名け、四無畏を得たまふが故に、人師子と名け、  
 無量甚深の智を得たまふが故に、大功德海と名け、一切を起説したまふこと無礙なるが故  
 に、如風と名け、一切の好醜、憎愛無きが故に、如地と名け、一切結使の薪を燒きたまふ

が故に、如火と名け、善く一切煩惱の習を斷じたまふが故に、具足解脫と名け、最上の處に住したまふが故に、名けて世尊と爲す。佛は是の如き等の諸の功德を有したまふ。故に應に佛を念すべし。是を以ての故に菩薩摩訶薩は、佛の十力、四無所畏、十八不共法を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。復次に、佛、王舍城の耆闍崛山の中に在して、是般若波羅蜜を説きたまふ時、佛の四部の衆、及び諸の外道の在家出家、諸の天龍鬼神等の種種の大衆集會せり。佛、三昧王三昧に入り、大光明を放ち、遍く恆河沙等の世界を照したまふに、地、六種に震動す。是般若波羅蜜、六波羅蜜、乃至三無漏根を説きたまへり。是中に衆生有りて疑ふらく、「何等の力有り、幾種の力有るが故に、能く是の如き不可思議の感動を作して利益したまふや」と。佛は、衆生の心に、是の如きの疑有るを知りたまふが故に言はく、「我に諸法實相の智力有り。是力に十種の用有り。是十種の智の故に、能く是の如きの感動變化を作す。亦能く是所作に過ぎたり」と。是を以ての故に十力を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと言ふ。復次に、佛弟子は、世世に善根を殖うるも、少罪の縁を以ての故に、外道に墮つ。諸の外道常に言はく、「佛は實に功德力を有するに非ず、是れ幻術の力もて、人心を誑惑するなり」と。佛弟子の外道に墮せる者は、心に疑ふらく、「若し爾らば佛は大人に非ず」と。是惡謗を滅せんと欲したまふが故に言はく、「我は實に十力、四無所畏を有するが故に、衆生を度す、是れ眞諦に非ざるなり」と。復次に、諸の菩薩は菩薩の道を修するに、苦行の事は辦じ難く、成じ難きが故に懈

【五】以下十力の  
功能を明す。

息せんと欲す。是故に佛言はく、「是十力を行へば當に無量の果報を得べし」と。譬へば  
估客の主の商人を慰諭して言ふが如し、「汝等慎んで疲倦する勿れ、精勤し努力せば、寶山  
に至るを得て、當に七寶の如意寶樹を得べし」と。佛も亦是の如し、諸の菩薩を安慰し  
て言はく、「疲倦するを得る無く、當に勤めて精進して、菩薩の道を修すべし。是十力を行  
せば、當に無量の果報を得べし」と。是の如き等の種種の利益、因縁の故に十力等を説き  
たまへり。

問うて曰はく、「佛は無量の力有り、何を以ての故に但十力を説く。」答へて曰はく、「諸佛  
は無量の力有りと雖も、人を度する因縁の故に、十力を説けば其事を成辦するに足る。是  
處不是處の智力を以て、衆生の是は度すべく、是は度すべからずと分別籌量し、業報智力  
を以て、是人の業障、是人の報障、是人の無障を分別籌量し、禪定解脱三昧智力を以て、  
是人は味に著せり、是人は味に著せずと分別籌量し、上下根智力を以て衆生の智力の多少  
を分別籌量し、種種欲智力を以て衆生の樂ふ所を分別籌量し、種種性智力を以て衆生の深  
心の越く所を分別籌量し、一切至處道智力を以て衆生の解脱門を分別籌量し、宿命智力  
を以て衆生の先に從來する所を分別し、生死智力を以て衆生の生處、好醜を分別し、漏盡  
智力を以て衆生の涅槃を得るを分別籌量したまふ。佛は是十種の力を用ひて、衆生を度脱  
したまふこと、審諦にして錯らず、皆具足するを得、是を以ての故に佛は無量の力有りと  
雖も、但此十力を説くなり。

【六】力の意義を説く。

復次に、是處不是處力は定んで是因縁より、是果報を出すを知る。是中に總て九力を攝す。衆生を度せんと欲するが爲の故に、初力の中に於て分別するに九種有り。何を以ての故に、是世間の衆生は、現前に穀の種より出づるを見れども、而も知る能はず、何に況んや心心數法の因縁をや。佛は内外の因縁果報に於て、了了に遍く知りたまふが故に、名けて力と爲す。佛は是衆生の業煩惱の因縁の故に縛せられ、淨き禪定、三昧、解脱の因縁の故に解かるるを知りたまふ。是一切衆生の三世の三種の諸業、諸の煩惱の輕重、深淺、龜細を、佛は悉く遍知したまふが故に力と名け、一切衆生の諸の禪定、解脱、三昧の大小深淺、解脱の因縁を、佛は悉く遍く知りたまふが故に力と名く。衆生の鈍根なるは後身の爲の故に、罪福業の因縁を作り、利根の人は、生ぜざるが爲の故に、諸業を集む。佛は悉く此上下根の好醜の相を知りたまふが故に力と名く。一切衆生の二種の欲は、上下根の因縁と作り、二種の欲、善惡の種種の別異を知り、佛悉く遍知したまふが故に力と名く。二種の欲は二種性の因縁に由るが故に、遍く衆生の深心の所趣を知りたまふが故に力と名く。一切衆生は種種の性の因縁の故に二種の道を行ず、謂ゆる善道と惡道となり。種種の門と所至の處を、佛は悉く遍知したまふが故に力と名く。過去未來世の中の、因縁果報の智慧の無礙なる、是を宿命、生死智力と名け、過去未來の因果を知り、已に悉く知り、方便して因縁果報の相續を壞する、是を漏盡力と名く。佛は三世の中の二種の因縁を知り、衆生の根、欲性を分別籌量して、漏を盡すが爲の故に、法を説きたまふ、是れ

【七】十力の中初  
に是處不是處力を  
釋す。

漏盡の力なり。

問うて曰はく、「何等をか是處不是處力と爲す。」答へて曰はく、「佛は一切諸法の因縁果報の定相、是因縁よりは、是の如きの果報を生じ、是因縁よりは、是の如きの果報を生ぜざるを知りたまふ。所以は何ん。多性經」の中に説くが如くんば、是處不是處の相とは、女身にして轉輪聖王と作るは是處無し。何を以ての故に。一切の女人は、皆男子に屬して自在を得ざるが故に。女人は尙轉輪聖王たるを得ず、何に況んや佛と作るをや。女人の解脫涅槃を得るが若きも亦男子に囚りて得、自然に得道すること有る無し。二の轉輪聖王の一時に出世するは是處無し。何を以ての故に。怨業を成就すること無きが故に。二の轉輪聖王すら尙同世せず、何に況んや二佛をや。惡業の樂報を受くるを得るは是處無し、惡業は尙世間の樂すら得る能はず、何に況んや出世の樂をや。若し惡行して天に生ずるは是處無し、惡行は尙生天をすら得る能はず、何に況んや涅槃をや。五蓋は心を覆うて散亂し、七覺を修するを離れて、而も涅槃を得と云ふは是處無し、五蓋、心を覆ひ、七覺を修するを離れては、尙聲聞の道すら得る能はず。何に況んや佛道をや。心に覆蓋無ければ佛道を得べし、何に況んや聲聞道をや。是の如き等の是處不是處は「多性經」の中に、佛口づから自ら説きたまひ、諸の論議師の輩は是佛語に依りて、更に廣く是處不是處を説けり。若し佛に闕失、罪過有り、若は諸の賢聖は外道の師を求め、若は諸の賢聖は自ら我は是れ佛なりと言ひ、若は諸の賢聖は惡道に墮し、若は諦を見るも更に斷する所

の結使更に生じ、若は諸の賢聖は罪を覆藏し、若は須陀洹は二十五有なりと言ふは皆是處無し。賢聖の分別して、中に廣く説くが如し。五逆の人、五種の黃門、四惡道に墮するの衆生、鬱多羅越の人、曠の眷屬は三障に遮へらるるも、若し道を得と言はば皆是處無し。説法を輕んずる者、法を輕んじ白を輕んじ、戒を破り愚癡にして、若し具足の法を得と言ひて喜ぶも亦是處無し。自ら我は是れ佛なりと言ひ、此身口の惡を悔いずして佛を見んと欲し、若は破僧罪を悔いずして、佛を見んと欲し、邪定より正定に入り、正定より邪定に入り、正定より不定に入り、佛法を除きて別に眞の得道有り、人は應に得道すれば、身若し死すべしとせば、皆是處無し。因縁生を除きて識は名色を出して更に法有りとせば是處無し。佛は使を遣したまふに、事未だ訖らざるに遮礙せられたまふとせば是處無し。慈三昧に入り、若は他の因縁にして死して滅盡定に入り、見諦道の中に在りて、若は死すとせば是處無し。若し佛及び佛母を害するは是處無し。轉輪聖王の女寶、象馬、主藏の臣、主兵の臣は若は胎中に在りて死し、母子天寶するは是處無し。鬱多羅越の人、女寶、佛母は命終して、次の身に惡道に入るは皆是處無し。有爲は常にして涅槃は無常なり、凡夫の人能く非有想非無想の結使を離じ、一切の相を取り、禪定の中に聖道を修む。無漏道は有漏の因なり、若は地は濕相、水は堅相、火は冷相、風は住相とせば皆是處無し。無明は諸行を生ずる能はず、乃至生は老死を生ずる能はずとせば是處無し。二心は一時に五識衆を生じ、能く分別して相を取り、若は著し、若は離れ、若

【八】次に第二の業報智を釋す。

は眼りて能く身業口業を起し、若は眼りて、能く禪定に入るとせば、是處有ること無し。但五識のみ相續して生じ、意識を生ぜず。但五識衆の中に著すれば相續有り、但五識衆の能く縁するを能縁の相と名け、能く無色法を縁じ、能く過去未來を縁じ、能く離三世法を縁じ、但五識衆の中に増觸、明觸有り、禪定を修し、若は善律儀不善律儀を受け、若は憂喜、若は無覺無觀有り、若は諸根を増益すとせば皆是處無し。鼻識舌識には隱没の無記有り。凡夫人の第六識は、我を離れ、行有りとせば是處無し。是の如き等の無量は是處無し。是處も亦是の如し。佛は是處無是處を知りて分別籌量し、度すべき者には爲に法を説き、度すべからざる者には爲に因縁を作したまふ。譬へば良醫の病の治すべく、治すべからざるを知るが如し。聲聞、辟支佛は知る所少少なるが故に、或は度すべからざる者を度せんと欲す、首羅の度すべきを度せざるが如く、舍利弗の度せざる所の者有るが如し。是佛は是事無し、能く壞する無く、能く勝る無し、悉く遍通知したまふが故なり。是を初力と名く。

(八)業報智力とは、身口所作の業と、及び此生の無作の業、受くる所の戒の業、亦是惡業にして日夜に隨うて業用を生じ罪福の業を生ず。是業を佛は略して三處の攝なりと説きたまふ、是を一切業相と名く。佛は一切衆生を知りたまふに、業は過去にして、報も亦過去なる有り、業は過去にして、報は現在に在る有り、業は過去にして、報は未來に在る有り、業は過去にして、報は過去現在に在る有り、業は過去にして、報は過去未來に在る有り、

業は過去にして、報は現在未來に在る有り、業は過去にして、報は過去未來現在に在る有り、現在の業も亦是の如しと。復次に、善心の中に善、不善、無記の業報を受く。不善心、無記心も亦是の如し。復次に、業業の因縁の故に樂報を受け、苦業の因縁の故に苦報を受け、不苦不樂業の因縁の故に不苦不樂の報を受け、現報業の因縁の故に現報を受け、生報業の因縁の故に生報を受け、後報業の因縁の故に後報を受け、不淨業の因縁の故に惱報を受け、淨業の因縁の故に無惱報を受け、雜業の因縁の故に雜報を受く。復次に、二種の業有り、必受報業と必不受報業なり。必受報業は離るるを得べからず、或は時を待ち、人を待ち、處を待ちて報を受く。人の如きは處に轉輪聖王と共に福を受くべし、轉輪聖王の好世を待ち、是時に出でて乃ち受くるは是を時を待つと爲す。人を待つとは、人は即ち是れ轉輪聖王なり、處を待つとは、轉輪聖王所出の處なり。復次に、是必受報の業は技能功勳を待たず、若は好、若は醜、求めずして自ら來る。天上に生るるの人には轉輪聖王自ら至り、地獄の中の人には罪苦自ら追ふが如く、因縁を待たず。此業は深重なるが故に。復次に、必受報の業は、若し毘琉璃軍の、七萬二千の諸の得道の人、及び無量の五戒の優婆塞を殺さんに、目連等の大神通人も救ふ能はざる所なるが如く、薄拘羅の後母に、火中湯中水中に投著せらるれども死せざるが如し。佛の諸國に遊びたまふに、出家して行乞し、膳供を須ひたまはずと雖も、而も五百乘の車に王の所食を載せ、葉中に粳米を生じ、飯に隨うて百味の羹有るが如し。是の如き等の善惡の業は必ず受け、餘は必ず受けず。欲界は

三種の業報を受くる處、樂受業、苦受業、不苦不樂受業なり。色界は二種の業報を受くる處、樂受業、不苦不樂受業なり。無色界は一種の業報を受くる處、不苦不樂受業なり。或は事を待つとは、是事に依りて業報を受くるを得るなり。弗迦羅婆王の池中に生ぜる千葉の金色の蓮華の如きは、大さ車輪の如く、是に因りて大會は快樂にして、多くの人出家得道せり。佛は一切衆生の諸業を造る處は、或は欲界、色界、無色界にして、欲界は何の道中に在り、若は天道は何の天中に在り、若は人中は何の天下に在り、若は閻浮提は何の國中に在り、若は此國には何の城、何の聚落在り、何の精舍、何の土地、若は是城は何の里、何の巷に在り、何の舎は何の處に在りと知りたまふ。是業は何等の時作れる、過去一世二世乃至百千萬世なり。是業の果報は、幾か已に受け、幾か未だ受けず、幾か必ず受け、幾か必ず受けずと知りたまふ。善不善の用ふる所の事物を知りたまふ。謂ゆる刀杖か、教勸して殺せる等か、自殺か、人をして殺さしめたるかなり。諸餘の惡業も亦是の如し、善業も亦是の如し。是の如く、布施、持戒、修善は、施中の施す所は、何等の土地、房舍、衣服、飲食、醫藥、臥具、七寶、財物なるか、戒中の受戒は自然戒か、心生戒か、口言戒か、一行戒か、少分戒か、多分戒か、滿分戒か、一日戒か、七善道戒か、十戒か、具足戒か、定共戒か、善福の中の修は、初禪二三四禪なるか、慈心か、悲喜捨心なるかを知りたまふ。是の如き等の善業の因縁、若は慳貪、若は瞋恚、若は怖畏、若は邪見、若は惡知識等の種種の惡業の因縁、福業の因縁、若は信、若は憍愍、若は恭敬、若は禪定、若

は智慧、若し善知識等の種種の善業の因縁、是諸業は、自在なる一切の天、及び人にして、  
 是諸の業相を能く轉ずる者無し。億千萬世に於て常に衆生を隨逐して捨てず、債主の人  
 に隨ふが如し。因縁具足するを得れば、便ち果報を與ふ。地中の種子の因縁時節の和合を  
 得れば、便ち生ずるが如く、是業は能く衆生をして、六道の中に生を受けしむること、箭  
 よりも駛疾なり。一切衆生は皆諸の業報の分有り、父母の財を遺せば、諸子皆分を得べ  
 きが如し。是業の果報は、時到れば遮止すべからず。劫盡の火の衆生の生すべき處に隨う  
 て、處處に安置するが如く、大國王の其所應に隨うて官職を與ふるが如し。人の命終の  
 時、是業來りて、其心を陰覆すること、大山の物を映するが如し。是業は能く種種の身を  
 與ふること、工畫師の種種の像を作るが如し。若し人正行を以てせば、業は則ち好報を  
 與へ、若し邪行を以てせば、業は則ち惡法を與ふること、人の王に事ふるに、事に隨うて  
 報を得るが如し。是の如き等、諸の業因果報を分別す。復次に「分別業經」の中に、佛、  
 阿難に告げたまへるが如し。惡を行するの人好處に生じ、善を行するの人惡處に生ず。阿  
 難の言さく、「是事云何」と。佛言はく、「惡人は今世の罪業未だ熟せず、宿世の善業已に  
 熟す、是因縁を以ての故に今惡を爲すと雖も、而も好處に生ず。或は死に臨む時、善の心  
 心數法生じ、是因縁の故に亦好處に生ず。善を行するの人惡處に生ずとは、今世の善未だ  
 熟せざるに、過去の惡已に熟す、是因縁を以ての故に、今善を爲すと雖も而も惡處に生ず、  
 或は死に臨むの時、不善の心心數法生じ、是因縁の故に亦惡處に生ず。問うて曰はく、「熟

【九】次に第三の  
禪定解脫三昧淨垢  
分別智力を釋す。

不熟の義は爾るべし、死に臨むの時の、少許の時の心、云何が能く終身の行力に勝る。答へて曰はく、「是心は時頃少なしと雖も、心力猛利なり、火の如く毒の如し、少しと雖も能く大事を爲す。是死に垂んとする時の心は、決定して猛健なるが故に、百歳の行力に勝る。是後心を名けて大心と爲す。身及び諸根を捨つる事急なるを以ての故なり。人の陣に入りて、身命を惜まざるを、名けて健と爲すが如し。阿羅漢の如きは是身の著を捨つるが故に阿羅漢道を得。是の如き等は種種の罪福の業報なり。報を轉ずることも、亦是の如くなるべし。聲聞の人の如きは、但惡業の罪報、善業の福報のみを知りて、是の如く細に分別する能はず。佛は悉く遍く是業及び業報、智慧、勢力の無礙無盡にして、能く壞する無きを知りたまふが故に、是を第二の力と名く。

禪定解脫三昧淨垢分別智力とは、禪とは四禪に名け、佛は是禪の佐助の道法、名相、義分、次第、熏習、有漏、無漏、學、無學、淨垢、味、不味、深淺、分別等を知りたまふ。八解脫は禪の中に相を分別して説くが如し。禪に一切の色界定を攝し、解脫を説きて一切の定、禪波羅蜜を攝す。即ち是諸の解脫禪定三昧、解脫禪三昧を皆名けて定と爲し、定を名けて心の不散亂と爲す。垢を愛、見、慢等の諸の煩惱に名け、淨を眞の禪定に名け、愛、見、慢等の煩惱を雜へざること眞金の如し。分別は諸定の中に一心行、不一心行、常行、不常行、難入、易入、難出、易出、別取相、總取相、轉治、不轉治有るに名く。轉治とは、淫欲の中の慈心、瞋人の不淨觀、愚癡の人の邊無邊を思惟し、掉戲の心の中に、智

【下】次に第四知上下根智力を釋す

慧を用ひて諸法を分別する、汝心の中に心を攝せんと欲するが如し。若し爾らざる者をば不轉治と名く。是定中に應に時及び住處を分別すべし。若し身瘦痛せば、是れ定を行する時に非ず。菩薩は善行の時の如きは、是念を作さく、「我今禪定を生ずる能はず」と。若し多人の處は、亦定を行する處に非ず。復次に、佛は是禪定の失と、是禪の住と、是禪の増益と、是禪の涅槃に到るとを知りたまふ。復次に、佛は是人の入定し難く、出定し難きこと、入り易く、出で易きこと、入り易く、出で難きこと、入り難く、出で易きを知りたまふ。佛は是人の、是の如きの禪を得べきを知り、是人の禪を失して五欲を受くるを知り、是人の五欲を受け已りて、還禪を得、是禪に依りて阿羅漢を得るを知りたまふ。是の如き等の一切の諸の禪定解脱は、即ち是れ三昧なり。是れ禪定なり、佛は甚深の智慧を以て盡く知りたまひ、能く壞するもの無く、能く勝るもの無し。是を第三の力と名く。

(二〇)しゆじやうじやうげこん 衆生の上下根を知る智力とは、佛は衆生の是利根、鈍根、中根を知りたまふ。利智を名けて上と爲し、鈍智を名けて下と爲す。佛は是上下根の智力を用ひて、一切衆生を分別すらく、是は利根、是は中根、是は鈍根、是人は是の如きの根にして、今世に但能く初果を得、更に餘を得る能はず。是人は但能く第一第二第三第四の果を得。是人は但能く初禪を得、是人は但能く第二第三第四の禪を得、乃至滅盡定も亦是の如し。是人は當に時解脱の證を得べし。是人は當に不時解脱の證を作すべし。是人は能く聲聞の中に於て第一を得、是人は能く辟支佛の中に於て第一を得、是人は六波羅蜜を具足して、能く阿耨多羅三藐三菩提

【鶖群梨摩羅】ア  
 ングリマール(An-  
 gulinā) 指疊と  
 譯す。  
 【周梨般陀伽】シ  
 ュツデイバンタカ  
 (Sūhīpantaka)  
 繼道と譯す。

【二】次に第五知  
 衆生種種欲智力を  
 釋す。

を得」と。是の如く知り已りて、或は略説を爲して度を得しめ、或は廣説を爲して度を得しめ、或は略廣の説を爲して度を得しめ、或は軟語を以て教へたまふ。佛は亦分別したまはく、「是人は餘根有り、應に信根を増生せしむべし。是人は應に精進、念、定、慧根を生ぜしむべし。是人は信根を用ひて正位に入り、是人は慧根を用ひて正位に入り、是人は利根なれども結使の爲に遮へらる。鶖群梨摩羅等の如し。是人は利根にして結使の爲に遮へられず。舍利弗、目連等の如きは根鈍なりと雖も、遮ふる無きを知る。周利般陀伽の如きは、根鈍にして遮ふる者有り。是人は見諦所斷には根鈍なるも、思惟所斷には根利なり。思惟所斷には鈍なるも、見諦所斷には利なり。是人は一切の根同じく鈍なり、同じく利なり。是人は一切の根同じく鈍ならず、同じく利ならず。是人は先因の力大なり、是人は今縁の力大なり。是人は縛を欲して解を得、是人は解を欲して縛を得と知りたまふ。譬へば鶖群梨摩羅が、母を殺し、佛を害せんと欲して、解脱を得るが如く、一比丘の四禪を得、増上慢の故に還りて地獄に入るが如し。是人は必ず惡道に墮し、是人は出づること難く、是人は出づること易く、是人は疾く出で、是人は久しくして乃ち出づと知りたまふ。是の如き等の一切の衆生の上下根の相を皆悉く遍く知り、能く壞するもの無く、能く勝るもの無し、是を第四の力と名く。

衆生の種種の欲を知るの智力とは、欲は信と喜と好と樂とに名く。五欲を好むは孫陀羅難陀等の如く、名聞を好むは提婆達等の如く、世間の財利を好むは須彌利多羅等の如く、

【讀法多】レトワ  
タ (Tavara)

出家を好むは耶舍等の如く、信を好むは跋迦梨等の如く、持戒を好むは羅睺羅等の如く、施を好むは施跋羅甘密女の所生なりと。佛の姑の如く、頭陀、遠難を好むこと摩訶迦葉の如く、坐禪を好むこと瞿波多等の如く、智慧を好むこと舍利弗等の如く、多聞を好むこと阿難等の如く、毘尼を知ること優婆塞等の如し。是の如く佛弟子は、各各好む所有り、凡夫の人も亦各各喜ぶ所有り。或は淫欲を意ぶ有り、或は瞋恚を意ぶ有り。復次に、佛は多欲、多瞋、多癡なるを知りたまふ。問うて曰はく、「何等か是れ多欲、多瞋、多癡の相なる。」答へて曰はく、「禪經の中に説くが如く、三毒の相は是中に應に廣く説くべし。是の如きの相を知り已りて、淫欲多き人は不淨法門もて治し、瞋多き人は慈心法門もて治し、愚癡多き人は因緣法門もて治す。是の如く欲する所に隨うて法を説く。謂ゆる善欲には心に隨うて爲に説くこと、船の流に順するが如し。惡欲には苦切の語を以て教ふることに、稱を以て稱を出すが如し。是欲智の中を、佛は悉く遍知し、能く壞するもの無く、能く勝るもの無し。是を第五の力と名く。

【二】次に第六性  
智力を釋す。

性智力とは、佛は世間の種種なる別異の性を知りたまふ。性は積習に名け、相は性より生じ、欲は性に隨うて行を作す。或時は欲に従うて性を爲し、欲を習うて性を成すなり。性とは深心の事を爲すに名け、欲とは緣に隨うて起るに名く。是を欲と性ととの分別と爲す。世間の種種の別異とは、各各の性多く、性は無量にして數ふべからず。是を世間の別異と名く。二種の世間有り、世界世間と衆生世間となり。此中には但衆生世間のみを説く。佛

は、衆生は是の如きの性なり、是の如きの欲有り、是處より來りて若は成就し、善根なり、不善根なり、度すべし、度すべからず、定なり、不定なり、必なり、不必なり、何の行を行じ、何の處に生じ、何の地に在るかを知りたまふ。復次に、佛は是衆生の種種の性相、謂ゆる趣向する所に隨うて、是處の如く偏に多く、是の如きの貴有り、是の如きの深心の事有り、是の如きの欲有り、是の如きの業有り、是の如きの行有り、是の如きの煩惱有り、是の如きの禮法有り、是の如きの定有り、是の如きの威儀有り、是の如きの有り、是の如きの見有り、是の如きの憶想分別有り、爾所の結使は生じ、爾所の結使は未だ生ぜず、著する所に隨うて欲を生じ、欲に隨うて染心有り、染心に隨うて趣向し、趣向に隨うて貴重し、貴重に隨うて常に覺觀し、覺觀に隨うて戲論を爲し、戲論に隨うて常に念じ、念に隨うて行を發し、行を發すに隨うて業を作し、業を作すに隨うて果報有るを知りたまふ。復次に、佛は是種種の性智力を用ひて、是衆生は度すべく、是は度すべからず、是は今世に度すべく、是は後世に度すべく、是は即時に度すべく、是は異時に度すべく、是は現前に度すべく、是は眼に見ずして度すべく、是人は佛能く度せん、是人は聲聞能く度せん、是人は共に度すべく、是人は必ず度すべく、是人は必す度すべからず、是人は略説して度すべく、是人は廣説して度すべく、是人は略廣説して度すべく、是人は讚歎して度すべく、是人は折伏して度すべく、是人は將に迎へて度すべく、是人は棄捨して度すべく、是人は細法もて度すべく、是人は龜法もて度すべく、是人は苦切して度すべく、是

人は軟語もて度すべく、是人は苦軟もて度すべく、是は邪見、是は正見、是は過去に著し、  
 是は未來に著し、是は國滅に著し、是は常に著し、是は有の見到著し、是は無の見到著し、  
 是は生を欲し、是は生を厭ひ、是は富貴の樂を求め、是は厚く邪見到著し、是は因無く緣  
 無しと説き、是は邪なる因縁を説き、是は正しき因縁を説き、是は無作業と説き、是は  
 邪なる作業を説き、是は正しき作業を説き、是は不求を説き、是は邪求を説き、是は正  
 求を説き、是を我を貴び、是は五欲を貴び、是は利を得るを貴び、是は飲食を貴び、是は  
 戲樂の事を説くを貴び、是は樂を樂しみ、是は憒闇を樂しみ、是は遠離を樂み、是は多く  
 愛を行じ、是は多く見を行し、是は信を好み、是は慧を好み、是は應に守護すべく、是は  
 應に捨つべく、是は持戒を貴び、是は禪定を貴び、是は智慧を貴び、是は悟り易く、是は  
 講説せば乃ち悟らん、是は引導すべく、是は句句を解せん、是は利根なり、是は鈍根なり、  
 是は中候なり、是は出で易く抜き易く、是は出で難く抜き難く、是は罪を畏れ、是は重罪  
 なり、是は生死を畏れ、是は生死を畏れず、是は多欲、是は多瞋、是は多癡、是は多欲に  
 して愼、是は多欲にして癡、是は多瞋にして癡、是は多欲にして瞋有り癡有り、是は煩惱  
 薄く、是は煩惱厚く、是は垢少く、是は垢多く、是は慧を覆ひ、是は衣被の慧なり、是は  
 廣慧なり、是人は善く五衆の相、十二入、十八界、十二因縁、是處、非是處、苦集滅道を  
 知り、善く入定、出定、住定を知ると知りたまふ。復次に、佛は、是は欲界の衆生、是  
 は色界、是は無色界の衆生、是は地獄、畜生、餓鬼、人天、是は卵生、胎生、濕生、化

【禪欲】禪の輕安  
及靜の妙味あるに  
執するをいふ。

【二三】次に第七一  
切至處道智力を釋  
す。

生、是は有色、是は無色、是は有想、是は無想、是は短命、是は長命、是は俱凡夫の人にして未だ欲を離れず、是は凡夫の人にして下地の欲を離るるも、未だ禪欲を離れず、是の如くにして乃ち非有想非無想に至り、是は道に向ひ、是は果を得、是は辟支佛、是は諸佛の無礙解脫なりと知りたまふ。是の如き等種種に、五道、四生、三聚の假名、障業、入界、善根、不善根、諸の結使、地の業界を分別し、是は度すべく、是は度すべからざるを滅智もて分別したまふ。是の如き等の分別を以て、世間の種種なる別異の性を知り、無礙解脫を得、是の如き等の種種の別異を、佛は悉く遍く知り、能く壞するもの無く、能く勝るもの無し、是を第六の力と名く。

(一)一切至處道智力とは、有人言はく、「業は即ち是れ道なり、所以は何ん。業因縁の故に、遍く五道に行く、業有り、能く業を斷じて、能く至る所有り。謂ゆる三聖道分及び無漏の思なり。是を以ての故に諸業は是れ一切至る處の道なり」と。復次に、有人言はく、「五別五智三昧と禪の五支なり」と。は一切處に住して利益の事を辦す」と。復次に、有人言はく、「第四禪即ち是なり。何を以ての故に。第四禪は一切諸定の至る處なればなり。諸經の中に説くが如し。是善心、定心、不亂心は、心を攝して皆第四禪の中に入る」と。復次に、有人言はく、「身念處の如きは即ち是れ至處の道なり、是れ諸道の利益の本なり」と。復有人言はく、「一切の聖道是れなり。是聖道を用て、意に隨うて利益を得」と。復有論者言はく、「一切の善道、一切の惡道、一切の聖道、各各諸道の至る處を知るなり」と。毛堅經の中

【二四】次に第八宿命智力を釋す。

に説くが如くんば、佛は悉く遍く知りたまひ、能く壞するもの無く、能く勝るもの無しと。是を第七の力と名く。

宿命智力とは、宿命に三種有り、有通、有明、有力なり。凡夫の人は但通のみ有り。聲聞の人は亦通有り亦明有り、佛は亦通有り、亦明有り、亦力有り。所以は何ん。凡夫の人は、但宿命の經る所を知りて、業因縁の相續を知らず、是を以ての故に凡夫の人は、但通のみ有りて明有ること無し。聲聞の人は集諦を知るが故に、了了に業因縁の相續して生ずるを知る。是を以ての故に聲聞の人は亦通有り亦明有り。若し佛弟子は、先づ凡夫人の時に宿命智を得、見諦道の中に入りて集の因縁を知り、第八の無漏心に見を斷ずるを得るが故に、通、變じて明と爲る。所以は何ん。明は見の根本に名くればなり。若し佛弟子は先づ聖道を得て、後に宿命智を生じ、亦集の因縁力を知るが故に、通、變じて明と爲るなり。問うて曰はく、「若し佛にして、本、菩薩爲りし時、先づ宿命智を得たまひ、諸の菩薩は、無處有處の煩惱を離れて、後に聖道に入りたまふが故ならば、云何が佛は、」我初夜に初めて明を得たり」と説きたまひしや。答へて曰はく、「是時は明に非ず、若し佛は衆中に在りて、「我彼時は明を得たり」と説きたまひ、衆人に示して言はく、「是明は初夜に得たり」と。譬へば國王の未だ王とならざる時、子を生み、後に王と作りし時、人有り、王子は何の時に生れしや」と、問へば、答へて、「王子は某時に生せり」と言ふが如し。是れ生ぜし時は未だ王と作らず、今は是れ王なるを以ての故に、彼を以て王子と爲し、王

【二五】次に第九生死智力を釋す。

子は彼時に生ぜりと言ふなり。佛も亦是の如し、宿命智生ぜしも、爾時、未だ是れ明に  
あらず、但通と名く。後夜の時に集因縁を知りたまふが故に、通、變じて明と爲る。後、  
衆中に在りて説きて言はく、「我は初夜の時に是明を得たり」と。問うて曰はく、「通明の義  
は是の如し、云何が力と爲す。」答へて曰はく、「佛は是明を用ひて、己身及び衆生を知りた  
まふこと無量無邊なり、世中の宿命因縁の所は、更に種種に悉く遍く知りたまふ、是  
を力と爲す、是を第八の力と名く。」  
生死智力とは、佛は天眼を用ひて、衆生の生死の處を見たまふ。凡夫の人は是天眼を用  
ひて、極多にして四天下を見、聲聞の人は極多にして、傍に小千界を見、上下亦遍く見  
る。問うて曰はく、「大梵王も亦能く千世界を見る、何等の異か有る。」答へて曰はく、「大梵  
王は自ら千世界に於て、立てば則ち遍く見れども、若し邊に在りて立てば、則ち餘處を見  
ず。聲聞の人は則ち爾らず、所住の處に在りて、常に千世界を見、辟支佛は百千世界を見、  
諸佛は無量無邊の諸の世界を見る。凡夫の人の天眼智は、是れ通にして明に非ず。亦是  
の如く但所有の事を見て、業因縁に隨うて生を受くるを見る能はず、宿命の中に説ける  
が如し。復次に、天眼を得たる人の中、最も第一なる者は阿泥盧豆なり。色界の四大の造  
色にして、半頭清淨なる是れ天眼なれども、佛の天眼は、四大の造色にして遍頭清淨な  
り。是を差別と爲す。復次に、聲聞の人は、所住の三昧の中に於て天眼を得、即ち所住の  
三昧の中に能く見る。若は有覺有觀三昧、若は無覺有觀三昧、若は無覺無觀三昧なり。佛

は隨所に三昧の中に入りて住し、見んと欲せば盡く見たまふ。若し無覺有觀三昧の中に依りて天眼を得、有覺有觀三昧、若は無覺有觀三昧の中に入りて亦能く見たまふ。復次に、聲聞の人は、是天眼を用ひて見る時、所住の三昧の中心、餘の三昧に入れば、天眼は則ち滅す。佛は則ち爾らず、心は餘の三昧に入ると雖も、天眼は滅せず。是智慧もて遍く一切衆生の生死の趣く處を知りたまひ、能く壞するもの無く、能く勝るもの無し、是を第九の力と名く。

【六】次に第十漏盡智力を釋す。

漏盡智力とは、問うて曰はく、「九力は智慧分別の差別有り、漏盡は則ち同じ、一切の聲聞辟支と佛と何等の異か有る。答へて曰はく、「漏盡は是れ同じと雖も、智慧分別は大いに差別有り。聲聞は極大力の思惟所斷の結は生分、住分、滅分の三時に斷ずれども、佛は則ち爾らず。一の生分の時に盡く斷ず。聲聞の人は、見諦所斷の結は生ずる時に斷じ、思惟所斷を三時に滅すれども、佛は則ち見諦所斷と思惟所斷と異なる無し。聲聞の人は初めて聖道に入る時、入る時と達する時とは異れども、佛は則ち一心中にして亦入り亦達し、一心中に一切智を得、一心中に一切の障を壞し、一心中に一切の佛法を得たまふ。復次に、諸の聲聞の人に二種の解脫有り、煩惱解脫と法障解脫となり。佛は一切煩惱解脫有り、亦一切法障解脫有り。佛は自然に智慧を得たまひ、諸の聲聞の人は教道に隨うて行じて得。復有人言はく、「若し佛は智慧を以て一切衆生の煩惱を斷じたまふに、其智も亦鈍せず減ぜず、譬へば熱鐵丸を少しの綿の上に著けて此綿を焼くと雖も、而も火熱の勢減ぜざ

【煩惱解脫】煩惱とは昏煩の法、心神を惱亂して妙明の眞性を顯發する能はず。之を脱するを煩惱解脫といふ。

【法障解脫】法障とは所知障のことにして所證の法を障蔽する障なり、之を脱するを法障解脫といふ。

【二七】以下十力を説ける因縁を明す

るが如し。佛の智慧も亦是の如し、一切の煩惱を焼くに、智力亦滅せず」と。復次に、聲聞は但自ら漏を盡すのみを知り、諸佛は自ら漏を盡すを知り、亦他人の漏を盡すを知りたまふ。淨經の中に説くが如し。復次に、佛のみ獨り衆生の心中の分別に九十八使、一百九十六纏有るを知りたまひ、佛を除きては知る者有る無し。佛のみ亦獨り苦法智、苦比智の中に斷ずる、爾所の結使の性を知りたまふ。乃至道比智も亦是の如し、思惟所斷の九解脫道の中も亦爾なり。佛は悉く遍く一切衆生の是の如き事を知りたまふ。聲聞の若し少しく知り、少しく説くは皆佛語に隨ふ。佛の是の如き漏盡の智慧力勢は能く壞するもの無く、能く勝るもの無し、是を第十の力と名く。

(二七) 問うて曰はく、『是十力は何が最勝なる。』答へて曰はく、『各自自事の中に於て大なること、水の能く漬し、火の能く焼くが如く、各自自ら力有り。有人言はく、『初力を大と爲す、能く十力を攝すればなり』と。或は言はく、『漏盡力大事なり、涅槃を辦得すればなり』と。論者言はく、『是十力は皆無礙解脫を以て根本と爲し、無礙解脫を以て増上と爲す』と。問うて曰はく、『若し是十力は獨り是れ佛事ならば、弟子は今世に人として能く得る無けん。佛は何を以ての故に説きたまひしや。』答へて曰はく、『人の十力の中の疑を斷ずるが故に、無智の人の心をして、決定して堅牢ならしむるが故に、四衆をして歡喜せしむ。言はく、『我等の大師のみ獨り是の如きの力有り、一切衆生と共せず』と。又諸の外道の輩言はく、『憍曇氏沙門は、常に寂靜處に住して智慧縮沒せり』と。是を以ての故に

至誠の言を發したまはく、我は十種の智力、四無所畏に安立し具足す」と。大衆の中に在りて具足せる智慧を説き衆生を教化したまふこと、師子の吼ゆるが如し。杖輪を轉ずるに、一切の外道及び天、世人の能く轉ずる者無し、是謗を止めんが爲の故に是十力を説きたまふなり。問うて曰はく、人法の一事を好むすら、智慧尙自ら讚すべからず、何に況んや無我無所著の人にして、而も自ら十力を讚せんや、説くが如くんば、

自ら讚し自ら毀り、他を讚じ他を毀る

是の如きの四種を、智者は行ぜず

答へて曰はく、佛は無我無所著なりと雖も、無量の力、大悲有りて衆生を度せんが爲の故に但十力を説きたまふのみ。自讚を爲したまふにあらざるなり。譬へば好き賈客の導師の如し。諸の愚賊の諸の賈客を誑し、示すに非道を以てするを見るや、導師は、愍念するが故に諸の賈客に語るに、「我は是れ實語の人なり、汝誑惑の者に隨ふ莫れ」と。又諸の弊醫等の諸の病人を誑すが如し。良醫は之を愍んで衆の病者に語るに、「我に良藥有り、能く汝が病を除く、欺誑を信じて以て自ら苦困する莫れ」と。復次に、佛の功德は深遠なり。若し佛自ら説きたまはずんば、知る者有る無げん。衆生の爲に説きたまふは少くとも益する所甚だ多し。是を以ての故に佛は自ら是十力を説きたまへり。復次に、度すべき者有れば必ず應に爲に説くべく、説くべき所の中に次第に應に十力を説くべし。若し説かずんば彼を度するを得ず。是故に自ら説きたまへり。譬へば日月の出づる時、是

念を作さざるが如し、「我、天下を照して當に名稱有るべし」と。日月は既に  
出づれば、必ず自ら名有り。佛も亦是の如し、自ら念じて名稱有りと爲したまはざるが故に、自ら  
功德を説きたまふ。佛の清淨の語言、説法の光明は、衆生の愚闇を破りて、自然に大  
名稱有り。是を以ての故に佛は自ら十力等の諸の功德を説きたまふも失有る無し。力  
とは能く辦する所有るに名く。是十種の力を用て、智慧を増益するが故に、能く論議師を  
破り、是十種の力を用て、智慧を増益するが故に、能く好く説法し、是十種の力を用て、  
智慧を増益するが故に、能く不順を摧伏し、是十種の力を用て、智慧を増益するが故に、  
諸法の中に於て自在を得ること、大國王の臣民大衆の中に於て自在を得るが如し。是を聲  
聞法を以て、略して十力の義を説くと爲す。

大智度論卷第二十四

大智度論釋初品中四無畏義第四十 卷第二十五

聖者龍樹造 後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

【一】 初に四無所畏を義解す。

四無所畏とは、佛、誠言を作したまはく、我は是れ一切正智の人なるに、若は沙門、婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘衆有りて、如實に此法を知らずと言はんも乃至是に微の畏相を見さす。是を以ての故に我は安隱なるを得、無所畏を得、聖主の處に安住すること牛王の如く、大衆の中に在りて、師子吼して能く梵輪を轉す。諸の沙門、婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘衆は實に轉する能はずと。一の無畏なり。佛、誠言を作したまはく、我は一切の漏を盡すに、若は沙門、婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘衆有り、如實に是漏を盡さずと言はんも、乃至是に微の畏相を見さす。是を以ての故に我は安隱を得、無所畏を得、聖主の處に安住すること牛王の如く、大衆の中に在りて師子吼して能く梵輪を轉す。諸の沙門、婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘衆は、實に轉する能はずと。二の無畏なり。佛、誠言を作したまはく、我、障法を説くに、若は沙門、婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘衆有りて、如實に是障法を受けて、道を障へずと言はんも、乃至是に微の畏相を見さす、是を以ての故に我は安隱を得、

【二】次に四無所畏の體を明す。

無所畏を得、聖主の處に安住すること、牛王の如く、大衆の中に在りて、師子吼して能く梵輪を轉す。諸の沙門、婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘衆は實に轉ずる能はず」と。三の無畏なり。佛、誠言を作したまはく、「我説く所の聖道は、能く世間を出で、是行道に隨うて能く諸の苦を盡す。若は沙門、婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘衆有りて、如實に是道を行じて、世間を出づる能はず、苦を盡す能はずと言はんも、乃至是に微の畏相を見さず。是を以ての故に我は安隱を得、無所畏を得、聖主の處に安住すること牛王の如く、大衆の中に在りて、師子吼して能く梵輪を轉す。諸の沙門、婆羅門、若は天、若は魔、若は梵、若は復餘衆は、實に轉ずる能はず」と。四の無畏なり。

問うて曰はく、「何事を以ての故に、四無所畏を説きたまへる。答へて曰はく、「有人言はく、「佛自ら一切智、一切見と稱したまふも、世間の一切の經書、技術、智巧、方便は甚だ多くして無量なり、若し一切衆生共にあるも、一切事を知ること猶尙難し、況んや佛一人にて一切智有らんや」と。或は「是事有り、是行ること難し」と。佛は將に畏有る無く、是疑妄を斷ぜんと欲し、是難を斷ぜんとしたまふが故に、佛は四無所畏を説きたまへり。

復次に、若し佛未だ世間に出でたまはざれば、外道等は種種の因縁もて、求道求福の人を欺誑し、或は種種の果を食し、或は種種の菜を食し、或は種種の草根を食し、或は牛屎を食し、或は口に一たび稗稗を食し、或は二日、或は十日、一月、二月に一たび食し、或は風を噓り、水を飲む、是の如き等の種種の食を食し、或は樹皮、樹葉、草衣、鹿皮を衣、

【五熱】五體（左右の膝、兩手、頭）を火にて熱すること。

【孫陀利】スンドラリー(Sundari) 姪女の名。

或は板木を衣、或は地に在りて臥し、或は竹上、枝上、灰上、棘上に臥し、或は寒時に水に入り、或は熱時に五熱して自ら炙し、或は水に入りて死し、火に入りて死し、巖より投じて死し、食を斷じて死す。是の如き等の種種の苦行法の中に、天上を求め、涅槃を求め、亦弟子に教へて是法を捨てざらしむ。是の如く少智の衆生を引致して、以て供養を得。譬へば螢火虫の如し。日未だ出でざる時は、少多能く照せども、若し日出づる時は、千の光明、照る月及び衆星も皆明有ること無し、豈況んや螢火をや。若し佛未だ出世したまはざれば、諸の外道の輩の小明、世を照して供養を得れども、佛出世したまふ時は、大智の光明を以て、諸の外道及び其弟子を滅し、皆復供養を得ず。供養の利を失ふを以ての故に、優ち妄語して、佛及び佛弟子を謗ら。孫陀利經の中に説くが如し。自ら殺して孫陀利は而も佛を謗り、衆人に語りて言はく、「世間の弊人すら尙是を爲さず、是人は世間の禮法すら尙知る能はず、何に況んや涅槃をや」と。佛是の如き等の誹謗を滅せんと欲したまふが故に、自ら實の功德、四無所畏を説きて言はく、「我のみ獨り是れ一切智人なり。能有る無し、如實に佛は能く知らずと言はんも、我は是事を畏れず。我のみ獨り一切諸の漏及び習を盡せり。能有る無し、如實に佛は漏未だ盡さずと言はんも、我は是事を畏れず。我は涅槃道を達するの法を説けり。能有る無し、如實に是法は涅槃を達する能はずと言はんも、佛は是事を畏れず。佛は苦盡の道は涅槃に達到すと説けり。能有る無し、如實に是道は涅槃に到る能はずと言はんも、佛は是事を畏れず」と。略して是四無所畏の體を

【三】十力といひ、四無畏といふ、皆智なれば其間に何の異りあるやを明す。

説かん。一には正しく一切法を知り、二には一切の漏及び習を盡し、三には一切の障道の法を説き、四には盡苦の道を説く。是四法の中、若し如實に盡く遍く知る能はずと言ふもの有らんも、佛は是事を畏れたまはず。何を以ての故に。正しく遍く知りて了了なるが故なり。初の二無畏は自らの功德を具足するが爲の故にして、後の二無畏は具足して衆生を利益するが爲の故なり。復次に、初の第三、第四の無畏の中には智を説き、第二の無畏の中には斷を説き、智と斷とを具足するが故に所爲の事畢る。

問うて曰はく、十力は皆智と名く、四無所畏も亦是れ智なり、何等の異か有る。答へて曰はく、廣く佛の諸の功德を説くは是れ力にして、略して説くは是れ無畏なり。復次に、能く所作有るは是れ力にして、疑難する所無きは是れ無畏なり。智慧を集むるが故に力と名け、諸の無明を散ずるが故に無畏と名く。諸の善法を集むるが故に力と名け、諸の不善法を滅するが故に無畏と名く。自ら智慧有るが故に力と名け、能く壞する者無きが故に無畏と名く。智慧猛健なるは是れ力にして、問難を堪受するは是れ無畏なり、諸の智慧を集むるは是を力と名け、智慧を外に用ふるは是れ無畏なり。譬へば轉輪聖王の七寶を成就するが如きは是れ力にして、是七寶を得已りて四天下を周り、降伏せざる無きは是を無畏と名く。又良醫の善く藥方を知るが如きは是を力と名け、諸藥を合和して人に與ふるは是を無畏と名く、自ら利益するは是を力と名け、他を利益するは是れ無畏なり。自ら煩惱を除くは是を力と名け、他の煩惱を除くは是れ無畏なり。能く沮壞無きは是を力と

名け、難からず選かざるは是れ無畏なり。自ら己が善を成ずるは是を力と名け、能く他の善を成ずるは是れ無畏なり。巧便智は是を力と名け、巧智を用ふるは是れ無畏なり。一切智、一切種智は是を力と名け、一切智、一切種智を顯發するは是れ無畏なり。十八不共法は是を力と名け、十八不共法を中に顯發するは是れ無畏なり。遍く法性に通達するは是を力と名け、若し種種の問難有るも、復思惟せずして、即時に能く答ふるは是れ無畏なり、佛眼を得るは是を力と名け、佛眼もて已に度すべき者を見、爲に法を説くは是れ無畏なり。三無礙智を得るは是を力と名け、辯に應じて無礙を得るは是れ無畏なり。無礙智は是を力と名け、樂んで無礙智を説くは是れ無畏なり。一切智有り、自在なるは是を力と名け、種種の譬喩、種種の因縁、莊嚴の語言もて、說法するは是れ無畏なり。魔衆を破るは是を力と名け、諸の外道の論議師を破するは是れ無畏なり。是の如き等の種種の因縁もて、力と無畏とを分別せり。

【四】無所畏を明して、併せて佛の無所畏を明す。

問うて曰はく、何等か無所畏と名くる。答へて曰はく、疑ふ所無く、忌難する所無きを得て、智慧却かず没せず、衣毛堅す、法中に在りて説くが如くに即ち作す、是れ無畏なり。問うて曰はく、云何が當に佛の無所畏を知るべき。答へて曰はく、若し畏るる所有れば、大衆を將り御して、能く攝し、能く捨し、能く苦切もて治し、或は軟語もて教ふる能はず、佛の如きは一時に能く舍利弗、目連等を驅遣し、還りて復憐愍の心もて受けたまふ。若し忌難する所有れば、諸の論議師の輩、憍慢の山の頂に住し、外の智慧を以て心狂醉

し、皆天下に唯我一人有りて更に餘人無しと言ひ、自ら經書に於て決定して知るが故に他の經書を破し、論議して以て惡口嚙毀すること、狂象の護惜する所無きが如し。是の如きの狂人たる菴跋陀、長爪薩遮祇尼、捷蝦廣祇等の諸の大論議師皆降伏せり。若し畏るる所有れば則ち爾る能はず。及び、憍陳如等の五出家人、瀉樓頻螺迦葉等の千の結髮の仙人、舍利弗、目犍連、摩訶迦葉等は、佛法の中に於て出家し、及び百千の釋子、並に諸の閻浮提の大王なる波斯尼示王、頻婆娑羅王、旃陀波殊提王、優填王、弗迦羅婆利王、梵摩達王等皆弟子と爲り、諸の在家の婆羅門を皆度し、一切世間の智慧有る、大國王の爲に師として仰がれたまひ、梵摩喩、弗迦羅婆利、鳩羅檀陀等皆弟子と爲り、初道を得る有り。第二第三第四道を得る有り、諸の大鬼神、阿羅婆迦、轉沙迦等、諸の大龍王、阿波羅羅、伊羅鉢多羅等、鷲群黎摩羅の諸の惡人等皆降伏歸伏す。若し畏るる所有らば、獨り樹下師子座處に在りて坐する能はず、阿耨多羅三藐三菩提を得んと欲する時、魔王の軍衆は化して、師子、虎、狼、熊、羆の首と作り、或は一眼、或は多眼、或は一耳、或は多耳にして、山を擔ひ、火を吐き、四邊を圍遶するに、佛、手指を以て地を按じたまへば、胸息頓に即ち皆消滅し、諸天、阿修羅、轉摩質帝特、釋提婆那民、梵天王等共心を引導して皆弟子と爲る。若し畏るる所有らば、此大衆の中に在りて說法する能はず。無所畏を以ての故に能く是の如く、諸天、鬼神、大衆の中にて法を説くを爲したまふ、故に無所畏と名く。復次に、佛は一切衆生に於て最尊最上にして、盡く一切法の彼岸に到り、大名聞を

得たまふが故に、自ら無所畏と説きたまふ。復次に、且く是佛の功德を置くも、佛の一切世間の功德は亦能く及ぶ者無し、所畏の法の一切を己に根本を抜くが故なり。所畏の法とは、弊家生と弊生處と惡色と無威儀と龜惡語等なり。弊家生とは首陀羅の如きは謂ゆる死人を擔ひ、糞を除き、鷄猪を養ひ、捕獵、屠殺、酤酒、兵伍等の、卑賤の小家なり。若は大衆の中に在るも、則ち怖畏多し。佛は本より已來、常に轉輪聖王の種の中に生じたまふ。謂ゆる、頂生王、快見王、婆竭王、摩訶提婆王、是の如き等を日種と名く。家の中に生ずるも亦なり。是を以ての故に畏れたまふ所無し。弊生處とは、安陀羅、舍婆羅、小月氏兜婁羅、釋國な脩利、安息、大秦國等の此邊國の中に在りて生ず。若し大衆の中に在りては、則ち怖畏多し。佛は迦毘羅婆の中國に在りて生れたまふが故に畏れたまふ所無し。惡色とは、人有り、身色枯乾癯瘦なれば、人見るを喜ばず、若し大衆に在りては、則ち亦畏有り。佛は金色の光潤ふこと、火の赤金山を照すが如く、是の如きの色有るが故に畏れたまふ所無し。無威儀とは、進止、行歩、坐起に人の儀有ること無ければ則ち怖畏有り、人には是事無し。龜惡語とは、人有り、惡音聲、蹇吃、重語して、次第有ること無きは、人の喜ばざる所にして則ち怖畏多し、佛には是畏無し。所以は何ん。佛語は眞實柔軟にして次第に了じ易く、疾からず、遅からず、少からず、多からず、没せず、垢ならず、調戲せず、迦陵毘伽鳥の音に勝り、辭義分明にして、物を中傷せず、欲を離れたまふが故に染無く、瞋を滅したまふが故に、礙無く、愚を除きたまふが故に、解し易く、法喜を増長す

【五】以下初に明  
せる佛の誠言に就  
いて一に明す中  
初に正遍知を釋す

るが故に、愛すべく、罪を遮したまふが故に安隱なり、他心に隨うて解脱したまふに、義は深く語は妙なり。因縁有るが故に言に理有り、譬喩有るが故に善く顯示したまひ、事訖るが故に善く事を會し、種種に衆生の心を觀じたまふが故に雜說し、久久しくして皆涅槃に入るが故に一味なり。是の如き等の種種無量の莊嚴なる語有るが故に、佛は語中に於て畏れたまふ所無し。佛は但是の如き等の世間の法を以てすら、尙畏れたまふ所無し、何に況んや出世間の法をや。是を以ての故に佛には四無所畏有りと説くなり。問うて曰はく、「佛の十力の中に無所畏有りや不や。若し無所畏有らば應に俱四とのみ言ふべからず、若し所畏有らば云何が無畏成就と言ふ。答へて曰はく、「一智の十處に在るを名けて佛と爲す。十力を成就するは、一人にして十事を知り、事に隨うて名を受くるが如し。是十力の四處に用する、是れ無所畏なり。是處不是處力、漏盡力は即ち是れ初の二無畏なり。八力は廣しと雖も、是れ第三第四の無畏を説くなり。是を以ての故に十力の中に無畏有りと雖も、別説するも亦失無し。

正遍智とは一切の法を知りて顛倒せず、正にして邪ならず、餘の過去の諸佛の如し。是を三藐三佛陀と名く。佛、阿難に告げたまふが如し、「一切の世間、天及び人の知る能はざる所を、佛は遍く知りたまふが故に、三藐三佛陀と名く」と。若し有人は、「是法を知らず」と言ふ。問うて曰はく、「是は何人ぞや。答へて曰はく、「是中に佛の説きたまはく、「若し沙門、婆羅門、若は大、若は魔、若は梵、乃至佛と與に論ぜん」と欲する者なり」と。

【六】次に沙門、婆羅門等を釋す。

【七】次に聖主の住處に安立するの文を釋す。【阿梨沙】アールシヤ(Arya)聖主と釋す。

何等の法を論ずるや。有人言はく、「佛の説きたまはざる所の外の諸の經書にして、弊迦蘭那、僧伽、章陀等の十八種の大經書なり」と。有人言はく「須彌山の斤兩、大地の深淺、一切の草木の頭數なり」と。有人言はく、「是常無常、有邊無邊の十四の難は佛答ふる能はず」と。有人言はく、「是れ法の色法無色法、可見不可見、有對無對、有漏無漏、有爲無爲等なり、佛は何一種の道事因縁を知りたまひ、是異法の種種の因縁は、障或は悉く知りたまはず」と。

沙門とは、出家の人を説き、婆羅門とは在家の、有智の人を説き、天とは地天、虛空天を説き、魔とは六欲天を説き、梵とは梵天王を首と爲し、及び一切の色界を説き、餘とは此を除きて更に餘人有り。如實とは若は現事を以てし、若は因縁を以て難するなり。乃至是に彼の畏懼だも見さずとは、相は因縁に名く。

我は小小の因縁にして、如法に能く來りて我を破する者を見ず。見ざるを以ての故に至誠に、阿梨沙と云ふ。の住處に安立すと云ふ、佛、至誠に言はく、「我は一切の漏を盡せり」と。若し有人言はく、「是漏を盡さざる者は畏るること有る無し」と。何等か是れ漏なる。漏とは三漏に名く。欲漏と有漏と無明漏となり。復次に、漏は六情の中より出で、垢心に相應する心數法に名く。復次に、一切漏障經の中には分別して七漏を説けり。障道の法とは諸の有漏業及び一切の煩惱、惡道の報障、世間の爲の故に、布施持戒し、十善道を修して、諸の味禪を受くるに名く。略説すれば若し能く涅槃を障ふる、若は善、若は不

【三轉】苦集滅道の四諦を説くに示勸、證の三轉あるをいふ。初に示轉とは是れは苦乃至是れは道なりと示すこと、次に勸轉とは苦は當に知るべし等と四諦の修

善、若は無記なる、是を障道の法と名く。有人言はく、「道とは二法に名く。聖定と聖慧にして、是二事は等しく涅槃に達到す」と。有人言はく、「三聚道は無漏の戒定慧なり」有人言はく、「四法有り、謂ゆる四聖諦なり」有人言はく、「出世間の五根なり」有人言はく、「六性なり」有が言はく、「七覺意なり」有が言はく、「八聖道にして涅槃に達到す」論議師等の言はく、「一切の無漏道にして涅槃に達到す」と。是中に若し沙門婆羅門等の來る有りて、如實には、是事は爾らず、乃至微の畏相だも見さずと言はん。見さざるを以ての故に、至誠に阿梨沙の住處に安立すと言ふ。問うて曰はく、「何を以ての故に、佛は至誠に阿梨沙の住處に安立すと言ふや。」答へて曰はく、「自ら功德を具足し、亦衆生をして安樂利益を得しめたまふ。若し佛、自ら安樂の住處を得て衆生を利益する能はずんば、阿梨沙の住處と名けず。若し但衆生を利益し、自ら功德を具足せずんば、亦阿梨沙の住處と名けず。若し自ら功德有り、亦衆生を利益す。是を以ての故に至誠に「我は阿梨沙の住處に安立す」と言ふ。復次に、佛は自ら惡を滅し、亦衆生の惡を滅す。二惡を滅するが故に、第一清淨にして妙に法を説きたまふ。故に阿梨沙の住處に安立す。復次に、四聖諦、三轉、十二行を能く轉じ、能く分別して顯示し敷演したまふが故に、至誠に「我は阿梨沙の住處に安立す」と言ふ。復次に、一切の疑悔邪見を能く除却するが故に、一切の甚深の問難を悉く能く解釋するが故に「阿梨沙の住處に安立す」と名く。阿梨沙は第一最上極高にして、不退、不梨沙の住處と名く。是の如き等の因縁功德力の故に至誠に「我は阿梨沙の住處に安立す」と

行を勤むること、次に善轉とは苦は我已に知り等と佛となすこと、所謂三轉法輪なり。【十二行】三轉の覺の四種の智を生じ、合して十二を數ふるをいふ。【八】次に衆中に師子吼し等の文を釋す中初に師子吼の義解。

言ふ。

衆中に師子吼したまふとは、衆は、八衆に名く。沙門衆、婆羅門衆、刹利衆、天衆、四天王衆、三十三天衆、魔衆、梵衆なり。衆生は此八衆に於て智慧を愴望す、是故に經中に但是八衆を説く。此中に佛師子吼したまふも、亦一切の衆中に在り。是を以ての故に此經の中に、「若は復餘衆一と言ふ。何を以ての故に、佛の音聲を聞く者は、盡く皆是れ衆なればなり。復次に、有人言はく、「佛は獨り屏處に法を説きたまふ。是を以ての故に衆中に在りて説くに、是至誠の言を作さく、「我に十力、四無所畏有り」と。是を「衆中に師子吼すと名く」と。復次に、佛は「我は是に至誠に言ふ。我は一切世間の師にして、一切智人爲り。諸の疑有りて信せざる者は悉く來れ、我當に解釋すべし」と示したまふ。是を以ての故に衆中に師子吼すと言ふ。師子吼とは、師子王の如きは、清淨種の中に生れ、深山大谷の中に住し、方類大骨にして身肉肥滿し、頭大にして眼長く、光澤明淨にして眉高く、廣牙は利にして白淨に、口鼻は方大厚實堅滿に、齒は密にして齋しく、赤白の舌を吐き、雙身は高上に、髦髮は光潤に、上身は廣大、膚肉は堅著、脩背細腰にして其腹現れず、長尾利爪にして其足安立し、五身大力にして、住處より偃脊を出して頻呻し、口を以て地を扣きて大威勢を現し、食は時を過ぎず、晨朝に相を齧し、師子王の力を表し、以て鬘鹿、熊羆、虎豹、野猪の屬を威し、諸の久睡を覺し、高強にして力勢有る者を降伏し、自ら行路を開きて大いに哮吼す。是の如く吼ゆる時、其を聞く者有れば、或は喜び、

或は怖れ、穴に處る者は隠れ縮み、水に居る者は深く入り、山に藏る者は溝伏し、魘象  
 は鎖を振り狂逸して去り、鳥は空中を飛んで高く翔り遠く逝る。佛師子も亦是の如く、六  
 波羅蜜、古の四聖種の大姓の中に生れ、寂滅の大山に深く浴し、禪定の谷の中に住し、  
 一切種智を得て頭とし、諸の善根を集めて頬とし、無漏の正見の脩目には光澤有り、定  
 慧等しく行じて、眉は廣高に、四無所畏の牙は白く利く、無礙解具足の口、四正勤堅滿  
 の鬚、三十七品の齒は、密齊にして利く、不淨觀を修して赤白の舌を吐き、念慧の耳は  
 高上に、十八不共法の鬚髮は光潤鮮白に、三解脱門の上身の肉は堅く著き、三示現の脩  
 背有り、明行具足の腹は現れず、忍辱の腰は纖細に、遠離行の足は長く、四如意足は安  
 立し、無學五根の爪利く、十種の力勢は無量に、無漏法業具足の身、諸佛三昧王等の住處  
 より出でて、四無礙智の頻巾を作し、諸法の地中に無礙解脫の口を著け、是十力に依りて、  
 廣く衆生を度するに時を過たず。一切の世間、天及び人に示す晨朝の相は、諸の法王の  
 徳を顯し、諸の外道、論議の黨の邪見の屬を威し、諸の衆生の四諦の中に睡れるを覺  
 し、吾我に著する五衆の者の憍慢力を降伏し、異學の論議、諸の邪見の道を聞き、邪を  
 行する者を怖畏せしめ、正を信する者を歡喜せしめ、鈍者を利ならしめ、弟子を安慰し、  
 外道を破壊し、長壽の請天久しく天の樂を受くるときは則ち無常を知らしむ。是の如きの  
 衆生は、四諦の師子吼を聞き、皆厭心を生じ、厭心の故に離るるを得、離るるを得るが  
 故に涅槃に入る、是を衆中に師子の如くに吼ゆと名く。

【九】次に佛の師子吼と師子の吼との別を明す。

復次に、佛の師子吼と及び師子の吼ゆるとは差別有り。師子の吼ゆるは衆獸驚き怖れて、若は死し、若は死に近いて苦しみ、佛の師子吼は死と畏とを免るを得。師子の吼ゆるは、世世、死苦を怖れ、佛の師子吼は但今世に死して、更に後の苦無し。師子の吼ゆるは、其聲魚惡にして物喜ばず、生死を聞きて怖畏し、佛の師子吼は、其聲柔軟にして、聞く者に厭心無く、皆深く樂み、普遍に遠く聞えて、能く二種の樂なる生天の樂と涅槃の樂とを與ふ。是を差別と爲す。問うて曰はく、「佛の師子吼も亦聞者をして怖を生ぜしむ、師子の吼ゆると何等の異りか有る。」答へて曰はく、「佛の師子吼を聞けば、當時は小しく怖るるも、後、大なる利益有り。吾我の心に著する者、世間の樂を渴愛する人、常に顛倒して、邪見の心に縛せらるる者は、怖畏を生ず。經中に言ふが如し、「佛四諦を説きたまふに、乃ち上は諸天に至るまで、悉く皆怖畏して是念を作す。我等は無常相、苦相、無我相、空相なり、何を以ての故に。顛倒心の爲の故に、常樂の相に著せんや」と。是を差別と爲す。復次に、師子の吼ゆるを聞く者は、離欲の人を除けば、餘は皆怖畏し、佛の師子吼は、涅槃を求むる離欲の人皆怖る。師子の吼ゆるは、善人不善人皆恐れ、佛の師子吼は但善人のみ怖る。復次に、師子の吼ゆるは、一切時に怖畏し、佛の師子吼は、小しく怖畏すと雖も、衆生に世間の惡罪を示し、世間の生を樂まざらしめ、涅槃の功德利益を觀じて、能く世間の種種の怖畏を除き、惡趣を閉ぢて善道聞き、能く人をして涅槃の域に到らしむ。復次に、二十事の故に、佛語を師子吼と名く。謂ゆる十力に依止するが故に、不縮の故に、不

【梵音】大梵天の出す音聲、これに利維なる清微なる深滿なる過く遠く聞ゆるの五種清淨あり。

【二〇】次に梵輪を轉ずるの文中、梵輪を明す。

【二一】佛と轉輪聖王との相似。

展の故に、梵音の故に、未曾有の故に、能く大衆を引くが故に、惡魔驚怖するが故に、魔民を擾亂するが故に、諸天歡喜するが故に、魔網をいづるを得るが故に、魔縛を斷ずるが故に、魔鉤を破するが故に、魔界を過ぐるが故に、自法増長するが故に、他法を減損するが故に、果報を誑さざるが故に、設法空しからざるが故に、凡夫の人、聖道に入るが故に、聖道に入る者、漏盡を具足するを得るが故に、所應に隨うて三乘を得るが故に、是を以ての故に佛語を師子吼と名く。是を師子吼の總相別相の義と名く。

梵輪を轉ずとは、清淨なるが故に梵と名け、佛の智慧及び智慧に相應する法、是を輪と名け、佛の説きたまふ所を受者、法に隨うて、行する、是を轉と名く。是輪は四念處の具足を以て轂と爲し、五根五力を輻と爲し、四如意足を堅牢の輞と爲し、四正勤を密合輪と爲し、三解脱を楯と爲し、禪定智慧を調適と爲し、無漏戒を輪に塗るの香と爲し、七覺意を雜華瓔珞と爲し、正見を右に隨うて轉ずる輪と爲し、信心清淨を可愛喜と爲し、正精進を疾去と爲し、無畏の師子吼を、妙聲能く魔輪を怖れしむと爲す。十二因縁の節解輪を破り、生死の輪を壞し、煩惱の輪を離れ、業輪を斷じ、世間の輪を障へ、苦輪を破し、能く行者をして歡喜せしめ、天人をして敬慕せしむ。是輪は能く轉ずる者無く、是輪は佛法を持す。是を以ての故に梵輪を轉ずと名く。復次に、佛の法輪を轉じたまふことは、轉輪聖王の寶輪を轉ずるが如し。

問うて曰はく、「佛と轉輪聖王と何の相似すること有りや。」答へて曰はく、「王の如きは清

淨なる不雜種の中に生じ、姓に隨つて家業を成就し、衆相もて身を莊嚴し、王徳を具足して能く寶を轉じ、香湯を頂に灌いで王位を受け、四天下の首に於て、一切の賊法を壞除して、敢て違ふ無からしむ。寶藏は豐溢し、軍容は七寶を以て裝飾と爲し、四攝法を以て衆生を攝取し、善く王法を用て貴姓に委任し、主兵大臣、以て國政を治め、妙上の珍寶、衆んで以て布施し、知念する所有れば、終始、異る無きが如く、佛、法王も亦是の如し。釋迦牟尼、燃燈、寶華等の佛、諸佛は清淨なる姓の中に生れ、先佛の威儀行業たる三十二相を具足し、以て自ら莊嚴し、聖主の威徳備に具り、眞の法輪を轉じ、智慧の甘露味を智首に灌ぎ、三界の中に於て、尊として一切煩惱の賊を破壞し、學無學の衆歡喜し、所結の業に敢て違ふ者無く、無量の法寶藏を具足し、七覺分の寶莊嚴、八萬四千の法聚の軍、出世間の四攝法を以て、衆生を攝し、方便を知りて四聖諦の法を説き、法王の儀を爲し、舍利弗、彌勒等の大將は、善く佛國の法を治め、諸の無漏の根、力、覺、種種の妙寶を、衆んで以て布施し、深く一切衆生の善事を求め、所念堅固爲り、是を相似と爲す。復次に、佛は轉輪聖王よりも殊勝有り。轉輪聖王は諸の煩惱を離れず。佛已に、永く諸の煩惱を離れたまふ。轉輪聖王は老死の泥に没在し、佛は已に出離したまふ。轉輪聖王は恩愛の僕と爲り、佛は已に過ぎ出でたまふ。轉輪聖王は生死の險道の中を行き、佛は已に過ぎ度りたまふ。轉輪聖王は愚癡の闇中に在り、佛は第一光明の中に住したまふ。轉輪聖王の極は四天下を自在にし、佛は無量無邊の世界を自在にしたまふ。轉輪聖王は財寶自在なる

も佛は心寶自在なり。轉輪聖王は天の樂を渴愛し佛は乃至有頂の樂をも已に離れたまふ。轉輪聖王は他より樂を求め佛は自心に樂を生じたまふ。是を以ての故に佛は轉輪聖王よりも最も殊勝なりと爲す。復次に、轉輪聖王は手づから、寶輪を空中に轉ずること無礙なるも、佛は法輪を一切世間天及び人中に轉じたまふこと無礙無遮なり。其寶輪を見る者は衆毒皆滅し、佛の法輪に遇へば、一切の煩惱の毒皆滅す。寶輪を見る者は諸の災惡害皆滅し、佛の法輪に遇へば、一切の邪見、疑悔、災害皆悉く消滅す。王は是輪を以て四天下を治め、佛は法輪を以て一切世間天及び人を治め、法を得ること自在ならしめたまふ。是を相似と爲す。復次に、法輪は寶輪より大いに殊勝有り。寶輪は欺誑にして、法輪は堅實なり。寶輪は三毒の火を長くし、法輪は三毒の火を滅す。寶輪は有漏にして、法輪は無漏なり。寶輪は五欲の樂を樂み、法輪は法樂を樂む。寶輪は結使の處なるも、法輪は結使の處に非ず。寶輪は有量の處に行き、法輪は無量阿僧祇劫に、一切の善業の因縁及び智慧を集むるが故の故に世世に得べく、法輪は無量阿僧祇劫に、一切の善業の因縁及び智慧を集むるが故に得。寶輪は王死すれば後更に轉ぜず。佛滅度の後も法輪は猶轉ず。寶輪は一人に在り、法輪は一切の度すべき者に在り。復次に、梵とは廣きに名く、佛の轉法輪は、十方に遍からざる無きが故に、廣と名く。復次に、四梵行心を説くが故に梵輪と名く。復次に、佛初めて得道したまふ時、梵天王轉法輪を請するが故に梵輪と名く。復次に、佛は波羅奈に在して法輪を轉じたまふに、阿若憍陳如得道の聲、梵天に徹せるが故に梵輪と名く。復次に、

有人は梵天を貴んで、歡喜せしめんと欲するが故に梵輪と名く。是を以ての故に梵輪と名く。問うて曰はく、「佛、或時は法輪と名け、或時は梵輪と名けたまふ、何等の異なること有りや。」答へて曰はく、「梵輪、法輪と説くも異なる無し。復次に、有人言はく、「梵輪と説くは、四無量心を現し、法輪と説くは四諦の法を示す」と。復次に、梵輪は、四無量心に因りて道を得、是を梵輪と名け、餘法に依りて道を得る、是を法輪と名く。梵輪は四禪を示し、法輪は三十七品を示す。梵輪は、禪定を修する聖道を示し、法輪は、智慧を修する聖道を示す。是の如き等の分別は、梵輪法輪の差別なり。

【二二】以下無畏の性の次第分別を明す。

問うて曰はく、「何の法か是れ無畏の性なる。」答へて曰はく、「佛、初て得道したまひし時、一切の佛法、十力、四無所畏等を得たまふ。此中、未來世に、四無所畏の智に相應する法を得るを無所畏と名く。布施する時は、心中の思に相應の捨法生ずるが如く、又四無量心に相應するを、慈法の門と名くるが如し。問うて曰はく、「是四無所畏の中に何の次第か有る。」答へて曰はく、「初の無畏の中に、人に示して一切法を知らしめ、一切法を知るが故に、我漏を盡す。漏を盡すが故に、漏の盡くるを障ふる法を知り、是障法を斷するが故に道を説く。復次に、初の無畏は藥師の一切の藥草を示し、第二は一切の病の滅するを示し、第三は禁忌を知り、第四は所應の食を示すが如し。復次に、初の無畏の中に一切種智を説き、第二の無畏の中に一切の煩惱の習無きを説き、第三の無畏の中に法に謬失無きを説き、第四の無畏の中に所説の事を辯じて、涅槃に至るを得。

【二三】 諸法皆空なるに其相を分別して説くに就いて。

問うて曰はく、「般若波羅蜜の中に説くが如くんば、五衆乃至十力、四無所畏、十八不共法は皆空なり。今云何が分別して其相を説く。」答へて曰はく、「佛法の中の不可得空は諸法に於て礙ふる所無し。是不可得空に因りて、一切の佛法の十二部經を説く。譬へば虚空の所有無くして、而も一切の物皆依りて以て長成するが如し。復次に、是十力、四無所畏は、取相の著心を以て、分別せざるが故に、但衆生を度せんが爲にす。衆生は是因縁に従うて、解脱を得るを知る。譬へば、藥草は但病を差さんが爲にして、藥草の相を求めんが爲にあらざるが如し。『中論』の中に説くが如し。

若し諸法の空なるを信ずれば、是れ則ち理に順ず

若し法の空なるを信ぜざれば、一切皆違失す

若し以て是空を無せば、所應の造作無けん

未だ作さざるに已に業有り、不作にして作者有る

是の如き諸の法相は、誰か能く思量する者ぞ

唯淨直の心のみ有りて、所説に依止する無くんば

有無の見を離れて、心自然に内に滅せん

問うて曰はく、「聲聞法に、十力、四無所畏を説くは是の如し。摩訶衍に十力、四無所畏

を分別するは復云何。」答へて曰はく、「是十力、四無所畏の中に、盡く知り、遍く知るは、

是れ摩訶衍の中に説く十力、四無所畏なり。問うて曰はく、「聲聞法の中にも、亦盡く知、遍

【二四】 小乗と大乘との十力、四無畏の比較。

【二五】菩薩の十力  
四無畏に就いて。

知を説く、云何が摩訶衍の中に、盡知、遍如を説くと云ふや。答へて曰はく、「諸の論議師の「佛は盡く知り、遍く知りたまふ」と説くは、佛自らの説に非ず。今摩訶衍の中に、十力、四無所畏を説くが故に、佛は自ら「我は盡く知り遍く知る」と説きたまへり。復次に、聲聞人の爲に十力、四無所畏を説き、四諦十二因縁等を合説す。諸の聲聞法は皆涅槃に到るが爲なり。今摩訶衍の中に十力、四無所畏を説くは、大悲を合して、諸法實相は不生不滅なりと説く。」

問うて曰はく、佛に十力、四無所畏有り、菩薩も有りや不や。答へて曰はく、「有り。何をか是れなる。一には一切智心を發する堅深牢固の力有り。二には大慈を具足するが故に一切衆生を捨てざる力有り。三には一切の供養恭敬の利を須ひざるが故に、大悲を具足するの力有り。四には一切の佛法を信じ、具足して一切の佛法を生じ、及び心に厭はざるが故に大精進力有り。五には一心に惠行威儀を壊せざるが故に禪定力有り。六には二邊を除くが故に、十二因縁に隨うて行するが故に、一切の邪見を斷するが故に、一切の憶想、分別、戲論を滅するが故に、智慧を具足するの力有り。七には一切衆生を成就するが故に、無量の生死を受くるが故に、諸の善根を集めて厭足無きが故に、一切世間は夢の如しと知るが故に、生死を厭はざるの力有り。八には諸法實相を觀するが故に、吾我無く衆生無きを知るが故に、諸法の不出不生を信解するが故に、無生法忍の力有り。九には空、無相、無作の解脱門の觀に入るが故に、聲聞辟支佛の解脱を知見するが故に、解脱を得るの力

【二六】以下四無礙智を釋す。

有り。十には深法自在の故に、一切衆生の心行の趣く所を知るが故に、無礙智を具足するの力有り。是を菩薩の十力と爲す。何等をか菩薩の四無所畏と爲す。一には一切を聞持するが故に、諸の陀羅尼を得るが故に、憶念して忘れざるが故に、衆に在りて說法して畏るる所無し。二には一切法の中に解脱を得るが故に、一切の法藥を分別して知り用ふるが故に、一切衆生の根を知るが故に、大衆の中に在り、應に隨うて、說法して畏るる所無し。三には菩薩は常に一切の衆畏を離れて、是念を作さず、十方より來りて我を難する者有らんに、我答ふる能はざらん」と。是相を見ざれば、大衆の中に在りて、說法して畏るる所無し。四には恣に一切の人來りて問難する者に、一一皆答へて能く疑惑を斷じ、大衆の中に在りて、說法して畏るる所無し、是を菩薩の四無所畏と爲す。

(二六) 四無礙智とは、義無礙智と法無礙智と辭無礙智と樂說無礙智となり。義無礙智とは名字言語を用ひて説く所の事、各各諸法の相なり。謂ゆる堅相なり。此中、地の堅相は是れ義なり。地の名字は是れ法なり、言語を以て地を説くは、是れ辭なり。三種の智の中に於て、樂說自在なるは是れ樂說なり。此四事の中に於て通達して滯る無き、是を無礙智と名く。濕相は水、熱相は火、動相は風、心思の相、五衆無常の相、五受衆の無常、苦、空相、一切法の無我相、是の如き等の總相別相有り。諸法を分別するも亦是の如し、是を義無礙智と名く。法無礙智とは是義と名字を知り、堅相を名けて地と爲す。是の如き等の一切の名字の分別の中に滯る無き、是を名けて法無礙智と爲す。所以は何ん。名字を離れて義は

【三七】等しく智慧なるに十力、四無礙智の外に四無礙智を別説するに就いて。

得べからず、義は必ず名に由ると知ればなり。是を以ての故に義に次いで法有り。問うて曰はく、「義と名とは合と爲すや離と爲すや。若し名と合せば、火と説く時、應に口を焼くべし、若し離るれば、火と説く時、應に水を得べし。答へて曰はく、「亦は不合、亦は不離なり。古人は假に名を立てんが爲に以て諸法と名け、後人は是名字に因りて是事を識り、是の如くして各各名字有り。是を法と爲す。是名字及び義は、云何が衆生をして解するを得しめん。當に言辭を以て分別莊嚴して、能く人の解をして通達無滯ならしむべし。是を辭無礙智と名く。覺くに道理有れば聞演無盡なり。亦諸の禪定の中に於て、自在を得て滯る無し。是を樂說無礙智と名く。第一第四の無礙智は九地の中に在り。第二第三の無礙智は、欲界及び梵天の上に在り。第二第三の無礙は世智なり。第一は十智なり。第四は九智なり。は無礙に三種の上中下有り、上は諸佛、中は菩薩、下は大阿羅漢なり。

問うて曰はく、「力、無所畏、無礙は皆是れ智慧にして、内に力有り、外に畏る所無ければ、則ち具足す、何を以てか復無礙を説く。答へて曰はく、「力と無畏は已に分別せり、有人は無所畏にして、大衆の中に在りて説法すと雖も、而も礙有り、是を以ての故に四無礙智を説く、は無礙智を得て、四無所畏を莊嚴し、四無所畏は十力を莊嚴す。復次に、無所畏を説けば、或は疑ふ者有りて言はん、「云何が一人にして、大衆の中に在りて無所畏を得ん」と。佛は前に十力有り、後に四無礙智有るを以て、是故に大衆の中に在りて、説法したまふに畏る所無きなり。是の如き等、四無礙智を分別す。

【二八】菩薩の四無礙智を明す。

問うて曰はく、「摩訶衍の中に、菩薩の四無礙智有りや否や。」答へて曰はく、「有り。何者か是なる。義無礙智とは義は諸法實相に名け、言説すべからず、義、名字、語言は別異ならざればなり。前後中亦是の如し。是を義と名く。名字語言を離れて別に義有るべからず、三事等しきが故に名けて義と爲す。復次に、一切諸法の義を了了し知りて通達無礙なる、是を義無礙智と名く。法無礙智とは、法は一切の義に名く。名字は義を知るが爲の故に。復次に、菩薩は是法無礙智の中に入り、法を信じて人を信せず。常に法に依りて非法に依らず。法に依るとは非法の事無し。何を以ての故に。是人は一切の諸の名字及び語言は自相を離るるを知るが故に。復次に、是法無礙智を以て三乗を分別す。三乗を分別すと雖も、而も法性を壞らず、所以は何ん、法性は一相にして謂ゆる無相なればなり。是菩薩は是語言を用て説法し、語言の空を知ること、響の相の如く、所説の法を衆生に示して、同じく法性を信知せしめ、所説の名字言語に通達して、滯ること無し、是を法無礙智と名く。辭無礙智とは、語言を以て名字の義を説き、種種に語言を莊嚴し、其所應に隨うて能く解を得しむ。謂ゆる天語、龍、夜叉、憍闍婆、阿修羅、迦樓羅、摩睺羅迦等の非人の語、釋、梵、四天王等の世主の語、人語、一語二語、多語、略語、廣語、女語、男語、過去未來現在語、是の如き等の語言を以て能く各各解を得しめ、自語他語を眞響する所無し。所以は何ん、是一切法は語中に在らず、語は是實義に非ざればなり。若し語是實義ならば、善語を以て不善を説くべからず。但涅槃に入らしめんが爲の故に説き、解をして語言に著する

【修妬路】 スート  
 ヲ(Mudra)經と譯す  
 【祇夜】 ゲーヤ  
 (Geyya) 應頌と譯す  
 【繫迦蘭那】 少ヤ  
 一カッタナ (Yakkara)  
 記別と譯す  
 【迦陀】 ゲーター  
 (Gatha) 讚頌と譯  
 す  
 【優陀那】 ウダー  
 ナ (Udana) 自説と  
 譯す  
 【阿波陀那】 アブ  
 ダーナ (Avadana)  
 譬喻と譯す  
 【一箇多】 イテウ  
 リツタカ (Iveta)  
 カ(Atula) 木生と  
 譯す  
 【闍陀】 チャーダ  
 カ (Jataka) 木生と  
 譯す  
 【爲頭勝】 アイブ  
 ルヤ (Aupulya) 方  
 廣と譯す

莫らしむ。復次に是語言を用て能く衆生をして法義に隨うて行はしむ。所以は何ん、言語は皆諸法實相の中に入れはなり。是を辭無礙智と名く。樂説無礙智とは、菩薩は一字の中に於て、能く一切の字を説き、一語の中に能く一切の語を説き、一法の中に能く一切法を説く。是中に於て説く所は皆是れ法、皆是れ實、皆是れ眞、皆度すべき者に隨うて所益有り。謂ゆる修妬路を樂ふ者には爲に修妬路を説き、祇夜を樂ふ者には爲に祇夜を説き、繫迦蘭那を樂ふ者には爲に繫迦蘭那を説き、迦陀、優陀那、尼陀那、阿波陀那、一箇多、闍陀、爲頭勝、頌淨陀達摩、優波提舍を樂ふ者には皆爲に是經を説く。一切衆生の根樂に隨うて説くとは、若し信を好む者には爲に信根を説き、精進を好む者には爲に精進を説き、慧念を好む者には爲に念根を説き、擇心を好む者には爲に定根を説き、智慧を好む者には爲に慧根を説く。五根等の如く、一切の善根も亦是の如し。復次に、二萬一千の婬欲の人根有り。是根の爲の故に佛は八萬四千の治法の根を説きたまふ。是諸根樂に隨うて、樂つて治法の次第を説くは、菩薩の樂説なり。二萬一千の瞋恚の人根有り。是根の爲の故に、佛は八萬四千の治法の根を説きたまふ。是諸根に隨うて、樂つて治法の次第を説くは、菩薩の樂説なり。二萬一千の愚癡の人根有り。是根の爲の故に、佛は八萬四千の治法の根を説きたまふ。是諸根に隨うて、樂うて治法の次第を説くは、菩薩の樂説なり。二萬一千の等分の人根有り。是根の爲の故に、佛は八萬四千の治法の根を説きたまふ。是諸根に隨うて、樂うて治法の次第を説くは、菩薩の樂説なり。是を樂説無礙智と名く。復次に、菩薩は是

【阿頼浮陀達磨】 ア  
ドブタダルマ (Abhidharma) 希  
注と譯す。  
【優波提舍】 ウバ  
デーシヤ (Uparis  
hi) 論議と譯す。

無礙智を用て、若は一劫若は半劫、各各説法を莊嚴して亦諸法の性相を壞せず、是菩薩は或は身を隠して現ぜず。而も衆生の爲に一切の毛孔を用て説法し、其所應に隨うて本行を失せず。是菩薩の智慧は無量なり、一切の論議師も窮め盡す能はず、亦壞する能はず。是菩薩はは無礙智を得て身を轉じて生を受くる時、一切の五通の仙人の有する所の經書、咒術、智慧、技能を自然に悉く知る。謂ゆる四章陀、六鷲伽、咒術、日月、五星經、原夢經、地動、鬼語、鳥語、獸語、四足獸鬼の人に著く語、國王相占の豐儉、日月五星の鬪相、醫藥章、算數、卜、歌舞、妓樂を知る。是の如き等の工巧技術、詭經を盡く知り、明かに達して、一切の人及び諸の外道に過ぎ、亦自ら高ぶらず、亦他を憚さず、是俗事を知るも、涅槃の爲にせず、是菩薩は四無礙智を成就するが故に色力光明は諸梵に殊る。諸梵は恭敬愛樂尊重すれども心に著する所無く、是の如き等の一切諸天の爲に尊重恭敬せらるるも亦著する所無く、但無常、苦、空、無我の心を生じ、亦神通を以て諸天を發起し、心に渴仰せしめて爲に法を説き、盡くる無く、壞する無く、疑悔を斷除して阿耨多羅三藐三菩提に住せしむ、是を摩訶衍の中の菩薩の四無礙智力と名け、能く衆生を度する、是を四無礙智の義と名く。

大智度論卷第二十五

# 大智度論初品中十八不共法釋論第四十一

卷第二十六

聖者龍樹造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

【一】以下十八不共法釋し、獨り此法を不共法と名くるを明す。

（一）十八不共法とは一には諸佛は身に失無し、二には口に失無し、三には念に失無し、四には異想無し、五には不定心無し、六には知り巴りて捨せざる無し、七には欲滅すること無し、八には精進滅すること無し、九には念滅すること無し、十には慧滅すること無し、十一には解脱滅すること無し、十二には解脱知見滅すること無し、十三には一切の身業は智慧に隨うて行ず、十四には一切の口業は智慧に隨うて行ず、十五には一切の意業は智慧に隨うて行ず、十六には智慧もて過去世を知ること無礙なり、十七には智慧もて未來世を知ること無礙なり、十八には智慧もて現在世を知ること無礙なり。問うて曰はく、「是三十六法は皆是れ佛法なり、何を以ての故に獨り十八を以て不共と爲す。答へて曰はく、「前の十八の中には聲聞、辟支佛の分有り、後の十八の中に於ては分無し。舍利弗の如きは能く諸法を分別し、一句を暢演するに通達無礙なり。佛、讀じて言はく、「善く法性に通ず」と。阿泥盧豆は天眼第一なり。是の如き等の諸の聲聞は皆分有り。四無所畏に於て分有りと。佛の説きたまふが如し。「弟子の中の能く師子吼第一なるは賓徒羅巨羅埵逝なり」と。

【二】初に身無失  
口無失を釋す。

舍利弗も亦自ら誓つて言はく、「我は七日七夜、能く一義を演暢すれども、四分別の慧を窮盡すること無からしむ」と。諸の阿羅漢、舍利弗、目犍連、富樓那、阿難、迦旃延等も亦是義を知り、名字語言を樂説す。是を以ての故に前の十八を不共と名けず。

問うて曰はく、「何を以ての故に佛は身に失無く口に失無きや。」答へて曰はく、「佛は無量阿僧祇劫より來、持戒清淨なるが故に身口の業に失無し。餘の諸の阿羅漢たる舍利弗等の如きは、極めて多きは六十劫なるも、久しく戒を習はざるが故に失有り。佛は無量阿僧祇劫に諸の清淨戒を集め成就したまふが故に、常に甚深の禪定を行じたまふが故に、一切の微妙の智慧を得たまふが故に、善く大悲心を修したまふが故に、失有ること無し。復次に、佛は諸の罪根の因縁を抜きたまふが故に、失有ること無し。罪の根本の因縁に四種有り。一には貪欲の因縁、二には瞋恚の因縁、三には怖畏の因縁、四には愚癡の因縁なり。是罪根の因縁及び習皆已に抜きたまふ。阿羅漢辟支佛は罪の因縁を抜くと雖も、習を盡さざるが故に、或時は失有り。佛は一切法中に於て智慧を遍滿し、常に成就したまふが故に若は不知の故に失有り、舍利弗の如きは、五百の比丘と遊行し、一の空寺に至りて宿す。是時は説戒の日なり、内外世界の事を知らずして佛に白す、佛言はく、「住處乃至一宿を棄捨すれば則ち罪無し」と。又異時に舍利弗、目犍連は五百の比丘を將ゐて還れり、時に高聲大聲せしが故に、佛は驅遣して出でしめたまへり。是を口失と爲す。又舍利弗の如きは、等食法を知らず。佛言はく、「不淨食を食せり」と。是の如き等の身口の失有

【三】次に第三に  
念無失を釋す。

佛は諸の煩惱の習を盡したまふが故に、是の如きの失無し。復次に、佛の一切の身  
日の業は、智慧に隨うて行じたまふがゆゑに、身に失無く、口に失無し。是の如き等の種  
種の因縁の故に、身に失無く口に失無し。

念に失無しとは、四念處の心を長夜に善く修するが故なり。善く甚深の禪定を修して心  
散亂せざるが故なり。善く欲愛及び法愛を斷じて諸法の中に心著無きが故なり。第一心  
安隱の處を得るが故なり。若し心懐しく忽忽なれば、念に忘失有り。佛は心に失を得るこ  
と無し、是故に失無し。復次に、佛は宿命通、明、力の三種有り、念を莊嚴するが故に、  
念則ち成就して失無し、念は多く過去に在りて用ふるが故なり。復次に、念の根力無邊無  
盡なるが故に念に失無し。復次に、佛の一切の意業は智慧に隨うて行じたまふが故に念に  
失無し、一一の念は意に隨うて行するが故なり。是の如き等を名けて念に失無しと爲す。

『天問經』の中に説くが如し。

何人が過失無き。何人が失念せざる

何人が常に心を一にして、應に作すべき者を能く作せる

正しく一切法を知りて、一切の障を脱するを得

諸の功德を成就するは、唯佛一人のみ有り

異想無しとは、佛は一切衆生に於て分別無く、遠近の異想無し。是は貴なり爲に説くべ

し、是は賤なり爲に説くべからずと。日の出でて善く萬物を照すが如く、佛の大悲の光明

【四】次に第四に  
無異想を釋す。

は、一切を憐愍して等しく度したまふ。恭敬する者も恭敬せざる者も、怨親貴賤悉く等しくす。客の除糞人の尼陀と名くるが如きを、佛は之を化度して大阿羅漢を得しめたまへり。亦徳護居士の如きは、火坑、毒飯を以て佛を害せんと欲するに、即ち其日を以て、其三毒を除き、邪見の火を滅したまふ、是の如く等しうして異想有ること無し。復次に、佛は舍利弗彌勒菩薩等の、佛法に順じて行するに於ても、亦愛したまはず、提婆達多富羅那外道の六師邪見等をも、亦憎みたまはず。是れ佛は無量阿僧祇劫より、心を修熏したまふが爲の故なり。是衆生の中の實は眞金の如し、異らしむべからず。復次に、佛は佛眼を以て、一日一夜各三時に、一切衆生を觀じたまひ、誰か度すべき者ぞ、時を失せしむる無らんと、等しく衆生を觀じたまふが故に、異想有ること無きなり。復次に、佛は種種の因縁もて善法を讚じ、種種の因縁もて不善法を訶したまふ。亦善に於ても、惡に於ても、心に増減無く、但衆生を度せんが爲の故に是分別有り、是を異想有ること無しと爲す。復次に、一切不行經の中に説くが如くんば、佛は一切衆生を觀じたまふこと、己身の如く、所作已に辨じ、無始、無中、無終なり、是を異想無しと名く。復次に、「佛は一切衆生及び諸法を觀じたまひ、本より已來、不生、不滅、常に清淨にして、涅槃の如きに至る」と。是を異想無しと名く。復次に、不二の法門に入りたまふ。是諸法實相の門には、異相は即ち是れ二法にして、二法は即ち是れ邪道なり。佛は是れ無誑法の人、應に誑法を行すべからず、常に不二を行じて法門に入りたまふ。誑法は即ち是れ異相なり。是の如き等を異想

【五】次に第五に  
無不定心を釋す。

無しと名く。

(五定心無し)

不定心無しとは、定は一心不乱に名く。亂心の中には、實事を見るを得る能はず、水波蕩なれば、面を見るを得ざるが如く、風中の燈は、好く照すを得ざるが如し。是を以ての故に佛には不定心無しと説く。問うて曰はく、一定とは未到地より乃至滅盡定に名く。此定中に入れば、身業口業を起す能はず。佛は若し常に定んで不定心無くんば、云何が諸國に遊行し、四威儀を具し、大衆の爲に種種の因縁、譬喩を以て説法したまふを得ん。是の如き事は、欲界繫の心及び梵世も、定に入らずして是事有るべし。答へて曰はく、不定心無しとは種種の義有り。定とは常に心を攝して、善法の中に住するに名く。佛は諸法實相の中に於て、定んで不退失なり、是を不定心無しと名く。復次に、欲界の中に定有り、是定中に入りて説法すべし。是を以ての故に阿毘曇の中に欲界繫の四聖種、四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、無諍三昧、願智、四無礙智を説く。是の如き等の妙功德有りて、佛は欲界の中の定に入りたまふが故に不定心無しと名く。是の如く聲聞、辟支佛は定より起ちて、若し無記心に入り、若し善心に入り、或は退して垢心に入る。佛は定より起ちて欲界定に入りたまひ、初より心を散亂する時無し。是を以ての故に不定心無しと名く。復次に、聲聞法の如きは化人法を説けば化人は説かず、化主説けば化人は説かず。佛は則ち爾らず。化人化主俱に能く法を説く。定心も亦異なるべし。聲聞は定に入れば則ち説くこと無し、佛は定に在りて亦能く法を説き、亦能く遊行したまふ。『密迹經』の心密の中に説く

【六〇】次に第六に  
無不知已捨を釋す

が如し、諸佛の心は常に定中に在り、心も亦應に說法すべし」と。復次に、散亂の心法、  
諸の結使、疑悔等は佛には皆無し。阿羅漢は四諦の中に疑無しと雖も、一切法の中に處  
處に疑有り、佛は一切法の中に於て常に定にして疑無し、不定の智慧無きが故なり。復次  
に、聲聞は諸の煩惱の習氣有るが故に、退法有るが故に散亂有り。佛は一切智處の中に  
於て智滿ちたまふが故に亂無し。瓶中の水滿つれば則ち聲無く、動無きが如し。復次に、  
唯佛一人のみ不誑法と名け、三堅固人の中に最上にして、苦樂の心異ならず。一相、異相、  
生滅相、斷常相、來去相、是の如き等の諸の法相は、皆是れ誑法にして、虛妄和合の作  
法なるが故なり。佛は諸法の實相の中に安立したまふが故に心に不定無く、不定無きが故  
に心異らず。復次に、五種の不可思議法の中に、佛の最も不可思議なるは、是れ十八不  
共法にして、是れ佛の甚深藏なり、誰か能く思議する者ぞ。是を以ての故に佛に不定心無  
き事必ず當に闡るべし。佛は常に定に入りて覺觀の龜心無しと雖も、不可思議の智慧有る  
が故に亦能く說法したまふ。譬へば天樂の天の好む所の種種の聲に隨ふが如し。應に是れ  
亦心無く、亦識法無かるべし。諸天は福德の因縁を以ての故に、是の如き天樂有りて、無  
心無識にして能く物に應ずるなり。何に況んや佛は有心にして、說法したまはざるをや。  
是を以ての故に佛には不定心無しと説く。

(六二) 知り已りて捨てざること無しとは、衆生に三種の受有り、苦受、樂受、不苦不樂受なり。  
苦受は瞋を生じ、樂受は愛を生じ、不苦不樂受は愚癡を生ず。是三種の受到て、苦受は

苦を生じ、苦に住すれば樂を滅す。樂受は樂を生じ、樂に住すれば苦を滅す。不苦不樂受は苦と爲すを知らず、樂と爲すを知らず。餘人は鈍根の故に、多く苦受樂受を覺し、不苦不樂受の中に於て、不覺不知にして捨心有り、是を癡徒の爲に使はると爲す。佛は不苦不樂受の中に於て、覺生する時、覺住する時、覺滅する時を知りたまふ。是を以ての故に佛は知り已りて捨てざるの心無しと言ふ。問うて曰はく、「此中に何等をか捨と爲す、不苦不樂即ち是れ捨なりや、七覺の中の捨と爲すや、四無量心の中の捨を名けて捨と爲すや。」答へて曰はく、「不苦不樂即ち是れ捨なり。二處の捨も亦是れ捨なり。何を以ての故に。餘人は不苦不樂受の中に於て、念念の中の生時、住時、滅時を覺せず、久遠より覺せる佛は、念念の中に盡く皆了知したまふ。七覺の中の捨とは、若し心正等なれば、沒せず、掉せず、是時應に捨すべし。若し沒する時は情進の想を行じ、若し掉する時は攝心の想を行す。諸の聲聞辟支佛は、或時は攝心掉心を銷り、未だ平等に便ち捨せず。佛は念念心中の魚細深淺に於て、悉く知り、知り已りて捨したまはざる無し。問うて曰はく、「若し爾れば、佛は何を以てか難陀の爲に説き、諸の比丘に「難陀は諸受に於て、生時を覺し、住時を覺し、滅時を覺す。諸想諸覺も亦是の如し」とのたまひしや。」答へて曰はく、「覺に二種有り。一には心中を覺す。苦受生すれば、苦受の生ずるを知り、苦受住すれば、苦受の住するを知り、苦受滅すれば、苦受の滅するを知り、樂受生すれば、樂受の生ずるを知り、樂受住すれば、樂受の住するを知り、樂受滅すれば、樂受の滅するを知る、不苦不樂受も

【七】知り已りて捨すとの義に就いて。

亦是の如し。但能く是總相を知りて別相を知る能はず。二には念念の中の苦樂、不苦不樂受の中に悉く覺し悉く知り、念念の中の心數法を知らずして過ぐる無し、是を以ての故に佛は知り已りて捨てざる無しと説く。復次に、佛は或るとき、衆生を捨てて甚深の禪定に入りたまふこと一月、二月なり。有人疑ふらく、「佛は衆生を度せんが爲の故に出世したまふ、何を以ての故に常に定に入りたまふや」と。佛言はく、「我種種の因縁を知るが故に捨す、是れ知り已りて捨する無きに非ず」と。

問うて曰はく、「何等か是れ知り已りて、捨するの因縁なる。」答へて曰はく、「大衆の中に於て、疲厭することあるが故に小息したまふ。復次に、佛は世世に常に遠離の行を愛したまふ。若し菩薩母胎に在れば母も亦遠離の行を樂ひ、城を去ること四十里の嵐髻尼林の中に生む。得道の時は、漚樓頻螺林の中に獨り在し、樹下にて成佛し、初轉法輪の時も、亦仙人の住處なる鹿林の中に在し、涅槃に入りたまふ時は、沙羅林雙樹の下に在りて、長夜に樂んで遠離を行じたまふ。是を以ての故に佛は禪定に入りたまふ。復次に、佛は常に捨心を成就したまふが故に禪定に入りたまふ。復次に、佛は憍闍及び雜語の處を遠離し、亦自ら諸佛の功德藏を觀じ、亦第一清淨の樂を受くるが故に禪定に入りたまふ。復次に、佛は法を説き已れば、常に諸の比丘に、「當に坐禪すべし、後悔せしむる無かれ」と教へたまへり。口の説く所、身も亦自ら行するが故に、禪定に入りたまふ。復次に、惡供養を厭ふが故に、衆生の應に得度すべき者を知りて、禪定に入り、化人と作り、往いて度した

【八】次に第七に  
欲滅を釋す。

まふ。復次に、衆生有り、定少く慧多き者には、身もて禪を行するを示し、以て之を教化したまふ。復次に人有り、常に佛を見て厭想を生ずるが故に、小らく遠離したまふ。其をして飢虚せしめんが故なり。復次に、佛は諸天の爲に、説法せんと欲するが故に、閑靜の處に在したまふ。復次に、佛は後世の作法の爲の故に、坐禪したまふ。又佛は自ら法輪を轉じり、事を以て弟子に付したまふが故に、禪定に入りたまふ。復次に、二種の道、現じて衆生を攝するが故なり。一には禪定、二には智慧、佛、大衆に在りて法を説きたまふは智慧を現ぜんが爲にして、靜處に心を攝したまふは、禪定を現ぜんが爲なり。復次に、衆生は六塵の中に於て、三種の行有り。好色を見ては喜樂を生じ、惡色を見ては憂苦を生じ、不苦不樂色を見ては捨心を生ず。乃至法も亦是の如し。佛は六塵の中に於て自在にして、喜樂憂苦の處に於て能く捨心を生じたまふ。聖如意の中に説くが如し。是の如き等の種種の因縁の故に禪定に入りたまふ。知り已りて捨せざるには非ず。

欲滅する無しとは、佛は善法の恩を知りたまふが故に、常に諸の善法を集めんと欲したまふが故に、欲滅すること無く、諸の善法を修習し、心に厭足無きが故に、欲滅すること無し。譬へば一長老比丘の如きは、目闇くして、自ら筒側梨を縫ひ、針の疵脱す。諸人に語りて言はく、「誰か福德を樂欲する者ぞ、我爲に針に疵せよ」と。爾時、佛は其前に現じて語りて言はく、「我は是れ福德を樂欲して厭足無き人なり、汝が針を持ち來れ」と。是比丘は、斐疊たる佛の光明を見、又佛の音聲を識りて、佛に白して言さく、「佛は無量

の功德海の、皆其邊底を盡したまへり、云何が厭足無きや」と。佛、比丘に告げたまはく、「功德の果報は甚深にして、我如く恩分を知る者有る無し。我は復其邊底を盡すと雖も、我も心に厭足無きを欲するを以ての故に佛を得たり。是故に今猶息まず。更に功德の得べき無しと雖も、我は心に亦休まざらんと欲す」と。諸天人驚悟すらく、「佛すら功德に於て尙厭足無し、何に況んや餘人をや」と。佛は比丘の爲に説法したまふに、是時、肉眼即ち明にして慧眼成就せり。問うて曰はく、「若し佛は嘗て、一切善法の中の欲を斷ぜば、今云何が欲減する無しと言ふや。答へて曰はく、「一切善法の中の欲を斷ずと言ふは、是れ未だ得ざるを得んと欲し、得已れるを増さんと欲するなり。佛は是の如きの欲無し。佛は一切の功德を具足して得ざる者無く、亦増益したまふこと無し。今欲と言ふは、先に説くが如く、佛は具に一切の功德を得ると雖も、欲心猶息まず、譬へば馬寶の至る處に到ると雖も、去心息まざるなり。死に至るまで已まざるが如く、佛寶も亦是の如し。又劫盡の大火の三千大千世界を燒きて、悉く盡せども、火勢故に息まざるが如し。佛の智慧の火も亦是の如し、一切の煩惱を燒き、諸法を照し已るも、智慧相應の欲亦盡きず。復次に、佛は一切善法の功德満足すと雖も、衆生は未だ盡さざるが故に度せんと欲して息まざるなり。問うて曰はく、「若し佛は衆生を度せんと欲して未だ息まざれば、何を以てか涅槃に入りましたまへる。答へて曰はく、「衆生を度するに二種有り。或は現前の得度有り、或は滅後の得度有り。『法華經』の中に説くが如し。薬師は諸子の爲に薬を合せて之を與へ、而して捨す」と、是

【九】次に第八に  
精進無減を釋し、  
中、欲と精進との  
關係を明す。

故に涅槃に入る。復次に、衆生有り、鈍根にして德薄きが故に大事を成ずる能はず、但福徳の因縁を種うべし。是故に涅槃に入りたまふ。問うて曰はく、「佛の滅度の後も亦阿羅漢を得るもの有り、何を以てか但福徳の因縁を種うべしと言ふや。」答へて曰はく、「阿羅漢を得る者有り」と雖も少くして言ふに足らず。佛の一たび說法したまふ時の如きは、十方無量阿僧祇の衆生道を得れども、佛の滅度の後には爾らず、譬へば大國の征伐して、少しく所得有りと雖も、名けて得と爲さざるが如し。是を以ての故に衆生は未だ盡さずと雖も而も涅槃に入りたまふ。復次に、摩訶衍の『首楞嚴經』の中に「佛は莊嚴世界に於ては、壽七百阿僧祇劫にして衆生を度脱す」と説く。是を以ての故に佛は欲滅すること無しと説く。

精進減する無しとは、欲の中に「欲の義は即ち是れ精進なり」と説くが如し。問うて曰はく、「若し爾らば十八不共法有る無けん。復次に、欲と精進とは、心數法の中には、各別なり、云何が欲は即ち是れ精進なりと言ふ。」答へて曰はく、「欲を初行と爲し、欲の増長するを精進と名く。佛の説きたまふが如くんば、一切法は欲を根本と爲す。欲は人の渴して欲を得んと欲するが如く、精進は因縁方便を以て欲を求むるが如し。欲は心に得んと欲すと爲し、精進は其事を成ぜんと爲す。欲は意業に屬し、精進は三業に屬す。欲は内と爲し、精進は外と爲す。是の如き等の差別有り。復次に、是精進は諸佛の樂ひたまふ所なり。釋迦牟尼佛の如きは、精進力の故に九劫を超越して、疾に阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。復次に、説くが如くんば、一時、佛阿難に告げたまはく、「汝、諸の比丘の爲に

法を説け、我、背痛む、少く息まん」と。爾時、世尊は四葉の鬱多羅僧を下に敷き、僧伽梨を以て、頭に枕して臥したまふ。是時、阿難は七覺の義を説きて、精進覺に至るに、佛は驚き起きて坐し、阿難に告げたまはく、「汝は精進の義を讚するや」阿難言さく、「讚す」と。是の如くして三たびに至る。佛言はく、「善い哉、善い哉、善く精進を修せば、乃ち阿耨多羅三藐三菩提を得るに至らん」と。何に況んや餘道をや。是義を以ての故に、佛は精進滅すること無し、病時すら、猶尙息みたまはず、何に況んや病みたまはざるをや。復次に、佛は衆生を度せんが爲の故に、甚深の禪定の樂を捨て、種種の身、種種の語言、種種の方便力を以て衆生を度脱したまひ、或時は惡險の道を過ぎ、或は惡食を食し、或時は寒熱を受け、或時は諸の邪なる難聞、惡口、罵詈に値ひ、忍受して厭ひたまはず。佛世尊は諸法の中に於て、自在にして、是事を行じたまふと雖も、懈怠を生じたまはず。佛の衆生を度し已りて、薩羅林中の雙樹の下に於て臥したまふ如きは、梵志須跋陀、阿難に語るらく、「我は一切智人の今夜當に滅度したまふべきを聞けり、我佛に見えんと欲す」と。阿難は之を止めて言はく、「佛は衆人の爲に廣く説法して疲極したまへり」と。佛は遙に之を聞き、阿難に告げたまはく、「須跋陀を聽し入れよ、是れ我末後の弟子なり」と。須跋陀は入るを得て、佛に疑ふ所を問ふに、佛は意に隨うて説法して疑を斷じ、道を得しめたまへば、佛に先つて無餘涅槃に入れり。諸の比丘、佛に白して言さく、「世尊は甚だ希有と爲す。乃至末後に外道梵志を憐愍して共に語言したまふ」と。佛言はく、「我は但今世の

み未後に度するに非ず、先世未だ道を得ざる時も亦未後に度せり。乃往過去無量阿僧祇劫に大林樹有り、諸の禽獸多し。野火來りて燒き、三邊俱に起る。唯一邊のみ有り、而も一水を隔つ。衆獸窮逼して命を逃るるに地無し。我、爾時、大身多力の鹿爲り。前の脚を以て一岸に跨け、後の脚を以て一岸を踏み、衆獸をして脊の上を踏んで渡らしめ、皮肉盡く壞るれども、慈愍の力を以て、之を忍んで死に至る。最後に一の兎來る、氣力已に竭くれども、自ら強努の力を以て、忍んで過ぐるを得しめ、過ぎ已れば、脊折れ水に墮ちて死せり。是の如きもの久しく有り、但今のみに非ず。前に得度せる者は今の諸弟子なり、最後の一兎は須跋陀是れなり」と。佛は世世に樂んで精進を行じ、今猶息みたまはず。是故に精進滅する無しと言ふ。

【二〇】次に第九に念無滅を釋す。

念減する無しとは、三世の諸法に於て、一切の智慧相應するが故に、念満足して滅する無きなり。問うて曰はく、「先に已に、念に失無きを説き、今復念減すること無しと説く。念に失無きと、念減ぜざると、一と爲すか、異と爲すか。若し一ならば、何を以てか重ねて説くや。若し異ならば、何の差別有りや。」答へて曰はく、「失念は誤錯に名け、減は及ばざるに名く。失念は威儀、俯仰、去來の法の中に念を失するに名け、無滅は禪定神通の念に住し、過去現在世に通達無礙なるに名く。問うて曰はく、「何を以ての故に、念減する無きは、獨り是れ佛の法なる。」答へて曰はく、「聲聞、辟支佛は、善く四念處に住するが故に念牢固なり。念牢固なりと雖も、猶亦減少し礙へて通達せず。宿命智力の中に説くが如

【二】次に第十に  
慧無減を釋す。

し、「聲聞、辟支佛は宿命を念すること、極めて多きは八萬劫なるも廣さに於て減有り、亦見諦道の中に於て念念に分別する能はず。佛は念念の中に於て、皆三相を分別したまふ。佛心は一法をも念ぜずと云ふこと有る無し。是を以ての故に獨り佛にのみ念無減有るなり。」  
復次に、宿命智力は念に隨うて知る。佛は是中に於て力有り、聲聞、辟支佛すら尙是念力無し、何に況んや餘人をや。復次に、佛は一切智無礙解脫を以て念を守護したまふ。是故に減する無し。是の如き等の因縁の故に、佛は念減する無し。  
慧減する無しとは、佛は一切の智慧を得たまふが故に、慧減する無し、三世の智慧無礙なるが故に、慧減する無し。復次に、十力、四無所畏、四無礙智を成就したまふが故に、慧減する無し。復次に、譬へば酥油豐饒なれば燈炷清淨にして、光明も亦盛なるが如し、佛も亦是の如し、三昧王等の諸の三昧禪定の油念減する無く、清淨の炷有り、是因縁の故に慧の光明は無量無減なり。復次に、初發心より無量阿僧祇劫に、一切の智慧を集むるが故に、深心に法の爲にするが故に、頭目髓腦を悉く捨し、内外に有する所を而も布施し、火に入り山に投じ、皮を剥ぎ身を釘にし、是の如き等の苦として、受けざる無きが故に、一心に智慧を集むるが爲の故に、慧は減する無し。復次に、佛の智慧は、一切の功德、持戒、禪定等を以て助成するが故に、慧は減する無し。復次に、佛の一切の經書を求め、世俗法、佛法、龜細の善不善、悉く皆學び知るが故に、慧を減する無し。復次に、十方無量の諸佛より、聞く所の法を讀誦し、思惟し修習し問難するが故に、慧は

【三】次に第十一に解脱無減を釋す

減する無し。復次に、一切衆生の爲の故に、一切の善法を増益するが爲の故に、一切處の無明を破するが故に、慧は減する無し。復次に、是智慧は、實に諸法の相の不生不滅、不淨不垢、無作無行を知り、是智非智を分別せず。諸法は一等に清淨なること、虚空の無常無著なるが如しと知る。二法を以てせざるが故に、不二にして法相に入るを得。不二にして法相に入れば無量無邊なり。是を以ての故に慧減する無し。是の如き等の種種の因縁の故に慧減する無し。

【四】次に第十二に解脱知見無減を釋す

解脱減する無しとは、解脱に二種有り、有爲解脱と無爲解脱となり。有爲解脱は無漏の智慧に相應する解脱に名け、無爲解脱は一切煩惱の習都て盡して餘無きに名く。佛は二解脱に於て減無きなり。何を以ての故に。聲聞辟支佛は、智慧大利ならざるが故に、煩惱悉く盡さざるが故に、智慧減する有り、佛は智慧第一にして、利なるが故に、煩惱の習、永く盡して餘すこと無きが故に、解脱減する無きなり。復次に、漏盡力の中に説くが如くんば、佛と聲聞とは解脱に差別有り。佛は漏盡力を得たまふが故に、解脱減したまふこと無く、二乘は力無きが故に、減すること有り。

解脱知見減する無しとは、佛は諸の解脱の中に於て、智慧無量無邊清淨なるが故に、解脱知見減する無しと名く。問うて曰はく、『佛は一切法中、減する無し、何を以ての故に、但六事の中にのみ減する無き。』答へて曰はく、『一切の自利他利の中に四事能く具足す、欲は一切の善法を求むるの根本なり、精進は能く行じ、念は能く守護すること、守門の人の

善者は入るを聽し、悪者は遮るが如し。慧は一切の法門を照して、一切の煩惱を斷ず。是四法を用て事を成辦するを得。是四法の果報に二種有り、一には解脫、二には解脫知見なり。解脫の義は先に説くが如し。解脫知見とは、固より是解脫知見もて是二種の解脫の相なる、有爲無爲の解脫を知り、諸の解脫の相を知る。謂ゆる時解脫と不時解脫と、慧解脫と俱解脫と、壞解脫と不壞解脫と、八解脫と不可思議解脫と無礙解脫と等なり。諸の解脫の相の牢固、不牢固を分別する、是を「解脫智見減する無し」と名く。念佛の中に佛は五無學衆を成就すといふが如し。解脫知見衆は、此中に應に廣く説くべし。問うて曰はく、「解脫知見とは但知のみを言ふ、何を以てか復見を言ふ。」答へて曰はく、「知を言ひ、見を言へば、事牢固なるを得。譬へば繩を二つ合して一と爲せば則ち牢固なるが如し。復次に、若し但知を説けば則ち一切の慧を攝せず。阿毘曇に説く所の如くんば、慧に三種有り、知にして見に非ざる有り、見にして知に非ざる有り、亦見亦知なる有り。知にして見に非ざる有りとは、盡智、無生智、五識相應の智なり。見にして知に非ざる有りとは、八忍、世間の正見、五邪見なり。亦知亦見なる有りとは、餘殘の諸の慧なり。若し知を説けば則ち見を攝せず、若し見を説けば則ち知を攝せず、是故に知と見とを説けば則ち具足す。復次に、人に從うて誦讀し分別し籌量するが如きは是を知と名け、自身に證を得るは是を見と名く。譬へば耳に其事を聞き、猶尙疑有るは是を知と名く。親しく自ら目に観て、了にして疑無き、是を見と名くるが如し。解脫の中の知と見とも亦是の如く差別す。

【十四】次に第十三次の身口意業は智慧に隨つて行ずの義

復次に、有人言はく、「阿羅漢の自ら解脱の中に於て、疑うて自ら了る能はずんば、是阿羅漢は、阿羅漢に非ず」と。是を以ての故に、佛は是の如きの弊見を破せんが爲の故に、諸の聖人は解脱の中に於て、亦知亦見と説きたまふ。諸の阿羅漢は解脱知見を得と雖も、解脱知見に滅有り、一切智を得ざるが故に、上上の智慧根を成就せざるが故に、諸法の念に生滅する時、別相の分別を知らざるが故なり。佛は上上の智慧根を成就して、諸法の念の別相、生滅を知りたまふが故に、解脱知見滅すること無し。復次に法眼清淨に具足し成就したまふが故なり。法眼の義の中に説くが如くんば、是衆生は空解脱門より涅槃に入り、是衆生は、無相解脱門より涅槃に入り、是衆生は、無作解脱門より涅槃に入り、是衆生は五衆門、十二入、十八界を觀じ、是の如き種種の法門もて解脱を得と知る。佛は解脱知見に於て、盡く知り遍く知りたまふ。是故に佛の解脱知見は滅する無しと名く。

一切の身業、一切の口業、一切の意業、智慧に隨うて行ずとは、佛は一切の身口意業を先づ知り、然る後智慧に隨うて行じたまふ。諸佛の身口意業の一切の行は、衆生を利益せざる無きが故に、先づ知り、後る後智に隨うて行ずと名く。經の中に説くが如くんば、諸の乃至出息入息すら衆生を利益す、何に泥んや身口意業を故に作して而も利益せざらんや、諸の怨惡の衆生は佛の出入の息の氣香を聞いて、皆信心清淨なるを得、佛を愛樂す、諸天は佛の氣息の香を聞いて、亦皆五欲を捨て、發心して善を修す。是を以ての故に、身口意の業は智慧に隨うて行ずと言ふ。聲聞、辟支佛は是事無く、心に故らに善を作

【二五】佛の身口意業の往々にして慧に随つて行ぜざるに似たるが如きことあるは皆衆生を教化せんための方便なることを明す

し、然る後身口業は、善なり、意業は或時は無記なり、智慧に隨はずして自ら生ず、何に況んや餘人をや。憍梵波提比丘の如きは阿羅漢を得と雖も、自ら食し、吐きて更に食せり。是業は智慧に隨はず。又摩頭波斯咤比丘阿羅漢の如きは上梁、或は壁上樹上に跳び上れり。又畢陵伽婆蹉の如きは恆神を罵りて小婢と言へり。是の如き等の身口業は先に智慧無く、亦又智慧に隨うて行ぜず。佛は是事無し。

問うて曰はく、「若し爾らば、佛の或時の身口業は、亦智慧に隨うて行ぜざるに似たり。何を以ての故に。外道の衆中に入りて說法するに、都て信受する者無く、又復、一時大衆の中に在りて說法するに、胸臆を現して尼捷子に示し、又復、人の二相を見ざるを疑ふが爲の故に、大衆の中に在りて、舌相陰藏相を現せり、又復諸の弟子を「汝は狂愚の人なり」と罵り、提婆達を「汝は是れ狂人、死人、嗽唾人なり」と罵れり、佛は結戒して八種の鉢は蓄ふべからず、比丘には二種の鉢若は瓦、若は鐵を用ふるを聽し、而も自らは石鉢を用ふ。有時は、外道難問するに、佛は默然として答へず、又佛は處處に我有りと説き、處處に我無しと説き、處處に諸法有りと言説き、處處に諸法無しと言説けり。是の如き等の身口業は智慧に隨うて行ぜざるに似たり。身口業は意業を離れず、意業は亦智慧に隨うて行ぜざること有るべし、云何が常に智慧に隨うて行ずと言ふや。答へて曰はく、「是事は然らず。是諸事に於て皆先に智慧有り、然る後諸業は智慧に隨うて行じたまふ。何を以ての故に。佛は外道の衆中に入りて、今世には信ぜず、受けざるを知りたまふと雖も、後世の大

【婆羅門の三諦】  
喜憂闇の三をいふ

因縁を種うるを以ての故に、又復外道の謗りて、佛は自ら高憍なりと言ふを止めんが爲に、是を以ての故に、自ら往いて其衆中に入りたまふ。又外道言はく、「佛は自ら大悲有りて普く一切を濟ふと言ひ、而も但自ら四衆の爲に說法す。我等も亦是れ出家して道を求むれども、而も爲に誑かず」と、又此經の如きは、佛、外道の衆中に往きて說法したまふに、信受せざりきと言はず、佛は遙に外道の大會して高聲に論議するを見、餘處に至らんと欲するも廻り往いて之に趣きたまふに、論議帥の輩は、遙に佛の來りたまふを見て、自ら其衆に語るらく、「汝等皆默せよ、佛は是れ寂靜を樂しむ人なり。汝等が靜默なるを見ば、或は能く此に來らん」と。衆即ち默然たり。佛は其衆に入りて、婆羅門の三諦を説きたまふに、外道の衆は皆默然たり。佛是念を作したまはく、「狂人の輩は、皆惡魔の爲に覆はる、是法は微妙なり、乃至一人として、試に弟子と作る者有ること無し」と。是念を作し已りて座より去りたまふ。是人は魔蔽を離るるを得て、便ち自ら念すらく、「我等は妙法を聞くを得たり、云何が以て自ら利せざらん」と。即ち皆佛の所に往詣して、佛弟子と爲り、道を得て苦を離れぬ。復次に、外道の弟子は、其師を難るが故に敢て佛の所に到らず。是故に佛は自ら其衆中に入りたまふに、衆は法を聞くを得、信受堅固にして、復師を難らず、弟子と爲るを得、或は道跡を得。是の如き等の種種の智慧因縁有り、是故に往いて外道の衆に入りたまふ。復次に、薩遮毗尼犍子は銅鑠を腹に給し、自ら誓ひて言はく、「人の我難を得て、汗を流さず、破壊する者有る無し。大象乃至樹木瓦石も、我難聲を聞かば、亦

皆汗を流さん」と。是誓を作し已りて、佛の所に來至し、佛と論議す。佛之に質問したまふに皆答ふる能はず、汗流れて地を濡ひ、體を擧げて、漬るが如し。佛、尼嚩に告げたまはく、「汝は先に、我難を聞いて、而も汗を流さざる者有ること無し」と誓言せり、汝今汗流れて地を濡へり、汝試みに佛に汗相有るを見るや不やを觀よ」と。佛は時に鬱多羅僧を脱ぎて之に示して言はく、「汗何處にか在る」と。復次に、有人言はく、「或は頭は汗するも、身には汗せざる者有り、佛は頭には汗せずと雖も、身には必ず汗有らん」と。是を以ての故に佛は鬱多羅僧を脱ぎて其身を示したまふ。是に因りて外道は大いに信向を得、皆佛法の中に入れり。是れ智慧の因縁に身業隨うて行ずるなり。佛の舌相、陰藏相を現したまふとは、有人、佛身の二相を疑ひ、而も是人は得道すべくして、疑ふが故に得ず、是を以ての故に二相を現じたまふ。舌を出して面を覆ひ、舌大なりと雖も、還口中に入り、而も亦妨無く、見る者疑を斷ぜり。有人は、出舌の相を見て、若し輕慢心を生ず。舌を出すすこと小兒の相の如くし、還口に入れて法を説き、妨無きを見しむるに、恭敬を起し、未曾有なりと歎す。有人疑ふらく、「佛の陰藏は現ぜず」と。爾時、世尊、寶象、寶馬を化作し、之を指示して言はく、「陰藏相の現ぜざること正に是の如し」と。有人言はく、「佛は陰藏の相を出して、但一人に示すは、其疑を斷ずるが故なり」と。論議師の輩言はく、「佛は大慈悲なり、若し人有り、佛の陰藏の相を見ば、能く善根を集め、阿耨多羅三藐三菩提の心を發し、及び能く大いに歡喜せん、信敬の心を生ずる者には皆見るを得しめて、其疑

心を斷ぜん、是を除きては皆見るを得ず」と。佛は大悲を以て衆生を度せんが爲の故に、三種の覆より出でて、暫く現すること電光のごし。是衆生は、見已りて、佛に大悲心有るを信じ、實に滅法に於て取らず、著せず。是の如き等の因縁の故に、二相を現じたまふ、戲に非ず、羞無きに非ざるなり。佛は苦切の語もて、諸の比丘に「汝は狂愚人なり」と。苦切の語に二種有り、一には垢心もて瞋り罵る、二には衆生を憐愍し教化せんと欲するが故なり。離欲の人すら垢心にして瞋り罵る有る無し、何に況んや佛をや。佛は憐愍し教化したまふが故に苦切の語有り。衆生有り、軟語もて、善く教ふれども道に入らざれば、檢要して苦切の龜教を須ひ、乃ち法に入るを得。良馬は鞭影を見て便ち去り、鈍驢は痛手を得て乃ち行くが如し。亦有瘡は、軟藥唾呪を得て便ち差え、有瘡は、刀を以て其惡肉を破出し、塗るに惡藥を以てすれば、乃ち愈ゆる者の如し。復次に、苦切の語に五種有り。一には但綺語し、二には惡口し亦綺語し、三には惡口し亦綺語し安語し、四には惡口し亦綺語し安語し兩舌す。五には煩惱無き心の苦切の語なり。弟子に善と不善法とを分別するを教へんが爲の故なり、衆生を苦難の地より抜かんが故なり。四種の惡語を具する者は其罪重し、三二一は轉轉して輕微なり、佛弟子、白衣にして初道若は二道を得、奴婢を使令するが故に、惡口有るも不善道に非ず。攝律儀に二種有り、若は綺語、若は惡口綺語なり。阿那舍、阿羅漢は煩惱無くして惡口を起す。但淨心を以て惡言を須ひ、教化するが故に惡口綺語す。阿那舍、阿羅漢すら尙煩惱の起す所の惡口無し、何に況んや佛をや。復次に、

佛ほとけに若ごとし苦切くせつの語ご有あるも應まさに疑うたがふべからず、難なんじて、「佛ほとけは惡心あくしんもて苦切くせつの語ごを起おこす」と謂いふべからず。所以ゆゑは何ん。佛ほとけは惡心あくしん久ひさしく已すでに滅めつし、但ただ深心たじんしんを以もつて衆生じゆじやうを念ねんじたまふ。慈じ父ふの子こを教おしふるが如ごときは、苦言くごん有ありと雖いども、子こを成じやう就じゆせしめんが爲ための故ゆゑにして、是これ惡心あくしんに非あらず。佛ほとけは菩薩ぼさつ爲なりし時とき、三毒さんどく未まだ盡じんきず、仙人せんじんと作り、屬提せんだいと名なく、惡王あくおうに其耳鼻手そのにびて足あしを截きられて、而しかも惡心あくしんを生しやうぜず、惡言あくごんを出いださず。爾時にがとき未まだ得道とくだうせざるすら尙なほ惡心あくしん無なし、何なにに況いはんや阿耨多羅三藐三菩提あぬたらかんさんびやくさんぼだいを得え、三毒さんどく已すでに盡じんき、一切いっさい衆生じゆじやうに於おて、大慈悲だいじひを具足ぐそくしたまふに、云何いんがが佛ほとけに惡心あくしんの苦切語くせつご有ありと疑うたがはん。復次またつぎに、佛ほとけ若ごとし狂愚人きやうごじんと言いはば、是これ軟語實語なんごじつごなり。所以ゆゑは何ん。三毒さんどく發はつるが故ゆゑに、名なけて狂愚きやうごと爲なし、亦また善事ぜんじを以もつて利益りやくするも、而しかも肯うけがひ受うけず、佛心ほとけしんを解げせず、佛語ほとけごを受うけざる、是これ狂愚きやうごと爲なせばなり。復次またつぎに、佛ほとけは内常うちじょうに無我むがの智慧ちゑを行せじ、外常げじょうに諸法しよほふの空くうを觀くわんじたまふ。是この如ごときの者もの云何いんがが惡口あくぐち有あらん。是こは衆生じゆじやうは、佛心ほとけしんを解げせざるが故ゆゑに、佛語ほとけごの短たんを求もとむるなり。若ごとし衆生じゆじやう、佛の深心たじんしんを以もつて憐愍れんみん愍みしたまふを解げせば、假令たじま大火たいくわに入いるを教おしへたまふとも、即時そくじに歡喜くわんぎして入いること、人ひとの熱悶ねつもんする時とき、清涼しやうりやうの池ちに入いるが如ごとくならん。何いかに況いはんや語ごのみにして受うけざらんや。衆生じゆじやうは惡魔あくまの爲ために覆おほはるるが故ゆゑに、佛の深心たじんしんを以もつて之これを念ねんじたまふを知らず、是故こゝゆゑに佛語ほとけごを受うけず。是こを以もつての故ゆゑに佛は「汝なんぢは是これ狂愚人きやうごじんなり」と言いひしなり。復次またつぎに、有人あるひと苦切くせつの語ごを得えて、便すなはち歡喜くわんぎして言いはく、「親おやら我われを愛あいしたまふが故ゆゑに是この如ごとく言いふ」と。是こを以もつての故ゆゑに佛ほとけは狂愚人きやうごじんと言いひ、佛提婆達ほとけたいたたに「汝なんぢは狂人きやうじん、死人しにん、嗽唾人そつだにんなり」と語ごげたまへり。

狂人とは、提婆達は罪重くして當に阿鼻地獄に入るべきを以ての故に、三種の苦切語なり。死人とは、人に似て而も諸の善法を集むる能はざるが故なり。亦提婆達の剃頭法服は、聖人の如くに似たるも、内に慧命無きを以ての故に死人と名く。死人は種種に莊嚴すれども轉轉爛壞して、終に活きしむべからざるが如し。提婆達も亦是の如く、佛は日日種種に教化したまへども、惡心轉劇しく、惡不善法日に轉増し、乃至三逆罪を作す。是を以ての故に名けて死人と爲す。嗽唾人とは、提婆達は利養を貪るが故に、化して天身の小兒と作り、阿闍王の抱中に在り。王は鳴けば、其口に唾を與へて嗽がしむ。是を以ての故に嗽唾人と名く。問うて曰はく、「提婆達は禪定を得て已に欲を離る、云何が復他に唾を嗽ぐや、答へて曰はく、「是人は惡心亦深く、其根も亦利なり、欲を離るるが故に能く變化す。唾を嗽ぐ時は便ち失するも、利根なるが故に、求むる時は便ち得、是を以ての故に嗽唾人と名く。狂の義は先に説くが如し。復次に、提婆達、佛に白さく、「佛は已に老い、常に閑静を樂ひたまふ、林中に入りて禪を以て自ら娛としたまふべく、僧を我に付したまふべし」と。佛言はく、「舍利弗！捷速等の大智慧有る、善軟清淨の人にすら尙僧を屬せしめず、何に況んや汝狂人、死人、嗽唾人をや」と。是の如き等の因縁の故に、佛は諸法に於て著する所無しと雖も、教化の爲の故に苦切語を現じたまふ。佛は比丘に八種の鉢を用ふるを聽したまはざるは、金銀等の寶鉢は寶物なるを以て、人貪るが故に、得難きが故に、貪著するが故に、此寶物を蓄ふるを聽さず、乃至手に名寶を擧するを得ず、亦畜ふる

を得ず。若し淨施を作して得ば、價を用ふるを以て貴からざるが故に、木鉢は垢膩の不淨を受くるが故に、畜ふるを聽さず、三種の鉢は是の如き事無し。問うて曰はく、「瓦鐵の鉢は、皆亦垢膩を受くること、木鉢と異なる無し、何を以てか畜ふるを聽す。」答へて曰はく、「瓦鐵の鉢は熏ぜざれば亦聽さず、熏ずれば垢膩を受けざるが故なり。石に龜細有り、細なる者は垢膩を受けざるが故に、世尊は自ら畜へたまへり。比丘に畜ふるを聽したまはざる所以は、其重きを以ての故なり。佛の乳哺の力は、一萬の白香象に勝れり、是故に以て重しと爲したまはず。諸の比丘を慈愍するが故に聽したまはざりしなり。問うて曰はく、「侍者の羅陀彌、喜迦須那、稠羅多、那伽婆婆羅、阿難等は、常に世尊に侍従して、應器を執持せり、何を以てか憍愍せざりしや。」答へて曰はく、「侍者は佛鉢を執持すと雖も、佛の威徳力を以ての故に、又佛を恭敬し尊重するが故に、重しと爲すを覺せず。又阿難は身力も亦大なるが故なり。復次に、細なる石鉢は得難きを以ての故に、龜なる者は垢膩を受くるが故に、用ふるを聽したまはざりき。佛鉢は四天王四山の頭より自然に生ずるが故なり。餘人は此自然の鉢無く、若し求め作るは甚だ難く、妨げ廢する所多し、是故に聽したまはざりき。又佛を弟子と異らしめんと欲するが故に、佛は石鉢を用ひたまへり。又國王の人に尊重せられ、食器も亦異なるが如し。有人は、佛鉢の異なるを見て、倍尊重を加へ、供養し、信心清淨なり。問うて曰はく、「若し鉢にして應に異なるべくば、衣は何を以て同じきや。」答へて曰はく、「佛衣も亦異れり。佛は初めて成道したまひし時、迦葉の衣は應に

佛の著する所なるべきを知りたまふ。迦葉の衣は價值十萬兩金なり。次で後に耆域は佛に深き摩根毘羅の衣を上れり、價亦十萬兩金に直れり。佛、阿難に勅して、此衣を持し去り、高截して僧伽梨を作らしめ、作り已れば、佛、受けて著したまへり。是を異れりと爲す。問うて曰はく、「佛は因に是を諸の比丘に告げたまはく、「今日より若し比丘有り、一心に涅槃を求め、世間を背捨する者、若し著を欲せば、價直十萬兩金の衣を著するを聽さん。百味の食を食するを聽さん」と。衣は異れども、而も後に聽したまひ、鉢のみ獨り聽したまはざりき。」答へて曰はく、「我先に已に石鉢の因縁を説けり、今當に更に説くべし。佛鉢は人より受けたまはず、佛初めて道を得て、食時に器を須ひんと欲したまふに、四天王は、佛の心念を知り、四鉢を持て佛に上つれり。三世諸佛の法は、皆應に四天王有りて鉢を上るべし。爾時、未だ衆僧有らず、云何が聽すと言はん、後若し聽したまふとするも、人の石鉢を與ふる無し。又闍浮提は、石鉢を好まざるが故に、人の與ふる無し。復次に、佛説きたまはく、「比丘は常に當に功德を覆ふべし」と。若し石鉢を受けば、人は「天龍の邊より得」と謂はん。若し人をして作らしめば其工既に難し。又恐らくは人言はん、「此比丘は佛と功を齊しうせんと欲す」と。所以に聽さざるなり。衣は若し有人言はく、「佛は僧中に在りて、檀越の好衣を受け、獨り著て比丘に聽したまはず」と、是故に佛は比丘に著るを聽したまへり。亦自ら著たまふ無くんば、施者有り難く、著る者、得難きを以ての故なり。若し不清淨の比丘には、人の與へざる所、清淨の比丘は、少欲知足なるが故

に著せす。佛は人の疑を斷するが故に著衣を聽し、鉢の中には望無し、是故に聽したまは  
 ざりき。「問うて曰はく、「經中に説くが如くんば、「佛の金剛身は仰食を恃まず」と。何を以  
 てか鉢を畜ふる。「答へて曰はく、「佛法に二種有り、一には聲聞道、二には佛道なり。聲聞  
 法の中には、佛は人の法に隨うて食噉したまふ所有り、摩訶衍法の中には、方便もて人の  
 爲にするが故に、噉ふ所有るを現じたまふも、其實は食したまはず。「問うて曰はく、「云何  
 が是れ方便なる。「答へて曰はく、「佛は人を度せんと欲して、人法を行するを示したまふ。  
 若し爾らずんば、人は「佛は人に非ざるを以て、我等云何が能く其法を行ぜん」と。復次  
 に、有人は、布施に因りて度を得。是人の爲の故に、佛は其食を受けたまふに、便ち是念  
 を作さく、「我食は佛身を助益するを得たり」と。心大いに歡喜し、歡喜を以ての故に佛語  
 を信受す。大國主を臣下の請じて食せしむるに、王は須ひすと雖も、彼人を攝するが爲に、  
 多少の食を爲して、其をして歡喜せしむるが如し。是の如き等の因縁もて、佛は食を受く  
 るを現じたまへり。「問うて曰はく、「若し佛食したまはずんば、受くる所の者は何處にか在  
 る。答へて曰はく、「佛事は不可思議なり、問を致すべからず。復次に、有人は、佛の食を  
 得て度する者有り。聲を聞き、色を見、身に觸れ、香を聞いて度を得る有り。食を須ひて  
 度を得る者には、佛は食を以て之に與へたまふ。「密迹金剛經」に説くが如し、「佛の食を  
 以て口中に著けたまふに、天にして佛道を求むる者有り、持して十方に至りて之を施す」と。  
 「問うて曰はく、「若し爾らば、今の僧の中に、佛の食は衆生の能く食する者有る無しと

説けり、此義云何。答へて曰はく、佛與へたまはざれば、能く食すること有る無し、今佛は之を施したまふ、是故に食するを得。何を以てか之を知ると云ふに、佛馬麥を食したまふ時は、食を以て阿難に與へたまふ。又沙門二十億身有りて、好美を以て佛に上つるに、佛は殘羹を以て、頻婆娑羅王に與へたまへり。是を以ての故に佛受け已りて、與へたまへば食するを得、與へたまはざれば、則ち消する能はざるを知る。復次に、佛の爲に食を設くるに、佛未だ食したまはざれば、已に食して殘れる者を、佛與へたまへば、能く消す。是を以ての故に、實には食したまはずと雖も、人を度するが爲の故に、食を受け鉢を畜ふるを現じたまふ。佛は十四難に答へたまはずとは、佛に四種の答有り。一には定答、二には分別義答、三には反問答、四には置答なり。此十四難の法は應に置答すべし。又復若し利益する所の事有れば、則ち答へたまふ。外道の所問は涅槃の爲にせず、疑惑を増長するが故に、置答を以てしたまふ。必ず所益有りと知れば、分別して答を爲し、必ず所益無ければ、置きて答へたまはず。是因縁を以ての故に、佛は是れ一切智人なるを知る。復次に、若し佛は三種の法、有爲法と、無爲法と、不可說法とを説けば、則ち已に一切法を説き竟ると爲す。復次に、是諸の外道は、常見に依止し、滅見に依止するが故に、問ふに常と滅とを以てするも、實相は無なるが故に、佛は答へたまはず。外道の所見の如くんば、常相と無常相とは是事無し。何を以ての故に。外道は相を取りて著す、是れ常滅なるが故なり。佛は常、無常の相を説きたまふと雖も、但治の爲に用ふるが故のみ。

【無我は是れ實等】  
以下我、無我の實  
不實を論ず。

復次に、若し人説きて無なる者を有と爲し、有なる者を無と爲さば、是の如きの人は、即ち是れ過罪なり、佛の答へたまはざるも、則ち咎無し。日の天下を照せども、高き者を下からしめ、下き者を高からしむる能はず。但顯現を以てする而已なるが如し。佛も亦是の如し、諸法に於て所作無く、諸法の有なる者を有と説き、無なる者を無と説きたまふ。生は老死に因縁たり、乃至無明は諸行に因縁たりと説きたまふが如し。佛有るも佛無きも、是因縁の法は相續して常に世間に在り。諸佛出世して、衆生の爲に、此法を顯示したまふ。復次に、若し常、滅に答ふれば、則ち咎有りと爲す。石女、黃門の兒の、脩短黑白は、何の類ぞと問はば、此問には、則ち答ふべからざるが如し。十四難も亦是の如し、但常滅を以て本と爲すが故に問ひ、常滅無きが故に佛は答へたまはず。是の如き等の種種の因縁の故に、佛十四難に答へたまはざるも咎無し。佛の處處に有我と説き、處處に無我と説きたまへるは、若し人、佛法の義を解して、假名を知る者には説きて有我と言ひ、若し人佛法の義を解せず、假名を知らざる者には無我と説きたまひしなり。復次に、佛は衆生の斷滅の見に墮せんと欲する者の爲には、「説きて我有り、後世の罪福を受く」と言ひ、若し人の常見に墮せんと欲する者には、爲に説きて、「我無く、作者、受者無く、是五衆の假名を離れて、更に一法として自在なる者無し」と言ふ。問うて曰はく、「若し爾らば何等をか實と爲す。」答へて曰はく、「無我は是れ實なり。法印の中に説くが如し。」一切の作法は無常なり、一切法は無我なり、寂滅は是れ安隱なり、涅槃の法印を名けて、諸法實相と爲す」と。若

し人善根未だ熟せず、智慧利からざれば、佛は爲に是深無我の法を説きたまはず、若し爲に説かば、衆生は則ち斷滅の見中に墮せん。問うて曰はく、「若し爾らば、迦葉の問の中に佛の説きたまへるが如くんば、「我も是れ一邊なり、無我も是れ一邊なり。此二邊を離るるを名けて中道と爲す」と。今云何が無我は是れ實にして、有我は方便説と爲すと言ふ。」答へて曰はく、「無我を説くに二種有り、一には無我の相を取りて無我に著す。二には我を破して取らず、無我にも亦著せず、無我をも自然に捨離す。先に説く無我の如きは、則ち是れ邊なり、後に説く無我は是れ中道なり。復次に、佛の有我無我を説きたまふに二の因縁有り、一には世俗の説を用ふるが故に有我、二には第一實相の説を用ふるが故に無我なり。是の如き等なれば有我、無我を説くも咎無し。佛は處處に諸法は有なりと説き、處處に諸法は無なりと説きたまへり。問うて曰はく、「有無を別説すべからず、有は即ち是れ有我、無は即ち是れ無我なり。何を以てか更に説く。」答へて曰はく、「然らず、佛法に二種の空有り、一には衆生空、二には法空なり。無我を説くは、衆生空を示し、法有ること無きを説くは、法空を示す。有我を説くは、假名の相を知りて、我に著せざる者に示し、無我を説くは、五衆の中に於て、我相に著する者の、是著我を破せんが爲の故に説く。但五衆有り、無常と苦と空と無我と寂滅涅槃と、是を有と名く、復次に、二種の斷見有り。一には後世に罪福の苦樂を受くる者無し。爲に我有り、今世より後世に至るまで、罪福の果報を受くと説く、一には一切法は、皆空にして著無し、是れ邪見なり。是衆生の爲の故に、一切の

法は有り、謂ゆる有爲、無爲法なりと説く。復次に、大利根ならざる衆生には、爲に無我と説き、利根深智の衆生には、諸法は本末空なりと説く。何を以ての故に。若し無我なれば、則ち諸法を捨すればなり。説くが如くんば、

若し無我を了知せる、是の如きの人有れば

法は有りと聞くも喜ばず、法は無くも亦憂へざるなり

我と説けば、一切法の所依止の處なり、若し無我と説けば、一切法の依止する所無し。

復次に、佛法に二種の説有り、若し了了の説は、一切諸法は空なりと言ひ、若し方便の説

は、則ち無我なりと言ふ。是二種の説法は、皆般若波羅蜜の相の中に入る。是を以ての故

に佛、經の中に説きたまはく、「涅槃の道に、趣くは皆同一向にして、異道有る無し」と。

復次に、我有り、法有りと、多く在家の者の爲に、父母、罪福、大小の業報有りと説く。

所以は何ん。在家の人は、多く涅槃を求めざるが故に、後果の報に著すればなり。出家人

の爲には、多く無我、無法を説く。所以は何ん。出家の人は、多く涅槃に向ふが故なり、

涅槃を求むる者は、一切法を受けざるが故なり。自然滅は是れ涅槃なり。復次に、人有り、

信等の諸根未だ成就せざるが故に、先づ所得有らんことを求め、然る後に能く捨す。是人

の爲の故に、佛は諸の善法を説きて、諸の惡法を捨てしめたまふ。人有り、信等の諸

根を成就せるが故に、諸法に於て所得有るを求めず、但生死の道を遠離せんを求む。是人

の爲の故に、佛は諸法は空にして、所有無しと説きたまふ。此二は皆實なり。無名指は亦

長く亦短し。中指を觀すれば即ち短く、小指を觀すれば則ち長く、長短皆實なるが如し。有と説き、無と説くも、亦是の如く、有と説くは、或時は是れ世俗、或時は是れ第一義なり。無と説くも、或時は是れ世俗、或時は是れ第一義なり。佛は是有我、無我は皆是れ實なりと説きたまへり。問うて曰はく、「若し是二事皆實ならば、佛は何を以ての故に、多く空を讚歎して、有を毀訾したまひしや。」答へて曰はく、「空にして所有無きは是れ十方諸佛、一切賢聖の法藏なり。般若波羅蜜、喝累品の中に説くが如し。般若波羅蜜は、是れ三世十方の諸佛の法藏なり。般若波羅蜜は即ち是れ無所有空なり」と。佛、或時、法有りと説きたまひしは、衆生を教化せんが爲の故なり。久しくして後、皆當に無所有法藏の中に入るべし。問うて曰はく、「若し爾らば、云何が般若波羅蜜の中に、若し五衆の空にして、所有無きを觀するは、是れ道に非ずと言ふ。」答へて曰はく、「是般若波羅蜜の中には、有無は皆無しと説く。」長爪梵志經の中に説くが如くんば三種の邪見有り。一には一切は有なり、二には一切は無なり、三には半有半無なり。佛、長爪梵志に告げたまはく、「一切有の見は、欲染の爲に瞋恚、愚癡の縛する所と爲り、一切無の見は、不染、不瞋、不癡の故に縛せざる所と爲り、半有半無の有は、上の有縛に同じく、無は上の無縛に同じ」と。三種の見の中に於て聖弟子は是念を作さく、「若し我一切有の見を受けば、則ち二人と共に諍ふ、謂ゆる一切無の者と、半有半無の者となり。若し我一切無の見を受けば、亦二人と共に諍ふ、謂ゆる一切有の者と、半有半無の者となり。若し我半有半無を受けば、亦二人と共に

【二六】身口意の無失と、身口意業は智慧に隨つて行ずと説くの差異に就いて。

【二七】以下佛は智慧を以て三世を知ること通達無礙なりといふに就いて

諍ふ、謂ゆる一切無の者と一切有の者と閑諍するが故に相諍り、相諍るが故に憊見を致し、是諍ひ諍り憊むが故に、は無の見を捨て、餘の見も亦受けず、受けざるが故に即ち道に入る」と。若し一切諸法の空相を取りて諍を起し、諸の結使を滅せず、是智慧に依止するは、と爲す。若し諸法の空相を取りて諍を起し、諸の結使を滅せず、是智慧に依止するは、是を實智に非すと爲す。佛の所説の如きは、衆生を度せんが爲の故に所説有り。是れ實ならざる無し。但衆生は中に於て、著不著有るが故に、實不實有り。是の如き種種の因縁の故に、佛の身口意業は過失有ること無し。是故に佛の身口意、先づ知りて、而る後智慧に隨うて行じたまふと説く。

【二八】問うて曰はく、「初に身に失無く口に失無く、念に失無しと説けると、今復身口意業は智慧に隨うて行ずと説く義と、何の差別か有る」と答へて曰はく、「先の三種は失無きも因縁を説かず、今は因縁を説く。智慧に隨うて行するが故に失せず、若し先づ籌量せずして、身口意業を起さば則ち失有り。佛は先づ智慧を以て身口意業を起したまふが故に失無し。復次に、佛は三種の淨業、三種の寂靜業、三の不護業を成就したまふ。有人疑うて、「佛は何の因縁もてか是の如き業を成就したまふ」と言ふ。是を以ての故に佛言はく、「我一切の身口意業は、先づ智慧を以てし、然る後に智慧に隨うて行す」と。

佛は智慧を以て、過去、未來、現在世を知りたまふこと通達無礙なりとは、此三種の智慧は、三世に於て通達無礙なるが故に、三業は智慧に隨うて行するなり。問うて曰はく、

「過去の諸法は、已に滅し、已に盡きて、復有る所無く、未來世の諸法は、今來らず、生ぜず、未だ和合せず、現在に、乃至一念の中にも、住する時無し、云何が能く三世を知りて、通達無礙ならん。答へて曰はく、「佛は、過去、未來、現在に、通達無礙なり」と説きたまへり、此言豈虚しからんや。復次に、若し過去未來無くして、但現在の一念の頃のみ有らば、佛は亦無量の功德を成就したまふを得ず。十種の智の如きは、是れ十力なり。是時、亦一心に十智有るを得ず。若し爾らば、佛は亦十力を具足したまふを得ず。是因縁を以ての故に、過去未來有るを知る。問うて曰はく、「若し過去、未來、現在皆有らば、何等か是れ無なる。佛は四諦を説き、苦諦に無常等の相を觀じたまふ。無常とは、生滅敗壞不可得に名く。若し過去の法、今實有らば、名けて無常敗壞不可得と爲さず。復次に、若し過去、未來、現在皆有らば、便ち常に墮す。何を以ての故に。是法は、未來世の中に在りて、定んで有らば、轉じて現在に來り、現在より轉じて過去に入ればなり。人の一房より一房に入るを、失人と名けざるが如し。答へて曰はく、「若し失せずんば何の咎か有る。問うて曰はく、「若し無常無くんば、無罪無福、無生無死、無縛無解ならん。罪を殺等の十不善道と名く。若し無常無くんば、殺等の罪無し、分別別見の中に説くが如し。刀は身に在ること、七分の中を過ぐれば、惱害する所無し」と。福を不殺等の十善道と名け、無常を分別生死と名く。若し無常無くんば、亦生死無く、亦縛も無く、亦解も無けん。是の如き等の無量の過咎有り。答へて曰はく、「諸法は三世の各々に相有り。過去の法は過去の相有り。

未來の法は未來の相有り、現在の法は現在の相有り。若し過去未來に、現在の相有らば、  
 應に是難有るべし。而も今は過去、未來、現在の各自に相有り。復次に、若し實に過去未  
 來無くんば、亦出家の律儀無けん。所以は何ん。若し現在惡心の中に住せば、過去に復滅  
 無し、是を比丘に非すと爲す。又賢聖の人も心、世俗の中に在れば、是時は應當に是れ凡  
 夫なるべし。過去、未來、現在の道無きが故に。是の如くならば、亦五逆等の諸罪無し、  
 所以は何ん。是五逆の罪業は已に過ぎ去り、死に及ぶの時地獄に入るべければなり。是五  
 逆の罪は未來に業無きが故に報無けん。現在の身は逆罪を爲さず、若し過去無ければ、即  
 ち逆罪無し、若し逆罪無ければ何ぞ餘罪有らん。福も亦是の如し。若し罪福無ければ是を  
 邪見と爲す、禽獸と異なる無し。復次に、我は過去未來は、現在の相の如くに有なりとは説  
 かず。我は過去は滅すと雖も、憶想を生じて、能く心と心數法とを生ずべきを説けり。昨  
 日の火滅して、今日は憶想念を生ずべく、憶想念を以ての故に、火は便ち有なるべからざ  
 るが如し。若し薪を積むを見て、當に火を燃すべきを知るも、亦心想の念を生ず。明日の  
 火も、過去の火の如く、今の心念の火を以て、火は便ち有なるべからず、未來世の事も亦、  
 是の如し。現在の心は、一念の時も住せずと雖も、相續して生ずるが故に、能く諸法を知  
 る。内には現在の意を以て因と爲し、外には諸法を以て縁と無し、是因縁の中に意識の用  
 を生ず。意識は自在にして過去、未來、現在の法を知り、但自ら現在の心數法を知らず、  
 餘は悉く知る。問うて曰はく、般若波羅蜜の如相品の中には、三世は一相なり、謂ゆる

無相なりと。云何が佛智慧は、三世に通達無礙なるを知ると言ふ。答へて曰はく、「諸佛に二種の説法有り。先づ諸法を分別して後、畢竟空を説きたまふ。若し三世の諸法に通達無礙なりと説くは、是れ分別の説なり。若し三世は一相無相なりと説くは、是れ畢竟空を説くなり。復次に、一切智人に非ずんば、三世の中の智慧に於て礙有り、乃至視世音、文殊師利、彌勒、舍利弗等の諸の賢聖は、三世の中に於て智慧皆礙有り。是因縁を以ての故に、佛の智慧は、三世の中に於て、通達無礙なりと説く。空事の爲の故には説くにあらず。復次に、有人三世の中に於て、邪見を生じて謂はく、「過去の法及び衆生は初有り、初無し」と。若し初有れば則ち新衆生有り。諸法も亦因無く、縁無くして生ぜん。若し初無くんば亦後無し。若し初無くんば後中無し、亦初無きは中有り後有りと名け、前後無きを初有り中有りと名け、後中無きを初有り後有りと名く。若し衆生及び諸法は、初無く亦中無く後無し、若し三世無ければ、則ち都て所有無し。復次に、若し初無ければ、云何が一切智人有らんと。是の如き等の邪見を破するが故に、三世の諸法は一相なり。謂ゆる無相なりと説く。三世を破するは佛智慧と爲さず。問うて曰はく、「無相は是を有邊と爲すや。」答へて曰はく、「若し無相なれば、即ち是れ無邊なり。説くべからず、難すべからざるの法を、云何が有邊と言はん。若し無相の中に相を取るは、是れ無相に非ず、は無相を名けて、不可得空と爲す。是中無相も亦不可得、空も亦不可得なり。是故に不可得空と名く。復次に、佛に二種の道有り。一には福徳道なり。人有り、佛の十力、四無所畏、四無礙智、十八不

【二八】迦旃延尼子  
のいふ十八不共法  
と此法との比較。

其法等を聞いて、恭敬信樂の心を生ず。二には智慧道なり。人有り、諸法は因縁和合して生ずるが故に、自性有ること無しと説くを聞きて、便ち諸法を捨離し、空の中に於て心著せず、月の能く物を潤し、日の能く物を熟し、二事の因縁の故に、萬物成就するが如し。福德道、智慧道も亦是の如く、福德道は能く諸の功德を生じ、智慧道は能く福德道の中に於て、諸の邪見の著を離る。是を以ての故に佛は諸法畢竟空なりと説くと雖も、亦三世に通達無礙なりと説くに而も咎無し。是の如き等は、略して佛の十八不共法の義を説けり。

【二八】問うて曰はく、『若し爾らば、迦旃延尼子は、何を以てか十力、四無所畏、大悲、三不共意止を言ひて、名けて十八不共法と爲す。若し前に説ける十八不共法は是れ眞義ならば、迦旃延尼子は何を以ての故に是の如く説く。』答へて曰はく、『是を以ての故に迦旃延尼子と名く。若し釋子は則ち是説を作さず。釋子の説は是れ眞の不法なり。佛法は無量なり。是三十六法は、佛法の中に於て大海の一滴の如し。法も亦少からず、何を以てか數を重ねて十八と爲さん。復次に、諸の阿羅漢、辟支佛、菩薩も亦能く是處不是處を知り、三世の業、果報、及び諸の禪定、乃至漏盡智等を分別す、云何が不共法と言はん。』  
問うて曰はく、『聲聞、辟支佛、菩薩は盡く知り、遍く知る能はず、但通明のみ有りて力有る無し。獨り佛のみ盡く知り、遍く知りたまふが故に不共と言ふ。十力の中に説くが如し。』答へて曰はく、『佛は十力の義を説くに、盡く知り、遍く知ると言はず、直に是

【九】別に分別する十八不共法の可否を明す。

處不是處を知ると言ふ。盡く知り、遍く知ると言ふは、是れ諸の論議師の説なり。」  
 問うて曰はく、「汝は先に自ら『摩訶衍經』の中の説は、佛自ら菩薩の爲の故に自ら盡く知り、遍く知るを説きたまふと言へり。答へて曰はく、『摩訶衍經』の中の説は何んが汝を益せん。汝は摩訶衍を信ぜず、以て證と爲すべからず。汝は自ら當に聲聞法を説きて證と爲すべし。復次に、十力の佛は盡く知り遍く知りたまふと雖も、而も聲聞、辟支佛も少分有り。十八不共法の中には始終すべて分無し、是を以ての故に眞の不共法と名く。問うて曰はく、『十八不共法』は、二乘も亦應に分有るべし。但佛は身口念に常に失無く、二乗の身口念も、亦失無き有り、是の如き等は皆應に分有るべし。』答へて曰はく、『然らず。所以は何ん。常に失無きが故に、名けて不共と爲す、失せざるを以て、不共と爲すにあらす。聲聞、辟支佛は常に失無きの中に於て分無し。復次に、諸の阿羅漢に力有りと言くも、處有る無し、不共法有りと説くも、汝は摩訶衍を信ぜざるが故に、眞の十八不共法を受けず、而も更に重ねて十力等を數ふ。是事は不可なり。汝が信する所の八十種好の如きは、而も三藏の中に無し、何を以てか更に説かざる。』  
 問うて曰はく、『我等は十八不共法を分別して重ねて數へざるなり。何等か十八なる。一には諸法の實相を知るが故に一切智と名け、二には佛の諸の功德相は解し難きが故に功德無量なり、三には深く心に衆生を愛念するが故に大悲と名く。四には無比智を得るが故に智慧の中に自在なり。五には善く心相を解するが故に定中に自在なり。六には衆生を度

する方便を得るが故に變化自在なり。七には善く諸法の因縁を知るが故に記別無量なり。  
 八には諸法の實相を説くが故に記別虚しからず、九には分別籌量して、説くが故に失無し  
 と言ふ。十には十力を成就するを得て、智慧滅する無し。十一には一切有爲法の中に但法  
 聚の無我を觀するが故に常に施捨を行す。十二には善く時と不時とを知る、三乘に安立し  
 て常に衆生を觀するが故なり。十三には常に一心なるが故に念を失せず。十四には無量阿  
 僧祇劫に善心を深くするが故に煩惱の習無し。十五には眞淨の智を得るが故に、能く法の  
 如くして、其失を出すこと有る無し。十六には世世に敬重せられ尊ばるるが故に、能く頂  
 を見ること無し。十七には大慈悲心を修するが故に安庠として足を下し、足の下柔軟にし  
 て、衆生の遇ふ者は即時に樂を得。十八には神通波羅蜜を得るが故に、衆生の心を轉じて  
 歡喜して得度せしむるが故に、入城の時の如きは神通力を現す。答へて曰はく、是の如き  
 十八不共法は三藏の中の説に非ず。亦諸餘の經にも説かざる所なり。有人是法を求索する  
 を以ての故に、諸の聲聞の論議師の輩、處處より撰集して佛の功德を讚す、言は失無く、  
 慧滅すること無く、念失せざるが如きは、皆摩訶衍の十八不共法の中より取れり。已に論  
 議を作りて頂を見る無く、足下柔軟なる有りて、是の如きこと甚だ多しと雖も、十八不  
 共法の中に有るべからず。不共法は皆智慧を以て義と爲す。佛身の力は、十萬の白香象の  
 力の如し、及び神通力等は皆説かず。是を以ての故に當に十八不共法の中には、但智慧功  
 徳等を説き、自然の果報の法を説かざるを知るべし。復次に、是十八不共法は、阿毘曇の

分別五衆に攝せんに、身口に失無く、身口は智慧に隨うて行ずるは、是を色衆に攝す。異  
 想無きは、是を想衆に攝す。不定心無きは、是を識衆に攝す。餘は行衆に攝し、皆四禪の  
 中に在り。佛は四禪の中に道を得、涅槃を得たまふが故なり。有人言はく、四色不共法は  
 色界と欲界の中に攝し、餘は九地の中に攝す。皆是れ善、皆是れ無漏法なり。四色法は二  
 縁もて生ず、因縁と増上縁なり。餘殘の四は縁生なり。四は縁無く、十四は縁有るなり。  
 四の隨心行は心と相應せず、十三は心と相應す。亦隨心行の一は心と相應せず、亦不隨心  
 行なり。是の如き等の種種は、阿毘曇の中に分別して説けり。初是の如く分別して、般若  
 波羅蜜の諸法實相の中に入るに盡く皆一相なり。謂ゆる無相なり、佛心に入れば、皆  
 一寂滅相なり。

大智度論釋初品大慈大悲義第四十二 卷第二十七

聖者龍樹造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

【一】以下大慈大悲にして等の文を釋す中、大慈大悲を解す。

大慈大悲にして、當に般若波羅蜜を習行すべし。

大慈大悲は、四無量心の中に已に分別せり、今當に更に略して説くべし。大慈は一切衆生に樂を與へ、大悲は一切衆生の苦を抜く。大慈は喜樂の因縁を以て、衆生に與へ、大悲は苦を離るるの因縁を以て、衆生に與ふ。譬へば有人の諸子、牢獄に繫在して、當に大罪を受くべく、其父慈憫し、若干の方便を以て、苦免るるを得しむるが如きは、是れ大悲なり、苦を離るるを得じりて、五の欲する所を以て諸子に給與するは是れ大慈なり、是の如き等の種種の差別有り。問うて曰はく、「大慈大悲は是の如し、何等か是れ小慈小悲にして、此小に因りて名けて大と爲す。」答へて曰はく、「四無量心の中の慈悲を名けて小と爲す。此中の十八不共法は次第に説く。大慈悲を名けて大と爲す。復次に、諸佛の心中の慈悲を名けて大と爲し、餘人の心中を名けて小と爲す。」問うて曰はく、「若し爾らば何を以てか菩薩は大慈大悲を行すと云ふ。」答へて曰はく、「菩薩の大慈は、佛に於ては小と爲し、二乘に於ては大と爲す、此は是れ假名を大と爲す。佛の大慈大悲は、眞實に最大なり。復次

に、小慈は但心に念じて、衆生に樂を與へ、實には樂事無し。小悲は衆生の種種の身苦、心苦を觀じて、憐愍するのみに名け、脱せしむる能はず。大慈は衆生に樂を得しめんと念じ、亦樂事を與ふ。大悲は衆生の苦を憐愍して、亦能く苦を脱せしむ。復次に、凡夫人、解脫、辟支佛、菩薩の慈悲を名けて小と爲し、諸佛の慈悲を乃ち名けて大と爲す。復次に、大慈は大人の心中より生じ、十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法は、大法の中より出でて能く三惡道の大苦を破り、能く三種の大樂なる、天の樂、人の樂、涅槃の樂を與ふ。復次に、是大慈は遍く十方三世の衆生、乃至昆虫に滿ち、慈は骨髓に徹し、心は若し三千大千世界の衆生の三惡道に墮するを捨離せず。若し人の一に替代りて具苦を受け、苦を脱するを得しめ已りて、五の所欲の樂、禪定の樂、世間最上の樂を以て自ら恣に之を與へて、皆満足せしむるも、佛の慈悲に比すれば千萬分の中の一にも及ばず。何を以ての故に、世間の樂は欺誑不實にして生死を離れざるが故に。問うて曰はく、法は佛心中に在りて一切皆大なり。何を以ての故に、但慈悲のみを大と爲すと説く。答へて曰はく、佛の所有したまふ功德法は、應に皆大なるべきが故に。

【二】慈悲を大と名くるに就いて。

問うて曰はく、若し爾らば、何を以てか慈悲のみを説きて大と爲す。答へて曰はく、慈悲は是れ佛道の根本なり。所以は何ん。菩薩は衆生の老病死の苦、身苦、心苦、今世後世の苦等の諸苦、所惱を見て大慈悲を生じ、是の如きの苦を救うて、然る後に發心して、阿耨多羅三藐三菩提を求む。亦大慈悲力を以ての故に、無量阿僧祇世の生死の中に於て心厭

没せず、大慈悲力を以ての故に、久しくして涅槃を得べくして而も證を取らず。是を以ての故に一切諸佛の法の中に於て慈悲を大と爲す。若し大慈大悲無ければ便ち早く涅槃に入るなり。復次に、佛道を得る時、無量甚深の禪定、解脱、諸の三昧を成就し、清淨の樂を生ずるも、棄捨して受けず、聚落城邑の中に入りて、種種の譬喩因縁もて説法し、其身を變現し、無量の音聲もて一切を將迎し、諸の衆生の罵詈誶を忍び、乃至自ら伎樂を作す、皆是れ大慈大悲の力なり。復次に、大慈大悲の大の名は、佛の作る所に非ず、衆生之に名けたるなり。譬へば師子の大力の如きは、自ら力大なりと言はず、皆是れ衆獸の之に名くるなり。衆生は佛の種種の妙法を聞き、佛は衆生を祐け利せんが爲の故に、無量阿僧祇劫に於て、行じ難きを能く行じたまふを知る。衆生は是事を聞見し、此法を名けて大慈大悲と爲す。譬へば一人に二の親友有り、罪事の因縁を以ての故に、之を罔罔に繋ぐに、一人は須ふる所を供給し、一人は代りて死するに、衆人は能く死に代る者を言ひて、是を大慈悲と爲すが如し。佛も亦是の如し、世世に一切衆生の爲の故に、頭目髓腦を盡く以て布施し、是事を聞見して、即ち共に之を名けて大慈大悲と爲す。尸毘王の如きは、鶴を救はんが爲の故に、盡く身肉を以てして、之に代ふるに猶鶴と等しからず。復手を以て稱に攀ぢ、身を以て之に代らんと欲す。是時、地は爲に六種に震動し、海水波盪し、諸天は香華もて王に供養し、衆生は稱へて言はく、「一小鳥の爲に感ずる所、乃ち爾なり。眞に是れ大慈大悲なり」と。佛は衆生の名くる所に因るが故に大慈大悲と言ふ。是の如き等の

【捨相】心平等に  
 して執着なきをい  
 ふ。  
 【遠離相】一切の  
 事相繫縛を脱する  
 をいふ。

無量は、『木生經』の中に、悉く應に廣く説くべし。問うて曰はく、『禪定等の諸餘の功德は、人知らざるが故に、名けて大と爲さず。智慧說法等は能く人をして道を得しむ、何を以てか稱して大と言はざる。答へて曰はく、『佛の智慧の能くする所は、遍く知る者有る無し。大慈大悲の故に、世世に身命を惜まず、禪定の樂を捨てて、衆生を救護したまふは人皆之を知る。佛の智慧に於て比類して知るべく、了了に知る能はず。慈悲心は眼に見、耳に聞き、處處に變化して、大師子吼したまふ、是故に知るべし。復次に佛の智慧は細妙なり。諸の菩薩、舍利弗等すら、尙知る能はず、何に況んや餘人をや。慈悲の相は眼に見、耳に聞くべきが故に、人能く信受す、智慧は深妙にして測り知るべからず。復次に、是大慈大悲は、一切衆生の愛樂する所なり。譬へば美樂の如きは、人の服せんと樂ふ所なり。智慧は苦樂を服するが如く、人多く樂はず、人多く樂ふが故に、慈悲を稱して大と爲す。復次に、智慧は得道の人乃ち能く信受し、大慈大悲の相は、一切の雜類皆能く信を生ず。像を見、若し説を聞くが如きは、皆能く信受し、饒益する所多し。故に名けて大慈大悲と爲す。復次に、大智慧を捨相、遠離相と名け、大慈大悲を憐愍利益相と爲す。是憐愍利益の法は、一切衆生の愛樂する所なり。是を以ての故に名けて大と爲す。是大慈大悲は、『持心經』の中に説くが如し。大慈大悲に三十二種有り、衆生の中に於て行す。是大慈大悲の攝相の縁は、四無量心の説の如し。復次に、佛の大慈大悲等の功德は一切に應ぜず、迦旃延の法の中に、分別して其相を求むるが如し。

【三】佛の大慈悲を有爲法となすを破す。

(三) 上の諸の論議師は、迦旃延の法を用ひて、分別顯示すと雖も、盡く信受すべからず。所以は何ん。迦旃延は、「大慈大悲、一切の智慧は是れ有漏法、繫法、世間法なり」と説けども、是事は爾らざればなり。何を以ての故に。大慈大悲を名けて、一切佛法の根本と爲せばなり。云何が是を有漏法、繫法、世間法と言ふべき。問うて曰はく、「大慈悲は是れ佛法の根本なり」と雖も、故是れ有漏なり。淤泥の中より蓮華を生ずるに、泥も亦妙なるべしと、言ふを得ざるが如し。大慈大悲も亦是の如し、是は佛法の根本なり」と雖も、是無漏なるべからず。「答へて曰はく、「菩薩の未だ佛を得ざる時の大慈悲を、若し有漏と言はば其失尚可なり。今佛は無礙解脱智を得たまふが故に、一切の諸法は皆清淨にして、一切の煩惱及び習は盡したまふ。聲聞、辟支佛は無礙解脱智を得ざるが故に、煩惱の習盡きず、處處の中の疑を斷ぜざるが故に、心應に有漏なるべし。諸佛には是事無し。何を以ての故に佛の大慈悲は、應に是れ有漏なるべしと説かんや。問うて曰はく、「我敢て敬せざるにあらざれど、佛は慈悲心を以て衆生の爲の故に生ず、應に是れ有漏なるべし。答へて曰はく、「諸佛の力勢は不可思議なり。諸の聲聞、辟支佛は衆生相を離るる能はずして慈悲を生ず、諸佛は能く衆生相を離れて而も慈悲を生じたまふ。所以は何ん。諸の阿羅漢、辟支佛の如きは、十方の衆生の相は得べからざるに、而も衆生相を取りて慈悲を生ず、今諸佛は、十方に衆生を求むれども得べからず、亦衆生相を取らずして、而も能く慈悲を生じたまへばなり。『無盡意經』の中に説くが如し。三種の慈悲有り、衆生縁、法縁、無縁なり」

と。復次に、一切衆生の中に、唯佛のみ盡く不誑法を行じたまふ。若し佛、衆生の中に於て、相を取りて、而も慈悲心を行ぜば、不誑法を行すと名けず。何を以ての故に。衆生は畢竟不可得なるが故に。聲聞、辟支佛は、名けて盡く不誑法を行すと爲さず、故に聲聞、辟支佛は、衆生に於ても法に於ても、若し相を取るも、若し相を取らざるも、應に難すべからず、其は悉く不誑法を行ぜざるが故に。一切智もて能く一切の諸漏を斷じ、能く一切有漏法の中より出でて、能く無漏の因縁を作す、是法は云何が自ら是れ有漏ならん。問うて曰はく、「無漏智は各各所縁有りて、能く悉く一切法を緣する者有る無し。唯世俗智のみ有りて能く一切法を緣す。是を以ての故に一切智は、是れ有漏相なりと説く。」答へて曰はく、「汝が法中には是説有らんも、佛法の中の所説に非ず。人の自ら斗を持して市に入るに、官斗と相應せざれば、人の用ふる者無きが如し。汝も亦是の如し、自ら汝が法を用ひて佛法と相應せず、人の用ふる者無し。無漏の智慧何を以ての故に一切法を緣する能はざらんや。有漏智は、是れ假名虚誑、勢力少きが故に、眞實に一切法を緣すべからず、汝が法中には、自ら能く一切法を緣すと説く。復次に、是聲聞法の中に十智有り。摩訶衍法の中に十一智有り、名けて如實相智と爲す。是十智は、是如實智の中に入れれば、都て一智と爲る、謂ゆる無漏智なり。十方の水、大海水の中に入れれば、都て一味と爲るが如し。是大慈大悲は、佛の三昧王三昧、師子遊戲三昧に攝する所なり。是の如く略して大悲の義を説けり。

【四】以下道慧を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を修行すべし。菩薩摩訶薩、道慧を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を修行すべし。道慧を釋す中、初に道慧を明し、道の名數を擧ぐ。

【釋】菩薩摩訶薩、道慧を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を修行すべし。菩薩摩訶薩、道慧を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を修行すべし。菩薩摩訶薩、道慧を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を修行すべし。

【釋】道を一道に名く。一向に涅槃に趣き、善法の中に於て一心に不放逸ならば、道は身念に隨ふ。道に復二道有り。惡道と善道、世間道と出世間道、定道と慧道、有漏道と無漏道、見道と修道、學道と無學道、信行道と法行道、向道と果道、無礙道と解脫道、信解道と見

得道、慧解脫道と俱解脫道なり。是の如き無量の二道門有り。復三道有り。地獄道、畜生道、餓鬼道なり。三種の地獄有り、熱地獄、寒地獄、黑闇地獄なり。三種の畜生道有り。

地行、水行、空行なり。三種の鬼道有り。餓鬼、食不淨鬼、神鬼なり。三種の善道有り。人道、天道、涅槃道なり。人に三種有り。罪を作る者、福を作す者、涅槃を求むる者なり。

復三種の人有り。欲を受け惡を行する者、欲を受け惡を行せざる者、欲を受け惡を行せざる者なり。天に三種有り。欲天、色天、無色天なり。涅槃道に三種有り。聲聞道、辟支

佛道、佛道なり。聲聞道に三種有り。學道、無學道、非學非無學道なり。辟支佛道も亦是の如し。佛道に三種有り。波羅蜜道、方便道、淨世界道なり。佛に亦復三道有り。初發意

道、行諸善道、成就衆生道なり。復三道有り。戒道、定道、慧道なり。是の如き等の無量の三道門有り。復四種の道有り。凡夫道、聲聞道、辟支佛道、佛道なり。復四種の道有

り。聲聞道、辟支佛道、菩薩道、佛道なり。聲聞道に四種有り。苦道、集道、滅道、道道なり。復四の沙門果道有り。復四種の道有り。觀身實相道、觀受心法實相道なり。復四種

なり。復四の沙門果道有り。復四種の道有り。觀身實相道、觀受心法實相道なり。復四種

の道有り。未生の惡不善を斷ぜしめ、生ぜざらしむるの道、已生の惡を斷ぜしめて、疾に減せしむるの道、未生の善法をして生ぜしむるの道、已生の善法をして増長せしむるの道なり。復四種の道有り、欲増上道、精進増上道、心増上道、慧増上道なり。復四の聖種、道有り、衣、食、臥具、醫藥を擇ばず、樂んで苦を斷ずるを修する定なり。復四行道有り。苦難道、苦易道、樂難道、樂易道なり。復四修道有り。一には今世の爲に樂んで修する道、二には生死の智を修する道、三には漏を盡さんが爲の故に修する道、四には分別の慧を修する道なり。復四天道有り、謂ゆる四禪なり。復四種の道有り、天道、梵道、聖道、佛道なり。是の如き等の無量の四道の門有り。復五種の道有り、地獄道、畜生、餓鬼、人、天道なり。復五無學衆道有り。無學戒衆道、乃至無學解脫知見衆道なり。復五種の淨居天道有り。復五治道有り。復五如法語道有り。復五非法語道有り。復五道有り。凡夫道、聲聞道、辟支佛道、菩薩道、佛道なり。復五道有り、色法を分別するの道、心法を分別するの道、心數を分別するの道、心不相應行を分別するの道、無爲法を分別するの道なり。復五種の道有り。苦諦所斷道、集諦所斷道、滅諦所斷道、道諦所斷道、思惟所斷道なり。是の如き等の無量の五法道門有り。復六種の道有り。地獄道、畜生、餓鬼、人、天、阿修羅道なり。復捨六塵道有り。復六和合と云ふ道、六神通道、六種阿羅漢道、六地修道、六定道、六波羅蜜道有り。一一の波羅蜜の各各に六道有り、是の如き等の無量の六道門有り。復七道有り、七覺意道、七地無漏道、七想定道、七淨道、七善人道、七財福道、七法福道、

【五】次に道種慧を明す。

七助定道なり。是の如き等の無量の七道門有り。復八道有り、八正道、八解脱道、八背捨道なり。是の如き等の無量の八道門有り。復九道有り、九次第道、九地無漏道、九見斷道、九阿羅漢道、九菩薩道なり。謂ゆる六波羅蜜の方便もて、衆生を成就せる淨佛世界なり。是の如き等の無量の九道門有り。復十道有り。謂ゆる十無學道、十想道、十智道、十一切處道、十不善道、十善道なり。乃至一百六十二道有り。是の如き等の無量の道門有り。是の如きの諸の道を知り、盡く知り遍く知る、是を道種慧と爲す。

(五) 問うて曰はく、「般若波羅蜜は是れ菩薩の第一道なり、一相なり、謂ゆる無相なり。何を以てか是種種の道を説く。」答へて曰はく、「是道は皆一道の中に入る。謂ゆる諸法實相なり。初學に種種の別有るも、後皆同一にして差別有る無し。譬へば劫盡きて焼くる時は、一切の所有皆虚空に同じきが如し。復次に、衆生を引導するが爲の故に、菩薩は分別して是種種の道を説く。謂ゆる世間道、出世間道等なり。」問うて曰はく、「云何が菩薩は一相無相の中に住して、是は世間道なり、是は出世間道なりと分別するや。」答へて曰はく、「世間の名は、但顛倒の憶想と虚誑の二法より生じ、幻の如く夢の如く轉火輪の如し。凡夫人は強ひて以て世間と爲す。是世間は皆虚妄の中より來る。今も亦虚妄、本も亦虚妄なり。其實は無生無作にして、但内外の、六情と六塵と和合する因縁より生ず。凡夫の著する所に隨ふが故に、爲に世間と説く。是世間の種種の別見は、羅網すること亂糸の相の如く、著すれば常に生死の中に往來す、是の如く世間を知るなり。何等か是れ出世間道なる。如實に

世間を知るは即ち是れ出世間道なり。所以は何ん。智者は、世間出世間を求むるに、二事は不可得なればなり。若し不可得なれば、當に假に名けて、世間出世間と爲すを知るべし。但世間を破せんが爲の故に、出世間を説くのみ。世間の相は即ち是れ出世間にして、更に所として復有ること無し。所以は何ん。世間の相は得べからず、是世間是出世間の相は、常に空にして、世間法の定相は不可得なるが故に。是の如く行者は世間をも得ず、亦出世間にも著せず。若し世間をも得ず、亦出世間にも著せざれば、愛慢を破するが故に、世間と共に諍はず。何を以ての故に。行者は、久しく世間の空にして所有無く、虚誑なるを知るが故に、憶想分別を作さざればなり。世間を五衆と名く。五衆の相は、假令十方の諸佛之を求むれども、亦不可得にして來處無く、住處無く、亦去處無し。若し五衆の來、住、去の相を得ざれば、即ち是れ出世間なり。行者は爾時、是世間、出世間を觀するに實に見るべからず、世間の出世間と合するを見ず、亦出世間の世間と合するを見ず。世間を離れて亦出世間を見ず、出世間を離れて亦世間を見ず。是の如くなれば、則ち二識を生せず。謂ゆる「世間、出世間なり」と。若し世間を捨て、出世間を受けざる、是を出世間と名く。若し菩薩能く是の如く知れば、則ち能く衆生の世間、出世間道を分別すと爲す。有漏、無漏、一切の諸道も、亦是の如く、一相に入る、是を道種慧と名く。

道種慧を以て、一切智を具足せんと欲せば、當に般若波羅蜜を修行すべし。一切智を以て一切種智を具足せんと欲せば、當に般若波羅蜜を修行すべし。

【六】以下道種慧を以て等の文を釋す中、初に一切智と一切種智の差別を明す。

問うて曰はく、「一切智と一切種智と何の差別か有る。答へて曰はく、「有人言はく、「差別無し、或時は一切智と言ひ、或時は一切種智と言ふ」と。有人言はく、「總相は是れ一切智にして、別相は是れ一切種智なり」と。因は是れ一切智にして、果は是れ一切種智なり。略説は一切智にして、廣説は一切種智なり。一切智は總じて一切法中の無明の闇を破り、一切種智は種種の法門を觀じて諸の無明を破す、一切智は譬へば四諦を説くが如く、一切種智は譬へば四諦の義を説くが如し。一切智とは生苦を説くが如く、一切種智とは八苦の相を説くが如し。一切智とは生苦を説くが如く、一切種智とは種種の衆生の處處に生を受くるを説くが如し。復次に、一切法を眼色乃至意法と名く。是諸の阿羅漢辟支佛は、亦能く總相は、無常、苦、空、無我なり等と知る。是十二入を知るが故に、名けて一切智と爲す。聲聞辟支佛すら尙盡く別相を知る能はず、一衆生の生處、好醜、事業、多少、未來、現在世も亦是の如し、何に況んや一切衆生をや。一閻浮提中の金の名字の如きすら、尙知る能はず、何に況んや三千大千世界の一物中の種種の名字の、若は天語、若は龍語、是の如き等の種種の語言に於てをや。金と名くるすら尙知る能はず、何に況んや金の因縁、生處、好惡、貴賤を知らんや。因りて福を得、因りて罪を得、因りて道を得、是の如き現事すら、尙知る能はず、何に況んや心數法、謂ゆる禪定智慧等の諸法をや。佛は盡く諸法の總相、別相を知りたまふが故に、名けて一切種智と爲す。復次に、後品の中に、佛は自ら、「一切智は是れ聲聞、辟支佛の事、道智は是れ諸の菩薩の事、一切種智は是れ佛

【七】次に一切智を得といふを釋す

事なり。聲聞、辟支佛は、但總の一切智のみ有り、一切種智有る無し」と説きたまふ。復次に、聲聞、辟支佛は、別相に於て分有り」と雖も、而も盡く知る能はざるが故に、總想の名を受く。佛の一切智、一切種智は、皆是れ眞實なり。聲聞、辟支佛は但名字のみ有り。一切智は譬へば畫の燈の但燈の名のみ有りて、燈の用有る無きが如し。聲聞、辟支佛の如きは、若し人有り、問難するに、或時は悉く答ふる能はず、疑を斷ずる能はず。佛の三問に、舍利弗が、答ふる能はざるが如し。若し一切智行らば、云何が答ふる能はざらん。是を以ての故に但一切智の名のみ有り、凡夫に勝るも實有る無きなり。是故に佛は是れ實の一切智、一切種智にして、是の如き無量の名字有り。或時は佛を名けて、一切智人と爲し、或時は名けて、一切種智の人と爲す。是の如き等は、略して一切智と一切種智との種種の差別を説けり。

問うて曰はく、「經中に説くが如くんば、六波羅蜜、三十七品、十力、四無所畏等の諸法を行じて、一切智を得といふ。何を以ての故に、此中には但道種智のみを用ひて、一切智を得と説く。」答へて曰はく、「汝が説く所の六波羅蜜等は即ち是れ道なり。是道を知り是道を行じて一切智を得。何の疑ふ所か有らん。復次に、初發心より乃至道場に坐するまで、其中間に於ける一切の善法は、盡く名けて道と爲す。此道の中に分別思惟して行する、是を道智と名く。此經の後に説くが如き道智は、是れ菩薩の事なり。」問うて曰はく、「佛道の事に備るが故に、道智と名けず、阿羅漢、辟支佛は、諸の功

【八】次に一切智の知る一切法を明す。

徳未だ備はらず、何を以てか道智と名けざる。答へて曰はく、「阿羅漢、辟支佛道は、自ら所行に於ても亦辦す。是故に道智と名けず。道は是れ行相なるが故に。復次に、此經の中に聲聞、辟支佛を説くも、聲聞の中に三道を攝せざるが故に此中に説かず。佛道は大なるが故に、名けて道智と爲し、聲聞、辟支佛道は、小なるが故に道智と名けず。復次に菩薩摩訶薩は自ら道を行じ、亦衆生の各各に所行の道を示す。是を以ての故に説いて、菩薩は道智を行じて、一切智を得と名く。

問うて曰はく、「何等か是れ一切智の知る所の一切法なる。答へて曰はく、「佛、諸の比丘に告げたまふが如し。「汝が爲に一切法を説かん。何等か是れ一切法なる。謂ゆる眼と色と、耳と聲と、鼻と香と、舌と味と、身と觸と、意と法となり、是十二入を一切法と名く」と。復一切法有り、佛、利衆經一の中の偈に説きたまふが如し。

若し眞觀を求めんと欲せば、但名と色と有り  
若し眞知を審かにせんと欲せば、亦當に名色を知るべし  
癡心、多想と雖も、諸法を分別するに  
更に異事有りて、名色を出づる者無し

復次に、一切法とは、謂ゆる色と無色法、可見と不可見、有對と無對、有漏と無漏、有爲と無爲、心と非心、心相應と非心相應、共心生と不共心生、隨心行と不隨心行、從心因と不從心因、是の如き等の無量の二法門に一切法を攝す。阿毘曇攝法品の中に説くが如

し。復次に、一切法は、謂ゆる善法と不善法と無記法、見諦所斷と思惟所斷と不斷法、有報法と無報法と非有報非無報法、是の如き等の無量の三法門に一切法を攝す。復次に、一切法は、謂ゆる過去法と未來法と現在法と非過去未來現在法、欲界繫法と色界繫法と無色界繫法、不繫法と從善因法と從不善因法と從無記因法と從非善非不善非無記因法、有緣緣法と無緣緣法と有緣緣亦無緣緣法と非有緣緣亦無緣緣法、是の如き等の無量の四法門に、一切法を攝す。復次に、一切法は、謂ゆる色法と、心法と、心數法と、心不相應の諸行法と、無爲法、四諦及び無記無爲と、是の如き等の無量の五法門に、一切法を攝す。復次に、一切法は謂ゆる五衆と及び無爲、苦諦所斷の法と、集諦と、滅諦と、道諦と、思惟所斷の法と、不斷法と、是の如き等の無量の六法門に一切法を攝す。七八九十等の諸の法門は、是れ阿毘曇に義を分別せり。復次に、一切法は謂ゆる有法、無法、空法、實法、所緣法、能緣法、聚法、散法等なり。復次に、一切法は、謂ゆる有法、無法、亦有亦無法、空法、實法、非空非實法、所緣法、能緣法、非所緣非能緣法なり。復次に、一切法は謂ゆる有法、無法、亦有亦無法、非有非無法、空法、不容法、空不容法、非空非不容法、生法、滅法、生滅法、非生非滅法。不生不滅法、非不生非不滅法、不生不滅亦非不生非不滅法、非不生非不滅亦非不生非不滅法なり。復次に、一切法は謂ゆる有法、無法、有無法、非有非無法の是四句を捨す。法空、不空、生滅、不生、不滅の五句も皆亦是の如し。是の如き等の、種種無量阿僧祇の法門に、攝する所の諸法を、是無礙の智慧を以て、盡く遍く上

【九】次に佛のみ一切智を得たまふ理由を擧ぐ。

の諸法を知るを名けて、一切智、一切種智と爲す。

問うて曰はく、「一切衆生は皆智慧を求む、云何が獨り佛一人のみ一切智を得たまふ。」答へて曰はく、「佛は一切衆生の中に於て、第一なるが故に、獨り一切智を得たまふ。佛の説きたまふ所の如し。無足、二足、四足、多足、有色、無色、有想、無想、非有想、非無想等の一切の衆生の中、佛は最も第一なり。譬へば須彌山の衆山の中に於て、自然に最も第一なるが如く、四大の中、火は最も有力にして能く照し、能く焼くが如し。佛も亦是の如し、一切衆生の中に於て最も第一なるが故に、一切智を得るなり」と。問うて曰はく、「佛は何を以てか一切衆生に於て、獨り最も第一なる。」答へて曰はく、「先に答ふるが如く、一切智を得たまふが故なり。今當に更に説くべし。佛は自ら利益し、亦他を利益したまふが故に、衆生の中に於て最も第一なり。一切の照中に日を第一と爲すが如し。一切の人中に於ては、轉輪聖王最も第一なり、一切の蓮華の中に於ては、青蓮華を第一と爲す。一切の陸に生ずる華にては須曼色第一なり。一切の木香の中には牛頭栴檀を第一と爲し、一切の珠の中には、如意珠を第一と爲し、一切の戒の中には、聖戒を第一と爲し、一切の解脱の中には、不壞解脱を最も第一と爲し、一切の清淨の中には、解脱を第一と爲し、一切の諦の中には、空觀を第一と爲し、一切諸法の中には、涅槃を第一と爲す。是の如き等の無量は各各第一なり。佛も亦是の如し、一切衆生の中に於て最も第一と爲す。最も第一爲るが故に、獨り一切智を得たまふ。復次に、佛は初發意より大誓を以

【薩婆若多】サル  
ワジュニヤータ  
(Suvāhita) 一切  
智相と譯す。

て、一切衰没の衆生を莊嚴し、拯濟せんと欲するが故に、盡く遍く諸の善道を行じ、善として集めざる無く、苦として行ぜざる無く、皆一切諸佛の功徳を集めたまふ。是の如き等の種種無量の因縁の故に、佛は一切衆生の中に於て獨り第一なり。問うて曰はく、「三十方の諸佛も亦是功徳有り。何を以ての故に、佛のみ獨り第一なりと言ふ。」答へて曰はく、「諸佛を除きて、餘の衆生の爲の故に、佛のみ獨り第一なりと言ふ。諸佛は等しく第一の功徳有るなり。復次に、薩婆若多とは、薩婆は秦に一切と言ひ、若は秦に智と言ひ、多は秦に相と言ふ。一切は先に説くが如く、名色等の諸法なり。佛は是一切法の一相、異相、漏相、非漏相、作相、非作相等の一切法の各々の相、各々の力、各々の因縁、各々の果報、各々の性、各々の得、各々の失を知りたまふ。一切智慧力の故に一切世、一切種を盡く遍く解知したまふ。是を以ての故に「道種智を以て、具足して一切種智を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし。一切智を以て一切種智を具足せんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし」と説くなり。

問うて曰はく、「佛の佛道を得たまふ時の如きは、道智を以て、一切智一切種智を具足するを得たまふ。今何を以てか一切智を以て、一切種智を具足するを得たまふと言ふ。」答へて曰はく、「佛の道を得たまふ時は、道智を以て具足して一切智を得、一切種智を具足するを得たまふと雖も、未だ一切種智を用ひたまはず。大國王の位を得る時、境土、寶藏、皆已に得るも、但未だ開き用ひざるが如し。」

【二〇】以下一切種智を以て、初の文を釋す中、初に一切種智もて煩惱を斷ずといふを明す。

【二一】次に煩惱の習を斷ずといふを明す。

【二二】一切種智を以て煩惱の習を斷ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべし。舍利弗、菩薩摩訶薩は應に是の如く般若波羅蜜を學すべし。

問うて曰はく、「一心の中に一切智、一切種智を得て、一切煩惱の習を斷ず、今云何が一切智を以て、具足して一切種智を得、一切種智を以て煩惱の習を斷ずと言ふ。」答へて曰はく、「實には一切を一時に得、此中には人をして、般若波羅蜜を信ぜしめんが爲の故に、次第に差して品を説き、衆生をして清淨心を得しめんと欲す。是故に是の如く説く。復次に、一心中に得と雖も、亦初中後の次第有り。一心に三相有りて、生は住に因縁たり、住は滅に因縁たるが如く、又心心數法、不相應諸行、及び身業、口業の如し。道智を以て一切智を具足し、一切種智を以て一切種智を具足し、一切種智を以て煩惱の習を斷ずるも亦是の如し。先に一切種智は即ち是れ一切智なり、道智は金剛三昧に名くと説けり。佛には初心より即ち一切智、一切種智有り、是時煩惱の習を斷じたまふ。一切智、一切種智の相は先に已に説けり。

一切煩惱の習を斷ずとは、煩惱の名は、略説すれば則ち三毒なり。廣説すれば則ち三界の九十八使なり。是を煩惱と名く。煩惱の習とは煩惱の殘氣に名く。若は身業口業の智慧に隨はずして、煩惱より起るに似たり。他心を知らずとは、其起る所を見て、不淨心を起す、是れ實の煩惱に非ず。久習の煩惱なるが故に、是の如きの業を起す。譬へば、久しく脚に鎖せる人は、卒に解脱を得て行く時、鎖有ること無しと雖も、猶習在る有るが如く、

乳母の衣は、久しきが故に垢著き、淳灰を以て淨く洗げば、垢有る無しと雖も、垢氣尙衣に在るが如し。聖人の心垢も亦是の如し、諸の煩惱の如きは、智慧の水を以て洗ぐと雖も、煩惱の垢は尙在り、是の如きは、諸餘の賢聖は能く煩惱を斷ずと雖も、習を斷ずる能はず、難陀の如きは、姪欲の習有るが故に、阿羅漢道を得と雖も、男女の大衆の中に於て坐するに、眼先づ女衆を視て與に言語し説法す。舍利弗の如きは瞋の習の故に、佛の「舍利弗は不淨食を食せり」と言ふを聞いて、即便食を吐きて、終に復請を受けず。又舍利弗は自ら例を説いて言はく、

罪に覆はれ妄念ある人は、無智にして懈怠なり

終に此をして妄に來りて、我に近づきて住せしむるを欲せず

摩訶迦葉の如きは瞋の習有るが故に、佛の滅度の後に集法の時、勅して阿難をして六の突吉羅を懺悔せしめ、而して復自ら阿難の手を牽きて、出して、「汝は漏未だ盡きざる不淨の人なり、畢法を共にせず」と。畢陵伽婆蹉の如きは常に怖神を罵りて小婢と爲す。摩頭婆和陀の如きは、跳戲の習有るが故に、或時は衣枷より躍りて梁に上り、梁より杵に至り杵より闇に至る。橋梵鉢提の如きは、牛の業習有るが故に常に、食を吐きて呵む。是の如き等の諸の聖人は、漏を盡すと雖も、而も煩惱の習有り、火の薪を焚き已りて灰炭猶在るも、火力薄きが故に盡きしむる能はざるが如し。若し劫盡くる時は火は、三千大千世界を燒きて復遺餘無し、火力大なるが故なり。佛の一切智の火も亦是の如し、諸の煩惱を

【突吉羅】ツシユ  
クリタ(Dusita)  
悪作と翻す、戒律  
を犯せる罪名。

燒きて復殘習無し。一婆羅門の如きは、五百種の悪口を以て、衆中に佛を罵るに、佛は  
 異色無く、亦異心無し。此婆羅門は心伏し、還りて五百種の語を以て佛を讚するに、佛は  
 喜色無く、亦悦心無く、此毀譽に於て、心色變する無し。又復梅遮婆羅門女が、杆を帶し  
 て佛を誘るに、佛は慚色無く、事情既に露れたれども佛は悦色無し。法輪を轉する時、讚  
 美の聲十方に滿つれども、心亦高ぶりたまはず、孫陀利死して惡聲流布すれども心亦下ら  
 ず、阿羅毘國土は風寒く又蒺藜多けれども、佛は中に於て坐臥して以て苦と爲したまはず、  
 又天上の歡喜園の中に在りて、夏安居をなす時、劍婆石に坐し、柔軟清潔なること天の纒  
 繩の如きも、亦以て樂受と爲したまはず、大天王踞きて天食を奉れども、以て美と爲  
 したまはず、毘蘭若國にて馬婆を食すれども、以て惡と爲したまはず、諸大國王、上饌を  
 供へ奉れども、以て得と爲したまはず、薩羅聚落に入りて、空鉢にして出づるも以て失  
 と爲したまはず、提婆達多、耆闍崛山に於て石を推して佛を壓すれども、佛亦憎みたまは  
 ざりき。是時、羅摩羅敬心をもて佛を讚すれども、佛は亦愛したまはず、阿闍貫諸の醉象  
 を縱ちて、佛を害せしめんと欲するに、佛は亦畏れずして狂象を降伏したまへり。王舍城  
 の人、益恭敬を加へ、香華纓珞を持して、出でて佛を供養すれども、佛は亦喜びたまは  
 ず。九十六種の外道、一時に和合して議して言はく、「我等も亦皆是れ一切智人なり」と。舍  
 婆提より來りて、佛と共に論議せんと欲す。爾時、佛は神足を以て臍より光を放ちたまふ  
 に、光の中に皆化佛有り、國王波斯匿も亦之に命じて其坐上に來らしむるに、尙動くを得

【二】次に佛の煩惱の習を斷ずると二乗のそとに就いて。

る能はず。何に況んや能く佛と論議するを得んや。佛は一切の外道の賊の來るを見れども、心亦退きたまふ無く、是外道を破したまへば、諸天人、倍恭敬供養を益せども、心亦進みたまはず。是の如き等の種種の因縁もて、來りて佛を毀らんと欲するに、佛を動かすべからず。譬へば眞の闍浮檀金は、火に焼けども異ならず、髓もて打ち、磨き研れども敗れず、異らざるが如し。佛も亦是の如く、諸の毀辱誹謗論議を經れども、動ぜず、異らず、是を以ての故に佛は、諸の煩惱の習都て盡きて、餘ること無きを知る。

(二二二) 問うて曰はく、「諸の阿羅漢、辟支佛も、同じく無漏智を用て、諸の煩惱の習を斷ず、何を以てか盡と不盡と有る。」答へて曰はく、「先に已に智慧の力薄きこと、世間の火の如く、諸佛の力の大なること劫盡の火の如きを説けり。今當に更に答ふべし。聲聞、辟支佛は、諸の功德、智慧を集むること久しからず、或は一世、二世、三世なり。佛の智慧功德は、無量阿僧祇劫に於て、廣く習ひ善法を久しく熏じたまふが故に、煩惱の習に於て復餘氣無し。復次に、佛は一切の諸の功德に於て、皆已に攝し盡したまふが故に、乃ち諸の煩惱の習氣に至るまで、永く盡きて餘ること無し。何を以ての故に。諸の善法功德は、諸の煩惱を消するが故なり。諸の阿羅漢は此功德に於て、盡く得ざるが故に、但世間の愛を斷じて直に涅槃に入る。復次に、佛の結使を斷じたまふ智慧力は甚だ利なり、十力を用ひて大刀と爲し、無礙智を以て直に過ぎたまふが故に、諸の結使を斷じ盡して、復遺餘無し。譬へば人の重罪有り、國王大いに嗔り、其七世の根本を誅して、遺餘無からしむる

【三】ただ習氣の  
みを斷ずるか、煩  
惱をも併せ斷ずる  
かに就いて。

が如し。佛も亦是の如し、煩惱の重賊に於て、根本を誅按して遺餘無からしめたまふ。是を以ての故に一切種智もて一切煩惱の習を斷せんと欲せば、當に般若波羅蜜を習行すべしと説くなり。

問うて曰はく、「但習を斷ずるや、亦是煩惱を除くや。」答へて曰はく、「有人言はく、「煩惱及び習俱に斷じ盡す」と。先に習を盡して餘無しと説くが如し。阿羅漢辟支佛は、但煩惱を斷じて、習を斷ずる能はず、菩薩は一切の煩惱、及び習を斷じ盡して餘無からしむ。有人言はく、「佛久しく已に欲を遠かりたまふ。佛の説きたまへるが如し、我定光佛を見てより已來、已に欲を離れたり。方便力を以ての故に、生死、妻子、眷屬有るを現す」と。有人言はく、「無生法忍を得てより來、諸法實相を得るが故に、一切の煩惱及び習を盡す」と。有人言はく、「佛は初發意より來、煩惱有り、道場に坐するに至り、後夜の時に於て、一切の煩惱及び習を斷じたまへり」と。問うて曰はく、「是の如き種種の説は、何者をか實と爲す。」答へて曰はく、「皆是れ佛口づから説きたまへる所なるが故に、不實有ること無し。聲聞法の中に、佛は方便力を以ての故に、現に人法を受け、生、老、病、寒熱、飢渴等有り。人生れて而も煩惱無き者無し。是故に佛も亦應に人の法に隨うて煩惱有るべし。樹王の下に於て外に先づ魔軍を破り、内に結使の賊を滅し、内外の賊を破するが故に、阿耨多羅三藐三菩提を成じたまふに、人皆信受して、「是人は能く是事を爲す、我等も亦當に是事を學習すべし」と。若し久しきより來、煩惱無く、然燈佛に從うて、無生法忍を得る

も、未だ煩惱を斷じ盡さずと言ふは、是れ亦方便の説にして、諸の菩薩をして歡喜せしむるが故なり。若し菩薩久しく已に一切の煩惱を斷せば、成佛の時、復何の爲す所か有らん。問うて曰はく、佛には種種の事有り、結使を斷するは是れ一事なり。餘に佛の國土を淨め、衆生を成就する等の事有りて未だ具せず、衆事を具足するを以ての故に名けて佛と爲す。答へて曰はく、「若し爾らば佛言はく、「結使を斷するは木後の身なり」と。人若し都て結使無くんば、云何が生ずるを得ん。問うて曰はく、「無生法忍を得てより已來、常に法性生身を得て變化するや否や。」答へて曰はく、「化法は要ず化主有りて、然る後能く化す。若し無生法忍を得て、一切の結使を斷せば、死する時、是肉身を捨して實身有る無けん、誰が變化を爲さん。是を以ての故に、無生を得てより已來、結使を盡すべからざるを知る。復次に、聲聞の人は云はく、「菩薩は結使を斷せず、乃ち道場に坐するに至りて、然る後に斷す」と。是は大なる錯と爲す。何を以ての故に。汝が法の中に、「菩薩は已に三阿僧祇劫を滿し、後更に百劫の中に有りて常に宿命智を得、自ら迦葉佛の時を憶して比丘と作り、鬱多羅と名けて、佛法を修行す」と説けばなり。云何が今六年苦行して、邪道の法を修し、日に一麻一米を食せん。後身の菩薩は一日すら、尙應に謬るべからず、何に況んや六年をや。曠も亦是の如し。久遠世の時より毒蛇と作り、獵者生きながら其皮を剥ぐすら猶尙曠らず、云何が最後身にして、而も五人を曠らんや。是を以ての故に聲聞人の佛の義を受くるは錯なるを知る。佛は方便力を以て外道を破せんと欲するが故に、六年の

苦行を現じたまへり。汝が「五人を瞋る」と言ふは、是を方便と爲す。亦是れ瞋の習にして、煩惱に非ざるなり。今當に如實に説くべし。菩薩は無生法忍を得て、煩惱已に盡くるも、習氣を未だ除かざるが故に、習氣に因りて法性生身を受け、能く自在に化生す。大慈悲有りて衆生の爲の故に、亦木願を滿つるが爲の故に、世間に還り來り、餘殘の佛法を具足し成就するが故に、十地滿ちて道場に坐し、無礙解脫力を以ての故に、一切智、一切種智を得て、煩惱の習を斷じたまへり。摩訶衍の人はく、「無生法忍を得たる菩薩は、一切の煩惱、及び習を都て盡す」と。亦是も錯なり。若し都て盡さば、佛と異る無く、亦法性生身を受くべからず。是を以ての故に菩薩は無生法忍を得、生身を捨てて法性生身を得。若し道場に坐するに至りて、一切の煩惱及び習を俱に斷ずと言はば、是語も亦非なり。所以は何ん。若し菩薩具に三毒有らば、云何が能く無量の佛法を集めん。譬へば毒瓶の如きは、甘露を著くと雖も、皆食するに中らず。菩薩は諸の純淨の功德を集めて、乃ち佛と作るを得。若し三毒を雜へば、云何が能く清淨の佛法を具足せん。問うて曰はく、「諸法實相を觀じ、及び悲心を修するが故に、能く三毒をして薄からしむ。薄きが故に能く清淨の功德を集む。答へて曰はく、「三毒を薄くすれば、轉輪聖王と諸天王身とを得べし。佛の功德身を得んと欲せば、是事有ること無し、三毒を斷ずれば、習未だ盡きざるも、諸の功德を集むるを得べし。復次に、薄とは、離欲の人の、下地の結を斷ずるも、猶上地の煩惱有るが如きに名く。又須陀洹の見諦所斷の結盡くれども、思惟所斷未だ盡き

ざるが如き、是を名けて薄と爲す。佛の説きたまふが如くんば、三結を斷じて、婬、怒、癡を薄くするを名けて斯陀舍と爲す。汝若し薄と言はば、應當に是れ斷なるべし。是を以ての故に無生法忍を得る時、煩惱を斷じ、佛を得る時、煩惱の習を斷ずるは、是れ則ち實なり。

復次に舍利弗、菩薩摩訶薩にして菩薩位に上らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【二門】復次に舍利弗等の文を釋する中、今菩薩位を明す。

菩薩位とは無生法忍是なり。是法忍を得て一切世間の空なるを觀せば、心に著する所無くして、諸法實相の中に住し、復世間に染まず。復次に、般若波羅蜜は是れ菩薩位なり、是般若波羅蜜を得れば、悉く現在の十方の諸佛を見、諸佛より法を聞きて、諸の疑網を斷じ、是時菩薩の心動搖せず、是を菩薩位と名く。復次に菩薩位とは、八波羅蜜を具足し、方便智を生じ、諸法實相に於ても亦住せず、自知自證して他語に隨はず、若は魔、佛形と作りて來るも心亦惑はず。復次に菩薩の法位に入る力の故に、阿耨跋致の菩薩と名くるを得。復次に菩薩摩訶薩は是法位の中に入りて、復凡夫の數に墮せず、名けて得道の人と爲す。一切世間の事は、其心を壞らんと欲すれども、動ぜしむる能はず、三惡趣の門を閉ぢ、諸の善業の數中に墮し、初めて菩薩の家に生れ、智慧清淨に成熟す。復次に頂に住して墮せざる、是を菩薩の法位と名く。學品の中に説くが如くんば、上位の菩薩は惡趣に墮せず、下賤の家に生れず、聲聞、辟支佛地に墮せず、亦頂より墮せず。問うて曰はく、

「云何が頂より墮すと爲す。」答へて曰はく、「須菩提の舍利弗に語りて、「若し菩薩摩訶  
 薩、方便心無くして六波羅蜜を行じ、空、無相、無作の中に入れば、菩薩位に上る能はず、  
 亦聲聞、辟支佛地にも墮せず、諸の功徳法に愛著し、五衆の無常、苦、空、無我に於て、  
 相を取り心著し、是は道なり、是は道に非ず、是は行すべし、是は行すべからず」と言  
 へるが如し。是の如き等の取相分別は、是れ菩薩、頂より墮するなり。何等か是れ頂  
 に住する。上の所説の如く、諸法の愛を斷じ、愛を斷ずるの法に於ても、亦復取らず頂  
 に住するの義の中に説くが如く、若し菩薩摩訶薩、般若波羅蜜を行する時は、内空の中に  
 外空を見ず、外空の中に内空を見ず、外空の中に内外空を見ず、内外空の中に外空を見ず、  
 乃至無法、有法も亦是の如し。復次に上位の菩薩は無等等の心を得て亦自ら高ぶらず、心  
 相の眞空を知り、諸の有無等の戲論滅す。問うて曰はく、「何を以ての故に、聲聞法の中  
 には名けて正位と爲し、此菩薩法の中の位は、但位とのみ名くる。」答へて曰はく、「若し正  
 位と言ふも亦咎無し。所以は何ん。若し菩薩法位と言はば、是は則ち正と爲せばなり。聲  
 聞法の中には、但位と言ひて聲聞位と言はず、是を以ての故に正位と言ふなり。復次に  
 聲聞を學する人は大慈悲心無く、智慧利ならざるが故に、未だ厭心を生ぜず、多く諸法を  
 求め、種種の邪見、疑悔を生ず。菩薩摩訶薩は大慈にして、一切を慍むが故に、多く衆生  
 の老病死の苦を度脱するを求め、種種の戲論を分別するを求めず。譬へば長者に一子有  
 り、之を愛すること甚だ重く、其子病を得るに、但良藥の能く病を差す者を求め、諸藥の

【二五】菩薩位を得るための修行の法を明す。

名字を分別し、之を取るの時節、合和分數を求めざるが如し。是を以ての故に諸の菩薩は、果に従うて十二因縁を觀じ、因に従うて觀ぜず。見多き者は因に従うて觀じ、愛多き者は果に従うて觀ず。諸の聲聞人は、邪位に因るが故に正位有り、菩薩は邪位薄きが故に但菩薩位と名く。

問うて曰はく、「聲聞法の中には、苦法忍より乃ち道比忍に至るを、名けて正位と爲す、經の中に説くが如くんば、三惡道の中には三事を得べからず。謂ゆる正位、聖果、漏盡なり。破滅、邪見、五逆罪等も亦是の如し。何の法を得てより名けて菩薩位と爲すや。」答へて曰はく、「發意より大悲を修行し、方便を具足し、是四法を行じて、菩薩位に入るを得。聲聞法の中の如きは、先づ具に四種の善根なる煖法、頂法、忍法、世間第一法を説き、然る後に苦法忍の正位に入る。問うて曰はく、「修行には皆四法を攝す、何を以ての故に差別して四と爲す。」答へて曰はく、「初發意に修行有りと雖も、久しく修せざるが故に、修行と名けず。在家の如きは、終日、住せずと雖も、名けて行と爲さず。復次に、發意の時但意願のみ有り、行の時は造作し、財を以て人に與へ、禁戒を受持し、是の如き等の六波羅蜜を行す、是を修行と名く。修行しじれば、般若波羅蜜を以て、諸法の實相を知り、大悲心を以て衆生を愍念す。是諸法實相を知らざれば、世間虚誑の法に染著し、種種の身苦、心苦を受く。是は更に大悲の名を受くるが故に、修行と名けず。方便とは、般若波羅蜜を具足するが故に諸法の空を知り、大悲心あるが故に衆生を憐愍し、是二法に於て、方便力

を以て染著を生ぜず、諸法の空を知ると雖も、方便力の故に亦衆生を捨てず、衆生を捨てずと雖も、亦諸法の實に空なるを知る。若し是二事に於て等しければ、即ち菩薩位に入るを得。聲聞の人の如きは、定慧の二法に於て等しきが故に、是時は即ち正位に入るを得。是法には行有りと雖も、更に餘の名字有れば修行と名けず。初發意より乃ち道場に坐するに至るまで、其中間に於て行する所は皆修行と名くるも、小小差別して異なる有り、名字解し易きが爲の故なり。譬へば人有り、初めて阿耨多羅三藐三菩提の意を發す如きは、一切衆生の老病死等の、身心の諸苦を度脱せんと欲し、大誓を作し、功德、慧明の二事を莊嚴する因縁の故に所願皆滿す。是二事に六分の修行有り、名けて六波羅蜜と爲す。布施、持戒、忍辱は是れ功德分なり。精進、禪定、智慧は是れ慧明分なり。六波羅蜜を修行し、是諸の法相を知るに、甚深微妙にして解し難く知り難し。是念を作さく、衆生は三界の諸法に著せり、何の因縁を以てか衆生をして是諸の法相を得しめん。當に諸の功德を具足するを以て、清淨の智慧を具足すべし」と。佛身は三十二相、八十隨形好、光明具足し、神通無量なり。十力、四無所畏、十八不共法、四無礙智を以て、應に度すべき者を觀て說法開化す。譬へば金翅鳥王の普く諸龍の命の應に盡くべき者を觀、翅を以て海を搏ち、水をして兩に闔かして取りて之を食するが如し。佛も亦是の如し、佛眼を以て十方世界五道の衆生の、誰か應に度を得べきかを觀じ、初めて神足を現し、次に爲に其心趣を示す。此二事を以て三障礙を除き、爲に說法し、三界の衆生を抜きたまへり。佛力の無量

の通を得るは、假令虚妄なりとも猶尙信すべし、何に況んや實説をや。是を方便と名く。復次に、菩薩は般若波羅蜜を以て諸の法相を知り、其本願を念じ、衆生を度せんと欲して、是思惟を作さく、「諸法實相の中に衆生は不可得なり、當に云何が度すべき」と。復是念を作さく、「諸法實相の中に衆生は不可得なりと雖も、而も衆生は是諸の法相を知らざるが故に、是實相を知らしめんと欲す」と。復次に、是實法相は亦衆生を礙へず、實法相とは、名けて除壞せらるること無しと爲し、亦所作無し、是を方便と名く。是四法を具足して菩薩位に入るを得。

【釋】 聲聞、辟支佛地を過ぎて、阿羅漢地に住せんと欲せば、當に般若波羅蜜を觀すべし。

【六】 以下聲聞辟支佛地を過ぎて等の文を釋する中、二乘地を過ぎて阿羅漢地に住するを明す。

問うて曰はく、「菩薩は法位に入る時、即ち已に聲聞辟支佛地を過ぎて、阿羅漢地に住す、何を以ての故に復説くや。」答へて曰はく、「三事是一時なりと雖も、諸法の各々に相應して應に次第に讀すべし。一心中に一時に無漏の五根を得るも、而も各各分別して其相を説くが如し。菩薩は法位に入る時、若干の結使を斷じ、若干の功德を得、是地を過ぎて是地に住す。唯佛のみ能く知りて、亦諸の菩薩を引導せんと欲したまふが故に、佛は種種に讚説したまへり。此經の如きは、始め佛は耆闍崛山に在して五千の比丘と俱なりき。皆是れ阿羅漢にして、諸漏已に盡き、所作已に辦する等なり。阿羅漢は即ち是れ漏盡なり。漏盡とは、即ち是れ所作已に辦する等なり。亦餘人を引導し、心をして清淨ならしめんが爲の故に、種種に讚説したまふも咎無し。此も亦是の如くして法位に入る。即ち是れ阿

羅漢、辟支佛地を過ぎて、阿鞞跋致地に住するなり。復次に、法位に入るに因るが故に、阿  
 羅漢辟支佛地を過ぎて、阿鞞跋致地に住するを得。問うて曰はく、「法位の中に入りて老病  
 死を過ぎ、及び諸の結使を斷じ三惡道を破る等は先に説くが如し。何を以てか但聲聞辟支  
 佛地を過ぎて、亦種種の功德に住すと説き、何を以ての故に但阿鞞跋致地に住すとのみ説  
 く。」答へて曰はく、「諸の惡事を捨てて諸の功德を得。後當に次第に説きて、所住の功  
 徳に及ぶべし。諸法は當に須らく次第にすべく、一時に頓に説くべからず。復次に、菩薩  
 の初發意の時に怖畏すべき所は、聲聞、辟支佛地に過ぎたるは無し。正しく地獄に墮せし  
 むるも、是の如きの怖畏無し。永く大乘道を破らざるが故に、阿羅漢辟支佛は、此大乘に  
 於て以て永く滅すと爲す。譬へば空地に樹有り、舍摩梨と名く。觚枝廣大にして、衆鳥集  
 り宿る、一鵠後に至りて、一枝の上に住するに、其枝及び觚即時に壓折するが如し。澤神、  
 樹神に問はく、「大鳥の鵬鷲皆能く任持す、何んが小鳥に至りて便ち自ら勝へざる」と。樹  
 神答へて言はく、「此鳥は我怨家の尼俱盧樹上より來る。彼樹果を食し、來りて我上に栖み、  
 必ず當に糞を放つべし。子地に墮つれば惡樹復生じ、害を爲すこと必ず大ならん、是を以  
 ての故に、此一鵠に於て大いに憂畏を懷き、寧ろ一枝を捨てて全うする者を大ならしむ」と。  
 菩薩摩訶薩も亦是の如し、諸の外道、魔衆及び諸の結使、惡業に於ては、是の如く畏るる  
 こと阿羅漢辟支佛が如きこと無し。何を以ての故に。聲聞辟支佛は菩薩の邊に於て、亦彼鵠  
 の如く、大乘心を壞敗せしむればなり。永く佛業を滅す、是を以ての故に但聲聞辟支佛地

【七】阿鞞跋致地  
を釋す。

を過ぐと説く。阿鞞跋致地に住すとは、初發意より已來、常に喜樂して阿鞞跋致地に住す、諸の菩薩の多く退轉有るを聞くが故に。發意の時願を作さく、「何の時か當に聲聞辟支佛地を過ぎて、阿鞞跋致地に住するを得べき」と。是を以ての故に阿鞞跋致地に住すと説く。

問うて曰はく、「何等か是れ阿鞞跋致地なる。」答へて曰はく、「若し菩薩は、能く一切法の不生不滅、不生、不滅、不共、非不共を觀じ、是の如く諸法を觀じて、三界に於て脱するを得、空を以てせず、非空を以てせず、一心に、十方諸佛の用ひたまふ所の、實相の智慧を信忍して、能く壞する無く、能く動ずる者無し。是を無生忍法と名く。無生忍法は、即ち是れ阿鞞跋致地なり。復次に、菩薩位に入れば是れ阿鞞跋致地なり。聲聞辟支佛地を過ぐるも亦阿鞞跋致地と名く。復次に、阿鞞跋致地に住すれば、世世に常に果報を得、神通を失はず、退せざるなり。若し菩薩此二法を得れば、諸法實相を得と雖も、而も大悲を以て一切衆生を捨てず。復二法有り、一には清淨智慧、二には方便智慧なり。復二法有り、一には深心に涅槃を念じ、二には所作世間を離れず。譬へば大龍の尾は大海に在り、頭は虚空に在り、震電雷逝して、大雨を降すが如し。復次に、阿鞞跋致の菩薩は、是諸法實相の智慧を得て、世世に失はず、終に暫くも離れず、諸佛の深經に於て終に疑はず、亦礙ふるを作さざるなり。何を以ての故に。我未だ一切智慧を得ざるが故に、何の方便、何の因縁を知らざるが故に。是の如く阿鞞跋致の菩薩は、常に深心を以て終に惡を生せず、阿鞞跋致は、深心を以て諸善を集め、淺心に諸の不善を作すと説く。問うて曰はく、「若

し阿鞞跋致の相は無生法忍を得ば、云何が淺心を以て諸の不善を作す。答へて曰はく、  
『二種の阿鞞跋致有り、一には無生忍法を得、二には未だ無生忍法を得ずと雖も、佛は其  
過去未來に作す所の因縁もて必ず當に作佛を得べきを知りたまひ、傍人を利益するが爲の  
故に、其に授記を爲したまふ。是菩薩は、生死の肉身の結使未だ斷ぜざるも、諸の凡夫  
の中に於て最も第一と爲す。是も亦阿鞞跋致の相と名く。若し無生忍法を得て、諸の結  
使を斷ずれば、此は則ち清淨にして、末後の肉身盡きて法性生身を得、結使も礙へざ  
る所にして教誡を須ひず、大恆河の中の船は將御を須ひずして、自ら大海に至るが如し。  
復次に、初發意より大心を生じ、諸の煩惱を斷じ、諸法の實相を知りて便ち阿鞞跋致を  
得る有り。但檀波羅蜜のみを行じて、便ち六波羅蜜を具足する有り。乃至般若波羅蜜も亦  
是の如し。六波羅蜜を行じて、未だ阿鞞跋致を得ず、衆生の中に於て大悲心を生じ、是  
時、便ち阿鞞跋致を得るもの有り。悲心を得て是念を作さく、「若し諸法皆空なれば則ち衆  
生無し、誰か度すべき者ぞ」と。是時、悲心は便ち弱し。或時は衆生を以て憐むべしとす  
るも、諸法の空觀に於て弱し。若し方便力を得て此二法に於て、等しくして偏黨無ければ、  
大悲心は諸法實相を妨げず、諸法實相を得るも大悲を妨げず。是の如くして方便を生ず。  
是時、便ち菩薩の法位に入り、阿鞞跋致地に住するを得るもの有り、往生品の中に説くが  
如し。復次に、阿鞞跋致の相は、後の阿鞞跋致の二品の中に説くが如し。

大智度論卷第二十七

大智度論初品中欲住六神通釋論第四十三 卷第二十八

聖者龍樹造

後秦龜茲國鳩摩羅什譯

【釋】菩薩摩訶薩、六神通に住せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【二】以下六神通に住せん等の文を釋する中、菩薩が六神通に住すと

問うて曰はく、「諸菩薩品の中の如くんば、諸の菩薩は皆五神通を得と言ふ。今何を以てか六神通に住せんと欲すと言ふ。」答へて曰はく、「五通は是れ菩薩の所得なり、今六神通に住せんと欲すと云ふは、是れ佛の所得なり。若し菩薩にして六神通を得ば如來を離すべし。」

問うて曰はく、「往生品の中には、「菩薩は六神通に住して、諸の佛國に至る」と説けり。云何が菩薩は皆五通を得と言ふ。」答へて曰はく、「第六の漏盡神通に二種有り。一には漏と習と俱に盡く、二には漏は盡せども習は盡きず。習盡きざるが故に、「皆五通を得」と言ふも、漏を盡すが故に、「六神通に住す」と言ふ。問うて曰はく、「若し菩薩は漏を盡さば、云何が復生じ、云何が受生せん。」一切の受生は、皆愛の相續に由るが故に有り。譬へば米は良田を得と雖も、時澤終れば生ずる能はざるが如し。諸の聖人は愛離已に脱するが故に、有漏業生の因縁有りと雖も、生ずるを得ざるべし。」答へて曰はく、「先に已に説けり、「菩薩

【二】六神通の順  
序次第に就いて

は法位に入り、阿鞞跋致地に住し、最後の肉身盡きて、法性生身を得。諸の煩惱を斷ずと雖も、煩惱の習の因縁有るが故に、法性生身を受く、三界の生には非ざるなり」と。問うて曰はく、「阿羅漢は、煩惱已に盡くれども、習は亦未だ盡きず、何を以てか生ぜざる。」答へて曰はく、「阿羅漢は大慈悲無く、本誓願して一切衆生を度すること無く、又實際に證を作し、已に生死を離るるが故なり。」

復次に、先に已に二種の漏盡有るを答へたり。此中には、菩薩は漏盡通を得と説かず、自ら「六神通を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と言へり。六神通の義は、後品の中に佛の説きたまふ所の如し。上の讚菩薩品にも、亦已に菩薩の五神通の義を説けり。

問うて曰はく、「神通には何の次第か有る。」答へて曰はく、「菩薩は五欲を離れ、諸神を得て、慈悲有るが故に、衆生の爲に神通を取りて、諸の希有奇特の事を現じ、衆生の心をして清淨ならしむ。何を以ての故に、若し希有の事無ければ、多くの衆生をして、得度せしむる能はざればなり。菩薩摩訶薩は是念を作し已りて、心を身中の虚空に繋け、麤重の色相を滅して、常に空の輕相を取り、大いに精進せんと欲するの心を發し、智慧も籌量し、心力能く身を擧げ、未だ籌量し已らざるに、自ら心力大にして、能く其身を擧するを知る。譬へば趣を學するに、常に色の麤重の相を壞し、常に輕空の相を修すれば、是時便ち能く飛ぶが如し。二には亦能く諸物を變化す。地を水と作し、水を地と作し、風を火

と作し、火を風と作し、是の如く諸大を指轉易せしむ。金を瓦礫と作し、瓦礫を金と作し、是の如きの諸物を各能く化せしむ。地を變じて水相と爲し、常に修して水を念じ、多く復地相を憶念せざらしむれば、是時地相は念の如く即ち水と作る、是の如き等の諸物皆能く變化す。問うて曰はく、「若し爾らば一切入と何等の異りか有る。」答へて曰はく、「一切入は是れ神通の初道なり。先づ已に一切入背捨勝處に、其心を柔伏して、然る後に易く神通に入る。」復次に一切入の中には、一身は自ら地變じて、水と爲ると見れども、餘人は見ず、神通は則ち然らず、自ら實に是れ水なりと見れば、他人も亦實の水と見る。問うて曰はく、「一切入も亦是れ大定なり。何を以てか是れ實の水と作して、己身他人をして皆見しむる能はざる。」答へて曰はく、「一切入の觀する處は、廣くして但能く一切をして是水相ならしむるも、而も實に是を水ならしむる能はず。神通は能く一切に遍からざれども、而も能く地をして轉じて水と爲らしむるに、便ち是れ實の水なり。是を以ての故に二定の力は各各別なり。」問うて曰はく、「二定の變化の事は、實と爲すか虚と爲すか。若し實ならば、云何が石を金と作し、地を水と作さん。若し虚ならば、云何が聖人にして而も不實を行ずる。」答へて曰はく、「皆實なり。聖人には虚無し、三毒を已に抜くが故なり。一切法は、各定相無きを以ての故に、地を轉じて或は水相と作すべし、酥膠蠟の如きは、是れ地の類なれども、火を得れば則ち消え、水の爲には則ち濕相と成る。水は寒きを得れば、則ち結んで氷と成りて堅相を爲し、石の汁は金と作り、金敗るれば銅と爲り、或は還石と爲る。

衆生も亦是の如し、惡は善と爲すべく、善は惡と爲すべし。是を以ての故に一切法は定相無し。故に神通力を用ひて變化するに、實にして誑ならざるを知る。若し本より各必定相有れば、則ち變すべからず。三に諸の賢聖の神通は、六塵の中に於て意に隨うて自在なり。好を見ては能く厭想を生じ、醜を見ては能く樂想を生じ、亦能く好醜の想を離れて捨心を行す。是を三種の神通と名く。此自在神通は、唯佛のみ具足したまへり。菩薩は是神通を得て、諸の佛國に遊ぶに、諸の異國に於ては、語言同じからず、及び遠きに在る微細の衆生は聞えざるが故に、天耳通を求めて、常に種種多衆の大聲を憶念し、相を取りて修行し、常に修習するが故に、耳は色界四大造の清淨色を得、得已りて便ち遠く聞くを得、天人の音樂麤細遠近に於て通達無礙なり。問うて曰はく、『禪經の中に説くが如くんば、先づ天眼を得て衆生を見れども、其聲を聞かざるが故に天耳通を求め、既に天眼、天耳を得て衆生の身形、音聲を見知するも、而も語言の種種の憂喜苦樂の辭を解せざるが故に、辭無礙智を求む。但其辭を知りて、其心を知らざるが故に、知他心智を求む。其心を知り已れども、未だ本の從來する所を知らざるが故に、宿命通を求む。既に來る所を知るも、其心病を治せんと欲するが故に、漏盡通を求む。五通を具足するを得已れども、變化する能はざるが故に、度する所未だ廣からず、邪見と大福徳の人を降化する能はず、是故に如意神通を求む。應に是の如く次第すべし。何を以ての故に先づ如意神通を求むる。』答へて曰はく、『衆生の麤なる者は多く、細なる者は少し、是故に先づ如意神通を以てす。

如意神通は能く龜細を兼ね、人を度すること多きが故なり。是を以て先に説けり。復次に、諸の神通は得法異り數法異る。得法の者は多くは先づ天眼を求む、得易きを以ての故なり。行者は日月星宿珠火を用ひて、是等の光明の相を取り、常に勤めて精進して、善く修習するが故に、晝夜の異無く、若は上、若は下、若は前、若は後、等しく一に明徹にして専處する所無し。是時初めて天眼神通を得。餘は次第に得ること先に説けるが如し。復次に、佛は自ら得る所の如く、人の爲に次第を説きたまふ。佛は初夜分に一通一明、謂ゆる如意通、宿命明を得、中夜分に天耳通、天眼明を得、後夜分に知他心智通、漏盡明を得たまふ。明の用功を求むること重きが故に、後に在りて説き、通と明とは次第に得ること、四沙門果の如く、大なる者後に在り。問うて曰はく、「若し天眼は得易きが故に前に在らば、菩薩は何を以てか先づ天眼を得ざる。答へて曰はく、「菩薩は諸法に於て、皆易くして難きもの無し。餘人は鈍根なるが故に難有り易有り。復次に初夜の時、魔王來りて佛と戰はんと欲するに、菩薩は神通力を以て、種種に變化して、魔の兵器をして皆嬰珞爲らしめ、魔を降し已りて、續いて神通を念じて、具足せしめんと欲し、心を生じて即ち入りて便ち得たまふ。神通を具足し、魔を降し已りて、自ら一身に云何が大力を得んと念じて、便ち宿命明を求め、自ら世世に福德力を積めるを知りたまふが故に。中衣の時、魔は即ち還り去りて、寂寞として聲無し。一切を慈愍したまふが故に、魔衆の聲を念じて、天耳神通、及び天眼明を生じ、是天耳を用ひて、十方五道の衆生の、苦樂の聲を聞き、聲を聞

【二】以下一切衆生の意の趣向等の

き已りて、其形を見んと欲するに、而も障蔽を以て見ざるが故に、天眼を求めたまふ。後夜の時、既に衆生の形を見、其心を知らんと欲するが故に、他心智を求め、衆生の心は皆苦を離れ、樂を求めんと欲するを知る。是故に菩薩は、漏盡神通を求め、諸樂の中に於て漏盡は最勝なれば、衆生をして之を得しめたまふ。問うて曰はく、「菩薩は已に無生法忍を得、世に常に果報神通を得。今何を以てか自ら疑ひ、既に衆生を見て、而も其心知らざる。」答へて曰はく、「二種の菩薩有り。一には法性生身の菩薩、二には衆生を度せんが爲の故に、方便して人法を受け、身は淨飯王の家に生れ、四城門より出でて、老病死人を問ふ、是菩薩は樹王下に坐して六神通を具す。復次に、菩薩の神通は先より有れども、而も未だ具足せず、今三夜に於て得る所は、是れ佛の神通にして、人法を行ずるが故に、自ら疑ふも咎無し。問うて曰はく、「六神通の次第は、常に初は天眼、後は漏盡通なり、亦爾らざる時有りや。」答へて曰はく、「多くは先づ天眼にして、後漏盡智なり。或時は好む所に隨うて修し、或は天耳を先とし、或は神足を先とす。有人言はく、「初禪には天耳得易し、覺觀の四心有るが故なり。二禪には天眼得易し、眼識無きが故に、心攝せられて散ぜざるが故なり、三禪には如意通得易し、身に快樂を受くるが故なり。四禪には諸通皆得易し、一切安隱の處なるが故なり」と。宿命等の三神通の義は、十力の中に説くが如し。

【三】一切衆生の意の趣向する所を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

問うて曰はく、「六通の中に、已に知他神通を説けり、今何を以てか重ねて説く。」答へ

文を釋する中、六通中の他心通の外に今重ねて他の意の趣向を説くを明す。

【四】佛が衆生の心心所を知る智に就いて。

て曰はく、「知他心通は境界少なり、但欲界色界の現在の衆生の、心心數法のみを知りて、過去未來及び無色界の衆生の心心數法を知らず。凡夫の通は上は四禪地より、所得の通處に隨ひ、已下は遍く四天下の衆生の心心數法を知る。聲聞の通は、上は四禪地より所得の通處に隨ひ、已下は遍く千世界の、衆生の心心數法を知る、辟支佛の通は上は四禪地より、所得の通處に隨ひ、已下は遍く百千世界の衆生の心心數法を知る。上地の鈍根の者は、下地の利根の者の心心數法を知る能はず、凡夫は聲聞の心心數法を知る能はず、聲聞は辟支佛の心心數法を知らず、辟支佛は佛の心心數法を知らず、是を以ての故に一切衆生の心の趣向する所を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと説く。

問うて曰はく、「何の智を以てか能く一切衆生の心心數法を知る。」答へて曰はく、「諸佛は無礙解脫有り。是解脫の中に入りて、能く一切衆生の心心數法を知りたまふ。諸の大菩薩は相似の無礙解脫を得て、亦能く一切衆生の心心數法を知る。新學の菩薩は、是大菩薩の無礙解脫、及び佛の無礙解脫を得んと欲し、此無礙解脫を以て一切衆生の心心數法を知る。大菩薩は、佛の無礙解脫を得んと欲す。是を以ての故に、已に知他心通を説くと雖も、更に一切衆生の、心の趣向する所を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと説く。問うて曰はく、「心の趣向する所とは、心を去ると爲すや、去らずと爲すや。若し去らば此は則ち無心なること猶死人の若く、若し去らずんば云何が能く知らん。佛の言ふが如くんば、意に依りて法を緣じ、意識は意を生ず。若し去らずんば則ち和合する無からん。」答へて曰

はく、「心は去らず住せずして而も能く知る。般若波羅蜜の中に説くが如くんば、一切法は無來無去の相なり。云何が心に來去有りと言はん。又言はく、「諸法は生ずる時、從來すること無く、滅する時去る所無し」と。若し來去有らば即ち常見に墮せん、諸法には定相有ること無し。是を以ての故に但内の六情、外の六塵和合するを以て、六識を生じ、及び六受、六想、六思を生ず。是を以ての故に心は幻化の如し。能く一切衆生の心心數法を知るも、知る者有ること無く、見る者有ること無し。歎摩訶衍品の中に言ふが如し、「若し一切衆生の、心心數法の法性實有にして、虚妄ならずんば、佛は一切衆生の、心心數法を知る能はず。一切衆生の心心數法の性は、實に虚誑にして、無來無去なるを以ての故に、佛は一切衆生の心心數法を知りたまふ。譬へば比丘の貪求するものは供養を得ず、貪求する所無ければ、則ち乏短する所無きが如し。心も亦是の如し、若し分別して相を取らば、則ち實法を得ず。實法を得ざるが故に、通過して一切衆生の心心數法を知る能はず、若し相を取らず、分別する所無ければ、則ち實法を得。實法を得るが故に、能く通過して一切衆生の心心數法を知り、罣礙する所無し」と。問うて曰はく、「一切衆生の諸の心は悉く知るを得べきや否や。若し悉く知らば、則ち衆生は邊有らん。若し知らずんば、何を以ての故に一切衆生の心の趣向する所を知らんと欲せばと説くや。云何が佛に一切種智有らん。答へて曰はく、「一切衆生の心心數法は、悉く知るを得べし。何を以ての故に。經の中に説くが如くんば、一切の實語の中に、佛は最も第一なればなり。若し悉く一切衆生の心

を知りて、其邊際を得たまふ能はずんば、佛は何を以てか、「悉く知る」と言はん。亦一切智人と名けず。而も佛語は皆實なり、必ず應に實に一切智有る人なるべし。復次に、衆生は無邊なりと雖も、一切種智も亦無邊なり。譬へば函大なれば、蓋も亦大なるが如し。若し智慧有邊にして、衆生無邊ならば、應に是難有るべし。今智慧及び衆生は俱に無邊なるが故に汝が難は非なり。復次に、若し有邊無邊を言はば、此二は佛法の中に於ては、是れ置答なり。是十四事は虚妄無實にして益無きが故に、以て難と爲すべからず。問うて曰はく、「若し有邊無邊の二は、俱に實ならざるも、而も佛は處處に無邊を説きたまへり。衆生の知きは、癡癡有りてより已來、無始無邊にして、十方も亦邊際無けん。」答へて曰はく、「衆生無邊なれば佛の智慧も無邊なり。是を實と爲す。若し人無邊に著し、相を取りて戲論するが故に、佛は是を邪見なりと説きたまへり。譬へば世間の常、無常の二の如きは、俱に顛倒にして十四難の中に入る。而も佛は多く無常を以て衆生を度し、少しく有常を用ひたまへり。若し無常に著し、相を取りて戲論せば、佛は是を邪見虚妄と説きたまふ。若し無常に著せざれば、無常は即ち是れ苦、苦は即ち是れ無我、無我は即ち是れ空なるを知る。能く是の如く無常に依りて、觀じて諸法の空に入らば、便ち是れ實なり。是を以ての故に無常を知れば眞諦の中に入る。是は實なり。十四難の中には、因縁に著するを以ての故に、是を邪見と説く。是故に無常を説きて、以て無邊を明す、無邊なるが故に、衆生は生ずるも生死の長久なるを厭ふ。譬へば波梨國の四十の比丘の如きは、俱に十二の淨行

【恒伽】 ガンガ  
 (Ganga)  
 【藍牟那】 ヤムナ  
 (Yamuna)  
 【薩羅山】 サラユ  
 (Sarasvati)  
 【阿脂羅婆提】 ア  
 イラーゾテイ (Ahravati)  
 【摩醯】 ヲヒ (Maha)

【五】 以下一切聲聞辟支佛の智慧に等の文を釋す中、初に聲聞辟支佛の智慧を明す。

を行じ、佛の所に來り至るに、佛は爲に厭行を説きたまふ。佛、比丘に問ひたまはく、「五河、恆伽、藍牟那、薩羅山、阿脂羅婆提、摩醯の所來の處より、大海に流入するまで其中間の水を多少と爲すや」と、比丘言さく、「甚だ多し」と。佛言はく、「但一人の一劫の中に、畜生と作る時は屠割剝刺せられ、或時は罪を犯して其手足を截られ、其身首を斬らるるに、是の如き等の血は此水よりも多し。是の如くして無邊の大劫の中に身を受け、血を流すは、勝げて數ふべからず。啼哭の流涙、及び母乳を飲むも亦是の如し。一劫の中の一人の積骨を計るに、轉浮羅大山よりも過ぎたり。丹註に云、此山天竺にあり、人常に是の如く無量劫の中に生死の苦を受く」と。諸の比丘は是を聞き已りて、世間を厭患し、即時に道を得たり。復次に、十方衆生の無邊なるを聞くが故に、心に歡喜を生じ、不殺戒を受けて、無邊の福德を得。是因縁を以ての故に、初發意の菩薩は、一切世間の衆生を皆應に供養すべし。何を以ての故に。無邊の世界の衆生を度するが爲の故に、功德も亦無邊なればなり。是の如き等の益有るが故に、無邊を説きたまへり。是を以ての故に、悉く一切衆生の心の趣向する所を知りて、日の天下を照して一時に俱に至り、遍く明かならざる無きが如しと説く。

【經】 菩薩摩訶薩は、一切の聲聞辟支佛の智慧に勝れんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。  
 【論】 問うて曰はく、「何等か是れ聲聞辟支佛の智慧なる。」答へて曰はく、「總相別相を以て諸

法の實相を觀するは、是れ聲聞の智慧なり。經の中に説くが如くんば、初は諸法を分別するに智慧を以てし、後には涅槃の智慧を用ひて諸法を分別す。智慧は是れ別相、涅槃の智慧は是れ總相なり。復次に、是法は解と爲し、是法は縛と爲す、是は流轉にして是は來還なり、是は生にして是は滅なり。是は味にして是は患なり、是は逆にして是は順なり。是は此岸にして是は彼岸なり、是は世間にして是は出世間なりと知り、是の如き等の二門の諸法を分別するを名けて聲聞の智慧と爲す。復次に、三種の智慧は五受業を知る。是の如きは單なり、是の如きは散なり、是の如きは出なりと。是は味なり、是は患なり、是は離にして、三解脱門相應の智なりと。是の如き等は、三門の諸法を分別す。復次に、四種の智慧有り。四念處の智、法智、比智、他心智、世智、苦智、集智、滅智、道智、不淨智、無常智、苦智、無我智、無常智、苦智、空智、無我智、法智、比智、盡智、無生智なり、是の如き等は、四門の諸法を分別す。復次に、苦法智忍の慧より、乃ち空空三昧、無相無相三昧、無作無作三昧智に至るまで、其中間に於て有する所の智慧は、盡く是れ聲聞の智慧なり。略説すれば世間を厭ひ、涅槃を念じ、三界を離れ、諸の煩惱を斷じ、最上法、謂ゆる涅槃を得。是を聲聞の智慧と名く。復次に、般若波羅蜜義旨の中に説くが如くんば、菩薩の智慧の相は聲聞の智慧と。是一の智慧にして但方便無く、大誓の莊嚴無く、大慈大悲無く、一切の佛法を求めず、一切種智もて一切法を知るを求めず、但老病死を厭ひ、諸の愛繫を斷じて、直に涅槃に趣くを異と爲す。問うて曰はく、聲聞是の如くんば、辟支佛

【六】次に菩薩が二乗の智慧に勝るといふを明す。

の智慧は云何。答へて曰はく、聲聞の智慧は、即ち是れ辟支佛の智慧なり。但時節と利根と福德とに差別有り。時とは佛世に在さず、亦佛法なきに名く。少因縁を以て出家し得道するを辟支佛と名け、利根なるを異と名く。法相は是れ同じきも、但智慧深入にして辟支佛道を得、福德の相有るに名く、或は一相二相より乃ち三十一相に至る。若は先佛の法の中に聖法を得、法滅して後阿羅漢を成ずるを名けて辟支佛と爲し、身に相有ること無し。辟支佛の第一に疾き者は、四世にして行き、久しき者は乃ち百劫に至りて行くもの有り、聲聞の如きは、疾き者は三世、久しき者は六十劫なり。此義は先に已に廣く説けり。問うて曰はく、佛の説きたまふが如くんば、四種の沙門果、四種の聖人有り。須陀洹乃至阿羅漢なり。五種の佛子は、須陀洹乃至辟支佛なり。三種の菩提は、阿羅漢菩提、辟支佛菩提、佛菩提にして、果の中にも、聖の中にも、菩提の中にも、皆菩薩無し。云何が菩提は、一切の聲聞、辟支佛の智慧に勝ると言ふ。答へて曰はく、佛法に二種有り。一には聲聞辟支佛の法、二には摩訶衍法なり。聲聞法は小なるが故に、但聲聞の事を讀じて菩薩の事を説かず。摩訶衍は廣大なるが故に、諸の菩薩摩訶薩の事を説く。發心修行して十地の位に入り、佛の世界を淨め、衆生を成就して佛道を得。此法の中には菩薩は佛に次いで、應に佛を供養するが如くなるべしと説く。能く是の如く諸の法相を觀するを是を福田と爲し、能く聲聞辟支佛に勝る。是の如く「摩訶衍經」の中の處處に菩薩摩訶薩の智慧は、聲聞辟支佛に勝れたりと讚す。「寶頂經」の中に説くが如くんば、轉輪聖王は、一を

少いて千子に満たざれば、大力有りて、雖も、諸天人の貴重せざる所なり。眞の轉輪聖王種有りて、胎中に處在すれば、初め受くること七日にして、便ち諸天の爲に貴重せらる。所以は何ん。九百九十九人は轉輪聖王の種を嗣いで、世人をして二世の樂を得しむる能はず、是は胎に在りと雖も、必ず能く聖王を紹肯す。是故に恭敬するなり。諸の阿羅漢辟支佛は、根力、覺意、六神通、諸神、智慧力を得、實際に於て證を得、衆生の福田と爲ると雖も、十方の諸佛の貴重したまはざる所なり。菩薩は諸の結使、煩惱、欲縛、三毒の胎中に在りと雖も、初め無上道の意を發し、未だ所作有る能はず、而も諸佛の爲に貴はる。其漸漸に當に六波羅蜜を行じて、方便力を得、菩薩の位に入りて乃ち一切種智を得るに至り、無量の衆生を度して、佛種、法種、僧種を斷せず、天上、世間の淨樂の因縁を斷ぜざるべきを以ての故なり。又迦羅頻伽鳥の殻中に在りて未だ出でざるに、發聲微妙なること餘鳥に勝れたるが如し。菩薩摩訶薩も亦是の如し、未だ無明の殼を出でずと雖も、說法論議の音は聲聞、辟支佛及び諸の外道に勝れたり。明綱經の中に説くが如し。慧命舍利弗、佛に白して言さく、「世尊、是諸の菩薩の所説を、若し能く解する者は大いに功德を得ん。何を以ての故に、是諸の菩薩の、乃至其名字を聞くを得るすら大利益を得。何に況んや其所説を聞くをや。世尊、譬へば人の樹を種うるに、地に依らずして其根莖枝葉を得、其果實を成せんと欲するも、是を得べきこと難きが如し。諸の菩薩の行相も亦是の如し、一切の法に住せずして、現に生死に住し、諸佛の世界に在り、中に於て自ら恚に

樂んで智慧の法を説くに、誰かは大智慧もて遊戯して自ら恣に樂んで法を説くを聞いて、  
 而も阿耨多羅三藐三菩提の意を發せざる者有らん」と。爾時、會中に普華菩薩有り、舍利  
 弗に語らく、「佛、説きたまはく、耆年は諸の弟子の中に於て智慧第一なりと、今耆年は  
 諸法の法性に於て得ざるや。何を以て、大智慧を以て自ら恣に樂んで法を説かざる。」舍  
 利弗言はく、「諸佛の弟子は其境界の如く、則ち能く説く有らん」普華菩薩復問はく、「法性  
 に境界有りや不や」と。舍利弗言はく、「無きなり」「若し法性に境界無ければ、云何が耆  
 年は其境界の如く、則ち能く説く有らんと言ふや」舍利弗言はく、「所得に隨うて説くな  
 り」普華復問はく、「耆年は無量の相の法性を以て證と爲すや」舍利弗言はく、「爾なり」普  
 華言はく、「今云何が所得に隨うて説くと言ふや、所得の法性は無量なるが如く、説も亦應  
 に無量なるべし、法性は無量にして量相に非ず」舍利弗、普華に語けて言はく、「法性は得  
 相に非ず」普華言はく、「若し法性は得相に非ずんば、汝は法性を離れて解脱を得るや不  
 や」舍利弗言はく、「不なり、何を以ての故に。法性は不壞相なるが故に」普華言はく、「汝  
 が得る所の聖智も亦法性の如きや」舍利弗言はく、「我は法を聞かんと欲す、説く時には非  
 ざるなり」普華言はく、「一切法は定んで法性の中に在り、聞者、説者有りや不や」舍利弗  
 言はく、「無きなり」普華言はく、「汝は何を以てか我は法を聞かんと欲す、説く時に非すと  
 言ふや」舍利弗言はく、「佛説きたまはく、二人は福を得ること無量なり、一心に説く者は  
 一心に聽く者なり」と。普華言はく、「汝は滅盡定の中に入りて、能く法を聽くや不や」舍

刹弗言はく、「善男子、滅盡定の中には、法を聽く無きなり」普華言はく、「汝は一切法の常  
 滅の相を信受するや不や」舍利弗言はく、「是事を信ず」普華言はく、「法性は常に滅にし  
 て、法を聽くこと無し、何を以ての故に。諸法は常滅の相の故に」舍利弗言はく、「汝は能  
 く定を起たずして說法するや不や」普華言はく、「法有る無し、定相に非ざる者なり」舍利  
 弗言はく、「若し爾らば今一切の凡夫は皆是れ禪定なりや」普華言はく、「爾なり、一切の凡  
 夫は皆是れ禪定なり。舍利弗言はく、「何等の禪定を以ての故に一切の凡夫は皆是なるや」  
 普華言はく、「法性三昧を壞せざるを以ての故に、一切の凡夫は皆是れ禪定なり」舍利弗言  
 はく、「若し爾らば凡夫と聖人と差別有ること無し」普華言はく、「我も亦凡夫と聖人と差別  
 有らしむるを欲せず、何を以ての故に。諸の聖人は滅法有ること無く、凡夫人も亦生法  
 無し。是二は皆法性の等しき相を出でず。舍利弗言はく、「善男子、何等か是れ法性の等相  
 なる一答へて言はく、「善年の得道する時に知見する所の者是なり」又問はく、「聖法を生ず  
 るや不や、凡夫の法を滅するや不や、聖法を得るや不や、凡夫人の法を見知するや不や、  
 善年は何の知見を以ての故に、聖道を得るや」舍利弗言はく、「凡夫人も比丘の如く解脫を  
 得、比丘の如く無餘涅槃に入る。是の如く一如にして如に別無し」普華言はく、「舍利弗、  
 是を法性の相如、不壞如、用是如と名く。當に知るべし、一切法は皆如なり」舍利弗、佛  
 に白して言さく、「世尊、譬へば大火聚の物として燒かざる無きが如し。是諸の上人の所  
 説も亦是の如し、一切法は皆法性に入る」又「毘摩羅詰經」中に説くが如く、舍利弗等の

【七】菩薩の智慧の二乗に勝る理由を擧ぐ。

諸の聲聞は皆自ら説きて、「我は彼に詣り疾を問ふに堪任せず」と言ひ、各各自ら「昔毘摩羅詰の爲に呵せらる」と説けり。是の如き等、處處の經中に、菩薩の智慧は聲聞辟支佛に勝ると説く。

問うて曰はく、「何の因縁有るが故に菩薩の智慧は聲聞辟支佛に勝る。」答へて曰はく、「『一本』『生經』の中に説くが如くんば、菩薩の智慧は無量阿僧祇劫より已來、衆智を合集せり。無量劫の中に於て、苦として行ぜざる無く、難として爲さざる無く、法を求むるが爲の故に、火に赴き、巖より投げ、剝皮の苦を受け、骨を出して筆と爲し、血を以て墨と爲し、皮を以て紙と爲して經法を書受す。是の如き等、法の爲の故に無量の苦を受く。智慧を以ての故に、世世に其師に供養し、之を視ること佛の如く、一切所有の經書は悉く皆讀誦し解説し、無量阿僧祇劫に於て常に思惟し籌量して、諸法の好醜、深淺、善不善、漏無漏、常非常、有無等を尋ね求めて、思惟し分別して問難す。智慧の爲の故に、諸佛及び菩薩聲聞を供養し、法を聴き、問難し、信受し、正しく憶念し、法の如く行す、是の如く智慧の因縁を具足するが故に、云何が阿羅漢辟支佛に勝らざらんや。復次に菩薩の智慧は、五波羅蜜もて佐助し莊嚴し、方便力有り、一切衆生に於て慈悲心有るが故に、邪見の爲に妨げられず、土地の中に住するが故に、智慧勢力深大に、大の故に聲聞辟支佛に勝り、大因を以ての故に、小なる者は自ら壞す。阿羅漢辟支佛には是事無し。是を以ての故に聲聞辟支佛の智慧に勝らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと言ふなり。」

【八】以下諸の陀羅尼門等の文を釋す中、初に陀羅尼門を明す。

諸の陀羅尼門、諸の三昧門を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

陀羅尼とは讀菩薩品の中に説くが如し。門とは、陀羅尼を得る方便の諸法是れなり。

三三昧の解脫門と名くるが如し。何者が是れ方便なる。若し人、所聞皆持つを得んと欲せば、應當に一心に憶念して念をして增長せしめ、先づ當に作意し、相似の事に於て、心を繋けて見ざる所の事を知らしむべし。周利擊陀迦の如き、心を繋けて革屣を拭き、物の中に禪定を憶して、心の垢法をして除かしむ。是の如く、初め陀羅尼を聞持するを學するに、三たび聞いて能く得、心俱轉利なれば、再び聞いて能く得、成者は一たび聞いて能く得、得て忘れず。是を陀羅尼を聞持する初方便と爲す。或時は菩薩は、禪定の中に入りて、不忘解脫を得、不忘解脫力の故に、一切の語言說法を、乃ち一句一字も皆能く忘れざるに至る、是を第二の方便と爲す。或時は神呪力の故に、陀羅尼を聞持するを得、或時は先世の行業の因縁もて生を受けて聞く所皆持して忘れず、是の如き等を陀羅尼門を聞持すと名く。復次に菩薩は一切の音聲語言を聞いて本末を分別し、其實相を觀じ、音聲語言の念念に生滅するを知る。音聲に滅して、而も衆生は憶して相を取り、是已に滅せるの語を念じて、是念を作して言はく、「是人は我を罵れり」と。而して瞋患を生ず、稱讚も亦是の如し。是菩薩は能く是の如く衆生を觀じ、復百千劫罵詈すと雖も、瞋心を生ぜず、若し百千劫稱讚すとも亦歡喜せず、音聲の生滅の響相の如きを知り、又鼓聲の作者有ること無く、若し作者無ければ是れ住處無く、畢竟空なるが故に、但愚夫の耳を誑すが如し。是を音聲

【九】次に三昧門を明す。

【空空三昧】阿羅漢の先づ無漏智もて諸法の空無我を觀するを空三昧といひ、更に有漏智を以て前の空智を觀じて空相となし之を厭捨するをいふ。

【無相無相三昧】先づ無漏智もて涅槃の寂靜妙躰を觀するを無相三昧と名け、更に有漏智を以て此智を滅盡

を以て此智を滅盡

陀羅尼に入ると名く。復次に陀羅尼有り、是四十二字を以て一切の語言名字を攝す。何者か是れ四十二字なる。阿、羅、波、遮、那等にして、阿提は、秦に初と言ひ、阿耨波奈は、秦に行生と言ふ。陀羅尼を行する菩薩は、是阿字を聞きて、即時に一切法の初不生に入る。是の如き等の字は、所聞に隨うて、皆一切諸法の實相の中に入る。是を字入門陀羅尼と名く。摩訶衍品の中に諸字門を説くが如し。復次に、菩薩は一切三世無礙明等の諸の三昧を得、一一の三昧の中に於て無量阿僧祇の陀羅尼を得、是の如き等を和合して、名けて五百陀羅尼門と爲す。是を菩薩の善法功德藏と爲し、是の如き等を名けて陀羅尼門と爲す。

諸の三昧門とは、三昧に一種有り。聲聞法の中の三昧と、摩訶衍法の中の三昧となり。聲聞法の中の三昧とは謂ゆる三三昧なり。復次に、三三昧とは空空三昧、無相無相三昧、無作無作三昧なり。復三三昧有り。有覺有觀、無覺有觀、無覺無觀なり。復五支三昧、五智三昧等有り、是を諸三昧と名く。復次に、一切の禪定は亦是定と名け、亦是三昧と名く。四禪は亦是禪と名け、亦是定と名け、亦是三昧と名け、亦是禪を除きて、諸餘の定は亦是定と名け、亦是三昧と名け、名けて禪と爲さず。十地の中の定は名けて三昧と爲す。有人言はく、「欲界地にも亦三昧有り。何を以ての故に。欲界の中に二十二道品有るが故に三昧有るを知る」と。若し三昧無ければ、是深妙の功德を得べからず。復次に千問の中にも亦是問有り、「謂ゆる四聖種は幾か欲界繫、幾か色界繫、幾か無色界繫、幾か不繫なる」

せる非擇滅無爲の  
静相を觀じて、前  
の無相を厭捨する  
をいふ。  
【無作無作三昧】  
如上の苦集道の三  
諦の苦空無常等の  
相を觀じ、更に之  
を厭捨するをいふ

と、答へて曰はく、「一切は當に四聖種を分別すべし。或は欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫、或は不繫なり。四念處、四正勤、四如意足も亦是の如し。是義を以ての故に、當に欲界に三昧有るを知るべし、若し散亂心ならば、云何が此上妙の法を得ん。是を以ての故に、是三昧は十一地の中に在り。是の如き等の諸の三昧は、阿毘曇の中に廣く分別せり。摩訶衍の三昧とは首楞嚴三昧、乃至虚空際無所著解脱三昧なり。又見一切佛三昧、乃至一切如来解脱修觀童子頻呻等の如し。無量阿僧祇の菩薩の三昧有り、有三昧を無量淨と名くるが如し。菩薩の是三昧を得る者は、能く一切清淨の身を示現す。三昧有り、威相と名く。菩薩は是三昧を得て、能く日月の威徳を奪ふ。三昧有り、焰山と名く。菩薩は、是三昧を得て、諸の釋梵の威徳を奪ふ。三昧有り、出曜と名く。菩薩は是三昧を得て、一切の大衆の三毒を滅す。三昧有り、無礙光と名く。菩薩は是三昧を得て、能く一切の佛國を照す。三昧有り、不忘一切法と名く。菩薩は是三昧を得て、一切諸佛の所説の法を皆能く憶持し、復他人の物に佛語を講説す。三昧有り、聲如雷音と名く。菩薩は是三昧を得て、能く梵聲を以て十方の佛國に滿つ。三昧有り、能娛樂一切衆生と名く。菩薩は是三昧を得て、能く一切をして深心に歡喜せしむ。三昧有り、喜見無厭と名く。菩薩は是三昧を得て、一切衆生は見聞喜樂して厭足有ること無し。三昧有り、功德報不可思議一緣中樂と名く。菩薩は是三昧を得て、一切の神通を成就す。三昧有り、知一切音聲語言と名く。菩薩は是三昧を得て、能く一切の音聲語言を説き、一字の中に於て一切字を説き、一切字の中に於

【三昧と三昧門とに就いて】

て一字を説く。三昧有り、集一切福富樂果報生と名く。若し菩薩は是三昧を得ば、常に默然として禪定に入り、而して能く一切衆生をして佛法を聞かすめ、衆の聲聞辟支佛に六波羅蜜の聲を聞かすむ。而も是菩薩は實に一言も無し。三昧有り、出高一切陀羅尼王と名く。菩薩は是三昧を得て、無量無邊の諸の陀羅尼に入るを得。三昧有り、一切樂説と名く。菩薩は是三昧を得て、一切字、一切音聲語言、譬喩因縁を樂説す。是の如き等の無量の力勢三昧有り。問うて曰はく、『是三昧は即ち是れ三昧門なりや不や。』答へて曰はく、『三昧は即ち此れ三昧門なり。』

問うて曰はく、『若し爾らば何を以てか但三昧を説かずして、而も復三昧門を説く。』答へて曰はく、『諸の三昧は無量無數なること、虚空の無邊なるが如し。菩薩は云何が盡く得ん。菩薩是を聞けば心則ち退没せん。是を以ての故に佛は三昧門を説きて一門の中に無量の三昧を攝入したまへり。衣の一角を牽げば、衣を舉げて皆得るが如く、亦蜜蜂の王を得れば、餘の蜂を盡く攝するが如し。復次に、展轉して門を爲す、持戒清淨にして一心に精進し、初夜後夜に勤修し、思惟して五欲の樂を離れ、心を一處に繫け、是方便を行じて是三昧を得るが如し。是を三昧門と名く。復次に、欲界繫三昧は、是れ未到地三昧門なり。未到地三昧は是れ初禪の門なり。初禪及び二禪の邊地三昧は是れ二禪の三昧門、乃至非有想非無想處三昧も亦是の如し。煖法定は是れ頂法の三昧門なり。頂法は是れ忍法の三昧門なり。忍法は是れ世間第一法の三昧門なり。世間第一法は是れ苦法忍の三昧門な

一、苦法忍、乃至金剛の三昧門は、略して説くに一切の三昧の三相有り。入、住、出の相  
 是なり。出相入相は名けて門と爲す。住相は是れ三昧の體なり。是の如き等の法は、是れ  
 聲聞法の中の三昧門なり、摩訶衍法の中の三昧門は、禪波羅蜜の義の中に、諸の三昧を  
 分別して廣く説くが如し。復次に、尸羅波羅蜜は是れ三昧門なり。何を以ての故に。三支  
 は是れ佛道なればなり。謂ゆる戒支、定支、慧支なり。清淨戒支は是れ定支の門にして、  
 能く是定を生じ、定支は能く慧支を生じ、是三支は能く煩惱を斷じ、能く涅槃を與ふ。是  
 を以ての故に尸羅波羅蜜及び智慧三昧は近門なり。餘の三波羅蜜は、是れ門の義有り。離  
 も遠門と名く。布施の因縁の如きは福德を得、福德の故に所願皆得。所願有るが故に心柔  
 軟に、慈悲心有るが故に罪を畏れ、衆生を念ずるを知るが如し。世間の空、無常を觀する  
 が故に、心を攝し忍辱を行す。忍辱も亦是れ三昧門なり。精進とは五欲の中に於て心を制  
 し、五蓋を除き、心を攝して亂さず、心去れば則ち攝して馳散せしめず、亦是れ三昧門な  
 り。復次に、初地、是二地の三昧門も、是の如く展轉して、乃ち九地に至る、是れ十地の  
 三昧門なり。十地は是れ無量の諸佛の三昧門なり。是の如き等を名けて諸の三昧門と爲  
 す。

【二】 陀羅尼門と  
 三昧門との異同を  
 明す。

(二) 問うて曰はく、陀羅尼門と三昧門とは、同と爲すや異と爲すや。若し同ならば、何を以  
 てか重ねて説くや。若し異ならば何の義有りや。答へて曰はく、先に已に三昧門と陀羅尼  
 門との異を説けり。今當に更に説くべし。三昧は但是れ心相應の法にして、陀羅尼は亦是

【二三】小乗の中に  
陀羅尼のなき理由  
を述ぶ。

是れ心相應、亦是れ心不相應なり。問うて曰はく、云何が陀羅尼は是れ心不相應なりと知る。答へて曰はく、一人の聞持陀羅尼を得るが如きは、心瞋恚すと雖も亦失せず、常に人に隨うて行く、影の形に隨ふが如し。是三昧を修行し習ふこと久しうして、後能く陀羅尼を成ず。衆生の久しく習うて、便ち其性を成ぜんと欲するが如し。是諸の三昧は、諸法實相の智慧と共に、能く陀羅尼を生ず。坏瓶の火に焼かるるを得て、熟すれば能く水を持して失せず、亦能く人をして河を度るを得しむるが如く、禪定有りて智慧無きは亦坏瓶の如し。若し實相の智慧を得ば、坏瓶の火に焼かるるを得て成、熟するが如く、能く菩薩は二世の無量の功德を持す。菩薩も亦之に因り、度りて佛に至るを得。是の如き等の三昧と陀羅尼とは、種種の差別有り。

問うて曰はく、一聲聞法の中には、何を以てか陀羅尼の名無く、但大乘の中にのみ有る。答へて曰はく、小法の中には大無し、汝問を致すべからず、大法の中に小なる者無ければ則ち問ふべし。小家に金銀無きを問ふべからざるが如し。復次に、聲聞は大いに殷勤に、諸の功德を集めず、但智慧を以て老病死の苦を脱せんと求む。是を以ての故に聲聞の人は、陀羅尼を用ひざれども、諸の功德を持す。譬へば人の渴するに、一掬の水を得れば則ち足り、瓶器もて水を持つを須ひず。若し大衆の人民と共にするは、則ち瓶甕もて、水を持つを須ふるが如し。菩薩は一切衆生の爲にするが故に、陀羅尼を須ひて諸の功德を持す。復次に、聲聞法の中には、多く諸法の生滅無常の相を説くが故に、諸の論議師言

はく、「諸法無常ならば、若し無常の相は則ち陀羅尼を須ひす。何を以ての故に。諸法無常相ならば、則ち所持無し。唯過去の行業因縁を失せず、未來の果報の如きは、無なりと雖も必ず生ず、過去の行因縁も亦是の如し」と。摩訶衍法には、生滅の相も不實なり、不生不滅相も亦不實なり。諸觀諸相を皆滅する、是を實と爲す。若し過去法を持するは則ち咎無し。過去の善法、善根の諸の功德を持するを以ての故に陀羅尼を須ふ。陀羅尼は世世常に隨ふ。菩薩の諸の三昧は爾らず、或時は身を易ふれば則ち失す。是の如き等種種に、陀羅尼も諸の三昧とを分別す。是を以ての故に諸の陀羅尼、諸の三昧門を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと言ふ。

大智度論釋布施隨喜心過上第四十四

一切の聲聞辟支佛を求むる人の布施する時、隨喜心を以て其上に過ぎんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。一切の聲聞辟支佛を求むる人の戒を持する時、隨喜心を以て其上に過ぎんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。一切の聲聞辟支佛を求むる人の三昧、智慧、解脫、解脫智見にて隨喜心を以て其上に過ぎんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【一〇】以下一切の聲聞辟支佛を求む

隨喜心とは、隨喜品の中に説くが如し。復次に、隨喜の名は、人有り、功德を作すに、

る人の等の文を釋する中、初に隨喜心を解釋す。

【二四】次に隨喜心もて菩薩が布施の上に過ぐるを明す

見る者の心も隨うて歡喜し、讚じて善哉と言ふ。無常世界の中の癡闇の爲に蔽はるる所に在りて、能く大心を弘め、此福德を建つ。譬へば種種の妙香を一人は賣り、一人は買ふに、傍人邊に在れば亦香氣を得、香に於て損無く、二主も失無きが如し。是の多く有人施を行じ、人の受くる者有り。有人邊に在りて隨喜するに、功德を俱に得、二主も失せず。是の如き相を名けて隨喜と爲す。是を以ての故に菩薩は、但隨喜心を以て二乘を求むるの人の上に過ぐ、何に況んや自ら行するをや。

問うて曰はく、「菩薩は云何が能く隨喜心を以て、聲聞辟支佛の人の財を以て、布施する上に過ぐるや。」答へて曰はく、「聲聞辟支佛の是布施を行するに、菩薩は傍に於て之を見、一心に念じて隨喜し、讚じて善哉と云ふ。此隨喜の福德を以て、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。一切の衆生を度せんが爲の故なり、此を以て無量の佛法を得るが爲の故なり。二種の功德を以て、聲聞辟支佛を求むる人の、行する所の布施の上に過ぐ。復次に、諸法實相の智慧心を以て隨喜するが故に、聲聞辟支佛を求むる人の布施の上に過ぐ。復次に、菩薩は隨喜の心を以て福德の果報を生じ、廻向して三世十方の諸佛に供養して、聲聞辟支佛の布施の上に過ぐ。譬へば、人の少物を以て國王に獻上するに、報を得ること甚だ多きが如く、又貝を吹くに氣を用ふること甚少なれども、其音は甚だ大なるが如し。復次に、菩薩は隨喜の功德を以て、無量の諸餘の功德を和合して、乃ち法滅するに至るも亦盡きず。譬へば、少水を大海の中に置くに、劫を窮めて乃ち盡くるが如く、持戒、三昧、智

【五】二乗の功德  
中、但布施等の六  
事のみに説くに就  
いて。

慧、解脫、解脫智見も亦是の如し。問うて曰はく、「諸佛の次第に菩薩有り。菩薩の次第に聲聞、辟支佛有り。今菩薩は聲聞、辟支佛を求むる人の、布施を過ぎんと欲す等と言ふ、何の奇特か有る。答へて曰はく、「聲聞、辟支佛の布施、持戒等の福德を以て菩薩の功德に比せず、但隨喜心を以て能く勝れたり、何に況んや菩薩自ら功德を行するをや。聲聞、辟支佛を求むる人は、勤めて身に功德を作して疲勞し、菩薩の默然たる隨喜の智慧力の福德は其上を過ぐ。譬へば、工匠は但智心を以て指授して去るに、斤斧を執る者は疲れ苦しむこと終日なれども、功を計り賞を受くるは、匠者は三倍なるが如く、又鉞伐に隨者死を同じに、主將は功を受くるが如し。問うて曰はく、「若し隨喜心の故に、布施持戒に勝らば、何を以てか但菩薩の隨喜勝るるをのみ説く。答へて曰はく、「凡夫の人は煩惱、心を覆ひ、吾我未だ斷せず、世間の樂に著す。云何が能く聲聞、辟支佛を求むる者に勝らん。聲聞、辟支佛の利なるは鈍なるに勝ると雖も、同じく聲聞地に在るが故に説かず。」

問うて曰はく、「聲聞、辟支佛の功德法は甚だ多し、何を以ての故に但六事のみを説く。」答へて曰はく、「此六事法の中に一切の聲聞、辟支佛の法を攝す。若し布施を説けば、已に信聞等の功德を説けり。何を以ての故に。先づ聞き已りて能く信じ、信じ已りて布施すればなり。是施に二種有り、財施と法施となり。持戒に三種の戒を攝す。律儀戒、禪戒、無漏戒なり。定に諸の禪定、解脫、三昧等を攝す。慧に諸の聞慧、思慧、修慧を攝す。解脫に二種の解脫を攝す。有爲解脫と無爲解脫となり。解脫知見に盡智を攝す。自ら已に

【二六】 勝るの解。

漏盡きたりと知りて、三界に於て解脱を得、是中に於て了了に知見す。是中、助道法、聖道法は已に説けり。復次に、若し涅槃に向はざる功德は是中に、上に過ぐと説かず。其功德薄きを以ての故なり。

問うて曰はく、『勝るとは、力勢相奪ふに名く。今菩薩は聲聞辟支佛と競はず、云何が勝ると言ふ。』答へて曰はく、『勝るとは、但一事の中に於て、智慧、方便、心力を以ての故に、福を得ること多きに名く。譬へば、人は一華の中に於て但色香を取り、蜂は但味を取りて以て蜜と爲すが如し。亦水を取るに器大なれば多く得、器小なれば少しく得るが如し。是の如き等の喩は、知るべし、隨喜心は深利にして智慧相應するを以て、聲聞辟支佛の布施等の諸功德に勝れるなり。是六法の初の布施は檀波羅蜜の義の中に、聲聞辟支佛の法を分別して説くが如し。持戒は尸羅波羅蜜の義の中に、聲聞辟支佛の法を分別して説くが如し。三昧、智慧、解脱、解脱知見は念佛義の中に聲聞辟支佛の法を分別して説くが如し。』

大智度論卷第二十八

大智度論初品中布施隨喜心過上釋論第四十卷第二十九

聖者龍樹造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

一切の聲聞辟支佛を求むる人の、諸の禪定、解脫、三昧にて、隨喜心を以て其上に過ぎんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

禪定とは四禪、九次第定なり。解脫三昧とは八背捨、三解脱門、慧解脱、共解脱、時解脱、不時解脱、有爲解脱、無爲解脱等、有覺有觀三昧、無覺有觀三昧、無覺無觀三昧、空三昧、無相三昧、無作三昧、是の如き等の諸の三昧なり。

【一】以下一切の文を禪定に就く。【二】初に禪定を明す。【三】上に説く六事中に三昧あるを今重説するに就いて。

問うて曰はく、「上の六事の中の三昧は、即ち是れ禪定解脫三昧なり、今何を以てか復説く。」答へて曰はく、「一種の三昧有り。一種は慧解脱分、二種は共解脱分なり。前者は慧解脱分にして、禪定に入る能はず、但未到地の中の三昧のみを説く。此中には共解脱分を説けり、具には禪定解脫三昧有り。彼は是れ略説、此は則ち廣説、彼は但名のみを説き、此中には義を分別す。復次に、前の勝三昧とは、有人謂はく、「一二の三昧は深三昧に非ず、今此中には具に禪定解脫甚深三昧を説く」と。復次に、禪定解脫三昧に二種有り。一には離欲の時に得、二には求めて得。離欲のとき得とは、前に已に説けり、求めて得とは此中

【三】禪定解脱三味は見聞すべからざるを、如何にして隨喜するやを明す。

に説く。復次に、禪定解脱三味は之を得ること甚だ難く、精勤して之を求むれば乃ち得。菩薩は但隨喜心を持して、便ち得て其上に過ぎたり。是を未だ嘗て有らざるの法と爲す。是故に重ねて説けり。問うて曰はく、「彼中の三味、智慧、解脱、解脱知見も、亦得難し、何を以てか此を得難しと爲すと言ふ。」答へて曰はく、「先に以て説けり。是慧解脱分は甚深の義を盡さず、共解脱の阿羅漢、三明の阿羅漢は得難きが故に更に説くなり。復次に、是三味、智慧、解脱、解脱知見は得難しと雖も、而も廣く周悉ならず直に涅槃と爲す。此間明かに阿羅漢は現世の禪定の樂を得んと欲す、謂ゆる滅盡定、頂際禪、願智、無淨三昧等、是の如きの事は直に涅槃と爲すに非ず、是を以ての故に更に廣説す。何を以ての故に。前者の如きは直に涅槃と爲し、彼中に解脱と解脱知見の相次を説くが故に、當に一向に直に涅槃と爲すを知るべければなり。問うて曰はく、「若し禪定解脱三味は、得難きを以ての故に重ねて説かば、智慧は一切法の中に於て最も難く微妙なり、何を以てか重ねて説かざる。」答へて曰はく、「上に「聲聞 辟支佛の慧を過ぎんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と言ふ中に已に説けり。此禪定は未だ説かざるが故に重ねて禪定智慧を説く。二法は最妙なり。此二行有れば所願皆得らる。鳥の兩翼有れば能く至る所有るが如し。解脱は此二法に従うて得。解脱知見は即ち是れ智慧なり。布施持戒は是れ身口業なり、鹿行にして得易きが故に、重ねて説かず。

問うて曰はく、「菩薩は隨喜心を以て、聲聞 辟支佛の布施、持戒、智慧に勝ると云ふは

爾るべし。所以は何ん。布施持戒は眼に見、耳に聞く、智慧も亦是れ聞法なれば、隨喜心を生ずるを得べし。禪定解脫三昧の如きは、是れ見聞すべからざるの法なり、云何が隨喜する。答へて曰はく、「菩薩は他心を知るの智を以て而も隨喜す。」問うて曰はく、「他心を知るの智法は有漏の知にして、他心智は他の有漏心を知り、無漏の他心を知るの智は他の無漏心を知る。菩薩は未だ成佛せずして、云何が聲聞。辟支佛の無漏心を知る。」答へて曰はく、「汝の聲聞法の中には爾なり、摩訶衍法の中には、菩薩は無生忍法を得て、諸の結使を斷じ、世世に常に六神通を失はず、有漏の他心智を以て能く無漏心を知る。何に況んや無漏の他心を知るの智を以てするをや。復有人言はく、「初發意の菩薩は未だ法性生身を得ず、若は見、若は聞いて、聲聞。辟支佛の布施持戒を皆知り、當に阿羅漢の隨喜心を得べし。此人は諸法の實相を得て、三界を離ると言ふ。我欲する所は、一切衆生の生老病死を度するに有り。彼は已に脱するを得たり、則ち是れ我事なり」と。是の如き等の種種の因縁もて隨喜す。是を以ての故に隨喜するに咎無し。

大智度論初品中廻向釋論第四十五

〔釋〕 菩薩摩訶薩、少施、少戒、少忍、少進、少禪、少智を行じ、方便力を以て廻向するが故に而も無量無邊の功德を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【四】以下少施を  
行じ等の文の中、  
今此に重ねて少施  
等といひて六度を  
説くに就いて。

【五】菩薩が少し  
く布施するの理由

問うて曰はく、「前に已に六波羅蜜を説けり、今何を以てか復説く。」答へて曰はく、「上には總相を説けり、此には別相を説かんと欲す。彼には因縁を説けり、此には果報を説くなり。問うて曰はく、「爾らず、彼中には六波羅蜜を説きて、廣く普く具足せり、此には少施乃至少智を言ふ。上の六波羅蜜の義に同じからざるに似たり。」答へて曰はく、「然らず。即ち是六波羅蜜なり。何を以ての故に。六波羅蜜の義は、心に在りて事の多少に在らず。菩薩の行は、若は多く、若は少きも、皆是れ波羅蜜なり。『賢劫經』に説くが如くんば、八萬四千の諸の波羅蜜は、此經の中にも亦説けり。世間の檀波羅蜜有り、出世間の檀波羅蜜有り、乃至般若波羅蜜にも、亦世間と出世間有り」と。

(五) 問うて曰はく、「菩薩は何を以ての故に少施する。」答へて曰はく、「種種の因縁有るが故に少施す。或は菩薩有り。初發意にして福德未だ集らず、貧なるが故に少施す。或は菩薩有り、施に多少無し。功德は心に在りと聞く。是を以ての故に多物を布施するを求めず、但好心のみを求む。或は菩薩有り。是念を作さく、「若し我多く財物を集むるを求めば、戒を破し善心を失し、心散亂して多く衆生を惱さん。若し衆生を惱して、以て佛を供養するは、佛の許したまはざる所、法を破して財を求むるが故なり。若し凡人に施すに彼に奪ひ此に與へば、平等の法に非ず。菩薩の法の如きは等心にして一切皆兒子の如し」と。是を以ての故に少施す。復次に、菩薩に二種有り。一には敗壞の菩薩、二には成就の菩薩なり。敗壞の菩薩とは、本阿耨多羅三藐三菩提を發せども、善縁に遇はず、五蓋、心を覆ひ、行

離し行轉して身に大富貴を受け、或は國王、或は大鬼神王、龍王等と作り、本身口意の惡業を造りて、清淨ならざるを以ての故に、諸佛の前、天上、人中の罪無き處に生ずるを得ず、是を名けて敗壞の菩薩と爲す。是の如き人は、菩薩の心を失ふと雖も、先世の因縁の故に猶布施を好み、多く衆生を憫し、劫奪して非法に財を取り、以て福を作すに用ふ。成就の菩薩とは、阿耨多羅三藐三菩提心を失せず、衆生を慈愍す。或は在家にして五戒を受くる者有り、出家にして戒を受くる者有り。在家の菩薩は行業を成就すと雖も、先世の因縁有りて貧窮なり。佛法を聞くに、二種の施有り。法施と財施なり。出家の人は多く法施すべく、在家の者は多く財施すべし。我今先世の因縁を以ての故に富家に生ぜず、敗せる菩薩の輩の罪を作して、布施するの心を見て喜樂せず。佛は多く財の布施を讀じたまはず、但心の清淨なる施のみを美としたまふを聞く。是を以ての故に所有の物に隨うて施す。又出家の菩薩は、戒を守護するが故に、財物を畜へず、又自ら戒の功德は布施に勝れたりと思惟す。是因縁を以ての故に、所有に隨うて施す。復次に、菩薩は佛法の中の本生の因縁を聞くに、少施して果報を得ること多し。薄拘羅阿羅漢の如きは、一の呵梨勒菓藥を以て布施し、九十一劫惡道に墮せずして、天人の福樂を受け、身常に病ず、末後の身に阿羅漢道を得たり。又沙門二十億耳の如きは、髻婆尸佛の法の中に於て一の房舎を作りて比丘僧に給し、一の羊皮を布き、僧をして上を踏ましむ。是因縁を以ての故に九十一劫中、足地を踏まず、人天中の無量の福樂を受け、末後の身に大長者の家に生れ、身を受くるこ

【二〇】少施もて無量の功德を得といふを明す。

と端正に、足下に毛を生じて長さ二寸、色は青琉璃の如くして右に旋れり。初め生れし時父は二十億に兩金を與ふ。後世の五欲を厭ひて出家し得道せり。佛は精進の比丘の第一なりと説きたまへり。又須蔓耳比丘の如きは先世に轉婆尸佛の塔を見て、耳上の須蔓華を見て布施す。是因縁を以ての故に、九十一劫の中に常に惡道に墮せず、天上、人中の樂を受け、末後の身生るる時、須蔓耳に在り、香一室に滿つるが故に、字けて須蔓耳と爲す。後世を厭ひ、出家して阿羅漢道を得たり。菩薩は是の如き等の本生の因縁有り、少施して大報を得。便ち所有の多少に隨うて布施したまへり。復次に、菩薩は亦一定して常に少物を布施せず、所有に隨うて多ければ則ち多く施し、少ければ則ち少しく施す。復次に、佛は般若波羅蜜の功德の大きいなるを讀ぜんと欲するが故に、少施して大果を得、功德無量なりと言ふ。問うて曰はく、「薄拘羅阿羅漢等の如きも、亦少施して大報を得、何んが般若波羅蜜を用ひん。」答へて曰はく、「薄拘羅等は果報を得と雖も、劫數に限量有りて小道を得、涅槃に入れり。菩薩は般若波羅蜜の方便を以て廻向するが故に、少施するも福德は、無量無邊阿僧祇劫なり。」

(六十一)  
問うて曰はく、「何等か是れ方便廻向して、少布施を以て、無量無邊の功德を得る。」答へて曰はく、「少布施なりと雖も、皆阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。菩薩は念を作さく、「我は是福德の因縁を以て、人中中の王及び世間の樂を求めず、但阿耨多羅三藐三菩提のみを求む」と。阿耨多羅三藐三菩提の如きは、無量無邊なれば、是福德も亦無量無邊なり。又是

【七】施戒の外の四波羅蜜は如何に明して知るべきやを

福德を以て、一切衆生を度せんが爲にす。衆生の如きは、無量無邊なるが故に、是福德も亦無量無邊なり。復次に、是福德は大慈悲を用ふ。大慈悲は無量無邊なるが故に、是福德も亦無量無邊なり。復次に、菩薩の福德は諸法實相に和合するが故に三分清淨なり。受者、與者、財物は不可得なるが故なり。般若波羅蜜の如きは、初め舍利弗の爲に菩薩の布施を説く。時に與者、受者、財物は不可得なるが故に般若波羅蜜を具足し、是實相の智慧を用て布施するが故に、無量無邊の福德を得。復次に、菩薩は皆所有の福德を如相、法性相、實際相と念するが故に、如、法性、實際は無量無邊なるを以ての故に、是福德も亦無量無邊なり。問うて曰はく、菩薩摩訶薩は諸法實相を觀じ、如、法性、實際を知らば是れ無爲滅相なり、云何が更に心を生じて福德を作す。答へて曰はく、菩薩は久しく大悲心を習ふが故に、大悲心、爾時、發起し、衆生は是諸法實相を知らず、當に此實相を得しむべし。精進波羅蜜の力を以ての故に、還りて福德業の因縁を行じ、精進波羅蜜を以て大悲心を助く。譬へば、火の滅せんと欲するに、風と薪とに遇ふを得れば、火則ち然ゆること熾なるが如し。復次に、本願を念するが故に、亦十方の佛來り語りて言はく、汝初發心の時を念ぜよ、又汝始めて是一法門を得るも、是の如き無量の法門有り、汝未だ皆得ず、當に還諸の功德を集むべし」と。漸備經の七地の中に説くが如し。

問うて曰はく、施の多少は爾るべし。戒の中に五戒、一日戒、十戒有り、少多亦知るべし。色法は分別するを得べきが故なり。餘の四波羅蜜は、云何が其多少を知る。答へて曰

はく『是れ皆知るべし。忍の如きは二種有り。一には身忍、二には心忍なり。身忍とは、  
 身口は動かすと雖も心は起らざらしむる能はず、少忍の故に心を制する能はず。心忍とは、  
 身心俱に忍じて猶枯木の如きなり。復次に、少忍とは、若し人搦罵すれども還報せず。大  
 忍とは、罵者、忍者の忍法、分別せず。復次に、衆生の中の忍は是を少忍と爲し、法忍は  
 是れ大忍と爲す。是の如き等と少忍を分別す。少進とは二有り。身進と心進なり。身進は  
 少と爲し、心進は大と爲す。外進は少と爲し、内進は大と爲す。身口進は少と爲し、意進  
 は大と爲す。佛の説きたまふが如し。意業の大力の故に、大仙人の瞋る時の如きは、能く  
 大國をして廢滅せしむ。復次に、身口に五逆罪を作せる大果報は、一劫、阿鼻泥梨に在り、  
 意業の力大なれば、非有想非無想に生ずるを得て、壽八萬大劫なり。亦十方の佛國に在り  
 て、壽命無量なり。是を以ての故に身口の精進を少と爲し、意の精進を大と爲すを知る。  
 復次に經に説くが如きは、若し身口意業寂滅不動なる、是を大精進と爲し、動けば少精進  
 と爲す。是の如き等を名けて少精進と爲す。少禪とは、欲界定の未到地にして、欲を離れ  
 ざるが故に名けて少と爲す。亦二禪より觀すれば、初禪は則ち少なり。乃至滅盡定に至る。  
 有漏を少と爲し、無漏を大と爲す。未だ阿鞞拔致を得ず、未だ無生忍法を得ざる禪は是を  
 少と爲し、阿鞞拔致を得、無生法忍を得る禪は是を大と爲す。乃至道場に坐し、十六解脫  
 相應の定は少と爲し、金剛三昧は大と爲す。復次に、若し菩薩一切法を觀するに、常に定  
 んで散亂無き者は、依止無く分別無し、是を大と爲し、餘は皆少と爲す。慧に二種有り。

一には世間、二には出世間なり。世間慧を少と爲し、出世間慧を大と爲す。淨慧、羅慧、相慧、無相慧、分別慧、不分別慧、隨法慧、破法慧、爲生死慧、爲涅槃慧、爲自益慧、爲益一切衆生慧等も亦是の如し。復次に、聞慧を少と爲し、思慧を大と爲す。思慧を少と爲し、修慧を大と爲す。有漏慧を少と爲し、無漏慧を大と爲す。阿耨多羅三藐三菩提心を發す慧を少と爲し、六度を修行する慧を大と爲す。修慧を少と爲し、方便慧を大と爲す。諸地の中に方便展轉して、大小、乃至十地有り。是の如き等は多少を分別す。佛は菩薩の奇特を、少事の中に於て、無量無邊の功德を得と歎じたまふ、豈況んや大事をや。餘人は多くの財を捨て、身口意に苦を勉めて、福を得ること少なり。持戒、忍辱、精進、禪定、智慧等も亦是の如し。菩薩の少にして報大なるに及ばざること先に説くが如し。譬へば、口氣の如く、聲を出すに、聲則ち遠からず、聲を角中に入れば、聲則ち能く遠し。是の如く布施等は同じく少し。餘人の行は是得る所の福報則ち少し。菩薩摩訶薩は般若波羅蜜の方便力を以て廻向するが故に、無量無邊の福を得、是を以ての故に「少施、少戒、少忍、少進、少禪、少智を行せんと欲せば」と説くなり。

〔釋〕 菩薩摩訶薩、檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、羼提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜を行ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

〔譯〕 諸の波羅蜜の義は先に説くが如し。

問うて曰はく、「五波羅蜜の相即ち是れ般若波羅蜜の相ならば、般若波羅蜜の相に若か

【八】以下檀波羅蜜……を行せんと

欲せば等の文を釋す、中五波羅蜜も畢竟智波羅蜜なるも、今五波羅蜜を別に立つるに就いて明す。

【九】 施波羅蜜等を行ぜんと欲するに、智波羅蜜を行ぜざるべからざるを明す。

す、五名を差別すべからず、若し異ならば、何を以ての故に檀波羅蜜を行せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと言ふ。答へて曰はく、「亦是は同にして、亦是は異なり。異なりとは、般若波羅蜜は、諸法の實相を觀するが故に、一切の法を受けず著せざるに名け、檀は、内外一切の所有を捨てて、般若波羅蜜の心を以て施を行するに名く。是時檀を波羅蜜と名くるを得、復次に、五波羅蜜は、諸の功德を殖ゑ、般若波羅蜜は其苦心邪見を除く。一人は穀を種ゑ、一人は衆穢を去除して、果實を増長するを得しむるが如し。餘の四波羅蜜を成就するも亦是の如し。

問うて曰はく、「今云何が檀波羅蜜を行せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべき。」答へて曰はく、「檀に二種有り。一には淨、二には不淨なり。不淨とは、憍慢の故に施し、是念を作さく、「劣る者すら尙我に與ふ、我豈能はざらんや」と。嫉妬の故に施し、是念を作さく、「我怨憎は施すが故に、名を得て是の如く我に勝れり、今當に廣く施さば、要必ず彼に勝るべし」と。報を食るが故に施し、是念を作さく、「我少物を施して、千萬倍の報有らん」と。是故に布施す。名の爲の故に施し、是念を作さく、「我今好施せば、人の爲に信ぜられ、人數の中に好まれん」と。人を攝せんが爲の故に施し、是念を作さく、「我今之を施さば、人必ず我に歸せん」と。是の如き等の種種の雜結もて施を行する是を不淨と名く。淨施とは是雜事無く、但淨心を以て因緣果報を信じ、受者を敬愍して今の利を求めず、但後世の功德の爲にす。復淨施有り、後世の利益を求めず、但修心の助を以て涅槃を求む。

復淨寔有り、大悲心を生じて、衆生の爲にするが故に、自ら利して早く涅槃を得るを求めず、但阿耨多羅三藐三菩提の爲にす、是を淨施と名く。般若波羅蜜の心を以ての故に能く是の如く淨施す。是を以ての故に。檀波羅蜜を行せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と説く。復次に般若波羅蜜の力の故に、諸法に著する心を捨つ。何に況んや我心を而も捨てざらんや。吾我の心を捨つるが故に、身及び妻子を視ること草土の如くにして、戀惜する所無く、盡く以て布施す。是を以ての故に、「檀波羅蜜を行せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と説く。餘の波羅蜜も亦皆是の如し。般若波羅蜜の心を以て助成するが故なり。復次に諸餘の波羅蜜は、般若波羅蜜を得ざれば、波羅蜜の名字を得ず、亦牢固ならず。後品の中に説くが如し。五波羅蜜は、般若波羅蜜を得ざれば、波羅蜜の名字無し。又轉輪聖王の輪寶無ければ、轉輪聖王と名けず、餘寶を以て名と爲さざるが如く、亦群首は導くこと無ければ、至る所有ること能はざるが如く、般若波羅蜜も亦是の如し、五波羅蜜を導いて薩婆若に至らしむ。譬へば、大軍に健將無ければ、其事を成辦する能はざるが如く、又人身に餘根を具すと雖も、若し眼無ければ、至る所有ること能はざるが如く、又人の命根無ければ、則ち餘根皆滅し、命根有るが故に、餘根の用有るが如く、般若波羅蜜も亦是の如し。五波羅蜜は、般若波羅蜜を得ざれば、則ち增長するを得ず、般若波羅蜜を得るが故に、餘の波羅蜜を増益し具足するを得。是を以ての故に佛は「檀波羅蜜を行ぜんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と言ふ。

【二〇】以下世世の文を釋す中、大乘のといふ相好と小乘のそれとの異同を明

菩薩摩訶薩、世世の身體をして、佛と相似ならしめんと欲し、三十二相、八十隨形好を具足せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

問うて曰はく、一聲聞經の中には、菩薩は三阿僧祇劫を過ぎて後、百劫の中に三十二相の因縁を修すと説けり、今云何が世世に佛の身體と相似て、三十二相、八十隨形好有りと説く。答へて曰はく、迦梅延尼子の阿毘曇異婆沙の中に是の如き説有り、三藏の中の所説に非ず。何を以ての故に、三十二相は餘人にも亦有り、何んが貴しと爲すに足らん。難陀の如きは先世の時、一び衆僧を浴せしめ、因に願を作して曰はく、「我をして世世に端政淨潔ならしめよ」と。又異世に於て辟支佛塔に值ひ、飾るに彩畫を以てして辟支佛の像を莊嚴し、願を作して言はく、「我をして世世に色相嚴身ならしめよ」と。是因縁を以ての故に、世世に身相莊嚴なるを得て、乃ち後身に至りて出家して沙門と作るに、衆僧遙に見て其れ是を佛なりと謂ひ、悉く皆起ちて迎ふ。難陀は小乘なり、少功德を種うるすら尙此報を得、豈況んや菩薩は無量阿僧祇劫の中に於て功德を修立す、世世形體、而も佛に似ざらんや、又、彌勒菩薩の如きは、白衣の時、師を跋婆梨と名く。三相有り。一に眉間白毫相、二に舌覆面相、三に陰藏相なり。是の如き等は是れ菩薩に非ずして亦皆相有り。菩薩豈三阿僧祇劫の後に乃ち相好を種うべけんや。復次に是摩訶衍の中に菩薩有り。初發心より乃至阿耨多羅三藐三菩提まで、初より惡心を生ぜず、世世に報として五通を得、身體は佛に似たり。

【二二】相好よりする佛と菩薩との相違に就いて。

【二三】相好を得んとせば般若波羅蜜を學すべしといふに就いて明す。

問うて曰はく、「菩薩は未だ眞道を得ず、何んが身相佛の如くなるを得る。」答へて曰はく、「菩薩は衆生を度せんが爲の故に、或は轉輪聖王身と作り、或は帝釋身と作り、或は梵王身と作り、或は眷聞身、轉支佛身、佛身と作る。」首楞嚴經一の中に、文殊師利自ら説くが如し、「七十二億にして反りて一緣覺と作りて嚴涅槃す。又現じて佛と作り、龍種の尊と號せし時、世に未だ佛有るべからずして、而も衆生は佛身を見、歡喜し心に伏して化を受く」と。問うて曰はく、「菩薩、若し能く佛身と作りて説法し、衆生を度せば、佛と何の差別か有る。」答へて曰はく、「菩薩は大神力有りて十住地に住し、佛法を具足し、而も世間に住して、廣く衆生を度するが故に、涅槃を取らず、亦幻師の如く、自ら身を變化して人の爲に説法す、眞の佛身に非ず。爾りと雖も、衆生を度脱するに量有り限り有り、佛の度したまふ所の者は無量無限なり。菩薩は佛身と作ると雖も、十方世界に遍滿する能はず、佛身に普く能く無量世界に遍滿して、度すべき所の者に皆佛身を現じたまふ。亦十四日の月の如きは、光明有りと雖も猶十五日に如かず。是の如きの差別有り。或は菩薩有り、無生法忍、法性生身を得、七住地に在りて住し、五神通もて身を變ずること佛の如くにして衆生を教化す。或は初發意の菩薩は、六波羅蜜を行じ、行業の因縁もて、身相佛に似るを得て衆生を教化す。」

問うて曰はく、「三十二相は布施等の果報なり。般若波羅蜜は、無所有なること虚空の如し、云何が相好を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと説く。」答へて曰はく、「三十

【三】以下小乗の  
三十二相の業因縁  
を明す。

二相に二種有り。一には、具足すること佛の如く、二には、具足せざること轉輪聖王、難陀等の如し。般若波羅蜜は布施と和合するが故に、能く相好を具足すること佛の如し。餘人は但布施等を行じて相を具足せず。問うて曰はく、「云何が布施等は三十二相を得る。」答へて曰はく、「檀越の布施する時の如きは、受者は色力等の五事を得て、身を益するが故に、施者は手足輪相を具す。檀波羅蜜の中に、廣く説くが如し。戒忍等も亦是の如く、各各三十二相を具す。何等か是れ三十二相なる、一には足下安立相なり、餘は讚菩薩品の中に説くが如し。問うて曰はく、「何の因縁を以てか足安立相を得る。」答へて曰はく、「佛は世世に一心堅固に戒を持し、亦他をして戒を敗らしめたまはず、是業因縁を以ての故に、是初相を得たまふ。初相は自ら法の中に於て、能く動ずる者無し。

若し轉輪聖王と作れば、自らの國土に於て能く侵す者無く、如法に人民及び出家沙門等を養護す。是業因縁を以ての故に、千輻輪の相を得、是れ轉法輪の初相なり。若し轉輪聖王と作れば、輪寶を轉ずるを得、殺生の業因縁を離るるが故に、長指の相を得。不與取の業因縁を離るるが故に、足跟滿つるの相を得、四攝法を以て衆生を攝する業因縁の故に、手足纏網の相を得、上妙の衣服、飲食、臥具を以て、尊長を供養する業因縁の故に、手足柔軟の相を得、福を能くすること轉増すの業因縁の故に、足趺高き相と、一一の孔に一毛生ずるの相と、毛上に向ふの相とを得。如法に福を爲さしむる和合の因縁、及び速疾に人を誨ふるが故に妙瑞の相を得ること伊泥延鹿王の如し。如法に淨物を布施して、受者を惱さ

ざるが故に、平立して手膝を過ぐるの相と、方身の相を得ること、尼拘盧陀樹の如し。多く憍慢を修し、及び邪淫を斷じ、房舍、衣服、覆蓋の物を以て布施に用ふるが故に、陰藏の相を得ること馬王の如し。慈三昧を修し、信淨の心多く、及び好色の飲食、衣服、臥具を以て布施するが故に、金色の相と大光の相とを得。常に好んで義を問ひ、尊ぶ所及び善人に供給するが故に、鼠皮細軟の相を得。如法に事を斷じ、自ら専執せず、委しく政を執るを以ての故に、上身童子の如きの相と、腋下滿つるの相と、肩圓なるの相を得。尊長を恭敬し、誨道傳達するが故に、身體直く廣き相を得。布施を具足しを滿するが故に、七處滿つるの相を得。一切を捨施して、遺惜する所無きが故に、方輦車相を得。兩舌を離るるが故に、四十齒の相と、滿所しきの相と、前密なるの相とを得。常に惡を修行し好く思惟するが故に、白牙喻無きの相を得。妄語を離るるが故に、舌廣く薄きの相を得。美食を布施し、受者を惱さざるが故に、味中最上味の相を得。惡口を離るるが故に、梵髻の相を得。善心好眼もて衆生を觀るが故に、眼睫紺青の相と、眼睫牛王の如きの相とを得。尊ぶ所を禮敬し、及び自ら戒を持し、戒を以て人に教ふるが故に、肉髻の相を得。應に讚歎すべき所の者を讚歎するが故に、眉間白毛の相を得。是を聲聞法を用ふる三十二相の業因縁と爲す。

【四】次に大乘の  
中の三十二相の業  
因縁を明す。

摩訶衍の中の三十二相の業因縁とは、問うて曰はく、十方の諸佛、及び三世の諸法は、皆無相の相なり、今何を以ての故に三十二相を説く。一相すら尙不實なり、何に況んや三

十二をや。答へて曰はく、「佛法に二種有り、一には世諦、二には第一義諦なり。世諦の故に三十二相を説き、第一義諦の故に無相を説く。二種の道有り、一には衆生をして福を修せしむるの道、二には慧道なり。福道の故に三十二相を説き、慧道の故に無相を説く。一身の爲の故に三十二相と説き、法身の爲の故に無相を説く、佛身は三十二相、八十隨形好を以て、自ら法身を莊嚴し、十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法の諸の功德を以て、衆生を莊嚴し給ふ。二種の因縁有り。一には福德の因縁、二には智慧の因縁なり。福德の因縁もて、衆生を引導せんと欲するが故に、三十二相の身を用ひ、智慧の因縁を以て、衆生を引導せんと欲するが故に、法身を用ふ。二種の衆生有り。一には諸法の假名を知り、二には名字に著す。名に著する衆生の爲の故に、無相を説き、諸法の假名を知る衆生の爲の故に、三十二相を説く。問うて曰はく、「是十力、四無所畏の功德も亦各別相有り、云何が法身は無相なりと説く。」答へて曰はく、「一切の無漏法は十六行、三三昧に相應するが故に皆無相と名く。佛は衆生をして解せしめんと欲したまふが故に、種種に分別して説き、一切諸佛の法は、空、無相、無作の印を以ての故に、皆如法の性實際に入ると説き、而も色を見て歡喜して、道心を發す者の爲に、三十二相の莊嚴身を現じたまふ。復次に、一切衆生の中に最勝なるを顯さんが爲の故に、三十二相を現じ、而も無相の法を破らず。菩薩の如きは、初生れて七日の中は、裹むに白氈を以てし、諸の相師に示すに、相師は古聖の相書を以て之を占ひ、以て王に答へて曰はく、「我讖記の法に、若し人三十二相有れば、

在家ならば當に轉輪聖王たるべく、出家せば當に佛と作るを得べし。唯此二處にして三處  
 有ること無し」と。諸の相師出で已りて、菩薩寢息するに、復仙人有り、阿私陀と名く。  
 淨飯王に白して言さく、「我は天身を以て諸天鬼神の、淨飯王の生せる子は佛の身相有りと  
 説くを聞くが故に、來りて請ひ見らるなり」と。王大いに歡喜し、「此人は仙聖なるが故に遠よ  
 り來りて我子を見んと欲す」と。諸の侍人に勅して、「太子を將ゐて出でよ」といふ。侍  
 人王に答ふらく、「太子は小睡せり」と。是時に阿私陀の言はく、「聖王は常に一切を請じて  
 施すに甘露を以てす、睡るべからざるなり」と。卽ち坐より起ちて太子の所に詣り、臂上  
 に抱著して上下に之を相し、相し已りて涕零して自ら勝ふる能はざりき。王大いに悦はず、  
 相師に問うて曰はく、「何の不祥有りてか涕泣すること是の如くなる」と。個人答へて曰は  
 く、「假使天より金剛大山を雨らすとも、其一毛をも動かす能はず、豈不祥有らんや。太子  
 は必ず當に作佛すべし。我今年已に曉暮なり。當に無色天上に生るべく、佛を見るを得ず、  
 其法を聞かざるが故に、自ら悲傷するのみ」と。王言はく、「諸の相師の説は一事を定め  
 ず、若し在家ならば當に轉輪聖王と作るべく、若し出家せば當に作佛すべしと説けり」と。  
 阿私陀言はく、「諸の相師者は世俗を以て比知す。天眼もて諸聖の相書を知るに非ずんば  
 又具足して遍く知らず、相に於て總觀すれども、明にして審かなる能はず、是故に或  
 は「在家ならば當に轉輪聖王と爲るべく、出家せば當に佛と爲るべし」と言ふ。今太子の  
 三十二相は正滿明徹にして甚深淨潔なり、具足して必ず當に作佛すべし、轉輪聖王に非

【二五】空法の相を具せる佛が、相好もて莊嚴したまふといふを明す。

ざるなり。是を以ての故に三十二相は、一切衆生の中に於て最も殊勝と爲すを知る。無相の法と言ふは、常、淨、樂相、我相、男女生死等の相を破せんが爲の故に是の如く説けり。是を以ての故に佛法は無相の相なりと雖も、而も三十二相を現じて衆生を引導す。佛を第一なりと知りて、淨信を生ぜしめんが故に三十二相を説くも咎無し。問うて曰はく、何を以ての故に三十二相は多からず少からずと説く。答へて曰はく、若は多と説き、若は少と説かば俱に當に難有るべし。復次に、佛身の丈六を若は少相なりと説かば、則ち周遍せず、莊嚴を具せず。若し三十二相に過ぐるも、則ち復雜亂せん。譬へば嚴身の具の如きは、復富んで殊瑣有りと雖も、重ねて瓔珞を著くべからず。是故に三十二相は、多からず少からず、正に其中を得たり。復次に、若し少けて端嚴ならざれば、則ち八十隨形を留む、好處も過ぐれば則ち雜亂せん。問うて曰はく、若し八十隨形好を須ひば、何んが皆名けて相と爲さずして別に好と爲す。答へて曰はく、三相は大にして身を嚴にす。若し大なる者を説けば則ち、已に小を攝す、復次に、相は麁にして好は細なり。衆生の佛を見るは則ち其相を見る。好は則ち見難きが故に。又相は餘人と共に得。好は或は共なり、或は共ならず、是を以ての故に相と好とを別に説くなり。

(二五七) 問うて曰はく、佛は畢竟じて衆生相、吾我相を斷じて、空法の相を具足したまふ、何を以ての故に相を以て莊嚴して、相を取る者の法の如くなる。答へて曰はく、若し佛但妙法のみを以て其心身を莊嚴して、相好無くんば、或は度すべき衆生有り、心に輕慢を生じ

て謂はん、「佛は身相を具せず、一心に樂んで佛法を受くる能はず」と。譬へば不淨器を以て、諸の美食を盛るも、人の喜ばざる所なるが如く、臭皮の囊に諸の寶物を盛るに、取る者樂ばざるが如し。是を以ての故に佛は三十二相を以て、其身を莊嚴したまふ。復次に、佛は常に大眾の中に於て獅子吼を作して言はく、「我は衆生の中に於て一切の功德最も第一なり」と。若し佛の生身、相好を以て莊嚴せずんば、或は人有りて言はん、「身形醜陋なり、何んが能く知る所有らん」と。佛の三十二相、八十隨形好を以て其身を莊嚴するすら衆生は彌信せざる有り、何に況んや相好を以て莊嚴せざるをや。復次に、佛法は甚深にして常寂滅の相なるが故に、狂愚の衆生は信ぜず受けずして謂はん、「身は滅盡して一も取る所無し」と。是を以ての故に佛は廣長舌と、梵音聲と、身故大光とを以て、種種の因縁の爲に、譬喩して上妙の法を説きたまふに、衆生は佛の身相の威徳を見、又音聲を聞きて、皆歡喜し信樂す。復次に、莊嚴する物に内外有り、禪定、智慧、諸の功德等は是れ内の莊嚴にして、身相威徳、持戒具足は是れ外の莊嚴なり。佛は内外を具足したまふ。復次に、佛は一切衆生を慈念して、世に出興したまひ、智慧等の諸の功德を以て、利根の衆生を饒益し、身相の莊嚴をもて、鈍根の衆生を饒益したまふ。心の莊嚴は涅槃門を開き、身の莊嚴は天人の樂門を開く。身の莊嚴の故に衆生を三福處に置き、心の莊嚴の故に衆生を入れて三解脱門に置く。身の莊嚴の故に衆生を三惡道より抜き、心の莊嚴の故に衆生を三界の獄より抜き、是の如き等の無量の利益因縁有るが故に、相好を以て生身を

【二六】以下菩薩の家に生れんこと等の文を釋する中、初に菩薩の家を釋す。

莊嚴す。

【經】菩薩の家に生れんと欲し、鳩摩羅伽地を得んと欲し、諸佛を離れざるを得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【譯】菩薩の家とは、若し衆生の中に於て甚深の大悲心を發せば是を菩薩の家に生ずと爲す。王の家に生ずれば敢て輕んずる者無く、亦飢渴寒熱等を畏れざるが如し。菩薩道の中に入り菩薩の家に生ずるも亦是の如し、佛子なるを以ての故に諸天、龍、鬼神、諸の聖人等敢て輕んずる者無く、益益恭敬を加ふ。惡道、人天の賤處を畏れず、聲聞、辟支佛の人、外道の論師來りて、其心を沮まんとするを畏れず。復次に、菩薩は初發意より一心に願を作さく、「今日より復諸の惡心に墮せじ、但一切衆生を度脱せんと欲す、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし」と。復次に、菩薩若し能く諸法實相の不生不滅を知れば、無生法忍を得、是より以往常に菩薩道に住せん。前に『持心經』の中に説きたまふ所の如し。「我鏡光佛を見し時、諸法の無生忍を得、初めて六波羅蜜を具足せり。爾より前には都て布施持戒等無し」と。復次に若し菩薩は是念を作さく、「恆河沙等の如き劫を一日一夜と爲し、是日夜三十日を用て月と爲し、十二月を歲と爲し、是の如き歲數百千萬億を過ぎて乃ち一佛有り、是佛の所に於て、供養し持戒して諸の功德を集め、是の如き恆河沙等の諸佛有り、然る後作佛を受記せられんに、菩薩の心は懈怠せず没せず厭はず、悉く皆樂んで行ぜん」と。復次に、菩薩は諸の邪定、五逆の衆生、及び善根を斷せる衆生の中に於て、慈悲を

【二七】次に鳩摩羅伽地を得んと欲せば、鳩摩羅伽地を明し、中

生じて正道に入らしめ恩報を求めず。復次に、菩薩は初發心より以來、諸の煩惱の爲に覆はれ壞せられず。復次に、菩薩は諸法の實相を見たと雖も、諸の觀心に於て亦著を生ぜず。復次に、菩薩は自然に常に口に實言し、乃ち夢中に至るも亦妄語せず。復次に、菩薩の見る所有の色は、皆是れ佛色なり、念佛三昧力の故に、色に於ても亦著せざるなり。復次に、菩薩は一切衆生の生死の苦中に流轉し、一切の樂中に心亦著せざるを見て、但願を作して言はく、「我及び衆生は何時か當に度るべし」と。復次に、菩薩は一切の珍寶に於て、心に著を生ぜず、但三寶のみを樂ふ。復次に、菩薩は常に姪欲を斷じ、乃至念想を生ぜず、況んや實事有らんや。復次に、衆生は眼に菩薩を見れば、即ち慈三昧を得。復次に、菩薩は能く一切の法を悉く佛法と爲し、聲聞辟支佛の法、凡夫の法、種種の差別有る無からしむ。復次に、菩薩は一切法を分別し、一切法の中に於て亦法相を生ぜず、亦非法相を生ぜず、是の如き等の無量の因縁、是を菩薩家に生ずと名く。問うて曰はく、「發心より已來已に菩薩家に生ぜば、今云何が「菩薩家に生ぜん」と欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」といふ。答へて曰はく、「二種の菩薩家有り。有退轉家と不退轉家、名字家と實家、淨家と雜家、有信心堅固家と不堅固家なり。不退轉家、乃至信堅固家、是の如き等の家を得んと欲するが爲の故に、「菩薩家に生ぜん」と欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と言ふ。

【二七】次に鳩摩羅伽地を得んと欲せば、或は菩薩有り、初發心より姪欲を斷じ、乃ち阿耨

【八】次に常に諸佛を離れざらんと欲すの文を釋す。

多羅三藐三菩提に至るまで、常に菩薩道を行す。是を鳩摩羅伽地と名く。復次に、或は菩薩有り、願を作さく、「三世に童男として、出家して道を行じ、世間の愛欲を受けじ」と。是を名けて鳩摩羅伽地と爲す。復次に、又王子を鳩摩羅伽と名くるが如し。佛は法王爲り、菩薩は法の正位、乃至十地に入るが故に、悉く王子と名け、皆任じて佛と爲す。文殊師利の如きは、十力四無所畏等、悉く佛事を具するが故に、鳩摩羅伽地に住して廣く衆生を度す。復次に、又童子の四歳以上を過ぎ、未だ二十に満たざるが如きは、名けて鳩摩羅伽と爲す。若し菩薩初めて菩薩家に生ずるは嬰兒の如く、無生法忍乃至十住地を得て、諸の悪事を離るるを名けて、鳩摩羅伽地と爲す。是の如き地を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

「常に諸佛を離れざらんと欲すとは、菩薩は世世、生ずる所に、常に諸佛に値ふなり。問うて曰はく、『菩薩は當に衆生を化すべし、何の故にか常に佛に値はんと欲する。』答へて曰はく、『菩薩有り。未だ菩薩位に入らず、未だ阿鞞跋致を得ずして、記別を受くるが故に、若し諸佛を遠離せば、便ち諸の善根を壞し、煩惱に没在して、自ら度するを得ず、安んぞ能く人を度せん。人の船に乗りて、中流にして壞敗せば、他人を度せんと欲して、反りて自ら水に没するが如く、又少湯を大水池に投ずるに、少處を消すと雖も、反りて更に氷と成るが如し。菩薩未だ法位に入らず、若し諸佛を遠離せば、少功德にして方便力無きを以て、衆生を化せんと欲するに、少しく利益有り」と雖も、反つて更に墜落せん。是を以て

の故に新學の菩薩は諸佛を遠離すべからず。問うて曰はく、「若し爾らば何を以てか聲聞辟支佛を離れずと説かざるや。聲聞辟支佛も亦能く菩薩を利益せん。答へて曰はく、「菩薩は大心なり、聲聞辟支佛は涅槃の利益有りと雖も、一切智無きが故に、菩薩を教導する能はず。諸佛には一切種智有るが故に、能く菩薩を教導したまふ。象の泥に没すれば象に非ずんば出す能はざるが如し。菩薩も亦是の如く、若し非道の中に入れば、唯佛のみ能く救ひたまふ。大道を同うするが故に、是を以ての故に、「菩薩は常に諸佛に離れざらんと欲す」と説く。復次に、菩薩は是念を作さく、「我は未だ佛眼を得ざるが故に、盲の如くにして異なる無し、若し佛の爲に引導せられずんば、則ち趣く所無く、錯りて餘道に入らん、設ひ佛法を聞くとも、異處にして行ぜば、未だ教化の時節、行法の多少を知らず」と。復次に、菩薩は佛を見て、種種の利益を得。或は眼見れば心清淨となり、若し所説を聞けば、心則ち法を樂んで大智慧を得、法に隨つて修行して解脱を得。是の如き等、佛に値へば無量の利益有り、豈一心に求めて佛を見るを欲せざらんや。譬へば、嬰兒の母を離るべからざるが如く、又道を行くに糧食を離れざるが如く、大熱の時、涼風冷水を離れざるが如く、大寒の時、火を離るるを欲せざるが如く、深水を渡るに、船を離るべからざるが如し。譬へば病人の良醫を離れざるが如く、菩薩の諸佛を離れざるは上事よりも過ぎたり。何を以ての故に、父母、親屬、知識、人天王等は皆佛の如く利益する能はず、佛の利益もて、諸の菩薩は諸の苦處を離れて世尊の地に住す、是因縁を以ての故に菩薩は常

【二九】次に菩薩が諸佛を離れざるの理由を説く。

に佛を離れず。

問うて曰はく、「有爲の法は欺誑不眞にして皆信すべからず、云何が願の如く、諸佛を離れざるを得る。」答へて曰はく、「福德と智慧とを具足するが故に、乃ち應に佛を得べし。何に況んや諸佛を離れざるをや。衆生は無量劫の罪の因縁有るを以ての故に、願の如くなるを得ず。福德を行すと雖も智慧薄少なり、智慧を行すと雖も福德薄少なるが故に、所願を成ぜず。菩薩は佛道を求むるが故に、要す二忍を行す、生忍と法忍なり。生忍を行するが故に、一切衆生の中に慈悲心を發し、無量劫の罪を滅して無量の福德を得、法忍を行するが故に、諸法の無明を破して無量の智慧を得。二行和合するが故に何の願が得ざらん。是を以ての故に菩薩は世世に常に諸佛を離れず。復次に菩薩は常に愛樂して佛を念するが故に身を捨て身を受けて、恆に佛に値ふを得。譬へば衆生の習欲の心重きは姪鳥の身、謂ゆる孔雀、鴛鴦等を受く。瞋恚を習うて偏多なれば毒虫の中、謂ゆる惡龍、羅刹、蜈蚣、毒蛇等に生るるが如し。是菩薩は心に轉輪聖王、人天の福樂を貴ばずして但諸佛を念す。是故に心の重する所に隨うて身形を受く。復次に、菩薩は常に善く念佛三昧を修する因縁の故に、生るる所に常に諸佛に値ふ。般舟般三昧の中に説くが如きは、菩薩は是三昧に入れば、即ち阿彌陀佛を見る。便ち其佛に何の業因縁の故に、彼國に生ずるを得ると問ふに、佛即ち答へて言はく、「善男子、常に念佛三昧を修し、憶念して廢せざるを以ての故に、我國に生ずるを得」と。

【三】以下念佛三昧を釋す。

問うて曰はく、「何者か是れ念佛三昧にして、彼國に生ずるを得る。空へて曰はく、「念佛とは佛の三十二相、八十隨形好の金色身を念するに、身より光明を出して、遍く十方に滿つること閻浮檀金を融すが如く、其色明淨なり。又須彌山王の大海の中に在りて、日光照す時、其色明を發するが如し。行者は是時、掃て餘の色想、謂ゆる山地樹木等無く、但虚空の中に諸佛の身相のみを見るに、眞琉璃の中より赤金外に現するが如し。亦比丘の不淨觀に入れば、但身體の臆脹爛壞のみを見、乃至但骨人のみを見るに、是骨人は作者有ること無く、亦來去無く、憶想を以ての故に見るが如し。菩薩摩訶薩の念佛三昧に入りて、悉く諸佛を見ること亦復是の如し。心を攝するを以ての故に、心清淨なるが故に。譬へば、人の其身を莊嚴して、淨水の鏡に照すに、悉く見ざる無く、此水鏡の中に亦形相無く、明淨なるを以ての故に、其身像を見るが如し。諸法は本より來、常に自ら清淨なり。菩薩は善く修淨の心を以て、意に隨うて悉く諸佛を見、其疑ふ所を問ふ。佛、所問に答へたまへば、佛の所説を聞いて、心大いに歡喜し、三昧より起ちて是念を作して言はく、「佛は何の所より來りたまふ、我身も亦去らず」と。即時に便ち「諸佛は從來したまふ所無く、我も亦去る所無し」と知りて、復是念を作さく、「三界の所有は皆心の所作なり。何を以ての故に。心の念する所に隨うて、悉く皆見るを得ればなり。心佛を見るを以て、心を以て佛を作るなり。心即ち是れ佛にして、心は即ち我身なり。心は自ら知らず、亦自らを見ず。若し心相を取らば、悉く皆無智にして心も亦虛誑なり、皆無明

大智度論卷第二十九

より出づ。是心相に因りて、即ち諸法實相に入る。謂ゆる常空なり。是の如きの三昧智慧を得已りて、二行の力の故に、意の所願に隨うて諸佛を離れず、金翅鳥王の二翅を具足するが故に、虚空の中に於て、自在に至るが如し。菩薩は是三昧智慧力を得るが故に、或は今身意に隨うて諸佛を供養し、命終すれば、亦復諸佛に値遇す。是を以ての故に、「菩薩は常に諸佛を離れざらんとせば、當に般若波羅蜜を學すべし」と説く。

# 大智度論釋初品中善根供養義第四十六

卷第三十

聖者龍樹造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

諸の善根、供養を以て諸佛を恭敬し、尊重し、讚歎し、意に隨うて成就せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【一】以下諸の善根供養を以て等の文中、初に菩薩が佛を見たてまつれば必ず供具を用ふるを明す。

菩薩、既に諸佛を離れざるを得ば、當應に供養すべし。若し佛に値ふを得て而も供具無ければ甚だ悦ばずと爲す。須摩提菩薩と云ふの如きは然燈佛を見るに供養の具無く、周旋し求索して賣華の女を見、五百の金錢を以て五莖の青蓮華を買ひ得、以て佛を供養す。又薩陀波彌菩薩は、師を供養するが爲の故に、身の血肉を賣る。是の如く菩薩は既に佛を見るを得て、心に供養せんと欲し、若し供具無ければ其心に礙ふる有り。譬へば庶民は君長に遇見するに禮贖を持せざれば則ち不敬と爲すが如し、是故に諸の菩薩は供養の具を求めて諸佛を供養す。佛は須ひたまはずと雖も菩薩の心は具足するを得。譬へば農夫の好良の田に遇うて而も種子無く、功を加へんと欲すと雖も、以て力を肆にすること無ければ、心大いに愁憂するが如し。菩薩も亦是の如し、諸佛に遇ふを得て、而も供具無ければ、設ひ餘物有りとも、其意に稱はず、心に便ち礙有り。

【二】次に諸の善根を釋す。

【三】次に供養の義解。

【四】次に尊重の義解。

【五】次に恭敬と讚歎とを釋す。

諸の善根とは謂ゆる善根、果報、華香、瓔珞、衣服、幡蓋、種種の珍寶等なり。所以は何ん。或時は因を以て果を説く、一月に千兩の金を食すと云ふも、金は食すべからず、金に因りて食を得るが故に、金を食すと云ふが如し。或時は果を以て因を説く。好畫を見て是は好手なりと言ふも、手は是れ畫に非ず、畫の妙なるを見るが故に、説きて手好と言ふが如し。善根果報も亦是の如し、善根の業因縁を以て、供養の具を得るを名けて善根と爲す。問うて曰はく、『若し爾らば、何んが即ち華香等を説きて、而も其因を説かざる。』答へて曰はく、『供養の具に二種有り。一には財の供養、二には法の供養なり。若し但華香等の供養のみを説けば、則ち法の供養を攝せず、今善根供養と説けば、當に則ち財法俱に攝するを知るべし。』

供養とは、若し見、若し聞きて諸佛の功德を心に敬ひ尊重し、迎逆し侍送し、旋遶し禮拜し、曲躬し合掌し、住避して安處に坐し、飲食、華香、珍寶等を勸進し、種種に持戒、禪定、智慧の諸の功德を稱讚し、所説の法有れば信受し教誨す。是の如き善の身口意業、是を供養と爲す。

尊重とは、一切衆生の中に、徳上に過る無きを知るが故に尊と言ひ、敬畏の心、父母、師長、君王に過ぎ、利益重きが故に、重と言ふ。

恭敬とは、謙遜し、畏れ難るが故に、恭と言ひ、其智徳を推すが故に、敬と言ふ。讚歎とは、其功德を美むるを讚と爲し、之を讚するも足らずして、又之を稱揚するが故に、歎

【六】次に意に隨つて成ずと釋す。

と言ふ。

意に隨つて成就すとは、若し華を須ひて供養せんに、意の如く即ち至り、或は求め得、或は求めずして得、自然に出づる等有り、或は變化して生ず、乃至伎樂供養の具、悉く皆是の如し。問うて曰はく、「菩薩は遇ひ得れば、便ち以て供養す。何を以てか意に隨つて求索する。」答へて曰はく、「福德は心に從ふ、愛重する所に於て持用て供養せば、福を得ること増多し、阿育王の如きは、小兒たりし時、重んずる所の土を以て、持用て佛に奉り、閻浮提の王たるを得、一日の中に八萬の塔を起せり。若し大人多くの土を以て、鉢に投ずと雖も而も所得無し。重んずる所に非ざるが故なり。有人に偏に華を貴重し、其尊ぶ所を以て、持して佛を供養するに、福を得ること増多し、乃至寶物も亦是の如し、復次に時の宜しき所に隨ふ。若し寒き時は應に薪火、上衣、溫室、被褥、及以飲食を以てすべく、熱時は應に氷水、扇蓋、涼室、生薄の服、上妙の食を以てすべく、風雨の時は就いて供具を送る。是の如き等、時に隨つて供養す。又土地の宜き所に隨ひ、受者の須ふる所に隨つて、皆持して供養す。復次に、意に隨つて供養すとは、菩薩有り、佛は須ひたまふ所無きを知り、又諸物は虚誑にして幻の如く、一相は謂ゆる無相なりと知り、衆生を教化せんが爲の故に、衆生國土の重んずる所に隨つて、引導するが故に供養す。復菩薩有り、甚深の禪定を得、菩薩の神通を生じ、神通力を以ての故は、飛んで十方の佛前に到り、或は佛國に於て若し遍く天華を雨らすべくんば、即ち三千世界に滿てて持して佛を供養す。

【七】以下一切衆生の願ふ所等の文を釋す中、初に衆生の願を滿す次第を明す。

或は天梅檀を雨らし、或は眞珠の光相鮮發なるを雨らし、或は七寶を雨らし、或は如意珠の大き須彌の如きを雨らし、或は妓樂の音聲清妙なるを雨らし、或は身を以て須彌の如くし、以て燈炷と爲して諸佛に供養す。是の如き等を名けて財の供養と爲す。又菩薩は六波羅蜜を行じ、法を以て諸佛を供養す。或は菩薩有り、一地の法を行じて諸佛を供養し、乃至十地に法を行じて供養す。或時は菩薩は無生法忍を得て、自らの煩惱及び衆生の煩惱を除く。是れ法の供養なり。或時は菩薩は十地に住し、神力を以ての故に地獄の火を滅せしめ、餓鬼道に於て、皆飽滿を得しめ、畜生をして、恐怖を離るるを得しめ、人天に生じて漸く阿惟越致地に住せしむ。是の如き等の大功徳力の故に、名けて法の供養と爲す。是を以ての故に、「善根を成就するを得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と説く。

一切衆生の願ふ所の衣服、飲食、臥具、塗香、車乘、房舍、床榻、燈燭等を滿さんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

問うて曰はく、「何の次第有りてか一切衆生の願を滿さんと欲する。」答へて曰はく、「菩薩の業に二種有り。一には諸佛を供養せんが爲なり、二には衆生を度脱せんが爲なり。諸佛を供養して無量の福徳を得、是福徳を持して衆生を利益す。謂ゆる衆生の願を滿すなり。賈客の主の海に入りて寶を採り、安隱に出でて還り、所親及び知識等を利益するが如し。菩薩も是の如く、諸佛の法海に入りて無量の功徳の寶を得、衆生を利益す。小王の大王を供養して、能く歡喜せしむるに、其願ふ所の職位、財帛を與へられて、其本國に還り、人

物を利益し、怨賊を除却するが如し。菩薩は、諸佛法王を供養するが故に、記別を受くるを得、無量の善根の珍寶を以て無盡の智力を得、來りて善人の衆生に入り、貧なる者に供養し、其須ふる所に隨うて之に給與し、魔民、邪見、外道の屬は、悉く皆破壊す。是を諸佛を供養し、次いで衆生の所願を滿すと爲す。問うて曰はく、「菩薩は實に能く一切衆生の願を滿すや否や。若し、悉く衆生の願を滿さば、餘の佛菩薩は何の利益する所か有る。」若し、悉く滿たさずんば、是中に何の故に、一切衆生の願を滿さんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと説くや。」答へて曰はく、「二種の願有り。一には可得の願、二には不可得の願なり。不可得の願とは、人有り。虚空を籌量して、其邊際を盡し、及び時方の邊際を求めんと欲するに、小兒の水中の月、鏡中の像を求むるが如し。是の如き等の願は皆不可得なり。可得の願とは、木を鑽りて火を求め、地を穿ちて水を得るごとく、福を修して人天の中の生を得、及び阿羅漢辟支佛果を得、乃至諸佛法王を得。是の如き等の名は、皆可得の願なり。可得の願に二種有り、一には謂はく、世間、二には謂はく、出世間なり。是中には、世間の願の故に、衆生の願を滿たす。云何が知るを得る、飲食床臥具より乃ち燈燭に至るまで、須ふる所の物を以て、皆之を給與す。問うて曰はく、「菩薩は何を以ての故に、衆生に得易きの願を與へ、難き者を與へざる。」答へて曰はく、「願に下中上有り。下願は、今世の樂の因縁を致さしめ、中願は、後世の樂の因縁を與へ、上願は、涅槃の因縁を與ふ。是故に先づ下願、次に中願に及び、然る後に上願を與ふ。復次に、衆生の多く

は今の樂に著し、少きは後の樂を求め、涅槃を樂ふ者は轉復少し。若し多き者を説けば少きも亦攝す。復次に、此經の前後には、多く後世の涅槃の道を説き、少く今世の利事を説く。菩薩の法は、常に衆生に種種に利益を與へて、捨つること有るべからず。所以は何ん。初心は但諸の衆生をして、大乘の法を行ぜしめんと欲するも、化を受くるに堪へざるを以て、次に聲聞辟支佛の道を與へ、若し復能はずんば、當に十善四梵行等を與へて、福德を修せしむべく、若し衆生都てを樂はざれば、是の如き衆生をも遺捨すべからず。當に今世の利益、謂ゆる飲食等を與ふべし。復次に、凡夫にして能く人に飲食等を與ふと雖も、彼願を滿すには皆因縁有り。若は今世の事、若は後世の事なり。聲聞辟支佛は因縁無くして、衆生の願を滿すと雖も、而も益する所甚だ少し。菩薩摩訶薩は、檀波羅蜜の業を行ずる因縁の故に、國王と爲るを得。或は大長者と爲り、財富無量にして、四方の衆生の若し來りて求むる者には、盡く之を満足せしむ。頻頭居士の如きは、大檀越と爲り、七寶の大床を坐とし、金剛を脚と爲し、敷くに天褥を以てし、赤眞珠を以て上に帳幔と爲し、左右に立ち侍るもの各八萬四千にして、皆莊嚴奇妙なり。四大門を開き、恣に求むる所に晝夜六時に鼓を鳴し、又光明を放つに、十方無量の衆生の鼓聲を聞き、光明身に觸ること有る者は、悉く來らざるもの無し。種種の飲食を得んと欲せば、長者は其大集を見て、即時に默然として、仰いで虚空を視、時に空中より種種百味の食を雨らし、意に隨うて皆得しむ。若し衆生の自ら取らざれば、左右より給使し、分與して之に與へ、

足り満つれば乃ち止む。飲食、衣被、臥具、寶物等を須ふるも皆亦是の如し。衆生の欲する所を恣にし已りて、然る後に法を説き、四食を離れて皆阿鞞跋致地に住せしむ。是の如き等の菩薩の神通力の故に、能く衆生の願を満す。問うて曰はく、「佛の在時すら衆生に尙飢餓有り。天は雨を降さず、衆生困弊するに、佛は猶一切衆生の願を満したまふ能はず、云何が菩薩にして能く其願を満さんや。答へて曰はく、「菩薩は十地に住し、首楞嚴三昧に入り、三千大千世界に於て、或時は初發意を現じて、六波羅蜜を行じ、或は阿鞞跋致を現じ、或は一坐補處を現じて、兜率天上に於て諸天の爲に法を説き、或は兜率天上より來り下りて淨飯王宮に生れ、或は現に出家して成佛し、或は現に大衆の中にて法輪を轉じて無量の衆生を度し、或は現に涅槃に入りて七寶の塔を起し、遍く諸の國土の衆生をして舍利を供養せしめ、或時は法都て滅盡せり、菩薩の利益是の如し。何に況んや佛に於てをや。而して佛身に二種有り、一には眞身、二には化身なり。衆生有り、佛の眞身を見れば、願として満さざる無し。佛の眞身は虚空に遍く、光明遍く十方を照し、説法の音聲も亦、十方無量恆河沙等の世界に遍く、中に満つる大衆皆共に法を聴き、説法して息まず、一時の頃各聞く所に隨うて、解悟するを得。劫盡き已るが如きは、衆生の行業の因縁の故に、大雨を澍ぎ下し、間に斷絶無く、三大も制する能はざる所、惟劫盡くる有れば十方に風起り、更に互に相對して能く此水を持す。是の如く、法性身の佛は説法する所有り。十住の菩薩を除けば、三乘の人は皆持する能はず、惟十住の菩薩の不可思議なる、方便智力有り

て悉く能く聽受す。衆生、其法身の佛を見る有れば、三毒有ること無く、及び衆の煩惱、寒熱の諸苦、一切皆滅し、願として満さざる無し、如意珠の如きすら、尚衆生をして願に隨うて皆得しむ、豈況んや佛に於てをや。珠は一切世間の願を與へ、佛は一切出世間の願を與ふ。若し佛は悉く衆生の所願を満たす能はずと言はば、是語は然らず。復次に、釋迦文尼佛は王宮に身を受け、入法を受けて寒熱、飢渴、睡眠有り、諸の誹謗、老病死等を受けたまふも、内心の智慧神徳は、眞佛の正覺と異なること有る無し。衆生の所願を満さんと欲し、悉く皆能く満すも、而も満さざる者は、無數世より來、常に衆生の衣食の願を満して、而も苦を免れざるを以て、今但涅槃無爲の常樂を以て、之を益したまふ。人の所親を憐愍して、毒を雜へたる美食を與へざるが如し。是の如く世間の願は諸の結使を生じ、又復離るる時は、心に大苦を生ず。是故に以て要と爲さず。復次に、有人言はく、「釋迦牟尼佛は已に衆生の所願を満したまふも、而も衆生は自ら得る能はず」と。「毘摩羅詰經」に説くが如くんば、佛、足の指を以て地を案じたまふに、即時に國土は七寶もて莊嚴し、我佛國は是の如し。怒害多き者の爲に、佛國の異なるを現じたまふ。又龍王等の心に雨を降らすに、人に在りては水と爲り、餓鬼の身上には皆炭火と爲るが如し。問うて曰はく、「若し能く一切衆生の願を満さば、則ち衆生は邊有りて、諸の飢寒の苦を受くる者有ること無けん。何を以ての故に。一切衆生、皆願ふ所の願を満さば、苦を離れ樂を得るが故なり。」答へて曰はく、「一切を満すとは、名字の一切にして、實の一切に非ず、法句の

偈に説くが如し。

一切は皆死を懼れ、杖痛を畏れざる莫し

己を恕して讐と爲すべし、殺す勿れ杖を行する勿れ

一切は杖痛を畏ると言ふと雖も、無色の衆生の如きは、身無きが故に則ち杖痛無く、色界の衆生は、身有るべしと雖も亦杖痛無く、欲界の衆生にも、亦杖痛を受けざる有り。而も一切と言ふは、謂はく、杖を得べき者を説きて一切と言ふ。實の一切に非ず。是を以ての故に菩薩、一切衆生の所願を滿すとは、應に度すべき者を謂ふ。然るに菩薩の心は齊限無く、福德の果報も、亦量有ること無し、但衆生は無量阿僧祇劫の罪、厚く障ふるが故に得る能はず。舍利弗の弟子の羅頻周比丘の如きは、持戒精進にして乞食し、六日にして而も得る能はず、乃至七日にして命在ること久しからず。同道の者有り、食を乞ふ。持して與ふるに、鳥即ち持し去る。時に舍利弗、目犍連に語るらく、「汝大神力も此食を守護して、彼をして之を得しめよ」と。即時に目連は食を持し往いて與ふ。始めて口に向けんと欲するに、變成して泥と爲る。又舍利弗食を乞ひ、持して與ふるに而も口自ら合す。最後に佛來りて、食を持して之を與へたまふに、佛の福德の無量の因縁を以ての故に、彼をして食を得しむ。是比丘は食し已りて心に歡喜を生じ、倍信敬を加ふ。佛、比丘に告げたまはく、「有爲の法は皆是れ苦相なり」と。爲に四諦を説きたまふに、即時に比丘は漏盡を意解して阿羅漢道を得たり。薄福の衆生有り、罪甚しければ、此者は佛も救ひたまふ能は

【八】次に飲食を  
辨す。

す。又衆生は不可得なるを知るが故に、深く法性に達するが故に、諸佛は憶想有りて、是は度すべく、是は度すべからずと分別したまふこと無く、心常に寂滅にして意に増減無きを知る。是を以ての故に菩薩は、一切衆生の願を満さんと欲するも、彼に罪あるを以ての故に、而も得る能はざるも菩薩に咎無し。

飲食とは略説するに鹿細の二種有り。餅飯等の百味の食なり。經には四食の衆生の久しく住するを説くと雖も、而も此には但搗食のみを説く。餘は無色にして相與ふべからず、若し搗食を施せば則ち三食を與ふ。何を以ての故に、搗食に因るが故に、三食を増益す。經の所説の如くんば、檀越、食を施して、則ち受者に與ふるに、五事の利益有り。飲は總じて二種を説く。一には草木酒、謂ゆる蒲桃、甘蔗等及び諸の穀酒なり。二には草木漿、甘蔗漿、蒲桃漿、石蜜漿、安石榴漿、梨捺漿、波盧茶葉漿等、及び諸の穀漿なり。是の如きを和合して人中に飲食し、及び天飲食す。謂ゆる修陀甘露味、天菓食等、摩頭摩陀婆漿等なり。衆生の各各食する所は、或は穀を食する者有り、或は肉を食する者有り、或は淨なるものを食する者有り、不淨者も來りて皆飽満す。

【九】次に衣服、塗香、乘を  
辨す。

衣服とは衣に二種有り。或は衆生より生ず、謂ゆる綿絹、毛毳、皮革等なり。或は草木より生ず。謂ゆる布氎、樹皮等なり。諸の天衣有り、經緯有ること無く、自然に樹より出で、光色輕軟なり。床具とは臥榻、被褥、幃帳、枕等なり。塗香とは、二種有り。一には旃檀木等を摩して以て身に塗り、二には種種の雜香を搗いて以て末と爲し、以て其

【一】今燒香妙華を明さざるを説く

【二】次に衆生の願を満さんとせば般若波羅蜜を學すべきことを明す。

身に塗り、及び衣服に熏じ、並に地壁に塗る。乗とは、謂ゆる象、馬、車、輿等なり。房舎とは、謂ゆる土木寶物もて、成ずる所の樓閣、殿堂、宮觀等にして、以て寒熱風雨、賊盜の屬を障ふ。燈燭とは、謂ゆる脂膏、蘇油、漆蠟、明珠等なり。諸物とは、是れ一切衆生の須ふる所の物、具に説くべからざるが故に、略して諸物と言ふ。

問うて曰はく、「此中に何を以てか燒香妙華等を説かざる。答へて曰はく、『諸物を説けば、皆已に之を攝す。』問うて曰はく、『若し爾らば但應に略して三種、謂ゆる飲食、衣服、莊嚴の具を説くべし。』答へて曰はく、『此諸物は是れ須要する所の者なり。若し衆生を慈念せば、飲食を以て先と爲し、次に衣服を以てし、身垢臭なるを以て、須ふるに塗香を以てし、次に臥具を以てし、寒雨には、房舎を須ひ、黑暗には燈燭を須ふ。』問うて曰はく、『華香も亦能く臭を除く、何が故に説かざる。』答へて曰はく、『華は常に有るに非ず、亦速に萎爛し利益少きが故に。是故に説かず。燒香とは、寒には則ち須ふる所なれども、熱時には、患を爲す。塗香は寒熱に通用し、寒時には雜ふるに沈水を以てし、熱時には雜ふるに旃檀を以てし、以て其身に塗る。是故に但塗香を説く。』

問うて曰はく、『若し檀波羅蜜を行せば、無量果報を得て能く一切衆生の所願を満さん。何が故に「衆生の願を満さんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と言ふや。』答へて曰はく、『先に已に般若波羅蜜を以て和合するが故に、檀波羅蜜と名くるを得と説けり。今當に更に説くべし。衆生の願を満すべき所の者は、一國土、一閻浮提のみを謂ふに非ず、都

【二三】以下恆河の文を釋する中、初に文の次第ある因縁を擧ぐ。

て十方世界の、六趣の衆生の所願を満さんと欲す。但布施の能く辦する所に非ざるが故に、般若波羅蜜を以て近遠の相を破し、一切衆生の相と、非一切衆生の相とを破す。諸斷を除くが故に、彈指の頃に無量の身を化して、遍く十方に至り、能く一切衆生の所願を満す。是の如きの神通利益は、要す般若より出生す。是を以ての故に菩薩は、一切衆生の願を満さんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【圖】復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は、恆河沙等の如き、世界の衆生をして檀波羅蜜に於て立ち、尸羅、羼提、毘梨耶、禪、般若波羅蜜に於て立たしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】問うて曰はく、「是義の次第は何の因縁か有る。」答へて曰はく、「利に三種有り。今世の利、後世の利、畢竟利なり。復三種の樂有り。今世と後世と出世の樂なり。前に今世の樂を説けり、此には、後世出世の樂を説く。是を以ての故に衆生をして六波羅蜜に住せしむ。菩薩の衆生を愍念するは、父母の子を念ふにも過ぎ、慈悲の心は骨髓に徹す。先づ飲食を以て其身に充足して、飢渴の苦を除き、次に衣服を以て其身を莊嚴して、樂を受くるを得しむるも菩薩の心は満足せず、復是念を作さく、「衆生は已に今世の樂を得たり」と。復更に思惟すらく、「後樂を得しめん、若し世間の六波羅蜜を以て之に教へば、則ち人天の中の樂を得るも、久しくして後に還來りて生死に輪轉せん。當に復出世間の六波羅蜜を以てして、無爲の常樂を得しむべし」と。復次に、先には衣服、華香等を以て其身を莊嚴せ

【三】次に恆河の沙の如き世界を明す。

【四】次に衆生の義解。

り、今は功德を以て其心を莊嚴す。若し三種の莊嚴有れば、具足すと爲し、過ぐる者有ること無し。一には衣服七寶等、二には福德、三には道法なり。菩薩は三種を具足して、衆生を莊嚴せんと欲するが故に先づ功德の果報を説き、今功德の因縁を説く。復次に、前には大施有り、雖も而も衆生は罪の故に、悉く得る能はざるを説けり。『餓鬼經』に説くが如くんば、其食を與ふと雖も、而も嘔ふを得ず、變じて炭火不淨の物と成ると。又菩薩は一切を捨てず、當に方便を作し衆生をして衣食の利益を得しむべし、是故に教へて福業を修して自行自得せしむ。菩薩は善く因縁は強ふべからず、教を得て之を得しむるを知る。是を以ての故に次第に衆生をして六波羅蜜に住せしむ。

問うて曰はく、菩薩は、十方の一切衆生をして六波羅蜜に住せしめんと志願す。何が故に但恆河沙の如き世界の衆生と説く。答へて曰はく、聽法の者、恆河沙を聞くが爲の故なり。又新發意の菩薩に於ては無邊無量を以て多しと爲す。多ければ則ち亂を致す。若し大菩薩は恆河沙を以て數と爲さず。復次に、恆河沙の如きと説くは、是れ無邊無量の數なり。後品の中に説くが如し。復次に、恆河沙の如きとは、已に十方の諸の世界なりと説けり。此中にも亦一恆河沙と言はず、應に難を爲すべからず。是を以ての故に恆河沙の如き世界と説くも咎無し、恆河沙世界の義は先に説くが如し。

衆生とは、五衆、十八界、十二入、六種、十二因縁等の衆多の法中に於て、假に衆生と名く。是は天、是は人、是は牛、是は馬なり。衆生に二種有り。動なる者と靜なる者と

なり。動なる者は身口の業を生じ、靜なる者は能はず。有色の衆生、無色の衆生、無足、二足、四足、多足の衆生、世間と出世間の衆生、大なる者、小なる者、賢聖、凡夫、邪定、正定、不定の衆生、苦、樂、不苦、不樂の衆生、上中下の衆生、學、無學、非學、非無學の衆生、有想、無想、非有想非無想の衆生、欲界、色界、無色界の衆生有り。欲界の衆生とは三種有り。善根に上中下有るを以ての故に。上とは六欲天なり、中とは人中の富貴なり。下とは人中の卑賤なり。面類同じからざるを以ての故に、四天下別異なり。不善にも亦三品有り。上は地獄、中は畜生、下は餓鬼なり。復次に、欲界の衆生に十種有り。三惡道と人と及び六天となり。地獄に三種有り、熱地獄、寒地獄、黑闇地獄なり。畜生に三種有り。空行と陸行と水行、晝行と夜行と晝夜行、是の如き等の差別有り。鬼に二種有り。弊鬼と餓鬼なり。弊鬼は天の如く樂を受け、但餓鬼と同住して、即ち其主と爲る。餓鬼は腹は山谷の如く、咽は針の如く、身に惟三事有り、黒皮と筋と骨となり。無數百歳に飲食の名だも聞かず、何に況んや見るを得んや。復鬼有り。火口より出で、飛べる蛾の如く、火に投じて以て飲食を爲す。糞、涕唾、膿血、洗器の遺餘を食する有り。或は祭祀を得、或は産生の不淨を食す。是の如き等の種種の餓鬼有り。六欲天とは四王天等なり。六天の中間に於て別に復天有り。謂ゆる持瓔珞天、戲忘天、心慧天、鳥足天、樂見天なり。此諸天等は皆六天に攝する所なり。有人言はく、「欲界の衆生は應に十一種有るべし」と。先には五道を説き、今阿修羅道を益す。問うて曰はく、「阿修羅は即ち五道の攝する所なり。是

阿修羅は天に非ず人に非ず、地獄の苦多く畜生の形と異なる。是の如きは應に鬼道の攝する所なるべし。答へて曰はく、「然らず、阿修羅の力は三十三天と等し、何を以ての故に。或は諸天の爲に破られ、或時は能く諸天を破ればなり。經の中に説くが如し、釋提桓因は、阿修羅の爲に破られ、四種の兵衆は、嵩根の孔に入りて以て自ら曠野し、五欲の業を受くること天と相似し、佛弟子と爲る。是の如き威力は、何んが餓鬼の攝する所たるを得ん。是を以ての故に應に六道有るべし。復次に、阿修羅、甄陀羅、乾沓婆、鳩擊荼、夜叉、羅刹、浮陀等の大神の如きは、是れ天の阿修羅の民衆にして、業を受くること少しく諸天に減じ、威徳有り、變化は意に隨うて作す所なり。是故に人疑うて言はく、「是修羅は修羅に非ず」と。修羅は秦に説く者の言はく、「是阿修羅は修羅に非ず、阿修羅道は初めて名を得。餘の者と皆同一道なり」と。問うて曰はく、「經には五道有りと説けり、云何が六道と言ふ。」答へて曰はく、「佛を去ること久遠にして、經法流傳すること五百年の後、多く別異有り、部部同じからず。或は五道と言ひ、或は六道と言ふ。若し五と説く者は、佛經に於て文を遍して五と説き、若し六と説く者は、佛經に於て文を廻して六と説く。又摩訶衍の中の法華經一には、六趣の業生有りと説けり、諸の義旨を見るに應に六道有るべし。復次に、善惡を分別するが故に六道有り。善に上中下有るが故に三善道有り。天、人、阿修羅なり。惡に上中下有るが故に、地獄、畜生、餓鬼道なり。若し爾らずんば、惡に三果報有りて、而も善に二果有り、是事は相違す。若し六道有るは、義に於て違ふこと無し。問うて曰は

く、「善法にも亦三果有り。下とは人爲り、中とは天爲り。上とは涅槃なり。」答へて曰はく、「是中に應に涅槃を説くべからず、但應に衆生の果報の住處を分別すべし。涅槃は報に非ざるが故に。善法に二種有り。一に三十七品にして、能く涅槃に至る。二は能く後世の樂を生ず。今は但受身の善法を説き、涅槃に至る善法を説かず。世間の善に三品有り。上分の因縁の故に天道の果報有り、中分の因縁の故に人道の果報有り、下分の因縁の故に阿修羅道の果報有るなり。問うて曰はく、「汝は自ら阿修羅は天と力等しく、樂を受くるも、天と異らずと説く。云何が今善の下分を説きて阿修羅の果報と爲す。」答へて曰はく、「人中は出家受戒を得て以て道に至るべし、阿修羅道は結使心を覆うて、道を得ること甚だ難し。諸天は結使に隨ふと雖も、心直くして道を信ず。阿修羅衆は心多く邪曲にして、時として道に近かず、是を以ての故に阿修羅は天と相似すと雖も、其道に近くこと難きを以ての故に、故に人の下に在り。龍王、金翅鳥の力勢は大なりと雖も、亦能く變化するが故に、畜生道の中に在るが如く、阿修羅道も亦是の如し。問うて曰はく、「若し龍王と金翅鳥は力勢大なりと雖も、猶畜生道の攝と爲さば、阿修羅も亦應に餓鬼道の攝なるべし、何を以てか更に六道と作す。」答へて曰はく、「是龍王と金翅鳥は、復樂を受くと雖も、傍行の形、畜生に同じきが故に畜生道に攝す。地獄餓鬼は、形人に似たりと雖も、其大苦を以ての故に人道に入らず。阿修羅は力勢既に大にして形、人、天に似たるが故に、別して六道を立つ。是れ略して欲界の衆生を説くと爲す。色、無色界の衆生は後品の中に説くが如し。」

【二五】次に檀波羅蜜に立つに就いて。

檀波羅蜜を立つとは、菩薩、諸の衆生に語らく、「當に布施を行すべし、貧より大苦爲るは無し。貧を以ての故に、諸の惡行を作して三惡道に墮す。諸の惡行を作して、三惡道に墮すれば、則ち救ふべからず」と。衆生は聞き已りて、慳貪の心を捨てて、檀波羅蜜を行す、後品の中に廣く説くが如し。復次に、菩薩は衆生の前に於て、種種の因縁、種種の譬喩もて、爲に法を説き、慳貪を毀替す。夫れ慳貪とは、自身の須ふる所すら惜んで用ふる能はず、告げ求むる者を見れば、心濁り色變じ、即ち現身に於て、聲色醜惡にして、後世の惡業を種うるが故に形を受くること醜陋に、先に布施の因縁を種ゑざるが故に、今身には貧賤なり。財物を慳著し、多く求めて息まず。諸の罪門を聞きて、専ら惡事を造るが故に、惡道の中に墮す。復次に、生死輪轉利益の業は、布施に過ぎたるは無し。今世後世常に意に隨ひ、便ち身の事は、悉く施に従うて得、施を善導と爲して能く三樂天上、人中、涅槃の樂を聞く。所以は何ん。好施の人は聲譽流布して八方信樂し、愛敬せざる無く、大衆の中に處して畏れ難る所無く、死時に悔無ければなり。其人は自ら念ずらく、「我は財物を以て良福田に殖ゑ、人天中の樂涅槃の門我必ず之を得ん」と。所以は何ん。施は輕結を破り受者を慈念し、瞋惱を滅除し嫉妬の心息めばなり。受者を恭敬すれば、則ち憍慢を除き、決定の心施を以て疑網自ら裂け、施の果報を知れば、則ち邪見を除き及び無明を滅す、是の如き等の諸の煩惱破るれば、則ち涅槃門開く。復次に、但三樂を開くのみならず、乃ち能く無量の諸の煩悩破るれば、則ち涅槃處を開く。所以は何ん。六波羅蜜は佛道には檀を初

【六】次に尸羅に立つに就いて。

【七】次に屬提に立つに就いて。

門と爲し、餘行は皆悉く隨從すればなり。是の如き等、布施に無量の功德有り。是因縁を以ての故に、衆生をして檀波羅蜜に立たしむ。檀波羅蜜の義は先に檀の中に説くが如し。(二六)尸羅に立つとは、菩薩は衆生の前に於て戒行を讚説すらく、汝、諸の衆生は、當に持戒を學すべし、持戒の徳は、三惡趣及び人中の下賤を抜きて、天人の尊貴乃至佛道を得しむ。戒は一切衆生の衆樂の根本なること、譬へば大藏より諸の珍寶を出すが如し。戒は大護爲り。能く衆怖を滅すること、譬へば大軍の賊を破るが如し。戒は莊嚴爲り、瓔珞を著くるが如し。戒は大船爲り、能く生死の巨海を渡る。戒は大乗爲り、能く重寶を致して涅槃城に至る。戒は良藥爲り、能く結病を破る。戒は善知識爲り、世世に隨逐して相遠離せず、心をして安隱ならしむ。譬へば井を穿つに、已に濕泥を見て喜慶して自ら歡び、復憂患する無きが如し。戒の能く諸行を利益し成就すること、譬へば父母の衆子を長育するが如し。戒は知梯爲り、能く無漏に入る。戒の能く諸結を驚怖せしむること、譬へば師子の能く群獸をして攝伏せしむるが如し。戒を一切諸徳の本、出家の要と爲す。淨戒を修むる者は、所願意に隨ふこと、譬へば如意珠の念する時に得べきが如し。是の如き等種種に、戒の徳を讚じて、衆生をして歡喜發心し、尸羅波羅蜜に住せしむ。

屬提に住すとは衆生の前に於て忍辱を讚歎す。忍は一切出家の力爲り、能く諸惡を伏し、能く衆中に於て奇特の事を現す。忍は能く守護し、施戒をして毀れざらしむ。忍は大鐵爲り、衆兵加へず。忍は良藥爲り、能く惡毒を除く。忍は善勝爲り、生死の險道に於て安

隱にして患無し。忍は大賊爲り、貧苦の人に施せば、極り無きの大寶なり。忍は大舟爲り、能く生死の此岸を渡りて、涅槃の彼岸に到る。忍は礎懼爲り。能く整きて諸徳を明にす。若し人惡を加ふるも、猪の金山を措するが如く、益共明を發す。佛道を求め衆生を度するの利器なり。忍を最妙と爲す。行者は當に是念を作すべし、我若し瞋を以て彼に報ぜば、則ち自ら害を爲す、又我先世に自ら是罪有れば、意の如くなるを得ず、要必ず應に償ふべし。若し此人に於て受けずんば、餘も亦我を害せん。俱に免るるを得ず、云何が瞋を起さん一と。

復次に、衆生は煩惱の爲に牽かれ、諸の惡事を爲して、自在なるを得ず。譬へば、人、非人の爲に持せられて、而して良醫を罵辱するに、良醫は是時、但鬼を除くを爲して、其罵を嫌はず。行者も亦是の如し、衆生惡を加へて己に向ふとも、其瞋を嫌はず、但爲に瞋を除け。復次に、忍を行する人は、前に罵辱する者を視て、父母の嬰孩を視るが如く、其瞋り罵るを見て、益慈悲を加へ、之を愛すること踰深し。又復自ら念ずらく、「彼人惡を我に加ふ、是業因縁は前世に自ら造れり、今當に之を受くべし。若し瞋を以て報ぜば更に造りて後苦なり、何の時か解け已らん。若し今之を忍ばば、永く苦を離るるを得ん。是故に應に瞋を起すべからず」と。是の如き種種の因縁も瞋恚を訶し、慈悲を生じて衆生忍の中に入る。衆生忍の中に入り已りて、是念を作さく、「十方諸佛の説きたまふ所の法は、皆我有る無く、亦我所無し。但諸法和合して假に衆生と名く。機關木人の如く、能く

【二八】次に毘梨耶に立つに就いて。

動作すと躡も、内に主有る無し。身も亦是の如し、但皮骨相持して、心風轉するに隨うて念念生滅し、無常空寂にして作者有る無く、罵者無く亦受者無し。本末畢竟空なるが故に。但顛倒虚誑の故に、凡夫の心著するのみ」と。是の如く思惟し已れば則ち衆生無し。衆生無ければ、已に法の屬する所無し。但因縁の和合のみにして自性有ること無し。衆生の如きは、和合を強ひて衆生と名く。法も亦是の如くにして、即ち法忍を得。是衆生忍と法忍とを得るが故に、能く阿耨多羅三藐三菩提を得。何に況んや諸餘の利益をや」と。衆生は是を聞き已りて屬提波羅蜜に住す。

毘梨耶に立つとは、衆生に教へて言はく、「汝懈怠する莫れ。若し能く精進すれば、諸善功德悉く皆得易し。若し懈怠すれば、木に火有るを見るも、而も得る能はず、何に況んや餘事をや。是故に勸めて精進せしむ。若し人方便に隨うて精進すれば、願として得ざる無し。凡そ勝法を得るは、因縁無きに非ず、皆精進より生ず。精進に二相有り。一には能く諸の善法を進生し、二には能く諸の惡法を除く。復三相有り。一には事を造らんと欲す。二には精進して作す。三には休息せず。復四相有り。已に生じたる惡法は、之を斷じて滅せしめ、未だ生ぜざる惡法は、能く生ぜざらしめ、未だ生ぜざる善法は、能く發生せしめ、已に生ぜざる善法は、能く增長せしむ。是の如き等を精進の相と名く。精進の故に能く一切の善法を助成す。譬へば、火は風の助を得て其然ゆること乃ち熾なるが如く、又世間の勇健なる人の、能く山を越え海を渡るが如く、道法は精進して乃ち能く佛道を得る

に至る。何に況んや餘事をや」と。衆生は聞き已りて、皆精進波羅蜜に立つ。復次に菩薩は未だ阿耨多羅三藐三菩提を發さざる者有るを見て、阿耨多羅三藐三菩提法を讚歎するを爲し、一切諸法の中に於て最も第一爲り、極めて尊貴爲り。能く一切を饒益して、諸法實相不誑の法を得しむ。大慈悲有り、一切智、金色の身相、第一微妙、三十二相、八十隨形好、無量の光明、無量の戒、定、智慧、解脫、解脫知見、三達無礙を具す。一切の法に於て、無礙にして解脫す。是の如くなるを得れば、一切身生の中に最も上尊と爲し、應に一切世間の供養を受くべし。若し人但心に佛を念するすら、尙無量無盡の福德を得、何に況んや精進、布施、持戒、供養、承事、禮拜するをや。衆生に語けて言はく、「佛事は是の如し。汝等當に無上道心を發すべし。精進を勤修し如法に行する者は、之を得ること難からず」と。衆生は是を聞き已りて、便ち無上道心を發す。若し發心する者は、但空なるのみにては得べからず。當に精進波羅蜜を行すべし、檀波羅蜜を行じて、次に尸羅波羅蜜、屬提波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜を行す。五波羅蜜を行するは、則ち是れ毘梨耶波羅蜜なり。若し大乘の心を發さざれば、當に辟支佛道を教ふべし。若し辟支佛道無ければ、聲聞道を行するを教ふ。若し聲聞道無ければ、教へて色を離れて、無色定の寂滅安樂を受けしむ。若し無色定無ければ、教へて欲を離れて、色界の種種の禪定の樂を受けしむ。若し禪無ければ、十善道を修して、人天中の種種の樂を受けしむ。自ら懈怠する莫れ。空しく所得無く、貧窮下賤にして、種種に勤苦するは、甚だ爲に患ふべし。懈怠の法は最も弊惡爲

【九】次に禪に立つに就いて。

り、今世後世の利益善道を破壊す。衆生聞き已りて諸の善法を集め、勤めて精進を行す。禪に立つとは、菩薩は衆生の前に於て禪定の清淨の樂、内樂、自在樂、離罪樂、今世後世の樂、聖の受くる所の樂、梵天の樂、遍身に受くる樂、深厚妙樂を讚歎すらく、「汝諸の衆生は何を以てか五欲不淨の樂に著し、畜生と同じく諸の罪垢の樂を受けて、而も是妙樂を捨つる。若し汝能く小樂を捨つれば、則ち大樂を得ん。汝見すや、田夫の少種子を棄てて、後に大果を獲るが如く、人の王に少物を獻じて、大報を得るが如く、小鈎の餌もて、而も大魚を得るが如く、捨つる所甚だ少くして獲る所大いに多し。智者も亦是の如し、能く世間の樂を捨つれば甚深の禪定の快樂を得。既に此樂を得て、反りて欲樂を見るに、甚だ不淨と爲し、獄より出づるが如く、病疹差ゆるを得て、更に藥を求めざるが如し。復次に禪定は實智の初門と名く。智慧をして澄清にして能く諸法を照さしむ。燈の密室に在れば、其明を用ふるを得るが如く、若し禪定に依れば、四無量、背捨、勝處、神通、辯才等の諸の甚深の功德を得、悉く皆具ふるを得れば、能く瓦石を變じて如意寶珠と成らしむ。何に況んや餘事をや。意に隨うて爲す處、能く作さざる無し。地に入るごとく水の如く、水を履むこと地の如く、手に日月を捉へて、身焦冷せず、化して種種の禽獸の身と爲りて、而も其法を受けず。或時は身を變じて虚空に充滿し、或時は身微塵の若く、或は輕きこと鴻毛の如く、或は重きこと太山の若し。或時は足指を以て地を按ずるに、天地大いに動すること草葉を動かすが如し。是の如き等の神通變化力は、皆禪より得。衆

【二〇】次に般若波羅蜜に立つに就いて。

生は是を聞き已りて、禪波羅蜜に於て立つ。

般若波羅蜜に立つとは、菩薩は諸の衆生に、當に智慧を學すべきを教ふ。智慧とは、其明第一なるを名けて慧眼と爲す。若し慧眼無ければ、肉眼有りと雖も、猶故に是れ盲なるが如く、眼有りと云ふと雖も、畜生と異る無し。若し智慧有れば、自ら好醜を別ち、他の教に隨はず。若し智慧無ければ、人に隨うて東西すること、牛、駱駝の鼻を穿たれて、人に隨ふが如し。一切有爲法の中に、智慧を上と爲し聖の親愛する所なり。能く有爲法を破するが故に。經中に説くが如くんば、諸寶の中に於て智慧寶を最と爲し、一切の利器の中にて慧刀の利を最と爲す。智慧の山頂に住すれば、憂患有ること無く、諸の苦惱の衆生を觀じて、悉く見ざる無し。智慧の刀は、能く無始の煩惱、生死の連鎖を斷ち、智慧力の故に、能く六波羅蜜を具し、不可思議無量の佛道を得、一切智を成ず。何に況んや聲聞、辟支佛及び世間の勝事をや。是智慧増長し、清淨にして、沮壞すべからざるを名けて波羅蜜と爲す。衆生之を聞き已りて、般若波羅蜜に住す。復次に、菩薩は或時は口を以てせずして教へ、或は神足光明を現じて、衆生をして六波羅蜜に住せしめ、或は種種の餘縁を現じ、乃至夢中にも爲に因縁を作して、其をして覺悟せしめ、衆生をして六波羅蜜に住せしむ。是故に經に「衆生をして、六波羅蜜に住せしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と言ふ。

【三】一善根を佛の福田の中に殖ゑて、阿耨多羅三藐三菩提を得るに至るまで、盡きさらん

【三】以下一善根を佛の福田の中に植う等、初に善根を明す。

【三】次に佛の福田を明す。

と欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【一】善根とは三善根なり。無貪善根、無瞋善根、無癡善根なり。一切の諸の善法は、皆三善根より生じ、增長すること藥樹草木の根あるに因りての故に、生成し增長するを得るが如し。是を以ての故に名けて諸の善根と爲す。今善根と言ふは、善根の因縁なる供養の具にして、謂ゆる華香燈明及び法供養持戒誦經等なり。因中に果を説く、何を以ての故に。香華は不定なれども、善心を以て供養するが故に名けて善根と爲す。布施は即ち是れ福に非ず、但能く慳貪を破し、善法の門を開く善根なれば名けて福と爲す。針の縫を導きて衣を縫ふに、縫ふは針に非ざるが如し。一とは、若し華、若し香、若し燈明、若し禮敬、若し誦經、持戒、若し禪定、若し智慧等の一一の供養、及び法供養もて、諸佛の田中に殖うるなり。

佛田とは、十方三世諸佛の若し佛の在世、若し形像、若し舍利、若し但佛を念ず。植うとは、專心に堅著するなり。問うて曰はく、經には種種の福田と言ふ、今何を以てか獨り佛田に殖うと言ふ。答へて曰はく、種種の福田有り、雖も佛を第一の福田と爲す。十力、四無畏、十八不共法、是の如き等の無量の佛法もて、具足したまふを以て、是故に獨り佛田に殖うと説く。法寶は佛の師なりと雖も、若し佛、法を説きたまはざれば無用と爲る。好藥有り、雖も、若し良醫無ければ、藥は則ち用無きが如し。是を以ての故に法寶は上なりと雖も、而も前に佛寶を説く、何に況んや僧寶をや。復次に、佛田は能く無量の果報を

【三三】次に盡さずを釋す。

獲、餘は無量と言ふと雖も、而も差降有り。是を以ての故に佛田は第一なり。

盡きずとは、諸佛は無盡の功德を成就したまふが故に、中に於て福を殖うるに、福も亦盡きざるなり。復次に、佛の功德は無量無邊無數無等なるが故に、福を殖うる者の福も亦盡きず。復次に、佛は菩薩爲りし時、一切衆生を緣じたまへり。衆生、無量無邊なるが故に、福も亦無盡なるが如し。復次に、佛田は清淨にして愛等の諸の煩惱の穢草を抜き、淨戒を平地と爲し、大慈悲を良美と爲し、諸の惡邪の賊土を除き、三十七品を溝港と爲し、十力、四無所畏、四無礙智等を垣堵と爲して、能く三乘の涅槃の果を出生す。種を此無上無比の田に殖うれば、其福無盡なり。問うて曰はく、一切の有爲法は、無常相なるが故に、皆盡に歸す。福は因縁より生ず、何んが不盡なるを得ん。答へて曰はく、一切の不盡なりと言はず、自ら乃至、佛たるを得るまでの中間に盡きずと言ふ。復次に、一切の有爲法は念念生滅すと雖も、相續して斷ぜず果報失せざるが故に、名けて盡きずと爲す。燈の如きは、焰焰として生滅すと雖も滅と名けず、脂盡きて炷滅すれば、乃ち滅と稱すべし。福も亦是の如く、深心を良田に種うるが故に、乃至法盡くるも而も亦盡きず。復次に、菩薩は諸法實相を知り、涅槃の不盡なるが如く、福德は諸法實相に入るが故に而も亦不盡なり。問うて曰はく、若し闍らば涅槃は不盡なれば、福德も亦應に常に不盡なるべし。云何が乃ち佛に至る中間に盡きずと言ふ。答へて曰はく、是福德とは智慧力を以ての故に、是功德をして涅槃の如く、畢竟空にして不生不滅ならしむ。是を以ての故に涅槃の如しと

喩ふ、涅槃に即するには非ず。若し是れ涅槃ならば喩と爲すべからず。若し是れ涅槃ならば、云何が果報の、成俣して而も盡きざるあらんや。譬へば三解脱門、空、無相、無作の如し。解脱の畢竟空相なるが如きは、是れ空解脱門なり。世間を觀するに亦畢竟空なり。解脱無相の相の如きは、是れ無相解脱門なり。世間を觀するに亦無相の相なり。解脱無作の相の如きは、是れ無作解脱門なり。世間を觀するに亦無作の相なり。是を以ての故に善根を佛の福田に殖る、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、而も盡きざらんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと説く。

大智度論初品中諸佛稱讚其命釋論第四十七

復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は、十方の諸佛をして其名を稱讚せしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

問うて曰はく、「菩薩、若し諸法は畢竟空にして、内に吾我無きを觀じ、已に憍慢を破らば、云何が諸佛をして其名を稱讚せしめんと欲する。又菩薩の法は應に諸佛を供養すべし、云何が反りて諸佛の供養を求むる。答へて曰はく、「佛法に二門有り。一を第一義門と爲し、二を世俗法門と爲す。世俗門を以ての故に、諸佛をして讚歎せしめんと欲す。諸佛の爲に讚歎せらると雖も、而も我を見ず衆生相を取らず。世間の假名の故に説く、汝が云

【三四】以下十方の文の中、初の諸佛の稱讚供養する理由を述べ。

何が反りて佛の供養を求むる」と言へるは、後品の中の如し。佛の讚歎したまふ所の菩薩は、畢竟するに阿鞞跋致阿鞞多羅三藐三菩提なり。今是菩薩は決定して是阿鞞跋致を知るを得んと欲するに不を以てす。是を以ての故に、佛の讚歎を求む、供養を求むるには非ず。復次に、餘人、餘の衆生は、貪欲瞋恚愚癡有りて、心を覆ふが故に、實の如く讚歎する能はず。何を以ての故に。若し偏に愛する所有れば、實の過を見ずして但功德のみを見る。若し偏に瞋る所有れば、但其過のみを見て其徳を見ず。若し愚癡多ければ、如實に其好醜を見る能はず。諸天世人は智慧有り、三毒薄き者と雖も亦如實に讚するを得る能はず。猶謬失有り。一切智無きが故なり。結使を盡さざるが故なり。聲聞辟支佛は三毒盡きたりと雖も、亦如實に讚する能はず。猶餘氣有りて未だ盡きず、又智慧具足せざるが故なり。唯佛一人のみ、三毒及び氣水く盡きて、一切智を成就したまふが故に、能く如實に讚じて不増不減なり。是を以ての故に行者は諸佛の所讚を得て、其實徳を知らんと欲し、餘人の稱讚を求めざるなり。問うて曰はく、「若し諸佛は三界を出て世間に著せず、我及び我所有る無くんば、外道惡人を視ても、大菩薩阿羅漢と一等にして異る無けん。云何が菩薩を讚歎する。答へて曰はく、「佛は吾我無く、憎愛有る無く、一切法に於て心著したまふ所無しと雖も、衆生を憐愍し、大悲心を以て一切を引導したまふが故に、善人を分別して讚じたまふ所有り。亦惡魔の所願を破壊せんと欲するは、佛の讚歎したまふを以ての故に、無量の衆生は菩薩の恭敬供養を愛樂し、後に皆佛道を成ず。是を以ての故に諸佛は菩薩を讚

【三五】佛が菩薩を讚歎したまふに就て。

歎したまふ。

(二五)問うて曰はく、「云何が讚歎する。」答へて曰はく、「如し佛は大衆の中に於て說法するに、衆生をして甚深の法に入らしめんと欲したまふが故に、是菩薩を讚じたまふ。薩陀波崙等の如し。復次に、佛は菩薩を讚歎して言はく、「是菩薩は能く諸法の畢竟空を觀じ、亦能く衆生に於て大慈悲有り、能く生忍を行じて亦衆生を見ず、法忍を行すと雖も、一切法に於て著を生ぜず、宿命の事を觀すと雖も、始見に墮せず、衆生を觀すと雖も、無餘涅槃に入りて邊見に墮せず、涅槃は是れ無上の實法なりと知ると雖も、亦能く身口意の善業を起し、生死の中に行くと雖も、而も深心に涅槃を愛樂し、三解脱門に住すと雖も、涅槃を觀じ、亦本願及び善行を斷ぜず、是の如き等の種種の奇特功德は甚だ有り難しと爲す」との復次に、若し菩薩は未だ無生忍を得ず、未だ五神通を得ざるも、生死の肉身に大慈悲心有れば、能く衆生の爲の故に、内外の有らゆる貴惜する所の者を、悉く能く施與す。外は謂はく、著する所の妻子、上妙の五欲、如意珠最上の寶、安樂の國土等なり。内は謂はく、身體、肌肉、皮膚、骨血、頭目、髓腦、耳鼻、手足なり。是の如き等の施は甚だ有り難しと爲す。是故に諸佛は其德を讚歎したまふ。若し菩薩、法位に入りて神通を得れば、苦行を行すれども難しと爲すに足らず。是菩薩は生身の肉眼を以て、志願弘曠にして大悲心有り、佛道を愛樂す。是の如き事を行するは甚だ希有と爲す。復次に、若し菩薩は持戒清淨に具足して、持戒破戒を分別する所無く、一切諸法の畢竟不生常空に於て法忍精進して、

休やすまず息いきはず、著ちやくせず厭いとはず。精進しやうじん懈怠たいたいは一相いちさうにして異ことならず、無量むりやうむ無邊へんび無數むすう劫じやくに、整修せいしゆし  
 精進しやうじんして、都たて甚深じんじんの禪定ぜんぢやうを受行じゆせんと欲ほつし、依止えしする所ところ無く、定ぢやうと亂らんと異ことならず、定ぢやうよ  
 り起おこたずして能よくく身みを護まもること無量むりやうに、遍あまく十方じふぱうに至いたりて説法せっぽうして人を度あし、深智しんち慧えを  
 行ぎやうじて、一切いっせつ法の不生ふじやう不滅ふめつ、非不生ひふじやう非不滅ひふめつ、亦非不生やくふじやう亦非不滅やくふめつを觀かんじし、  
 諸しよの語言ごごんを過すぎ、心行しんぎやう處滅じよめつし、壞くわいすべからず破やすべからず、受じゆくべからず著ちやくすべからず、  
 諸聖しよせいの行處ぎやうじよは淨じやうなること涅槃ねはんの如ごとく、亦是また觀かんにも著ちやくせず、意いも亦沒またつせず、能よくく智慧ちゐを以もつて  
 而しかも自ら饒益じやういやくす。是かくの如ごときの菩薩ぼさつを諸佛しよぶつは讚歎さんたんしたまふ。復次またつぎに、菩薩ぼさつは未いまだ受記じゆきを得えず、  
 未いまだ無生むじやう法忍ぽうにんを得えず、生なれて佛ぶつに値あはず、賢聖けんせいを見みず、正思しやうし惟ゐを以もつての故ゆゑに、能よくく諸法しよぽうの  
 實相じやくさうを觀かんじ、實相じやくさうを觀かんずと雖しかも、心しん亦また著ちやくせざるなり、是かくの如ごときの菩薩ぼさつは、十方じふぱうの諸佛しよぶつ皆みな  
 共に讚歎さんたんしたまふ。復次またつぎに、菩薩ぼさつは、甚深じんじん無量むりやう無邊へんび不可思議ふかしぎの佛法ぶつぽうを聞きき、自みづから未いまだ智慧ちゐ  
 を得えず、未いまだ及およばずと雖しかも、而しかも能よくく心しんを定ぢやうめて信樂しんがくして、疑悔ぎげを生しやうせず、若しし魔ま、佛ぶつと  
 作り來きたりて、詭ぎりて其意そのいを説とくも、意いに増減ぞうげん無し。是かくの如ごときの菩薩ぼさつは諸佛しよぶつの讚さんじたまふ。阿  
 なり。復次またつぎに、諸しよの菩薩ぼさつ有り、一時いちじに發心はつしんする中なかに、疾しやくに成佛じやうぶつする者もの有あれば、佛ぶつは則すなはち  
 讚歎さんたんしたまふ。大精進だいしやうじん力りき有あるが故ゆゑなり。釋迦しやくぢあ文尼ぶんに佛ぶつの如ごときは、彌勒みらく等の諸しよの菩薩ぼさつと同  
 時に發心はつしんしたまひしも釋迦しやくぢあ文尼ぶんに佛ぶつは、精進しやうじん力りきの故ゆゑに、九劫くじやくを超越てうぎやうしたまへり。復次またつぎに、若  
 し菩薩ぼさつ有り、菩薩ぼさつの事こと、謂いはゆる十地じふぢ、六波羅蜜ろくぱらみつ、十力じゆりき、四無所畏しよむそゐ、四無礙智しよむゐぢ、十八不共法じちはちふくごうぽう  
 等らう、無量むりやうの清淨じやうじやうの佛法ぶつぽうを具足ぐそくし、衆生しゆじやうの爲ための故ゆゑに、久ひさしく生死しんじに住ぢゆうして、阿耨多羅三藐あうたろさんめつ三藐さんめつ

【三六】以下一たび  
意を發し等の文を  
釋す。

三菩提を取らず、廣く衆生を度せば、是の如きの菩薩は諸佛讚歎したまふ。何者か是なる。文殊師利、毘摩羅詰、觀世音、大勢至、遍吉等の如し。諸の菩薩の upper として、三界を出で、無央數の身を變化して生死に入る。衆生を教化するが故なり。是の如き希有の事は皆甚深般若波羅蜜より生ず。是を以ての故に、「諸佛の其名を稱歎するを得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と説く。

【經】復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は一たび意を發し、十方如恆河沙等の世界に至らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】菩薩は身に通變化の力を得て、十方恆河沙等の身と作り、十方恆河沙等の世界に於て、一時に能く到る。問うて曰はく、「經に説くが如くんば、一彈指の頃に六十念有り。若し一念の中に、能く一方恆河沙等の世界に至るすら、尙信すべからず、何に況んや十方恆河沙等の世界は、時少くして、所到の虚多きをや。」答へて曰はく、「經に五事の不可思議を説く。謂ゆる衆生の多少、業の果報、坐禪人の力、諸龍の力、諸佛の力なり。五不可思議の中に於て佛力は最も不可思議なり。菩薩は深禪定に入りて、不可思議の神通を生ずるが故に、一念の中に、悉く十方諸佛の世界に到る。四種の神通の中に説くが如し。唯佛菩薩のみ如意疾遍神通有り。金翅鳥の子の若きは、始めて殻より出で一須彌より一須彌に至る。諸の菩薩も亦是の如し、無生忍力を以ての故に、諸の煩惱の無明の殻を破り、即時に一念の中に無量の身と作り、遍く十方に至る。復次に、菩薩は一切無量世の罪、悉く已に消

【三七】以下一たび音を發し等の文を釋す。

滅し、智慧の力を以ての故に、能く一切諸法を轉ず。謂ゆる小を能く大と爲し、大を能く小と爲し、能く千萬無量劫を以て一日と爲し、又能く一日を以て千萬劫と爲す。是菩薩は、世間の主として、欲する所自在なり、何の願か滿さざらん。毘摩羅詰經一所説の如くんば、七夜を以て劫壽と爲す。是因縁を以ての故に、菩薩は神通力に乗じて、能く速疾に十方世界を超越す。問うて曰はく、前の五不可思議の中には、菩薩有ること無し。今何を以てか菩薩の不可思議を説く、答へて曰はく、或時は因中に果を説く。日に百斤の金を食するが如きは、金は食すべからず。金に因りて食を得るが故に、金を食すと云ふ。是を因中に果を説くと爲す。或時は果中に因を説く。好畫を見て、是は好手なりと言ふが如し。是を果中に因を説くと爲す。諸の菩薩も亦是の如し、菩薩を因と爲し、諸佛を果と爲す。若し佛力は不可思議なりと説けば、當に已に菩薩を説くを知るべし。是を以ての故に「一たび意を發し、十方恆河沙世界に到らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と言ふ。

復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は、一たび音を發し、十方如恆河沙等の世界を以て聲を聞かしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

菩薩は六神通を得て、梵聲の相を増長し、三千大千世界を過ぎて、十方恆河沙等の諸の世界に至る。問うて曰はく、「若し爾らば、佛の音聲と何んが異らん。答へて曰はく、「菩薩の音聲は恆河沙等の數有るも、佛の音聲は到る所限數有ること無し。」密跡經一中の説の如くんば、日蓮、佛の音聲を試みんとして、極めて西方に至るに、猶佛音を聞くこと

若も對面するが如くなり。問うて曰はく、「若し爾らば佛、常に國土聚落在して、說法教化したまふに、閻浮提の内の人には、佛邊に至らざれば、則ち聞くを得ず。何を以てか之を知る。多く遠方より來りて、法を聽かんと欲する者有るが故に。」答へて曰はく、「佛の音聲に二種有り。一を密中の音聲と爲し、二を不密の音聲と爲す。密の音聲は、先に已に説けり。不密の音聲は、佛邊に至りて乃ち聞く。是れ亦二種の弟子有り。一を出世の聖人と爲し、二を世間の凡夫と爲す。出世の聖人は、目捷速等の如く、能く微密の音聲を聞き、凡夫の人は其近く所に隨うて乃ち聞く。復次に、諸の菩薩は、正位に入るを得、生死の身を離れて、法性眞形を得、能く十方無量の佛身、及び遍照の光明を見、亦能く諸佛の六十種の極音、無量の音聲を聞くを得。諸の大菩薩は、未だ佛の如き音聲を具足せずと雖も、佛の音聲の中に於て、普く其分を得。是佛、菩薩の音聲に三種有り。一には先世に善き音聲の因縁を種うるが故に、咽喉の中に微妙の四大を得、能く種種の妙好遠近の音聲を出す、謂ゆる一里、二里、三里、十里、百里、千里、乃至三千大千世界に音聲遍滿す。二には神通力の故に、咽喉の四大より聲を出し、遍く三千大千世界、及び十方恆河沙世界に滿つ。三には佛の音聲にして、常に能く十方虚空に遍滿す。問うて曰はく、「若し佛の音聲は、常に能く遍滿せば、今の衆生は何を以てか常に聞くを得ざる。」答へて曰はく、「衆生は無量劫より以來、作す所の惡業に覆はる、是故に聞えず。譬へば、雷電霹靂は、聾者は聞えざれども、雷聲は滅する無きが如し。佛も亦是の如し、常に衆生の爲に說法したま

ふこと、龍の大雷聲を震ふが如し。衆生は罪あるが故に、自ら聞くを得ず。今世の人の精進持戒する者の如きは、念佛三昧に於て、心定を得る時、罪垢障らず、即ち佛を見、佛の説法の音聲の清了なるを聞くを得。菩薩は、三種の音聲の中に於て二種を得んと欲す。是二種の音聲は、甚難だ希有なるが故に。業果の音聲の如く自然に得べきが故に。是を以ての故に「菩薩摩訶薩は一音を以て十方恆河沙等の世界をして、聲を聞かしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と説く。

復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は、諸佛の世界をして斷ぜざらしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【二六】以下諸佛の世界をして等の文を釋す。

佛の世界の不斷とは、菩薩は、國國をして相次ぎ、皆衆生をして發心し、作佛せしめんと欲するなり。問うて曰はく、「次第と言ふは、一國の前後の相次と爲すや。十方世界の次第と爲すや。若し一國の相次ならば、大悲普く一切衆生を覆ふ。何を以てか餘國に及ばざる。若し十方一切世界の次第ならば、餘の佛菩薩は何の利益する所か有らん。」答へて曰はく、「菩薩の心願は、一切世界をして皆悉く作佛せしめんと欲し、大心曠遠にして齊限有ること無し。是心を以て、諸の智慧、無量の福德、神通力を集むるが故なり。又衆生の作佛の因縁を種うる者に隨ひ、是菩薩は皆悉く作らしむ。若し一切世界皆作佛の因縁を種るば、餘の佛菩薩は應に益有るべからずとせば、但是事は然らず。復次に、十方世界は無量無邊なり。一菩薩にして盡く過く諸の世界に、佛種を斷ぜざらしむるを得べか

らず。諸餘の菩薩も各因縁に隨うて皆其分有り。慈悲大なるを以ての故に、願も亦無量にして利益の心は齊限有ること無し。衆生は種種無量なるが故に、一佛一菩薩の盡く度すべき所に非ず。問うて曰はく、「若し事に稱はずんば、何が故に願を作す。」答へて曰はく、「心願をして曠大清淨ならしめんと欲するが故に。慈三昧を行ずるが如きは、衆生をして苦を離れしむる能はずと雖も、但自ら心をして曠大清淨ならしめんと欲して、利益の願を成ずるが故なり。諸佛、大菩薩の力の如きは、皆能く一切衆生を度すれども、而も衆生の福縁未だ集らず、未だ智慧有らず、因縁會せざるが故に度するを得ず。大海水の如きは、一切衆生取り用ふれども、水は窮竭せず、但衆生の用ふるを得る能はざるのみなり。餓鬼の衆生の如きは、自らの罪の因縁を以て水を見るを得ず。設ひ之を見るを得るも、即時に乾れ竭き、或は洋銅と爲り、或は膿血と成る。佛も亦是の如し。大慈悲智慧有り、無量無邊にして、悉く能く衆生を満足するも、而も衆生は罪業の因縁の故に、佛に値はず。設ひ佛に値ふを得るも、如し餘人と異なる無ければ、或は瞋恚を生じ、或は誹謗を起す。是因縁を以ての故に、佛の威相神力を見ず、佛に値ふを得と雖も、而も利益無し。復次に、二因、二縁有りて正見を發す。謂ゆる内因、外縁なり。佛は外の因縁を具足したまひて、三十二相、八十隨形好、無量の光明有り、其身を莊嚴し、種種の神力、種種の音聲有り、意に隨うて説法し、一切の疑を斷じたまふ。但衆生は内の因縁を具足せず、先に見佛の善根を種ゑず、而して信敬せず精進し持戒せず、鈍根深厚にして世樂に著す。是を以ての故

に利益有る無きは、佛の咎と爲すに非ず。佛は衆生を化度するの神器、利用、悉く皆備足したまふ。譬へば、日出づるに、日有れば則ち觀、盲者は見ず、設使日有るも、而も日無ければ、則ち觀る所無きが如し。是故に日に咎無きなり、佛の明も亦是の如し。問うて曰はく、「云何が佛の世界の因縁斷ぜざる。」答へて曰はく、「菩薩は衆生の中に於て、種種の因縁もて佛道を讚歎し、衆生をして阿耨多羅三藐三菩提を發せしむ。漸漸に六波羅蜜を行じ、然る後に諸の世界に於て各各作佛す。若は一國に於て次第に作佛し、或は異國に於て各自に作佛す。是を佛國を斷ぜずと名く。復次に、菩薩は疾く智慧を集め、具足して作佛し、無量の衆生を度して、涅槃に入らんと欲したまふ時、菩薩の爲に受記して「我滅度の後、汝次いで佛と作らん」と。展轉して、皆是の如くにして斷絶せざらしむ。若し佛、菩薩に記したまはずんば、則ち佛國を斷ぜん。譬へば、王、太子を立て、展轉して是の如くにして、國祚斷ぜざるが如し。問うて曰はく、「何を以てか有佛の世界を貴び、無佛の國を賤む。」答へて曰はく、「是事は問を致すべからず。佛は是れ十方世界を莊嚴するの主なり。何に況んや一國をや。若し有佛の國を離るれば、人天の樂を受くと雖も、而も是佛の恩力の致す所を知らず、畜生と異なる無けん。若し一切諸佛有りて、世に出でたまはずんば、則ち三乘涅槃の道無く、常に三界の獄に閉在して、永く出づる期無けん。若し世に佛有れば、衆生は三界の牢獄を出づるを得ん。譬へば、二國の間の日無き處の如し。是中の衆生は冥中より生じ、冥中に從うて死す。若し佛生れたまふ時は、光明暫く照して、各各相見し、

乃ち日月を見ん。炤たされたる衆生は、「彼は大福爲り、我等は罪有ること是の如し」と知る。或時は、佛、光明を以て、遍く諸の佛國を炤したまふに、有佛國の衆生は、佛の光明を見て、則ち大いに歡喜し、念じて言はく、「我等は黒闇なるに、彼は大明爲り」と。復次に、有佛の國の衆生は、罪福有るを知り、人は三歸、五戒、八齋、及び出家、五家等、種種甚深の禪定、智慧、四沙門果、有餘無餘涅槃等、是の如き種種の善法を受く。是因縁を以ての故に、佛國を貴しと爲す。若し佛國の衆生は、佛を見ずと雖も、經法に值遇して善を修し、持戒、布施、禮敬等の涅槃の因縁を種る、乃ち畜生に至るまで、皆能く福徳の因縁を種う。若し無佛の國は、乃ち天人に至るまで善を修する能はず。是を以ての故に菩薩は願を生じて、佛の世界をして斷ぜざらしめんと欲す。

大智度論卷第三十

大智度論釋初品中十八空義第四十八 卷第三十一

聖者龍樹造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は内空、外空、内外空、空空、大空、第一義空、有爲空、無爲空、畢竟空、無始空、性空、自相空、諸法空、不可得空、無法空、有法空、無法有法空に住せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【一】以下十八空を釋す中、初に内空等を釋す。

【二】無量の諸法の中に何故に十八空を説くやを明す

内空とは、内法にて内法の空なるなり。内法とは、謂ゆる内の六入なる眼、耳、鼻、舌、身、意なり。眼は空にして、我無く我所無く、眼法無し、耳、鼻、舌、身、意も亦是の如し。外空とは、外法にて外法の空なるなり。外法とは、謂ゆる外の六入なる色、聲、香、味、觸、法なり。色空とは、我無く、我所無く、色法無きなり。聲、香、味、觸、法も亦是の如し。内外空とは、内外の法において内外の法の空なるなり。内外法とは、謂ゆる内外の十二入なり。十二入の中には、我無く我所無く内外法無し。問うて曰はく、「諸法は無量なり、空は法に隨ふが故に、則ち亦無量なり、何を以てか但十八と説くや、若し略説せば應に一空なるべし。謂ゆる一切法空なり。若し廣説せば一一の法に隨うて空なり。謂ゆる眼空、色空等甚だ多し。何を以てか、但十八空と説く。」答へて

【三】次に智度の空と十八空との一異を明す。

曰はく、「若し略説せば則ち事周からず、若し廣説せば即ち事繁し、譬へば藥を服すること少ければ、則ち病を除かず、多ければ則ち其患を増し、病に應じて藥を投じ、増減せざらしむれば則ち能く病を愈すが如し。空も亦是の如し、若し佛但一空を説きたまはば、則ち種種の邪見及び諸の煩惱を破る能はず、若し種種の邪見に隨うて空を説けば、空は則ち多きに過ぎ、人は空相に愛著して斷滅に墮在せん、十八空を説けば、正しく其中を得。復次に、若し十と説き、若し十五と説くも、俱に亦疑有り、此は間に非ざるなり。復次に、善惡の法には、皆定數有り、若し四念處、四正勤、三十七品、十力、四無所畏、四無礙智、十八不共法、五樂、十二入、十八界、十二因緣、三毒、三結、四流、五蓋等なり。諸法も亦是の如し、各定數有り。十八種の法の中に著を破るを以ての故に、十八空有りと説く。問うて曰はく、「般若波羅蜜の空と十八空と異と爲すや」と爲すや。若し異ならば十八空を離る、何を以てか般若の空と爲す。又佛の説きたまふが如くば、何等か是れ般若波羅蜜なる。謂ゆる色空、受、想、行、識空、乃至一切種智空なり。若し異ならざれば、云何が十八空に住せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと言ふ。答へて曰はく、「因緣有るが故に異と言ひ、因緣有るが故に」と言ふ。異とは般若波羅蜜を諸法實相と名け、一切を滅する觀法なり。十八空は則ち十八種の觀にして、諸法をして空ならしむ。菩薩は是諸法實相を學し、能く十八種の空を生ず、是を異と名く。一とは、十八空は是れ空無所有相なり。般若波羅蜜も亦空無所有相なり。十八空は是れ相を捨離し、般若波羅蜜も一切法の中に、

亦相を捨離す。是十八空は相に著せず、般若波羅蜜も亦相に著せず。是を以ての故に般若波羅蜜を學せば則ち是れ十八空を學するなり、異らざるが故なり。般若波羅蜜に二分有り、小有り大有り。大を得んと欲せば、先づ當に小方便門を學すべし。大智慧を得んと欲せば、當に十八空を學すべし。是小智慧方便門に住せば能く十八空を得。何者が是れ方便門なる。謂ゆる「般若波羅蜜經」を讀誦し、正憶念し、思惟して、説の如く修行するなり。譬へば人有り、種種の好寶を得んと欲し、當に大海に入るが如し。若し人有り、内空等の三昧、智慧の寶を得んと欲せば、當に般若波羅蜜の大海に入るべし。

【四】以下内空、外空、内外空を明す。

問うて曰はく、「世間に四顛倒有り。謂ゆる不淨の中に淨顛倒有り、苦中に樂顛倒有り、無常の中に常顛倒有り、無我の中に我顛倒有り。行者は四顛倒を破せんが爲の故に、四念處と十二種の觀を修す。謂ゆる初め内身に三十六種の不淨充滿し、九孔より常に流れて、甚だ厭患すべく、淨相不可得なりと觀ず。淨相不可得なるが故に、内空と名く。行者は既に内身の不淨を知る。外の所著を觀するも亦復是の如し、俱に實に不淨なり。愚夫は狂惑し、姪欲の爲に、心を覆はるるが故に之を謂ひて淨と爲す。所著の色を觀するも亦我身の如く淨相は不可得なり、是を外空と爲す。行者若し己身の不淨を觀するも、或は外色を謂ひて淨と爲し、若し外の不淨を觀するも、或は己身を謂ひて淨と爲せば、今俱に内外を觀せしむ。我身不淨なれば、外も亦是の如く、外身不淨なれば、我も亦是の如く、一等にして異

る無く、淨は不可得なり。是を内外空と名く。行者は思惟して内外の身俱に實に不淨と知  
 る。而も惑ふ者は愛著し、愛著深きが故に、由りて以て身を愛く。身は大苦爲り、而も愚  
 は以て樂と爲す。問うて曰はく、「三受は皆外入に攝する所なり、云何が内受を觀ずと言ふ。」  
 答へて曰はく、「六塵始めて六情と和合して生ずる樂、是を外樂と名け、後貪著深く入りて  
 生ずる樂は是を内樂と名く。復次に、内法の縁する樂、是を内樂と名け、外法の縁する樂、  
 是を外樂と名く。復次に、五識相應の樂、是を外樂と名け、意識相應の樂、是を内樂と名  
 く。麁樂を名けて外樂と爲し、細樂を名けて内樂と爲す。是の如き等内外の樂を分別す。  
 苦愛、不苦不樂受も、亦是の如し。復次に、行者は思惟すらく、「是内樂を觀するに實に可  
 得なり。即ち分別して實に不可得なりと知らず。但是苦なるを強ひて名けて樂と爲すのみ。  
 何を以ての故に、是樂は苦の因縁より生じ、亦苦の果報を生ず。樂には厭足無きが故に苦  
 なり」と。復次に人疥を患ひ、之を掻き火疥に向へば少しく樂なりと雖も、後轉身を傷め  
 て、則ち大苦と爲るが如し。愚人は之を謂ひて樂と爲し、智者は但其を苦と見る。是の如  
 く世間は樂顛倒の病の故に、五欲の樂に著し、煩惱轉多し。是を以ての故に行者は樂と見  
 ず、但苦と見る。病の如く、癩の如く、瘡の如く、刺の如し。復次に、樂は少く苦は多く、  
 少樂は現ぜざるが故に名けて苦と爲す。大河の水に一合の鹽を投ずれば、則ち鹽相を失し、  
 名けて鹹と爲さざるが如し。

復次に、樂は不定なるが故に、或は此は以て樂と爲し、彼は以て苦と爲す。彼は以て樂

と爲し、此は以て苦と爲す。苦する者は樂と爲し、失する者は苦と爲す。愚は以て樂と爲し、智は以て苦と爲す。樂の患を見る者は苦と爲し、樂の過を見ざる者は樂と爲す。樂の無常相を見ざれば、樂と爲し、樂の無常相を見れば苦と爲す。未だ欲を離れざる人は以て樂と爲し、欲を離れたる人は以て苦と爲す。是の如く樂を觀じて苦と爲し、苦を觀ずること箭の身に入るが如し。不苦不樂を觀ずるに、無常變異の相なり。是の如き等の三種の受を觀ずれば、心則ち捨離す、是を内受の空を觀すと名く。外受、内外受を觀ずるも、亦是の如し。行者は是念を作さく、「若し樂即ち是れ苦ならば、誰か是苦を受けん」と。念じ已りて則ち心受を知り、然る後に心を觀じて實と爲し虚と爲す。心を觀ずるに、無常生住滅の相なり。苦受心、樂受心、不苦不樂受心各各念を異にす。覺樂の心滅して苦心生じ、苦心は爾所の時住し、住し已りて還滅す。次に不苦不樂受の心を生じ、爾所の時不苦不樂受の心住すと知るも、住し已りて還滅し、滅し已りて還樂心を生ずるを知る。三受無常なるが故に心も亦無常なり。復次に、染心、無染心、瞋心、無瞋心、癡心、不癡心、散心、攝心、縛心、解脫心、是の如き等の心は、各各異相なるを知る。故に知んぬ、心は無常にして一として定心の常住する無く、受苦受樂等の心は和合の因縁より生じ、因縁離散せば心も亦隨うて滅すと。是の如き等内心、外心、内外心の無常相を觀す。問うて曰はく、「心は是れ内入に攝す、云何が外心と爲す。」答へて曰はく、「内身を觀ずるを名けて内心と爲し、外身を觀ずるを名けて外心と爲す。復次に内法を緣ずるを内心と爲し、外法を緣ずるを外

心と爲す。復次に、五識は常に外法を縁じて分別する能はざるが故に、名けて外心と爲し、意識は能く内法を縁じ、亦好醜を分別するが故に、名けて内心と爲す。復次に意識の初めて生ずるや未だ分別し決定する能はず、是を外心と爲す。意識轉深うして、能く分別して相を取る、是を内心と名く。是の如き等内外心を分別す。行者は心意轉異なり、身を知りて不淨相と爲し、受を知りて苦相と爲し、心の住せざるを知りて無常相と爲すも、結使未だ斷せざるが故に、或は吾我を生じて、是の如く思惟すらく、「若し心、無常ならば、誰か是心を知り、心は誰に屬すと爲ん。誰か心の主と爲りて、而も苦樂を受けん。一切の諸物は誰の所有ぞ」と。即ち分別して、別に主有ること無しと知る。但五衆に於て相を取るが故に人相有りと計し、而して我心を生ず。我心を以ての故に我所を生じ、我所の心生ずるが故に、我を利益する者有れば貪欲を生じ、我に違逆する者には而も瞋恚を生ず。此結使は智より生ぜずして狂惑より生ず。故に是を名けて癡と爲す。三毒は一切煩惱の根本爲り。亦吾我に由るが故に、福德を作しては、我の爲に後に當に得べく、亦助道の法を修しては、我當に解脱を得べしと爲す。初めて相を取るが故に名けて想衆と爲し、吾我に囚りて結使、及び諸の善行を起す、是を行衆と名く。是二衆は、則ち是れ法念處なり。想、行、衆法の中に於て我を求むるに不可得なり。何を以ての故に。是諸法は皆因縁より生じ、悉く是れ作法にして而も牢固ならず、實我の法無し。行は芭蕉の如く、葉葉に之を求むるの中に堅相有ること無し。遠く野馬を見れば、水無けれども水想有るが如く、眼を誑惑

す。是の如き等の内法、外法、内外法を觀す。問うて曰はく、「法は是れ外人に攝す、云何が内法と爲す。答へて曰はく、「内法を名けて内心と爲し、想衆、行業に相應す。外法を名けて外心相應と爲し、想衆、行業及び心不相應の諸行及び無爲法に相應す。一時に等しく觀するを名けて内外法と爲す。復次に、内法を名けて六情と爲し、外法を名けて六塵と爲す。復次に、身、受、心及び想衆、行業を總觀するを法念處と爲す。何を以ての故に。行者は既に想衆、行業及び無爲法の中に於て我を求むるに不可得なり、還身、受、心の中に於て、求むるも亦不可得なり。是の如く一切法の中に、若は色、若は非色、若は可見、若は不可見、若は有對、若は無對、若は有漏、若は無漏、若は有爲、若は無爲、若は遠き、若は近き、若は龜なる、若は細なる、其中に我を求むるに、皆不可得なり。但五衆和合の故に、強ひて名けて衆生と爲す。衆生は即ち是れ我なり。我は不可得なるが故に亦我所無し。我所は不可得なるが故に、一切諸の煩惱は皆衰薄と爲る。復次に、身念處は一切色法に名く。行者、内色を觀するに無常、苦、空、無我なり。外色を觀じ、内外色を觀するも亦是の如し。受、心法も亦爾なり。四念處の内觀相應の空三昧を内空と名け、四念處の外觀相應の空三昧を外空と名け、四念處の内外觀相應の空三昧を内外空と名く。問うて曰はく、「是空は是三昧力の故に空と爲すや、是法は自ら空なりと爲すや。答へて曰はく、「名けて三昧力と爲すが故に空なり。經に説くが如し。三三昧とは、三解脱門、空、無相、無作なり。是空三昧は、身、受、心法を緣じて、我我所を得ざるが故に名けて空と爲す。問う

て曰はく、『四念處は空法、皆應に無常、苦、空、無我を觀すべし。何を以ての故に、身は不淨と觀じ、受は苦なりと觀じ、心は無常と觀じ、法は無我と觀ずる。』答へて曰はく、『四法は皆無常、苦、空、無我と觀ずと雖も、而も衆生の身中には多く淨顛倒に著し、受の中には多く樂顛倒に著し、心の中には多く常顛倒に著し、法の中には多く我顛倒に著す。是を以ての故に行者は身は不淨なりと觀じ、受は苦なりと觀じ、心は無常なりと觀じ、法は無我なりと觀ずるなり。復次に、内外空とは内外に定まれる法有ること無く、互に相因りて待つ故に謂ひて内外と爲す。彼は以て外と爲し、我は以て内と爲す。我は以て外と爲し、彼は以て内と爲す。人の繋がるる所の内法に隨うて、内と爲し、人の著する所の外法に隨うて、外と爲す。人の白の舎を内と爲し、他の舎を外と爲すが如し。行者は是内外法を觀するに定相無きが故に空なり。

復次に是内外法は自性有る無し。何を以ての故に、和合して生ずるが故に。是内外法も亦和合の因縁の中に在らず。若し因縁の中に無き者は餘處にも亦無なり。内外法の因縁も亦無なり。因果無きが故に内外法は空なり。問うて曰はく、『内外法は定んで有なり、云何が無と言ふ。手足等の如きもの和合するが故に、身法生ずる有り、是を内法と名く。梁、椽、壁等の如きもの和合するが故に、屋法生ずる有り、是を名けて外と爲す。是身法は別名有り、雖も亦足等と異ならず。所以は何ん、若し足等を離れては、身は不可得の故に。屋も亦是の如し。』答へて曰はく、『若し足は身と異らずんば頭は應に是れ足なるべし、足と

身と異ならざるが故なり、若し頭は是れ足ならば、甚だ笑ふべしと爲す。問うて曰はく、  
「若し足と身と異らざるは是の如きの過有り。今は是等相合するが故に更に法有りて生ずべ  
し、名けて身と爲す。身は是等と異なると雖も、常に足に依りて住すべし。衆縷の相合し  
て能く縷を生じ、是縷は縷に依りて住するが如し。答へて曰はく、「是身法は是等の分中に  
具有すと爲すや、分有すと爲すや。若し具有せば頭中に應に脚有るべし、何を以ての故に  
身法を具有するが故に。若し分有せば分と異ら無し。又身は是れ一法にして所因の者は  
多なり。一は多と爲らず、多は一と爲らず。復次に、若し是等の分を除きて別に身有らば、  
一切世間と皆相違背せん。是を以ての故に身は即ち是れ諸分なりと言ふを得ず。亦諸分と  
異ると言ふを得ず。是を以ての故に則ち身無し。身無きが故は是等も亦無し。是の如き等  
を名けて内空と爲す。房舍等の外法も亦是の如し、空なるを名けて外空と爲す。問うて曰  
はく、「身舎等を破すれば、是れ一を破し異を破すと爲す。一を破し異を破するは破は外道  
の經なり。佛經の中には實に内外法有り。謂ゆる内は六情、外は六塵なり。此れ云何が無  
ならん。答へて曰はく、「是内外の法和合して假に名字のみ有り。亦身の如く舍の如し。復  
次に、略して説くに二種の空有り。衆生空と法空なり。小乗の弟子は鈍根なるが故に、爲  
に衆生空を説く、我我所無きが故に、則ち餘法に著せず。大乘の弟子は利根なるが故に、  
爲に法空と説くに、即時に世間は常空にして、涅槃の如しと知る。聲聞の論議師は内空を  
説く。内法の中には、我無く我所無く、無常にして作者無く、知者無く、受者無し、是を

内容ないようと名なく。外空げくうも亦是また是こゝろの如ごとし。内法ないぽうの相さう、外法げぽうの相さうは即すなはち是こゝろ空くうと説とかず。大乘だいじやうは内法ないぽうの中なかに内法ないぽうの相さう無なく、外法げぽうの中なかに外法げぽうの相さう無なしと説とく。般若波羅蜜ぼんげはらみの中なかに説とくが如ごとくんば、色しきの色しきたる相さうは空くうなり。受じゆ、想じやう、行ぎやう、識しきの識しきたる相さうは空くうなり。眼げんの眼げんたる相さうは空くうなり。耳に、鼻び、舌ぜつ、身み、意いの意いたる相さうは空くうなり。色しきの色しきたる相さうは空くうなり、聲しやう、香かう、味み、觸じゆく、法ぽうの法ぽうたる相さうは空くうなり。是かくの如ごとき等とうの、一切いちぎの諸法しよぽうは自法空じぽうくうなり。問とうて曰いはく、「此こゝろ二種にしゆの説せつ、内ない外げの空くうは、何なにか是こゝろれ實じつなる。空くうへて曰いはく、「二には皆是みな是こゝろれ實じつなり。但たゞ小智鈍根せうちどんこんの爲ための故ゆゑに先まづ衆生空しゆじやうくうを説とき、大智利根だいぢりこんの爲ために法空ぽうくうを説とく。人ひとの閉獄へいごくせられて、桎梏ちやくこくを破壊はみし獄卒ごくそつを傷殺きやうころして意いに隨したがうて去さるを得え、又有またあるは盜たうを怖畏ふゐし牆壁じやうへきを穿うち、亦また免めれ出でづるを得えるが如ごとし。聲聞しやうもんは、但たゞ吾我ごがの因縁いんえんを破はして、諸しよの煩惱ぼんぷを生なぜず、諸法しよぽうの愛あいを離はれ、老病死らうびやうし、惡あく道の苦くを怖畏ふゐするも、復欲ふくよくの本末ほんまつを推求すいきうして、了了りやうりやうに諸法しよぽうを壞破わいはせず、但得脫たんとくだつを以もつて事ことと爲なす。大乘だいじやうは三界さんがいの獄ごくを破やぶり、魔衆ましゆを降伏かうふくし、諸しよの結使けつしを斷たじ及び習氣じゆきを滅めつし、一切いっさい諸法しよぽうの本末ほんまつを了知りやうちし、通達無礙つうたつむゐに、諸法しよぽうを破散はさんし世間せけんをして涅槃ねはんの如ごとく、同じく寂滅じやくめつの相さうならしめ、阿耨多羅三藐三菩提あうたろさんみやくさんみやくを得えて、將まさに一切衆生いっさいしゆじやうを三界さんがいより出いでしめんとす。問とうて曰いはく、「大乘だいじやうは何なんの方便ほうべん有りてか諸法しよぽうを破壞はみする。」答こたへて曰いはく、「佛説ぶつせつきたまはく、「色しきは種種しゆしゆの因縁いんえんより生なじて、堅實けんじつ有あること無なし。水みづの波浪はうまつして泡沫はうまつを成なし、暫しばらく見みえて即すなはち滅めつするが如ごとく、色しきも亦是また是こゝろの如ごとし。今世こんぜの四大しだいは、先世せんぜの行業ぎやうぎふの因縁いんえん和合わがふするが故ゆゑに色しきを成なずるを得え、因縁いんえん滅めつするが故ゆゑに色しきも亦また俱ともに滅めつす。無常道むじやうだうを行なじ、轉まじて空門くうもんに入る。所以ゆゑんは何なんん、

諸法は生滅して、住する時有ること無く、若し住する時無ければ則ち取るべき無し。復次に、有爲の相なるが故に生の時に滅有り、滅の時に生有り。若し已生の生は、用ふる所無く、若し未生の生ならば、生ずる所無けん。法と生とは、亦異ること有るべからず、何を以ての故に、生若し法を生ぜば、應に生を生ずること有るべく、是の如く復生有るべくんば、是れ則ち無窮ならん。若し生を生ずるに更に生無くんば生も亦生ずること有るべからず。若し生有り、生ずること有る無ければ法も亦生ずること有るべからず。是の如く生は不可得なり、滅も亦是の如し。是を以ての故に諸法は空にして不生不滅なり。是を實と爲す。復次に諸法若し有ならば終に無に對せん。若し後に無ならば初も亦無なるべし。人の履を著くるが如し。初より已に有るが故に微細にして覺せず。若し初め無ならば故らに則ち應に常に新なるべし。若し後に有たらば故らに相は初も亦有ならん。法も亦是の如く、後の有無の故に初も亦有無なり。是を以ての故に一切法は應に空なるべし。衆生は顛倒して向の六情に著するを以ての故に、行者は是顛倒を破するを名けて内空と爲す。外空、内空も亦是の如し。

【五】次に空空を明す。

空空とは空を以て内空、外空、内外空を破し、是三空を破するが故に名けて空空と爲す。復次に、先づ法空を以て内外法を破し、復此空を以て是三空を破す、是を空空と名く。復次に、空三昧を以て、五衆の空を觀じ、八聖道を得、諸の煩惱を斷じて、有餘涅槃を得。先世の業因縁の身命盡くる時、八道を放捨せんと欲するが故に、空空三昧を生ず、是を空

【三〇】  
明す。

次に大空を

空と名く。問うて曰はく、「空と空空と何等の異か有る。」答へて曰はく、「空は五受業を破し、空空は空を破す。問うて曰はく、「空若し是れ法空ならば、已に破すと爲す。空若し法空に非ずんば、何の破する所ぞ。」答へて曰はく、「空は一切法を破し、唯空のみ有りて在り。空にして、一切法を破し已らば、空も亦應に捨すべし。是を以ての故に須らく是れ空なるべし。復次に、空は一切法を緣じ、空空は但空のみを緣す。一の健兒有り、一切の賊を破る。復更に人有り、能く此健人を破るが如く、空空も亦是の如し。亦藥を服するが如し。藥は能く病を破し、病已に破するを得ば、藥も亦應に出すべく、若し藥を出されば、則ち復是れ病なり。復空を以て諸の煩惱の病を滅するも、恐らくは空復患を爲さん。是故に空を以て空を捨す。是を空空と名く。復次に空を以て十七空を破する故に名けて空空と爲す。

大空とは、聲聞法の中には法空を大空と爲す。『雜阿含』の大空經に説くが如くんば、生は因、老死に緣たり。有人の、「是老死は是れ人の老死なり」と言ふが如し。二は俱に邪見なり、是人の老死は則ち衆生空なり、是老死は是れ法空なり。『摩訶衍經』に十方を説いて、「十方の相は空なり」と。是を大空と爲す。問うて曰はく、「十方空は、何を以てか名けて大空と爲す。」答へて曰はく、「東方に無邊なるが故に、名けて大と爲し、亦一切處に有なるが故に名けて大と爲し、一切色に遍するが故に名けて大と爲し、常に有なるが故に名けて大と爲し、世間を益するが故に名けて大と爲し、衆生をして迷悶せざらしむるが故に名けて

大と爲し、是の如く大方能く破するが故に名けて大空と爲す。餘の空は因縁生の法を破す。作法應法は破し易きが故に名けて大と爲さず。是方は因縁生の法に非ず、作法に非ず、微細の法にして、破し難きが故に、名けて大空と爲す。問うて曰はく、「若し佛法の中には方無し。三無爲、虚空、智縁盡、非智縁盡も亦攝せざる所なり、何を以てか方有りと云ふや。亦是れ常是れ無爲法にして因縁生の法に非ず。作法微細法に非ず。」答へて曰はく、「是方なる法は聲聞の論議の中には無し、摩訶衍法の中には世俗諦を以ての故に有り。第一義の中には一切法は不可得なり、何に混んや方をや。五衆の和合を假に衆生と名くるが如く、方も亦是の如し。四大造色の和合の中に此間彼間等を分別し、假に名けて方と爲す。日出の處は是れ則ち東方、日没の處は是れ則ち西方なり。是の如き等は是れ方の相なり。是方は自然に常に有なるが故に因縁生に非ず、亦先無にして今有、今有にして後無なるにあらざるが故に、作法に非ず、現前に知るが故に、是れ微細の法に非ず。問うて曰はく、「方若し是の如くならば、云何が破すべき。」答へて曰はく、「汝聞かずや、我先に世俗諦を以ての故に有にして、第一義の故に破すと説けり。俗諦有なるを以ての故に斷滅の中に墮せず、第一義もて破するが故に常の中に墮せず、是を略して大空の義を説くと名く。問うて曰はく、「第一義空は亦能く無作法、無因縁法、細微法を破す、何を以て大空と言はざる。」答へて曰はく、「前に已に大の名を得るが故に名けて大と爲さず、今第一義の名は異りと雖も義は實に大と爲す。出世間には涅槃を以て大と爲し、世間には方を以て大と爲す。是を以ての故

【七】次に第一義空を明す。

に第一義空も亦是れ大空なり。復次に、大邪見を破するが故に、名けて大空と爲す。行者慈心を以て東方の一國土の衆生を緣じ、復一國土の衆生を緣じ、是の如く展轉して緣する時の如きは、若し盡く東方の國土を緣すと謂はば、則ち邊見に墮し、若し未だ盡さずと謂はば、則ち無邊見に墮す。是二見を生ずるが故に、即ち慈心を失す。若し方空を以て是東方を破すれば、則ち有邊無邊見を滅す。若し方空を以て東方を破せざれば、則ち東方心に墮し、心に隨うて已まざれば、慈心則ち滅して、邪心則ち生ず。譬へば大海の潮の時、其常限に至れば、水は則ち旋還するに、魚有り、若し還らずして則ち漂はば、露地に在りて諸の苦患有り、若し魚に智有れば、則ち水に隨うて還り、永く安隱なるを得るが如く、行者も是の如し。若し心に隨うて還らざれば、則ち邪見に漂在し、若し心に隨うて還れば、慈心を失はず。是の如く大邪見を破するが故に、名けて大空と爲す。

第一義空とは第一義は諸法實相に名く。破せず壞せざるが故なり。是諸法實相も亦空なり。何を以ての故に。受くる無く、著する無きが故に。若し諸法實相は有ならば受くべく著すべし、無實なるを以ての故に受けず著せず。若し受け著せば即ち是れ虚誑なり。復次に諸法の中の第一の法を名けて涅槃と爲す。阿毘曇の中に説くが如し。云何が有上法、一切有爲法、及び虚空、非智緣盡にして、云何が無上法、智緣盡なる」と。智緣盡は是れ即ち涅槃なり。涅槃の中には、亦涅槃の相無し、涅槃空は是れ第一義空なり。問うて曰はく、『若し涅槃は空無相ならば、云何が聖人は、三種の乘に乗じて涅槃に入る。又一切の佛法は、

【八】次に有爲空と無爲空とを明す

皆涅槃の爲の故に説く。當へば衆流の苦海に入るが如し。容へて曰はく、涅槃有り、是れ第一寶無上法なり。是に二種有り。一には有餘涅槃、二には無餘涅槃なり。愛等の諸の煩惱を斷ず、是を有餘涅槃と名く。聖人有り、今世に受くる所の五衆盡きて更に復受けざる、是を無餘涅槃と名く。涅槃無しと言ふを得ず。衆生は涅槃の名を聞きて、邪見を生じ、涅槃の音聲に著して、若は有なり、若は無なりとの戲論を作す、著を破するを以ての故に、涅槃は空なりと説く。若し人有に著するは、是れ世間に著するなり。若し無に著するは、則ち涅槃に著す。是凡人の著する所の涅槃を破して、聖人の得る所を破せず、何を以ての故に、聖人は一切法の中に於て相を取らざるが故なり。復次に、愛等の諸の煩惱を假に名けて縛と爲す。若し道を修して是縛を解き、解脫を得れば即ち涅槃と名く。更に法有りて涅槃と爲すもの無し。人の滅れる杖を脱するを得て、而して戲論を作し、是は杖、是は脚なり、何者か是れ解脫なるの如し。是人は怪しむべし、脚杖の外に於て更に解脫を求む。衆生も亦是の如し、五種の杖を離れて更に解脫の法を求む。復次に、一切法は第一義を離れず、第一義は諸法實相を離れず、能く諸法實相をして空ならしむる是を名けて第一義空と爲す、是の如き等の種種を名けて第一義空と爲す。

有爲空、無爲空とは、有爲法とは因縁和合の生に名く、謂ゆる五衆、十二入、十八界等なり。無爲法は、因縁無く、常に不生不滅なるに名く、虚空の如し。今有爲法は二の因縁の故に空なり。一には我無く我所無く、及び常相不變異なるは、得べからざるが故に空な

二には有爲法の有爲法たる相は、空にして不生不滅なり。所有無きが故なり。問うて曰はく、「我、我所、及び常相は不可得なるが故に應に空なるべし。云何が有爲法の有爲法たる相は空なりと言ふや。」答へて曰はく、「若し衆生無ければ、法は所依無く、又無常なるが故に、住する時無し、住する時無きが故に不可得なり、是故に法も亦空なるを知る。問うて曰はく、「有爲法の中に、常相は不可得ならば、不可得とは、是れ衆生空と爲すや、是れ法空と爲すや。」答へて曰はく、「有人言はく、「我心顛倒の故に我を計して常と爲す。是常を空すれば則ち衆生空に入る」と。有人言はく、「心を以て常と爲す、梵天王の是四大を説くが如くんば、四大は色を造り、悉く皆無常なり、心意識は是れ常なり、是常を空すれば則ち法空に入る」と。或は有人言はく、「五衆は即ち是れ常なり、色衆は變化有りと雖も而も亦滅せざるが如く、餘衆も心を説くが如し。五衆の空は即ち是れ法空なり、是故に常空も亦法空の中に入ると。復次に有爲法、無爲法の空とは、行者は、有爲法無爲法の實相は作者有ること無く、因縁和合の故に有なり。皆是れ虚妄にして憶想分別より生じ、内に在らず外に在らず、兩の中間に在らず、凡夫の顛倒の見の故に有なりと觀す。智者は有爲法に於て其相を得ず、但假名なるを知る。此假名を以て凡夫を導引して、其虚誑不實にして、生無く、作心無く、著する所無きをしらしむ。復次に、諸の賢聖人は、有爲法を縁せずして道果を得、有爲法の空を觀するを以ての故に、有爲法に於て、心繫著せざるが故なり。復次に、有爲を離れて則ち無爲無し。所以は何ん。有爲法の實相は即ち是れ無爲なればな

り。無爲の相は則ち有爲に非ず。但衆生の顛倒の爲の故に分別して、有爲相とは生滅住異なり、無爲相とは不生不滅不住不異なり、是を佛法に入るの初門と爲すと説く。若し無爲法に相有らば則ち是れ有爲なり。有爲法の生ずる相は、則ち是れ集諦なり。相を滅するは則ち是れ盡諦なり。若し集めざれば則ち作らず、若し作らざれば則ち滅せず、是を無爲法と名く。實相の如し。若し是諸法實相を得れば、則ち復生滅住異の相の中に墮せず。是時に有爲法と無爲法とを見ず、合して無爲法と有爲法とを見ず、合して有爲法と無爲法に於て相を取らず、是を無爲法と爲す。所以は何ん。若し有爲法無爲法を分別すれば、則ち有爲と無爲とに於て處有り、若し諸の憶想分別を斷じ、諸縁を滅し、無縁の實智を以て生數の中に墮せざれば、則ち安隱常樂の涅槃を得。問うて曰はく、「前の五空は皆別説せり。今有爲無爲の空は何を以てか合説する。」答へて曰はく、「有爲無爲の法は、相對して有なり。若し有爲を除けば即ち無爲無く、若し無爲を除けば則ち有爲無し。是二法に一切法を攝す。行者は有爲法の無常、苦、空等の過を觀じ、無爲法の所益の處廣きを知る。是故に二事を合説す。」問うて曰はく、「有爲法は因縁和合より生じ、自性無きが故に空なり、此は則ち爾るべし。無爲法は因縁生の法に非ず、破すること無く、壞すること無く、常に虚空の如し、云何が空なる。」答へて曰はく、「先に説くが如く、若し有爲を除けば則ち無爲無し、有爲の實相は即ちは無爲なり。若し有爲空なれば、無爲も亦空なり、二事は異ならざるを以ての故に。復次に、人有り、有爲法の過罪を聞きて無爲法に著し、著するを以ての故に。諸の

【九】次に畢竟空を明す。

結使を生ず。阿毘曇の中に説くが如し。八十九の有爲法の縁六無爲法の縁三、當に分別すべし。欲界繫の盡諦所斷の無明使は或は有爲縁、或は無爲縁なり。何者か有爲縁にして盡諦所斷なる。有爲法縁使に相應せざる無明使なり。色、無色界の無明も亦是の如し。此結使を以ての故に、法縁使に相應せざる無明使なり。能く不善業を起し、不善業の故に三惡道に墮す。是故に無爲法は空なりと言ふ。無爲法縁使とは疑、邪見、無明なり。疑とは涅槃法の中に於て有なるか無なるか。邪見とは若し心を生じて定んで涅槃無しと言ふなり。是邪疑に相應する無明、及び獨の無明を合して無明使と爲す。問うて曰はく、「若し無爲法は空なりと云はば、邪見と何んが異らん。」答へて曰はく、「邪見の人は涅槃を信ぜず、然る後に心を生じ、定んで涅槃の法は無しと言ふ。無爲空とは、涅槃の相を取るを破す、是を異と爲す。復次に、若し人有爲を捨てて、無爲に著せば、著するを以ての故に、無爲は即ち有爲と成る。是を以ての故に無爲を破すと雖も、邪見に非ず。是を有爲、無爲の空と名く。」

畢竟空とは有爲空、無爲空を以て、諸法を破して遺餘有ること無からしむ。是を畢竟空と名く。漏盡の阿羅漢をば、畢竟清淨と名け、阿那含乃至無所有所の欲を離れたるをば、畢竟清淨と名けざるが如し。此も亦是の如く、內空、外空、内外空、十方空、第一義空、有爲空、無爲空にして更に餘の不空法有ること無し。是を畢竟空と名く。復次に、若し人七世、百千萬億無量世に貴族なる、是を畢竟貴と名け、一世二三世の貴族を以て眞實と爲

さす。畢竟空も亦是の如し、本より已來、定んで實に不空なる者有ること無し。有人言はく、「今は空なりと雖も最初は不空なり。天、造物の始、及び冥初の微塵の如し」と。是等は皆空なり。何を以ての故に。果無常なれば因も亦無常なればなり。虚空の如きは果と作らず亦因と作らざるが如く、天及び微塵等も亦應に是の如くなるべし。若し是れ常ならば、無常を生ずべからず。若し過去に定相無くんば、未來現在世も亦是の如し。三世の中に於て、一法として定んで實に空ならざる者有ること無し。是を畢竟空と名く。問うて曰はく、「若し三世都て空にして、乃至微塵及び一念も所有無くんば、則ち是は大に畏るべき處なり。諸の智慧人は禪定の樂を以ての故に世間の樂を捨て、涅槃の樂を以ての故に禪定の樂を捨て。今畢竟空中、乃至涅槃有ること無くんば、何の法に依止してか涅槃を捨するを得る。」答へて曰はく、「吾我に著する人有り、一異の相を以て諸法を分別す。是の如き人は則ち以て畏と爲す。佛の説きたまふが如くんば、凡夫人の大いに驚怖する處は謂ゆる無我無我所なり。復次に、有爲法には三世有り、有漏法なるを以ての故に著を生ずる處なり。涅槃は一切の愛著を斷ぜるに名く。云何が涅槃に於て捨離を求めん。復次に、比丘の四重禁を破るが如きは、是を畢竟破戒と名く。得道に任へざるなり。又五逆罪を作すが如きは、畢竟じて三善道を閉るなり。若し聲聞の證を取れば、畢竟作佛を得ず。畢竟空も亦是の如し、一切法に於て畢竟空にして、復餘有る無し。問うて曰はく、「一切法畢竟空なりとは、是事は然らず。何を以ての故に。三世十方の諸法、乃至法相、法住に、必ず實有るべし、一法の

實有るを以ての故に、餘法を虛妄と爲す、若し一法の實無くんば、亦諸の虛妄法、是れ  
 畢竟空有るべからず。答へて曰はく、乃至一法の實なる者有ること無し。何を以ての故に。  
 若し乃至一法の實有らば、是法は應に若は有爲、若は無爲有るべし。若し是れ有爲ならば、  
 有爲空の中に已に破せり、若し是れ無爲ならば、無爲空の中にも破せり。是の如く世間出  
 世間、若し世間は内空、外空、内外空、大空もて已に破せり。若し出世間は第一義空を以  
 て已に破せり。色法、無色法、有漏、無漏法も、亦是の如し。復次に、一切法は、皆畢竟  
 空なり。是畢竟空も亦空なり。空にして法有る無きが故に、亦虛と實と相待すること無し。  
 復次に、畢竟空とは、一切法を破して遺餘無からしむるが故に、畢竟空と名く。若し少に  
 ても遺餘有らば、畢竟と名けず。若し相待の故に、應に有るべしと言はば、是事は然らず。  
 問うて曰はく、『諸法は盡く空ならず、何を以ての故に。因縁所生の法は空なるも、而も  
 因縁は不空なればなり、譬へば、椶櫚の因縁和合するが故に舎と名く、舎は空なるも、椶  
 櫚は空なるべからざるが如し。』答へて曰はく、『因縁も亦空なり。因縁は定まらざるが故な  
 り。譬へば父子の如し。父を生ずるが故に名けて子と爲し、子を生ずるが故に名けて父と爲  
 す。復次に、最後の因縁は依止する所無きが故なり。山河樹木、衆生の類の如きは皆地に  
 依止し、地は水に依止し、水は風に依止し、風は虚空に依止するも、虚空は依止する所無  
 し。若し本にして依止する所無ければ、末も亦依止する所無けん。是を以ての故に當に一  
 切法の畢竟空なるを知るべし。問うて曰はく、『然らず、諸法は應に根本有るべし。神通も

て變化する所有るに、化する所は虚なりと雖も、而も化主は不空なるが如し。答へて曰はく、凡夫人は見る所の化物、久しからざるが故に、之を謂て空と爲し、化主は久しきが故に、之を謂ひて實と爲す。聖人は、化主も復前世の業因縁の和合より生じ、今世に復諸の善法を集めて神通力を得るが故に能く化を作すと見る。般若波羅蜜の後品の中に説くが如くんば、三種の變化有り、煩惱變化、業變化、法變化なり。法身なりと。是故に化主も亦空なるを知る。問うて曰はく、諸の牢固ならざる者は、不實の故に、應に空なるべし、諸の牢固なる物、及び實法は空なるべからず。大地、須彌山、大海水、日月、金剛等の如きは、色の實法にして、牢固なるが故に、空なるべからず。所以は何ん。地及び須彌は常住にして劫を竟るが故なり。衆川は竭くすること有らんも、海は則ち常に満ち、日月周天は窮極すること有る無けん。又凡人の所見の如きは虚妄不眞なるが故に、應に空なるべきも、聖人の所得、及び法性眞際涅槃の相の如きは、應に是れ實法なるべし、云何が畢竟皆空と云ふ。復次に、有爲法は因縁生なるが故に、不實なれども、無爲法は因縁より生ぜざるが故に實なるべし。復云何が畢竟空と言ふ。答へて曰はく、堅固不堅固は不定なり、故に皆空なり。所以は何ん。有人は此を以て堅固と爲し、有人は此を以て不堅固と爲す。人は金剛を以て牢固と爲せども、帝釋は手に執り、人の杖を捉ふるが如く、以て牢固と爲さざるが如し。又金剛を破する因縁を知らざるが故に以て牢固と爲す。若し龜甲の上に背けて、山羊の角を以て打ち破るを知れば、則ち牢固ならざるを知る。七尺の身には、大海を以て

深しと爲せども、羅漢阿脩羅王は、大海の中に立ちて膝水上に出で、兩手を以て須彌の頂  
 を隠し、下に向うて初利天の喜見城を觀る。此は則ち大海を以て淺しと爲す。若し短壽の  
 人は地を以て常久牢固と爲し、長壽の者は地を無常にして牢固ならずと見る。「佛說七日喻  
 經」の如きは、佛、諸の比丘に告げたまはく、「一切有爲の法は無常變異にして皆磨滅に  
 歸す。劫盡きんと欲する時は、大旱積ること久しく、藥草樹木は皆悉く焦枯す。第二日  
 有りて出づるや、諸の小流水は皆悉く乾き竭き、第三日出づるや、大河の流水は亦都  
 て洶れ盡く。第四日出づるや閻浮提の中の四大河、及び阿那婆達多池は皆亦空渴し、第五  
 日出づるや、大海乾涸し、第六日出づるや、大地須彌山等、皆悉く烟を出すこと空燒器  
 の如く、第七日出づるや、悉く皆熾然として復燼氣無く、地及び須彌、乃至梵天まで火  
 然え滿つ、爾時、新に光音天に生ずる者有り、火を見て怖畏して言はく、既に梵宮を燒け  
 り、將に此に至る無きやと。先に生ぜる天は後に生ぜし天を慰喻して言はく、「曾て已に此  
 に有りたるに、正しく梵宮を燒き、彼に於て滅して此に來り至らざりきと。三千大千世界  
 を燒き已りて復灰炭無し」と。佛、比丘に語りたまはく、「此の如き大事は、誰か之を信す  
 る者ぞ、唯眼に見て乃ち能く信する有るのみ。又比丘、過去の時に、須涅多羅外道なる師  
 有り。欲を離れて四梵行を行じ、無量の弟子も亦欲を離るるを得たり。須涅多羅は是念を  
 作さく、我は弟子と同じく一處に生ずべからず、今當に深く慈心を修すべしと。此人は深  
 く慈を思ふを以ての故に光音天に生じたり」と。佛言はく、「須涅多羅は我身是なり。我

は是時、眼に此事を見たり」と。是を以ての故に當に牢固なる實物も、皆悉く滅に歸するを知るべし。問うて曰はく、「汝は畢竟空を説くに何を以てか無常の事を説く、畢竟空は今即ち是れ空にして、無常は今有にして後空なり。」答へて曰はく、「無常は則ち是れ空の初門なり。若し無常を諦め了れば、諸法は則ち空なり。是を以ての故に聖人は初に四行を以て世間の無常を觀す。若し所著の物を見るに無常なり、無常なれば則ち能く苦を生じ、苦を以ての故に、心に厭離を生ず。若し無常なれば空相は則ち取るべからず、幻の如く化の如し、是を名けて空と爲す。外物既に空なれば、内主も亦空なり。是を無我と名く。復次に、畢竟空は是を眞空と爲す。二種の衆生有り。一は多く愛を習ひ、二は多く見を習ふ。愛多き者は、喜んで著を生じ、著する所、無常なるを以ての故に、憂苦を生ず。是人の爲には、「汝が著する所の物は、無常にして壞するが故に、汝は則ち之が爲に苦を生ず。若し此所著の物、苦を生ぜば著を生ずべからず」と説く。是を無作解脫門を説くと名く。見多き者は、諸法を分別するを爲し、實を知らざるを以ての故に、邪見に著す。是人の爲の故に、直に諸法は畢竟空なりと説く。復次に、若し所説有れば皆是は破すべし、破すべきが故に空なり。所見既に空なれば、見主も亦空なり。是を畢竟空と名く。汝が「聖人所得の法は應に實なるべし」と言ふは、聖人の法を以て能く三毒を滅するは顛倒虚誑に非ず、能く衆生をして老病死の苦を離れて涅槃に至るを得しむ。是れ名は實なりと雖も、皆因縁和合より生ずるが故に、先に無にして今有なり。今有にして後無なるが故に、愛くべからず。

【二〇】次に無始空を明す。

著すべからざるが故に、亦空にして實に非ず。佛『楞嚴經』に説きたまふが如くんば、善法すら尙捨つべし、何に況んや不善をや。復次に、聖人の有爲、無漏の法は有漏法の縁より生ず。有漏法は虚妄不實の縁より生ずる所の法なり。云何が實と爲す。有爲法を離れて無爲法無きは先に説けるが如し。有爲法の實相は即ち是れ無爲法なり。是を以ての故に、一切法は畢竟不可得なり、故に名けて畢竟空と爲す。

無始空とは、世間の若は衆生、若は法は、皆始有ること無し。今生の如きは、前世の因縁に従りて有り。前世も復前世に従りて有り。是の如く展轉すれば、衆生は始有る無く、法も亦是の如し。何を以ての故に。若し先に生じて後に死せば、則ち死に従はざるが故に生ず、生も亦死無けん。若し先に死して後に生有らば、則ち因無く縁無く、亦生ぜずして而も死有り。是を以ての故に一切法は則ち始有ること無し。經の中に説くが如し。佛、諸の比丘に語りたまはく、「衆生は始有る無し、無明に覆はれ愛に繋がれて生死に往來するも、始は不可得なり」と。は無始法を破するが故に名けて無始空と無す。問うて曰はく、「無始は是れ實なり、破すべからず。何を以ての故に。若し衆生及び法に始有らば、邊見に墮し、無因見に墮す。是等の如き過を遠離するが故に、應に衆生及び法は無始なりと説くべし。」今無始空を以ては無始を破せば、則ち還りて有始の見到に墮せん。答へて曰はく、「今無始空を以て無始の見到を爲すとも又有始の見到に墮せず。譬へば人を火より救うて深水の中に著くべからざるが如し。今は無始を破するも亦有始の中に著すべからず、是れ則ち中道を

行ず。問うて曰はく、「云何が無始を破する。」答へて曰はく、「無窮なるを以ての故に。若し無窮なれば則ち後無く、無窮にして後無くば則ち亦中無し。若し無始なれば則ち一切智人を破すと爲す。所以は何ん。若し世間無窮なれば則ち其始を知らず、始を知らざるが故に則ち一切智人無し。若し一切智人有れば無始と名けず。復次に、若し衆生相を取り、又諸法の一相、異相を取り、此一異の相を以て今世より前世を推し、前世より復前世を推し、是の如く展轉して、衆生及び法の始は不可得なれば、則ち無始の見を生ず。是見は虚妄なり。一異を以て本と爲す。是故に破すべし。有爲空もて有爲法を破するが如きは、是有爲空と爲すも、即ち復患と爲す。復無爲空を以て無爲法を破す。今無始を以て有始を破するに、無始も即ち復患と爲し、復無始空を以ては無始を破す。是を無始空と名く。問うて曰はく、「若し爾らば佛は何を以てか衆生は生死に往來して本際不可得なりと説きたまふ。」答へて曰はく、「衆生をして久遠より已來生死に往來して大苦を爲せるを知り、厭患の心を生ぜしめんと欲したまへばなり。經に説くが如きは、一人世間に在りて一劫の中に身を受け害を被る時を計るに、諸血を聚集するは海水より多く、啼泣して涙を出し、及び母乳を飲むも皆亦是の如く、身骨を積集すること毘浮羅山より過ぎたり。譬喩へば、天下の草木を斬りて二寸の籌と爲し、其父、祖、曾祖を數ふるに猶盡す能はず、又盡く地を以て泥丸と爲して、其母及び曾祖母を數ふるに猶亦盡さざるが如し。是の如き等無量劫の中に生死の苦惱を受け、初始は不可得なるが故に、心に怖畏を生じて諸の結使を斷ず。無常の如

きは邊と爲すと雖も、而も佛はは無常を以て衆生を度したまへり。無始も亦是の如し、是れ邊なりと爲すと雖も、亦是無始を以て衆生を度したまへり。衆生を度して厭心を生ぜしめんが爲の故に、無始有りと説くも、實に有りと爲すと非ず。所以は何ん。若し無始有らば無始空を説くべからざればなり。問うて曰はく、「若し無始は實法に非ずんば云何が以て人を度する。」答へて曰はく、「實法の中には人を度するに、諸の說法すべき語言無し。人を度するは皆是れ有爲虚誑の法なり。佛は方便力を以ての故に、は無始を説きたまふ。無著の心を以て説きたまふが故に、受者も亦無著なるを得、無著の故に則ち厭離を生ず。復次に、宿命智を以て衆生を見るに、生死相續して無窮なり、是時を實と爲す。若し慧眼を以てすれば、則ち衆生及び法の畢竟空を見る。是を以ての故に無始空と説く。般若波羅蜜の中に説くが如くんば、常觀も不實なれば、無常觀も、亦不實なり。苦觀も不實なれば、樂觀も、亦不實なり。而も佛は常樂は倒と爲し、無常と苦とは、諦と爲すと説きたまへり。衆生多くは、常樂に著して、無常と苦とは、著せざるを以てなり。是故に、無常と苦との諦を以て是常、樂の倒を破す。是を以ての故に無常と苦とを諦と爲すと説きたまふ。若し衆生有り、無常と苦とに著せば、無常も苦も亦空なりと説く。有始無始も亦是の如く、無始も能く始に著する倒を破す。若し無始に著すれば復無始を以て空と爲す。是を無始空と名く。問うて曰はく、「有始の法も亦是れ邪見にして應當に破すべし。何を以てか但無始のみを破すと説く。」答へて曰はく、「有始は是れ大惑なり。所以は何ん。若し始有

らば、初身は則ち罪福の因縁無くして、而も善惡の處に生ず。若し罪福の因縁に従うて生ぜば、名けて初身と爲さず。若し罪福有れば則ち前身に従うて後身を受くるが故に。若し世間無始ならば是の如き咎無し。是故に菩薩は、先に已には龜惡の邪見を捨て、菩薩は常に習ふに無始を用て、衆生を念するが故に無始と説き、常に因縁の法を行するが故に、法は無始なりと言ふも、未だ一切智を得ざるが故に、或は無始の中に於て錯謬す。是故に無始空を説く。復次に、無始もて已に有始を破すれば、空を須たずして有始を破す。今無始を破せんと欲するが故に無始空を説く。問うて曰はく、「若し無始もて有始を破せば、有始も亦能く無始を破せん、汝は何を以てか但空を以て無始を破すと言ふ。」答へて曰はく、「是二は皆邪見なりと雖も而も差別有り。有始は諸の煩惱邪見を起すの因縁なり。無始は慈悲及び正見を起す因縁なり。所以は何ん。衆生の無始より世の苦惱を受くるを念じて悲心を生じ、身に從うて次第に身を生じ、相續して斷ぜざるを知り、便ち罪福の果報を知りて正見を生ずればなり。若し人無始に著せざれば、即ち是れ助道の善法なり。若し相を取り著を生ぜば、即ち是れ邪見なり。常、無常の見、有始の見の如きは、無始の見を破すと雖も、畢竟して無始を破する能はず。無始は能く畢竟して有始を破す。是故に無始を勝れりと爲す。善もて不善を破り、不善もて善を破するが如きは、互に相破すと雖も、而も善は能く畢竟して惡を破す。賢聖の道を得て永く惡を作さざるが如し。惡法は則ち然らず、勢力微薄なるが故なり。人の五逆罪を起して善根を斷じ、地獄に墮すと雖も、久うして一劫

【二】次に散空を  
明す。

に過ず。縁に因りて地獄を脱するを得、終に道果を成するが如く、無始有始の優劣不同も亦是の如し。無始の力大なるを以ての故に、能く有始を破す、是故に有始空を説かず。

散空とは、散は別離の相に名く。諸法の如きは和合するが故に有なり。車は輻輳轆轤有り、衆合するを以て車と爲す。若し離散して各一處に在れば則ち車名を失するが如し。五衆和合の因縁の故に名けて人と爲す、若し五衆を別離すれば人は不可得なり。問うて曰はく、「若し是の如く説けば但假名のみを破して色を破せず、亦輻輳を離散すれば車の名を破すべくして、輻輳を破せざるが如し。散空も亦是の如し。但五衆を離散して人を破すべきも、而も色等の五衆を破せず。」答へて曰はく、「色等も亦是れ假名なりと破す。所以は何ん。微塵の和合せるを假に名けて色と爲すが故なり。」問うて曰はく、「我は微塵を受けず、今は可見の者を以て色と爲し、是れ實に有と爲す、云何が散じて空と爲す。」答へて曰はく、「若し微塵を除けば、四大和合の因縁より、生じ出でたる可見の色も亦假名なり。四方の風和合して水を扇げば則ち沫聚を生ずるが如く、四大和合して色を成するも亦是の如し。若し四大を離散すれば則ち色有ること無し。復次に、是色は香味觸及び四大の和合を以ての故に、有色可見なり。諸の香味觸等を除きては更に別色無く、智を以て分別するに各各離散して色は不可得なり、若し色は實有ならば、此諸法を捨して應に別に色有るべし、而も更に別色無し。是故に經に言はく、「有ゆる色は皆四大の和合によりて有なり」と。和合有なるが故に皆是れ假名なり、假名なるが故に散すべし。問うて曰はく、「色は假名なるが

故に散すべくんば四業は色無し、云何が散すべき。答へて曰はく、「四業も亦是れ假有なり。生老住無常の故に散じて空と爲す。所以は何ん。生時は異なり、老時は異なり、住時は異なり、無常の時は異なるが故に。復次に、三世の中に四業は皆亦散滅すと觀す。復次に、心は阿羅漢に隨ひ、緣滅すれば則ち滅し、緣破すれば則ち破す。復次に、此四業は不定なり。緣に隨うて生ずるが故に。譬へば火の如し、所燒の處に隨うて名を得、若し燒處を離れては火は不可得なり。眼色を緣するに因りて眼識を生ず、若し所緣を離れては識は不可得なり。餘の情識も亦是の如し。經の中に、佛、羅陀に告げたまはく、「此色業は、破壞散滅すれば所有無からず、餘業も亦是の如し」と説くが如し。是を散空と名く。復次に、譬へば小兒の土を棄て奉殿、城郭、閭里、官舎と爲し、或は米と爲し、或は名けて麩と爲し、愛著し守護し、日暮れ時に歸らんとして其心捨離し、蹋壞すれば散滅するが如く、凡夫の人も亦是の如し。未だ欲を離れざるが故に諸法の中に於て愛著を生じ、心著し欲を離るるを得れば、諸法を見て皆散壞し棄捨す、是を散空と名く。復次に、諸法は合集の故に各名字有り。凡夫の人は名字を隨逐し、顛倒を生じて樂著す。佛爲に法を誦きたまはく、「當に其實を觀すべし、名字を逐ふ莫れ、有無は皆空なり」と。迦旃延經に、「集諦を離すれば則ち無の見無く、滅諦を離れば則ち有の見無し」と説くが如し。是の如き種種の因縁は、是を散空と名く。

【三】次に性空を明す。

性空とは諸法の性は常に空なるも、假業相續するが故に空ならざるが若きに似たり、譬

へば水性は自ら冷なれども火を假るが故に熱し、火を止むること停久ければ、水は則ち  
 還りて冷なるが如く、諸法の性も亦是の如し。未だ生ぜざる時は、空にして所有無きこと  
 水性の常に冷かなるが如し。諸法は衆縁和合の故に有なること、水の火を得て熱を成すが  
 如し。衆縁若は少く、若は無ければ、則ち法有ること無きこと、火滅すれば湯冷なるが  
 如し。經に説くが如し、「眼は空にして我無く我所無し、何を以ての故に、性として自ら爾  
 なればなり。耳鼻舌身意、色乃至法等も亦復是の如し」と。問うて曰はく、「此經は我、我  
 所の空を説く、是を衆生空と爲す。法空を説かず、云何が性空を證する。答へて曰はく、  
 『此中には但性空のみを説き、衆生空及び法空を説かず。性空に二種有り。一には十二入の  
 中に於て我無く我所無し。二には十二人の相は自ら空にして我無く我所無し。是れ聲聞論  
 の中の説なり。摩訶衍法には、十二入は我我所無きが故に空なり。十二入の性は無なるが  
 故に空なりと説く。復次に、若し我無く我所無くば自然に法空を得。人は多く我及び我所  
 に著するを以ての故に、佛は但我無く我所無しと説きたまへり。是の如くなれば、應當に  
 一切法は空なるを知るべし。若し我我所の法にすら尚著せず、何に況んや餘法をぞ。是を  
 以ての故に衆生空、法空は終に一義に歸す。是を性空と名く。復次に性の名は自ら有にし  
 て因縁を待たず、若し因縁を待たば、則ち是れ作法にして名けて性と爲さず。諸法の中に  
 は皆性無し。何を以ての故に、一切の有爲法は皆因縁より生じ、因縁より生ぜば則ち是れ  
 作法、若し因縁の和合によらざれば則ち是れ無法なればなり。是の如く、一切諸法の性は、

不可得なるが故に、名けて性空と爲す。問うて曰はく、「畢竟空にして所有無きは則ち是れ性空なり。今何を以てか重ねて説く。」答へて曰はく、「畢竟空とは名けて遺餘有ること無しと爲し、性空とは名けて本來常に兩りと爲す。水性は冷にして、火を假るが故に熱し、火を止むれば則ち還つて冷なるが如し。畢竟空は虚空の如く、常に不生不滅不垢不淨なり。云何が同じと云はん。復次に、諸法は畢竟空なり。何を以ての故に。性は不可得なるが故に。諸法の性は空なり。何を以ての故に。畢竟空の故に。復次に、性空は、多くは是れ菩薩の所行にして、畢竟空は多くは是れ諸佛の所行なり。何を以ての故に。性空の中に、但因縁和合有りて實性有ること無く、畢竟空は三世清淨なれば、是の如き等の差別有り。復次に、一切諸法の性に二種有り。一には總性、二には別性なり。總性とは無常、苦、空、無我、無生、無滅、無來、無去、無入、無出等にして、別性とは火は熱性、水は濕性、心は識性爲るが如く、人の喜んで諸惡を作すが故に名けて惡性と爲し、好んで善事を集むるが故に名けて善性と爲すが如し。『十力經』の中に、「佛は世間の種種の性を知りたまふ」と説くが如し。是の如く諸の性は皆空なり、是を性空と名く。何を以ての故に。若し無常性はれ實ならば、應に業の果報を失すべければなり。所以は何ん。生滅、過去は住せざるが故に。六情も亦塵を受けず、亦因縁を積習せず、若し積習無くんば則ち誦經、坐禪等無ければなり。是を以ての故に無常性は不可得なるを知る。無常す、尙不可得なり、何に況んや常相をや。復次に、苦性も亦不可得なり。若し實に是れ苦有らば則ち染著の心

を生ずべからず。若し人苦痛を厭畏せば、諸樂の中に於ても、亦應に厭畏すべく、佛も亦  
 應に三受、苦、樂、不苦不樂を説きたまふべからず。亦應に苦の中に厭を生じ、樂の中に愛  
 を生じ、不苦不樂の中に癡を生ずべからず。若し一相ならば、樂の中に瞋を生ずべく、苦  
 の中に愛を生ずべし。但是事は然らず。是の如き等の苦性すら尙不可得なり。何に況んや、  
 樂性の虚妄なるを得べけんや。復次に、空相も亦不可得なり。所以は何ん。若し空相有れ  
 ば則ち罪福無く、罪福無きが故に、亦今世、後世無ければなり。復次に、諸法は相對して  
 有なり。所以は何ん。若し空有れば應當に實有るべく、若し實有れば應當に空有るべけれ  
 ばなり。空性すら尙無なり、何に況んや實有らんや。復次に、若し無我ならば則ち縛無く  
 解無く、亦今世より後世に至りて罪福を受くる無く、亦業因縁の果報無し、是の如き等の  
 因縁により、無我性を知るすら、尙不可得なり、何に況んや我性をや。復次に、無生無滅  
 の性も亦不實なり。何を以ての故に。若し實なれば、則ち常見に墮す。若し一切法常なら  
 ば、則ち罪無く福無し、若し有ならば常有、無ならば常無、若し無ならば不生、有ならば  
 不失にして不生不滅性の如きは不可得なり、何に況んや生滅の性をや。無來、無去、無入、  
 無出等の諸の總性も亦是の如し。復次に、諸法の別性、是も亦然らず。何を以ての故に。  
 如し火は、能燒と造色と、能熾との、二法和合の故に、名けて火と爲せばなり。若し是二  
 法を離れて火有らば、應に別に火の用有るべし、而も別に用無し。是を以ての故に火は是  
 れ假名にして、亦實有ること無きを知る。若し實に火法無くんば、云何が熱は是れ火性な

りと云はん。復次に、熱性は衆緣より生ず。内に身根有り、外に色觸有り、和合して、身識を生じて熱有りと覺知す。若し未だ和合せざる時は則ち熱性無し。是を以ての故に定んで熱は火性と爲すこと無きを知る。復次に、若し火、實に熱性有らば、云何が人有り、火に入るに焼けざる。及び人身中に火有りて、而も身を焼かず、空中の火を水能く滅せざる。火は定んで、熱性有ること無きを以ての故に、神通力の故に火も身も焼く能はず。業因縁の五藏は熱せず、神通力の故に水も滅する能はざるなり。復次に、若し熱性と火と異ならば、火は則ち熱に非ず。若し熱と火と一ならば、云何が熱は是れ火性なりと言はん。餘性も亦是の如し、是總性、別性は無なるが故に、名けて性空と爲す。復次に、性空とは本より已來空なり。如し世間の人は、虚妄にして久しからざる者、是を空と謂ひ、須彌、金剛等の物、及び衆人所知の如きは、以て眞實にして不空と爲す。此疑を斷ぜんと欲するが故に、佛は「是は堅固に相續して久しく住すと雖も皆亦性空なり」と説きたまへり。衆人の智慧は衆生を度して、諸々の煩惱を破すと雖も、性不可得となるが故に是れ亦空と爲す。又人は「五衆十二入、十八界は皆空にして、但法性實際の如きは是れ其實性なり」と謂ふ。佛は此疑を斷ぜんと欲するが故に、但分別して「五衆は法性實際の如く皆亦是れ空なり」と説きたまへり。是を性空と名く。復次に、有爲の性に三相有り、生、住、滅なり、無爲の性にも亦三相有り、不生、不住、不滅なり。有爲の性すら尚空なり、何に況んや有爲法をや。無爲の性すら尚空なり、何に況んや無爲法をや。是種種の因縁を以て、性の不可得

【三】次に自相空を明す。

なるを名けて性空と爲す。

自性空とは、一切法に二種の相有り。總相と別相なり。是二相は、空なるが故に名けて相空と爲す。問うて曰はく、「何等か是れ總相にして、何等か是れ別相なる。」答へて曰はく、「總相とは無常等の如し。別相とは諸法は皆無常なりと雖も、而も各別相有り。地を堅相と爲し、火を熱相と爲すが如し。問うて曰はく、「先に已に性を説き、今相を説く。性と相は何等の異か有る。」答へて曰はく、「有人言はく、「其實は異ること無く、名に差別有り。性を説けば則ち相を説くと爲し、相を説けば則ち性を説くと爲す。譬へば火性は即ち是れ熱相と説けば、熱相は即ち是れ火性と説くが如し」と。有人言はく、「性と相とは少しく差別有り、性とは其體を言ひ、相とは識るべきを言ふ。釋子の禁戒を受持するが如きは是れ其性にして、剃髮、割截、染衣は是れ其相なり。梵志の自ら其法を受くるは是れ其性にして、頂に周羅有り、三奇杖を執るは是れ其相なり。火の熱するは、是れ其性にして、烟は是れ其相なるが如し。近を性と爲し、遠を相と爲す。相は不定にして身より出で、性は則ち其實を言ふ。黄色を見て金相と爲せども、而も内は是れ銅にして、火に燒き石に磨けば、金性に非ざるを知るが如く、人の恭敬供養する時、是れ善人に似たるは、是を相と爲し、罵詈、毀辱、忿然として瞋恚するは、便ち是れ其性なるが如し」と。性相、内外、遠近、初後等には、是の如きの差別有り。是諸相の皆空なるを名けて相空と爲す。一切の有爲法は皆是れ無常の相なりと説くが如し。所以は何ん、生滅して住せざるが故に、先無にして

今有、已に有にして還無なるが故に、諸の因縁に屬するが故に、虚誑にして眞ならざるが故に、無常にして因縁生なるが故に、衆合の因縁より起るが故に、是の如き等の因縁の故に、一切の有爲法は是れ無常の相なり。能く身心に惱を生ずるが故に、名けて苦身と爲す。四威儀は苦ならざる無きが故に、苦は聖諦なるが故に、聖人は捨てて受けざるが故に、時として惱さざる無きが故に、無常なるが故に、是等の如き因縁を以て名けて苦相と爲す。我所を離るるが故に空なり、因縁和合して生ずるが故に、空なり、無常、苦、空、無我なるが故に名けて空と爲す。始終不可得なるが故に、空なり、心を誑すが故に、名けて空と爲す。賢聖は一切法に著せざるが故に、名けて空と爲す。無相、無作の解脱門を以ての故に、名けて空と爲す。諸法の實相は無量無數なるが故に、名けて空と爲す。一切語言の道を斷ずるが故に、名けて空と爲す。一切の心行を滅するが故に、名けて空と爲し、諸佛、辟支佛、阿羅漢は、入りて而も出でざるが故に、名けて空と爲す。是の如き等の因縁の故に、是を名けて空と爲す。無常、苦、空なるが故に、無我なり。自在ならざるが故に、無我なり。主無きが故に、名けて無我と爲し、諸法は因縁より生ぜざる無く、因縁より生ずるが故に、無我なり。無相無作なるが故に、無我なり。假名字の故に、無我なり。身見顛倒の故に、無我なり。我心を斷じて道を得るが故に、無我なり。是種種を以て、名けて無我と爲す。是の如き等を名けて總相と爲す。別相とは、地は堅相、火は熱相、水は濕相、風は動相なり。眼識の衣處を眼相と名く、耳、鼻、舌、身も亦是の如し。識は覺相、智は

【二四】次に一切法空を明す。

慧相、慧は智相なり。捨を施相と爲し、悔いず惱まざるを持戒の相と爲し、心變異せざるを忍相と爲し、勤を發すを、精進相と爲し、心を攝するを禪相と爲し、著する所無きを智慧相と爲し、能く事を成ずるを方便相と爲し、識の生滅を作すを世間相と爲し、識無きを涅槃相と爲す。是の如き等諸法には、各別相有り。當に是諸相は皆空なりと知るべし。是を自相空と名く。餘の義は性空の中に説くが如し。性相の義は同じきが故なり。問うて曰はく、「何を以てか但相空と説かずして自相空と説く。」答へて曰はく、「若し相空と説けば法體の空を説かず、自相空と説けば即ち法體空なり。復次に、衆法和合するが故に一法生ず。是一法は空なり。是の如き等一一の法は皆空なり。今因と縁とを和合せる法は展轉して皆亦空なり。一切法は各各自相空なり。是を以ての故に名けて自相空と爲す。問うて曰はく、「若し一切法は各各自相空ならば、云何が復所説有る。」答へて曰はく、「衆生は顛倒の故に一相、異相、總相、別相等を以て、而も諸法に著す。是を斷ぜんが爲の故に所説有り。是の如き等の因縁を名けて自相空と爲す。

(二四)一切法空とは、一切法は五衆、十二入、十八界等に名く。是諸法は、皆種種の門に入る。謂ゆる一切法は有相、相知、識相、縁相、増上相、因相、果相、總相、別相、依相なり。問うて曰はく、「云何が一切法は有相なる。」答へて曰はく、「一切法には好有り醜有り。内有り外有り、一切法は心有りて生ずるが故に、名けて有と爲す。問うて曰はく、「無法の中に云何が相有りと言ふ。」答へて曰はく、「若し無法は名けて法と爲さず、但有を遮するを以て

の故に、名けて無法と爲すのみ。若し實に無法有らば、則ち名けて有と爲す。是故に一切法は有相なりと説く。知相とは、苦法智、苦比智もて能く苦諦を知り、集法智、集比智もて能く集諦を知り、滅法智、滅比智もて能く滅諦を知り、道法智、道比智もて能く道諦を知り、及び世俗智もて能く苦を知り、能く集を知り、能く滅を知り、能く道を知り、亦能く虚空、非智縁滅を知る。是を一切法の知相と名く。知相の故に一切法を攝す。識相とは、眼識は能く色を知り、耳識は能く聲を知り、鼻識は能く香を知り、舌識は能く味を知り、身識は能く觸を知り、意識は能く法を知る。能く眼を知り、能く色を知り、能く眼識を知る。能く耳を知り、能く聲を知り、能く耳識を知る。能く鼻を知り、能く香を知り、能く鼻識を知る。能く舌を知り、能く味を知り、能く舌識を知る。能く身を知り、能く觸を知り、能く身識を知る。能く意を知り、能く法を知り、能く意識を知る。是を識相と名く。縁相とは、眼識及び眼識相應の諸法は能く色を縁じ、耳識及び耳識相應の諸法は能く聲を縁じ、鼻識及び鼻識相應の諸法は香を縁じ、舌識及び舌識相應の諸法は能く味を縁じ、身識及び身識相應の諸法は能く觸を縁じ、意識及び意識相應の諸法は能く法を縁じ、能く眼を縁じ、能く色を縁じ、能く眼識を縁じ、能く耳を縁じ、能く聲を縁じ、能く耳識を縁じ、能く鼻を縁じ、能く香を縁じ、能く鼻識を縁じ、能く舌を縁じ、能く味を縁じ、能く舌識を縁じ、能く身を縁じ、能く觸を縁じ、能く身識を縁じ、能く意を縁じ、能く法を縁じ、能く意識を縁す。是を縁相と名く。増上相とは、一切の有爲法は、各各増上し、無爲法も

亦、有爲法に於て増上有り、是を増上相と名く。因果相とは、一切法は各各因と爲り、各  
 各果と爲る。是を因果相と名く。總相、別相とは、一切法の中に各各總相別相有り。馬は  
 是れ總相、白は是れ別相なるが如し。人は是れ總相にして、一耳を失へるは則ち是れ別相  
 なるが如し。是の如く各各展轉して皆總相、別相有り。是を總相、別相と爲す。依相とは  
 諸法は各共に相依止す。草木山河の地に依止し、地の水に依止するが如し。是の如く一  
 切各各相依る、是を依止相と名く。依止相は一切法を攝す。是の如き等一法門の相に一切  
 法を攝す。復次に、二法門に一切法を攝す。謂ゆる色と無色法、可見と不可見法、有對と  
 無對法、有漏と無漏法、有爲法と無爲法、內法と外法、觀法と緣法、有法と無法、是の如  
 き種種の二法門の相、三四五六乃至無量の法門の相有りて一切法を攝す。是諸法の皆空な  
 るは上説の如し、一切法空と名く。問うて曰はく、「若し皆空ならば、何を以てか一切法の種  
 種の名字を説く。」答へて曰はく、「凡夫の人は空法の中に於て、無明もて顛倒して相を取る  
 が故に愛等の諸の煩惱を生じ、煩惱に因るが故に種種の業を起し、種種の業を起すが故  
 に種種の道に入り、種種の道に入るが故に種種の身を受け、種種の身を受くるが故に種種  
 の苦樂を受く。蠶の絲を出すに因る所無く、自ら己より出し、自ら纏裏して燒煮の苦を受  
 くるが如し。聖人は清淨の智慧力の故に、一切法は本末皆空なりと分別し、衆生を度せ  
 んと欲するが故に其著處を説く。謂ゆる五衆、十二入、十八界等なり。汝は但無明を以て  
 の故に而も五衆等を生じ、自ら作し自ら著す。若し聖人但空のみを説かば道を爲る能はざ

らん。因る所無く厭ふ所無きを以てなり。問うて曰はく、「汝は一切法は、空なりと言ふも、是事は然らず。何を以ての故に。一切法は各自自ら相攝すればなり。地は堅相、水は濕相、火は熱相、風は動相、心は識を相と爲し、慧は知を相と爲すが如し。是の如く一切法は、各自其相に任す。云何が空と言ふ。答へて曰はく、「性空と自相空との中に已に破せり。今當に更に説くべし。相は不定の故に、是れ相なるべからず。酥蜜膠蠟等の如きは皆是れ地相なれども、火と合するが故に、自ら其相を捨てて轉じて濕相と成り、金銀銅鐵は火と合するが故に、亦自ら其相を捨てて變じて水相と爲り、水の如きは寒を得て氷と成り、轉じて地相と成る。人の酔ひ睡れる、無心定に入れる、凍氷の中の魚の如きは、皆心識無きが如し、其心相を捨てれば覺知する所無し。如し慧は知を相と爲すも、諸法實相に入れば、則ち覺知する所無く自ら其相を捨つ。是故に諸法は定相有ること無し。復次に、若し諸法は定相有りと謂はば是れ亦然らず。所以は何ん。如し未來の相を捨てずして現在に入らば、からず。若し現在に至れば則ち未來の相を捨つ。若し未來の相を捨てずして現在に入らば、未來は則ち是現在にして、未來の果報無しと爲す。若し現在は過去に入れば則ち現在の相を捨つ。若し現在の相を捨てずして過去に入らば、過去は即ち是れ現在なり。是の如き等の過有れば、則ち諸法には定相有る無しと知る。

(一四) 復次に無爲法は定んで有りと言はば、應に別に自ら相有るべし。火の自ら熱相有り、他に因りて相を作さざるが如し。是故に當に無爲法は相無きが故に、實に無しと知るべし。

復次に、汝は未來世の中の非智緣滅の法を以てするも、是れ有爲法にして而も有爲の相無し。若し汝非智緣盡を以て、是滅相と謂はば、是亦然らず。所以は何ん。無常にして滅するが故に是を滅相と名け、非智緣滅を以ての故に、名けて滅相と爲すに非ざればなり。是の如き等種種の定相有る無し。若し定相有り、不空ならしむべく、而も定相無く、而して空ならざれば、是事は然らず。問うて曰はく、「實有の法は空ならざるべし。所以は何ん。凡夫と聖人は知る所を各異なり、凡夫の知る所は是れ虚妄にして、聖人の知る所は是れ實なればなり。實の聖智に依るが故に虚妄の法を捨し、虚妄に依りて虚妄を捨すべからず。」答へて曰はく、「凡夫の知る所を破するが爲の故に名けて聖智と爲す。若し凡夫法無ければ則ち聖法無し。病無ければ則ち藥無きが如し。是故に經に言はく、「凡夫の法を離れて更に聖法無く、凡夫法の實性即ち是れ聖法なり」と。

復次に、聖人は諸法に於て相を取らず、亦著せず。是故に聖法を眞實と爲す。凡夫は諸法に於て相を取り、亦著するが故に凡夫人の法を以て虚妄と爲す。聖人は用ふと雖も、而も相を取らず。相を取らざるが故に則ち定相無し。是の如きは應に難と爲すべからず。凡夫の地に於ては、法に著して「是は聖法なり、是は凡夫法なり」と分別すれども、若し賢聖の地に於ては、則ち分別する所無く、衆生の病を斷するが爲の故に、「是は虚、是は實」と言ふのみ。佛語は虚に非ず、實に非ず、縛に非ず、解に非ず、一に非ず、異に非ず、是故に分別する所無く、清淨なること虚空の如し」と説くが如し。復次に、若し法は悉

く空ならざれば、説くべからず。不戲論を智人の相と爲すも、亦説くべからず、受けず著せず依止する所無く、空、無相、無作なるを名けて眞法と爲す。問うて曰はく、「若し一切の法は空にして、即ち亦是れ實ならば、云何が實なるもの無しと言ふ。」答へて曰はく、「若し一切の法空ならば、假令法有るも已に一切法中に入りて破す。若し法無ければ難を致すべからず。問うて曰はく、「一切の法は空にして是れ眞實ならば、佛は三藏の中に何を以てか多く無常、苦、空、無我の法を説きたまへる。經に説くが如くんば、佛、諸の比丘に告げたまはく、「汝が爲に法を説く、名けて第一義空と爲す。何等か是れ第一義空なる。眼生ずるも、從來する所無く、滅するも亦去る所無し。但業有り、業の果報有りて、作者は不可得なり。耳鼻舌身意も亦復是の如し」と。是中に若し生ずるも從來する所無く、滅するも亦去る所無しと説くは、是れ常常法は不可得なるが故に無常なり。但業及び業果報有り、而も作者は不可得なりとは、是を聲聞法中の第一義空と爲す。云何が一切法は空なりと言ふ。」答へて曰はく、「我は是れ一切諸の煩惱の根本なり。先づ五衆に著して我と爲し、然る後に外物に著して我所と爲す。我所の縛の故に而も貪恚を生じ、貪恚の因縁の故に諸業を起す。佛の説きたまふが如く、作者無ければ則ち一切法の中の我を破す。若し眼は從來する所無く、滅するも亦去る所無しと説くは、則ち眼の無常を説くなり。若し無常なれば即ち是れ苦なり。苦なれば即ち是れ我我所に非ず。我我所無きが故に、一切法の中に於て心に著する所無し。心に著する所無きが故に、則ち結使を生ぜず。結使を生ぜざれば、何

を以てか空と説かん。是を以ての故に三藏の中には多く無常、苦、空無我と説きて、多く一切法は空なりと説かず。復次に、衆生は佛の無常、苦、空及び無我を説きたまへるを聞くと雖も、而も諸法を戯論す。是人の爲の故に、諸法は空なり、若し我無く亦我所無しと説く。若し我無く我所無ければ、是れ即ち空義に入るなり。問うて曰はく、佛は何を以てか業有り果報有りと説きたまひしや。若し業有り果報有らば、是れ則ち空ならず。答へて曰はく、佛の説法に二種有り。一には無我、一には無法なり。神を見て有常なりと著する者の爲の故に、爲に作者無しと説き、斷滅の見に著する者の爲の故に、爲に業有り、業の果報有りと説きたまへり。若し人有り、作者無しと説くを聞きて、轉斷滅の見の中に墮するが爲に、爲に業有り業の果報有りと説く。此五衆は業を起して後世に至らず、此五衆の因縁もて五衆を生じ、業の果報の相續を受くるが故に、業の果報を受くと説く。如し母子は、身異ると雖も、而も因縁相續するが故に、母藥を服すれば、兒の病則ち差ゆるを得るが如し。是の如く、今世後世の五衆は異なりと雖も、而も罪福の業因縁有りて相續するが故に、今世の五衆の因縁に従うて、後世の五衆の果報を受くるなり。復次に、有人は諸法の相を求めて、一法の若し有、若し無、若し常、若し無常等に著す。法に著するを以ての故に、自法には愛を生じ、他法には恚を生じて、而も惡業を起す。是人の爲の故に諸法は空なりと説く。諸法空なれば、則ち法有ること無し。所以は何ん。愛すべき所の法は、能く結使を生じ、能く結使を生ずれば、則ち是れ無明の因縁なればなり。若し無明を生ぜ

ば、云何が是れ實ならんや。是を法空と爲す。復次に、衆生に二種有り。一には世間に著し、二には出世間に著す。出世間を求むるに上中下有り。上は利根大心にして、佛道を求め、中は中根にして、辟支佛道を求め、下は鈍根にして、聲聞道を求む。佛道を求むる者の爲には、六波羅蜜及び法空を説き、辟支佛を求むる者の爲には、十二因縁及び獨行の法を説き、聲聞を求むる者の爲には、衆生空及び四眞諦の法を説く。聲聞は生死を畏れ惡み、衆生空及び四眞諦の無常、苦、空、無我を聞けば、諸法を戲論せず。圍中に鹿有り、既に毒箭を被り、一向に脱するを求めて、更に他念無きが如し。辟支佛は老病死を厭ふと雖も、猶能く少しく甚深の因縁を觀じ、亦能く少しく衆生を度す。譬へば犀の圍中に在りて毒箭を被ると雖も、猶能く其子を顧戀するが如し。菩薩は老病死を厭ふと雖も、能く諸法の實相を觀じ、究盡して深く十二因縁に入り、法空に通達して無量の法性に入る。譬へば白香象王の獵圍の中に在りて、箭射を被ると雖も、獵者を顧視せず、心に畏るる所無く、及び營從を將みて安歩して去るが如し。是を以ての故に三藏の中に多く法空を説かず。或は利根の梵志有り。諸法の實相を求めて老病死を厭はず、種種の法相に著す。是が爲に故らに法空を説く。謂ゆる先尼梵志は、五衆は即ち是れ實なりと説かず。亦五衆を離れて是れ實なりと説かず。復強論梵志有り。佛答へたまはく、「我法の中には有無を受けず、汝何の論ずる所か有る。有無は是れ戲論の法、結使の生處なり」と。及び『雜阿含』の中の『大空經』には二種の空を説く。衆生空と法空なり。『羅陀經』の中には色衆を破裂分散して所有

【五】次に不可得空を明す。

無からしむるを説き、『毘喩經』の中には、法すら尚捨つべし、何に況んや非法をやと説けり。『波羅延經』、『利業經』の中には、智者は一切法に於て受けず著せず、若し法を受け著すれば、則ち戲論を生ず。若し依止する所無ければ、則ち所論無し。諸の得道の聖人は、諸法に於て取る無く捨つる無し、若し取捨無ければ、能く一切諸見を離ると説けり。是の如き等は三藏の中の處處に説ける法空なり。是の如き等を名けて一切法空と爲す。

（二五）不可得空とは、有人言はく、「衆、界、入の中に於て、我法も常法も不可得なるが故に、名けて不可得空と爲す」と。有人言はく、「諸の因縁の中に法を求むるも不可得なり。五指の中の拳は不可得なるが如し、故に名けて不可得空と爲す」有人言はく、「一切法及び因縁は、畢竟不可得なるが故に、名けて不可得空と爲す」と。問うて曰はく、「何を以ての故に不可得空と名くる。智力少きが爲の故に不可得なりや。實に無なるが爲の故に不可得なりや。」答へて曰はく、「諸法は實に無なるが故に、不可得なり、智力少きに非ざるなり。問うて曰はく、「若し爾らば畢竟空、自相空と異なる無し。今何を以ての故に更に不可得空を説く。」答へて曰はく、「若し人有り、上の諸空の都て所有無きを聞かば、心に怖畏を懷きて、疑を生ぜん。今空なる所以を説くは、因縁を以て求索するに、不可得なるが故なり。不可得空を説きて、是疑怖を斷ぜんが爲の故に、佛は不可得空を説きたまへり。所以は何ん、佛言はく、「我初發心より乃ち成佛するに至るまで、及び十方の佛は、諸法の中に於て實を求むるに不可得なり」と。是を不可得空と名く。問うて曰はく、「何事か不可得なる。」答

【河流】見流、欲流、有流、無明流、四縛、欲愛身縛、瞋恚身縛、戒盜身縛、我見身縛。  
 【六愛】貪、愛、瞋、癡、欲、慢の六著心のことか。  
 【七使】欲、見、疑、慢、慳、隨眠。  
 【八邪】我、衆生、壽命、士夫、常、斷、有、無。  
 【九結】愛、恚、慢、無明、見、取、疑、嫉、慳。

【次】次に無法空有法空、無法有法空を明す。

へて曰はく、「一切法、乃至無餘涅槃は、不可得なるが故に、名けて不可得空と爲す。復次に、行者は是不可得空を得れば、三毒、四流、四縛、五蓋、六愛、七使、八邪、九結、十惡の諸の弊惡、垢結等を得ず。都て不可得なるが故に、不可得空と爲す。問うて曰はく、「若し爾らば行は是不可得空へり、何等の法利をか得る。」答へて曰はく、「戒定慧を得、四沙門果、五根、五無學業、六捨法、七覺分、八聖道分、九次第定、十無學法を得。是の如き等を得るは、是聲聞法なり。若し般若波羅蜜を得れば、則ち六波羅蜜、及び十地の諸の功德、諸の功德趣を具足す。問うて曰はく、「上には一切法乃至涅槃は、不可得なりと言へり。今何を以てか戒定慧乃至十地無學法を得と言ふ。」答へて曰はく、「是法は皆助を得と雖も、不可得にして空なるが故に亦不可得と名け、又復愛無く著無きが故に、是を不可得と名け、無爲法爲るが故に不可得と名け、聖諦なるが故に不可得と名け、第一義諦なるが故に不可得と名く。聖人は諸の功德を得と雖も、無餘涅槃に入るが故に以て得と爲さず、凡夫の人は以て大いに得と爲す。闍子は所作有り、自ら以て奇と爲さずと雖も、餘の衆生は見て以て希有と爲すが如し。是の如き等の義を名けて不可得空と爲す。

【無法空、有法空、無法有法空、無法空とは、有人曰はく、「法の已に滅せるに名け、是に滅して無きが故に無法空と名く」と。有法空とは、諸法は因縁和合して生ずるが故に、有法無し。有法は無なるが故に有法空と名く。無法有法空とは、無法有法の相を取るに不可得なり。是を無法有法空と爲す。復次に、無法有法空を觀するが故に、無法有法空と名く。

復次に、行者は諸法の生滅の若しは有門、若しは無門を觀するに、生門には喜を生じ、滅門には憂を生ず。行者は生法の空を觀じて、則ち喜心を滅し、滅法の空を觀じて、則ち憂心を滅す。所以は何ん、生ずるも得る所無く、滅するも失ふ所無くして、世間の貪愛を除くが故なり。是を無法有法空と名く。復次に、十八空の中の初三品の空は一切法を破し、後の三空も亦一切法を破す。有法空は一切法の生時、住時を破し、無法空は一切法の滅時を破し、無法有法空は生滅を一時に俱に破す。復次に、有人言はく、「過去と未來法の空は是を無法空と名け、現在及び無爲法の空は、是を有法空と名く。何を以ての故に。過去の法は、滅失し變異して無に歸し、未來の法は、因縁未だ和合せずして、未だ生ぜず、未だ有らず、未だ出でず、未だ起らず、是を以ての故に無法と名く。現在の法及び無爲法を觀知するに、現在には是を有法と名くるも、是は二俱に空なるが故に、名けて無法有法空と爲す」と。復次に、有人言はく、「無爲法は、生住滅無し、是を無法と名け、有爲法は生住滅有り、是を有法と名け、是の如き等の空を名けて無法有法空と爲す」と。是を菩薩は、內空乃至無法有法に住せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと爲すなり。

大智度論卷第三十一

# 大智度論釋初品中四緣義第四十九

卷第三十二

聖者龍樹造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

【一】下諸法の因縁次第縁等の文を釋す中、初に四縁を明す。

【因縁】因即縁の義にして、親しく果を生ずる原因に名く、故に親因縁ともいふ。

【次第縁】前時の心所縁が後のそれの生ずるために原因となるをいふ、原即ち前時の心の滅するは同類の後時の心が間斷あることなく繼起する縁となるをいふ、即ち等無間縁のこと

【縁縁】所縁縁ともいふ、所縁即ち客觀の外境が心識を生ずるために縁となるをいふ。

【増上縁】色心萬法に通じ一法の諸果に對して總て皆増上の用あるをいふ。

【問うて曰はく等】四縁を知らんとせば智度を學すべきことを明す。

菩薩摩訶薩は、諸法の因縁、次第縁、縁縁、増上縁を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

一切の有爲法は、皆四縁より生ず。謂ゆる因縁、次第縁、縁縁、増上縁なり。因縁とは、相應因、共生因、自種因、遍因、報因なり、是五因を名けて因縁と爲す。復次に、一切の有爲法を亦因縁と名く。次第縁とは、阿羅漢の過去現在末後の心心數法を除きて、諸餘の過去現在の心心數法は、能く次第縁と名く。縁縁、増上縁とは、一切法の過去現在、復次に、菩薩は四縁の自相、共相を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

問うて曰はく、般若波羅蜜の中には、四縁の如きは皆不可得なり。所以は何ん。若し因中に先に果有るは、是事は然らず。因中に先に無きも、亦然らず。若し先に有ならば、則ち無因となる。若し先に無ならば、何を以てか因と爲すや。若し先に無にして而も有ならば、亦無因より生ずべし。復次に、果は因より生ずと見るが故に、之に名けて因と爲す。

若し先に果無くんば、云何が因と名けん。復次に、若し果は因より生ぜば、果は則ち因に屬す。因は自在ならず更に餘因に屬す。若し因にして自在ならずんば、云何が果と言はん。且此因より生ずるのみ。是の如く、種種は則ち因縁無きを知る。又過去の心心數法は、都て滅して能く作す所無し。云何が能く次第縁と爲る。現在の有心は則ち次第無し。若し未來に生ぜんと欲する心に次第を與ふれば、未來は則ち未だ有らず、云何が次第を與へん。是の如くなれば、則ち次第縁無し。是の如く一切法は、無相無縁なり。云何が縁縁と言はん。若し一切法は所屬無く所依無く、皆平等ならば、云何が増上縁と言ふ。是の如く四縁は不可得なり。云何が四縁を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと説く。答へて曰はく、「汝は般若波羅蜜の相を知らず、是を以ての故に般若波羅蜜の中の四縁は、皆不可得なりと説く。般若波羅蜜は、一切の法に於て、捨つる所無く、破する所無く、畢竟清淨にして諸の戲論無し。佛の説きたまへるが如くんば、四縁有り。但少智の人は、四縁に著して、邪論を生ずるを以て、著を破せんが爲の故に説きて、諸法は實に空にして破する所無しと言ふ。心法の内外處の因縁の和合より生ずるが如し。是心は、幻の如く夢の如く、虚誑にして定性有る無し。心數法も亦是の如し。是心は共に、心數法を生ず。謂ゆる受、想、思等は是れ心數法なり、相を同じうし、縁を同じうするが故に、名けて相應と爲す。心は心數法と相應するを以て因と爲し、心數法は心と相應するを以て因と爲す。是を相應因と名く。相應因とは、譬へば親友と知識と和合して事を成すが如し。共生因と

【相を同じうし等】  
下相應因を明す。

【共生因とは等】  
下共生因を明す。

【自種因とは等】  
下自種因を明す。

【遍因とは等】  
遍因を明す。

【報因とは等】  
報因を明す。

下 下

は、一切の有爲法は各各共生因有り。共に生ずるを以ての故に、更に相佐助す。譬へば兄弟は同生の故に、互に相成濟するが如し。自種因とは、過去の善種は現在、未來の善法の因なり。過去、現在の善種は未來の善法の因なり。不善、無記も亦是の如し。是の如く一切法には各自種因有り。遍因とは、苦諦、集諦もて斷する所の結使、一切の垢法の因、是を遍因と名く。報因とは、行業の因縁の故に、善惡の果報を得。是を報因と爲す。是五因を名けて因縁と爲す。心心數法の次第に相續して間無きが故に名けて次第縁と爲し、心心數法の塵を緣するが故に生ぜる、是を縁縁と名け、諸法生ずる時、相障礙せざる、是を無障と爲す。復次に、心心數法は四縁より生じ、無想、滅盡定は三縁より生ず。縁縁を除く。諸餘の心不相應の諸行、及び色は二縁より生ず。次第縁と縁縁とを除く。有爲法は性窟きが故に、一縁より生ずること有る無し。報生の心心數法は五因より生ず。不隱沒無記は、垢法に非ざるが故に、遍因を除く。諸の煩惱は亦五因より生ず、報因を除く。何を以ての故に。諸の煩惱は、是れ隱沒にして、報は是れ不隱沒なるが故に、報因を除くなり。報生色及び心不相應の諸行は、四因より生ず。色は心心數法に非ざるが故に、相應因を除き、不隱沒の無記法なるが故に、遍因を除く。染汚色及び心不相應の諸行も亦四因より生ず、心心數法に非ざるが故に、相應因を除き、垢なるが故に、報因を除く。諸餘の心心數法は初の無漏心を除きて、皆四因より生ず、報因と遍因を除く。所以は何ん。無記に非ざるが故に、報因を除き、垢に非ざるが故に、遍因を除く、諸餘の不相應法、謂ゆる色

心不相應の諸行は、若し自種因有れば、則ち三因より生ず、相應因、報因、遍因を除く。  
 若し自種因無ければ、則ち二因より生ず、共生因と無障因となり。初の無漏の心心數法は  
 三因より生ず、相應因と共生因と無障因となり。是初の無漏心の中の色、及び心不相應の  
 諸行は、二因より生ず、共生因と無障因となり。法は一因より生ずること有る無し。若し  
 六因もて生ずるは、是を四縁と名く。菩薩は般若波羅蜜を行じて、是の如く四縁を觀じ、  
 心に著する所無く、是法を分別すと雖も、而も其空にして、皆幻化の如しと知る。幻化の  
 中に種種の別異有りと雖も、智者は之を觀じて、實有る無く、但眼を誑して分別を爲すを  
 知る。凡夫人の法は皆是れ顛倒虚誑にして、實有る無きを知るが故に、四縁有り。是の如  
 きを云何が實と爲さん。賢聖法の因は、凡夫法より生ずるが故に、亦是れ不實なり。先の  
 十八空の中に説けるが如し。菩薩は般若波羅蜜の中に於て、一法も定性として、取るべ  
 き有る無きが故に、則ち破すべからず。衆生は因縁の空法に著するを以ての故に、名けて  
 破すべしと爲す。譬へば小兒の水中の月を見て、心に愛著を生じ、取らんと欲して而も得  
 る能はず、心に憂惱を懷くに、智者教へて、眼には見るべしと雖も、手には捉ふべからず  
 と言ふが如し。但取るべきを破して、見るべきを破せず。菩薩は、諸法は四縁より生ずる  
 を觀知して、四縁の中の定相を取らず。四縁和合の生は、水中の月の如し。虚誑無所有な  
 りと爲すと雖も、要す水月の因縁より生じ、餘縁に従はず、諸法有るも亦是の如く、各  
 自ら因縁より生じて、亦定實無きなり。是を以ての故に菩薩は實の如く、因縁、次第縁、

【問うて曰はく等】四縁の義を知らんため智度を學する所以を明す。

緣縁、増上縁の相を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと説く。

問うて曰はく、「若し廣く四縁の義を知らんと欲せば、應に阿毘曇を學すべし。云何が此中に四縁の義を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしとするや。」答へて曰はく、「阿毘曇の四縁の義は、初めて學すれば、其實を得るが如きも、之を求むること轉深ければ邪見に入る。汝が上の四縁の義を破する中に説くが如し。復次に、諸法の因る所は四縁に因る、四縁は復何の因る所ぞ。若し因有れば則ち無窮なり。若し無窮なれば則ち始無く、若し始無ければ則ち因無し。若し然らば一切法は皆應に因無かるべし。若し始有らば始は則ち因る所無し、若し因る所無うして而も有ならば、則ち因縁を待たず。若し然らば一切諸法も、亦因縁を待たずして而も有ならん。復次に、諸法の因縁より生ずるに二種有り。若し因縁の中に先に有ならば、則ち因縁を待たずして生ず。則ち非因縁なり。若し因縁の中に先に無なれば、則ち各各の因縁無し。戲論の四縁を以てするが故に、是の如き等の過有り。般若波羅蜜の中の不可得空の如きは、是の如き等の失無し。世間の人の耳目の親る所の生老病死は、是れ則ち有と爲せども、細く其相を求むれば、則ち不可得なるが如し。是を以ての故に般若波羅蜜の中には、但邪見を除きて而も四縁を破せず。是故に四縁の相を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと言ふ。

【釋】復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は、諸法の如、法性、實際を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。舍利弗、菩薩摩訶薩は、應に是の如く般若波羅蜜に住すべし。

【二】下諸法の如法性實際を知らんと欲せば等の文を釋す中、初に如の義を明す。

【法性とは等】次に法性の義を明す【實際とは等】次に實際の義を明す【問うて曰はく等】如と法性と實際との異同を明す。

諸法の如に二種有り。一には各々の相、二には實相なり。各々の相とは、地の堅相、水の濕相、火の熱相、風の動相の如き、是の如き等の諸法は、各自ら相有りとは分別す。實相とは、各々の相の中に於て分別して實を求むるに不可得なり。破すべからず、諸の過失無し、自相空の中に説くが如し。地若し實に是れ堅相ならば、何を以ての故に膠蠟等は火と會する時、其自性を捨つるや。神通有る人は、地に入ること水の如くす。又木石を分散すれば、則ち堅相を失す。又地を破して以て微塵と爲し、方を以て塵を破すに、終に空に歸して亦堅相を失す。是の如く地相を推求するに、則ち不可得なり。若し不可得なれば、其實は皆空なり。空なるは則ち是れ地の實相なり。一切の別相も皆亦是の如し。是を名けて如と爲す。法性とは、前に説くが如く各々の法は空なり。空と有の差品、是を如と爲し、同じく一空と爲すは是を法性と爲す。是法性に亦二種有り、一には無著の心を用て諸法を分別するに、各自ら性有り。二には無量の法に名く。謂ゆる諸法實相なり。【持心經】に、「法性は無量なり。聲聞人は法性を得と雖も、智慧に量有るを以ての故に、無量に説く能はず。人の大海に到ると雖も、器小なるを以ての故に、無量の水を取る能はざるが如し」と説くが如し。是を法性と爲す。實際とは、法性を以て實證と爲すが故に際と爲す。又阿羅漢を名けて實際に住すと爲すが如し。

問うて曰はく、「如と法性と實際と、是三事は一と爲すや異と爲すや。若し一ならば云何が三と説くや。若し三ならば、今應當に分別して説くべし。」答へて曰はく、「是三は皆是れ

諸法實相の異名なり、所以は何ん。凡夫は無智にして、一切法に於て邪觀を爲す。謂ゆる常と樂と淨と實我等なり。佛弟子は、法の本相の如く觀るに、是時常を見ざる是を無常と名け、樂を見ざる是を苦と名け、淨を見ざる是を不淨と名け、實を見ざる是を空と名け、我を見ざる是を無我と名く。若し常を見て無常を見ざるは、是れ則ち妄見なり。苦、空、無我、不淨を見るも亦是の如し。是を名けて知と爲す。如とは木の如くにして、能く敗壞すること無し。是を以ての故に佛は三法を説きて、法印と爲したまふ。謂ゆる一切有爲法の無常印と、一切法の無我印と涅槃寂靜印となり。問うて曰はく、「是三法印は般若波羅蜜の中に悉く皆破壞せり。佛、須菩提に告げたまひしが如し。」若し菩薩摩訶薩は、色を常なりと觀すれば、般若波羅蜜を行ぜず。色を無常なりと觀すれば、般若波羅蜜を行ぜず。苦と樂、我と無我、寂滅と非寂滅も亦是の如し」と。是の如きは、何が法印と名くる。答へて曰はく、「二經は皆是れ佛説なり。般若波羅蜜經一の中の如きは、了了に諸法の實相を説く。人有り、常顛倒に著するが故に、常見を捨て、無常相に著せざる、是を法印と名く。常を捨てて無常に著する者を以て、法印と爲すと謂ふには非ず。我乃至寂滅も亦是の如し。般若波羅蜜の中には、無常等の見に著するを破す、受けず著せざるを破すと謂ふに非ず。是諸法の如を得已れば、則ち法性の中に入り、諸觀を滅して異信を生ぜず。性自ら爾るが故なり。譬へば小兒の水中の月を見、水に入りて之を求め、得ずして便ち愁ふるに、智者は語りて、性自ら爾なり、憂惱を生ずる莫れと言ふが如し。善く法性に入る、是を實

【問うて曰はく等】次に小乘にいふ如等を明す。

際と爲す。

問うて曰はく、「聲聞法の中には何を以てか是如、法性、實際を説かず、而も摩訶衍法の中にのみ處處に説くや、答へて曰はく、「聲聞法の中にも亦説く處有り、但少なきのみ。『雜阿含』の中に説くが如し。一比丘有り、佛に問ふ、「十二因縁の法は是を佛の作と爲すや、是を餘人の作と爲すや」と。佛、比丘に告げたまはく、「我は十二因縁を作らず、亦餘人の作るにも非ず、佛有るも佛無きも、諸法は如にして法相、法位は常有なり、謂ゆる是事有るが故に是事有り。是事生ずるが故に是事生ず。無明の如き因縁有るが故に諸行有り、諸行の因縁の故に識有り、乃至老死の因縁の故に憂悲苦惱有り。是事無なるが故に是事無なり、是事滅するが故に是事滅す。無明滅するが故に諸行滅し、諸行滅するが故に識滅し、乃至老死滅するが故に憂悲苦惱滅するが如し。是の如く生滅の法は佛有るも佛無きも常に爾なり」と。是處には如を説きたまひしなり。『雜阿含』の舍利弗師子吼經の中に説くが如し。佛、舍利弗に一句義を問ひ、三たび問ひたまふに、三たび答ふる能はず。佛は、少しく舍利弗に開示し已りて靜室に入りたまふ。舍利弗、諸の比丘を集め、諸の比丘に語りて言はく、「佛未だ我に事端を示したまはず、未だ即ち答ふる能はず。今我此法に於て、七日七夜、其事を演説するに、而も窮盡せず」と。復一比丘有り、佛に白さく、「佛、靜室に入りたまひて後、舍利弗は師子吼を作して自ら讚歎せり」と。佛、比丘に語りたまはく、「舍利弗の語は實にして虚ならず、所以は何ん。舍利弗は善く法性に通達するが故に」と、

【實際は即ち等】  
下、更に如等の義  
を廣説す。

聲聞法の中には、諸法生滅の相を觀する、是を如と爲し、一切の諸觀を滅すれば諸法の實相を得。是處には法性を説きたまひしなり。問うて曰はく、「是處には但如、法性のみを説く、何の處にか復實際を説く。」答へて曰はく、「此二事は因縁有りて起るが故に説く。實際は因縁無し、故に實際を説きたまはず。」

問うて曰はく、「實際は即ち是れ涅槃なり。涅槃の爲の故に佛は十二部經を説きたまへり。云何が因縁無しと言ふ。」答へて曰はく、「涅槃には種種の名字有り。或は名けて離と爲し、或は名けて妙と爲し、或は名けて出と爲すと説く。是の如き等は則ち爲に實際を説くなり。但名字を説かざるが故に因縁無しと言ふのみ。復次に、諸法の如とは、諸法の未だ生ぜざる時の如く、生ずる時も亦是の如く、生じ已りて過去、現在も亦是の如し。諸法は三世に平等なり、是を名けて如と爲す。問うて曰はく、「若し未だ法を生ぜざれば名けて未だ生法有らずと爲す。現在には則ち法有りて用ふべし。現在の法は事用相有るに因るが故に、過ぎたる事を追憶す、是を過去と名く。三世は各異りて如實にして一なりと爲すべからず。云何が三世平等、是を名けて如と爲すと云ふや。」答へて曰はく、「諸法實相の中には、三世は等一にして異なる無し。般若波羅蜜如品の中に説くが如し。過去の如、未來の如、現在の如、如來の如は一如にして異なること有る無し」と。復次に、先に論議の中に已に破せり。生法若し無生ならば、未來、現在も亦無生なり、云何が等しからざらん。又復過去世は始無く、未來世は後無く、現在世は住ること無し、是を以ての故に三世は平等にして、名け

て如と爲す。是如を行じ已りて、無量の法性の中に入る。法性とは、法は涅槃に名け、壞すべからず戲論すべからず。法性は名けて本分の種と爲す。黃石の中に金性有り、白石の中に銀性有るが如く、是の如く一切世間の法の中には、皆涅槃の性有り。諸佛賢聖は智慧、方便、持戒、禪定を以て、教化引導して是涅槃の性を得しめたまふに、利根の者は即ち是諸法は皆是れ法性なるを知る。譬へば神通の人は能く瓦石を變じて、皆金と爲らしむるが如し。鈍根の者は、方便もて分別して之を求めて、乃ち法性を得。譬へば大冶の石を鼓して、然る後に金を得るが如し。復次に、水の性は下流するが故に海に會歸し、合して一味と爲るが如く、諸法も亦是の如し。一切の總相、別相は、皆法性に歸して同じく一相と爲る。是を法性と名く。金剛の山頂に在りて漸漸に穿ち下り、金剛の地際に至りて、自性に到れば乃ち止むが如く、諸法も亦是の如し。智慧もて分別し、推求し已りて如の中に到り、如より自性に入り、本末の如くにして生じ、諸の戲論を滅する、是を名けて法性と爲す。又犢子の周樟し嗚呼して、母を得れば、乃ち止むが如く、諸法も亦是の如し。種別異にして取捨同じからざるも、自性に到れば乃ち止むを得て、復過ぐる處無し、是を法性と名く。實際とは先に説くが如く、法性を名けて實と爲し、入處を名けて際と爲す。復次に、一一の法に九種有り。一には體有り、二には各各法有り、眼耳は、同じく四大造なりと雖も、而も眼のみ獨り能く見、耳には見る功無きが如し。又火は熱を以て法と爲し、而も潤す能はざるが如し。三には諸法各力有り、火の焼くを以て力と爲し、水は潤すを

以て力と爲すが如し。四には諸法は各自ら因有り。五には諸法は各自ら縁有り。六には諸法は各自ら果有り。七には諸法は各自ら性有り、八には諸法は各有限礙有り、九には諸法は各開通方便有り。諸法の生ずる時は、體及び餘の法、凡て九事有り。此法には各體法有りて具足するを知る、是を世間の下知と名く。此九法は終に變異して盡滅に歸するを知る、是を中知と名く。譬へば此身は生ずるに不淨より出で、復澡浴し嚴餘すと雖も、終に不淨に歸するが如し。是法は有に非ず無に非ず、生に非ず滅に非ず、諸の觀法を滅して究竟清淨なる、是を上知と名く。復次に、有人言はく、「是九事の中の有法、是を如と名く。譬へば地法は堅重、水法は冷濕、火法は熱照、風法は輕動、心法は識解なるが如し」と。是の如き等の法を名けて如と爲す。經の中に説くが如し、「佛有るも佛無きも、法相、法位、常住にして世間の如し。謂ゆる無明の因縁、諸行、常にして本法の如し」と。法性とは是九法の中の性なり。實際とは九法の果證を得るなり。復次に、諸法實相は常住不動なれども、衆生は無明等の諸の煩惱を以ての故に、實相の中に於て轉異して邪曲なり。諸佛賢聖は、種種の方便もて法を説き、無明等の諸の煩惱を破して、衆生をして還實性を得しめたまへり。本の如くにして異らざる、是を名けて如と爲す。實性と無明と合するが故に、變異すれば則ち不清淨なり。若し無明等を除却すれば、其眞性を得。是を法性清淨實際と名け、法性の中に入ると名く。法性の無量無邊たるを知るを最も微妙と爲す。更に有法の法性に勝れ、法性を出づる者無ければ、心則ち満足して更

に餘を求めず、則便證を作す。譬へば道を行くに、日に發引して止息せざれば、所至の處に到りて、復去る心無きが如し。行者の實際に住するも亦復是の如し。羅漢、辟支佛の如きは實際に住して、縦ひ復怛沙の諸佛の具爲に說法したまふとも、亦能く更に増進有らず、又復三界に生ぜず。若し菩薩は是法性の中に入れば、懸に實際を知る。若し未だ六波羅蜜を具足せずして、衆生を教化せんに、爾時若し成佛の道を妨ぐるを證すれば、是時菩薩は大悲、精進力を以ての故に還りて諸行を修す。復次に、諸法實相の中には常法有る無く、樂法有る無く、我法有る無く、實法有る無しと知り、亦是觀法を捨つれば、是の如き等の一切の觀法は皆滅す。是を諸法は實に涅槃の如く、不生不滅にして、本末の如く生ずと爲す。譬へば、水は是れ冷相なるも、火を假るが故に熱し、若し火滅すれば、熱盡きて還冷なること、本の如くなるが如し。諸の觀法を用ふるは、水の火を得るが如く、若し諸の觀法を滅するは、火滅して水冷なるが如し。是を名けて如、如實、常住と爲す。何を以ての故に。諸法の性は自ら兩ればなり。譬へば一切の色法に皆空分有るが如く、諸法の中には皆涅槃の性有り。是を法性と名く。涅槃の種種の方便の法の中に皆涅槃の性有るを得。若し證を得る時、法性の如くなれば則ち是れ實際なり。復次に、法性は無量無邊にして、心無數法の量る所に非ず。是を法性と名く。妙に此を極むる、是を眞際と名く。

【經】復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は三千大千世界の中の大地、諸山、微塵を數へ知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。菩薩摩訶薩は一毛を折りて百分と爲し、一分毛を以

【三】下、菩薩は三千大千世界の中の等の文を釋す、初に菩薩の大力を讚歎するを明す。

て盡く三千大千世界の中の大海、江河、池泉の諸水を擧げんに、而も水性を擾さざらんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。三千大千世界の中の諸火、一時に皆然え、譬へば劫盡き燒くが如き時、菩薩摩訶薩は一吹して滅せしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。三千大千世界の中の諸の大風起りて、三千大千世界、及び諸の須彌山を吹き破ること、腐草を摧くが如くならんと欲するに、菩薩摩訶薩は一指を以て、其風力を障へて起らざらしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

問うて曰はく、佛は何を以てか諸の菩薩の六度等の諸の功徳を讚歎せずして、此大力を讚歎したまひしや、答へて曰はく、衆生に二種有り。一には善法を樂み、二には善法の果報を樂む。善法を樂む者の爲には、諸の功徳を讚歎し、善法の果法を樂む者の爲には大神力を讚歎したまへり。復次に、有人言はく、四大の名は其實は亦無邊無盡にして、常に世に在るが故に、能く悉く動かして其多少を量る人無し。城、郭、臺殿を造作すと雖も、用ふる所甚だ少し。地は廣大にして萬物を載せ育て、最も牢固なりと爲す。是が爲の故に佛は三千大千世界の地の及び須彌、諸山の微塵、皆盡く其數を知らんと欲し、及び一一の微塵の中の衆生の業因縁の各に分有りて、其多少を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と。問うて曰はく、「一石土の微塵すら尙數ふべきこと難し。何に況んや三千大千世界の地、及び諸山の微塵の數をや。是は信すべからず。」答へて曰はく、「聲聞、辟支佛の智慧すら尙知る能はず、何に況んや凡夫をや。是事は諸佛及び大菩薩の知り

【問うて曰はく等】次に智度を行じて此智慧をうる所以を明す。

たまふ所なり。「法華經」に「譬喩へば三千大千世界の地及び諸山を末して以て塵と爲し、東方千世界を過ぎて一塵を下し、是の如く千世界を過ぎて復一塵を下し、是の如くして三千世界の諸塵を盡す」と。佛、比丘に告げたまはく、「是塵數の世界は算數籌量して知り得べきや不や」と。諸の比丘言はく、「知るを得べからず」と。佛言はく、「微塵を著くべき、及び微塵を著けざる所の諸國を盡く皆末して以て塵と爲さんに、大通慧佛出世已來の劫數は是の如し」と説くが如し。是の如き無量恆河沙等の世界の微塵を佛大菩薩は皆悉く能く知りたまへり。何に況んや一恆河沙等の世界をや。復次に、無量とは人心に隨うて説く。大海水の如きは名けて無量と爲すも、而も深さ八萬由旬にして、大身の羅睺阿修羅王は、其多少を量るすら尙以て難しと爲さざるが如し。

問うて曰はく、「云何が般若波羅蜜を行じて是智慧を得る。」答へて曰はく、「人有り。般若波羅蜜を行じて、諸の煩惱及び邪見戲論を滅し、菩薩の甚深禪定に入り、念智清淨にして増廣なるが故に、則ち能く一切諸色の微塵を分別して其量數を知る。復次に諸佛及び大菩薩は無礙解脫を得たまふが故に、是に過ぎたる事すら尙以て難しと爲したまはず、何に況んや此に於てをや。復次に、有人は「地を牢堅と爲す。心は形質無く、皆是れ虚妄なり」と爲す。是を以ての故に佛は心力を大と爲すと説きたまへり。般若波羅蜜を行ずるが故に、此大地を散じて、以て微塵と爲す。地は色香味觸有り、重きを以ての故に自ら所作無く、水は香少きが故に動作地に勝り、火は香味少きが故に勢水に勝り、風は色香味少

きが故に動作火に勝り、心は四事無きが故に所爲の力大なり。又心は多くの煩惱結縛有りて繫縛するを以ての故に、心力をして微妙ならしむ。有漏の善心は煩惱無しと雖も、心をして諸法の相を取るが故に、其力も亦少なり。二乗の無漏心は相を取らずと雖も、智慧に量有り、及び無漏道を出づる時、六情もて俗に隨ひ、分別して諸法の相を取るを以ての故に、心力を盡さず。諸佛及び大菩薩は、智慧無量無邊にして常に禪定に處し、世間と涅槃とに於て分別する所無し。諸法の實相は其れ實に異ならず、但智に優劣有るのみ。般若波羅蜜を行する者は、畢竟清淨にして畢竟する所無く、一念の中に、能く十方一切如恆河沙等の、三千大千世界の大地諸山の微塵を數ふ。何に況んや十方各各の一恆河沙の世界をや。復次に、若し般若波羅蜜を離れては、神通を得と雖も、則ち上の如く知る所有る能はず。是を以ての故に是大神力を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと説く、復有人言はく、「一切諸物の中にて、水を最大と爲す。所以は何ん。大地の上下四邊に水有らざる無く、若し護世天主も、天龍の雨を節量せず、又水を消する珠無くんば則ち天地は漂没す。又水の因縁を以ての故に、世間の衆生數、非衆生數は、皆生長するを得、是を以て水を最大と爲すを知るべし」と。是故に、佛は「菩薩は水滴の多少、滴滴分散して、力無からしむるを知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と説きたまへり。復有人言はく、「火を最大と爲す。所以は何ん、香味を除くが故に、又水の出處は甚だ多きを以て、而も火は能く之を滅す。大火の力は能く萬物を焼き、能く諸の闇を照す。是を以ての故に、

【四】下、一たび  
結跏趺坐し、  
結跏趺坐する中、  
結跏趺坐の因縁を明す

火を最大と爲すを知る」と。是故に佛は、「菩薩、大火を吹き滅せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と説きたまへり。問うて曰はく、「火は風に因りて乃ち燃ゆること熾なるを得、云何が相滅する。答へて曰はく、「復相有り」と雖も、因過ぐれば則ち相滅す。問うて曰はく、「若し爾らば火は多きこと無量にして、口の風は甚だ少し、何んが能く之を滅する。」答へて曰はく、「菩薩は般若波羅蜜を行じ、禪定に因りて神通を得、能く身を變じて大ならしむ、口の風も亦大なるが故に能く之を滅す。又神力を以て、小風なれども能く滅す。譬へば小金剛の能く大山を摧破するが如し。是を以ての故に諸天世人は、此神力を見て皆悉く宗伏す。復次に、菩薩は火の害を爲す處廣きを以て、衆生を憐愍するが故に、神力を以て之を滅し、又三千世界の成立するは、甚だ難きを以て、菩薩は福德智慧の故に力能く之を制す。復有人言はく、「四大の中に於て風力最も大なり。色香味無きが故に動相最大なり。所以は何ん。虚空の無邊なるが如く、風も亦無邊なればなり。一切の生育、成敗は皆風に由る。大風の勢は三千大千世界の諸山を摧碎す」と。是を以ての故に佛は、「能く一指を以て其風力を障へんとせば、當に般若波羅蜜を學すべし」と説きたまへり。所以は何ん、般若波羅蜜の實相は、無量無邊にして、能く指力をして、是の如くならしむればなり。

【經】菩薩摩訶薩は一たび結跏趺坐し、遍く三千大千世界の中の虚空に滿せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし、

【論】問うて曰はく、「菩薩は何の因縁を以ての故に是の如く結跏趺坐する。」答へて曰はく、

「梵天王は三千世界に主なるを以て、邪見心を生じ、自ら以て大と爲す。菩薩の結跏趺坐して虚空に遍滿するを見て、則ち憍慢の心を思む。又神通力の中に於て、巧方便の故に、一を能く多と爲し、多を能く一と爲し、小を能く大と爲し、大を能く小と爲す。亦希有の難事を現さんと欲するが故に、坐して虚空に遍滿す。亦諸の鬼神、龍王の衆生を惱亂するを遮せんが爲の故に、坐して虚空に滿ち、衆生をして安隱ならしむ。難陀、婆難陀龍王兄弟の舍婆提城を破らんと欲して、諸の兵杖、毒蛇の屬を雨らすに、是時、目連端坐して虚空に遍滿し、諸の害物を變じて皆華香瓔珞と成せしが如し。是を以ての故に、「菩薩摩訶薩、一たび結跏趺坐して、三千大千世界の虚空に遍滿せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と説く。

菩薩摩訶薩、一毛を以て三千大千世界の中の、諸の須彌山王を擧げ、他方の無量阿僧祇の諸佛の世界を擲過して、衆生を擾さざらんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

問うて曰はく、「菩薩は何を以ての故に、須彌山及び諸山を擧げて、他方の無量の世界を過著する。」答へて曰はく、「必ずしも擧ぐる者有るにあらず、此れ菩薩の力は、能く之を擧ぐるを明にするのみ。復次に、諸の菩薩は佛の當に法を説きたまふべきが爲の故に先づ三千大千世界を莊嚴し、諸山を除きて地を平整ならしむ。『法華經』の中に説くが如し、「佛は諸の化佛を集めんと欲したまふが故に、先づ地を平治したまふ」と。亦希有の事を現じて、衆生をして見しめんと欲するが故なり。所以は何ん。一須彌山の高さは、八

【五】一毛を以て三千大千世界等の文を釋する中、今須彌山等の諸山を擧げて他方の無量の世界を擲過するを明す。

萬四千由旬なり。若し此一山を擧ぐるすら、已に希有と爲す、何に況んや三千大千世界の百億の須彌山をや。若し一毛を以て、三千大千世界の百億の須彌山を擧ぐるすら尙難し、何に況んや一毛頭を以て、百億の須彌山を擧げ、無量阿僧祇の世界を過ぐるをや。衆生は菩薩の希有の事を見て、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發し、是念を作して言はく、「是菩薩は未だ佛道を成ぜずして、神力乃ち爾なり、何に況んや成佛するをや」と。是を以ての故に是の如く説く。

一食を以て、十方の各恆河沙等の如き、諸佛及び僧を供養せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。一衣、華香、瓔珞、末香、塗香、燒香、燈燭、幢幡、華蓋等を以て、諸佛及び僧を供養せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【一〇】一食を以て十方各恆河沙等の如き、今一食を釋する中、今一食を以て十方如恆河沙等の諸佛及び僧を供養するを明す。

問うて曰はく、「菩薩若し一食を以て一佛及び僧を供養するすら、尙是れ難事なり、何に況んや十方如恆河沙等の諸佛及び僧をや。」答へて曰はく、「供養の功德は、心に在りて事に在らざるなり。若し菩薩、一食の衷心を以て、悉く十方の諸佛及び僧に供養せば、亦遠近を以て礙と爲さず。是故に諸佛は皆見て皆受けたまふ。問うて曰はく、「諸佛は一切智有るが故に、皆見て皆受けたまはんも、僧は一切智無し、云何が見るを得、云何が受くるを得ん。」答へて曰はく、「僧は見ず、知らずと雖も、而も其供養は施者福を得。譬へば人有り、使を遣し、彼人を供養せんに、彼人は得ずと雖も、而も此人は已に施の福を獲るが如し。慈三昧は、衆生に於て施す所無しと雖も、而も行者の功德は無量なるが如し。復次に

諸の菩薩は、無量無盡の功徳を成就し、一食を以て十方の諸佛及び僧を供養するに、皆悉く充足して而も亦盡きず。譬へば湧泉の出でて竭きざるが如し。文殊尸利、鉢の歡喜丸を以て八萬四千の僧に供養せるに、皆悉く充足して而も亦盡きざりしが如し。復次に、菩薩は此に於て、一鉢の食を以て十方の諸佛を供養するに、而も十方の佛前に、飲食の具、具足して出づ。譬へば鬼神は、人の一口の食を得て、而も千萬倍を出すが如し。復次に、菩薩は般若波羅蜜を行じ、無量の禪定門を得、及び無量の智慧方便門を得。是を以ての故に能はざる所無し。般若波羅蜜は無礙なるを以ての故に、是菩薩の心の所作も亦無礙なり。是菩薩は、能く十方千萬億恆河沙等の諸佛及び僧を供養す、向に泥んや一恆河沙の如きをや。衣服、華香、瓔珞、末香、塗香、燒香、燈燭、幢幡、華蓋等の如きも、亦是の如し。

復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は、十方の各恆河沙等の如き世界の中の衆生をして、悉く戒、三昧、智慧、解脫、解脫知見を具せしめ、須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢果、乃至無餘涅槃を得しめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

五衆の義は先に説くが如し。須陀洹果に二種有り。一には佛説きたまはく、「三結を斷じて無爲果を得」と。又阿毘曇に説くが如きは、「八十八結を斷じて無爲須陀洹果を得」と。二には信行、法行の人にして、道比智の中に住し、須陀洹果の證を得る者は是なり。

復次に、須陀洹を流と名く。即ち是れ八聖道分なり。般若を入と名く。是八聖道分に入

【七】下、十方の各恆河沙等の如き世界の衆生をして、等の文を釋す中、須陀洹果乃至無餘涅槃を明す。【法行】自ら聖法によつて行ずるをいふ。

りて、涅槃に流入するなり。是を初めて諸法の實相を觀すと名く。無量の法作分の中に入るを得て、聖人の數の中に墮す。息忌を一と名け、伽彌を來と名く。是人は此に死してより天上に生じ、天上より一たび來りて、衆苦を盡すを得。阿那を不と名け、伽彌を來と名け、是を來の相と名く。是人は欲界の中に死して色界、無色界の中に生じ、彼に於て漏を盡して、復來り生ぜざるなり。問うて曰はく、『今世に滅せる阿那伽彌、中陰に滅せる阿那伽彌は、此も亦色無色界に生ぜず。何を以てか名けて阿那伽彌と爲す。』答へて曰はく、『阿那伽彌は多く色無色界の中に生じ、現在に滅する者は少し。少を以て多に従ふが故なり。中間に滅する者も亦色界に生ぜんと欲し、後身の患ふべきを見て即ち涅槃を取。是を以ての故に、多に因りて名を得。阿羅漢は一切の煩惱を盡すが故に、應に一切の天龍、鬼神の供養を受くべし。是阿羅漢に九種有り。退法、不退法、死法、護法、住法、勝進法、不壞法、慧解脫、共解脫なり。九種の義は先に説くが如し。及び八背捨、八勝處、十一切處、滅盡定、無諍三昧、願智等、阿羅漢の諸の妙功德、及び無餘涅槃を得。無餘涅槃を阿羅漢と名け、此五衆を捨して更に復相續して後を受けず、五衆の身心の苦、皆悉く永く滅す、後の三道の果は初道に説けるが如し。

復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じて布施する時、應に是の如きの分別を作すべし。是の如き布施もて大果報を得、是の如き布施もて刹利の大姓、婆羅門の大姓、居士の大家に生ずるを得、是の如き布施もて四天王天處、三十三天、夜摩天、兜率陀

【八】下、般若波羅蜜を行じて布施する時等の文を釋す。初に布施もて大果を得るを明す。

天、化樂天、他化自在天に生ずるを得、是布施に因りて初禪、二禪、三禪、四禪、無邊空處、無邊識處、無所有處、非有想非無想處に入るを得、是布施に因りて能く八聖道分を生じ、是布施に因りて能く須陀洹道乃至佛道を得んとせば、當に般若波羅蜜を學すべし。

菩薩摩訶薩は、諸法實相の取る無く、捨つる無く、破壞する所無きを知り、不可得の般若波羅蜜を行じ、大悲心を以て、還福行を修し、福行の初門に先づ布施を行す。菩薩は般若波羅蜜を行じ、智慧明利にして能く施福を分別す。施物は同じと雖も、福德の多少は心の優劣に隨ふ。舍利弗が一鉢の飯を以て佛に上つるに、佛、即ち狗に廻施して、而も舍利弗に問ひたまひしが如し。汝は飯を以て我に施し、我は飯を以て狗に施す。誰か福を得ること多からん」と。舍利弗言さく、我佛法の義を解するが如くんば、佛の狗に施したまふもの福を得ること多からん」と。舍利弗は一切人中に於て智慧最上なり、而して佛の福田は最も第一と爲す。佛が狗の惡田に施して、福を得たまふこと極めて多きに如かず、是を以ての故に大福は心より生じ、田に在らざるを知る。舍利弗は千萬億倍するも、佛心に及ばざるが如し。問うて曰はく、汝の説の如くんば、福田妙なるが故に福を得ること多し。而るを舍利弗、佛に施すに大福を得ざらんや。答へて曰はく、良田は復福を得ること多しと雖も、而も心に如かず。所以は何ん。心は内主爲り、田は是れ外事なるが故に。或時は、布施の福は福田に在り。億耳阿羅漢の如きは、昔一華を以て佛塔に施し、九十一劫に入天の中に樂を受け、餘の福德力もて阿羅漢を得たり。又阿輪迦王の如きは、小兒の時、土を

【問うて曰はく等】次に布施の功德によつて利種の生じ、或は佛たるを

以て佛に施し、閻浮提に王となり、八萬の塔を起て、最後に道を得たり。施物は至つて賤しけれども、小兒の心薄く、但福田妙なるを以ての故に、大果報を得たり。當に大福は良田より生ずるを知るべし。若し大中の上は、三事都て具と、心と物と、福田との三事皆妙なり。般若波羅蜜の初品の中に、佛、好華を以て十方の佛に散じたまへり」と説くが如し。復次に、又般若波羅蜜心を以て布施するが如きは、著する所無きが故に大果報を得。復次に、涅槃の爲の故に施すも亦大報を得。大悲心を以て一切衆生を度せんが爲の故に布施するも、亦大報を得。復次に、大果報とは是中に説くが如く、刹利家に生じ、乃至佛たるを得る、是なり。

問うて曰はく、「云何が布施して刹利家に生ずるを得、乃至佛たるを得る。冥合して曰はく、『若し有人は布施及び持戒の故に、人天の中の富貴を得、有人の如きは、至心に布施持戒するが故に、刹利家に生ず。刹利とは王及び大臣なり。若し智慧經書に著するも、而も衆生を憫さず、布施持戒するが故に、婆羅門の家に生ず。若し布施持戒減少して世樂を樂著すれば、居士の大家に生ず。居士とは小人にして而も巨富なるなり。若し布施持戒清淨小勝にして、家業を厭患し、聽法を好樂し、善人に供養すれば、四天王處に生ず。所以は何ん。彼に在りて須ふる所有り、欲心生じて、皆常に此間の賢聖善人を見るを得、心に供養を生じ、修福の處に近づくを以ての故なり。若し布施持戒清淨にして、父母及び其尊ぶ所を供養し、心に勝るるを求めんと欲せば、三十三天に生ず。若し布施持戒清淨にし

て學問を好み、其心柔和なれば、夜摩天に生ず。若し布施持戒清淨にして、二事をして轉勝れしめ、多聞を好樂し好醜を分別し、涅槃を愛樂し、心、功徳に著すれば、兜率天に生ず。若し布施し、深心に持戒し、多聞にして學問を好樂し、自力もて生活すれば、化自樂天に生ず。若し布施する時、清淨に、持戒轉深く、多聞を好樂し、自ら貴く、情多くして、能く自ら苦しまず、他より樂を求むれば、他化自在天に生ず。他の思惟する所を勸心に方便し、化して女色を作り、五欲を奪ふこと而も自在なり、譬へば、庶民の身を苦しむるを、自業の強力もて之を奪ふが如し。復次に、布施する時は、願の因縁を以ての故に天上に生ず。經に説くが如くば、人有り。少しく布施持戒を行じ、禪定を知らず。是人は四天王天有るを聞いて、心に常に志願せるに、佛言はく、「是人は命終して四天上に生ぜん。必ず是處有り」と。乃至他化自在天も亦是の如し。復次に、人有り。布施持戒し、布施を修する時、其心に樂を得。若し施多ければ、樂も亦多し。是の如く思惟して五欲を捨て五蓋を除きて、初禪に入る。乃至非有想非無想天も是の如し。四禪、四無色定の義は上説の如し。復次に、人有り。佛及び佛弟子に布施し、其に従うて道法を説くを聞かんに、是人は此布施に因るが故に、心柔軟を得、智慧明利にして、即ち八聖道分を生じ、三結を斷じて須陀洹果を得。乃至佛道も亦是の如し。是布施に因り、其説法を聞き、便ち阿耨多羅三藐三菩提の心を發す。復次に、未だ欲を離れずして布施すれば、人中の富貴及び六欲天の中に生じ、若し欲心を離れて布施すれば、梵世天上、乃至廣果天に生ず。若し色心を離

れて布施すれば、無色天中に生じ、三界を離れて布施し、涅槃の爲にするが故に、聲聞道を得。布施する時、憒闇を惡み厭ひ、閑靜を好樂し、深智慧を喜べば、辟支佛を得。布施する時、大悲心を起して、一切を度せんと欲する、第一甚深畢竟清淨の智慧の爲にすれば、佛道を成ずるを得。

【釋】復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を行じて、布施する時、慧の方便力を以ての故に、能く檀波羅蜜、尸羅波羅蜜、屬提波羅蜜、毘梨耶波羅蜜、禪波羅蜜、般若波羅蜜を具足す。舍利弗、佛に白して言さく、「世尊、菩薩摩訶薩は、云何が布施する時、慧の方便力を以ての故に、檀波羅蜜、乃至般若波羅蜜を具足する」と。佛、舍利弗に告げたまはく、「施人、受人、財物は不可得なるが故に、能く檀波羅蜜を具足し、罪不罪は不可得なるが故に、尸羅波羅蜜を具足し、心動ぜざるが故に、屬提波羅蜜を具足し、身心精進して懈息せざるが故に、毘梨耶波羅蜜を具足し、不亂不味なるが故に、禪波羅蜜を具足し、一切法の不可得なるを知るが故に、般若波羅蜜を具足す」と。

【九】下、般若波羅蜜を行じて布施する時、慧の方便力を以ての故に、等閑の文を釋す中、今は慧方便を明す。

【論】具足の義は先に已に廣く説けり。慧方便は今此中に説かん。謂ゆる三事不可得なる者は是れなり。問うて曰はく、「慧方便とは能く其事を成就して破壊する所無く、更に所作無し。今此三事を破せば、應に斷滅に墮すべし。云何が慧方便と言ふ。」答へて曰はく、「二種の不可得有り。一には得不可得、二には不得不可得なり。得不可得は斷滅に墮す。若し不得不可得とは、是を慧方便と爲し、斷滅に墮せず。若し慧方便無うして布施せば三事の相を取

る。若し三事の空を以てすれば則ち取に相無し。慧方便有る者は、本より以來、三事の相を見ず、是を以ての故に慧方便の者は有無の中に墮せず。復次に、布施する時、諸の煩惱を壊す。是を慧方便と名く。復次に、一切衆生に於て大悲心を起して布施す。是を慧方便と名く。復次に、過去未來、無量世に修する所の福德布施を、阿耨多羅三藐三菩提に廻向するも、亦慧方便と名く。復次に、一切十方三世の諸佛、及び弟子の有ゆる功德に於て憶念し隨喜し布施し、阿耨多羅三藐三菩提に廻向する、是を慧方便と名く。是の如き等の種種の力は、是を慧方便の義と爲す。乃至般若波羅蜜の慧方便も亦是の如し。

【經】復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は、過去、未來、現在の諸佛の功德を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【一〇〇】次に三世の諸佛の功德を得んと欲せば、初の文を釋す中、次に三世の諸佛の功德を得といふを明す。

【經】問うて曰はく、「過去の佛の功德は已に滅し、未來の佛の功德は未だ有らず、現在の佛の功德は不可得なり。又三世の中の佛の功德は、皆不可得なり。云何が三世の佛の功德を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と言ふ。答へて曰はく、「三世の佛の功德を得んと欲すとは、自ら得んと欲すと云ふにあらず。三世の佛の功德の如く、所として減少する所無きのみ。所以は何ん、一切の佛の功德は皆等しうして、多も無く少も無ければなり。」

【若し爾らば等】次に彌陀度生の義を明す。

問うて曰はく、「若し爾らば何を以てか、阿彌陀佛は壽命無量、光明は千萬億由旬にして、無量劫に衆生を度したまふと言ふ。答へて曰はく、「諸佛の世界は種種にして、淨、不

淨有り。雜有り。『三十三天品經』に説くが如くんば、佛、三十三天に在して安居したまひ  
 自恣の時至りて四衆は久しく佛を見ず、愁思して樂まず、目連を遣して、佛に白して言さ  
 く、「世尊、云何が此衆生を捨てて、彼天上に住したまふ」と。時に佛、目連に告げたまは  
 く、「汝三千世界を觀るや」と。目連は佛力を以ての故に觀るに、或は諸佛の大衆の爲に説  
 法したまふを見、或は坐禪したまふを見、或は乞食したまふを見、是の如く種種に佛事を  
 施作したまへるを見て、目連即時に五體を地に投ずれば、是時、須彌山王跋蹉大いに動じ、  
 諸天皆大に驚怖す。目連、涕泣し稽首して佛に白さく、「佛は大悲有り、一切を捨てたまは  
 ず。是の如く種種に、衆生を化度するを作したまふ」と。佛、目連に告げたまはく、「汝が  
 見る所は甚だ少し、汝が所見に過ぎて、東方に國有り、純ら黄金を以て地と爲す。被佛弟  
 子は、皆是れ阿羅漢にして、六通無礙なり。復是東方を過ぎて國有り、純ら白金を以て地  
 と爲す。被佛弟子は、皆辟支佛道を學す。復是東方を過ぎて國有り、純ら七寶を以て地と  
 爲す。其地は常に無量の光明有り、被佛の所化の弟子は、純ら諸の菩薩にして、皆陀  
 羅尼諸三昧門を得、阿毘跋致地に住す。目連、當に知るべし、彼諸佛は皆是れ我身なり」と。  
 是の如き等の東方の恆河沙等の、無量の世界の莊嚴せる者莊嚴せざる者有り、皆是れ我身  
 にして佛事を作す。東方の如く南西北方、四維上下も亦復是の如し」と。是を以ての故に  
 當に知るべし、釋迦文佛には、更に清淨の世界有り、阿彌陀國の如く、阿彌陀佛にも、  
 亦嚴淨と不嚴淨の世界有ること、釋迦文佛國の如し。諸佛の大悲は骨髓に徹し、世界の好

醜を以てせず、度すべき者に隨うて之を教化したまひ、慈母の子を愛し、子の廁溷に没在すと雖も、勤求し撝拔して、以て惡と爲さざるが如し。

大智度論釋初品中到彼岸義第五十

卷第三十三

聖者龍樹造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は、有爲無爲法の彼岸に到らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【二】下、有爲無爲の彼岸に等の文を釋す中、彼岸の意義を明す。

彼岸とは、有爲無爲の法に於て、盡く其邊に到るなり。云何となれば是彼岸は、大智慧を以て悉く知り悉く盡し、有爲法の總相別相を種種に悉く解し、無爲法の中、須陀洹より佛に至るまで、悉く皆了知すればなり。有爲と無爲法との相と義とは、先に説くが如し。

菩薩摩訶薩は、過去、未來、現在の諸法の如、諸法の法相、無生際を知らんと欲せば當に般若波羅蜜を學すべし。

【二】下、三世の諸法の如等の文を釋する中、初に重ねて如を説くを明す。

問うて曰はく「上に已に如を説き、今何を以てか更に説く。」答へて曰はく「上には直に諸法の如を言ひ、今は三世は皆如なりと言ふ。上には略して説き、此には廣く説く。上には一を説き、此には三を説く。法相は即ち是れ法性なり。無生際は即ち是れ實際なり。過去法の如は、即ち是れ過去の法相なり、未來、現在も亦是の如し。復次に、過去法の如

【復次に法相とは無生際とに就いて。

は、即ち是れ未來現在法の如なり。現在法の如は、即ち是れ過去未來法の如なり。未來法の如は、即ち是れ過去現在法の如なり。所以は何ん。如の相は、一に非ず、異に非ざるが故なり。復次に、先に説くが如く、二種の如有り。一には世間の如、二には出世間の如なり。是世間の如を用ふれば、三世各各異なり、是出世間の如を用ふれば、三世を一と爲す。復次に、法相とは、諸法の業、諸法の所作力、因縁、果報に名く。火を熱相と爲し、水を濕相と爲すが如し。是の如く諸法の中に、因縁、果報を分別すれば、各各別相有り。是處非是處力の中に説くが如し。是を世間の法相と名く。若し是諸法の相を推求し尋究すれば、無生法の中に入り、更に是に過ぐる者無し、是を無生際と名く。問うて曰はく、「如の法相は、分別するに、三世有るべし。無生際は是れ未來の法なり、云何が是れ過去現在に有らん。阿毘曇に説くが如きは、生法は過去現在にして、是無生法は未來及び無爲法なり。是を云何が、過去現在の有をして無生ならしめんと欲する。」答へて曰はく、「先に種種に説きて、生法を破するが如く、一切法は皆無生なり。何んが但未來のみ無生ならんや。一時の義の中に已に三世を破するが如く、三世は一相にして、謂ゆる無相なり。是の如きは則ち無生の相なり。復次に、無生を名けて涅槃と爲す。涅槃は不生不滅なるを以ての故なり。涅槃とは、末後究竟にして、復次に生ぜざるなり。而も一切法は即ち是れ涅槃なり。是を以ての故に佛は、一切法は、皆是れ無生際なりと説きたまへり。

復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は、一切の聲聞、辟支佛の前に在るを欲し、諸佛に給侍

【三】一切聲聞辟支佛の前に在らんと欲し等の文を釋する中、初に未だ漏盡をえざる菩薩が聖人の前に給侍するを明す。

【諸佛の給使たらんと等】次に諸佛の給使たらんと欲せば等の文、並に内眷屬乃至淨報大施を釋す。

するを欲し、諸佛の内眷屬たるを欲し、大眷屬を得んと欲し、菩薩の眷屬を得んと欲し、淨報大施を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

問うて曰はく、「若し菩薩は初發意の時、已に一切衆生の前に在り、何に況んや劫を積んで修行せるをや。是菩薩は功徳智慧大なるが故に、世世に常に大いに能く、聲聞辟支佛を利益す。衆生は菩薩の恩を知るが故に、推崇敬重し、乃至畜生の中にも亦尊重を爲す。菩薩、昔、鹿と作るに、其色は金の如く、其角は七寶にして、五百の鹿、隨逐して崇事せるが如し。若し人中に在りては、好世には轉輪聖王と作り、惡世には恆に大王と作りて、佛法を護持し、衆生を利益す。若し出家して佛法あるに値へば、則ち世の爲に大度師と作りて、佛法を興顯し、若し佛法無ければ、則ち外道の大師と爲り、四無量を行す。阿羅漢、辟支佛は、無漏有りと雖も、利益の事少し。譬へば一升の酥は精なりと雖も、大海水の酪に如かざるが如し。菩薩は有漏の智慧なりと雖も、其成熟するに及んでは、利益無量なり。復次に、羅漢辟支佛は、四事の供養、助道の具を、多くは菩薩に由りて得。『首楞嚴經』に説くが如し。『文殊師利は七十二億に辟支佛と作りて辟支佛の人を化し、其をして成道せしむ』と。是を以ての故に聲聞辟支佛の前に在り。

諸佛の給使爲らんと欲せばとは、釋迦文佛の未だ出家したまはざる時の如きは、軍匿給使し、優陀耶戲笑し、瞿毘耶、耶輸陀等の諸の姪女は内眷屬爲り、出家して六年苦行の

時は、五人の給侍有り、道を得たまひし時は、彌喜羅陀、須那利多羅、阿難、蜜跡力士等有り、是を内眷屬と名く。大眷屬とは、舍利弗、目犍連、摩訶迦葉、須菩提、迦旃延、富樓那、阿泥盧豆等の諸の聖人、及び彌勒、文殊師利、聽陀婆羅の諸の阿毘跋致、一生補處の菩薩等なり、是を大眷屬等と名く。復次に、佛に二種の身有り。一には法性生身、二には隨世間身なり。世間身の眷屬は先に説くが如し。法性生身には、無量無數阿僧祇の一生補處の菩薩有りて侍從す。所以は何ん。「不可思議解脫經」に説くが如くんば、佛の生れんと欲したまふ時、八萬四千の一生補處の菩薩、前に在りて導き、菩薩は後に從うて出でたまふ。譬へば陰雲の月を籠むるが如し。又「法華經」に説くが如し。地より踊き出づる菩薩等は皆是れ内眷屬、大眷屬なり」と。菩薩の眷屬とは、有佛は純ら菩薩を以て眷屬と爲したまひ、有佛は純ら聲聞を以て眷屬と爲したまひ、當に般若波羅蜜を學すべしと言ふ。眷屬に三有り、上中下なり。下は純ら聲聞にして、中は雜り、上は但菩薩なり。淨報大施とは、有人言はく、「菩薩は多く福徳を集むるも、未だ煩惱を除かず。人の信施を受くるも、未だ淨報する能はず」と。佛言はく、「菩薩は般若波羅蜜を行じ、諸法は皆空にして不可得なり、向に況んや諸の結使をや」と。菩薩は法性の中に入るが故に眞際を證せず、是故に淨報施福す。復次に、菩薩は功徳廣大にして、發心より已來、一一の衆生に代りて一切の苦を受けんと欲し、一切の功徳を以て、一切衆生に與へんと欲し、然して後に

當に自ら佛道を求むべし。但是事は不可得なるが故に、自ら成佛して、一切衆生を度す。又菩薩は志願して、阿僧祇を以て如の世間、及び如の法性、實際、虚空等に拘るを爲さず。久住の菩薩は、心世間に住して衆生を利益するが故に、亦是の如く久住し、窮已有る無し。已に是人にして淨報施福する能はずんば、誰か能く淨め畢らん。父母の如きは、結使の諸惡有りりと雖も、一世に子を利益するを以ての故に、其供養を受け、子をして大福を得しむ。何に況んや菩薩は、諸の結使無くして、無邊の世の中に住し、衆生を利益す、而も淨め畢らざらんや。又復菩薩は、但悲心のみ有りて、般若無きすら尙能く利益す、何に況んや般若波羅蜜を行ずるをや。問うて曰はく、『若し菩薩に結使無くんば、云何が世間に生を受くる。』答へて曰はく、『先に已に答へたり、菩薩は無生法忍を得、法性生身を得て處處に變化し、以て衆生を度し、世界を莊嚴す、是功德因縁の故に、未だ佛を得ずと雖も、能く淨報施福す。』

〔經〕 復次に舍利弗、菩薩摩訶薩は慳心、破戒心、瞋恚心、懈怠心、亂心、癡心を起さざらんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

〔論〕 是六種の心は、惡なるが故に、能く六波羅蜜の門を障礙す。菩薩の布施を行ずる時の如きは、若し慳心の起る有れば、布施をして清淨ならざらしめ、謂ゆる好物を以て施す能はず。若し好物を與ふるも多く與ふる能はず。若し外物を與ふれば、則ち内施する能はず。若し能く内施するも、盡く與ふる能はず、若し慳心に由るが故なり。菩薩は般若波

〔四〕 下、慳心乃至癡心を起さざらんと欲せば等の文を釋する中、般若のよく慳心等の六蔽を治するを明す

羅蜜を行じて、一切法は我無く、我所無し、諸法は皆空にして、夢の如く、幻の如しと知りて、身の頭目、骨髄を以て布施すること、草木を施すが如くす。是菩薩は未だ道を得ずと雖も、常に是惛心（しんしん）を起さざらんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。諸餘の人は欲を離れ、道を得るが故に、破戒の心を生ぜず。菩薩は般若波羅蜜を行するが故に、破戒の事を見ず。所以は何ん。戒は一切の諸の善功德の住處たればなり。譬へば地は一切萬物の所依止の處爲るが如し。破戒すら尚餘道を得ず、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提をや。是を以ての故に破戒の心を生ぜず。復是念を作さく、「菩薩の法は衆生を安樂にす、若し破戒の者は一切を憫亂す」と。是を以ての故に菩薩は破戒の心を生ぜず、何に況んや戒を破らんや。小乘及び諸の凡夫すら尚瞋恚の心を生ずべからず、何に況んや菩薩にして、阿耨多羅三藐三菩提の意を發するをや。身は善器爲り、法は自ら憫を受く。譬へば、犯罪の人の自ら刑戮を致すは、自ら作り自ら受け、人を怨むべからざるが如し。但當に自ら其心を護りて、惡を起さざらしむべし。譬へば、人の惡風雨寒熱に遭ふも、亦瞋る所無きが如し。復是念を作さく、「菩薩の佛を求むるは、大悲を以て本と爲す、若し瞋恚を懷けば則ち志願を喪ふ。瞋恚の人は尙世間の樂すら得ず、何に況んや道の樂をや。瞋恚の人は、自ら樂を得ず、何んが能く樂を以て人に與へん。懈怠の人は、世間の勝事すら尙成する能はず、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提をや。譬へば火を鑽るに、數數息ふときは、火を得るの期無きが如し。散亂の心は、譬へば風中の然燈の光明有りと雖も、物を照す能はざるが如く

【五】下、一切の衆生をして布施の福處に立たしめんと欲し、等の文を釋する中、初に福處を明す。

【不隱沒無記】新にいふ無覆無記のこと、聖道を障へ心性を蔽うて不淨き無記法をいふ。

亂心の中の智慧も亦復是の如し。智慧は是れ一切善法の根本なり。若し是智を成就せんと欲せば、先づ當に心を攝して、然る後に成すべし、譬へば狂醉の人は、自利、他利、好醜の事を、都て覺知せざるが如く、散亂の心も亦是の如し。世間の好事すら尙善く知る能はず、何に況んや出世間の法をや。愚癡の人は、心、一切の成敗の事に、皆及ぶ能はず、何に況んや微妙の深義をや。譬へば無目の人の、或は溝坑に墜ち、或は非道に入るが如く、無智の人も亦復是の如し。智慧の眼無きが故に、邪法に受著して、正見を受けず。是の如きの人は、世間の近事すら尙成する能はず、何に況んや阿耨多羅三藐三菩提をや。菩薩は般若波羅蜜を行する力の故に、能く是六蔽を障し、六波羅蜜を淨む。是を以ての故に、「若し六蔽を起さざらんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と説くなり。

復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は一切衆生をして、布施の福處、持戒の福處、修定の福處、勸導の福處に立たしめんと欲し、衆生をして財福、法福の處に立たしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

問うて曰はく、「云何が名けて福處と爲す。」答へて曰はく、「阿毘曇に言はく、「福とは、善なる有漏の身口意の業なり」と。復有人言はく、「不隱沒無記是なり。所以は何ん。善なる有漏業の因縁果報なるが故に」と。是不隱沒無記の福を得るは、是れ果報なれば、亦名けて福と爲す。世間の人の能く大事を成し、多く成辦する所を説きて、是を福徳人と名くるが如し。是福は略して説くに三種有り。布施と持戒と修定となり。

【何等か是れ等】次に布施の福處を明す。

何等か是れ布施なる。人有り、衣服、臥具、飲食、華香、瓔珞等を以て人に與ふる、是を布施と名く。問うて曰はく、「飲食等の物は便ち是れ布施なり。更に布施有り」と爲すや。」答へて曰はく、「飲食等の物は布施に非ず。飲食等の物を以て與ふる時、心中に生ずる法を捨と名け、慳心と相違す。是を布施と名く。福德は是れ或は有漏なり、或は無漏なり。常に是善の心數法と、心相應の隨心行と共に心生じ、無色無形にして能く縁と作り、業相應の隨業、行業と共に生じ、先業の果報に非ず、修行、修慧もて身證を證するを得、凡夫人も得、亦聖人も得、有人言はく、「是捨法相應の思は、是を布施の福德と名く。所以は何ん。業は能く果報を生ずるが故なり。思は即ち是れ業なり。身口を名けて業と爲さず、思より生ずるが故に、業と名くるを得。此布施に二種有り。一には淨、二には不淨なり。不淨とは直に施すのみ。或は財を失ふを畏るるが故に與へ、或は訶罵を惡むが故に與へ、或は無用なるが故に與へ、或は親愛なるが故に與へ、或は勢を求めんが爲の故に與へ、施を以ての故に多く勞拔を致す。或は死急なるが故に與へ、或は善名譽を求むるが故に與へ、或は貴勝と名を齊しうするを求むるが故に與へ、或は嫉妬の故に與へ、或は憍慢の故に與ふ。小人の愚賤なるすら尙施す、我は貴重の大人爲り、云何が與へざらんと。或は咒願福德の爲の故に與へ、或は吉を求め凶を除くが故に與へ、或は伴黨に入るを求むるが故に與へ、或は心を一にせず恭敬せず、受者を輕賤して與ふ。是の如き種種の因縁は、今世の事の爲の故に施し、淨と相違するを、名けて不淨と爲す。淨施とは、經の中に説くが如くんば、

【六念】念佛、念法、念僧、念戒、念施、念天、念人、念修、念利、念樂、念趣、念得。

治心の故に施し、意を莊嚴するが故に施し、第一の利を得るが爲の故に施し、清淨の心を生じ、能く分別して涅槃を助くるが爲の故に施す。譬へば新花の未だ萎まず、色良く且香あるが如く、淨心の布施も亦復是の如し。説くが如くんば、「諸天の不淨の心もて布施する者は、宮殿の光明薄少なるも、若し淨心もて布施する者は、宮殿の光明増廣なり」と。此布施の業は、過去乃至千萬世中と雖も失せず、譬は券要の如し。問うて曰はく、「此布施の福は云何が増長する。」答へて曰はく、「時に應じて施すが故に、福の増長を得。經に説くが如し。饑餓せる時に施せば、福の増多を得、或は遠く行き來りし時、若は曠路險道の中に施し、若は常に施して斷ぜず、或時は常に施を念するが故に施せば増廣するを得。六念の中の念捨の説の如くんば、若し大施するが故に福を得ること多し。若は好人に施し、若は佛に施し、若は施者、受者清淨なるが故に、若は決定の心もて施し、若は自ら力を以て財を致して施し、若は所有の多少に隨うて、能く盡く施し、若は交物を以て施し、若は園田、使人等を以て施す。是の如き布施は、唯菩薩のみ有りて能く深心を以て之を行す。韋羅摩菩薩の如きは、十二年布施しじりて莊嚴せる乳牛、七寶の鉢及び好女各八萬四千有り、及び諸の飾物、飲食の屬、勝げて數ふべからず。又須帝隸拏菩薩の如きは、善勝の白象を下して怨家に施與し、入りて深山に在りて、愛する所の二子を以て、十二の醜婆羅門に施し、復妻及び眼を以て施して、婆羅門を化す。爾時、地は爲に大いに動じ、天は雷震を爲し、空中より花を雨らせり。又薩婆達多王の如きは、自ら其身を縛して婆羅門

に施し、尸毘王の如きは、一醵の爲の故に、自ら其身を持ちて、以て醵の肉に代ふ。又菩薩の如きは、曾て兎身と爲り、自ら其肉を炙りて仙人に施與す。是の如き等は『菩薩本生經』の中に説く所なり。復聲聞の人の布施有り、須彌陀比丘尼の如きは、二の同學と與に、迦那伽牟尼佛の爲に精舎を作り、無數千萬世に於て轉輪聖王及び天王の福を受く。施婆羅門の如きは、一醵の酪を持ちて僧に施し、世世に藥を受け、今阿羅漢を得て、諸の受樂の中に受樂第一なり。末利夫人の如きは、須菩提を供養するが故に今世の果報を得て、波斯尼示王の后と爲り、尸婆の如きは、迦旃延を供養するが故に今世の果報を得て、旃陀婆周陀王の后と爲り、鬱伽陀居士の如きは、舍利弗等の五百の阿羅漢を供養するが故に、即日に果報を得、五百の賈客は其餘食を得、人人には珠の璽路を以て之に與へて、卒に大富を得、遂に號して卒鬱伽陀と爲す。是の如く、布施は今世の果報を得。當に知るべし、布施は論議して説くも盡すべからず。

【持戒の福處とは  
【次】次に持戒の福處を明す。

持戒の福處は、佛、五戒の福を説きたまへるもの是なり。問うて曰はく、「云何が殺罪の相なる。」答へて曰はく、「是れ衆生なりと知りて、故に命を奪へば、殺罪を得。故に安隱快心ならざるに非ざれば、殺罪を得。散亂狂心に非ずして、命を奪へば殺罪を得。瘡を作すに非ざるも死すれば已に殺罪を得。未だ死に非ざる身業、是れ殺罪なり。口に殺せば身に作すに非ざるも、是れ殺罪なり。但心に生ずるのみに非ず、是の如き等の罪を止めて作さざるは、是れ初戒善の相なり。或は有人言はく、「是を不隱沒無記と謂ふ」と。或は欲

【修定の福處とは  
等】次に修定の福  
處を明す。

界繫、或は不繫にして、是は心に非ず、心數法に非ず、心相應に非ず、隨心行に非ず、或は心と共に生じ、或は心と共に生ぜず。業相應に非ず、隨業行に非ず、或は業と共に生じ、或は業と共に生ぜず。先業の果報に非ず、得修、行修、身證、慧證なり。或は思惟斷、或は不斷にして、欲界の欲を離るる時、斷するを得、凡夫聖人の共に有するを知る。是を不殺生戒の相を説くと名く。餘戒も亦是の如く、義に隨うて諸戒を分別し、讚數し論議す、尸羅波羅蜜の中に説くが如し。

修定の福處とは、經の中に「慈を修する、是れ修定の福なり」と説くと雖も、亦「有漏の禪定は、能く果報を生ず」と説くは、總じて修定の福と名く。欲界は多瞋多亂なるを以ての故に、先づ慈心を説きて、修定の福を得と爲す。慈は方便もて衆生に樂を與へんと願ひ、後に實に受樂を見る。是心相應の法を名けて、慈法と爲す。是法は或は色界繫、或は不繫なり。是を眞慈と爲す。是方便慈は欲界繫にして、常に心行に隨ひ、心に隨うて生じ、無形無體、能縁の法にして、業に非ず、業に相應し、而して業に隨うて行じ、業と共に生ず。先業の果報に非ず、得修、行修、身證、慧證なり。或は思惟斷、或は不斷にして、色界の欲を離るる時、斷するを得。有覺有觀、亦は無覺無觀を知る。或は喜有り、或は喜無く、或は息有り、或は息無し。亦は凡夫の人、亦は聖人にして、或は樂受と相應し、或は不苦不樂受と相應す。先づ得解の相を縁じ、後に實義を縁す。根本四禪の中にも、亦四禪を過ぎて、四禪に依止するを得る者は、牢固にして力有り。慈は親愛と言

ふべからず、怨無く諍無きが故に名けて親愛と爲し、能く無量の衆生を縁するが故に、名けて無量と爲し、能く衆生を利益し、能く欲を離るるが故に、名けて梵行と爲す。慈心の餘の論議は四無量の中に説くが如し。問うて曰はく、「修定の幅の中に、佛は何を以てか但慈心のみを説きて餘を説きたまはざる。」答へて曰はく、「四無量の中、慈心は能く大福德を修し、悲心は憂愁なるが故に福德を捨て、喜心は自ら功德を念するが故に福德深からず、捨心は放捨するが故に福亦少し。復次に、佛は慈心に五利有るを説きて、餘を説きたまはす。何等か五なる。一には刀も傷けず、二には毒も害せず、三には火も燒かず、四には水も没せず、五には一切の瞋怒悪害の衆生の中に於て、見て皆歡喜す。悲心等の三事は爾らず、是を以ての故に修定福を慈と爲すと説く。餘は隨從、及び諸の能く果報を生ずる有漏定なり。

【勸導の福處とは】次に勸導の福處を明す。

【財福とは等】下財福並に法福を明す。

勸導の福處とは、若し比丘有り、坐禪する能はず、誦經する能はざれば、教化勸導して福德を修立す。或は比丘有り、能く坐禪誦經するも、諸の比丘の衣食乏少なるを見て、力めて能く引致し、亦勸導を行す。及び諸の菩薩は、衆生を憐愍するが故に、福德の因縁を以て之を勸化す。又出家人にして、若し自ら財を求めば、或に於て失有り。是故に勸導して以て因縁を爲す。財福とは、衣服、飲食、臥具、醫藥、金銀、車馬、田宅等なり。問うて曰はく、「上には布施の福處と言ひ、此には財福と言ふ。何等の異か有る。」答へて曰はく、「布施とは、總じて一切の施、財施、法施、俗施、道施を攝す。今法施と財施を分別

【果報神通】一切衆生が生より死に至る間に自己の受くる一切の吉凶、苦樂等に於て測るべからざる無碍の力用をいふ。

【修得神通】三乘の聖者が三學を修して六神通を得、外道仙人の禪定を修して現に五通を得るの類なり。

【五】下、五眼を得んと欲せば等の文を釋する中、今五眼を義釋す。

せんと欲す。法施とは、佛、大慈を以ての故に、初轉法輪より無量の衆生の道を得るが如し。後、舍利弗は佛を逐うて法輪を轉じ、餘の諸の聖人は、法輪を轉ずるに非ずと雖も亦衆生の爲に法を説きて得道せしむ、亦法施と名く。復遍吉菩薩、觀世音、得大勢、文殊師利、彌勒菩薩等有りて二種の神通力、果報神通と修得神通を以て是中に住し、福德、方便力、光明、神足等の種種の因縁を以て、衆生を開度するも亦法施と名く。諸の辟支佛の虚空に飛騰して一偈を説き、衆生を引導して善根を殖ゑしむるも、亦法施と名く。又佛弟子の未だ聖道を得ざる者の、坐禪誦經し諸の法相を懷せず、弟子を教化するも皆法施と名く。是の如き等の種種を名けて、法施の相と爲す。是を以ての故に菩薩は、衆生をして六種の施福に立てしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと説く。

復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は、五眼を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

論 何等か五なる、肉眼、天眼、慧眼、法眼、佛眼なり。肉眼は近きを見て遠きを見ず、前を見て後を見ず。外を見て内を見ず。晝を見て夜を見ず。上を見て下を見ず。此礙を以ての故に天眼を求む。是天眼を得れば遠近皆見て、前後、内外、晝夜、上下悉く皆礙無し。是天眼は和合因縁生の假名の物を見て實相を見ず。謂ゆる空、無相、無作、無生、無減なり。前中後の如きも亦爾なり。實相の爲の故に慧眼を求む。慧眼を得れば、衆生の盡滅一異の相を見ず、諸の著を捨離して一切法を受けず、智慧自ら内に滅す。是を慧眼と名く。但慧眼は衆生を度する能はず。所以は何ん。分別する所無きが故に。是を以ての

故に法眼を生ず。法眼は、是人には是法を行じて、是道を得しめんと、一切衆生の各各の方便門を知りて、道證を得しむ。法眼は、過く衆生を度する方便道を知る能はず。是を以ての故に佛眼を求む。佛眼は事として知らざる無く、覆障密なりと雖も見知せざる無し。餘人に於ては極めて遠きも、佛に於ては至つて近し。餘に於ては幽闇なれども、佛に於ては顯明なり。餘に於ては疑と爲せども、佛に於ては甚だ淺し。是佛眼は事として聞に於ては龜と爲す。餘に於ては甚深なれども、佛に於ては甚だ淺し。是佛眼は事として聞かざる無く、事として見ざる無く、事として知らざる無く、事として難しと爲ること無し。思惟する所無けれども、一切法の中に佛眼は常に照す。後品の五眼の義の中に當に廣く説くべし。

【七】天眼を以て十方如恆河沙等の文を釋する中、初に般若波羅蜜力の故に、天眼といひ、天耳といふも遠近に別なきをいふ。

【問うて曰はく等】次に般若三昧力による見佛と、今の菩薩の天眼もて十方諸佛を見るところを明す。

【問うて曰はく等】次に般若三昧力による見佛と、今の菩薩の天眼もて十方諸佛を見るところを明す。

菩薩摩訶薩は、天眼を以て十方の如恆河沙等の世界の諸佛を見んと欲し、天耳を以て十方諸佛の説きたまふ所の法を聞かんと欲し、諸佛の心を知らんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

天眼法の見する所は三千大千世界に過ぎず。今般若波羅蜜の力を以ての故に、十方恆河沙等の國中の諸佛を見る。所以は何ん、般若波羅蜜の中には、近無く、遠無く、聖礙する所無ければなり。

問うて曰はく、「般若三昧經」に説くが如き、「般若三昧力を以ての故に、未だ天眼を得ずと雖も、而も能く十方現在の諸佛を見る」と。此菩薩の天眼を以ての故に十方の諸佛を見

【諸佛の心を知る等】次に諸佛の心  
を知らんと欲せば  
の文を明す。

ると何等の異り有りや。答へて曰はく、「此天眼は不隠没無記なり。般舟三昧を離欲の人も、未離欲の人も俱に得、天眼は但是れ離欲の人のみ得。般舟三昧は憶想分別して、常に修し常に習ふが故に見、天眼は神通を修して得、色界の四大造色の眼は、四邊に遍く明相を得。是を差別と爲す。天眼は功易きこと、譬へば日出づれば、色を見ること難からざるが如し。三昧の功の難きことは、夜燃ゆる燈に、色を見るは易からざるが如し。天耳も亦是の如し。

諸佛の心を知るとは、問うて曰はく、「上地の鈍根の如きは、下地の利根の心を知る能はず、菩薩は一佛心すら尙知るべからず、何に況んや恆河沙等の十方の諸佛の心をや。」答へて曰はく、「佛の神力を以ての故に、菩薩をして知らしむ。經に説くが如くんば、一切衆生には佛心を知る者無し。若し佛神力を以て知らしめたまへば、乃ち蜚虫に至るまで亦能く知る」と。是を以ての故に佛は神力を以ての故に、菩薩をして佛心を知らしめたまふ。復次に、般若波羅蜜は無礙相にして麤細、深淺、愚聖都て差別無し。諸佛の心の如と菩薩の心の如は、一如にして異なる無し。菩薩は是如に隨ふが故に、能く諸佛の心を知る。復次に、希有難事にして、知るべからざるを而も知る。是を以ての故に是を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと言ふ。

【圖】十方諸佛の説きたまふ所の法を聞き、聞き已りて、乃ち阿耨多羅三藐三菩提に至るまで、忘れざらんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【八】下、十方諸佛の説きたまふところの法を聞き等の文を釋する中、無量の諸佛の説法を聞持するといふを明す。

【聞持陀羅尼】一切の語言をききて忘れず總持するをいふ。

【九】下、過去未來の諸佛の世界を見等の文を釋す、中に今諸佛の世界を見んと欲せばといふを明す。

問うて曰はく、「佛の説きたまふ所すら猶尚持ち難し、何に況んや無量の諸佛の説きたまふ所を憶して忘れざらんと欲するをや。」答へて曰はく、「菩薩は聞持陀羅尼力を以ての故に、能く受け、能く憶念し、陀羅尼力の故に忘れず。復次に、此中には般若波羅蜜の力を以て、畢竟清淨にして、著する所無しと説く。譬へば大海の衆流を含受するが如く、菩薩は、十方の諸佛より聞く所の法たる般若波羅蜜の器、大なるを以ての故に、能く無量の法を受持して忘れず。復次に、是般若波羅蜜は、譬喩すべからざること虚空の如し。劫燒け、盡き已りて、大雨彌滿するに、是雨は虚空を除きては、更に處として能く受くること無きが如く、十方諸佛の説法の雨、佛口より出づるに、般若波羅蜜を行ずる菩薩を除きては、更に能く受くる者無し。是を以ての故に十方諸佛の説法を聞かんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと言ふ。」

大智度論釋初品中見一切佛世界義第五十一之一

復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は、過去、未來の諸佛の世界を見、及び現在十方の諸佛の世界を見んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

問うて曰はく、「若し十方の佛を見れば、則ち已に世界を見ん。今何を以てか復世界を見んと欲せばと説くや。」答へて曰はく、「菩薩は未だ深く禪定に入らず、若し十方世界の山

【十方の現在の世  
界等】現在の十方  
世界は見るべきも  
過去未來の諸佛世  
界を見るときにいふに  
就いて明す。

河草木を見れば、心則ち散亂せん。故に但諸佛のみを観る。念佛義の中に説くが如く、行者は但諸佛を觀て、土地山河樹木を觀ず、禪定力を得已れば、意に隨うて廣く觀る。復次に、諸の清淨なる佛國は見難きが故に、諸佛の國を見んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと言ふ。又一佛に、無量百千種の世界有ること、先に説くが如し。嚴淨有り、不嚴淨有り、雜なる有り。畢竟清淨の世界有りて見難きが故に、般若波羅蜜の力を以て、乃ち能く見るを得。譬へば天子の正殿は、則ち外人も見ざるべきを聽せども、内殿深宮は能く見る者無きが如し。

問うて曰はく、「十方の現在の世界は見るべし、過去、未來の諸佛の世界は、云何が見るを得る。」答へて曰はく、「菩薩には、過去未來を見る三昧有り。是三昧に入り已れば、過去未來の事を見ること、夢中に見る所の如し。復次に、菩薩に不滅三昧有り。是三昧に入り已れば、諸佛の滅する者、有るを見ず。問うて曰はく、「此二法は眼に非ず、云何が能く見る。」答へて曰はく、「此は是れ智慧なり、假に名けて眼と爲す。轉法輪の中の四諦の中に於て眼智明覺を得るが如し。復次に、菩薩は十方現在の佛世界を見て、定んで過去未來の諸佛世界も亦爾なりと知る。所以は何ん。一切の諸佛は、功徳同じきが故に。是事は先に説くが如し。復次に是般若波羅蜜多の中には、如にして、現在、過去、未來、等しうして異なる無し。一如一法性なるが故なり。是を以ての故に難すべからず。

復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は、十方諸佛の説きたまふ所の十二部經、修多羅、祇夜、

【二〇】下、十方諸佛の説きたまふ所の十二部經等の文を釋す中、初に説の法たる十二部經即ち修多羅乃至論議經を明す。

受記經、信經、變陀那、因緣經、阿波陀鳥、如是語經、本生經、廣經、未曾有經、論議經を用き、諸の眷屬等の與り聞かざるを聞かんと欲し、盡く誦し受持せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【二一】先に、一盡く十方諸佛の所説の法を誦かんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし」と

説けり。所説の法とは、即ち是れ十二部經なり。諸經の中の直説せる者を修多羅と名く。

謂ゆる四阿含、諸の摩訶衍經、及び二百五十戒經なり。三藏に出づる外に亦諸經有り。

皆修多羅と名く。諸經の中の但を重夜と名く。衆生には九道の中に受記す。謂ゆる三乘道

と六蓮道となり。此人は、爾所の阿耨鞞劫を経て、當に作佛すべし。若は爾所の歳に、當

に作佛すべしと記す。聲聞の人には、今世後世に道を得と記し、辟支佛には、但後世に道

を得と記し、餘の六道にも亦皆後世に報を受くと記す。諸佛の法は衆生の眞に受記せんと

欲し、光づ皆微笑するに無量種の光、四牙の中より出づ。謂ゆる青黃赤白經索等なり。

上の二牙より出づる者は、光三惡道を照し、其光明に従うて無量の法を演じ、一切作法

の無常、一切法の無我、安隱涅槃を説く。衆生は、斯光に遇ふを得て、説法を聞けば、身

心安樂にして人中天上に生ずるを得、是因縁に従うて皆苦を畢るを得。下の二牙より出づ

る者は上人天、乃至有頂禪を照し、若は彈盲、瘡癩、狂病、皆除愈するを得。六欲天、人、

及び阿修羅は五欲の樂を受け、佛の光明に遇うて説法の聲を聞き、皆欲樂を厭患して身

心安隱なり。色界の諸天は禪定の樂を受くる時、佛の光明に遇うて説法の聲を聞き、亦

【有頂禪】 世界の第四禪、即ち非想非非想天をいふ、これ形ある世界の最頂に位すれば有頂といふなり。

願患を生じて佛所に來詣す。此諸の光明は復十方に至り、遍く六道を照し、佛事を作し已りて、還身を遠ること七匝す。若し地獄を記すれば光足下より入り、若し畜生を記すれば光躡より入り、若し餓鬼を記すれば光髀より入り、若し人道を記すれば光齊より入り、若し天道を記すれば光胸より入り、若し聲聞を記すれば光口より入り、若し辟支佛を記すれば光眉間相より入り、若し佛を得るを記すれば光頂より入る。若し受記せんと欲せば、先づ此相を現じ、然る後に阿難等の諸の弟子問を發す。一切の偈を祇夜と名く。六句、三句、五句なり。句の多少は定まらず。亦是祇夜と名け、亦是伽陀と名く。伽陀那は、有法と名く。佛は必ず應に説きたまふべく、而も問ふ者有る無きも、佛は暗問端を開きたまふ。佛、舍婆提に在して、毘舍佉堂の上の陰地に經行し、自ら優陀那を説きたまへるが如し。謂ゆる、「我無く我所無く、是事は善哉なり」と。爾時、一比丘合掌して、佛に白して言さく、「世尊、云何が我無く、我所無く、是事は善哉なる」と。佛、比丘に告げたまはく、「凡夫の人は、未だ無漏道を得ず。顛倒覆心の故に、我無く、我所無きに於て、心大いに驚怖す。若し佛、及び佛弟子の好法を聞く者は、歡喜し奉行す。顛倒無きが故に、復更に作さず」と。是の如きは「雜阿含」の中に廣く説けり。又般若波羅蜜品の中の如きは、諸天子、須菩提の所説を讀すらく、「善い哉善い哉、希有なり、世尊は、有り難し」と。世尊は是を優陀那と名けたまへり。又佛、涅槃の後、諸の弟子の要偈、諸の無常偈等を抄集して、無常品を作り、乃至婆羅門偈等もて、婆羅門品を作るも、亦優陀那と名け、

諸有の衆妙の事を集むるも、皆優陀那と名け、是の如き等を優陀那經の相と名く。尼陀那  
 とは、諸の佛法の本起の因縁を説く。佛は何の因縁もて此事を説きたまふ」と。修多羅  
 の中に、人有り、問ふが故に、爲に是事を説き、毘尼の中に、人有り、是事を犯すが故に、  
 是戒を結す。一切の佛語の緣起の事を皆尼陀那と名く。阿波陀那とは、世間の相と似て、  
 柔軟の淺語なり。『中阿含』の中の長阿波陀那經、長阿含の中の大阿波陀那、毘尼の中  
 の億耳阿波陀那、二十億阿波陀那解、二百五十戒經の中に欲阿波陀那一部、菩薩の阿波陀  
 那一部を出すが如く、是の如き等の無量の阿波陀那有り。如是語經には二種有り。一には  
 結句、言はく、我先に説くべき者は今已に説き竟れりと。二には三藏、摩訶衍の外に更に  
 經有り、一日多迦と名く。有人は、日多迦と言ふ。日多迦の名は三藏及び摩訶衍に出でた  
 り。何等か是なる。佛、淨飯王に説きて強ひて出家せしめて、佛弟子と作す者、五百人の  
 得道に堪任する者を選択し、將めて舍婆提に至りたまひしが如し。所以は何ん。其未だ欲  
 を離れざるを以て、若し親里に近ければ、其破戒せんことを恐るるが故に、將めて舍婆提  
 に至り、舍利弗、目乾連等をして之を教化せしめたまひ、初夜、後夜、專精にして睡らず、  
 勤修精進するが故に道を得。道を得已りて、佛は還將に本生の國に至らんとしたまふ。一  
 切諸佛の法として、本國に還りたまふ時は、大會の諸天衆と俱に、迦毘羅婆仙人の林中に  
 住したまふ。此林は、迦毘羅婆城を去ること五十里にして、是れ諸釋の遊戯の園なり。此  
 諸釋子の比丘は、舍婆提に處る時、初夜後夜、專精にして睡らざるが故に、夜を以て長し

と爲し、林中より來りて城に入りて乞食し、道理の長遠なるを覺れり。爾時、佛は其心を知りたまふ。一の師子有り、來りて佛足を禮し、一面に在りて住す。佛は是三因縁を以ての故に、偈に説きたまはく、

寝ねざれば夜長く、疲倦すれば道長く

愚なれば生死長く、正法を知る莫し

佛、比丘に告げたまはく、「汝、未だ出家せざる時、其心放逸にして、睡眠多きが故に、夜の長きを覺せざるなり。今は初夜後夜、專精にして道を求め、睡眠を減じ省くが故に、夜大いに長しと覺す。此迦毘羅婆林は、汝本駕乘遊戯して、覺して遠しと爲さざりしが、今は衣を著け、鉢を持って歩行し、疲極するが故に、道の長きを覺するなり。是師子は毘婆戸佛の時、婆羅門の師と作り、佛の説法を見て、佛の所に來至す。爾時に、大衆は聽法を以ての故に、共に語る者無し。即ち惡念を生じ惡罵の言を發すらく、「此略の秃輩は、畜生と何んが異ならん。好人を別たす、言語を知らず」と。是惡口の業を以ての故に、轉婆戸佛より乃ち今日に至るまで、九十一劫、常に畜生に墮せり。此人は爾時に得道すべくして、愚癡なるを以ての故に、自ら生死を作すこと長久なり、「今佛所に於て、心清淨なるが故に、當に解脱を得べし」と。是の如き等の經を名けて、出因縁と爲す。何の處よりか出でたる。三藏摩訶衍の中より出でたるが故に、名けて出と爲す。云何が因縁と名く。是三事の本を名けて因縁經と爲す。本生經とは、昔、菩薩曾て師子と爲り、林中に在り

て住し、一鵝葉と共に親友と爲ら。鵝葉は二子を以て師子に寄す。時に鵝鳥有りて飢乏、行いて食を求む。師子の睡るに値ふが故に、鵝の子を取りて去り、樹上に住す。師子覺め已りて、鵝の子を求むるに得ず。鵝の持して樹上に在るを見、而して鵝に告げて言はく、  
 「我は鵝葉の寄托する二子を受け、之を護りて謹まず、汝をして得去らしめば、言信に負す。請ふ、汝が索に従はん、我は鵝中の王たり、汝は鳥中の主たり、貴勢同等なり、宜しく以て相濁すべし」と。鵝言はく、「汝は時を知らず、吾は今飢乏せり、何んが同異を論ぜん」と。師子は其得回きを知り、自ら利爪を以て其脇肉を掴み、以て鵝子に質ふ。又過去世の時、人民多く黄白瘡熱を病めり、菩薩は滿時、身赤魚と爲り、自ら其肉を以て諸の病人に施し、以て其疾を救へり。又昔菩薩は一の鳥身と作り、林中に在りて住す。一人有り、深水に入るを見る、人の行く處に非ず、水神の爲に謂され、水神の鬪法は著して解くべからず。鳥は解法を知りて香山の中に至り、一葉草を取りて其罽の上に著くるに、繩即ち墜壞して人は脱し去るを得たり。是の如き等無量の本生に多く濟ふ所有る、之を本生經と名く。廣經とは、摩訶衍に名く。謂ゆる、「般若波羅蜜經」一六波羅蜜經、「華首經」  
 『法華經』、『佛本起因緣經』、『法雲經』、『大云經』、是の如き等の無量阿僧祇の諸經は、阿耨多羅三藐三菩提を得んが爲の故に説けり。毘佛略 未曾有と云ふ。とは、佛、種種の神力を現じたまふが如きは、衆生は未曾有なりと怪しめり。謂ゆる佛の生じたまひし時は、身に大光明を放ちて、三千大千世界、及び幽暗の處を照し、復十方無量諸佛の三千大千

世界を照したまふ。是時、佛母の前に於て清淨の好池有り、以て菩薩を浴せしむ。梵王は蓋を執り、帝釋は身を洗ひ、二龍は水を吐く。又生れたまひし時、扶持するを須たずして、行くこと七歩したまへば足跡の處に皆蓮華有り。而して是言を發したまはく、「我は是れ一切衆生の老病死を度する者なり」と。地は大いに震動し、天は衆華を雨らし、樹は音聲を出して、天の伎樂を作す。是の如き等の無量の希有の事、是を未曾有經と名く。論議經とは、諸の問者に答へ、其所以を釋す。又復廣く諸義を説く。佛の四諦を説きたまふが如し。何等か是れ四諦なる。謂ゆる四聖諦なり。何等か是れ四なる。謂ゆる苦集滅道の聖諦なりと、是を論議と名く。何等をか苦聖諦と爲す。謂ゆる生苦等の八種の苦なり。何等か是れ生苦なる。謂ゆる諸の衆生は、各各の生處に、此中に苦を受く。是の如き等の問答もて廣く其義を解く。是を優婆提舍と名く。摩訶衍經一の中に、佛、六波羅蜜を説きたまひしが如し。何等か六なる。謂ゆる檀波羅蜜乃至般若波羅蜜なり。何等か是れ檀波羅蜜なる、檀波羅蜜に二種有り、一には具足、二には不具足なり。何等か是れ具足なる。般若波羅蜜と和合して、乃至十住の菩薩の所得、是を具足と名く。不具足とは、初めて菩提心を發して、未だ無生忍を得ず、法未だ般若波羅蜜と和合せざる、是を不具足と名く。乃至禪波羅蜜も是の如し。般若波羅蜜を具足する者は、大方便有り、未だ具足せざる者には、方便力無し。復次に、佛の説きたまひし所の論議經及び摩訶迦旃延の解する所の修多羅、乃至像法の凡夫人の如法説をも、亦優婆提舍と名く。

【聲聞の聞かざる所等】次に聲聞の與り聞かざるを等といふを明す。

【盡く受持せん等】次に悉く受持せんと欲すといふを明す。

聲聞の聞かざる所とは、佛は獨り菩薩の與に説法し、諸の聲聞の聽く者無し。又佛は神通力を以て、身を變じたまふこと無數にして、遍く十方一乘の世界に至りて法を説きたまふ。又復佛は欲天、色天の爲に法を説きたまひしに、諸の弟子無きが故に聞くを得ざりき。問うて云はく、「諸の六通の阿羅漢は、若し佛説きたまふ時、坐に在らずと雖も、天眼天眼を以て、見聞するを得べし。若し宿命通を以てせば、并に過去の事を知るべし。何を以てか聞かざる。答へて曰はく、「諸の聲聞の神通力も及ばざるの處、是故に聞かざるなり。復次に、佛は諸の大菩薩の爲に、「不可思議解脱經」を説きたまふに、舍利弗、目連は佛の左右に在りて而も聞くを得ざりき。是れ大乘の行法を聞く因縁を種るざるを以ての故なり。譬へば坐禪の人は、一切處に定の中に入りて、能く一切をして、皆水、皆火ならしむるも、而も餘人は見ざるが如し。「不可思議解脱經」の中に廣く説くが如し。盡く受持せんと欲すとは、聞いて奉行するを受と爲し、久久に失せざるを持と爲す。

大智度論卷第三十三

大智度論釋初品中見一切佛世界義第五十 卷第三十四

聖者龍樹造

後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

【經】復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は、十方の如恆河沙等の世界の中の、諸佛の説きたまふ所の法、已に説き、今説き、當に説くべきを聞き已りて、一切を信持し自ら行じ、亦人の爲に説かんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【一】下、十方如恆河沙等の世界の中心の文を釋す。佛の法を信持せん」と欲せばといふを明す。

【論】問うて曰はく、「先に已に十方諸佛の所説を憶持して、忘れざらんと欲せば、當に般若を學すべし」と説く、今何を以てか復三世佛の法を信持すと説く。答へて曰はく、「上には十方諸佛の法を憶持せんと欲せばと説くも、未だ是れ何の法なるやを知らず、故に十二部經は是れ佛の法なり、及び聲聞の間かざる所の者なるを説けり。上には但恆河沙等の世界の諸佛と言ひ、今は恆河沙の三世の諸佛の法と言ふ。又上には但受持して忘れずと説き、受持の利益を説かず。今は自らの爲にし、亦他人の爲に説くと言ふ。是故に復説くなり。」

【經】復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は、過去の諸佛の説き已りたまひ、未來の諸佛の當に説きたまふべきを聞き、聞き已りて自を利し、亦他人を利せんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【二】下、過去の諸佛の説き已りたまひ等の文を釋する中、過去未來の諸佛の説法を聞くといふを明す。

【三】下、十方如恆河沙等の諸の世界の中間の闍處等に般若波羅蜜を學するに由て神通光明を現ずることを明す。

問うて曰はく、「十方現在の佛の所説の法は、愛くべく、持つべし。過去は已に滅し、未來は未だ有らず、云何が聞くべき。」答へて曰はく、「此義は先に已に答へたり、今當に更に説くべし。菩薩に三昧有り、觀三世諸佛三昧と名く。菩薩は是三昧の中に入りて、悉く三世の諸佛を見、其説法を聞く。譬へば外道の神仙の如し。未來世の事に於て未だ形兆有らず、未だ言説有らざるも、智慧力を以ての故に、亦見、亦聞くなり。復次に、諸の菩薩の力は不可思議にして、未來世は未だ形有らず、未だ言説有らずと雖も、而も能く見、能く聞き、或は陀羅尼力を以てし、或は今の事を以て、過去未來の諸事を比知す。是を以ての故に是を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと言ふなり。」

【四】十方の如恆河沙等の諸の世界の、中間の闍處に、日月の照さざる所を、光明を持つて普く照さんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

菩薩は兜率天上より、神を母胎に降さんと欲し、爾時、身より光明を放ちて、遍く一切世界及び世間の幽冥の處を照し、次に後生るる時も、光明遍く照すこと亦復是の如く、初めて道を成する時、轉法輪の時、般若涅槃の時、大光明を放ちたまふことも、皆亦是の如く、及び餘時にも、大神通を現じ、大光明を放つ、般若波羅蜜を説かんと欲する時の如きも大神通を現じ、大光明を以て遍く世間の幽冥の處を照したまへり。是の如く、皆處處の經中に、神通光明を説けり。問うて曰はく、「此は是れ佛力なり、何を以ての故に菩薩と説く。」答へて曰はく、「今菩薩、是を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。」

【菩薩の身光等】  
次に菩薩の身光是の如き所以を明す

【火一切入】火の一切處に通ずるを觀する禪定の名、新に火一切處といふ。

と言へり。諸の大菩薩は、能く是力有り。遍吉菩薩、觀世音、得大勢、明網、無量光菩薩等の如きは、能く是力有りて、身より無量の光明を出し、能く十方の如恆河沙等の世界を照す、又阿彌陀佛の世界の中の諸の菩薩の如きは、身常に光を出して、十萬由旬を照す。

問うて曰はく、「菩薩の身光、是の如きは、本何の業因縁を以て得るや。」答へて曰はく、「身光清淨なるが故に、身に莊嚴を得。經に説くが如し。一鬼有り。頭は猪に似て、臭虫口より出で、身に金色の光明有り。是鬼は、宿世に比丘と作りて、客の比丘を惡口罵詈す。身に淨戒を持つが故に、身に光明有るも、口に惡言有るが故に、臭虫口より出づるなり。經に説くが如し。心の清淨、優劣有るが故に、光に上中下有り。少光と大光と光音となり。欲界の諸天は、心清淨にして布施持戒するが故に、身に光明有り。復次に、有人は、衆生を憐愍するが故に、閻處に於て燈を燃し、又尊像塔寺を供養するが爲の故に、亦明珠、尸繻、明鏡等の、明淨の物を以て布施するが故に、身に光明有り。復次に、常に慈心を修して衆生を念じ、心清淨なるが故に、又常に念佛三昧を修し、諸佛の光明、神徳を念するが故に身に光明を得。復次に、行者有り。常に火一切入を修し、又智慧の光明を以て、愚闇邪見の衆生を教化す。是業因縁を以ての故に、心中に智慧の明を得、身にも亦光有り。是の如き等の業因縁もて、身光清淨なるを得。」

【釋】十方の如恆河沙等の世界の中に、佛名、法名、僧名有る無くして、一切衆生をして皆

【四】下、十方如恆河沙等の世界の如中に三實の名なき處に、正見をえ、これを聞かしめんべきを明す。

【五】下、世界の衆生をして我が力を以て等の文を釋す中、法性生身の佛菩薩は大悲、智慧等を以ての故に見者の所願を満ずることを明す。

正見を得、三寶の音を聞かしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

般若波羅蜜は、先づ佛法塔寺無き處に於ては、中に於て塔を起す。是業因縁を以て、後身に力を成就するを得、佛法の業無き處に於ては、三寶を讚歎して、衆生をして正見に入らしむ。經に説くが如し。人有り、先に佛塔無き國土の中に生れて、塔廟を修立し、梵の福徳、梵の名、無量の福徳を得。是因縁を以て、疾かに禪定を得、禪定を得るが故に、無量の神通を得。神通力の故に能く十方に到りて、三寶正見の者を讚歎す。若し先には三寶の功徳を識らず、菩薩に因つての故に、三寶を信するを得。三寶を信するが故に、業因縁の罪福を信じ、業因縁を信するが故に、世間は是れ縛、涅槃は是れ解なりと信す。三寶を讚歎するの義は、八念の中に説くが如し。

十方の如恆河沙等の世界の衆生をして、我力を以ての故に、盲者は視るを得、聾者は聽くを得、狂者は念ふを得、裸者は衣を得、飢渴者には飽滿を得しめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

菩薩は無礙の般若波羅蜜を行じて、若は無礙解脱を得て成佛し、若は法性生身の菩薩と作る。文殊師利等の如きは、十住地に在りて、種種の功徳有りて具足し、衆生を見る者は皆願の如くなるを得。譬へば如意珠の欲する所皆得るが如し。法性生身の佛及び法性生身の菩薩を人に見る者有れば、皆所願を得るも亦復是の如し。復次に、菩薩は初發意より已來、無量劫の中に於て一切衆生の九十六種の眼病を治し、又無量世の中に於て自

【一〇】 如恆河沙等の世界の衆生等、我が身を以ての故に皆人身を等といふを明す。

ら眼を以て衆生に布施し、又智慧の光明もて邪見の黒闇を破し、又大悲を以て衆生をして所願を皆得しめんと欲す。是の如きの業因縁もて、云何が衆生をして菩薩の身を見、而も眼を得ざらしめん。餘事も亦是の如し。此諸の義は放光の中に説くが如し。

【經】 復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は、若し十方の如恆河沙等の、世界の衆生の、諸の三惡趣に在る者をして、我力を以ての故に、皆人身を得しめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【論】 問うて曰はく、「自ら善業の因縁を以ての故に人身を得。云何が菩薩は我力の因縁を以ての故に、三惡道の中の衆生をして皆人身を得しむと言ふや。答へて曰はく、『菩薩の業因縁を以て、衆生をして人身を得しむとは言はず、但菩薩の恩力の因縁の故に得と云ふのみ。菩薩は神通變化説法の力を以ての故に、衆生をして善を修して人身を得しむ。經の中に説くが如し。二の因縁有りて正見を發起す。一には外に正法を聞くと、二には内に正念有るとなり。又草木の内に種子有り、外に雨澤有りて、然る後に生ずるを得るが如し。若し菩薩無ければ、衆生は業因縁有りと雖も、因りて發起する無し。是を以ての故に諸佛菩薩の所益の甚だ多きを知る。問うて曰はく、『云何が能く三惡道の中の衆生をして皆解脱を得しむる。佛すら尙能はず、何に況んや菩薩をや。』答へて曰はく、『菩薩は心願して爾も則ち過咎無きを欲す。又多く解脱を得るが故に一切と言ふ。諸佛及び大菩薩の如きは、身より過く無量の光明を出し、是光明より無量の化身を出し、遍く十方の三惡道の中に入りて、

【餘經に説くが如く人を得とのみ説くを明す。

【七】下、我が力を以ての故に戒三昧等の文を釋す、今ここに五衆の道果を重説するは三乗雜へて説くことを明す。  
【八】下、諸佛の威儀を等の文を釋す中、諸佛の威儀を明す。

地獄の火を滅し、湯を冷たらしめ、其中の衆生は心清淨なるが故に天上人中に生ず、餓鬼道の飢渴をして飽滿せしめ、善心を開發して天人の中に生ずるを得しむ。畜生道をして意に隨うて食を得、諸の惡怖を離れしむ。善心を開發して亦天人の中に生ずるを得しむ。是の如きを名けて、三惡道を解脫するを得しむと爲す。問うて曰はく、「餘經に説くが如くんば、天人の中に生ず。此には何を以てか但皆人身を得と説く。」答へて曰はく、「人中に於ては大功德を修するを得、亦福業を受く。天上は多く樂に著するが故に道を修する能はず、是を以ての故に皆人身を得しめんと願す。復次に、菩薩は衆生の但福業を受くるを願はず、解脫常樂涅槃を得しめんと欲す。是を以ての故に天上に生ずるを求かず。」

若波羅蜜を學すべし。

【七】問うて曰はく、「先に已に此五衆の道果を説けり。今何を以てか更に説く。」答へて曰はく、「上には但是聲聞法を説けり。須陀洹より乃至無餘涅槃なり。今は雜へて三乘を説く、聲聞、辟支佛、乃至阿耨多羅三藐三菩提三菩提なり。」

【八】復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は、諸佛の威儀を學ばんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【九】問うて曰はく、「何等か是れ諸佛の威儀なる。」答へて曰はく、「威儀とは、身の四の動止

【九】如く視觀する事、象王の文を釋す中、初に象王の如くに視るといふを明す。

に名く。譬へば象王の身を廻して、而して觀るが如く、行く時は足地を離れ、四指は地を踏まずと雖も、而も輪跡現じ、遅からず疾からず、身傾動せず、常に右手を擧げて衆生を安慰し、結加趺坐して其身を正直にし、常に右脇にして偃し、膝を累ねて臥し、敷く所の草蓐は齊整にして亂れず、食するには味のみ悪等に著せず、一たび若し人の請を受くれば、默然として違する無く、言辭柔軟にして、方便利益して時節を失はざるなり。復次に、法身佛の威儀は、東方の如恆河沙等の世界を過ぎて、以て一步を爲す。梵音說法も亦復是の如し。法身佛の相の義は先に説くが如し。

復次に、菩薩摩訶薩は、象王の如く、視觀するを得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學まざらしめよ。我當に四天王、乃至阿迦尼吒天と共に、無量千萬億の諸天衆に圍遶し恭敬せられて、菩提樹下に至り、當に般若波羅蜜を學すべし。

象王の如くに視るとは、若し身を廻して觀んと欲する時は、身を擧げて俱に轉ず、人の相とは身心專一なり。是故に若し觀る所有れば、身心俱に廻らず。譬へば、師子の擧する所有るも、小物を以ての故に、而も其壯勢を改めざるが如し。佛も亦是の如し、若し觀る所有り、若は説く所有れば、身と心と俱にして常に分散せず。所以は何ん。無數劫より來、一心に法を集むればなり。是業因縁を以ての故に、頂骨と身と一と爲りて、分解有る無し。又世世に憍慢を破したまふを以ての故に、衆生を輕んじたまはず、觀るときは

【足地を離るる等】次に足地を離るること四指にしてといふを明す。

【四天王天乃至等】次に四天王天乃至阿迦膩吒と共に無量千萬億衆の諸天衆乃至菩提樹下に至るといふを釋す。

則ち俱に轉じたまふ。尼陀阿波陀那の中に説くが如し。舍婆提國に除糞の人有り。而して佛は手を以て頭を摩で、教へて出家せしめたまひ、猶之を輕じたまはざりき。

足地を離るるの四指とは、佛若し常に飛びたまはば、衆生は疑ひ怪んで、「佛は是れ人類に非ず」と謂ひて、則ち歸附せざらん、若し足地に到らば、衆生は以て常人と異ならずと爲して、敬心を生ぜざらん。是故に地を行くと雖も、四指到らざるに而も輪跡現す。問うて曰はく、「如し佛は、常に丈光を放ちたまひ、足地に到らずんば、衆生は何を以ての故に盡く敬附せざる。」答へて曰はく、「衆生は無量劫の中に、罪を積むこと甚だ重く、無明の垢深うして、佛に於て疑を生じ、是は幻師にして術を以て人を誑すと謂ひ、或は「足地を踏まざるは、生性自ら閉り、鳥の如きは能く飛ぶ、何の奇特か有らん」と言ふ。或は衆生有りて、罪重き因縁の故に佛相を見ず、直に大威徳沙門と謂ふのみ。譬へば人重病にして死せんと欲すれば、名薬、美食も皆臭穢と謂ふが如し。是故に盡く敬附せず。

四天王天乃至阿迦膩吒と共に、無量千萬億の諸天衆に恭敬し圍遶せられて菩提樹下に至るとは、是れ諸佛の常法なり。佛は世尊爲り、菩提樹下に至りて、二種の魔を破せんと欲したまふ。一には結使の魔、二は自在天子の魔なり。一切智を成ぜんと欲するに、是の諸の天衆は云何が恭敬侍送せざらん。又諸天は世世に、菩薩を佐助し擁護し、乃至出家の時には、諸の官人の、妖女をして淳惽して臥せしめ、馬の足を捧げ、城を踏えて出で、今日のこと辦じて、「我當に共に侍送して菩提樹下に至るべし」と。問うて曰はく、「何を以てか

【一〇】下、我當に  
菩提樹下に於て坐  
し等の文を釋する  
中、天衣を以て座  
と爲すといふを釋  
す。

刹帝利、婆羅門等の無量の人の侍送を説かずして、但諸天を説くや。」答へて謂はく、「佛は獨り深林の中に於て菩提樹を求めたまふ。是は人の行く處に非ず、是故に説かず。又人は、天眼、他心智無きを以ての故に、佛の當に成道したまふべきを知らず、是故に説かず。復次に、諸天は人より貴きが故に、但天のみを説く。復次に、諸天は常に閑靜の處を樂む。諸天は能く身を隠して現せず、閑靜を妨げず、是故に但諸天の從ふを説く。復次に、菩薩は五比丘の菩薩を捨てて去るを見て、而も菩薩は獨り樹下に至る。是故に是願を作す。

【一〇】我當に菩提樹下に於て坐し、四天王天乃至阿迦尼吒天、天衣を以て座と爲すべしとせば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【一〇】問うて曰はく、「經に説くが如くんば、佛は草を樹下に敷き、坐して佛道を成じたまへり。今云何が願うて天衣を以て、座と爲すと言ふや。」答へて曰はく、「聲聞經の中には草を敷きたまふと説く。『摩訶衍經』の中には衆生の所見に隨ひ、或は草を樹下に敷きたまふと見る有り、或は天の纒繩を敷きたまふと見る有り、其福德の多少に隨うて所見同じからず。復次に、生身の佛は草を樹下に把りたまひ、法性生身の佛は、天衣を以て座と爲したまふ。或は天衣に勝る有り。復次に、佛、深林の樹下に於て成佛したまふに、林中の人は見て則ち佛に草を奉つれり。若し貴人有りて見ば、當に貴ぶ所の衣服を以て座と爲すべし。但林中には貴人無し。故に時に諸の龍神天は、各妙衣を以て座と爲す。四天王

の衣は重さ二兩、忉利天の衣は重さ一兩、夜摩天の衣は重さ十八銖、兜率陀天の衣は重さ十二銖、化樂天の衣は重さ六銖、他化自在天の衣は重さ三銖、色界の天衣は重相無く、欲界天の衣は樹邊より生じて縷無く織無し。譬へば薄氷に光曜けば、明淨にして種種の色有るが如し。色界の天衣は純ら金色にして、光明稱げて知るべからず。是の如き等の寶衣を座に敷き、菩薩は座に上りて阿耨多羅三藐三菩提を成じたまへり。問うて曰はく、一何を以てか但諸天の衣を敷くを説きて、十方の諸の大菩薩の、佛の爲に座を敷くを説かざる。答の菩薩等は佛の將に成道せんとしたまふ時、皆佛の爲に座を敷けり。或は廣長一由旬、十百千萬億乃至無量由旬なり。高さも亦是の如し。此諸の寶座は是れ菩薩の無漏の福德より生ずるが故に、是れ諸天の目に見ざる所なり。何に況んや手に觸れんや。十方三世諸佛の降魔、得道、莊嚴、佛事、皆悉く照見すること、譬へば明鏡の如し。是の如きの妙座は、何を以てか説かざる。答へて曰はく、般若波羅蜜に二種有り。一には聲聞、菩薩、諸天の與に共に説き、二には但十住を具足せる菩薩の與に説く。是般若波羅蜜の中には、應に菩薩の、佛の爲に座を敷くを説くべし。所以は何ん、諸天は佛恩を知ること、一生二生諸の大菩薩に及ばざればなり。是の如きの菩薩にして、云何が神通力を以て、佛に供養せざらんや。是中には聲聞を合して説く、是故に説かず。

我阿耨多羅三藐三菩提を得ん時、行住坐臥處、悉く金剛と爲らしめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【二】下、我阿耨多羅三藐三菩提を釋す中、四威儀に悉く金剛とならしめんといふを釋す。

問うて曰はく、「何を以ての故に、佛は四威儀の中の地を、悉く金剛と作したまふ。」答へて曰はく、「有人言はく、「菩薩は菩提樹下に至る時、此處に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たまへり。爾時、菩薩、諸法實相の中に入りたまふに、地の能く是菩薩を擧ぐるもの有る無し。所以は何ん。地は皆是れ衆生の虚誑の業因縁の輩なるが故に有なり、是故に菩薩を擧ぐる能はざるなり。成佛せんと欲する時は實相の智慧の身なり、是時に座處は變じて金剛と爲る」と。有人言はく、「土は金剛の上在り、金輪は金剛の上在り、金剛際より出づるは蓮華臺の如く、直に上に菩薩の座處を持ちて陥没せざらしむ。是を以ての故に此道場の座處を名けて金剛と爲す」と。有人言はく、「佛道を成じ已れば四種の威儀の處は、悉く變じて金剛と成る」と。問うて曰はく、「金剛も亦是れ衆生の虚誑の業因縁によりて有り、云何が能く佛を擧ぐる。」答へて曰はく、「金剛は是れ虚誑の所成なりと雖も、地よりも最も牢固と爲す、更に金剛に勝る者無し。水を下す諸大龍王は、此堅固の物を以て佛に獻す。亦是れ佛の宿世の業因縁の故に、此安立の處を得たまひしなり。又復佛は金剛及び四大を變じて虚空と爲らしめたまへり。虚空は不誑なり。佛の智慧も亦不誑にして、二事は既に同じ、是故に能く擧ぐるなり。

【三】復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩は、出家の日に、即ち阿耨多羅三藐三菩提を成じ、即ち是日に法輪を轉じ、法輪を轉ずる時、無量阿僧祇の衆生、遠塵離苦し、諸法の中に法眼淨を得、無量阿僧祇の衆生は、一切法を受けざるが故に、諸の漏心を解脱するを得、無量

【三】下、出家の日に即ち阿耨多羅三藐三菩提を成じ等の文を釋す。

阿僧祇の衆生は、阿耨多羅三藐三菩提に於て、不退轉なるを得しめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

或は菩薩有り。惡世の邪見の衆生の中に於て衆生の邪見を除かんが爲の故に、自ら勤苦甚難の行を行す。釋迦文佛の如きは、漚婁頻螺樹林の中に於て一麻一米を食したまふに、諸の外道言はく、「我等が先師は苦行を修すと雖も、是の如く六年勤苦する能はず」と。又復有人謂はく、「佛は光世の惡業によりて、今苦報を受けたまふ」と。菩薩有り、謂はく、「佛、實に是苦を受けたまふが爲に、是故に、我當に即ち出家の日を以て成佛すべしと發心す」と。又菩薩有りて好世に於て出家す。大通慧の如きは、佛道を求めて結加趺坐し、十小劫を経て佛と爲るを得たり。菩薩は是を聞き已りて發心して言はく、「願くは我、出家の日を以て、即ち佛と成るを得ん」と。菩薩有り、成佛し已りて即ち法輪を轉ぜず。然燈佛の如きは、成佛し已りてより十二年、但光明を放ちたまふのみにして、人の識る者無く、而して法を説きたまはざりき、又須扇多佛の如きは、成佛し已りて化を受くる者無く、化佛と作りて留りて一劫に住し、法を説きて人を度し、自身は滅度したまへり。又釋迦文佛の如きは、成佛し已りて五十七日、法を説きたまはざりき。菩薩は是を聞き已りて、「願くは我、成佛し已らば、即ち法輪を轉せん」と。佛有り、衆生を度したまふに限數有り。釋迦文佛の法輪を轉じたまふ時の如きは、憍陳如一人のみ有りて、初めて道を得、八萬の諸天は、諸法の中に法眼淨を得たり。菩薩は是を聞き已りて是願を作さく、「我、法

輪を轉ずる時、無量阿僧祇の人をして、遠處離垢し、諸法の中に法眼淨を得しめん」と。  
 釋迦文佛の初めて法輪を轉じたまひし時、一比丘及び諸天は皆初めて道を得たるも、而も  
 一人として阿羅漢及び菩薩道を得たる者無し。是故に菩薩は願じて言はく、「我、作佛する  
 の時、當に無量阿僧祇の衆生をして、一切法に故らに諸漏を受けず。心に解脱を得しめ、  
 及び無量阿僧祇の衆生をして、阿耨多羅三藐三菩提に於て退轉せざるを得しむべし」と。  
 問うて曰はく、「若し一切の佛は、神力功德もて衆生を度したまふこと皆等し。此菩薩は何  
 を以てか此願を作す。」答へて曰はく、「一佛は能く無量阿僧祇の身を變作して、而して衆生  
 を度したまふ。而も世界は嚴淨なる者有り、嚴淨ならざる者有り。菩薩は若は見、若は聞  
 くに、是諸佛には、苦行して佛を得難き者有り、即ち法輪を轉じたまはざる者有り。釋迦  
 牟尼佛の如く、六年苦行して成道したまふ有り。又初轉法輪を聞く時は、未だ阿羅漢道を  
 得る者有らず、何に況んや菩薩道を得んや。是故に菩薩は、未だ諸佛の力の等しきを聞か  
 ず、故に此願を作す。然るに、諸佛の神力功德は平等にして異なる無し。

我、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、無量阿僧祇の聲聞を以て僧と爲し、我一たび說法  
 する時は、便ち座上に於て盡く阿羅漢を得しめんとせば、當に般若波羅蜜を學すべし。

有佛は、聲聞を以て僧と爲したまふに、數有り、限有り。釋迦文尼佛の如きは、千二  
 百五十の比丘を僧と爲したまひ、彌勒佛には、初會に僧九十九億、第二會に九十六億、第  
 三會に九十三億有り、是の如く諸佛の僧は各各限有り、數有りて同じからず。是を以ての

三藐三我阿耨多羅  
 三藐三菩提を得る  
 時、初に無量阿僧  
 祇の聲聞を以て僧

となしといふを釋す。【有佛は等】次に一たび説法する時といふを明す。

【四】下、我當に無量阿僧祇の菩薩を以て僧となし等の文を釋す中、初に菩薩を僧となしといふに就いて明す。

【有佛の等】次に皆不退を得しめんといふを釋す。

故に菩薩は願じて言はく、「我當に無量阿僧祇の聲聞を以て僧と爲すべし」と。

有佛は、衆生の爲に法を説きたまひ、一たび法を説きたまふに、初道を得、異時に更に説きたまふに二道、三道、第四道を得。釋迦文尼佛の如きは、五比丘の爲に法を説きたまふに初道を得、異日に阿羅漢道を得たり。舍利弗の如きは、初道を得てより半月を經、然る後に阿羅漢道を得たり。摩訶迦葉は、佛を見て初道を得、八日を過ぎ已りて阿羅漢道を得たり。阿難の如きは、須陀洹道を得てより、二十五歳、佛を供養し已り、佛の般涅槃の後、阿羅漢を得たり。是等の如く、諸の阿羅漢は、一時に四道を得ず。是を以ての故に菩薩、願じて言はく、「我一たび法を説く時、便ち座上に於て盡く阿羅漢を得しめん」と。

【三】我當に無量阿僧祇の菩薩摩訶薩を以て僧と爲し、我一たび法を説く時、無量阿僧祇の菩薩は、皆阿鞞跋致を得べし。

菩薩の此願を作す所以は、諸佛は多く聲聞を以て僧と爲し、別に菩薩僧無し。彌勒菩薩、文殊師利菩薩等の如きは、釋迦文佛に別に菩薩僧無きを以ての故に、聲聞僧の中に入りて次第に坐せり。有佛は一乘の爲に法を説き、純ら菩薩を以て僧と爲したまひ、有佛は、聲聞菩薩を雜へて以て僧と爲したまふ。阿彌陀佛の國の如きは、菩薩僧は多く、聲聞僧は少し。是を以ての故に、「無量の菩薩を以て僧と爲さん」と願す。

有佛の初轉法輪の時には、人有り、阿鞞跋致を得るもの無し。是を以ての故に菩薩、願じて言はく、「我一たび法を説くに、無量阿僧祇の人をして阿鞞跋致を得しめん」と。

【二五】下、壽命無量にして等の文を釋す中、初に壽命と光明とを述ぶ。

【所以は何等】次に諸佛は長壽の業因縁の故に、壽命無量なるも、唯命生の爲の故に長短ありといふ。

【經】壽命無量にして、光明の具足を得しめんと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。  
【論】諸佛の壽命に、長き有り、短き有り。轉婆尸佛の如きは、壽八萬四千歲なり、拘樓餐陀佛の如きは壽六萬歲なり。迦那伽牟尼佛は壽三萬歲なり。迦葉佛は壽二萬歲なり。釋迦文佛の如きは壽百歲なり。少しく過ぐる有れば、彌勒佛は、壽八萬四千歲なり。釋迦文佛の如きは、常光一丈にして彌勒佛は、常光十里なり。諸佛の壽命と光明に各二種有り。一には隱藏にして、二には顯現なり。一は眞實にして、二は衆生の爲の故なり。隱藏は眞實なれば無量なるも、顯現は、衆生の爲なれば、限有り量有り實に佛の壽は短なるべからず。

【所以は何ん】諸佛は、長壽の業因縁を具足したまへばなり。婆伽梵の如きは、宿世に一聚落の人命を救ふが故に、無量阿僧祇の壽命を得、梵世の中の壽法は、半劫に過ぎず、而も此梵天の壽は無量なり。是を以ての故に邪見を生じて言はく、「唯我のみ常住なり」と。佛其所に到りて、其邪見を破し、其本縁を説きたまふ。一聚落を救ふすら、其壽乃ち爾なり、何に況んや佛は世世に、無量阿僧祇の衆生を救ひたまふをや。或は財物を以て救濟し、或は身命を以て死に代りたまふ。云何が壽限りて、百歳に過ぎざらんや。又不殺生戒は、是れ長壽の業因縁なり。佛は大慈を以て衆生を愛したまふこと骨髓に徹して、常に能く衆生の爲の故に死したまふ。何に況んや殺生をや。又諸法實相の智慧は、眞實にして不誑なるが故に、亦是れ長壽の因縁なり。菩薩は般若波羅蜜を以て、持戒の諸の功德に和

合するを以ての故に、壽命を得ること無量なり。何に況んや佛は世世に、此諸の無量の  
 功德を具足したまふ、而も壽命に限有らんや。復次に、一切の色の中の如きは、佛身第一  
 なり。一切の心の中は、佛心第一なり。是を以ての故に一切の壽命の中に、佛壽は亦應  
 に第一なるべし。世俗の人の言へるが如し、「人の世に生るるや、壽を以て貴しと爲す。佛  
 は人中の上たり、壽も亦應に長かるべし」と。問うて曰はく、「佛は長壽の業因縁有り」と雖  
 も、惡世に生じたまふが故に壽命便ち短し。此短壽を以て能く佛事を具したまふ、長き  
 を用て何か爲ん。又佛は、神通力を以ての故に、一日の中に、能く佛事を具したまふ、何  
 に況んや百歳をや。答へて曰はく、「此間の闍浮提は、惡しきが故に、佛の壽は短かかるべ  
 く、餘處は好きが故に、佛の壽は長かるべし。問うて曰はく、「若し爾らば菩薩は、此闍浮  
 提の淨飯王の宮に於て生れ、出家し成道したまふ、是れ實の佛なり。餘處には皆是れ神通  
 力もて、變化し作佛して以て衆生を度したまふ。答へて曰はく、「此言は非なり。所以は何  
 ん。餘處の闍浮提も亦各各言はく、「我國は是れ實の佛にして、餘は變化と爲す」と。何を  
 以てか之を知る。若し餘處の國土にして、自ら是れ化佛なりと知らば、則ち教戒を信受す  
 るを肯んぜず。又餘の國土の如きは、人の壽命一劫なり。若し佛壽百歳ならば、彼に於て  
 裁に一日も無し。衆生は則ち輕慢を起して背て教を受けざらん。彼は則ち一劫を以て實佛  
 と爲し、此を以て變化の化と爲す。「首楞嚴經」に説くが如くんば、神通もて遍く照すに、  
 佛壽七千阿僧祇劫なり。佛、文殊師利に告げたまはく、「彼佛は則ち是れ我身にして、彼

佛も亦釋迦文佛と言ふ、則ち是れ我身なり」と。是を以ての故に、諸佛の壽命は實に皆無量なるも、人を度せんが爲の故に、長短有るを現じたまふを知る。汝言はく、「釋迦文佛は、神通力を以ての故に、度する所の衆生と人壽と異ならざれば、則ち百歳を須ひずして、一口の中に佛事を具足すべし」と。阿難の如きは、一時心に是念を生ずらく、「然燈世尊、一切勝佛、轉婆尸佛の如きは、好世に出で壽命極めて多し、能く佛事を具したまはん。我釋迦文佛は、惡世に出世して、壽命極めて短し、將に世尊は佛事を具足し能はざる無きや」と。爾時、世尊、日出三昧に入り、身に從うて變化し、無量の諸佛及び無量の光明を出し、普く十方に至り、一一の化佛は、諸の世界に在りて各佛事を作し、或は說法する有り、或は神通を現じ、或は三昧を現じ、或は飯食を現じ、是の如きの比の種種の因縁もて佛事を施作し、而して衆生を度したまふ。三昧より起ちて阿難に告げて曰はく、「汝は悉く是事を見聞するや不や」と。阿難言さく、「唯然なり、已に見る」と。佛、阿難に告げたまはく、「佛は是の如く神力を以て、能く佛事を具するや不や」と。阿難言さく、「假令佛壽は一日なるも、大地草木、悉く度すべき衆生の爲に、則ち能く度し盡したまはん、何に況んや百歳をや」と。是を以ての故に、諸佛の壽命は皆、悉く無量なれども、人を度せんが爲の故に、長短有るを現じたまふを知る。譬へば、日出でて影を水に現さんに、水の大小に隨ひ、水大なれば則ち影久しく、水小なれば則ち速に滅し、若し琉璃頗梨珠の山を照せば、影久しく仕するが如し。又火の草木を焼くに、燃ゆるもの少ければ則

ち速に滅し、然ゆるもの多ければ則ち久しく住するが如し。滅せる處に火無きを以ての故に、多く然ゆる處にも亦無しと謂ふべからず。光明の長短の義も亦是の如し。

大智度論釋初品中信持無三毒義第五十二

我、阿耨多羅三藐三菩提を成ずる時は、世界の中に婬欲、瞋恚、愚癡有る無く、亦三毒の名無く、一切衆生、是の如き智慧有りて、善施、善戒、善定、善梵行を成就して、善く衆生を施さざらしめんとせば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【二六】我等正覺を成ずる時は世界中に瞋恚婬愚癡あることなく等の文を釋する中、初に三毒あることなしといふを明す。

問うて曰はく、「若し世界に三毒無く、亦三毒の名無くんば、佛は何等の爲の故に、其國に出世したまひしや。」答へて曰はく、「貪欲、瞋恚、愚癡を名けて、三不善根と爲す。是れ欲界繫の法なり。佛若し貪欲、瞋恚、愚癡を説きたまはば、是れ欲界繫の不善なり。若し衆愛無明を説きたまはば、是れ則ち三界に通ず。有佛の世界には、純く諸の欲の人有り。是衆生の爲の故に、菩薩願じて言はく、「我成佛する時、國に三毒及び三毒の名無し」と。復清淨の佛國有り。純く阿耨跋致法性、生身の菩薩有り、諸の煩惱無く、唯餘習のみ有り。是故に、「三毒の名無し」と言ふ。若し有人言はく、「菩薩は願じて、我當に一切衆生を度すべし」と言ふも、而も衆生は實に盡く度せざるが如く、此も亦是の如し。世界をして三毒の名無からしめんと欲するも、亦應に實に三毒有りて盡きざるべし。若し三毒

【問うて曰はく等】次に一切衆生是の如き智慧ありてといふを釋す。

無くんば、何んが佛を用ふるを爲さん。地に大闇無ければ、則ち日の照すを須ひざるが如し」と。經に説く所の如し、「若し三法無ければ、則ち佛は世に出でたまはず。若し三法斷ぜざれば、則ち老病死を離るるを得ず」と。三法とは、則ち是れ三毒なり。「三法經」の如きは、此中に應に廣く説くべし。復次に、有世界の衆生は、諸法を是は善なり、是は不善なり、是は縛なり、是は解なり等と分別して、一相寂滅の法の中に於て戲論を生ず。菩薩は是を以ての故に、願じて言はく、「我世界の中の衆生をして、三毒を生ぜず、三毒の實相は、即ち是れ涅槃なるを知らしめん」と。

問うて曰はく、「一切衆生は、是の如きの智慧を得と、是れ何等の智慧なる。答へて曰はく、「智慧とは、是れ世間の正見なり。世間の正見の中には、布施有り、罪福有り、今世後世有り、阿羅漢有り」と説く。罪福を信するが故に、善く布施を能くして阿羅漢有りと信するが故に、善く持戒し、善く禪定し、善く梵行を能くす。正見の力を得るが故に、善く衆生を憐さざるを能くす。世間の正見は是れ無漏の智慧の根本なり。是を以ての故に圖中に三毒の名無しと説く、食欲に二種有り。一には邪食欲、二には食欲なり。瞋恚に二種有り。一には邪瞋恚、二には瞋恚なり。愚癡に二種有り。一には邪見愚癡、二には愚癡なり。是三種の邪毒の衆生は、化度すべきこと難く、餘の三は度し易し。三毒の名無しとは、邪三毒の名無きなり。善布施等の五事は、上の放光品の中に説くが如し。

【圖】我般涅槃の後、法をして滅盡する無く、亦滅盡の名も無からしめんには、當に般若波

【七】下、我が般若涅槃の後等の空を釋する中、先づ法に滅盡なしといふを明す。

【法相是の如くんば等】次に一切の佛法が滅せざるべきや否やを明す。

羅蜜を學すべし。

問うて曰はく、「佛の法王たるすら尚自ら滅度したまふ、云何が法に滅盡無しと言ふや。」答へて曰はく、「上に説く所の如く、是れ菩薩の願事にして、必ずしも實ならず。一切有爲の法は、因縁の和合より生ず、云何が常住にして滅せざらん。佛は日の明なるが如く、法は日没して餘光有るが如し。云何が日没して、而も餘光滅せざらん。但久しく住するが故に、能く滅を見る者無し、故に不滅と名く。復次に、是菩薩は、諸佛の法の住するを見るに、多き有り少き有り。迦葉佛の法の如きは、住すること七日、釋迦牟尼佛の法の如きは、住すること千歲なり。是故に菩薩、是願を發して言はく、「法は有爲なりと雖も、願くは相續して滅せざらしめん」と。火の着を得て相傳ふれば絶えざるが如し。復次に、諸法實相を名けて佛法と爲す。是實法の相は、不生、不滅、不斷、不常、不一、不異、不來、不去、不受、不動、不著、不依にして、所有無く、涅槃の相の如し。法相は是の如し、云何が滅有らん。」

問うて曰はく、「法相是の如くんば、一切の佛法は皆滅せざるべきや。」答へて曰はく、「言ふ所の如し。諸法實相は、滅するもの有る無し。人有り、憶想し分別して、諸法の相を取り、實法相を壞し、二法を用ひて説く。是故に滅有るも、實相法の中には滅有ること無し。復次に、般若波羅蜜を行ずるは、無礙の法なり。無量の功德を集むるが故に、其本願に隨ひ、法法相續して、其滅を見るもの有る無し。譬へば仰いで虚空を射るに、箭の去ること

【二〇】下、我が阿耨多羅三藐三菩提を得る時等の文を釋す中、先づ但佛名のみを聞いて道をうるるといふを明す。

極めて遠くして、人見ずと雖も、要必ず當に墮すべきが如し。  
【二一】我、阿耨多羅三藐三菩提を得る時、十方の如恆河沙等の、世界の中の衆生、我名を聞く者は、必ず阿耨多羅三藐三菩提を得ん。是の如き等の功德を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべし。

【二二】問うて曰はく、「有人は生れて佛世に値ひ、佛法の中に在りて、或は地獄に墮する者有り。提婆達、俱訶梨詞、多くの釋子等の如きは、三の不善法有りて、心を覆ふが故に、地獄に墮せり。此中、云何が佛を去ること如恆河沙等の世界にして、但佛名を聞くのみにして便ち道を得と言ふ。」答へて曰はく、「上に已に説けり。二種の佛有り。一には法性生身佛、二には衆生の優劣に隨うて化佛を現す。法性生身の佛の爲の故に、乃至名を聞いて得度すと説き、衆生に隨うて身を現する佛の爲の故に、佛と共に住すと雖も、業因縁に隨うて、地獄に墮するもの有り」と説く。法性生身の佛とは、事として濟さざる無く、願として満たさざる無し。所以は何ん、無量阿僧祇劫に於て一切の善本、功德を積集し、一切の智慧無礙を具足し、衆の聖主、諸天及び大菩薩の希に能く見る者の爲にすればなり。譬へば如意珠は見難く得難く、若し見る者有れば、所願必ず果すが如く、喜見の藥は、其を見る者有れば、衆患悉く除くが如く、轉輪聖王に、人の見ゆるもの有れば、富み足らざる無きが如く、釋提桓因に、人の見ゆる者有れば、願に隨うて悉く得るが如く、梵天王に、衆生依附すれば、恐怖悉く除くが如く、人の觀世音菩薩の名を念すれば、悉

く厄難を脱するが如き、是事すら尚爾なり。何に況んや諸佛の法性生身をや。問うて曰はく、釋迦文佛も亦是れ法性生身の分にして、異體有る無し。何を以ての故に、佛在世の時、五道罪の人、飢餓、賊盜、是の如き等の惡を作すもの有りしや。『答へて曰はく、『釋迦文佛の本誓は、『我は惡世に出でて、道法を以て衆生を度脱せんと欲す、富貴世樂の爲の故に出でず』と。若し佛、力を以て之に與へたまはば、事として能はざる無し。又亦是衆生は、福德の力薄く、罪垢深重なるが故に、意に隨うて度脱するを得ず。又今佛は但清淨涅槃を説きたまふに、而も衆生は謏論誹謗して言はく、『何を以てか多く弟子を畜へ、人民を化導するや、此も亦是れ繫縛の法なり』と。但涅槃の法を以て化するすら、猶尚謏誹す、何に況んや世樂を以て雜ふるをや。提婆達の如きは、足下に千輻相輪有らしめんと欲するが故に、鐵を以て横を作り、燒いて之を爍く、爍き已るに足壞し身惱み、大呼す、爾時、阿難、已に涕泣するを聞いて、佛に白さく、『我兄死せんと欲す。願くは佛、哀んで救ひたまへ』と。佛は即ち手を伸し、就きて其身を摩し、至誠の言を發したまふらく、『我、羅睺羅と提婆達とを等しく看ば、彼痛當に滅すべし』と。是時、提婆達は衆痛即ち除き、手を執りて之を觀て、是れ佛手なるを知り、便ち是言を作さく、『淨飯王の子は、此醫術を以て自ら生活するに足れり』と。佛、阿難に告げたまはく、『汝、提婆達を觀るや不や、心を用ふることは是の如し、云何が度すべき』と。若し好世の人は則ち是答無し。是の如きの衆生は、若し世樂を以て度するを得ず。是事は種種の因縁もて上に已に廣く説けり。是

【復次に佛身は等】  
次に聞名得道に就いて明す。

を以ての故に佛名を聞いて、道を得る者有り、得ざる者有りと説く。

復次に、佛身は無量なり、阿僧祇にして、種種同じからず。有佛は衆生の爲に法を説きて道を得しめ、有佛は無量の光明を放ち、衆生の之に遇うて、而して道を得る者有り。神通變化を以て、其心を指示したまふに、而も道を得る者有り。有佛は但色身を現じたまふに、而も道を得る者有り。有佛は遍身の毛孔より、衆の妙香を出したまふに、衆之を聞いて、而も道を得る者有り。有佛は食を以て衆生に與へて道を得しめ、有佛は衆生但念じて道を得る者有り。佛は能く一切の草木の聲を以て佛事を作し、衆生をして道を得しめたまふ。有佛有り、衆生、名を聞きて、道を得。是れ佛の爲の故に説きて、我、佛と作る時、其名を聞く者をして皆得度せしめんと言ふ。復次に、名を聞くも、但名のみを以ては、便ち道を得ざるなり。聞き已りて道を修し、然る後に得度す。須達長者の如きは、初めて佛名を聞いて内心に驚喜し、佛に詣り、法を聽いて、而して道を得たり。又貫夷羅婆羅門の如きは、雞泥耶結髮梵志の所に従うて、初めて佛名を聞き心即ち驚喜し、直に佛所に詣り、法を聞いて道を得。是但名を聞くを説く。名を聞けば、得道の因縁と爲るも、道を得るには非ざるなり。問うて曰はく、「此經には諸佛の名を聞いて即時に道を得と言ひ、名を聞き已りて道を修し、乃ち得とは言はず。答へて曰はく、「今即時と言ふは、一心申を言はず、但更に異事無く、之を聞くと言ふが故に、即時と言ふ、譬へば經の中に、慈心を修する時は即ち七覺意を修すと説くが如し。難する者言はく、「慈三昧は有漏にして、

【七覺意】擇法、精進、喜、輕安、念、定、行捨をいふ。

是れ衆生法を緣す。云何が即時に七覺を修する」と。答ふる者言はく、「慈より起ち已りて  
 即ち七覺を修し、更に餘法無きが故に即時と言ふ。即時に二種有り。一には同時、二には  
 久しと雖も、更に異法無し。即ち是心にして、而も七覺を修するを得るも、亦即時と名く  
 と。復次に、衆生有り、福德淳熟して、結使の心薄く、應當に得道すべくして、若し佛  
 名を聞けば、即時に道を得。又復佛の威力を以ての故に、聞いて即ち得度す。譬へば熟せ  
 る櫛の、若し治無き者も、小因縁を得て便ち自ら潰ゆるが如く、亦熟果は若し人の取る  
 こと無くとも、微風の因縁もて、便ち自ら墮落するが如し。譬へば、新淨なる白氈は、  
 爲に色を受け易きが如し、是人の爲の故に、若し佛名を聞けば、即時に道を得と説く。譬  
 へば、鬼神の人に著くに、仙人の咒名を聞けば、即時に捨て去るが如し。問うて曰はく、  
 『如恆河沙等の世界を過ぎて、誰か此名を傳へて、彼をして聞くを得しむるや。』答へて曰  
 はく、『佛は神力を以て、擧身の毛孔より無量の光明を放ち、一一の光の上に皆寶華有り、  
 一一の華上に皆坐佛有り。一一の諸佛は、各妙法を説き、以て衆生を度し、又諸佛の名  
 字を説きたまふ。是を以ての故に聞くこと放光の中に説くが如し、復次に、諸の大菩薩  
 は本願を以て、佛法無き處に至り、佛名を稱揚せんと欲す。此品の中に説く者の如きは、  
 是故に聞くを得。復大功徳力の人有り、虚空の中より佛の名號を聞く。薩陀波崙菩薩の如  
 し。諸天より聞く有り、或は樹木の音聲の中より聞き、或は夢中より聞く。復次に、諸佛  
 には不可思議の力有り。或は自ら往いて語りたまひ、或は聲を以て告げたまふ。又菩薩の

【上に諸の功德等】衆行の和合によりて成ぜらるる佛の功德等をうるに、但智度を學すべしといふ就いて

如きは、一切衆生を度せんと誓願を作す。是を以ての故に、「我、佛と成る時、如恆河沙等」を過ぐる世界の衆生は、我名を聞いて皆佛と成るを得。是を得んと欲せば、應に般若波羅蜜を學すべし」と説く。

問うて曰はく、「上に諸の功德及び諸の所願を得んと欲す。是諸事は、皆是れ衆行の和合して成ずる所なり。何を以ての故に、但當に般若波羅蜜を學すべしと説くや。答へて曰はく、「是經を般若波羅蜜と名く。佛は其事を解説せんと欲したまふ。是故に品品の中に皆般若波羅蜜を讚じたまへり。復次に、般若波羅蜜は、是れ諸佛の母なり。父母の中に母の功は最も重し。是故に佛は、般若を以て母と爲し、般舟三昧を父と爲したまふ。三昧は唯能く亂心を攝持し、智慧をして成ずるを得しむるも、而も諸法實相を觀する能はず、般若波羅蜜は、能く遍く諸法を觀じて、實相を分別し、事として達せざる無く、事として成ざざる無し、功德大なるが故に、之を名けて母と爲す。是を以ての故に行者は六波羅蜜を行じ、及び種種の功德と和合して、能く衆願を具すと雖も、而も但當に般若波羅蜜を學すべしと説く。復次に、般若の後品の中に説くが如く、若し般若波羅蜜無くんば、餘の五事は波羅蜜と名けず。普く衆行を修すと雖も、亦諸願を満足する能はず、種種の畫彩も、若し膠無くんば、亦用中にらざるが如し。衆生は無始より世界の中に來りて、布施、持戒、忍辱、精進し、一心に智慧を修すと雖も、世間の果報を受け已れば、復還つて盡く、所以は何ん。般若波羅蜜を離るるが故に。今佛恩を以て、般若波羅蜜は、六事を修行するを以

ての故に、波羅蜜と名くるを得、律道を成就し、佛位をして相續して、而も窮盡する無からしむ。復次に、菩薩は般若波羅蜜を行する時、普く諸法を觀するに、皆空にして、空も亦復空なり。諸觀を滅して、無量の般若波羅蜜を得、大悲の方便力を以て、還つて諸の功德業を起す。此清淨の業因縁の故に、顯うて餘の功德を得ざる無く、般若波羅蜜を離るれば、無礙の智慧有る無し。云何が諸願を得んと欲せば當に般若波羅蜜を學すべし等と言はん。復次に、又五波羅蜜は、般若を離るるを以て波羅蜜の名字を得ず。五波羅蜜に盲の如く、般若波羅蜜は眼の如し。五波羅蜜は坏瓶に水を盛るが如く、般若波羅蜜は盛熟の瓶の如し。五波羅蜜は鳥の兩翼無きが如く、般若波羅蜜は翼有る鳥の如し。是の如き等の種種の因縁の故に、般若波羅蜜は能く大事を成ず。是を以ての故に諸の功德及び願を得んと欲せば、當に般若波羅蜜を學すべしと言ふ。

昭和五年十一月一日印刷  
昭和五年十一月十日發行

昭和國譯大藏經論律部  
第四卷

編纂者

昭和國譯大藏經編輯部  
代表者 三井品史

發行者

東京市神田區一ツ橋通二番地  
株式會社 東方書院

印刷者

東京市神田區表神保町十番地  
同興舍  
代表者 井波康三郎

不許複製

發行所

東京市神田區一ツ橋通二

株式會社 東方書院

電話九段三八四二  
振替東京六八六一一









EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03023 3845